静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第184集

原　分　古　墳

平成19年度　(都)沼津三島線重点街路整備事業(地方特定)工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

調査報告編

2008

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第184集

原　分　古　墳

平成19年度　（都）沼津三島線重点街路整備事業（地方特定）工事に伴う

埋蔵文化財発掘調査報告書

調査報告編

2008

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

1　原分古墳遠景（東より）　　直径17mの円墳

2　墳丘検出状況（愛鷹山を望む）　　無袖の横穴式石室

巻頭図版 2

石室内遺物出土状況（開口部より）　　石室内に家形石棺が納められる

1　石室内遺物出土状況（奥壁と石棺の間）　　銀象嵌円頭大刀・金銅装鞍金具・鉄鏃束・須恵器が副葬される

2　須恵器・鞍金具出土状況　　鞍金具 2 組出土

巻頭図版 4

出土土器

出土馬具

巻頭図版 6

1　1号鞍金具　前輪

2　1号鞍金具　後輪

1　２号鞍金具　前輪

2　２号鞍金具　後輪

巻頭図版 8

雲珠・辻金具・貝座飾金具

帯飾金具・鉸具付飾金具

巻頭図版10

1　金銅装圭頭大刀

2　銀象嵌円頭大刀

1　弓金具

2　金銅製品

巻頭図版12

円頭大刀柄頭X線CT画像

序

原分古墳の調査は（都）沼津・三島線都市計画街路事業に伴い、平成15年10月から平成16年８月にかけて実施された。

本古墳が所在する長泉町の中心部には黄瀬川が南流し、古来より交通上の要衝に位置している。愛鷹山麓に沿って流れる黄瀬川は、御殿場市に源を発し、かつては蛇行しながら狩野川に注いでいる。

この河川が作り出した河岸段丘には、かつて「土狩五百塚」と呼ばれるように多くの横穴式石室墳が存在していた。その段丘上にみられる古墳群は伊豆凝灰岩製の石棺をもつ大型の石室墳が点在する。いずれも７世紀に築造され、駿河東部において有力な古墳群である。

石棺を有する古墳は駿河中部の賤機山古墳や田方平野南部の有力墳に採用されており、駿河中部、駿河東部、伊豆の首長間の交流を示すものとして注目される。

今回は古墳の移築・復元を前提として当研究所で古墳解体調査を行った。その結果、７世紀中葉に築造された径17mの円墳で、開口部から床面が１段下がる構造の無袖式石室であることが判明した。さらに石室構築と墳丘構築が連動して行われていることが明らかにされ、古墳構築技術の一端も解明された。

石室内からは縄掛突起を有する家形石棺をもち、複数の金銅装馬具や精美に施された銀象嵌円頭大刀など豪奢な副葬品が出土した。特に、馬具は、７世紀代としては優秀なものであり、全国的にみても貴重な資料を提供したといえるであろう。

また、同じ事業予定地内において的場遺跡の調査により古墳時代終末期から奈良・平安時代の集落が見つかっている。

このように黄瀬川流域の古墳群及び古代の集落の実態が明らかにされつつあり、当地の具体的な歴史解明に深く寄与することであろう。

今回、解体された原分古墳はすでに長泉町教育委員会により移築・復元されている。今後、広く一般に公開、活用されることであろう。

最後に発掘調査並びに報告書作成に当たっては静岡県教育委員会文化課、静岡県沼津土木事務所、長泉町教育委員会等の関係諸機関各位の御支援・御協力に感謝するとともに現地調査と資料整理に参加した調査員・作業員の労苦をねぎらいたい。

2008年３月

財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所　長　斎藤　忠

例　言

本書は静岡県駿東郡長泉町下土狩字山ノ神（原分）及び薄原他に所在する原分古墳及び的場遺跡Ⅱの発掘調査報告書である。

本書は、第１部　原分古墳　調査報告編、第２部　原分古墳　構造解析編、第３部　的場遺跡　調査報告編の３部で構成される。第1部を調査報告編、第２部と第３部を構造解析編に収め、２分冊とした。

原分古墳の調査は（都）沼津三島線都市計画街路事業に伴う埋蔵文化財発掘調査として静岡県沼津土木事務所の委託を受け、静岡県教育委員会の指導のもとに財団法人 静岡県埋蔵文化財調査研究所が平成12年に現況測量調査、平成14年度に確認調査、平成15年10月から平成16年８月まで本調査、平成16年８月から平成19年３月まで保存処理・資料整理をおこなった。的場遺跡Ⅱについては同じく平成18年５月から６月に本調査を行い、平成19年１月から３月に資料整理を実施した。

調査体制は以下のとおりである。

平成12年度（的場遺跡本調査・原分古墳現況測量調査）

所長　斎藤　忠　副所長　山下　晃　常務理事 伊藤友雄 総務課長 杉木敏雄 会計係長　大橋　薫
調査研究部長　佐藤達雄　調査研究部次長　及川　司　調査研究二課長　篠原修二
調査研究員　勝又直人　井鍋誉之

平成13年度（的場遺跡 資料整理）

所長　斎藤　忠　副所長　山下　晃　常務兼総務部長　粂田徳幸　総務課長　本杉昭一
会計係長　大橋　薫　調査研究部長　佐藤達雄　調査研究部次長　栗野克己・及川　司
調査研究二課長　飯塚晴夫　調査研究員　井鍋誉之

平成14年度（的場遺跡 資料整理・原分古墳 確認調査）

所長　斎藤　忠　副所長　飯田英夫　常務兼総務部長　粂田徳幸　総務課長　本杉昭一
会計係長　大橋　薫　調査研究部長　山本昇平　調査研究部次長　栗野克己
調査研究部次長兼調査研究二課長　佐野五十三　調査研究員　井鍋誉之

平成15年度（原分古墳 本調査）

所長　斎藤　忠　副所長　飯田英夫 常務兼総務部長　粂田徳幸 総務部次長兼総務課長　鎌田英巳
会計係長　野島尚紀　調査研究部長　山本昇平　調査研究部次長兼資料課長　栗野克己
調査研究部次長兼調査研究二課長　佐野五十三　調査研究員　望月由佳子

平成16年度（原分古墳 本調査・資料整理・保存処理）

所長　斎藤　忠　副所長　飯田英夫 常務兼総務部長　平松公夫　総務部次長兼総務課長　鎌田英巳
会計係長　野島尚紀　調査研究部長　山本昇平　調査研究部次長兼資料課長　栗野克己
調査研究部次長兼調査研究二課長　佐野五十三　保存処理室長 西尾太加二　調査研究員　井鍋誉之

平成17年度（原分古墳保存処理）

所長　斎藤　忠　常務兼総務部長　平松公夫　総務部次長兼総務課長　鈴木大二郎
会計係長　野島尚紀　調査研究部長　石川素久　調査研究部次長兼資料課長　栗野克己
調査研究部次長兼調査研究二課長　佐野五十三　保存処理室長　西尾太加二

平成18年度（的場遺跡現地調査・資料整理・原分古墳保存処理）

所長　斎藤　忠　常務兼総務部長　平松公夫　総務部次長兼総務課長　鈴木大二郎
会計担当　望月高史　調査研究部長　石川素久　調査研究部次長　佐野五十三　及川　司
保存処理室長　西尾太加二　調査員　大林　元

平成19年度（原分古墳資料整理）

所長　斎藤　忠　常務兼事務局長　清水　哲　事務局次長　佐野五十三　及川　司　大場正夫
稲葉保幸　会計担当　望月高史　保存処理室長　西尾太加二　調査員　井鍋誉之

現地での基準点測量、景観写真、レーザー測量および写真測量は㈱フジヤマに委託した。

金属製品にかんしては浜松市文化財担当課　鈴木一有氏、静岡県教育委員会文化課　大谷宏治氏に実測およびトレース指導をうけた。

古墳解体に関わる施工・管理は㈱荒井研究所に委託し、併せて本書の古墳工学調査を依頼した。

金属製品の保存処理は奈良文化財研究所　村上　隆氏の指導のもと当研究所保存処理室（室長　西尾太加二）が実施した。

金属製品全般の蛍光X線分析はコベルコ科研に委託した。

銀象嵌円頭大刀柄頭のマイクロフォーカスX線CT撮影は㈱島津製作所、鉸具、弓金具のX線CT撮影は㈱島津テクノリサーチに依頼した。

人骨の調査にかんしては京都大学大学院理学研究科　動物学教室　片山一道氏および大藪由美子氏に依頼した。

家形石棺の材質調査にかんしては増島　淳氏に依頼した。

調査にかかわる記録および出土遺物は静岡県教育委員会が保管している。

調査にあたり以下の方々から指導・助言を得た。
荒井　仁　大谷宏治　大藪由美子　片山一道　鈴木一有　土生田純之　増島　淳　村上　隆
㈱島津テクノリサーチ　㈱島津製作所　㈱コベルコ科研

本書の執筆は以下のとおりである。

荒井　仁（第２部　原分古墳　構造解析編　第１章）
井鍋誉之（第１部　原分古墳　調査報告編　第１章　第２章　第１節　第２節　第３節
　　第４節　１土器、５弓金具、６ガラス玉、８鉄釘　第５節　第３章　第４章）
大林　元（第３部　的場遺跡　調査報告編）
大森信宏（第２部　原分古墳　構造解析編　第２章）
大谷宏治（第１部　原分古墳　調査報告編　第２章　第４節　３刀剣類　第３章）
大藪由美子（第２部　原分古墳　構造解析編　第３章）
片山一道（第２部　原分古墳　構造解析編　第３章）
菊池吉修（第１部　原分古墳　調査報告編　第２章　第４節　４鉄鏃　第３章）
鈴木一有（第１部　原分古墳　調査報告編　第２章　第４節　２馬具　第３章）
田村隆太郎（第１部　原分古墳　調査報告編　第２章　第４節　７金銅製装身具類　第３章）
西尾太加二（第２部　原分古墳　構造解析編　第５章）
村上　隆（第２部　原分古墳　構造解析編　第２章　第２節）

遺物の写真撮影は調査員井鍋誉之、当研究所写真室担当者がおこなった。

本書の編集は井鍋誉之が担当して（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所が実施した。

凡　例

本書で扱う座標値は日本測地系（旧測地系）に準拠し、レベル高は海抜を表わす。

本書で扱う横穴式石室にかかわる用語については、第８回東海考古学フォーラム三河大会の概念規定（小幡・近藤2001）を援用した。なお、側壁の呼称は奥壁側からみて左壁、右壁とした。

本書で扱う遺物にかんしては種別ごとに番号を付した。挿図番号と図版に示した番号は同一である。第２部　構造解析編の金属製品は取上げ番号を付した。

挿図中で扱う遺物実測図の縮尺は土器１/３、馬具は１/３と１/２（鞍金具、鐙１/３、その他１/２）、刀剣類は１/４と１/２（刀身１/４および大刀装具、鉄鉾、刀子１/２）、鉄鏃１/２、弓金具１/２、ガラス玉１/２、鉄釘１/２、金銅製装身具類１/１を基本とした。

出土遺物の実測図断面を以下のように表現することで種類の違いを示した。

須恵器　　銅製品

土師器　　鉄製品

本書で扱う時期区分にかんして以下のとおりである。
なお、本書では出土土器については遠江編年を用い、金属製品にかんしては陶邑編年および飛鳥編年を併用した。

年代	550		600		650		700
時期区分	TK10	TK43	TK209	飛鳥Ⅰ（後）	飛鳥Ⅱ	飛鳥Ⅲ	飛鳥Ⅳ

陶邑編年	TK10	TK43	TK209		(TK217)		(TK46)
飛鳥編年			飛鳥Ⅰ		飛鳥Ⅱ	飛鳥Ⅲ	飛鳥Ⅳ
遠江編年	Ⅲ前	Ⅲ中	Ⅲ後	Ⅲ末	Ⅳ前	Ⅳ後	Ⅳ末
	540～560年代	560～590年代	590～620年代	620～640年代	640～660年代	660～670年代	680～690年代

文献

遠江編年　山村宏・向坂鋼二・平野和男　1966「出土須恵器の編年」『大沢・川尻古窯調査報告書』湖西文化研究会
川江秀孝　1979「静岡県下の須恵器について」『須恵器―古代陶質土器―の編年』静岡県考古学会
鈴木敏則　2004『有玉古窯』浜松市教育委員会
陶邑編年　田辺昭三　1966『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ
田辺昭三　1981『須恵器大成』角川書店
飛鳥編年　西　弘海　1978「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所
西　弘海　1982「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』
古代の土器研究会　1997『古代の土器５-１』７世紀の土器

実年代は、遠江編年を機軸として併行する飛鳥編年のおおよその年代を示した

原分古墳　調査報告編　目　次

巻頭図版
　序
例　言
凡　例

第１部　原分古墳　調査報告編

第１章　調査概要 …… 3
　第１節　調査経緯 …… 3
　第２節　調査方法 …… 4
　第３節　調査経過 …… 6
　第４節　地理的環境 …… 11
　第５節　歴史的環境 …… 13

第２章　調査成果 …… 15
　第１節　確認調査 …… 15
　第２節　墳丘の構造 …… 19
　第３節　埋葬施設の構造 …… 30
　第４節　副葬遺物 …… 65
　第５節　その他の遺構 …… 131

第３章　原分古墳の評価 …… 141
　原分古墳にみる古墳構築過程の復元（井鍋）…… 141
　原分古墳における埋葬と儀礼（田村）…… 151
　原分古墳出土馬具の時期と系譜（鈴木）…… 163
　原分古墳出土刀剣類の復元と被葬者の性格（大谷）…… 175
　原分古墳出土の鉄鏃について（菊池）…… 187
　古墳時代終末期における駿河東部の有力古墳（井鍋）…… 195

第４章　総　括 …… 203

図　版

図　版　目　次

巻頭図版１　１　原分古墳　遠景（東より）　２　墳丘検出状況（愛鷹山を望む）
巻頭図版２　石室内遺物出土状況（開口部より）
巻頭図版３　１　石室内遺物出土状況（奥壁と石棺の間）　２　須恵器・鞍金具出土状況
巻頭図版４　出土土器
巻頭図版５　出土馬具
巻頭図版６　１　１号鞍金具　前輪　２　１号鞍金具　後輪
巻頭図版７　１　２号鞍金具　前輪　２　２号鞍金具　後輪
巻頭図版８　雲珠・辻金具・貝座飾金具
巻頭図版９　帯飾金具・鉸具付飾金具
巻頭図版10　１　金銅装圭頭大刀　２　銀象嵌円頭大刀
巻頭図版11　１　弓金具　２　金銅製品
巻頭図版12　円頭大刀柄頭Ｘ線ＣＴ画像

図版１　１　調査前全景(南東より)　２　墳頂部全景（南より）
図版２　墳丘検出状況（南東より）
図版３　１　天井石検出状況（東より）　２　天井石検出状況（北より）
図版４　１　閉塞石検出状況（墳丘外より）　２　閉塞石検出状況（石室内より）
図版５　１　閉塞石半截状況（南西より）　２　閉塞石内土器出土状況（フラスコ瓶）
　　３　閉塞石下礫出土状況（南より）
図版６　１　奥壁側　石棺破片出土状況（南より）　２　奥壁側　棺蓋出土状況（南より）
　　３　開口部側　石棺破片出土状況（奥壁より）
図版７　石室内遺物出土状況（開口部より）
図版８　１　奥壁と石棺の間　遺物出土状況（開口部より）
　　２　奥壁左隅　円頭大刀柄頭・大刀・鉄鏃束１・２出土状況（南西より）
図版９　１　奥壁右隅　副葬土器Ⅱ群・馬具・鉄鏃束１・２出土状況（南東より）
　　２　奥壁右隅　１号鞍金具・高坏出土状況（北東より）
図版10　１　石棺左脇　１号鞍金具・帯飾金具・辻金具・鉸具出土状況（南西より）
　　２　右壁　１号鐙出土状況（北東より）
図版11　開口部側　石室内人骨・遺物出土状況（石室内より）
図版12　１　石棺右脇　雲珠・鏡出土状況（奥壁より）　２　右壁　２号轡出土状況（東より）
　　３　開口部側　刀装具出土状況（南東より）
図版13　１　左壁　開口部側　副葬土器Ⅲ群出土状況（西より）
　　２　左壁　開口部側　副葬土器Ⅲ群出土状況（北西より）
図版14　１　開口部側　高坏・２号鐙出土状況（奥壁より）２　左壁　Ａ人骨出土状況（北西より）
図版15　１　左壁　人骨出土状況（奥壁より）　２　右壁　棺台石検出状況（南東より）
　　３　左壁　枕石・Ｂ人骨検出状況（奥壁より）　４　右壁　人骨・大刀出土状況（北東より）
図版16　棺身検出状況（開口部より）
図版17　１　天井石架構状況（開口部より）　２　右壁　検出状況（南東より）
　　３　左壁　検出状況（南西より）
図版18　１　墳丘正面検出状況（南より）　２　天井石除去後　墳丘検出状況（南より）
図版19　天井石除去後　石室検出状況（南より）

図版20　1　天井石除去後　右壁検出状況（南東より）　2　天井石除去後　左壁検出状況（南西より）
図版21　1　天井石除去後　間詰石検出状況（北東より）　2　天井石除去後　間詰石検出状況（北東より）
3　天井石除去後　奥壁間詰石検出状況（南東より）
図版22　1　石室構築２段目　墳丘検出状況（南より）　2　石室構築２段目　墳丘検出状況（南西より）
図版23　石室構築２段目　検出状況全景（南より）
図版24　1　石室構築２段目　検出状況（南より）　2　石室構築２段目　右壁検出状況（南東より）
3　石室構築２段目　左壁検出状況（南西より）
図版25　基底石検出状況（南より）
図版26　1　奥壁　正面検出状況（開口部より）　2　奥壁　側面検出状況（左壁側より）
3　奥壁　裏側検出状況（北より）
図版27　1　段構造礫検出状況（南より）　2　左前庭側壁　基底石検出状況（北東より）
3　右前庭側壁　基底石検出状況（北西より）
図版28　1　左壁基底石と裏込め検出状況（南東より）　2　左壁基底石と裏込め検出状況（南東より）
3　右壁基底石と裏込め検出状況（西より）
図版29　墓坑検出状況（南より）
図版30　1　左前庭部前　須恵器甕出土状況（南より）　2　土器廃棄土坑　遺物出土状況（南より）
図版31　1　家形石棺　棺蓋（１）　2　家形石棺　棺蓋（２）
図版32　1　復元された原分古墳全景（南東より）　2　復元された横穴式石室（開口部より）
図版33　石室内主要土器
図版34　石室内出土土器（１）
図版35　石室内出土土器（２）
図版36　石室内出土土器（３）
図版37　石室内出土土器（４）
図版38　石室内出土土器（５）
図版39　石室内出土土器（６）
図版40　石室内出土土器（７）
図版41　周溝内出土土器（１）
図版42　周溝内出土土器（２）
図版43　1　開口部列石出土土器　2　周溝内出土土器（３）
図版44　土器廃棄土坑主要土器
図版45　土器廃棄土坑出土土器
図版46　1　周溝外出土土器　2　古代以降の出土遺物
図版47　１号馬具
図版48　２号馬具
図版49　1　１号轡　2　２号轡
図版50　1　１号鞍金具前輪　外面　2　１号鞍金具前輪　内面
図版51　１号鞍金具前輪　詳細
図版52　1　１号鞍金具後輪　外面　2　１号鞍金具後輪　内面
図版53　１号鞍金具後輪　詳細・海金具（12～14）
図版54　1　２号鞍金具前輪　外面　2　２号鞍金具前輪　内面
図版55　２号鞍金具前輪　詳細
図版56　1　２号鞍金具後輪　外面　2　２号鞍金具後輪　内面
図版57　２号鞍金具後輪　詳細
図版58　1　１号鐙・２号鐙　2　２号鐙

図版59　１号鐙（左）
図版60　１号鐙（右）
図版61　杏葉・辻金具１類
図版62　辻金具２類
図版63　雲　珠
図版64　鉸具付飾金具
図版65　１　鉤金具　２　貝座飾金具
図版66　帯飾金具（１）
図版67　帯飾金具（２）
図版68　馬具　鋲　詳細
図版69　鉸　具
図版70　刀剣類
図版71　大刀・鉾・刀子
図版72　金銅装圭頭大刀装具
図版73　１　推定大刀装具　２　大刀装具
図版74　１　円頭大刀柄頭　２　円頭大刀柄頭Ｘ線写真
　３　円頭大刀柄頭Ｘ線ＣＴ画像
図版75　１　円頭大刀八窓鍔　２　円頭大刀八窓鍔Ｘ線写真
　３　円頭大刀柄縁金具　４　円頭大刀柄縁金具Ｘ線写真
図版76　鉄鏃・弓金具
図版77　尖根式鑿箭鏃
図版78　尖根式片刃箭鏃・鏃身形態不明鉄鏃
図版79　１　平根式鏃　２　弓金具
図版80　金銅製装身具類
図版81　１　ガラス玉　２　鉄　釘
図版82　下土狩西１号墳出土主要土器
図版83　下土狩西１号墳出土土器
図版84　下土狩西１号墳出土土器・装身具
図版85　下土狩西１号墳出土武器・馬具
図版86　下土狩西１号墳出土馬具
図版87　下土狩西１号墳出土大刀
図版88　下土狩西１号墳出土金属製品

挿　図　目　次

図１　原分古墳の位置……3
図２　古墳の立地環境……4
図３　調査区配置図……5
図４　古墳の位置と移築箇所……6
図５　周辺地質図……11
図６　駿河東部の古墳分布……13
図７　長泉町域の古墳分布……14
図８　調査前状況……15
図９　トレンチ配置……17
図10　調査区全体図……18
図11　墳丘図……19
図12　墳丘北トレンチ土層断面……20
図13　墳丘東西トレンチ土層断面……21
図14　側壁主軸トレンチ土層断面……23
図15　側壁構築２段階時の墳丘……24
図16　周溝内土器出土状況（１）……26
図17　周溝内土器出土状況（２）……27
図18　周溝内出土土器（１）……28
図19　周溝内出土土器（２）……29
図20　開口部出土土器・周溝内出土土器（３）……29
図21　石室展開図……31
図22　天井石平面図……32
図23　天井石見上げ図……33
図24　石室断面……34
図25　閉塞石（１）……35
図26　閉塞石（２）……37
図27　天井石除去後　平面図……38
図28　天井石除去後　展開図……39
図29　基底石……40
図30　墓坑（１）……41
図31　墓坑（２）……42
図32　側壁と墳丘土層……43
図33　家形石棺（１）……45
図34　家形石棺（２）……46
図35　家形石棺 復元案……47
図36　棺身　復元案……48
図37　石室内遺物出土模式図……49
図38　石室内人骨出土状況……50
図39　石室内遺物出土状況……52
図40　石室床面……52
図41　副葬土器Ⅱ群出土状況……53
図42　副葬土器Ⅰ・Ⅲ群出土状況……54
図43　馬具出土状況（１）……56
図44　馬具出土状況（２）……57
図45　刀剣類出土状況……59
図46　鉄鏃・弓金具出土状況……60
図47　ガラス玉・鉄釘出土状況……61
図48　遺物出土状況（一括取り上げ）……64
図49　石室内出土土器（１）……67
図50　石室内出土土器（２）……70
図51　石室内出土土器（３）……71
図52　石室内出土土器（４）……72
図53　石室内出土土器（５）……74
図54　１号轡……77
図55　２号轡……78
図56　１号鞍金具（外面）……80
図57　１号鞍金具（内面）……81
図58　１号鞍金具　海金具……83
図59　２号鞍金具（外面）……86
図60　２号鞍金具（内面）……87
図61　１号鐙（左）……90
図62　１号鐙（右）……91
図63　２号鐙……93
図64　辻金具１類……94
図65　辻金具２類……95
図66　雲　珠……96
図67　杏　葉……97
図68　杏葉・辻金具組合せ模式図……98
図69　鈒具付飾金具……99
図70　鉤金具……100
図71　貝座飾金具……101
図72　帯飾金具……103
図73　鈒　具……104
図74　大刀の名称……106
図75　大刀装具……108
図76　銀象嵌の区画番号……109
図77　銀象嵌円頭柄頭・鍔……110
図78　刀　身……114
図79　鉄　鉾……115
図80　鉄製刀子……116
図81　尖根式鑿箭鏃……118
図82　鉄鏃束２銹着状況……119
図83　尖根式片刃箭鏃……120
図84　鏃身形態不明鉄鏃……122

図85　平根式鉄鏃……123
図86　弓金具……125
図87　ガラス玉……127
図88　金銅製装身具類……129
図89　鉄　釘……130
図90　土器廃棄土坑実測図……131
図91　土器廃棄土坑出土状況……132
図92　土器廃棄土坑出土土器（1）……133
図93　土器廃棄土坑出土土器（2）……134
図94　包含層出土状況　……135
図95　包含層出土土器　……136
図96　瓦　……137
図97　古代以降の土器　……137
図98　銭貨　……137

挿　表　目　次

表1　調査工程表　……10
表2　帯飾金具計測表……102
表3　鉸具計測表　……105
表4　鉄鏃計測表　……124
表5　弓金具計測表　……126
表6　ガラス玉計測表　……127

挿　写　真　目　次

写真1　原分古墳調査状況……7
写真2　ボーリング調査……7
写真3　石室内人骨取り上げ作業……8
写真4　現地説明会……8
写真5　天井石除去作業……8
写真6　レーザー測量……8
写真7　土器復原作業　……9
写真8　土器実測作業　……9
写真9　金属製品実測作業……10
写真10　トレース作業……10
写真11　原分古墳周辺の黄瀬川……12
写真12　柄頭の象嵌文様を展開した様子　……111

第１部

原分古墳　調査報告編

第１章　調査概要

第１節　　調査経緯

日本のほぼ中央、東海地方東部に位置する静岡県は、富士山や赤石山地を背景に駿河湾、相模湾、遠州灘に面している。その駿河湾の奥部東側にあたる沼津市、長泉町、三島市は古くから東西を結ぶ重要地点として発展、発達し、現在は御殿場、伊豆、箱根といった観光地のアクセスポイントとなっている。さらに東名高速道路、新幹線の開通に伴い、通勤圏が大幅に拡大し、人口も増加の一途を辿っている。そのような状況の中、沼津―三島を結ぶ主要地方道路三島富士線（通称：根方街道）は幅員狭小の上、線形も悪く、慢性的な交通渋滞を引き起こし、歩行者の安全を脅かしている。そのような問題解消の一環として計画されたのが、都市計画道路沼津三島線である。

（都）沼津三島線は三島市街地中心部と沼津市北部市街地を結ぶ主要地方道路三島富士線のバイパス道路として整備するものであり、路線計画は三島駅北口から黄瀬川を渡り、沼津市岡一色に至る道路である。この道路は静岡県東部地域の中核都市である沼津市と三島市を結ぶ地域骨格道路として位置づけられ、交通緩和による安全確保と環境改善が期待される。

その路線箇所において、平成11年10月から12月に長泉町教育委員会により、遺跡の確認調査が行われ、その結果、本格的な調査の必要性が生じた。これを受けて平成13年度に調査委託者の静岡県沼津土木事務所と調査指導機関の静岡県教育委員会、地元の長泉町教育委員会及び当研究所による遺跡の取り扱いについて協議が行われた結果、南北にはしる中土狩、竹原線を境に西側の路線箇所は当研究所が発掘調査を実施する運びになった。路線内に所在する原分古墳は長泉町指定文化財であったが、指定を解除して本発掘調査を行うこととなった。

的場遺跡の本調査は東西に長く、南北に狭い範囲を対象とし大きく３箇所に分けられる。調査区は東側から１区、２区とし、御殿場線の西側部分については３区とした。平成12年度の的場遺跡の調査と併行しながら原分古墳の現況地形測量図を作成した。平成13年度には的場遺跡の資料整理を実施しながら12月に墳丘規模、周溝等を把握するための確認調査を行った。

今回、報告する原分古墳は移築・解体を前提とした発掘調査であり、解体調査は当研究所で行い、移築・復元作業は長泉町教育委員会が実施することとなった。

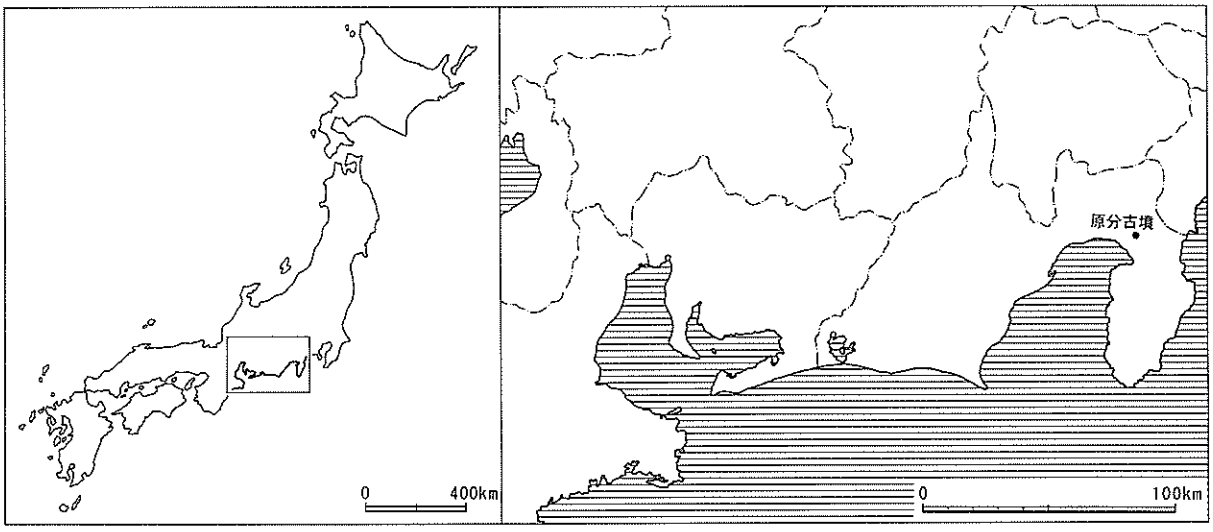


図１　原分古墳の位置

第２節　　調査方法

平成12年度から実施された的場遺跡の本調査は東西に細長く、地形に応じて大きく３箇所に分けられる。調査区は東側から１区とし、道路や排水路により１－１区、１－２区、１－３区と細分した。２区は平成12年度分を２－１区とし、今回の原分古墳を含む調査区を２－２区とした。この２－２区内にグリッド設定を国土座標に基づき10mの方眼を設定した。国土座標値は旧日本測地系を用い、グリッドは数字とアルファベットを組み合わせで表示し、北西隅（X＝－97340・Y＝36190）を基点とした。これらは平成12年度の調査時に準じて用いている。なお、平成12年度の的場遺跡調査時に併せて原分古墳の現況測量図を作成し、平成14年度に原分古墳の規模や周溝の有無を確認するトレンチ調査を実施した。

石室周辺の的場遺跡の包含層から出土した遺物は光波測定器を用い、座標管理している。古墳の調査は石室の主軸に合わせて杭を設置し、これらを基に墳丘平面図は写真測量、石室内展開図はレーザー測量、墳丘土層断面図、遺物出土状況図は手実測による作業を行った。墳丘平面図は１/50、石室内展開図は１/20を基本に図化した。

平成14年度に確認調査を行った結果を参考に原分古墳の上部には近年、造成した盛土、石垣、石段部分は建設機械、チェーンソーを用いて除去した。また、的場遺跡の表土及び排土処理作業はバックフォーおよびクローラーダンプを使用し、包含層、遺構掘削、石室内掘削、墳丘掘削はすべて人力で行った。

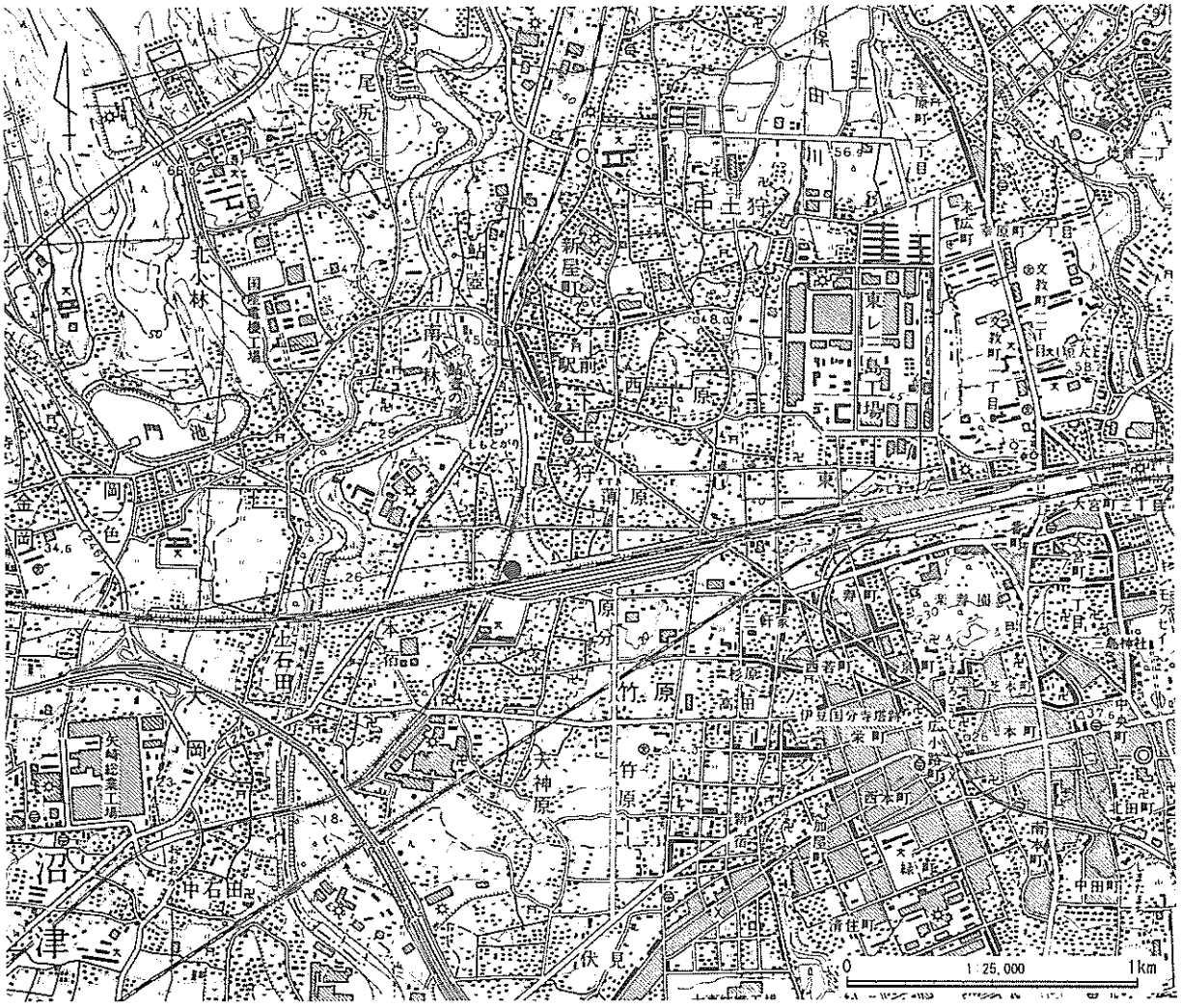


図２　古墳の立地環境

石室内には天井石付近まで流入土が堆積しており、閉塞石を残しながら人力で徐々に掘り下げていった。天井石や側壁の崩落等が予想されたため、石室内にパイプサポートを掛けながらの掘削となった。石室床面付近からは壊された石棺片、人骨、金属製品が多数出土したため、当研究所保存処理室と連携をとりながら、取上げ作業を実施した。特に脆弱な遺物にかんしては応急的処置を施したのち、ただちに当研究所保存処理室へ搬入した。また、石室内床面付近の覆土はすべて土嚢に入れて取上げ、篩による遺物採取作業を行った。石室解体作業は石室内の遺物取り上げ作業などの考古学的調査が終了したのち、石室石材にグリッドラインを入れて㈱荒井研究所の施工監理のもと50ｔ、25ｔのラフタークレーンを用いて、天井石、側壁石材の解体作業をおこなった。天井石除去後には側壁平面図を作成し、順次、側壁の石積みにあわせて墳丘盛土を掘削した。さらに測量作業などの考古学的調査を行い、側壁の解体作業をすすめた。解体した石材は番号を付し、移築復元予定地に一時仮置きした。この移築・復原作業は長泉町教育委員会により施工され、平成19年３月に完成し、一般の見学に供されている。

全景写真および主要な遺物の出土状況写真は４×５判（モノクロ・カラーリバーサル）を用い、６×７判カメラを補助的に用いた。また、発掘作業の工程記録用には35mm判（カラーネガ）を使用した。古墳全景及び景観写真はローリングタワーとラジコンヘリを用いて撮影した。石室内の撮影にはストロボを用いた。

現地調査と並行して現地事務所にて土器の洗浄、遺物注記作業等の基礎整理作業を行い、作業の効率化をはかった。

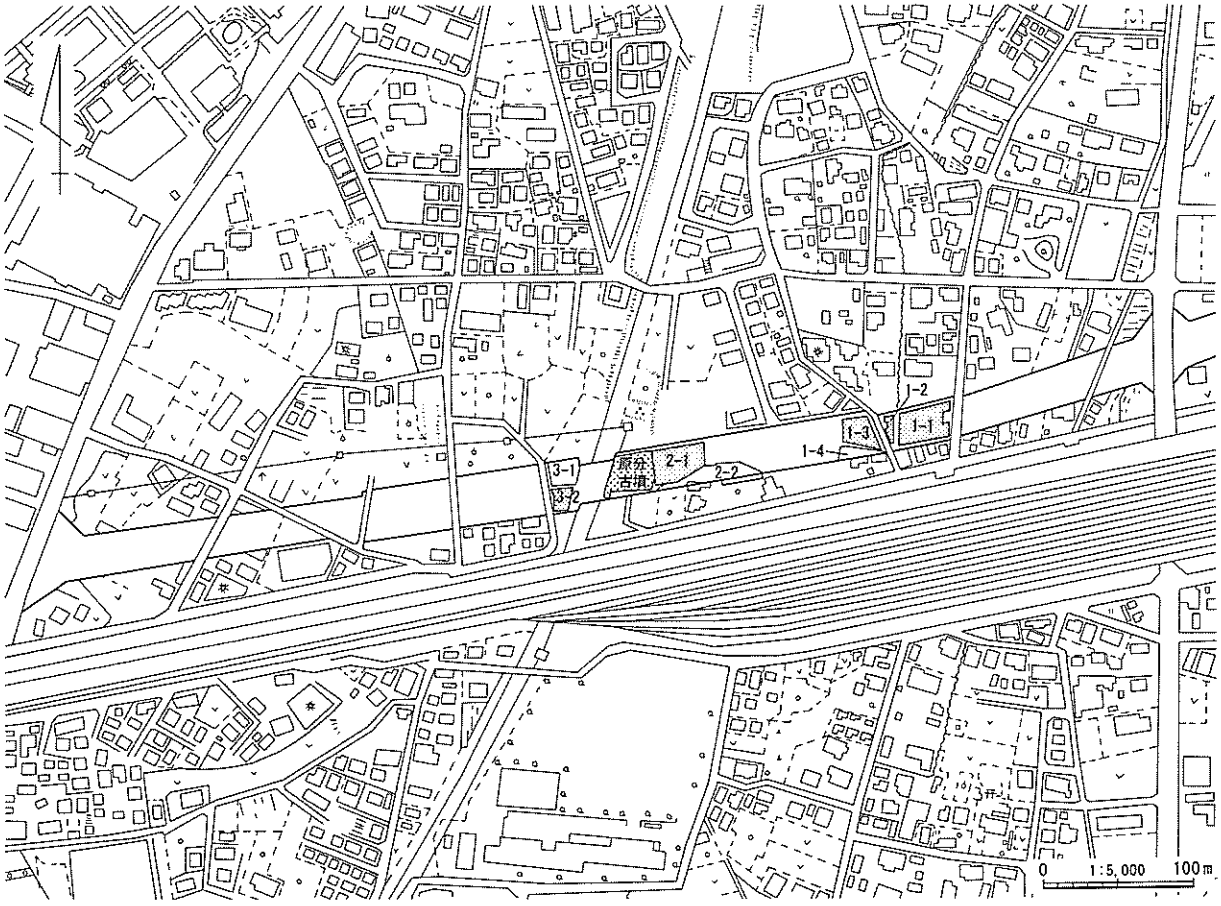


図３　調査区配置図

第３節　調査経過

１　平成13年度　確認調査

平成13年度12月より１ヶ月の期間で原分古墳の確認調査を行った。平成12年度に作成した原分古墳現況平面図をもとに石室主軸にあわせ、南北東西に幅１ｍのトレンチを４本設定した。実際は樹木が植えられているため、若干、位置をずらしながらのトレンチ設定となった。トレンチ調査は作業員４名による人力掘削で行われた。この調査は古墳の規模、周溝の有無を第一義とした。

トレンチ１　天井石の確認、周溝の有無を目的にトレンチを設定した。天井石の下端を確認したところで奥壁側の間詰め石が検出された。

トレンチ２　最も周溝が確認できると想定したトレンチ２から掘削を行った。しかし、トレンチ２の上部は樹木、石段があるため、墳丘基底面まで下げられず、下部の墳丘、周溝の有無を確認するトレンチの掘削となった。墳端と思われる落ち込みを確認したところで新たに南東部分にトレンチ５を設定した。補助トレンチであるため、石垣より外側部分のみを掘削した。

トレンチ３　側壁の確認と開口部の構造を明らかにする目的でトレンチを設定した。開口部側の天井石下より閉塞石と思われる石積みが検出されたため、さらに拡張し、石室の幅、閉塞石の規模、構造を確認した。また、墓道等を確認するため、外側の石垣を取り外し、さらにトレンチを南側に拡張した。

トレンチ４　墳丘の構造、築造方法、周溝の確認を目的に設定した。石垣外側はJR御殿場線敷設に伴い、土取りが行われていた。そのため、石垣外側は地山である黄褐色砂礫土が露出しており、石垣は除去せずに掘削した。このトレンチでは近年の造成による石列の真下に墳丘に伴うと思われる石積みが確認された。今回、４本のトレンチにかかっていた列石は当初、外護列石と考えられたが、調査をすすめる中で近年の造成によるものと判明したため、これらの石をすべて除去して調査を行った。

12月第３週にはすべてのトレンチ掘削作業が終わり、順次、写真撮影、トレンチ配置図、断面図平面図を作成した。

12月17日には原分区の地域住民10名を対象に現地説明会を開催した。12月27日には静岡県教育委員会文化課、沼津土木事務所長泉町教育委員会の立会いのもと今回の確認調査の成果を報告した。12月28日には人力で埋め戻し作業を行い、石室、墳丘の崩落を防止するためトレンチ下部に土嚢を敷き詰めその上に土をかぶせた。また、解体した石垣は現状復帰して確認調査を終了した。

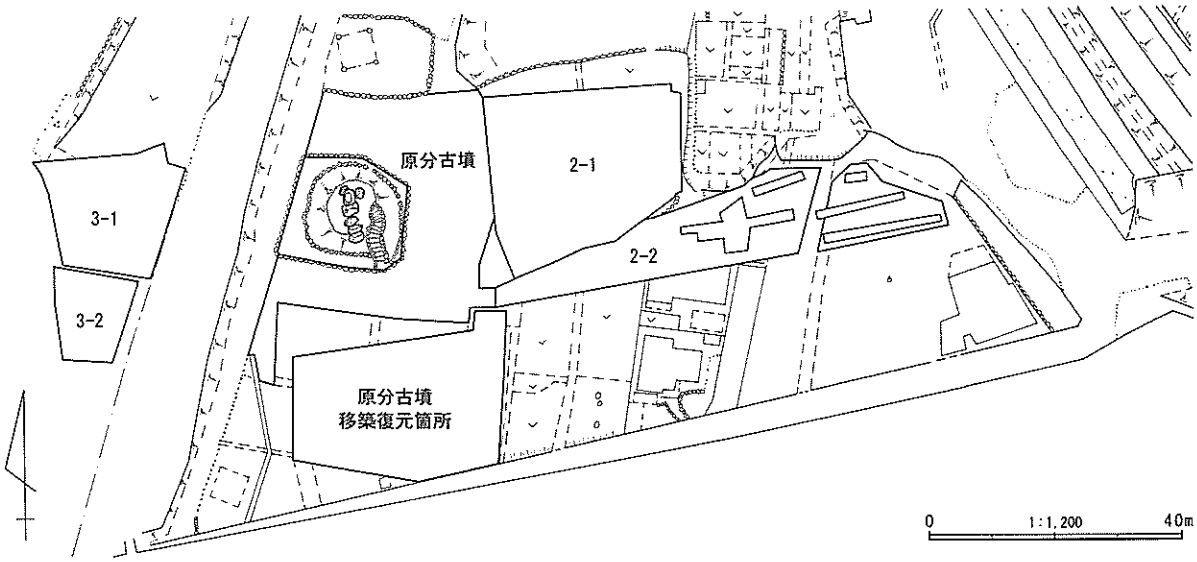


図４　古墳の位置と移築箇所

2　平成15年度　本調査

平成15年度10月より準備工に入り、作業員の確保、資機材の準備等を行った。１区と２区の間には旧駿豆線の線路があった場所で、そこにプレハブ、駐車場を設置した。調査を行う際には安全祈願祭を執り行い、調査関係者、発掘作業員が参加した。10月第４週からは原分古墳の樹木の伐採を行い、バックフォーを使用して石段、石垣を撤去した。次に原分古墳の周辺部にはバックフォーによる表土除去作業を行った。包含層掘削時には基準杭、グリッド杭、古墳の主軸に合わせた杭を打設した。

11月から本格的な調査に入り、平成13年度に実施したトレンチを再掘削し、再度、土層観察を行い、必要に応じてトレンチの延長やさらに掘り下げていった。この成果をもとに墳丘精査をすすめ、それと同時に石室開口部を精査し、閉塞石を検出した。墳丘がある程度、検出されたところで、墳丘盛土の地質調査としてボーリング調査を３日間かけて実施した。また、天井石の周辺を精査し、間詰石の検出作業を行った。これらの作業をすすめた後、墳丘の全景写真、閉塞石の検出状況、天井石検出状況の写真撮影を行い、天井石の検出状況、閉塞石の検出状況図を作成するため、レーザー測量を行った。

12月から１月まで、石室内の掘削を行い、閉塞石を残した状態で石室内の掘り下げ作業をすすめた。石室内には天井石近くまで多くの流入土が入り込んでいたため、石室天井石崩落の危険性もあった。安全対策として石室内にパイプサポートを掛け、少しずつ掘り下げていった。

石室上部には後世に墓として再利用されており、人骨片や皇宋通寶などが出土した。これらの写真撮影の後、さらに掘りすすめていった。石室奥部には石棺の破片が多量に出土し、蓋などの破片が廃棄された状態で検出された。石棺は身の一部のみが原位置に据えられていたが、その石棺と奥壁の間からはフラスコ瓶、高坏、金銅装馬具、銀象嵌円頭大刀、鉄鏃などが出土した。石室開口部付近からは人骨、須恵器、土師器、馬具、大刀が出土し、特に金属製品は破片として大量に出土しており、原位置から移動した状態であった。

遺物出土状況の写真撮影は４×５判カメラを基本にストロボを使用した。遺物出土状況図作成後、遺物取り上げ作業に取り掛かった。特に人骨は脆弱であったため、強化処理を施し、これら遺物の取り上げは当研究所保存処理室で行った。また、閉塞石の断面図を作成しながら、閉塞石の解体作業をすすめ、この時に閉塞石内から破砕されたフラスコ瓶１個体分が出土した。

１月21日には専修大学土生田氏に現地指導を依頼し、石室構築法や今後の解体調査のすすめ方などを中心に指導をうけた。さらに２月８日には静岡県考古学会に原分古墳の出土遺物を公開し、３月６日には一般の人たちを対象に現地説明会を実施した。特に現地説明会にはマスコミ関係者や1,000名を超える人が来訪し、多くの新聞記事に掲載され、注目を浴びた。

写真１　原分古墳　調査状況

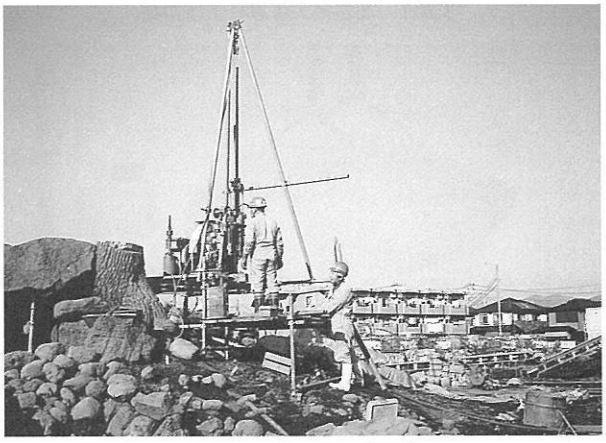


写真２　ボーリング調査

3月までに石室内の遺物の取り上げ作業を完了し、石室解体前として測量可能な図面を作成した。また、この古墳以外の調査として古墳の南西側で土器廃棄土坑を検出し、その土坑内からは甕、平瓶、瑳、フラスコ瓶の破片が出土した。

解体調査に先立ち、側壁目地と墳丘盛土との関係や前庭側壁と側壁の連結部分の盛土状態を確認するために石室主軸に平行したトレンチを左側壁開口部側に設定した。

作成した図面をもとに㈱荒井研究所に古墳の設計・監理を委託し、平成16年度6月から石室解体調査をすすめた。石材の破損状況を確認し、石室主軸に合わせて復元するためのグリッドラインを石室石材に引いた。番号を付したのち、天井石の移動にはラフタークレーンを用いた。6月23日に開口部側から外し、天井石5石の移動は1日で終了した。

その後、考古学的調査として、天井除去後の状態を図化するために、側壁周辺部を精査した。写真撮影を実施し、6月29日にレーザー測量を行った。7月に入り、専修大学土生田氏の指導のもと、右壁側にも主軸に平行したトレンチを設定し、土層図を作成した。

さらに墳丘盛土は側壁構築2段階まで掘り下げた段階で、側壁構築3段階の石材の移動には25tのラフタークレーンを使用し、石室断面図を作成した。他にも写真撮影、墳丘地形測量、土質調査を実施し、側壁構築1段階の墳丘まで掘り下げていった。7月21日には側壁構築2段階をはずしたのち、墓坑を掘削し、基底石の平面図作成後、基底石の解体作業を実施した。

このように石室解体には墳丘を掘り下げながら、合計4回、ラフタークレーンを使用した。また、解体作業と同時併行で側壁構築3段階、基底石、墓坑の平面図を図化した。墳丘盛土除去の際には構築段階時の儀礼痕跡に注意を払いながら掘りすすめたが、遺物等は出土しなかった。

最後に旧表土を除去し、調査を完了した。解体された石材は当古墳より南側の移築・復元予定地に仮置きされた。平成19年3月には長泉町教育委員会により、石室の移築・復元が完了した。

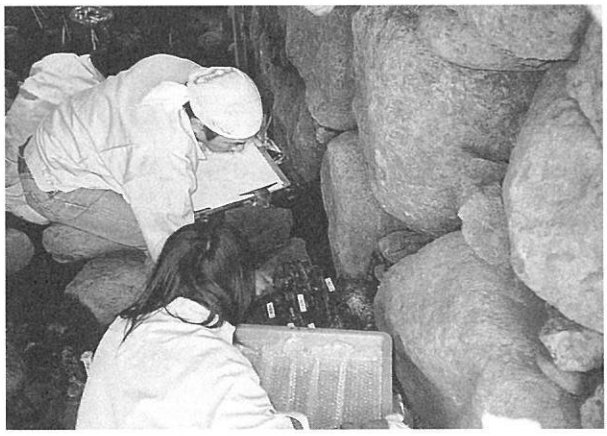


写真3　石室内人骨取り上げ作業

写真4　現地説明会

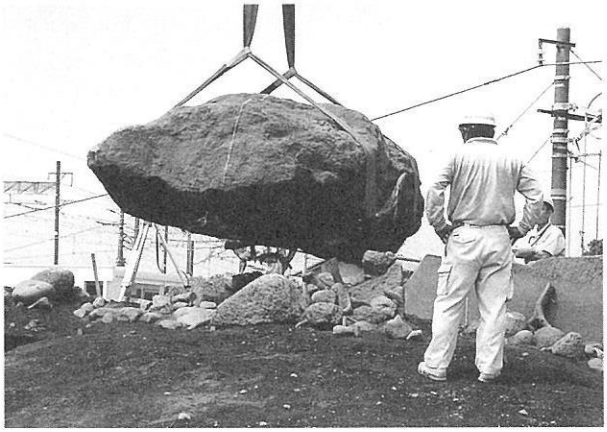


写真5　天井石除去作業

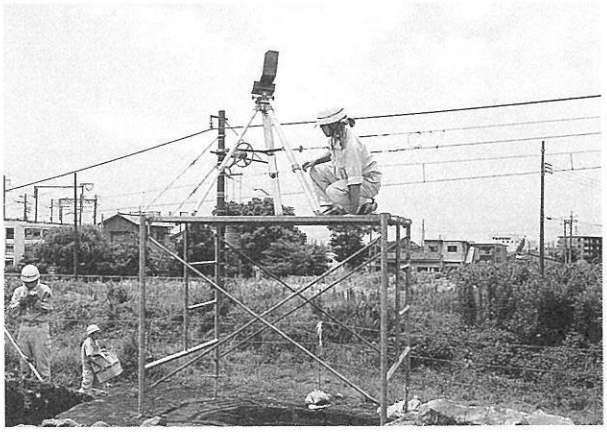


写真6　レーザー測量

3　平成16・17・18年度　資料整理・保存処理

平成16年度12月から主に遺構図面の整理作業や土器の接合、実測作業を中心に原分古墳の基礎的な資料整理を実施した。石室内出土の土器は完形品が多く認められた。また破片資料でも、その大半が接合することが可能であり、個体数を確認することができた。遺構図面は墳丘図や石室展開図を中心に整合作業をおこなった。

平成16年度８月から石室内出土遺物の保存処理を開始した。対象となるのは家形石棺、金属製品、人骨である。平成16年度は主にこれらのクリーニング、強化処理を中心に行なった。

平成17年度からは本格的に金属製品の処理作業を実施した。今回、出土したその資料的価値や膨大な破片数を鑑み、当研究所ならびに県内研究者及び独立行政法人奈良文化財研究所と研究・協力体制を組んだ。保存処理検討会は３回実施し、様々な意見を保存処理に反映させた。

金属製品は最初にX線透過撮影を参考に遺物の原形寸法などおおよその材質を確認し、特に木質や皮革などの有機物の付着に注意しながらクリーニング作業をすすめた。

このＸ線透過写真により柄頭、鍔、刀装具に象嵌が確認され、鍔の象嵌表出作業を実施したところ銀線が腐食しており、表面が膨張した状態であった。このため、柄頭も同様の状態であることが予想されたため、奈良文化財研究所　村上　隆氏の指導と㈱島津製作所の協力でマイクロフォーカスＸ線CT撮影を実施した。通常のＸ線では得られない三次元データが取得できたことはもちろんのことマイクロフォーカスＸ線CT画像の銀線断面からも銀象嵌が劣化していることが明らかになった。このため、柄頭の象嵌表出作業は行わず、三次元データより図文の復元および全体像を把握した。

平成18年５月12日には銀象嵌円頭大刀柄頭のマイクロフォーカスＸ線CT画像に関する記者発表を行った。主な原分古墳の馬具類には鞍金具２組、轡２点、鐙２組、雲珠１点、辻金具４点、杏葉１点という豊富な遺物が出土し、かつ豪華な様相を呈している。Ｘ線透過撮影の結果、サビの下に鍍金層が残存していることが確認されたため、これらの馬具類の鍍金を表出し、併せて徹底的に接合関係を検討会で実施しながら当初の様相に復原することを修復方針とした。

鍍金表出作業にはサビの厚さを考慮して鍍金層が表出する直前までグラインダー等で削除し、EDTAと呼ばれる銅サビを溶解する薬品で表面のサビを溶かし出して、薄い鍍金層を表出させた。このあと安定化処理として脱塩処理や防錆処理の２工程を行ない、さらに強化処理として２種類のアクリル樹脂を用いた。

修復作業にあたり、検討会を重ね、折損した遺物は部材を接合し、欠失部分については想定復原が可能な部分について必要最低限の樹脂補填を行い、補填部分はアクリル絵の具で補彩を行った。特に鞍金具については部材が分割され、全体像が把握しにくいことから台座を作成して全体像の復元をはかった。

写真７　土器復原作業

写真８　土器実測作業

4　平成19年度　資料整理

保存処理が終了した馬具、銀象嵌円頭大刀柄頭等の金属製品の実測作業を中心に報告書刊行に向けて資料整理を実施した。特に金属製品にかんしては鈴木一有氏および大谷宏治氏に実測指導を依頼した。遺物写真は６×７判（モノクロ・カラーリバーサル）を基本とし、集合写真や鞍金具などは４×５判カメラを用いた。

平成16年度におこなった資料整理の実施分と併せて遺構・遺物図面の版下、トレース作業、原稿執筆作業をすすめた。報告書刊行前には県内外の研究者による原分古墳の総合的な検討会を実施し、史料価値の向上に努めた。

原分古墳の報告書刊行にあたり、平成18年度に調査を行った的場遺跡の調査報告を含め、報告書は２分冊とした。こうして掲載された遺物は番号順に収納し、図面資料や写真資料は必要に応じて検索できるように台帳を作成した。

写真９　金属製品実測作業

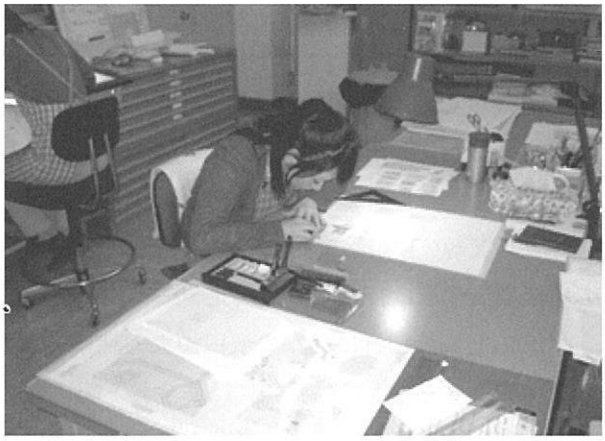
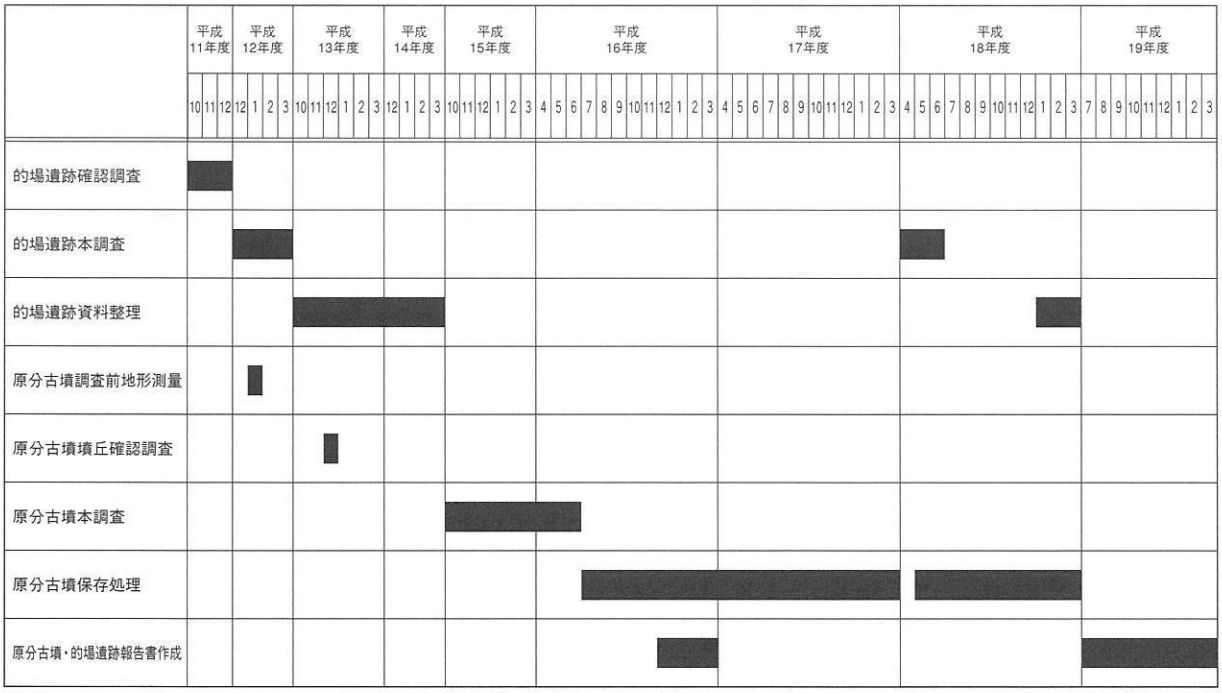


写真10　トレース作業

表１　調査工程表



第４節　地理的環境

原分古墳が立地する長泉町は境川をもって東に三島市、西に沼津市、北に裾野市、南に竹原を境に清水町に接し、駿東郡の南部に属する。町全体の形は、西北から南東にかけて細長い紡錘形をなしており、北半の大部分は愛鷹山麓で、南側には黄瀬川扇状地が広がる。

富士山の南に位置する愛鷹山は、富士火山帯に属し、その発生は古く第４紀洪積世前半代の火山活動によるものとされる。南東麓山頂から派生した尾根は、背稜部が平坦部に移行して末端部に近づくと平坦な丘陵を形成している。このあたりでは愛鷹ロームが最も堆積する地域であり、丘陵上には旧石器時代から古墳時代前期の集落が分布する。

黄瀬川扇状地は愛鷹山と箱根山麓に挟まれ、南の静浦山地に囲まれた地域である。14,000年前に新期富士火山の噴火による玄武岩により扇状地の原形が形成されたものとされ、裾野市平松付近を扇頂とし、清水町柿田を末端とする広大な扇状地で北半部は溶岩性、南半部は砂礫性の扇状地となっている。この黄瀬川扇状地の表層を構成しているのは、富士火山起源の御殿場泥流堆積物であり、その表層が的場遺跡の遺構確認面となっている。近年の調査で黄瀬川の河岸段丘上に立地する長泉町大平遺跡において竪穴住居跡が１軒検出され、弥生時代前期末の土器が出土している。現在までのところ大平遺跡が扇状地上の最古の遺跡とされる。

この扇状地の東縁には大場川が南流しており、扇状地の東方には末端部より湧水が溢流し、河川化した御殿川、源平川がある。扇状地中央部には駿河国と伊豆国の国境とされる境川が貫流して、島状に並列する微高地を形成し、この上に弥生時代中期から平安時代の集落が数多く展開している。

箱根山は古期外輪山、新期外輪山、中央火口丘群からなる三重式火山である。40万年前に湯河原付近から噴火し、古期外輪山が出現したとされる。５万年前には箱根火山の盾状火山の形成に伴う多量の軽石の噴出により山体の東部、南東部に堆積した。さらに古富士火山の噴火による多量の火山灰は偏西風

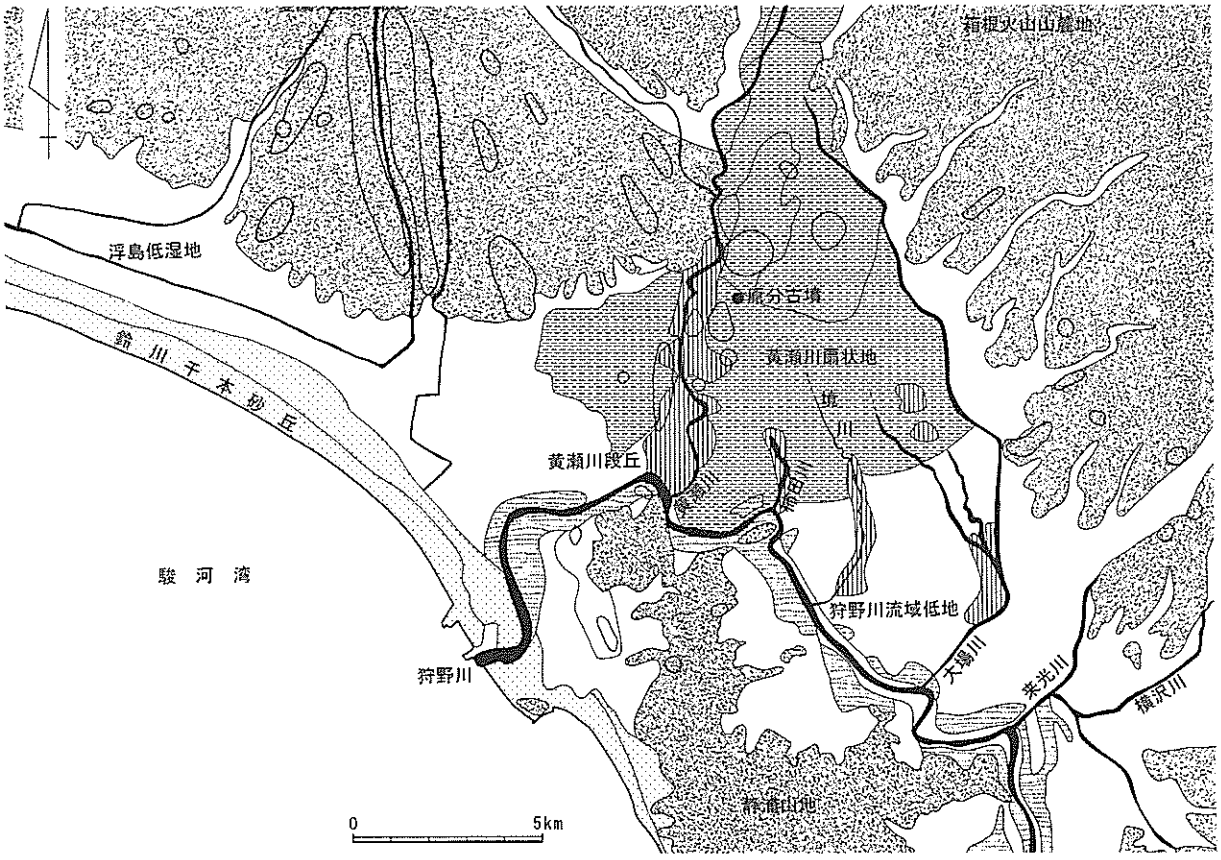


図５　周辺地質図

写真11　原分古墳周辺の黄瀬川

にのり、広範囲にわたり厚いローム層を堆積させた。このような活動により形成された箱根山西麓斜面は谷が浅く、あまり侵食されていないために緩斜面が比較的多く残っており、旧石器時代、縄文時代の遺跡が数多く分布している。また、古墳群や横穴墓群も認められ、田方平野を見渡す丘陵先端部や南側斜面に分布する。

黄瀬川は富士山南東麓の標高520m付近に流れを発し、上流では箱根山麓に沿って南流するが、次第に西寄りに流れを変え、下流では愛鷹山麓に沿って流れている。狩野川に合流するまでおよそ30ｋｍの河川であり、河床に玄武岩が露出し、滝や渓谷などの名勝が多く分布する。有名な鮎壺の滝以南には明瞭な河岸段丘が発達している。

原分古墳はその黄瀬川扇状地の段丘縁辺部に立地し、標高34mから36mの範囲に単独で立地している。現在は三島駅から西へ1.5ｋｍほどのJR御殿場線とJR新幹線が交差する地点である。近年までこの周辺は畑地及び宅地で、急速に宅地化がすすんでいる。

当古墳西側には黄瀬川の段丘面が発達しており、３ｍほどの比高差がみられる。この低位の段丘面にも古墳群や集落が展開し、この段丘縁辺部の土狩古墳群は「土狩五百塚」とも呼ばれ、群集墳地帯となっている。

古墳東側に展開する的場遺跡は古墳が立地する面より緩やかに低く傾斜しており、７世紀から９世紀にかけての集落である。奈良、平安時代の集落は原分古墳より南側に多く分布しており、古墳と隔絶している。このような傾向は同じ黄瀬川扇状地状に位置する下土狩西１号墳や土狩長塚古墳などもこの扇央に近い安定した場に立地しており、見晴らしのよい場を選定し、周辺に同時期の集落は認められない。

参考文献

井鍋誉之　2003　『的場遺跡』　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

佐野暢彦・水上綾子　2001　『大平遺跡Ⅱ』　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

長泉郷土誌編集委員会（編）　1965　『長泉郷土誌』　長泉町教育委員会

沼津市史編纂委員会・沼津市教育委員会（編）　1999　『沼津市史』資料扁　自然環境　沼津市

沼津市史編纂委員会・沼津市教育委員会（編）　2002　『沼津市史』資料編　考古　沼津市

第５節　歴史的環境

駿河東部、伊豆を含む静岡県東部地域は河川や丘陵により、西から富士山麓、愛鷹山麓、黄瀬川、狩野川流域、箱根山麓に地域区分が可能である。その中で黄瀬川扇状地上に古墳群が分布している。特に黄瀬川の開析作用により生じた両岸の段丘縁辺部に分布する古墳群は「土狩五百塚」「石田九十九塚」とかつて呼ばれていたように駿河東部地域有数の横穴式石室を主体とする群集墳地帯である。それ以前の古墳時代前期、中期の古墳は確認されておらず、この地域では長泉町上ノ段古墳群が横穴式石室墳の築造の嚆矢であり、６世紀末から７世紀初頭である。

駿河東部、伊豆の横穴式石室の特徴は、有袖式石室はほとんどみられず、通有の無袖式と開口部に段をもつ無袖式石室、開口部に立柱石を有する無袖式石室が存在するものの基本的には無袖式石室のみの単一系譜である。その中で本地域においては通有の無袖式石室と段を有する無袖式石室が認められ、これらの石室内には石棺や組合式箱形石棺を有している。

石室平面形態として胴張りは弱く、長方形を呈している。そのため玄室空間は直方体となる。現在までのところ開口部に段を有する石室は６世紀後半の富士市中原４号墳が最初に採用されている。副葬品の特徴は鍛冶具、Ｕ字鍬先、鉄針など東海地域では希少な遺物が出土しており、この石室の被葬者の性格について示唆的である。

この開口部に段をもつ石室は駿河西部では少なく、三河、遠江の竪穴系横口式石室との間には時間的断絶がある。これらの直接的な影響はうすく、この石室は富士山麓から黄瀬川、狩野川流域まで広がりをみせるが、いまだ系譜関係は明らかになっていない。

駿河中部では賤機山古墳や駿河丸山古墳など両袖式石室に伊豆凝灰岩製の石棺が採用され、伊豆の横穴墓にも刳抜式の石棺を採用しており、石棺を介した情報移入や首長間交流を探る上で興味深い。さらに静岡県内での石棺の分布状況は13例のうち７例が東駿河、伊豆で占めており、下土狩地域では５例と

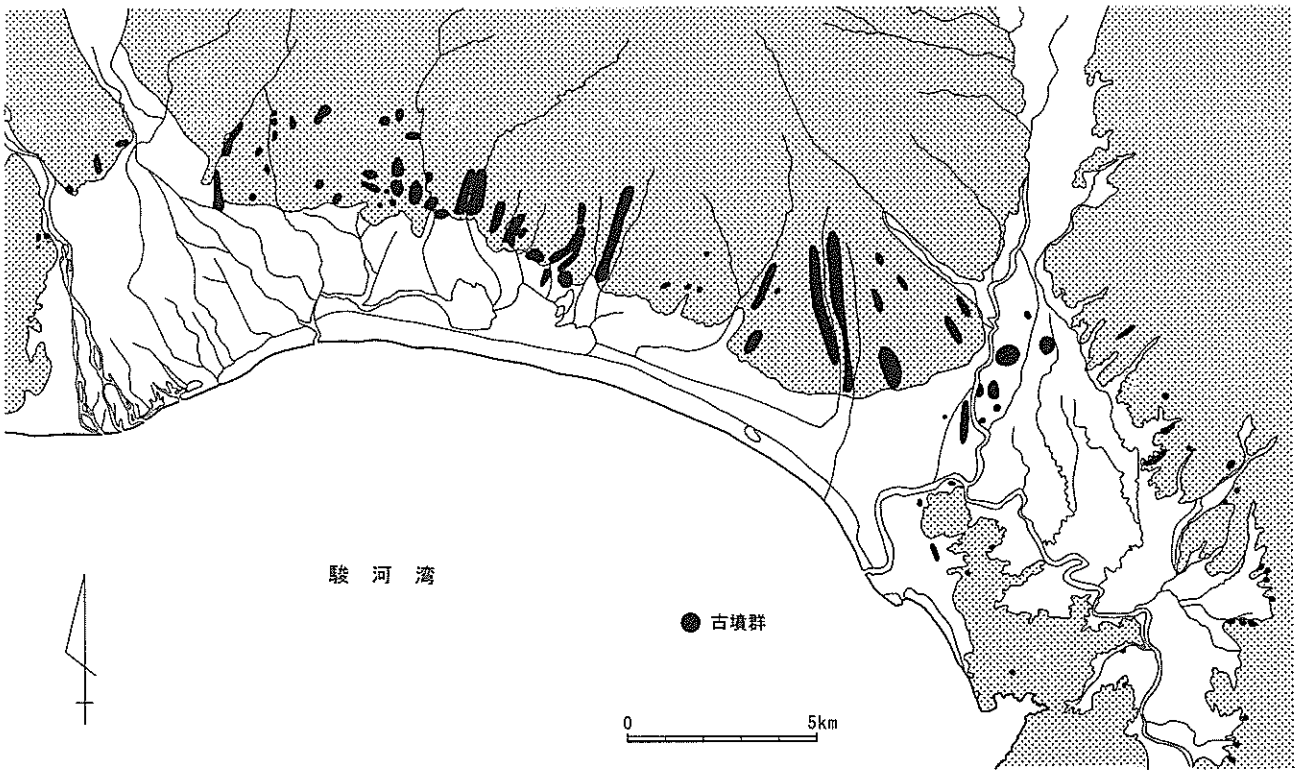


図６　駿河東部の古墳分布

集中的な分布をみせている。

7世紀中葉には下土狩西1号墳など大型の横穴式石室内に凝灰岩製の石棺を採用するようになり、この長泉町下土狩地域と沼津市側の宮原、東本郷古墳群、大仁町平石古墳など東駿河、伊豆において大きく3つの地域に石棺の分布が認められる。

また、愛鷹山麓東部から箱根山麓にかけて石室内に組合式箱形石棺をもつ地域であり、県内の組合式箱形石棺をもつ横穴式石室の7割が東駿河、伊豆に集中する。長側石の継ぎ方はそのほとんどが重ね継ぎで、板状節理の安山岩を使用する。

この組合式箱形石棺の初現は明確ではないが、愛鷹山麓に存在する沼津市長塚古墳に組合式箱形石棺が直葬された可能性が指摘され、7世紀後半まで継続する。無袖式石室や開口部に立柱石をもつ無袖式石室に多く採用され、段を有する石室には少ない傾向がある。

古墳の築造は8世紀以降にまで及ぶ。黄瀬川下流域の清水町伏見古墳群はすべて地下式構造の段を有する石室で構成されており、手捏土器、銭貨等が副葬される。一方、田方平野南部の静浦山地の横穴墓には石櫃を有し、愛鷹山麓には上円下方墳で石櫃を直葬した沼津市清水柳北1号墳などが存在し、県内において8世紀から火葬が採用されている。また、愛鷹山麓の池田B遺跡、箱根山麓の田頭山遺跡の方形周溝状遺構などが存在しており、石室墳や火葬墳墓などと異なる性格の墳墓がみられ、東関東との関わりが指摘できる。さらに富士川流域では伝統的に小石室を数多く築造している富士川町妙見古墳群なども存在し、火葬が行われた痕跡は明確ではないが、8世紀に入ってもなお地域色が表出している。

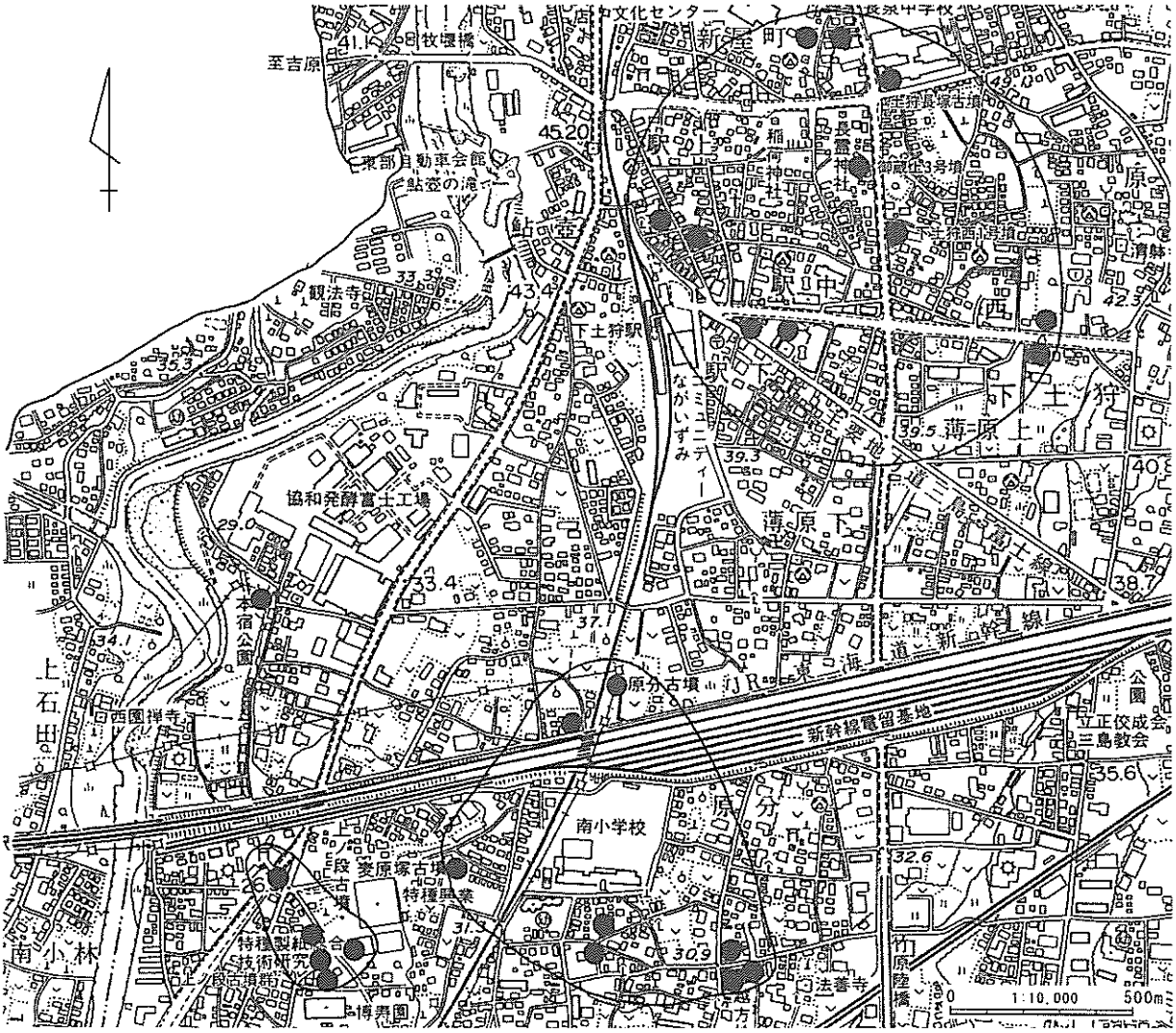


図7　長泉町域の古墳分布

第２章　調査成果

第１節　　確認調査

１　調査前の状況

原分古墳は駿東郡長泉町下土狩に所在する古墳である。JR御殿場線とJR東海道新幹線が交差する地点にあり、黄瀬川右岸の扇状地の標高36.5mに立地する。古墳の南側には本宿上ノ段古墳や長泉町指定文化財である麦原塚古墳などが点在する。

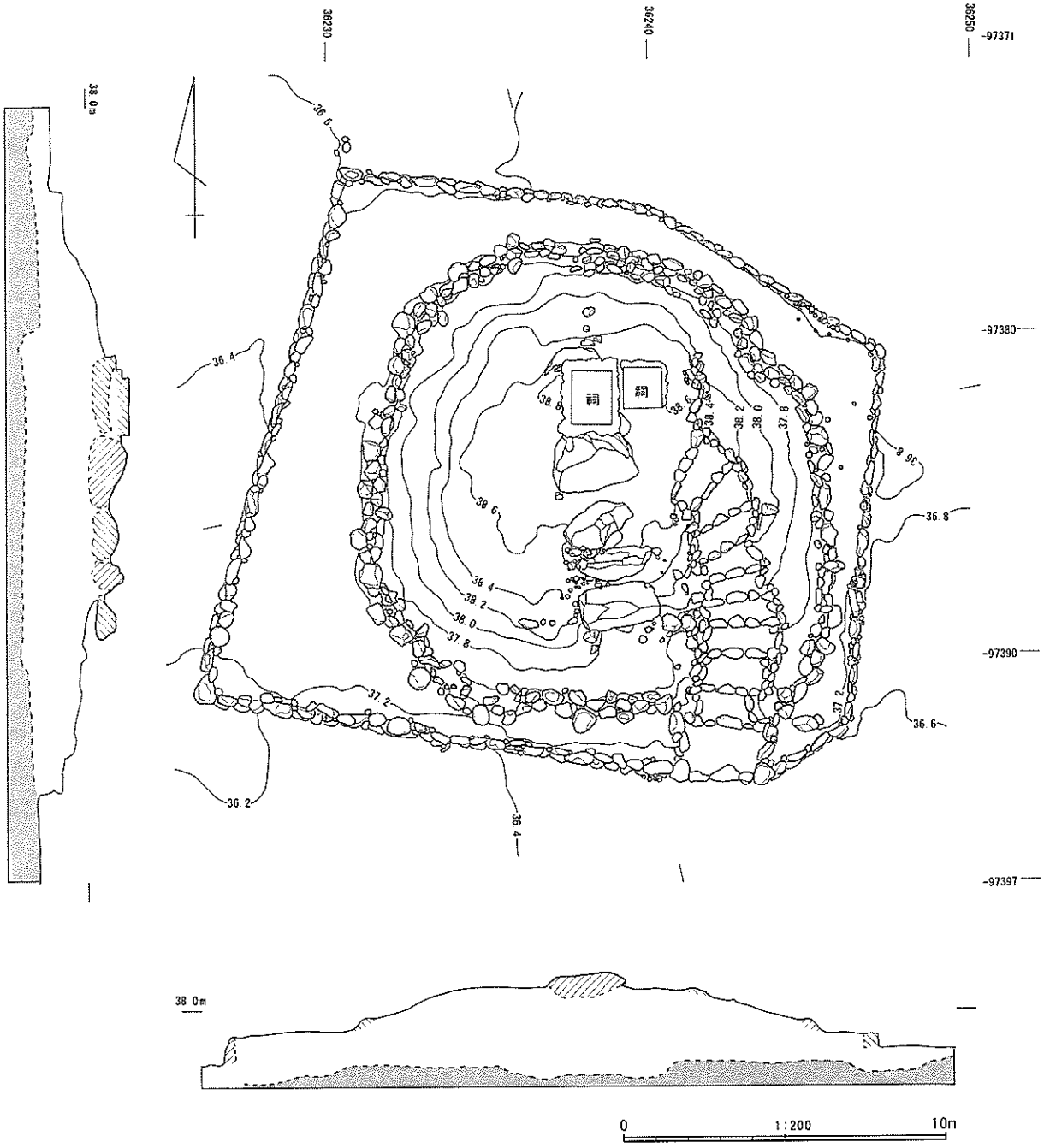


図８　調査前状況

当古墳は別名『火ノ雨塚』あるいは『山の神古墳』とも呼ばれ、原分区の住民により守られてきた。長泉町周辺では「富士山の噴火の時に降ってくる火の雨を避けるために古墳の石室に非難した」という伝承も残っており、この周辺の点々とあった古墳は『火ノ雨塚』と呼ばれ、小字名なども残っている。また、天井石上には「山神社」が作られていた。地元の土地神として祭られたのは江戸時代で、村絵図にも記されている。近年、地元住民と長泉町教育委員会により、原分古墳の墳丘を保護する目的で整備された姿が調査前の測量図に示されている。

調査前の古墳の現況は、天井石が５石露出し、多角形状に石垣が組まれ、その内側に円弧状に石が貼られていた状況であった。少なくとも天井石以外の石列や石垣はこの整備により構築されたものである。

５石の天井石の全長は8.8mで、奥壁から２石目の天井石の上端が最も高い位置を示し、標高39.5mである。主軸は真北よりやや西に振れている。開口部も完全に流入土により封鎖され、石室内を窺い知ることはできなかった。開口部の天井石下から地表下まではおよそ1.8mであった。この周辺は畑地であり、開口部周辺からは須恵器の甕片が採集されている。

2　確認調査の概要

平成14年12月に１ヶ月の期間で、トレンチ調査を行った。目的は古墳の規模や周溝の有無などを確認することで、現状を破壊することなく基礎的データの収集に努めた。

５石の天井石に合わせ主軸を設定し、十字に入れた。周溝が確認できた東側部分については補助トレンチを１本設定し、合計５本のトレンチ調査を行った。調査終了後は石室、墳丘の崩落を防止するため土嚢による埋め戻し作業を行い、原状回復して確認調査を終了した。

トレンチ１　奥壁側の天井石から北方向にのびるトレンチで、天井石の確認、周溝の有無を目的に設定した。外側の石垣、内側の列石はいずれも、近年の整備による造成と判明した。天井石から頂部にかけて褐色土が厚さ0.2m～0.4mで堆積しており、墳丘流失土と考えられる。その流失土を除去し、天井石の下端したところで、裏込めの小礫が検出された。石垣外側のトレンチは幅1.5mの落ち込みが検出され、周溝と思われる。覆土は粘性・しまりの弱い黒褐色土で、須恵器等の遺物は出土していない。

トレンチ２　墳丘規模・構造を確認するために設定した石室主軸に直交する東側のトレンチである。実際は樹木保護のために、主軸を若干ずらして長さ6.5mのトレンチを設定した。上層部分は近年の造成によるものであり、Ⅰ層は墳丘流出土と思われる。残存している墳丘面は墳端に近く、Ⅱ層は粘性が強い黒褐色土で、比較的平坦であった。また、周溝と考えられる落ち込みを確認し、その規模は幅1.3m、深さ0.18mであった。地山である黄褐色砂礫土上で、須恵器の甕片が１点採集された。

トレンチ３　開口部の構造を確認するために設定したトレンチである。トレンチは両側壁の一部が確認されていたことからこの幅でトレンチを設定した。その結果、前庭側壁は閉塞石まで延びており、石材は主に玄武岩を使用していた。天井石下より閉塞石が検出され、人頭大の石材を小口積みに丁寧に積み上げられており、断面は山形を呈する状況であった。閉塞石の高さは地表面より1.5mであった。

南方に延長した下段のトレンチからは須恵器甕の破片が出土した。少なくとも７世紀以降のものであった。もともと墓前祭等に伴う土器類が近年の造成等により開口部付近に掻き出されたものであろう。

トレンチ４　石室の主軸に直交する西側のトレンチである。５本のトレンチの中で最も墳丘盛土の状況が把握でき、盛土の構築方法として墓坑掘削後に側壁を積み上げながら黒褐色土と暗褐色土等を用いていた。側壁目地に合わせて墳丘盛土を積み上げており、墳丘築成と石室構築の基本的方法が推定できた。

近年の石列より下から外護列石あるいは墳丘内列石と思われる石積みが確認された。墳丘はここから墳端まで比較的平坦なテラス面をもつと推定した。

トレンチ５　トレンチ２で確認された墳端から想定して、南東方向に補助トレンチを設定した。ここ

では浅い周溝の一部を確認したにすぎなかったが、須恵器甕片が出土している。

このように平成14年度に行った確認調査により、①古墳の規模は20m前後の円墳であること、②テラス状の平坦面と傾斜面との境に外護列石あるいは墳丘内列石をもつこと、③横穴式石室は全長約10m、開口部幅約1.9m、高さ1.7m～1.9mであること、④使用される石室石材は黄瀬川で採取される玄武岩を用いていることなどが判明した。

また、これらの結果をふまえて、石室平面形態は駿河東部で一般的にみられる無袖式石室であることが予想された。さらに大型の石室であることから長泉町内の下土狩西１号墳のように凝灰岩で作られた家形石棺が納められている可能性が高いと推測した。

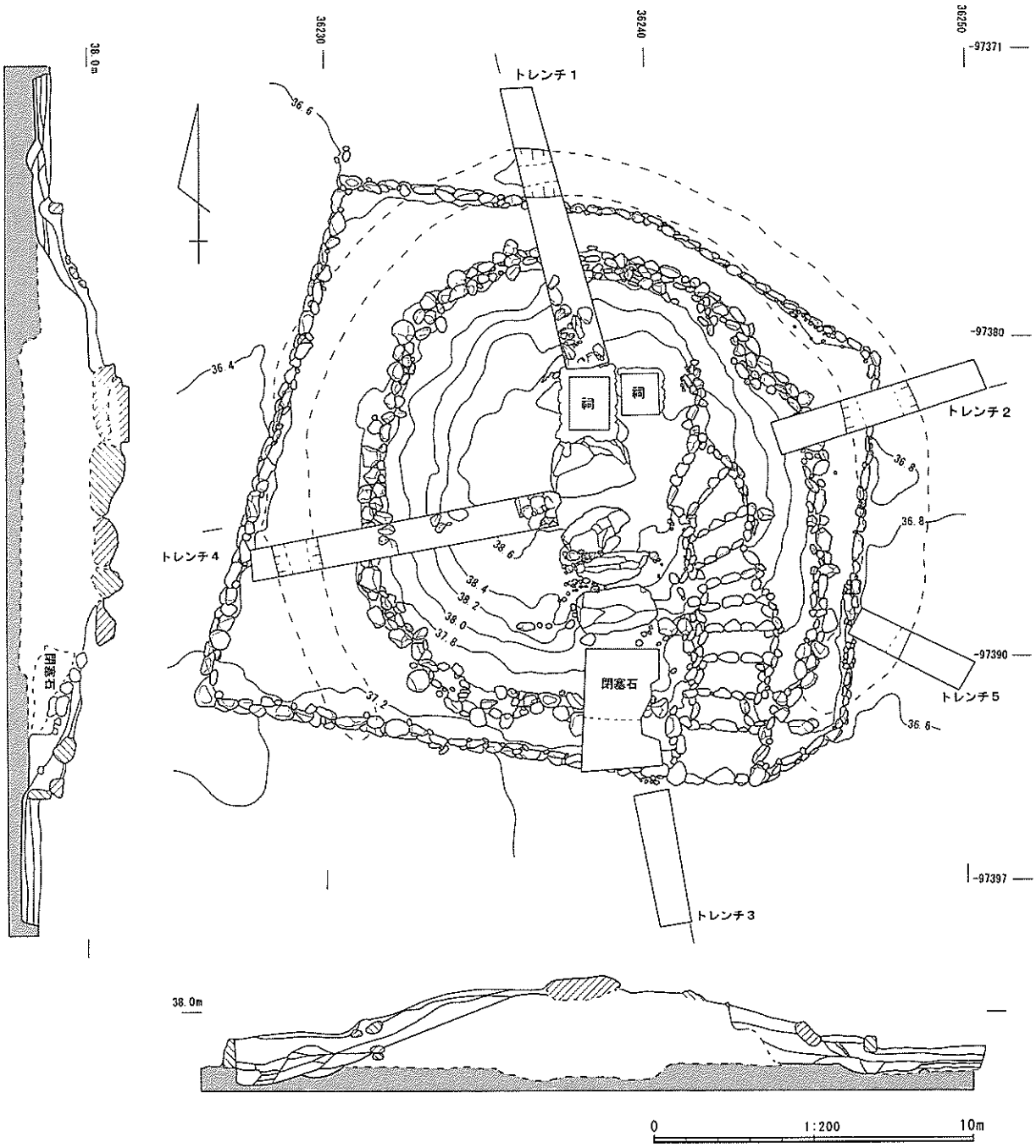


図９　トレンチ配置

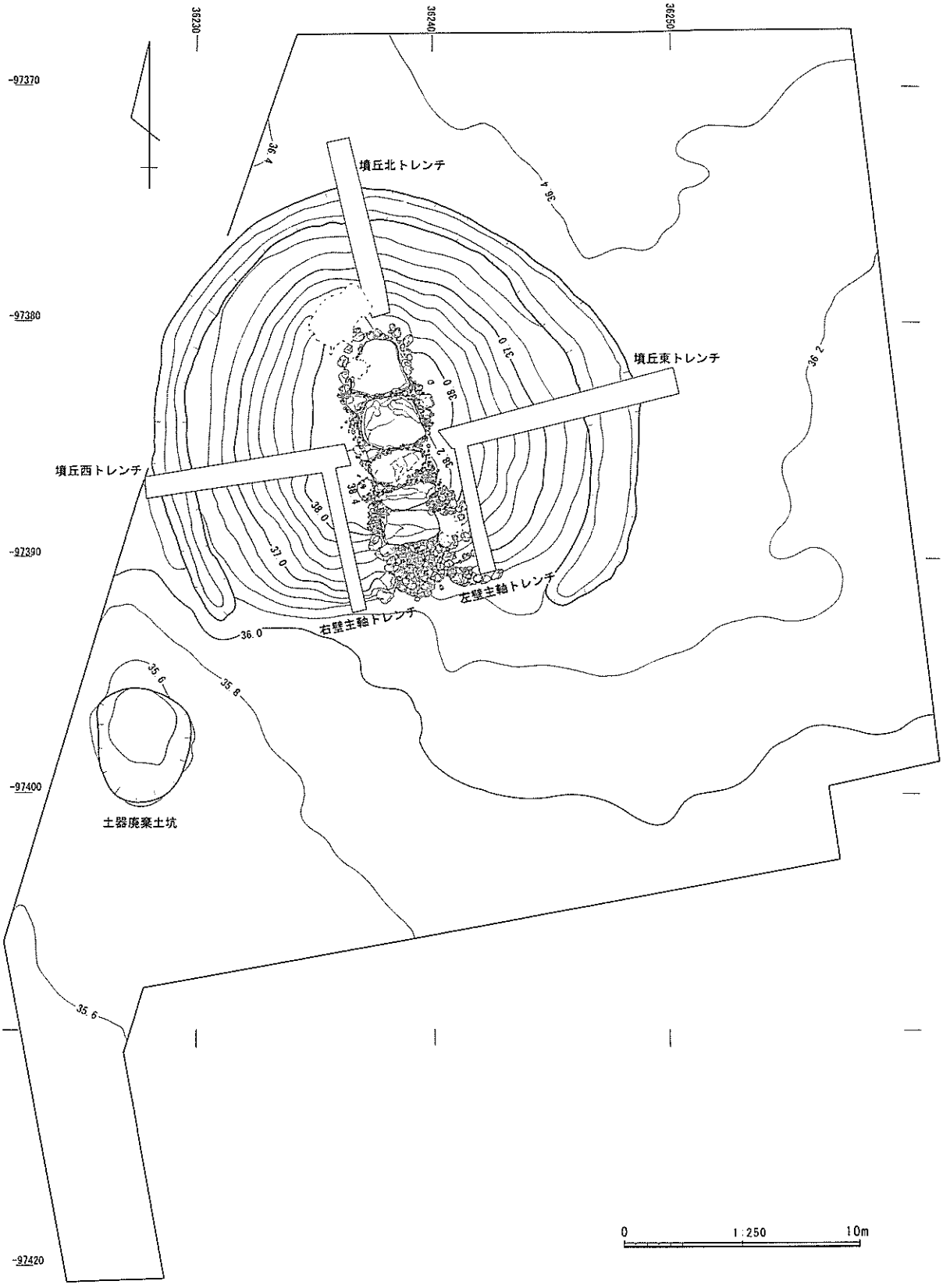

36230
36240
36250
-97370
-97380
-97390
-97400
-97420
墳丘北トレンチ
墳丘東トレンチ
墳丘西トレンチ
左壁主軸トレンチ
右壁主軸トレンチ
土器廃棄土坑
36.4
36.2
38.0
37.0
36.0
35.6
35.8
0
1:250
10m

図10　調査区全体図

第２節　　墳丘の構造

１　調査前の状況

確認調査の結果をふまえ、本調査は平成15年度に実施した。本調査で検出された遺構は古墳１基と土器廃棄土坑（ＳＸ１）１基である。土器廃棄土坑（ＳＸ１）は古墳から南西部の地点で検出され、浅い掘り込みを有する。その中から須恵器の破片が出土し、この土坑は原分古墳に関わることが判明した。

基本層位は的場遺跡（井鍋2003）と同様で、的場Ⅰ層の耕作土から的場Ⅱ層（黒褐色土）上面までは重機で除去した。古墳以外の周辺平坦部は包含層である的場Ⅲ層及び的場Ⅳ層（黒褐色砂礫土）を人力で掘削し、黄褐色砂礫土上面で、遺構を確認した。的場遺跡の調査から、古墳周辺で古墳時代の集落等がある可能性も想定されたが、そのような痕跡はみられなかった。

古墳が立地する地形は南西から東にかけて低く傾斜しており、的場遺跡へと連続する。さらにその東側では１段低い段丘面が存在し、そこに奈良時代の集落が展開している。JR御殿場線の西側では奈良

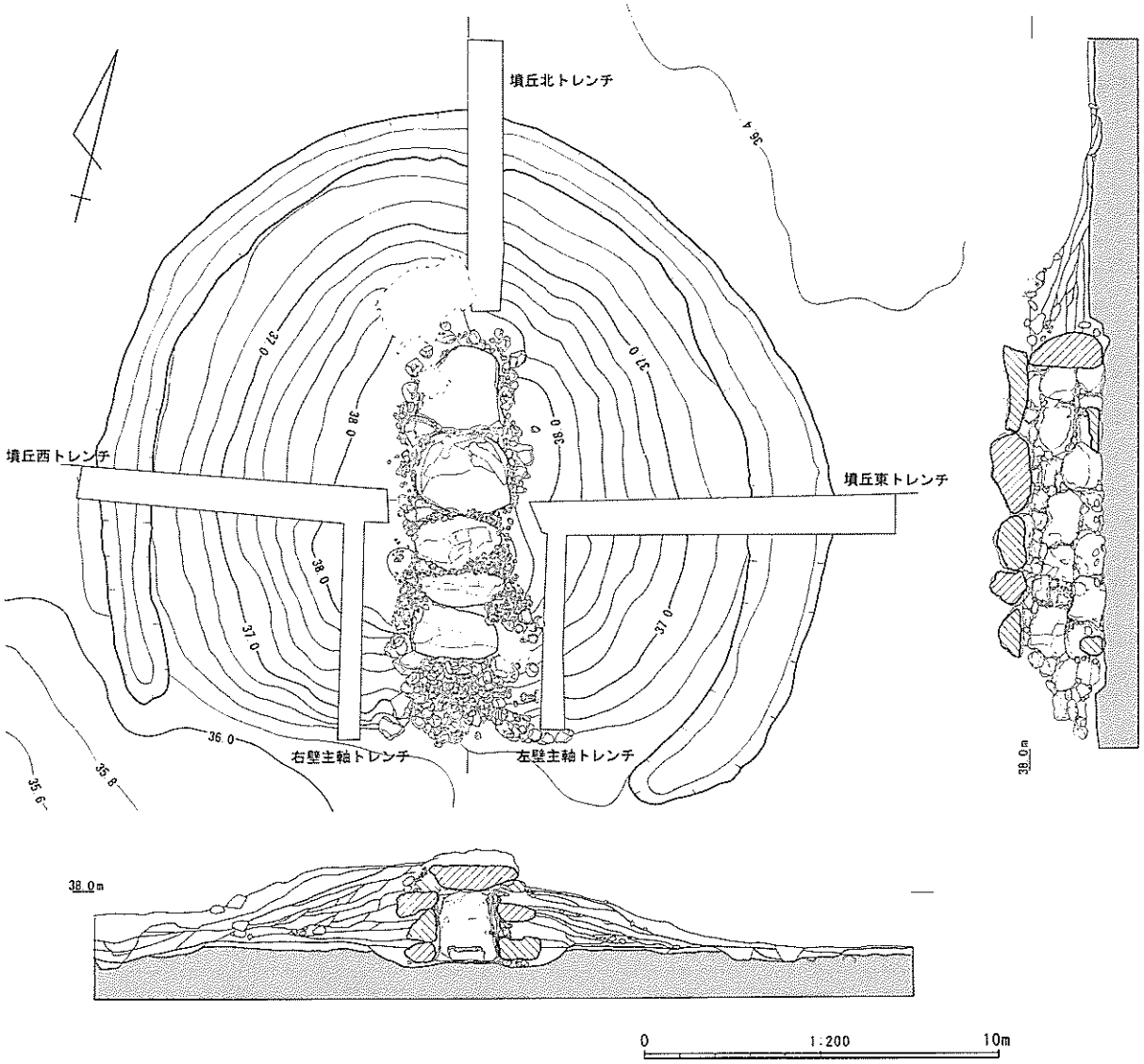


図11　墳丘図

時代の遺構がみつかっている。集落の西側には比高差３ｍ以上の段丘崖がせまっている。

これらのことから、原分古墳はJR御殿場線西側の段丘崖と東側の低い段丘面に挟まれた幅60ｍ～70ｍ程度の高位の段丘面に単独で立地していたことがわかる。現在は周囲に建物や新幹線が敷設され、周辺地形を見渡すことができないが、古墳時代には四方を見渡せる景観であったと推察できる。この段丘に原分古墳のほか、下土狩西１号墳や土狩長塚古墳なども立地していた。

2　墳丘の構造

調査の結果、原分古墳は円墳であることが判明した。石室主軸はＮ－19°－Ｗを示し、南北墳丘径16.7m、東西墳丘径16.9mである。主軸よりやや東西部分が幅広である印象を受ける。墳丘は前庭部の床面から最大1.9mの高さであり、側壁構築段階までの墳丘が残存していた。左壁側から奥壁側にかけての墳端は幅１ｍ前後の平坦部が巡る。残存する墳丘盛土の傾斜は急激に立ち上がることから、本来は裁頭円錐状の墳丘側面観を呈していたと考えられる。

（1）墳丘土層の概要

墳丘土層の確認には北トレンチ（奥壁裏）、東トレンチ（左壁）、西トレンチ（右壁）の３本のトレンチを設定した。すでに確認調査でこの３本のトレンチを設定しており、本調査時はトレンチを拡張し、

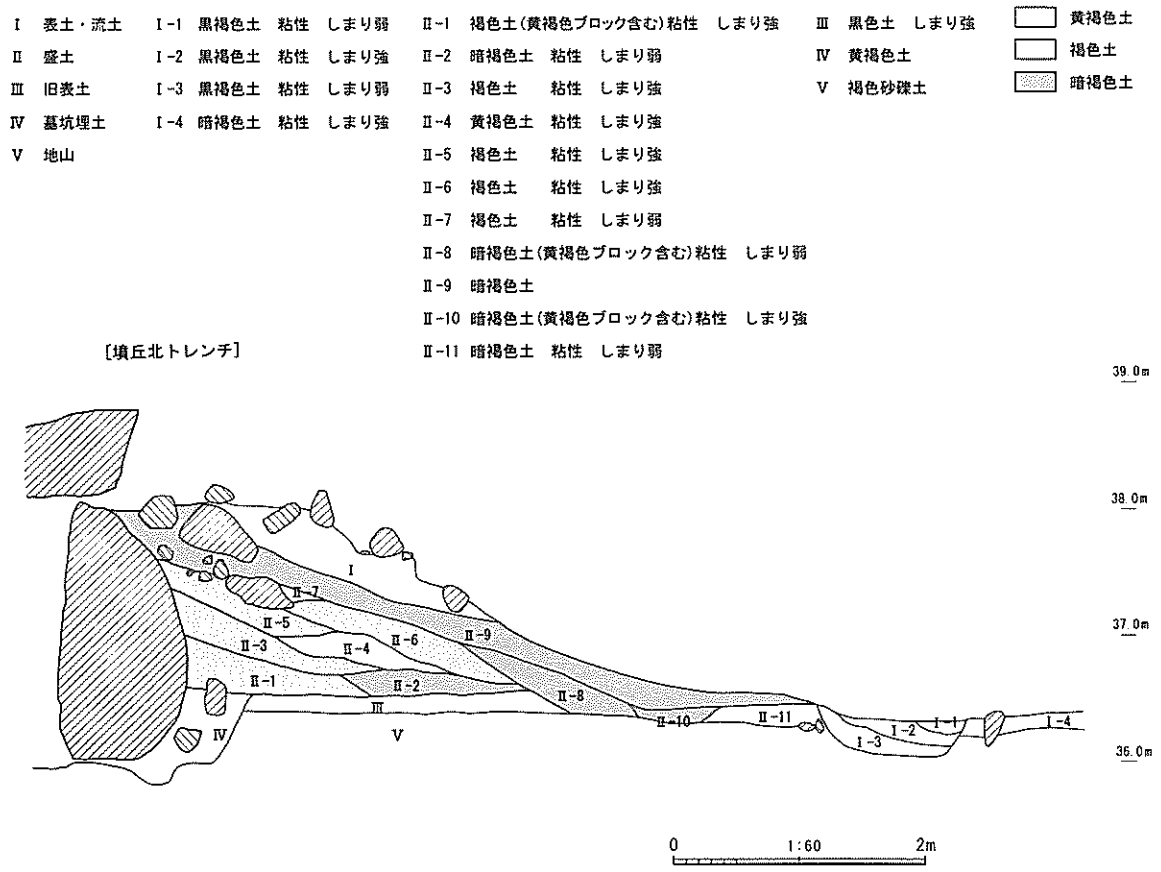


図12　墳丘北トレンチ土層断面

地山まで掘り下げた。この結果、墳丘盛土はを大きく３種に分離することができ、墳丘の形成と石室構築が連動して行われていることが判明した。

なお、層位は、Ⅰ層　表土・流土　Ⅱ層　墳丘盛土　Ⅲ層　旧表土　Ⅳ層　墓坑埋土　Ⅴ層　地山　Ⅵ層　撹乱と大きくわけ、Ⅱ層の墳丘盛土にかんしては下部からⅡ－１層と付けた。今回、石室構築が３工程に分離できることから、盛土工程を側壁構築１段階（基底石設置段階）、側壁構築２段階、側壁構築３段階と呼称する。さらに、墳丘内には大型石材が確認できたことから、これらの石材を指標石と称して記述する。

（２）墳丘北トレンチ

奥壁裏の石室主軸に平行するトレンチである（図12）。墓坑は旧表土より掘削されており、墓坑内の埋土は小礫を含む黒褐色土であった。墓坑の深さは周溝の溝底より深い。

Ⅲ層（旧表土）の厚さは10cmで、墓坑端から2.4mの範囲まで認められた。Ⅲ層（旧表土）が途切れていることに注目できる。この部分にはⅡ－８層及びⅡ－９層が堆積していた。この部分は墳丘内埋没

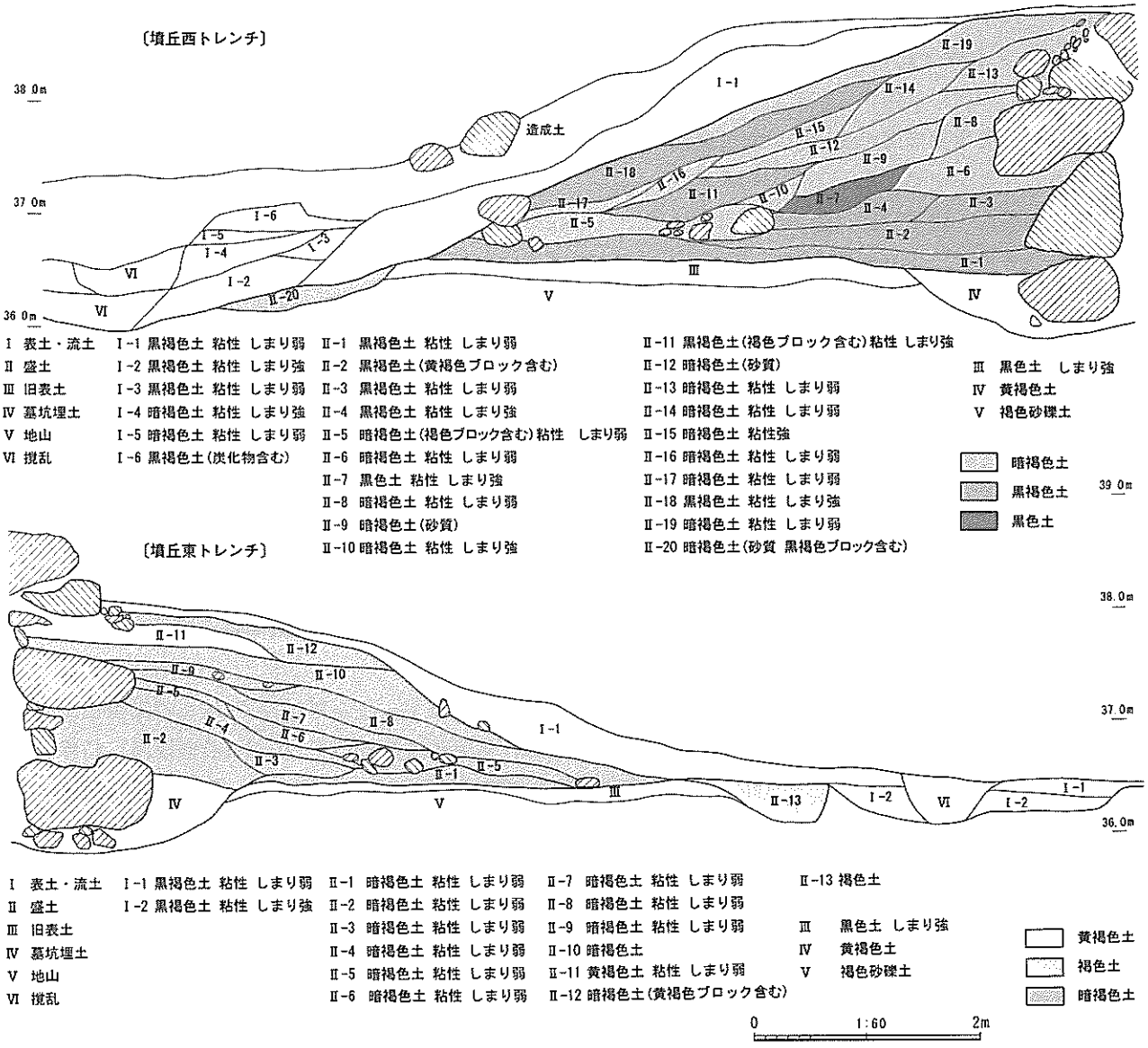


図13　墳丘東西トレンチ土層断面

溝の可能性がある。ただし、墳丘解体時に周囲を調査したが、平面的には溝状の落ち込みが確認できなかった。なお、後述する側壁側の盛土工程も同様な造作が確認されていることから墳丘内に埋没した溝があった可能性も指摘しておく。

Ⅱ－１層とⅡ－２層は厚さ20cmで、ほぼ水平に盛られており、旧表土が途切れる範囲まで盛土されていた。ここまでが側壁構築第１段階（基底石設置段階）と併行した工程と考えられる。

Ⅱ－３層からⅡ－６層はややしまりの強い褐色系の土を斜めに盛っている。細かな分層が可能であるが、しまりの強い土を用い、人頭大の石材がみられない。Ⅱ－９層は奥壁から墳端まで認められ、ややしまりの弱い土が盛土されている。

Ⅱ－３層からⅡ－５層までが側壁構築２段階と併行する墳丘盛土と考えられ、古墳構築に伴う小規模な墳丘状を呈している。Ⅱ－７層、Ⅱ－９層の奥壁側には大型の石材が混入しており、裏込めとしての造作がみられる。これらの盛土は側壁構築２段階に伴う盛土と比べると明らかにしまりが弱く、側壁構築３段階以降の盛土であろう。

（３）墳丘東西トレンチ

図13上段が右壁側の墳丘断面図である。左壁と同様、旧表土上から墓坑を掘削している。旧表土の厚さは10cmと右壁と比較するとやや薄い。旧表土面は、墓坑端から4.2mの範囲まで認められた。そこから周溝までの間には溝状に掘削したと思われる部分があり、Ⅱ－13層が埋められていた。奥壁裏側、両側壁とも周溝手前で溝が巡っていた可能性が高く、墓坑掘削の初期の段階で、盛土範囲を規定する埋没溝があったと想定できる。

側壁構築第１段階に伴う盛土内には墓坑端から1.5mの位置で、指標となる小型の石材が認められた。この石材までⅡ－１層が厚さ10cmほど平坦に盛られていた。その上層のⅡ（盛土）－２層からⅡ（盛土）－５層は側壁構築２段階に伴う盛土である。墳端から0.75mの位置で礫の集積がみられ、これも指標としての性格を有していたと考えられる。両側壁とも石室主軸から4.5mの位置で、礫の配置がみられた。盛土はこの段階から斜位に施されていた。しまりの強い暗褐色系の土を用い、右壁と比較すると厚みは薄い。

側壁構築３段階に伴う盛土はⅡ（盛土）－６層からⅡ（盛土）－９層である。側壁２段階の盛土と比べると厚く、しまりの弱い暗褐色土を用い、指標石まで覆っている。

図13下段が石室の中央にトレンチを入れた左壁側の墳丘断面図である。墳丘の残存状態は良好で、Ⅲ層（旧表土）上から高さ２mを測る。墓坑は厚さ20cmの旧表土上から掘削されている。墓坑端から５mの位置では浅い掘り込みを有し、Ⅱ（盛土）－20層が埋められている。墓坑掘削時に埋没溝を掘削しており、墳丘を形作る指標としての性格が考えられる。

Ⅳ層（墓坑埋土）はやや砂礫を含んだ黒褐色土である。Ⅱ（盛土）－１層は厚さ20cmの黒褐色土を用い、ほぼ水平に盛土し、基底石を覆っていることから、側壁構築第1段階（基底石設置段階）に伴うと考えられる。また、この段階の盛土範囲は前庭側壁と側壁の境までを示しており、楕円形を呈すると思われる。

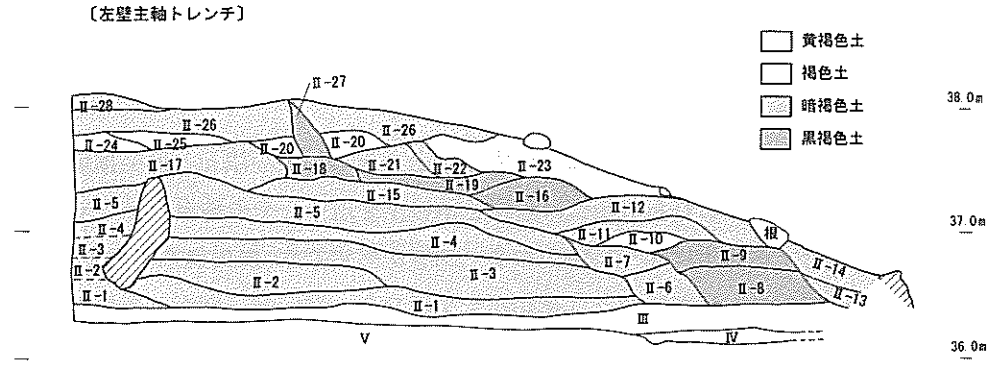
Ⅱ－２層からⅡ－５層は側壁構築２段階時に伴う盛土と考えられる。墓坑端から２mの位置で、やや大型の石材を置いており、この石材は墳丘構築に伴う指標であったと考えられる。指標石と側壁間は斜位に盛土を施している。黒褐色系の土を用い、丁寧に盛られている。さらに3.6mの位置でも人頭大の石材を設置している。この部分は２段にわたり積んでおり、この石材は墳丘上に露出していたと考えられる。列石とは判断できないが、外護列石と同様の性格を有していたと考えられる。

Ⅱ－６層からⅡ－11層は側壁構築３段階に伴うもので、盛土は細かく分層が可能で、丁寧に盛られて

いた。さらに上面にいくに従い、しまりの弱い暗褐色系の土を用いていた。

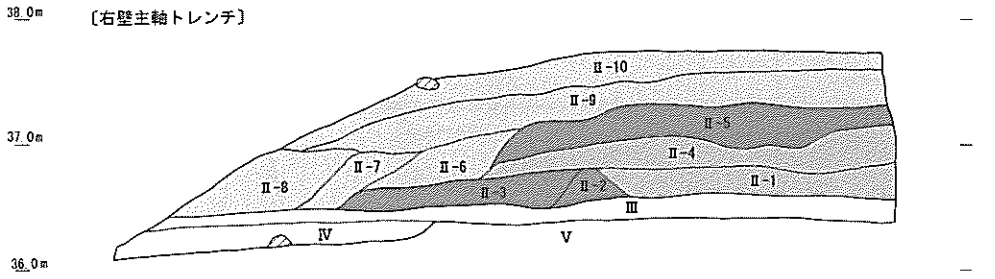
東西方向の盛土状況　東西方向では側壁構築に伴い、墳丘規模を大きくしながら盛土を行っていることが確認できた。側壁構築１段階に伴う盛土はほぼ水平に盛られている。周溝より内側では溝状遺構が両側壁、奥壁裏側で確認されたことから、盛土範囲を規定する機能をもっていた可能性が高い。

側壁構築２段階時に伴う盛土は墳丘状に土を盛っており、石室主軸から4.5mの位置で、指標石の存在を明らかにした。盛土の特徴としてしまりの強い暗褐色系、褐色系の土を用いて、丁寧に積んでいる様子が窺えた。側壁構築３段階時に伴う盛土はやや厚みのある暗褐色系、褐色系の土を用いていた。砂礫の混入度合いも低く、しまりの弱い土を用いているのが特徴であった。



Ⅰ　表土・流土
Ⅱ　盛土
Ⅲ　旧表土
Ⅳ　墓坑埋土
Ⅴ　地山

Ⅱ-1　暗褐色土 粘性 しまり弱
Ⅱ-2　暗褐色土 粘性 しまり弱
Ⅱ-3　暗褐色土 粘性 しまり弱
Ⅱ-4　暗褐色土 粘性 しまり弱
Ⅱ-5　暗褐色土 粘性 しまり弱
Ⅱ-6　暗褐色土(褐色ブロック含む)
Ⅱ-7　暗褐色土 粘性 しまり強
Ⅱ-8　黒褐色土(砂質 黄褐色ブロック含む)
Ⅱ-9　黒褐色土 粘性
Ⅱ-10 褐色土(砂質)
Ⅱ-11 暗褐色土(砂質)
Ⅱ-12 暗褐色土(砂質)
Ⅱ-13 暗褐色土(砂質) 粘性 しまり弱
Ⅱ-14 暗褐色土(砂質)
Ⅱ-15 暗褐色土(砂質 褐色ブロック含む)
Ⅱ-16 黒褐色土(褐色ブロック含む) 粘性 しまり強
Ⅱ-17 暗褐色土
Ⅱ-18 黒褐色土
Ⅱ-19 黒褐色土 粘性 しまり強
Ⅱ-20 褐色土
Ⅱ-21 暗褐色土 粘性 しまり強
Ⅱ-22 暗褐色土(砂質)
Ⅱ-23 褐色砂質土 粘性 しまり弱
Ⅱ-24 黄褐色土 粘性 しまり弱
Ⅱ-25 黄褐色土 粘性 しまり弱
Ⅱ-26 暗褐色土(褐色ブロック含む)
Ⅱ-27 黒褐色土
Ⅱ-28 黒褐色土
Ⅲ　黒色土 粘性 しまり強
Ⅳ　黄褐色土
Ⅴ　褐色砂礫土



Ⅰ　表土・流土
Ⅱ　盛土
Ⅲ　旧表土
Ⅳ　墓坑埋土
Ⅴ　地山

Ⅱ-1　黒褐色土(黄褐色ブロック含む)
Ⅱ-2　黒色土(黄褐色ブロック含む) 粘性 しまり強
Ⅱ-3　黒色土 粘性 しまり強
Ⅱ-4　黒褐色土 粘性 しまり強
Ⅱ-5　黒色土 粘性 しまり強
Ⅱ-6　暗褐色土(砂質 黄褐色ブロック含む) 粘性 しまり弱
Ⅱ-7　暗褐色土(褐色ブロック含む) 粘性 しまり弱
Ⅱ-8　暗褐色土 粘性 しまり弱
Ⅱ-9　暗褐色土(砂質)
Ⅱ-10　暗褐色土(砂質)
Ⅲ　黒色土 粘性 しまり強
Ⅳ　黄褐色土
Ⅴ　褐色砂礫土

暗褐色土
黒褐色土
黒色土

0　1:60　2m

図14　側壁主軸トレンチ土層断面

（4）側壁主軸トレンチ

左壁主軸トレンチ（図14）　左壁側で石室中央から開口部に向かって設定した長さ6.5mのトレンチである（図14上段）。このトレンチは側壁と前庭側壁との関係性を捉えるために墓坑端より外側に設けた。残存する盛土からⅤ層（地山）まで掘削した。

旧表土は前庭側壁まで認められ、前庭側壁に向かうにしたがい厚みを帯びていた。側壁構築第１段階基底石設置段階に伴う工程ではⅡ－１層が厚さ10cm程度で側壁端まで水平に盛られていた。

Ⅱ－２層からⅡ－５層までは側壁構築２段階時に伴う墳丘盛土で、小墳丘状を呈している。暗褐色系の土を用い、しまりの強い土を多用していた。

開口部から前庭側壁までのⅡ－６層・Ⅱ－７層からⅡ－８層・Ⅱ－９層部分は側壁構築に伴う墳丘に貼り付けるように盛土がなされ、墳丘規模を大きくしている様子がうかがえた。これらの層には褐色や黄褐色ブロックを含んでいる。

Ⅱ－10層からⅡ－12層は側壁構築２段階に併行する盛土でみられた小墳丘と前庭側壁構築時に盛った部分を一体化する盛土である。これらの層には暗褐色系の土を用い、やや砂質を呈していた。

側壁構築３段階に併行する盛土はⅡ－15層からⅡ－28層が想定でき、黒褐色系の土を主に用いていた。やや細かな分層が可能であり、東西断面とは様相がやや異なり、開口部に向かって細かく丁寧に積み上げている様子がうかがえた。

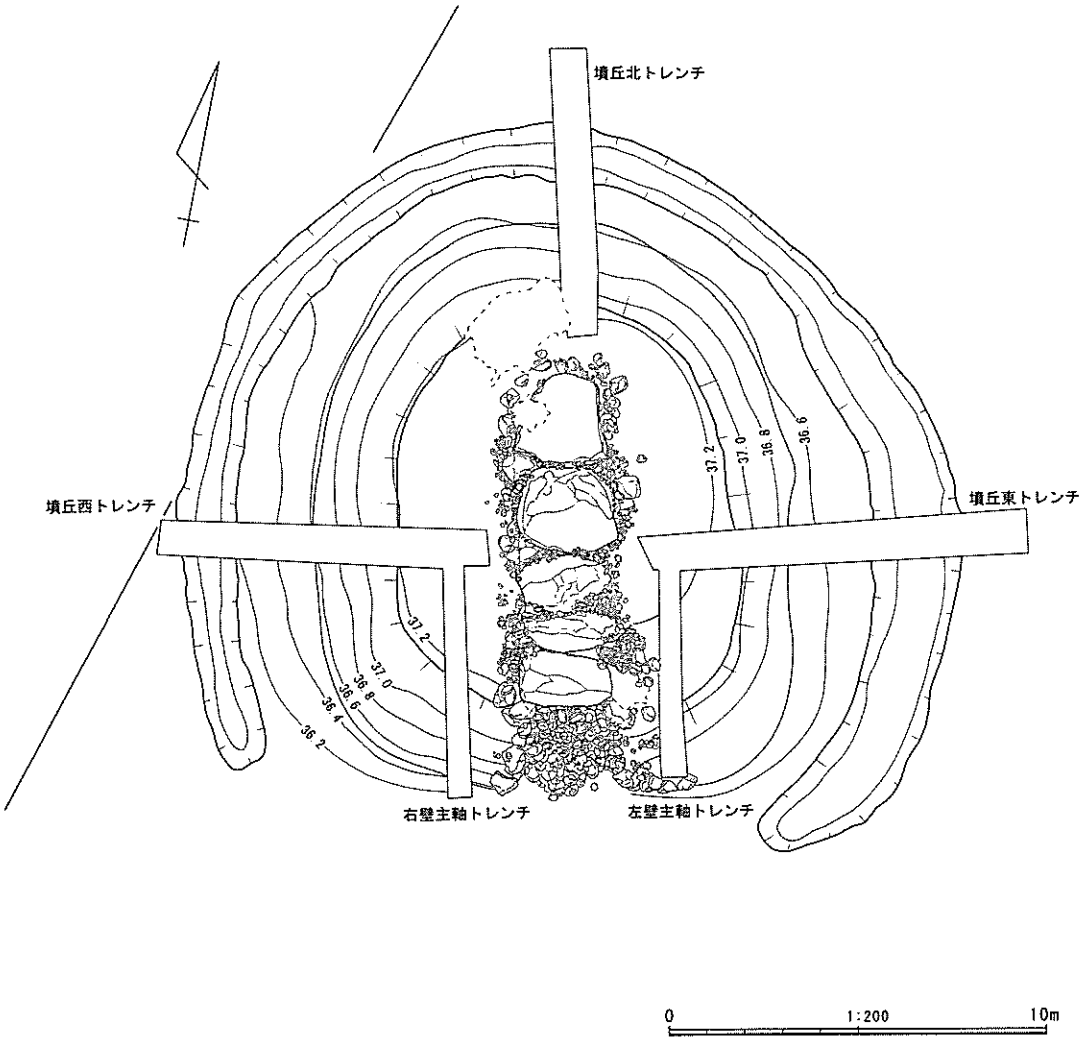


図15　側壁構築２段階時の墳丘

右壁主軸トレンチ（図14）　左壁主軸トレンチと同様に、右壁側に設定したトレンチである（図14下段）。右壁延長部分には開口部に列石は認められなかったが、前庭側壁と側壁の関連性を捉えることを目的としてトレンチを設定した。トレンチの掘削は側壁構築３段階に併行する盛土の途中から地山まで掘削した。Ⅲ層（旧表土）は墳端まで認められ、開口部に向かって薄くなっていた。

側壁構築1段階に併行する盛土はⅡ（盛土）－１層からⅡ（盛土）－３層が想定できる。水平に厚さ20cmの黒褐色、黒色系の土が側壁まで認められた。側壁構築２段階に併行する盛土はⅡ（盛土）－４層からⅡ（盛土）－６層が相当し、小規模な墳丘を呈する。その後、暗褐色系のしまりの弱いⅡ－７層・Ⅱ－８層を貼り付け、前庭側壁を構築していると思われる。

側壁２段階時において、さらに墳丘盛土の工程を２段階に分離することが可能である。側壁と前庭側壁の構築に伴う盛土の違いが明瞭である。側壁構築２段階完了後、前庭側壁の構築までに墳丘構築のある程度の停止期間が想定できるが、盛土の境界面からは炭化物、土器片、焼土等の痕跡は確認できなかった。

側壁構築３段階に併行する盛土はⅡ（盛土）－９層、Ⅱ－10層であり、厚さ20cm～30cmほどの暗褐色系の土を用い、前庭側壁を構築した盛土を覆っていた。

前庭側壁に伴う盛土（図32）　前庭側壁に伴う盛土の構築は右壁と左壁ともに基本的な盛土構築方法は同じである。前庭側壁の構築は側壁構築第２段階に伴う小墳丘完成後にはじまり、右壁と左壁で細部の違いが認められた。

左前庭側壁の構築に伴う盛土工程はⅡ－６層・Ⅱ－７層、Ⅱ－８層・Ⅱ－９層、Ⅱ－10層からⅡ－13層の３段階に分けられ、側壁と前庭側壁の境を中心に丁寧な盛土がなされていた。

一方、右前庭側壁構築に伴う盛土工程はⅡ－７層、Ⅱ－８層の２工程で、土層の厚みもあり、比較的単純な工程であった。また、両側壁構築に用いられる盛土はしまりが強い点は共通するが、左壁が暗褐色系の土を用い、右壁では黒色系の土であった。

右壁は左壁と比べると比較的単純で土層の厚みもあり、石室の目地も通っていることから、右壁を基本に左壁及び盛土がなされた可能性が高い。

（５）側壁構築２段階時の小墳丘

図15は側壁構築２段階時の墳丘等高線図と天井石架構後の平面図を合成したものである。この時点での墳丘は長楕円形を呈し、長径15m、短径13mである。標高37.2mを頂点に、高さ約1.2mを示す。天井石検出時の墳丘図と比較すると頂部には平坦部がある。開口部側の天井石近辺まで、緩やかな傾斜角度で、前庭側壁部分からまわる等高線の間隔は狭く、石室構築に関わる小墳丘といえよう。

図29は側壁展開図と墳丘土層の合成図である。側壁構築第１段階（基底石設置段階）では両側壁までは水平に盛土を行っている。側壁構築第２段階では小墳丘が形成され、前庭側壁はこの小墳丘とは分離して構築されている。前庭側壁に構築に伴う盛土は小墳丘の形成とは異なり、徐々に貼り付けており、墳丘規模を拡大している。側壁の構築と前庭側壁の構築にかんしては積石方法が異なるだけではなく、盛土方法が異なることが判明した。

（６）周　溝

周溝は、南全面を除き、３方向で確認できた（図11）。東側部分の周溝は開口部列石手前まで延び、西側部分の周溝は開口部より手前で途切れていた。西側部分は後述するⅤ層（地山）が削平されていたため、本来は東側のように周溝が開口部まで延びていたと推測される。周溝幅は1.2m～2.3mで、断面形はU字形をなす。検出面からは0.1m～0.2mと浅く、溝底は比較的平坦であった。東側の周溝内からは須恵器甕片が多く出土した。

（7）開口部および周溝内の遺物出土状況

墳丘の外側において、土器は古墳の東側を中心に出土した（図16・17)。出土位置は大きく周溝先端部と東トレンチ周辺の2箇所である。

開口部列石前から周溝先端部の範囲では甕（5、7）の破片が集中的に出土した。46は体部下半が欠失し、48は口縁部及び底部を欠損していた。意図的に割られた痕跡は見当たらないが、開口部列石前で甕を用いた祭祀行為を想定させる。

東トレンチ周辺から出土した須恵器甕は6個体が図示できたが、破片の状態からさらに多いと思われる。図示できた資料をみる限りでは口径20cm～30cmの甕で構成され、甕以外の器種は確認されなかった。

（8）周溝内出土遺物

概　要（図18～20）　ほぼ東側の周溝内から須恵器甕の破片が集中的に出土している。甕は少なくとも5個体以上はある。

特　徴　1の口縁端部は肥厚し、斜め下方に垂下する。2と色調、胎土とも類似するが、端部の大きさ、形状が異なる。

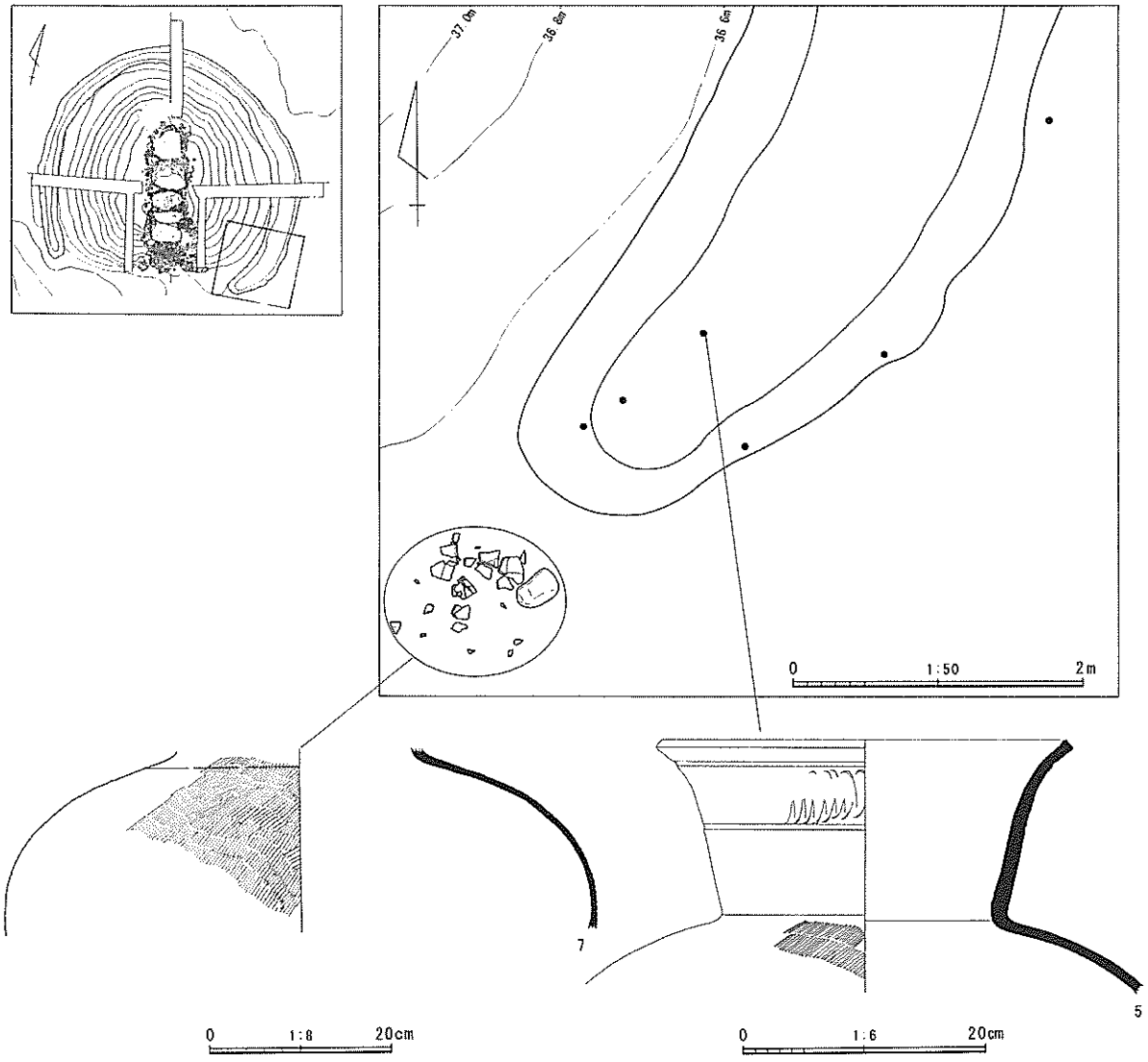


図16　周溝内土器出土状況（1）

2の口縁端部は肥厚し、斜め下方に垂下する。3は緩やかに外反し、端部には稜が明確な低い隆帯がつく。頸部はカキ目で仕上げ、2条の沈線間に斜位の刺突文が施される。

4は口径32.8cmである。横ナデにより外反し、端部は斜め下方に垂下する。2条の沈線を中心に上位には右上がりの刺突文、下位に右下がりの刺突文をつけ、矢羽状を呈する。沈線上には円形の浮文がつく。色調はにぶい黄色である。

5は大型の甕で、口径33.0cmである。体部外面には平行タタキが体部上半に残る。2条の沈線間に幅5mmの棒状工具を上下5cmほど動かし、波状文を施している。ふくらみをもちながら直立ぎみに立ち上がり、上部で斜め方向に外反する。端部は断面三角形状である。体部内面はナデにより仕上げる。

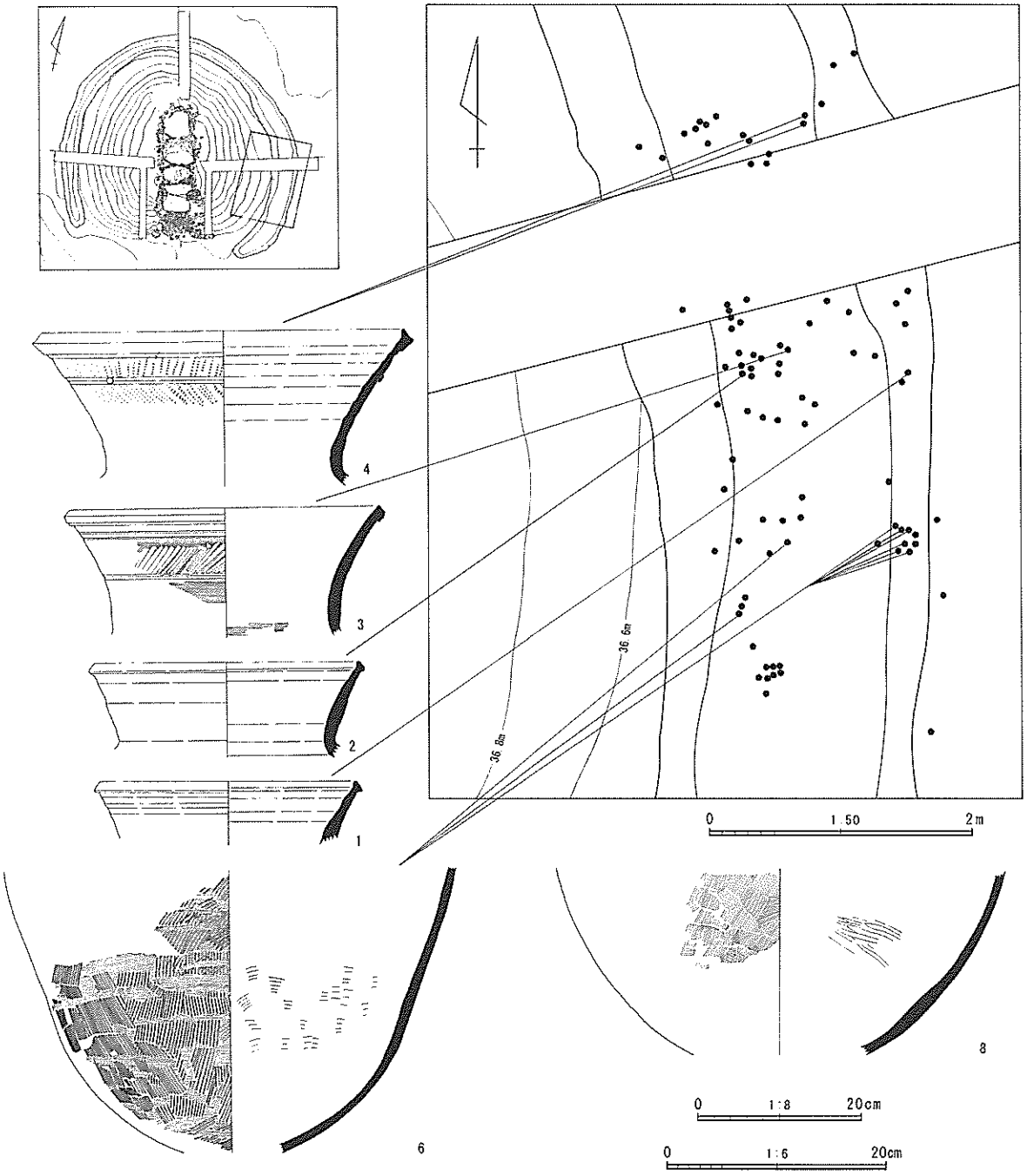


図17　周溝内土器出土状況（2）

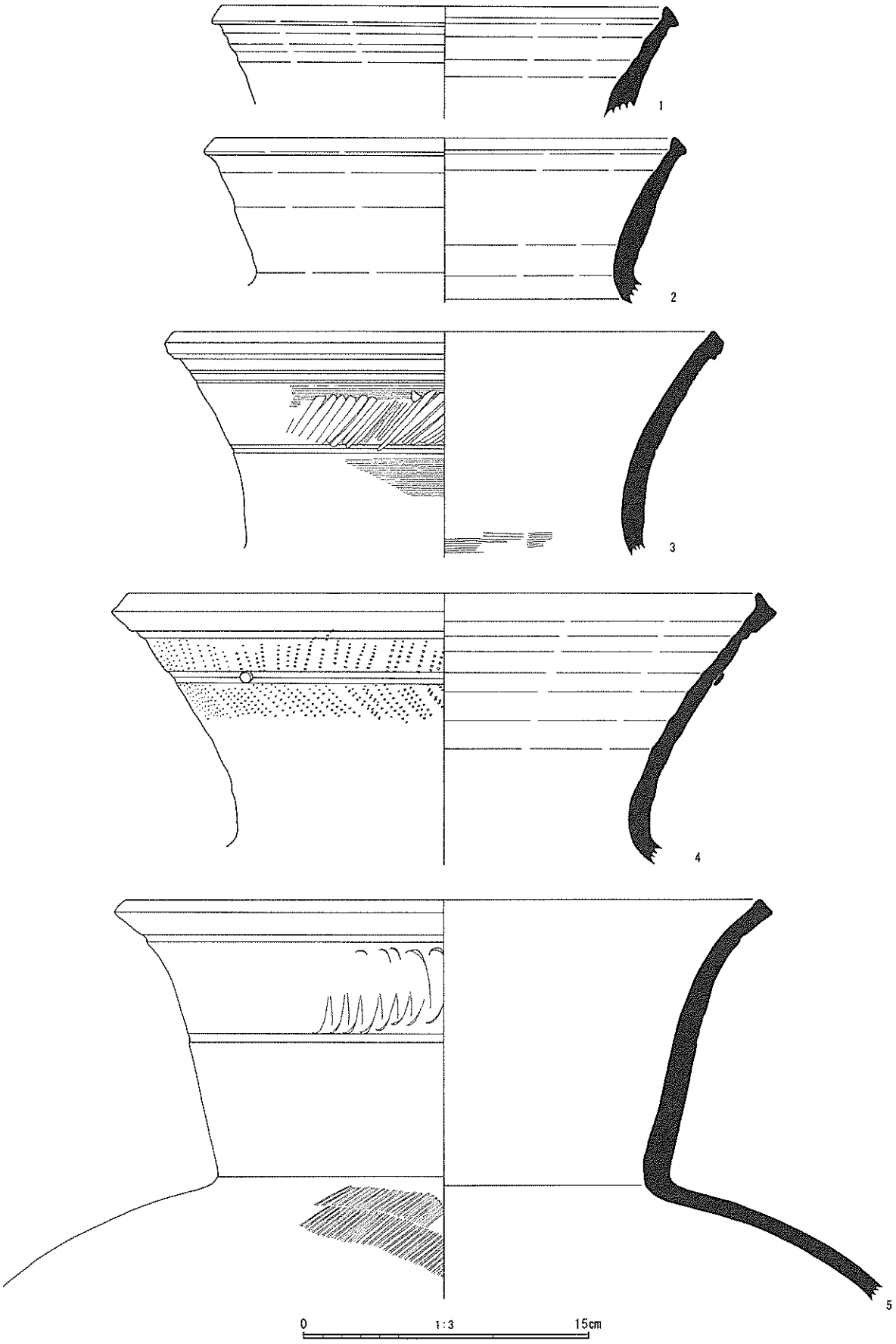


図18　周溝内出土土器（1）

6は丸底状を呈し、外面には平行タタキとカキ目で仕上げている。内面の下半部は青海波状のタタキがわずかに残る。口縁部はないが、横瓶の可能性もある。

7は体部最大径は65.6cmである。外面は平行タタキ、内面は横ナデにより仕上げ、平行タタキも明瞭に残る。8は底部片で、丸底状を呈する。7と別個体である。下半部はケズリ後ナデが施され、平滑に仕上げている。上位には細かい平行タタキが残る。内面はナデ調整が施される。

編年的位置　1～8の甕片はすべて湖西産で、遠江Ⅳ期の範疇に含まれるであろう。

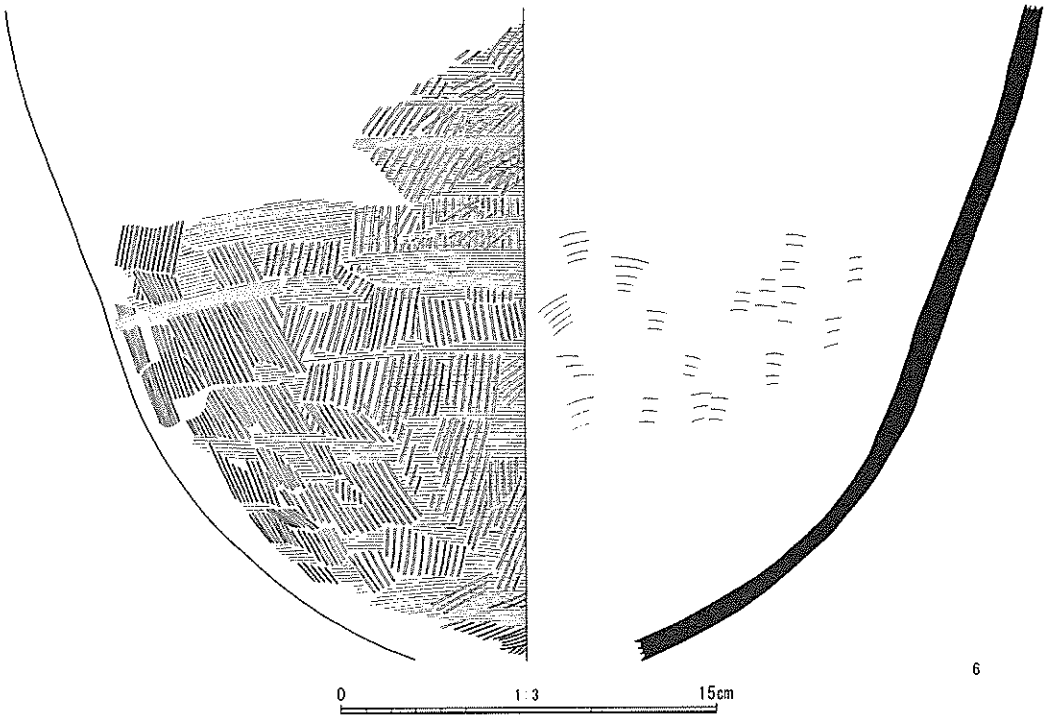


図19　周溝内出土土器（2）

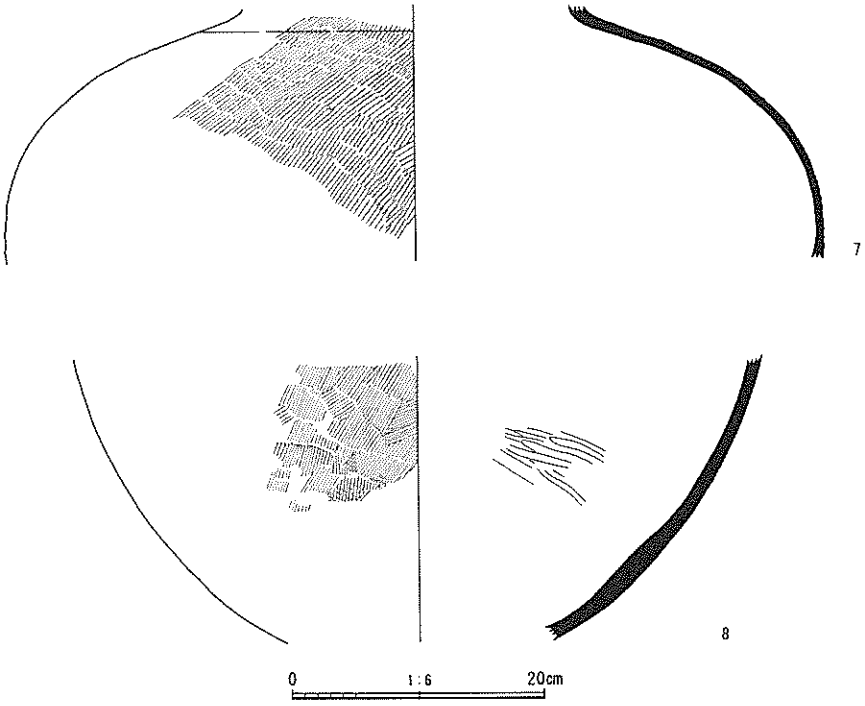


図20　開口部出土土器・周溝内出土土器（3）

第３節　埋葬施設の構造

１　概　要

原分古墳の埋葬施設は横穴式石室であり、開口部に大型石材が据えられ、奥壁は１石、側壁は大型石材を３段積み上げた無袖式石室である。玄室床面は前庭部より１段下がる構造で、段を有する石室である。框石状の大型石材より前にはハ字に開く前庭側壁がつく。石室全長7.5m、幅1.7m、石室内の高さ２mである。前庭側壁を含めれば長さは10.4mにおよぶ長大な石室である。石室主軸は座標北に対して19°西にとる。玄室平面形は長方形を呈する。壁体の持ち送りは顕著ではなく、ほぼ垂直であることから直方体の埋葬空間を有する。石室内部は奥壁寄りに家形石棺が配置され、石室中央右壁寄りから棺台石が認められた。

原分古墳に用いられた石室石材は多孔質玄武岩、孔質玄武岩、玄武岩を用いている【第２部　構造解析編　pp.16-17 】。玄武岩は黄瀬川上流から中流域の河床に玄武岩が露出しており、原分古墳に用いられた石材もこの周辺から採取されたものであろう。

開口部に框石状の大型石材を築造当初から据えた段を有する石室は、静岡県内において富士川流域から黄瀬川流域までの東西30kmの範囲に認められる。その中心は富士山麓にあり、今回、確認された原分古墳はその東端にあたる。

２　横穴式石室の詳細

（１）天井石

天井石外面（図22）　天井石は調査前より５石が確認されている。重量は奥側から１石４ｔ、２石8.1ｔ、３石3.4ｔ、４石2.7t、５石2.4tの合計20.6ｔである。天井石の中では２石が最も重量があり、かつこの石材の上端が最も高い標高位置を示している。墳丘の中心は、この２石目の天井石に相当するであろう。

天井石と天井石の間隙には小さな礫が充填されており、墳丘盛土の崩落防止の為に置かれたものと推察される。小礫は天井石の４石目まで顕著であった。奥壁の裏側は人頭大の礫が置かれ、側壁側とはやや様相が異なる。天井石の架構は開口部から置かれたと考えられる。

天井石内面（図23）　天井構造は基本的に平天井である。開口部の框石状の大型石材まで天井石が載る。開口部にむかってやや高くなり、奥壁から見渡すとやや幅広の印象を受ける。奥壁側から２石目までは標高38mに合わせ、ほぼ水平である。３石以降は38.2m前後に揃えてやや段差をもつ。この天井の１石から２石までの空間内には家形家形石棺が納められていた。

玄室空間　今回、検出された石室は無袖式で、直方体の玄室空間をもつ。石室内には奥壁寄りに家形石棺が配置されていた。

家形石棺の位置と天井および側壁との関係に着目すれば、家形石棺は天井石の１石から２石にかけての空間内におさまり、３石以降は棺台石などが配される。天井構造は１石から２石までは水平で、３石から５石にかけてわずかに高くなる。右壁基底石では奥壁から４石目にかけて大型の石材を配している。

以上のように無袖式石室でありながらも、築造者の意図を考えれば、壁体においても家形石棺位置を意識した空間利用があったと思われる。

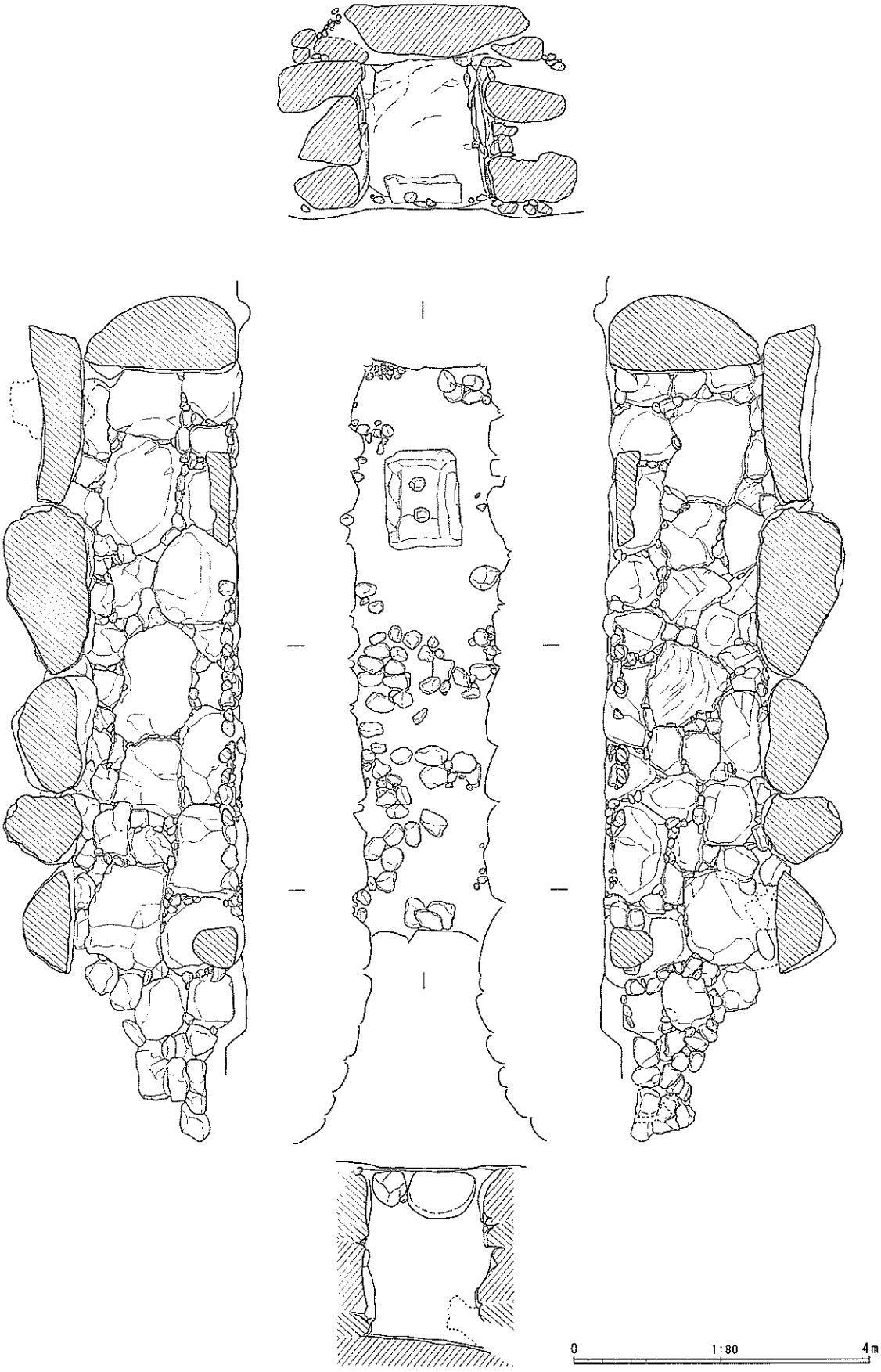


図21　石室展開図

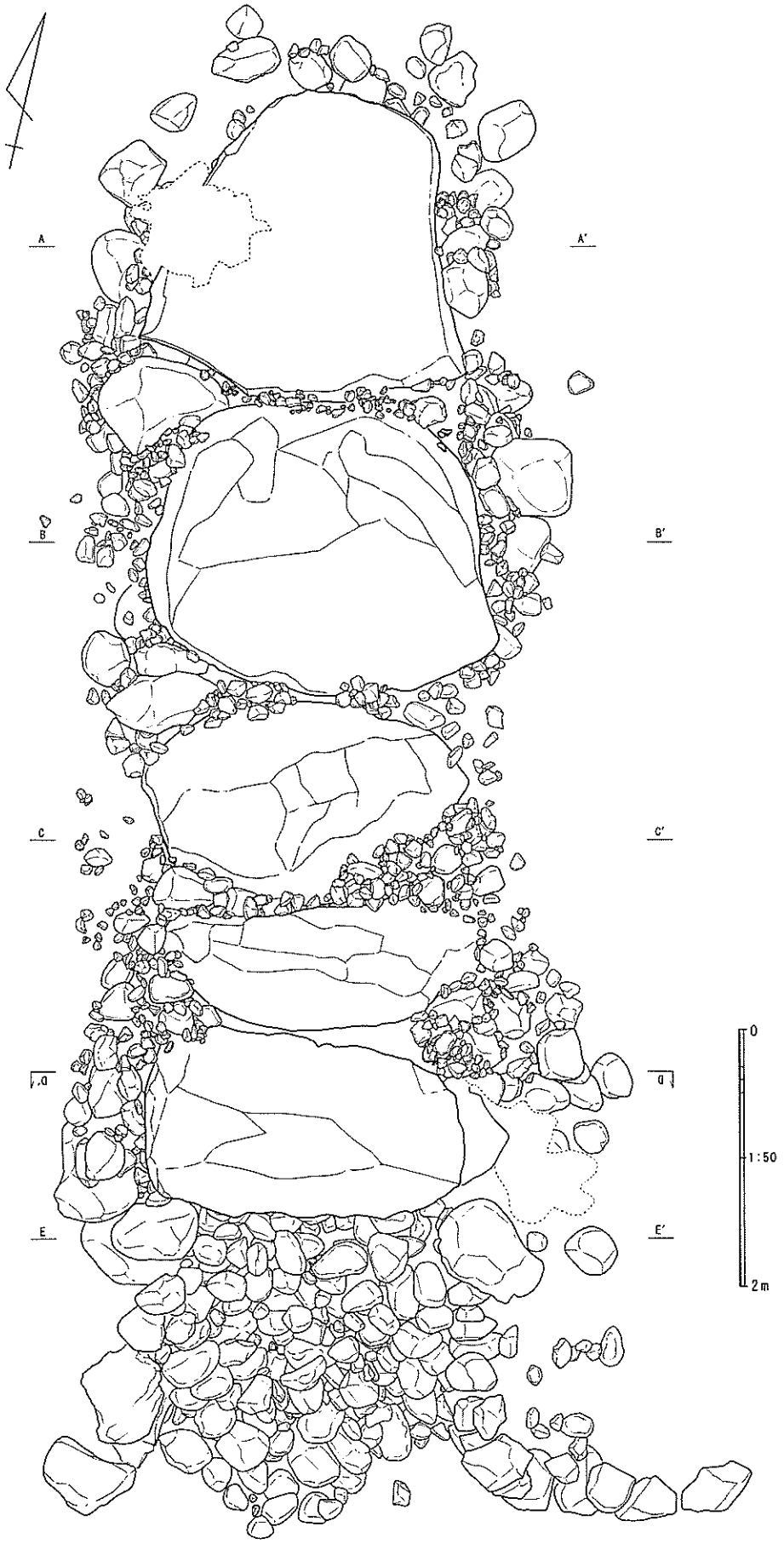


図22　天井石平面図

（2）奥　壁

奥壁は一石で構成される。長さ2.2m、最大幅1.7m、奥行き１mの大型の石材を用いている。左壁側寄りに上部は尖り、丸みをおびながら多角形状を呈する。表面には石材を加工した痕跡はみられない。平坦面はほぼ垂直に立ち上がり、墓坑内に強固に据えられていた。側面部および裏側の墓坑内には人頭大の礫から拳大の礫が密集し、墓坑より上層にはこれらの礫はみられなかった。奥壁は側壁の基底石に挟み込まれるように配されている。２段目以上も同様で、石室幅は奥壁幅により規定されている。

（3）側　壁

右　壁　側壁は完存しており、基底石は９石が配される。そのうち奥側から４石目の石材のみがやや大型の石材を用いられている。それ以外の基底石は標高35.6m～35.7mのラインにそろえ、開口部に向かってやや高くなる。

基底石の裏側には小さな礫が充填されており、基底石の据え位置の安定化が図られていた。さらに隣り合う基底石間にも縦位に小礫が積まれており、接し合う基底石の安定化や隙間からの裏込土流出防止などの造作がみられた。

２段目は基底石より大型の石材で、５石用いられる。奥壁から２石と３石の間、４石と５石の間の２箇所で小型の石材が用いられ、長さの調整が図られていた。２段目の上端は奥壁から開口部にかけて斜めに高く目地が通り、３段目の石材は扁平で小型の石材を用いていた。天井石を架けるために高さの調整用として積み上げられている。

左　壁　左壁も完存し、基底石は９石で構成される。開口部の石材は大型の石材を用いられており、石室構築の指標石であろう。基底石の高さは一定しており、標高37.7mに合わせている。右壁と同様に、基底石の下部には小型の礫が充填されていた。礫の密集度合いは基底石下部の所々で異なっていた。これは、基底石のすわりをよくするために、繰り返し石を置いて微調整を行った痕跡と推測される。

２段目の目地は奥壁側から開口部にかけて低く傾斜している。大型の石材は奥壁側から中央部にかけて３石用いられている。特に中央から開口部にかけては開口部の基底石を指標に小型の石材を用い、長さの調整が図られている。３段目では開口部側に大型の石材を配していた。奥壁とその間

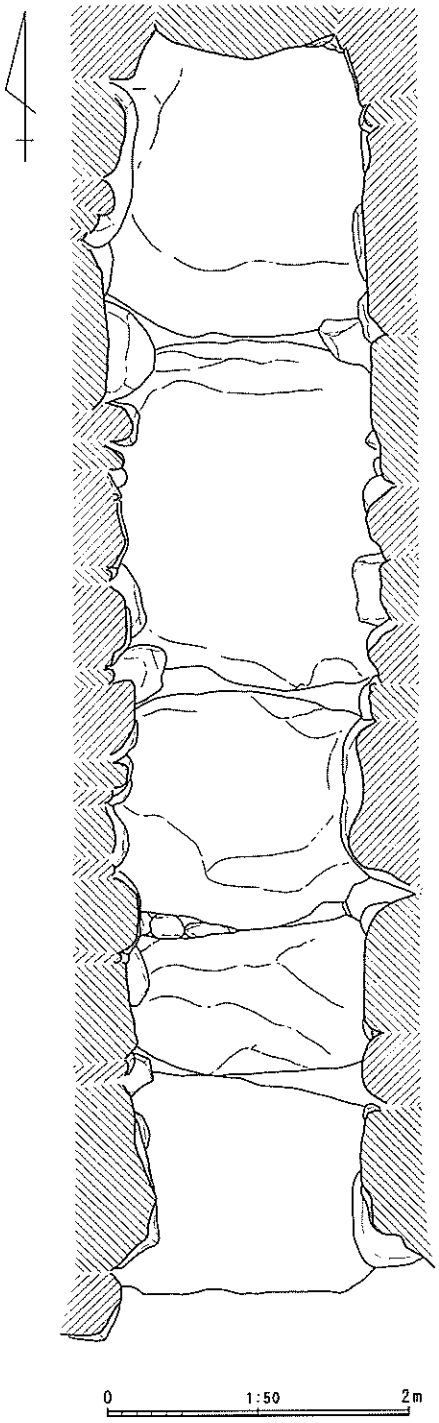


図23　天井石見上げ図

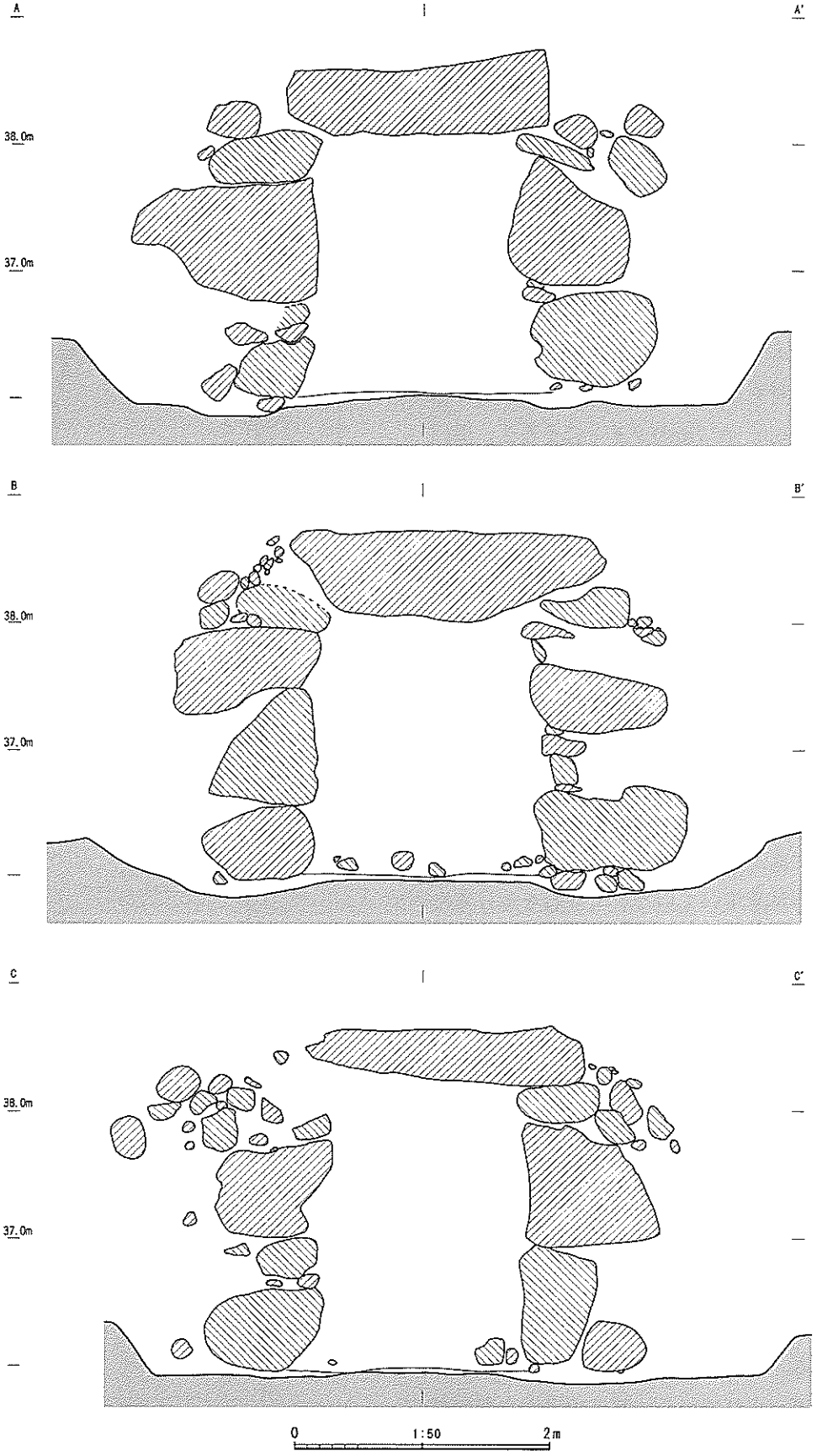


図24　石室断面

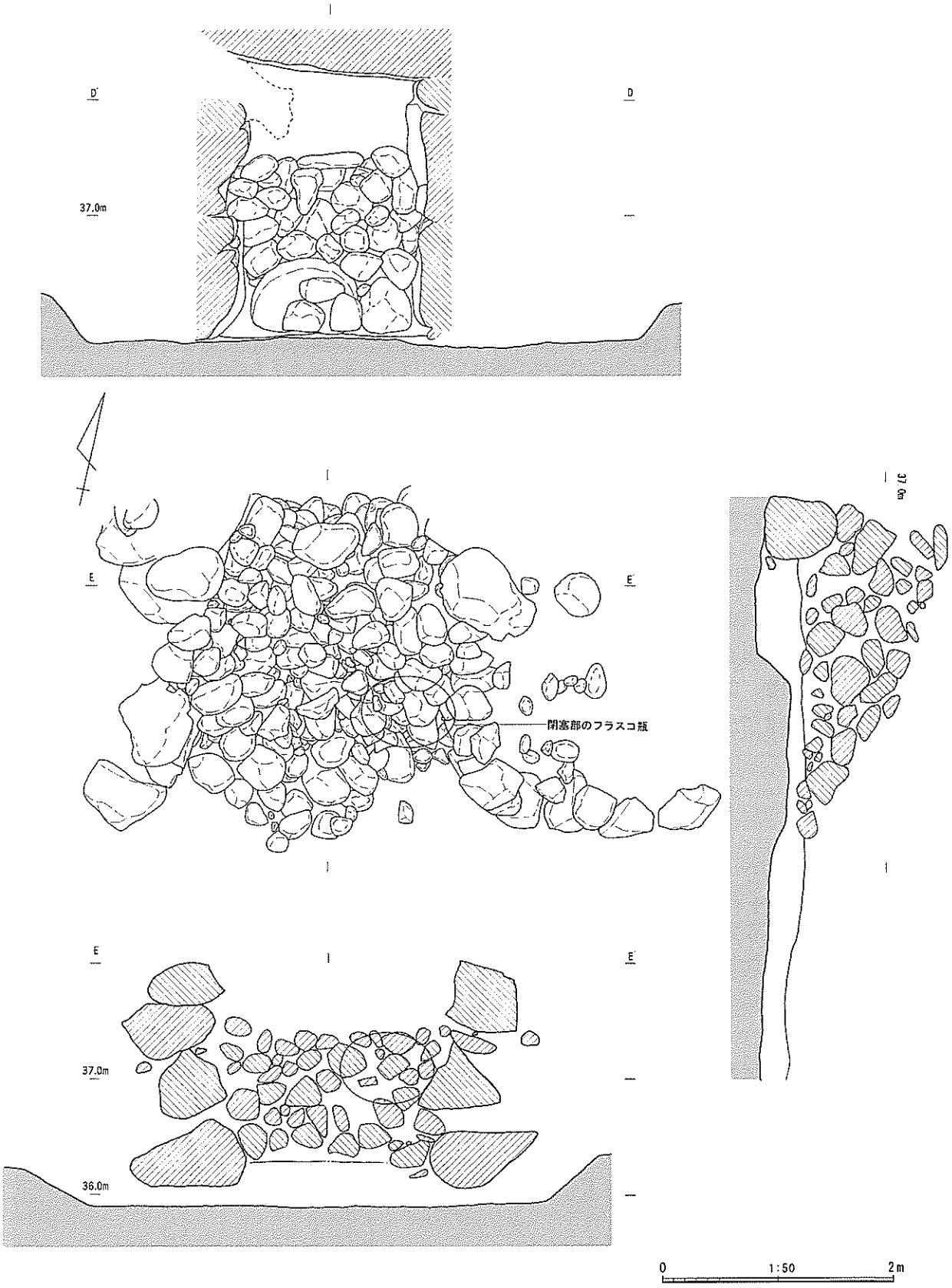


図25　閉塞石（1）

隙部分には小型の石材を用い、天井石を架構するために小型の石材や扁平な石材を配している。

側壁の目地　両側壁の目地を観察すると右壁では大型の石材を中心に比較的目地が通っており、左壁は２段目に至る所で小型の石材を用い、高さや長さの調整が図られていることからも右壁を基本に左壁を構築したとみることもできる。

（４）開口部

段構造　前庭側壁と側壁との境に位置し、墓坑内に設置される。上面には閉塞石が載る。開口部は幅1.4mにわたり２石から構成される框石状の石を広口に置いている。高さ0.64mで、平坦面を石室内部に向けていた。、裏込めには礫が充填されていた。

閉塞石（図25・26）　閉塞石は框石状の大型の石材の上から前庭側壁の範囲まで認められた。段をなす大型の石材から高さ0.9mほど積み上げられており、天井部との間隙は0.7mであった。最上部には扁平な石材が置かれており、この上面が閉塞石の上端であった可能性がある。使用石材の大半が玄武岩から構成され、石室石材と同様であった。

閉塞石の平面観は雑然と積まれていたが、縦断面は山形を呈していた。中央部はやや崩落していたが開口部列石まで確認できる。少なくとも前庭側壁を完全に覆った状態であった。

石室内部からみると垂直に面を揃え、人頭大の石材を小口積みにして丁寧に積まれている。横目地は４段ほど確認できた。

閉塞儀礼　閉塞石の上から３段目を解体した時には左前庭側壁寄りから破砕されたフラスコ瓶（38）が１個体確認された。出土層位が高いことからこの遺物は追葬時の閉塞儀礼と考えられる。また、閉塞石は小口積みで、目地も水平に通ることから儀礼台のような機能も果たしていたであろう。

閉塞石の下部構造　閉塞石下から石材が密集して敷石状に検出された。墓坑内の埋土に伴う石材も存在するが、開口部まで広がりをみせていた。どのような意図でこの造作が施されたかは明確にできなかった。

（５）前庭側壁

長さ2.5mで、ハ字に開き、連続して墳裾の開口部の列石へとつづく。前庭側壁の傾斜は上方にかけてひろがり、明らかに側壁の傾斜とは異なる。側壁と接する前庭側壁の基底石は大型の石材１石を置き、その上にも同様の石が置かれる。前庭側壁の基底石は墓坑埋土の後に設置される。この接する部分は３段積まれ、開口部に向かって徐々に低く傾斜し、小型の石材を配していく。

3　石室の解体

石室の解体は荒井研究所と共同ですすめ、ラフタークレーンによる天井石除去後に考古学的調査を行った。側壁も同様に解体調査と考古学的調査を繰り返し行い、築造当初の墓坑掘削段階まで完掘した。解体時に作成した図面は天井石を除去した側壁最上段の平面図・展開図、基底石平面図、墓坑平面図である。

（１）側壁最上段の状況

図27は５石の天井石と閉塞石を除去した平面図である。奥壁裏側の周囲は大型の石材で天井石を固定する控えとして用いられている。開口部にかけて２石から５石まではやや拳大の石材を用いており、天井石の両端に沿って列状に配置されていた。これら控えとしての石積みは側壁裏側を覆う程度であった。使用石材は側壁と同様、玄武岩、安山岩等であった。

図28は天井石を除去した側壁展開図である。控えの石が見通され、開口部に向かって石を配しているかのようにみえるが、天井石を据えるために側壁構築３段階時では標高38m～38.1mのラインを揃える造作がみられた。

右壁の奥壁寄りは扁平でやや大型の石材を据えていた。開口部では高さ20cmの扁平な石を据える程度で、高さはほぼ側壁２段階時で確保している。側壁２段階時の目地により開口部に向かって高く上がり、中央はやや大型石材を用いていた。

左壁は右壁と比べると大型の石材を用いている。標高38mに設定するために目地は水平に通る。側壁２段階時の目地が開口部に向かって低く傾斜しているため、やや大型で、扁平な石材が配される。特に開口部側の大型の石材は側壁構築３段階時で据えられている。右壁と同じ位置にある大型の石材とは設置段階が異なる可能性が高い。

（２）基底石

奥壁を設置した後に框石状の大型石材を据え、基底石は奥壁を挟みこむ状態であった（図29）。

基底石は開口部側と奥壁側から設置し、側壁中央部分で小口積みにしている箇所で、石材の調整をしていた。基底石の裏側には小型の石材が充填されており、基底石の据え位置の安定化が図られていた。

前庭側壁の基底石は左壁で８石、右壁で５石を確認した。側壁と接する前庭側壁は大型の石材を用い、それより前側の石は小型の石材が使用されていた。石材は小口、横口に置かれていた。墓坑は前庭側壁の大型石材までの範囲まで延びていた。前庭側壁の構築は基底石設置後に始まる。積石法や傾斜角度から、側壁と前庭側壁の構築を小工程に分離することが可能である。

（３）墓　坑

墓坑の平面形は奥壁側で弧状に張り出すものの、基本的には長方形である（図31）。長さ8.7m、幅5.5m、深さ0.5mである。地山（Ⅴ層）である黄褐色砂礫土を掘り込み、その下層の硬い粗砂が凝結している岩盤層まで掘削がおよんでいた。

基底石下部の状況　奥壁、側壁の基底右下には拳大から人頭大の礫の集中箇所が散見され、列状を呈

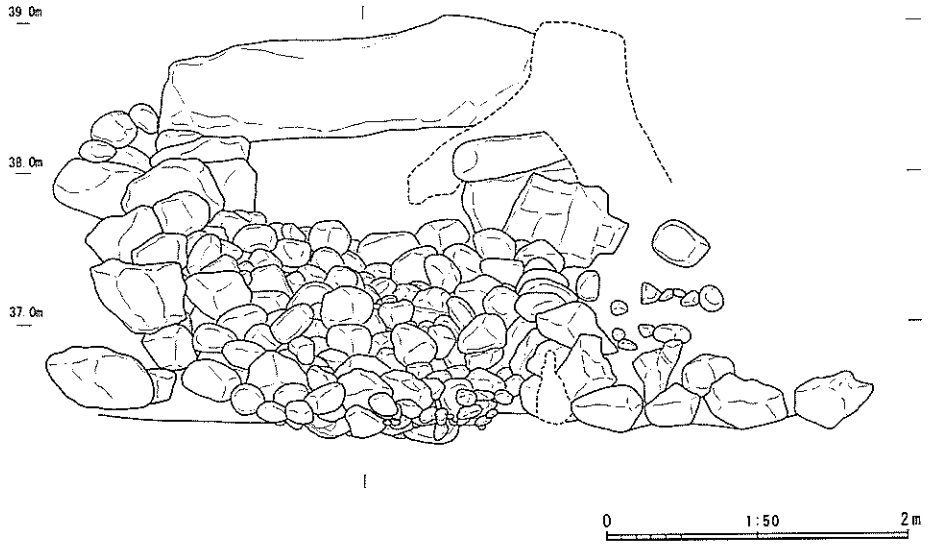


図26　閉塞石（２）

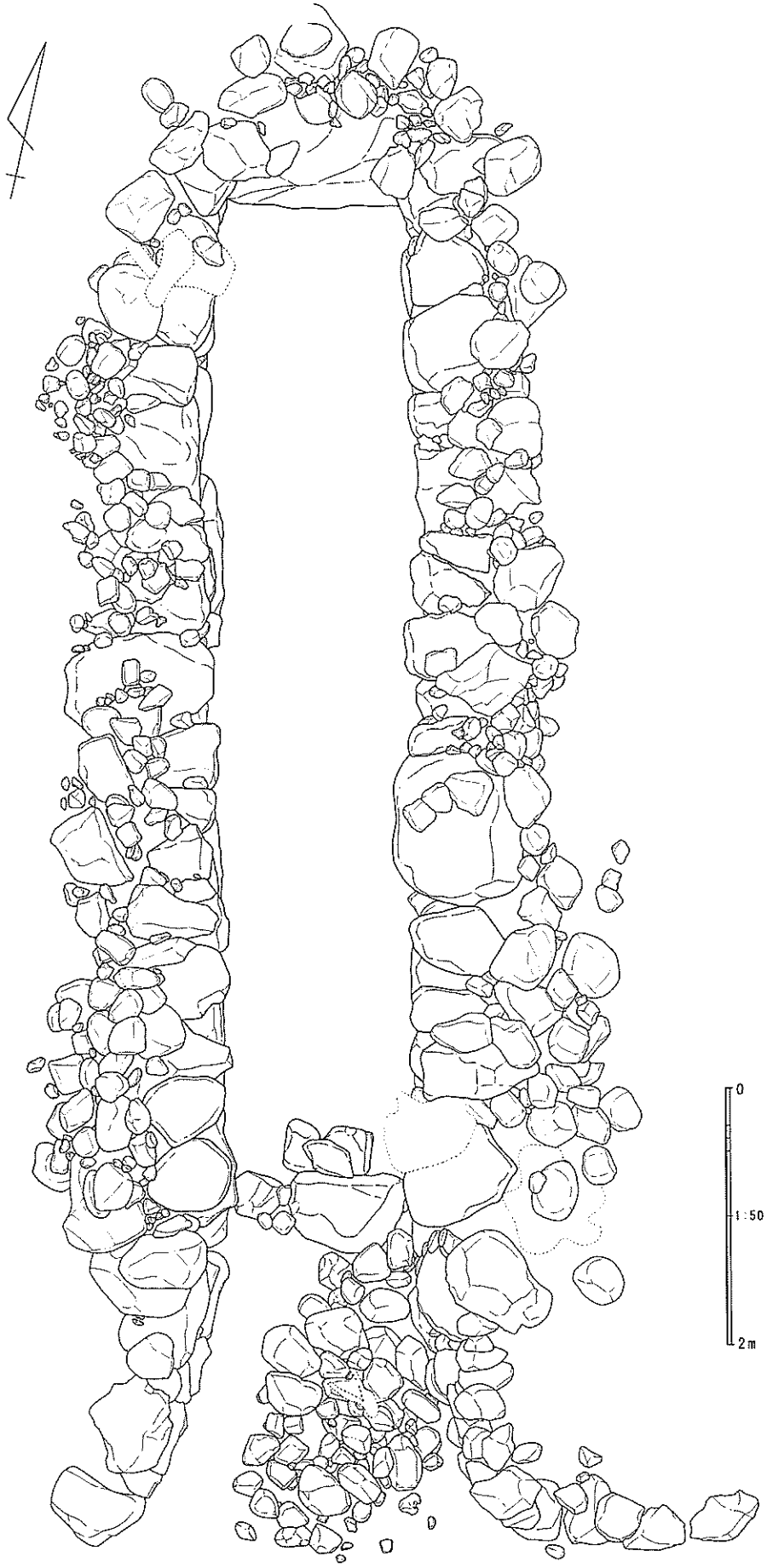


図27　天井石除去後　平面図

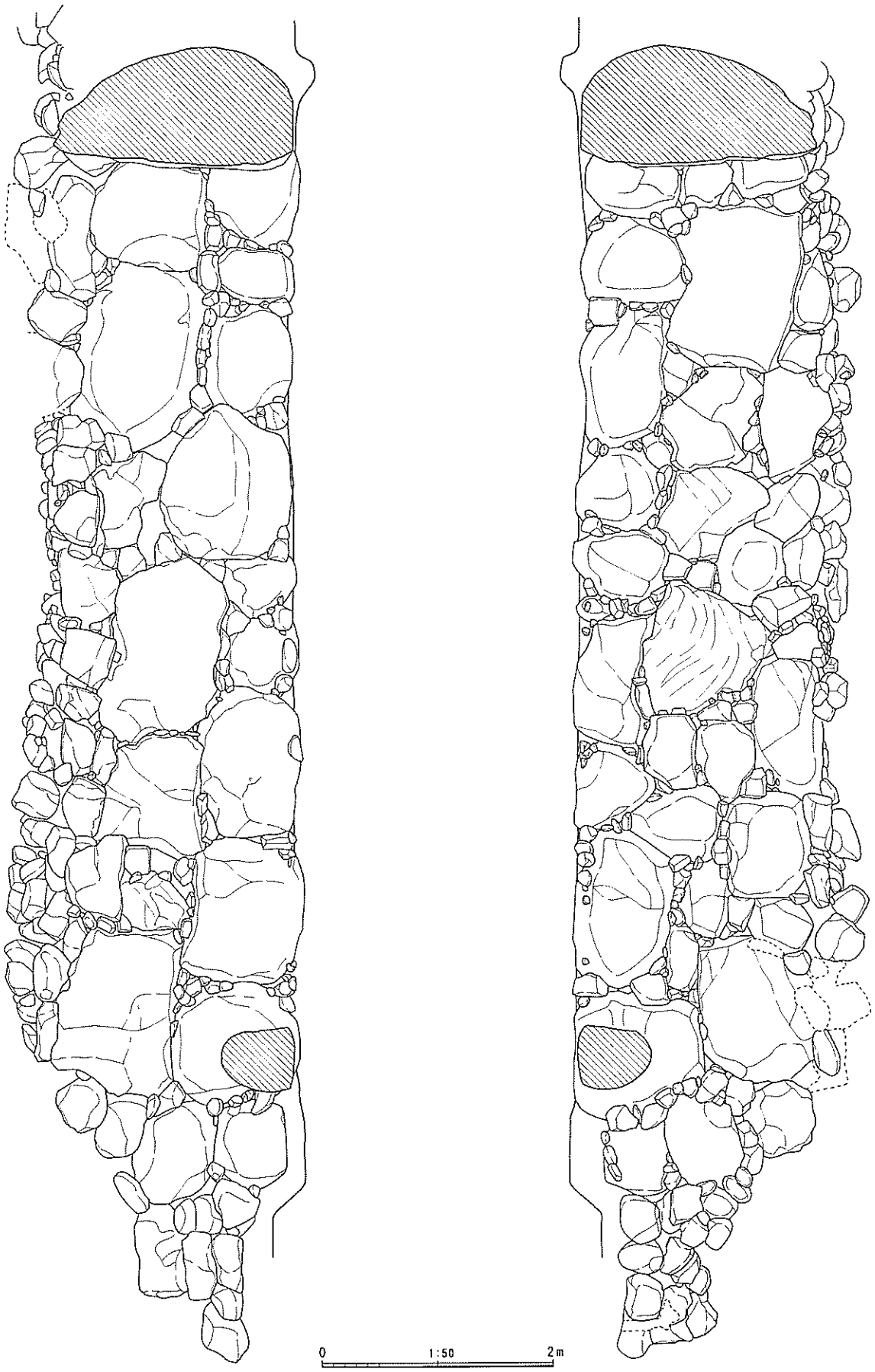


図28　天井石除去後　展開図

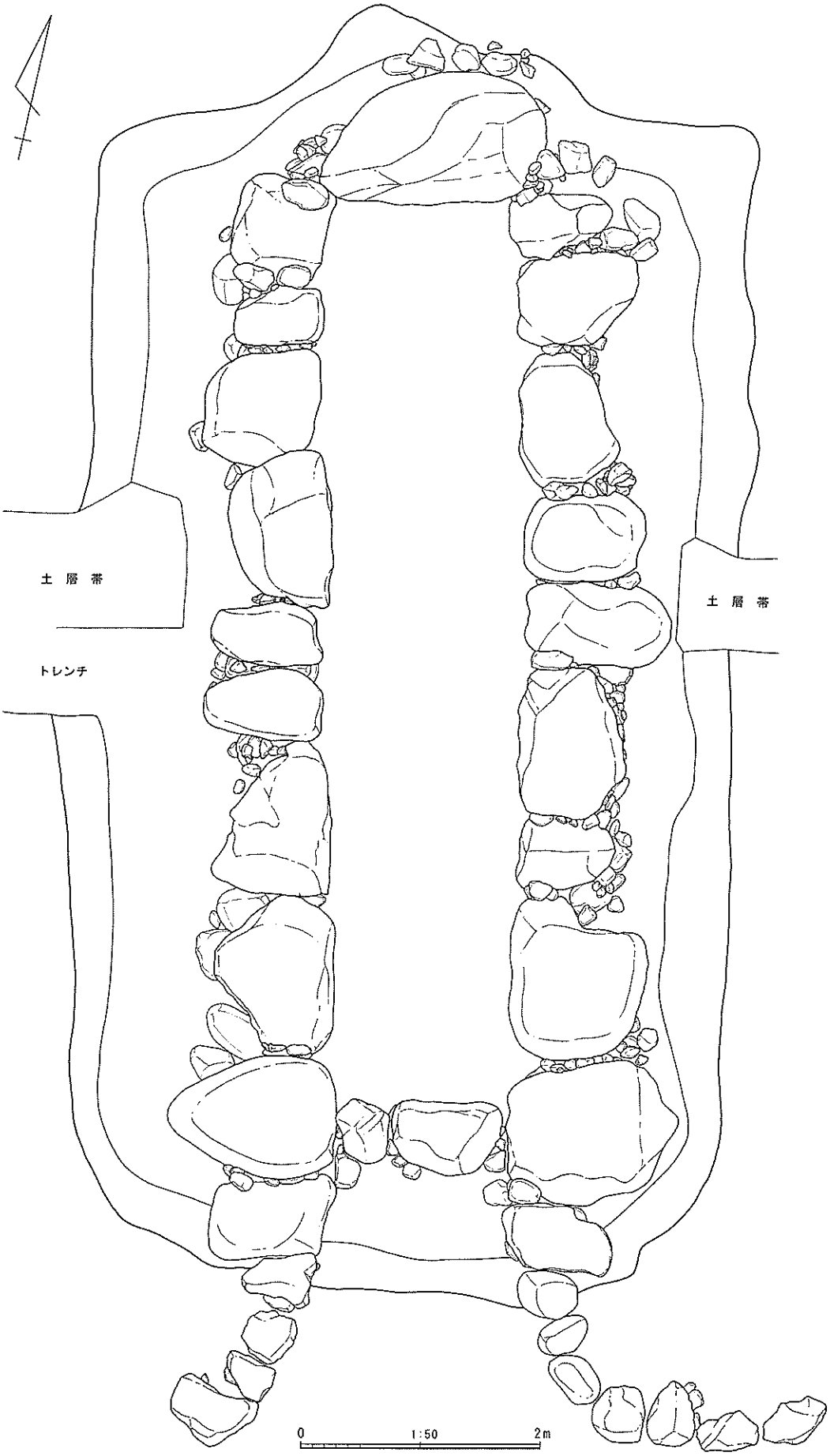


図29　基底石

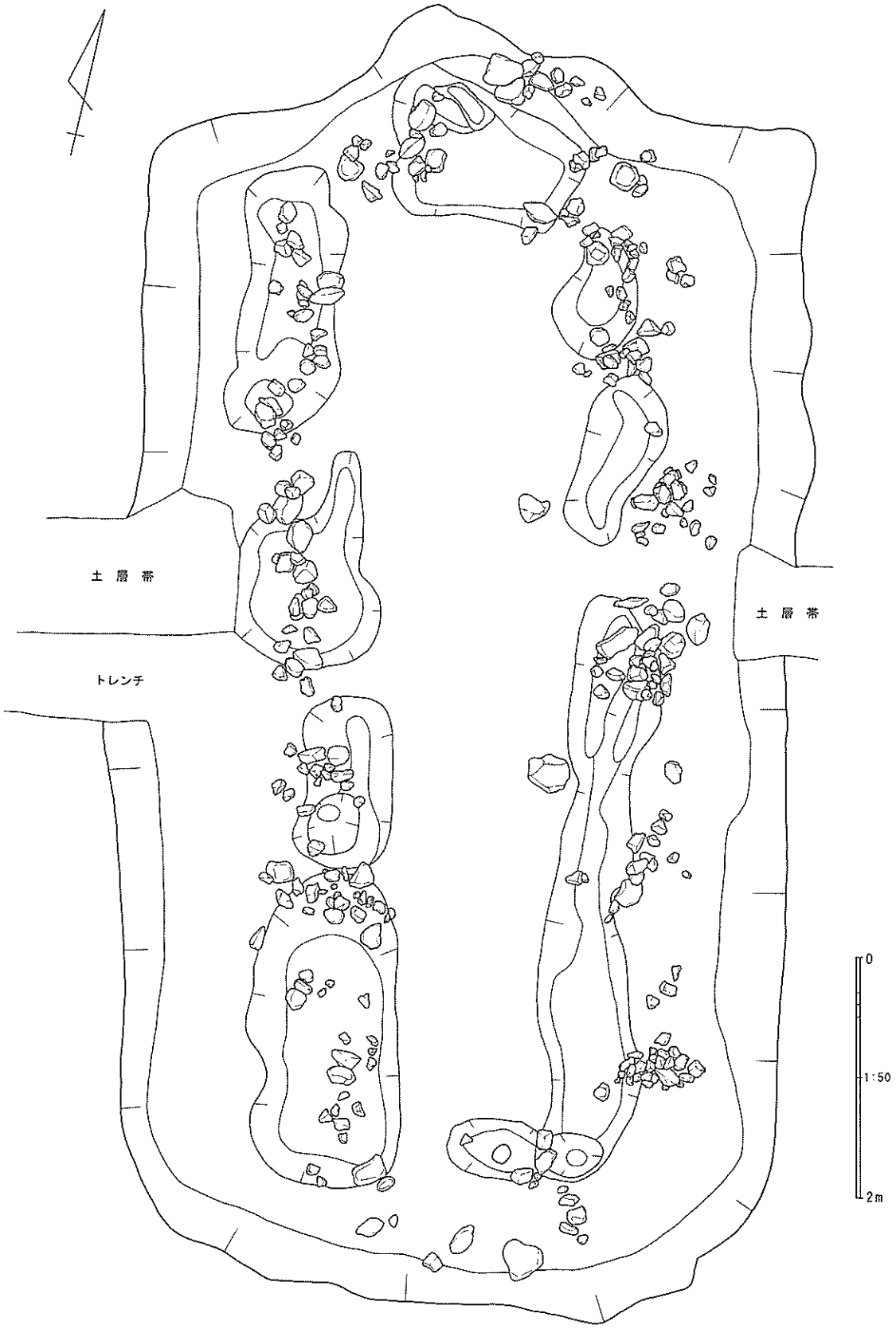


図30　墓坑（1）

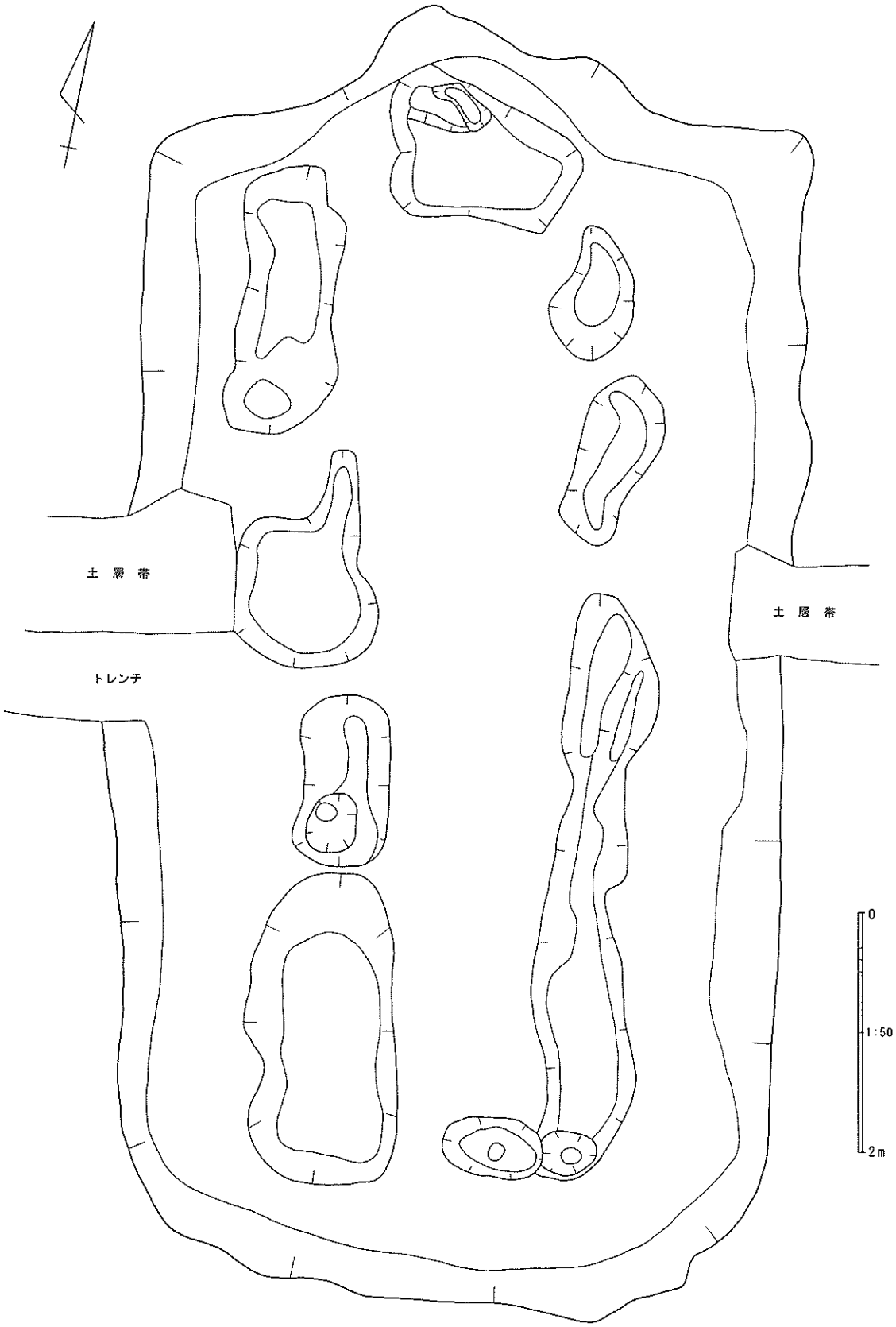


図31　墓坑（2）

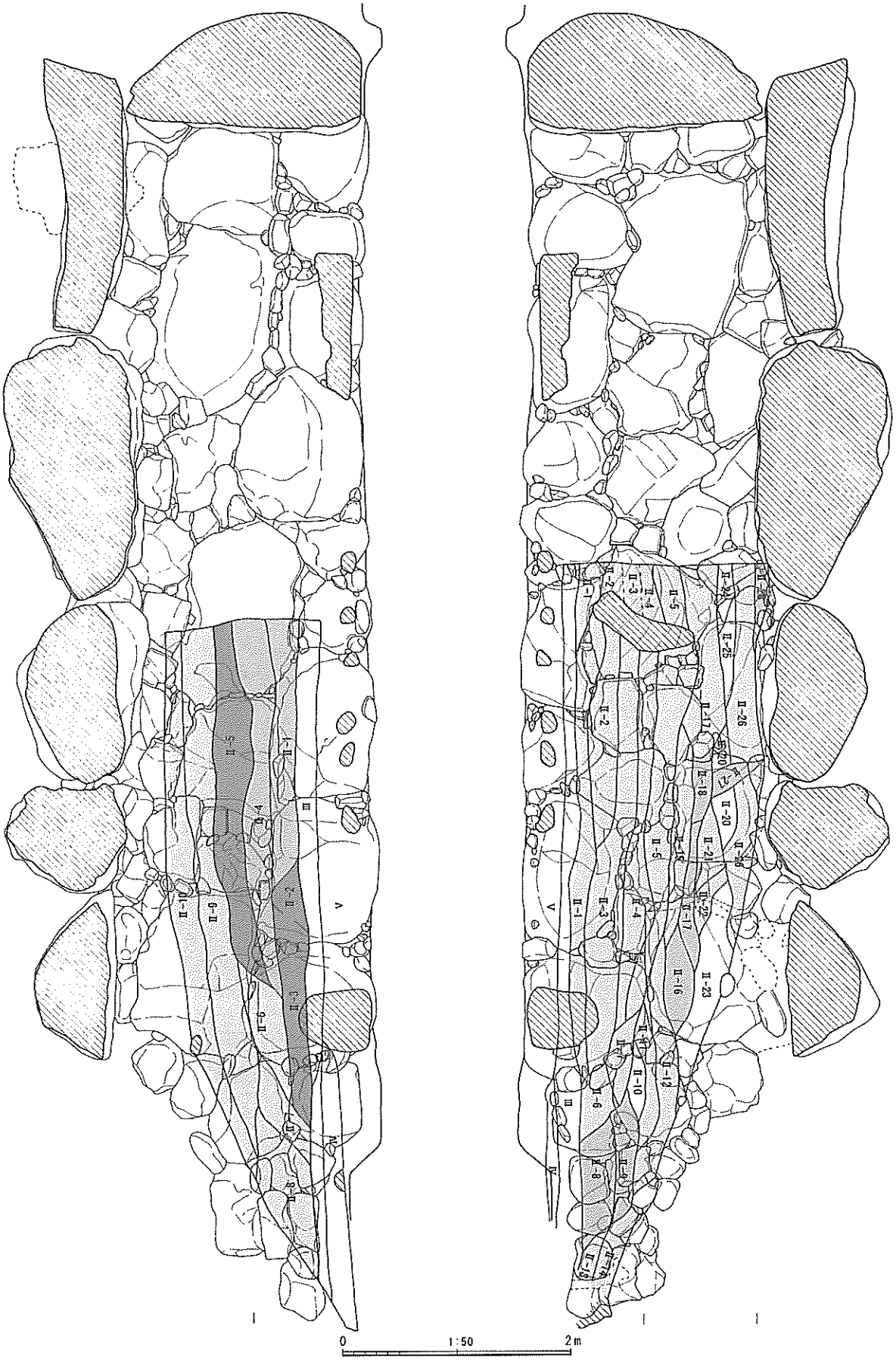


図32　側壁と墳丘土層

していた。この石材の大半は基底石下から検出されたものである。

基底石と下部の礫の配置状況は基底石の中央から裏側にかけて確認された。礫の密集度合いが所々で違う箇所があるが、これは基底石のすわりをよくするために繰り返し石を置いて微調整を行った痕跡であると考えられる。

基底石より上段の側壁においては、このような据え付けにかかわる丁寧な造作がみられなかった。壁体構築の工程では基底石の設置に最も時間と労力をかけたと推測される。

基底石の据付痕跡　基底石の据付痕跡は、明らかにその岩盤層を掘り込んでいた。奥壁側の据付痕跡は単独で掘り込まれ、奥壁裏側部分で深さ0.4mであった。平面形は不整形で、奥壁全体を覆うほどではないが、内側の面を揃えるように掘り込まれていた。

開口部では段を有する部分の下で、浅い掘り込みの据付痕跡が認められた。側壁側では単独で検出された据付痕跡と布掘り状を呈する痕跡が確認できた。掘り込みは浅く、0.1mほどであった。

奥壁の設置法　奥壁側の墓坑の形状は半円形に張り出しており、据付痕跡も深く掘りこまれていた。奥壁１石を立たせるには最初に奥壁用の穴を掘り、その後に奥壁と連結するように側壁を設置する長方形状の墓坑を掘削したのではないかと推察される。このような事例は少ないが、三島市田頭山１号墳（井鍋2004）において奥壁裏側が方形に張り出す形状が確認されている。

墓坑の深さ（図24）　墓坑の断面形は逆台形で、深さは0.3m～0.4mと比較的浅い。床面は厚さ５cm程度の黒褐色土が敷かれており、その上に凝灰岩製の家形石棺や棺台石が設置されていた。

地形条件にもよるが、駿河東部にみられる横穴式石室の墓坑は一般的に深く、側壁が墓坑内におさまる地下式構造である事例が多い。墓坑掘削面上に天井石が架けられ、少ない盛土量で古墳を構築しているのが通例である。いっぽう、原分古墳の墓坑は浅く、多くの盛土量で構築される半地下式構造である。墳丘、石室規模により、墓坑の深さが異なることが指摘できる。

4　家形石棺

原分古墳の横穴式石室内には家形石棺が収められていたが、大きく破壊されていた。石棺材は遺物収納箱にして10箱におよぶ量が出土している。棺蓋の形状は大まかであるが捉えることができた。少なくとも長辺、短辺に縄掛突起を有し、四辺傾斜していることは確実である。棺身の残存状況から、形態は刳抜式の家形石棺で、蓋と身の２材から構成される。残存状況は悪く、風化して非常に軟質であった。このため、石棺の表面には多くの工具痕がみられるが、製作時の整形痕であるのか、後世の破壊による工具痕であるのか、判別は困難であった。

棺蓋、棺身とも凝灰岩製であり、静岡県沼津市静浦山系の海岸部から採取されたとされる【第２部構造解析編　pp.79-88】。破片資料からは赤色、白色系顔料の塗布といった痕跡は皆無であった。

（１）棺蓋詳細

棺蓋の遺存状況は悪く、家形石棺の規模から考えれば、石室内でみつかった石棺材のみでは明らかに不足している。接合作業は石棺材表面に石材強化材を塗布しながらすすめた。石棺材のほとんどが加工面を有していたが、正確な部位は不明である。家形石棺の蓋と判明したものは、２点図示できるにすぎない（図33）。

1、２とも石室内のやや奥壁寄りの上層から出土した。１は蓋の短辺部から長辺部にかけての破片である。表面は剥落し、後世による工具痕が観察され、原形をとどめていない。短辺、長辺ともやや胴張

を呈する。

1は幅100cm、残存長48cm、高さ40cmにわたり遺存している。棺蓋の内面は丸みを帯びて内刳りがなされていた。高さは15cmを測る。棺身との接地面の縁幅は15cmで、棺蓋垂直面は高さ9cmであった。

1にみられる縄掛突起と棺蓋の接合面はわずかであるが、やや垂下するものと推測される。縄掛突起部分には工具痕はみられず、後世の破壊による痕跡もみられない。縄掛突起の大きさは長辺28cm、短辺15cmで長方形に切り出し、側面は1面加工であった。棺蓋垂直面より7cm程度の突出と推定される。長辺の縄掛突起は短辺部寄りに偏った位置にあり、傾斜面につく。

短辺部の中央はわずかに方形状の張り出しが認められ、この位置にも縄掛突起が付いていた可能性が高い。

2は短辺部から長辺部にかけての破片で、四方に広がる傾斜面をもつ。縄掛突起には工具痕が明瞭で、欠損し、原形をとどめていない。また、1と同様に長辺部につく突起位置が、短辺部に偏っていた。長辺側は60cm、幅51cm、高さ31cmにわたり、遺存していた。内面は丸みを帯び、内刳りがなされていた。棺蓋垂直面は高さ9cmであった。

（2）棺身詳細

棺身は2点図示することができる（図34）。3は奥壁寄りに据えられていたもので、両短辺部は破壊が著しいが、長辺部ではわずかに原形をとどめていた。開口部側の短辺部は後世の破壊が顕著である。攪乱による工具痕が明瞭で、切り出されていた様子がうかがえる。

3は幅101cm、長さ131cm、高さ32cmが残存していた。棺身の底部には後世の破壊により深さ8cmの2孔が穿たれていた。縁には20cmほどの段差があり、側面の厚さを推測することができる。

4は棺身の隅部と捉えられ

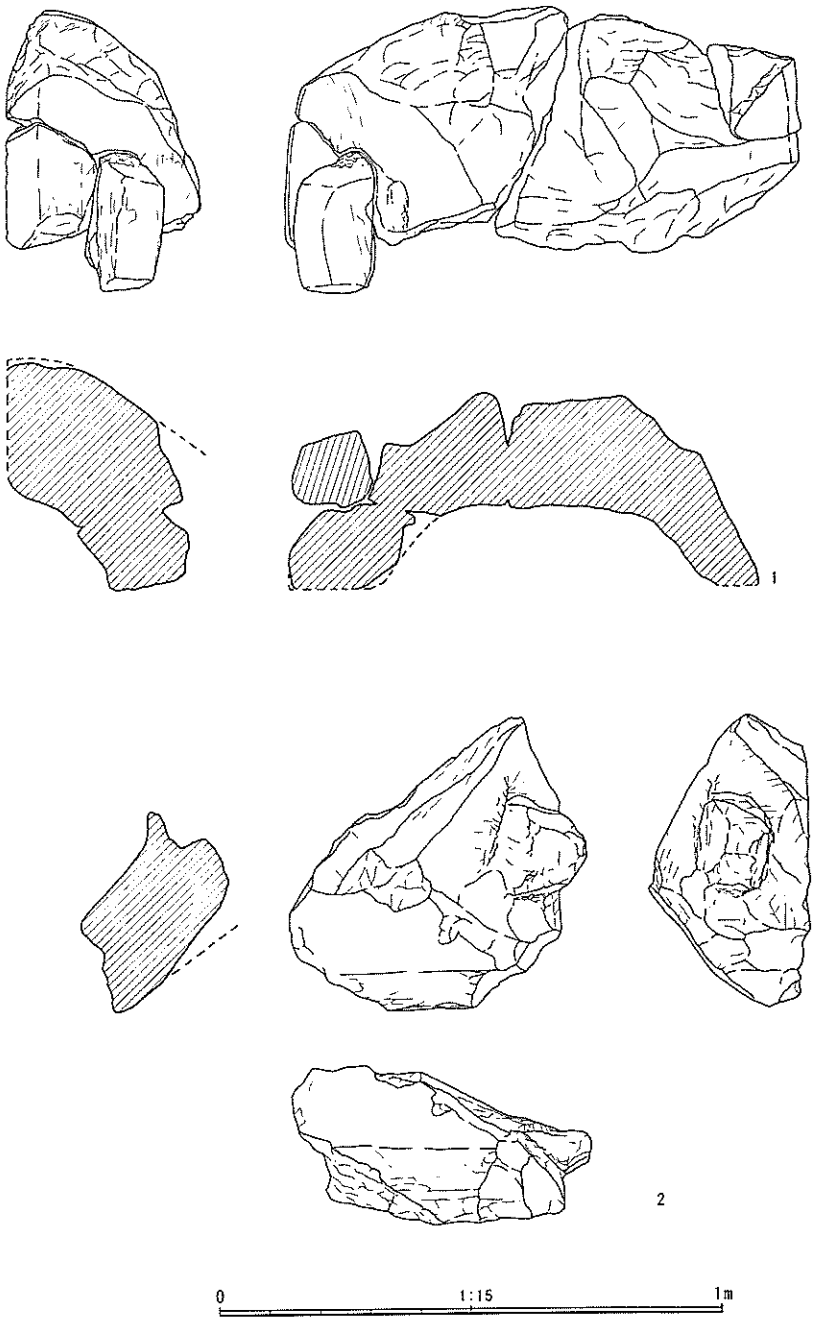


図33　家形石棺（1）

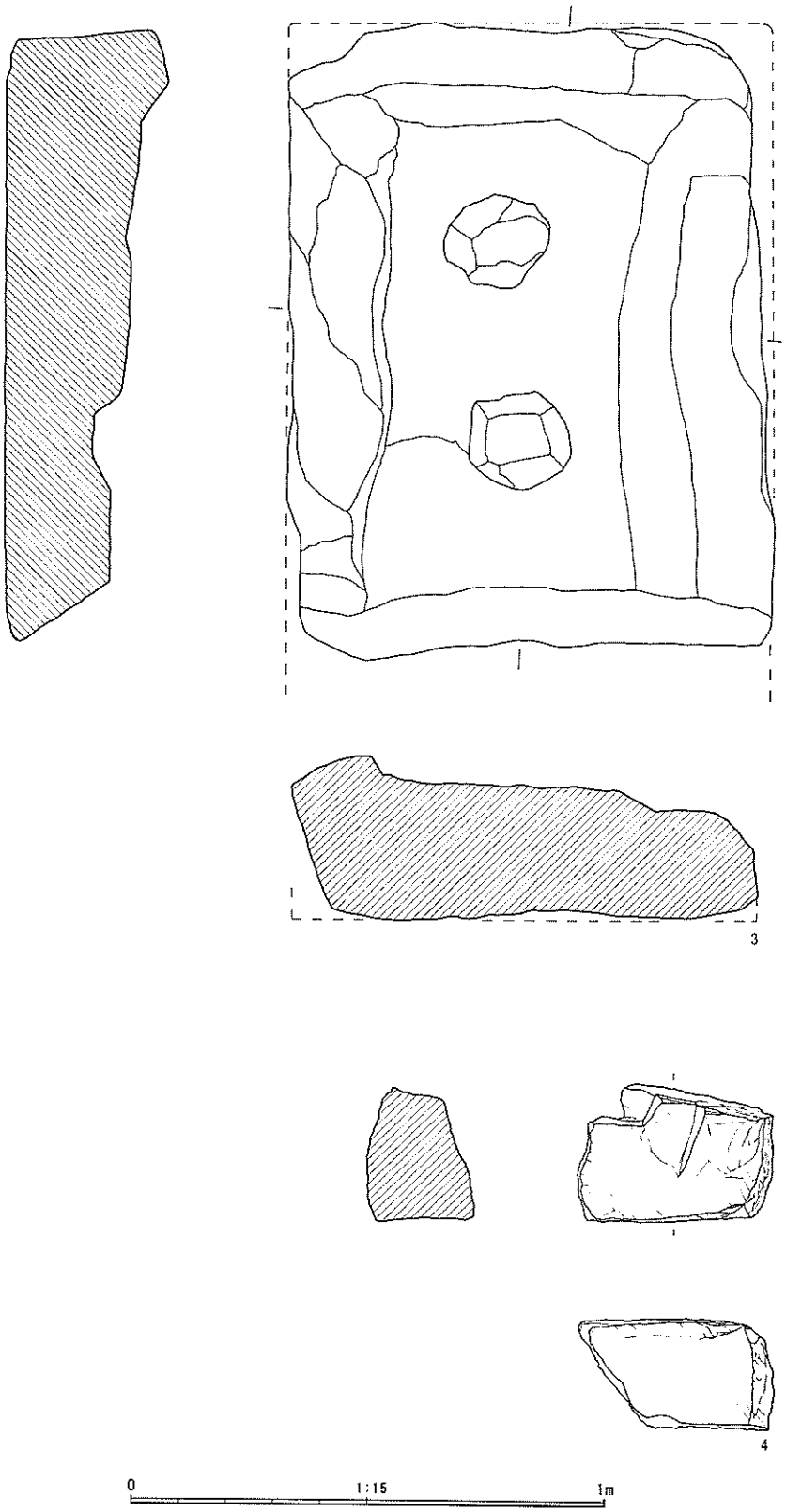


図34　家形石棺（2）

る。残存する寸法は長さ26cm、幅41cm、高さ21cmである。

（3）家形石棺復元案

今回、図示できたのは棺蓋、棺身あわせて4点のみで、限られた情報であるが、できる限り、復元案の一例を提示しておきたい。復元にあたり、棺身の高さについての情報がまったく得られないが、静岡県内で出土している戝機山古墳の家形石棺例を参考に想定復元を行った。棺蓋の情報についても同様に情報が少なく、短辺部につく縄掛突起の大きさや蓋の高さについては推定値であることを断っておきたい。

蓋の形状は四辺傾斜の家形石棺で、刳抜式と考えられる。長辺部は残存する石棺長と現地調査で据付痕跡があったとされる推定値を含めると長さは240cmとされる。

棺蓋復元案（図35）　幅は残存する棺身及び蓋の幅から100cm前後であろう。突起は現状で2片確認しており、6突起の可能性も否定できないが、いずれも短辺部に偏った位置にあり、全体のバランスを考慮して、8突起と想定する。縄掛突起の先端は長方形で、棺蓋斜面部に収まると思わ

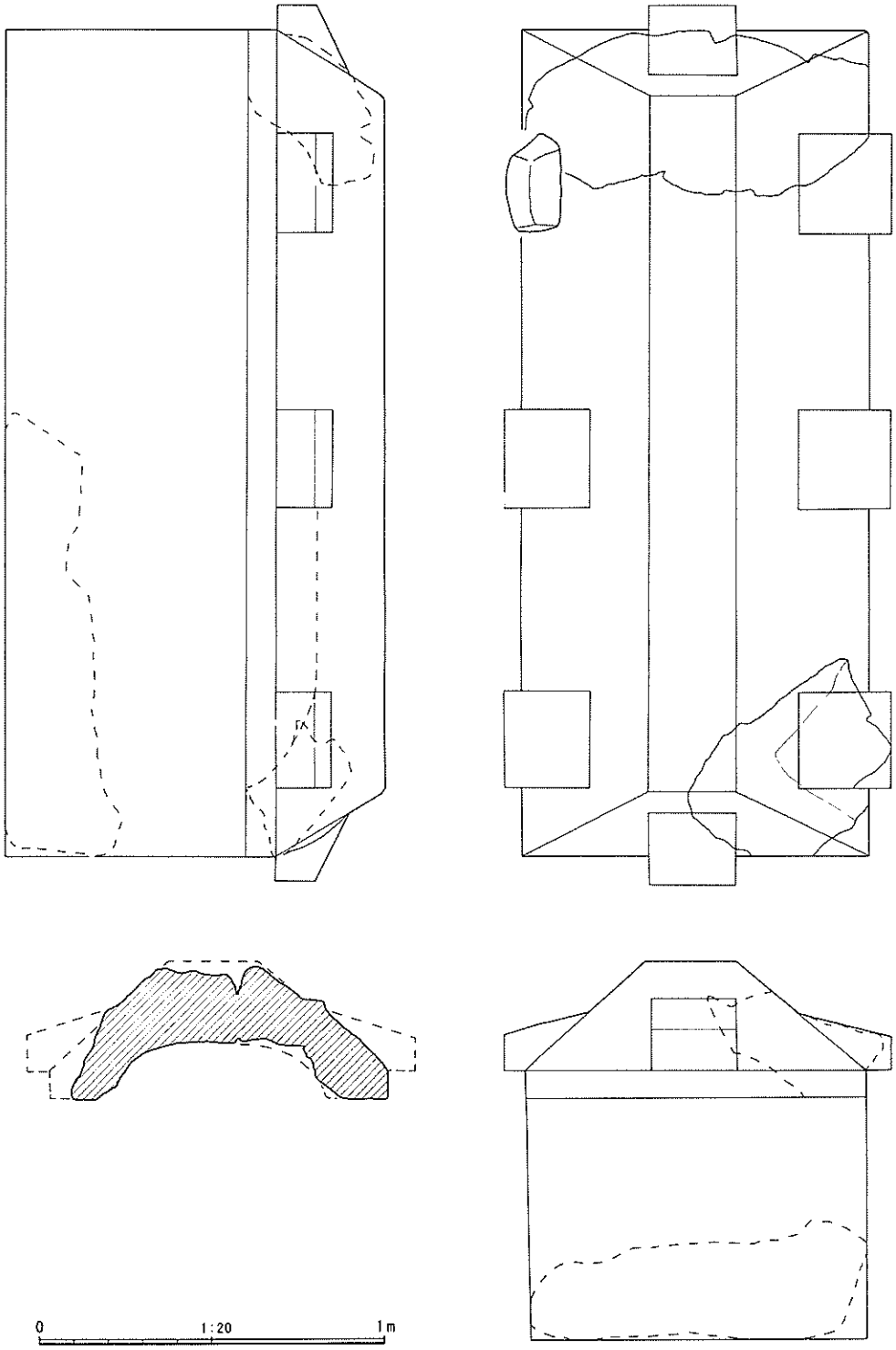


図35　家形石棺　復元案

れる。短辺部にも縄掛突起がうかがわれるため、突起があるものと想定できる。四辺傾斜であるため、棺蓋上面の平坦面の幅は27cmと推定した。棺蓋垂直面は残存しており９cmである。

棺身復元案（図36）　棺身の長さは現地調査において据付痕跡が認められたことから、推定で240cmと考えられる。幅は現存しており、100cmである。ただし、片側の短辺部のみの出土であったため、細かい数値は得られず、短辺における幅の差は不明である。棺身の高さについては破壊を受けているため、不明である。縁の幅はわずかに立ち上がりが認められることから推定で20cmとした。

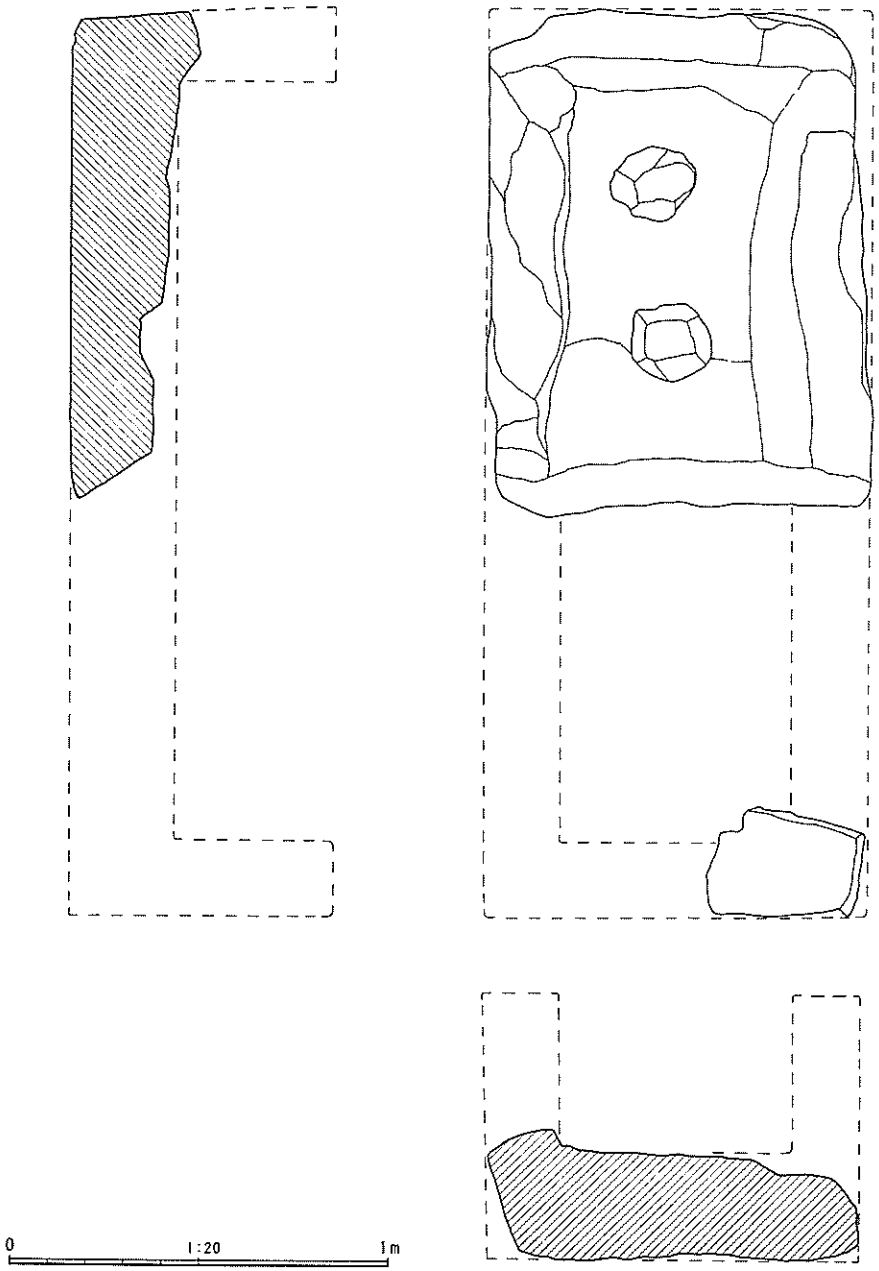


図36　棺身　復元案

5　石室内検出状況

床面の平面形はやや開口部に向かって窄まる形状であるが、基本的には長方形である。長さ7.5m、最大幅２mである。床面には厚さ５cm程度の黒褐色土が敷かれ、奥壁寄りに家形石棺、石室中央右壁寄りで棺台石が配置され、左壁寄りで枕石が認められた。

家形石棺は棺身、棺蓋ともに破壊を受け、原形をとどめていない。棺身の一部が原位置で確認できたにすぎない。

棺台石周辺からは鉄釘が出土していることから、釘付木棺が配置されていたと想定される。

枕石は床石と異なる石材を用いていた。表面は平滑な面を有し、中央部はややくぼむ。その上にはＢ人骨の頭骨が載っていた。四肢骨は集積された状態で、２次的移動を受けていた。

棺の配置　家形石棺は奥壁から1.1mの位置で石室の主軸に合わせて設置された。棺蓋及び棺身の大半は破壊され、破砕された家形石棺材は石棺手前から出土した。石棺材の下部には据付痕跡が確認されたことから、棺身の長辺は240cm程度と推測される。

石室中央の右壁寄り棺台石は少なくとも10石から構成される。２列にして細長い石材の小口を合わせ、扁平な面を上にして敷石のように設置されていた。前方は石の配置が乱れており、本来はさらに南側にも設置されていた可能性が高い。

棺台石上面からは小児の頭蓋骨片が認められた。周囲から鉄釘が出土している。小児に伴うかは不明であるが、釘付木棺が配置されていたと考えられる。

石室中央の左壁寄りでは枕石と人骨が確認できる。後述するＡ人骨は１箇所にまとめて集積されていた。Ｂ・Ｃ人骨の頭骨は確認できるものの、四肢骨は識別が困難なほど混在した状態であった。Ｂ・Ｃ人骨の下部には鉄鏃群が散乱した状態で出土した。

その他の遺構　開口部の段構造の前には足場にしたと思われる石積みがみられた。さらに奥壁左隅でも石積みが２段確認されている。追葬時の片付け行為による可能性も否定できないが、何らかの台としての機能も考えられる。

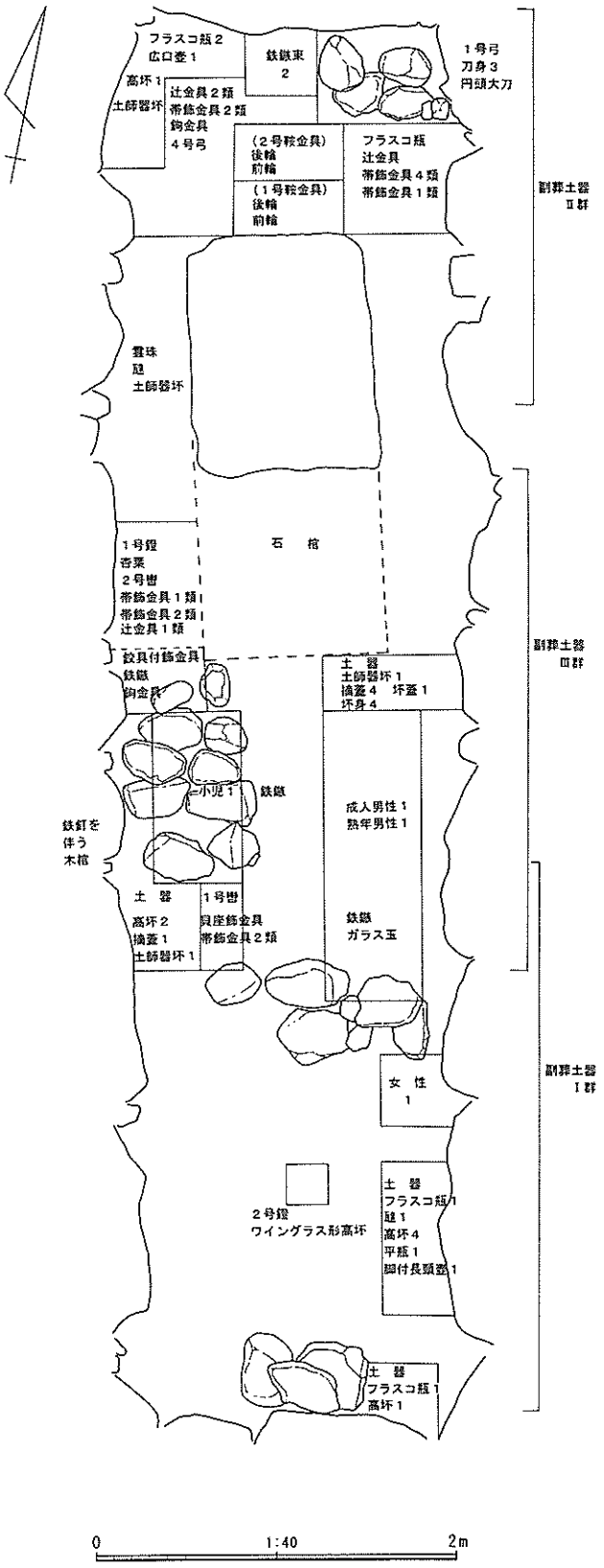


図37　石室内遺物出土模式図

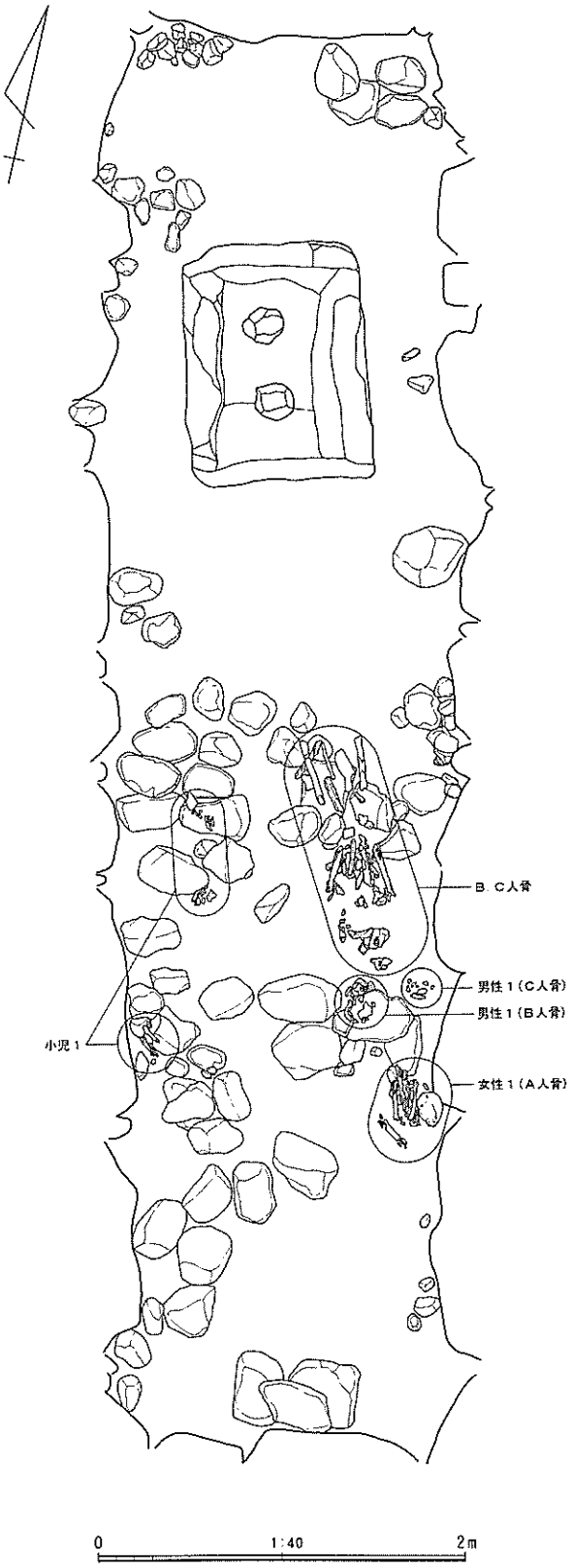


図38　石室内人骨出土状況

（1）人骨出土状況

概　要（図38）　人骨は開口部、石室中央、家形石棺周辺で出土した。家形石棺周辺からの人骨は細片が多く、部位の特定には至らなかった。開口部、石室中央で検出された人骨は交連状態をしめしておらず、片付けや改葬などの2次的移動を受けているものと考えられる。遺存状況は悪く、ほとんどが欠損していた。しかし、人骨調査により少なくとも成人3体分、小児1体分の骨があることが判明した【第2部　構造解析編　pp.69-73】。

以下、頭蓋骨の数から便宜的にA人骨からC人骨と名付け、鑑定した部位をもとに出土状況を簡単に報告する。なお、部位の特定などの詳細は【第2部　構造解析編　pp.76-77】に示してある。

A人骨　A人骨は開口部から1.5m範囲の左壁寄りから出土した。50cmの範囲内に頭蓋骨と四肢骨がまとまって出土しており、この中からは左右大腿骨、腓骨、左右尺骨が残り、他にも右寛骨、右肩甲骨などが残存していた。鑑定により壮年女性とされる。

B・C人骨　B人骨及びC人骨の頭蓋骨はA人骨の出土した位置より北側約50cmのところで出土した。B人骨は枕石上にある。頭頂部を開口部に向け、前頭骨を上にした状態であった。この頭蓋骨のみ原位置を保っていた可能性がある。鑑定により、熟年男性とされる。

その隣の左壁寄りではC人骨の後頭骨の一部が確認されている。鑑定により成人男性とされる。さらに北側では幅50cm、1.5m四方の範囲から長骨を中心にまとまって出土し、なかには獣骨も含まれていた。

B・Cの頭蓋骨に伴う四肢骨を分離するのは困難であり、体肢骨は交連状態ではなかった。よって2次的移動や改葬されたものと考えられる。

小児骨　右壁側の棺台石上から歯、右脛骨の断片が出土している。ほかにも頭蓋骨と長骨の破片が出土している。歯の状態や脛骨の大きさから小児のものとされる。

（2）石室内遺物出土状況

概　要（図39）　石室内の床面直上からは標高36.1ｍ～36.2mの範囲で、土器、馬具、刀剣類、弓矢、金銅製品など多くの遺物が認められた。この高さでは棺台石及び枕石等が検出された。遺物出土位置は大きく奥壁と家形石棺の間の空間、棺台石が検出された石室中央の空間、開口部の空間の３区画に分けられる。

以下、遺物出土状況の記述には石室内の空間を、大きく奥壁と家形石棺の間、石室中央、開口部の３箇所にわける。必要に応じて、家形石棺、棺台石の表現を用いて出土位置をしめす。なお、一括で取上げられた遺物があるため、おおよその出土範囲を奥壁側からＡ区、Ｂ区、Ｃ区、Ｄ区とした（図48）。

記述にあたり、土器、馬具、大刀、鉄鏃、弓金具の品目に分けて、種別ごとに報告する。土器の出土位置にかんしては開口部から出土した土器を副葬土器Ⅰ群、奥壁と石棺の間の空間から出土した土器を副葬土器Ⅱ群、石室中央から出土した土器を副葬土器Ⅲ群として扱う。

奥壁と家形石棺の間　この空間には副葬土器Ⅱ群、１号鞍金具、２号鞍金具、雲珠、辻金具２類、鉤金具、帯飾金具、銀象嵌円頭大刀をはじめとした刀剣類、鉄鏃束１、鉄鏃束２、弓金具１類～３類、ガラス玉１類など石室内において最も豊富に遺物が出土した。

石室中央　１号轡、２号轡、鉸具付飾金具、杏葉、帯飾金具、鉄鏃、副葬土器Ⅲ群が認められる。この付近の遺物は細片化したものが多く、石室内で最も散乱した状態であった。特に坏身、鉄釘などは標高36.2m～36.3mの範囲にみられた。石棺の破壊に伴い、巻き上げられた可能性が高い。

鉄鏃はＢ、Ｃ人骨下より出土していることから、この部分では複数の埋葬面として捉えることも可能である。

開口部　副葬土器Ⅰ群、２号鐙（輪鐙）、金銅装大刀装具、鉄鉾、二円孔鍔が出土した。土器の遺存状況は良好であるものの、金銅装大刀装具は破片が多い。

（3）土器出土状況

概　要　土器は開口部（副葬土器Ⅰ群）、奥壁と石棺の間（副葬土器Ⅱ群）の空間、石室中央（副葬土器Ⅲ群）、の３箇所から出土した。副葬土器Ⅰ群、副葬土器Ⅱ群の遺存状況は比較的良好で、まとまって出土した。副葬土器Ⅲ群は破壊された石棺周囲であることから破片資料が多い。また、多くの破片は巻き上げられ、高い位置からの出土であった。

開口部（副葬土器Ⅰ群）　左壁に沿って２箇所にわたり、多くの土器が出土した。左壁やや奥側では８個体の須恵器がある。内訳はフラスコ瓶（36）、脚付長頸壺（29）、 瓿（20）、高坏（23、27、28、30）、平瓶（21）である。ほとんどが完形、あるいは接合作業で完形に近い形に復元できた。高坏（30）の坏部は石室内に認められなかった。

設置状況を復元すると奥壁側から脚付長頸壺（33）、高坏（23）、高坏（30）、フラスコ瓶（36）、高坏（27）、瓿（20）、高坏（28）、平瓶（21）の順に置かれており、坏類の出土はみられなかった。このほか、これらの遺物からやや離れた中央から斜位の状態でワイングラス形高坏（31）が斜位の状態で出土した。

左壁寄りの開口部では高坏（29）、フラスコ瓶（39）が重なりあうように出土した。ほぼ完形であることから、それほど原位置からは動いていないと思われる。

奥壁と石棺の間（副葬土器Ⅱ群）　この空間では右壁寄りを中心にフラスコ瓶３点（37、34、35）、短頸壺１点（32）、高坏１点（24）、瓿１点（19）、土師器坏２点（３、４）が出土した。

右壁隅にフラスコ瓶（37）、短頸壺（32）が置かれていた。これらの土器は礫で固定されていた可能性がある。その南側では土師器坏（４）、フラスコ瓶（34）が重なりあうように出土し、やや離れた位

図39　石室内遺物出土状況

図40　石室床面

置から高坏（24）が出土した。これらの土器はほぼ完形で、やや移動した状態ではあるが、右壁に沿って配置されていたと想定される。石棺の右脇からは瓶（19）、土師器坏（３）が出土した。瓶（19）は体部で、口縁部はその周辺から出土していることから移動している可能性が高い。土師器坏（４）は完形で、瓶の体部と重なりあって出土している。若干の移動が想定できるが、原位置から大きく離れていないと考えられる。右壁ではフラスコ瓶（35）が出土している。

石室中央（副葬土器Ⅲ群）　石室中央は人骨が多く認められた空間で、副葬土器Ⅲ群は摘蓋、坏身を主体とする。摘蓋４点（９、10、11、12）、坏蓋１点（６）、坏身４点（15、16、17、18）、高坏２点（25、26）、土師器坏２点（１、２）である。坏身は細片化しており、残存状況は良好ではない。摘蓋、坏身は標高36.4mの位置で、破片資料が数多く認められ、左壁寄りを中心に出土した。フラスコ瓶をはじめとした瓶類は認められなかった。

一方、高坏（25、26）は右壁に沿って出土した。高坏（26）は破片資料であったが、石室中央より接合関係が認められた。高坏（25）は右壁寄りにおいて、逆位の状態で出土した。

土師器暗文坏（１）は開口部寄りの中央から出土した。土師器暗文坏（２）は石棺寄りの中央より出土した。

（４）馬具出土状況

概　要（図43・44）　奥壁と家形石棺の間から、鞍金具４点（８、９、15、16）、辻金具３点（26～28）、鉤金具２点（35、36）、雲珠１点（29）、鉸具３点（57、59、60）、帯飾金具３点（40、47、55）が出土した。

鞍金具は破片が散乱した状態であったが、おおよその形状を復元することができた。このほか同位置で、一括で取上げられたものもあり、海金具３点（12～14）、２号鞍金具後輪に伴う鋲４点（17～21）、帯飾金具３点（42、49、50）、鉸具１点（61）が含まれる。出土位置の標高は大半が36.2m前後であっ

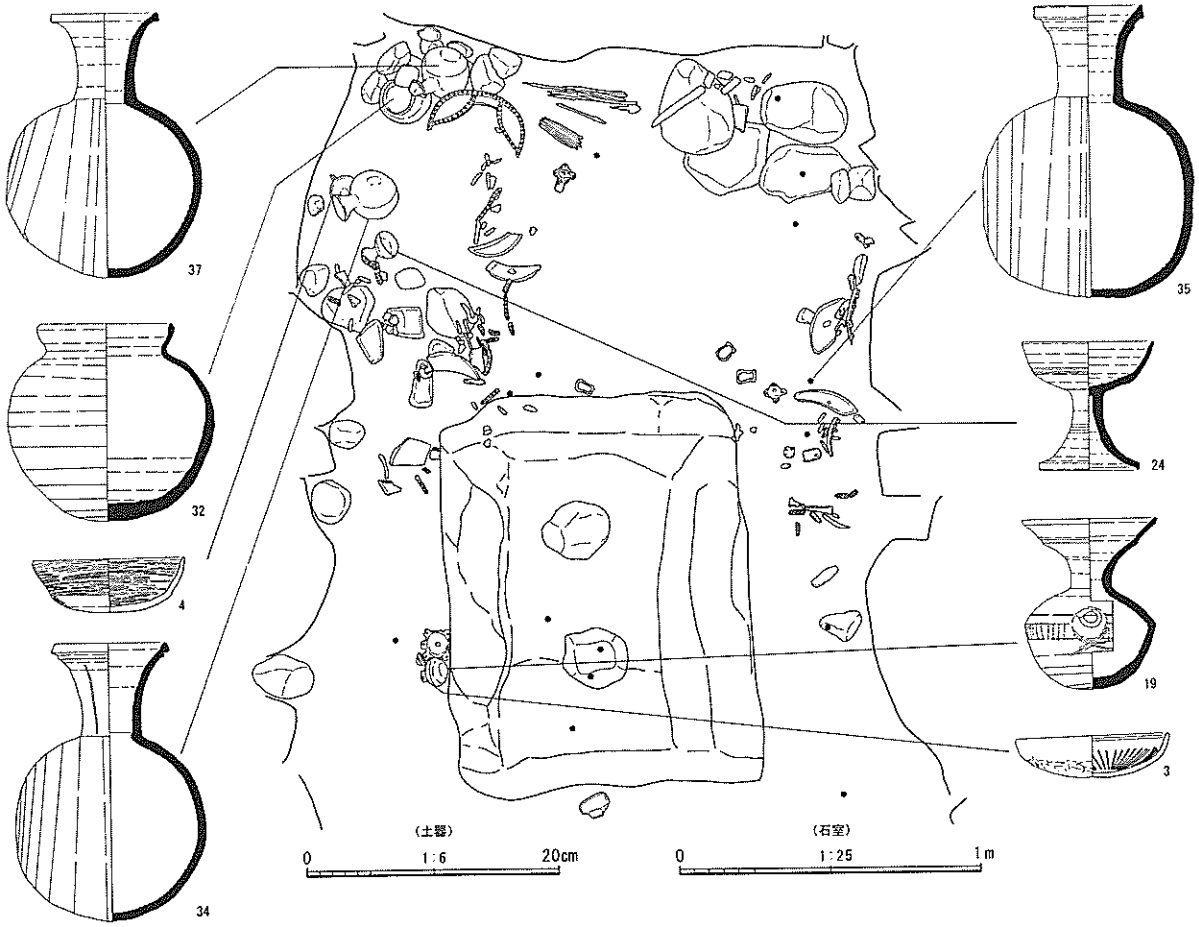


図41　副葬土器Ⅱ群出土状況

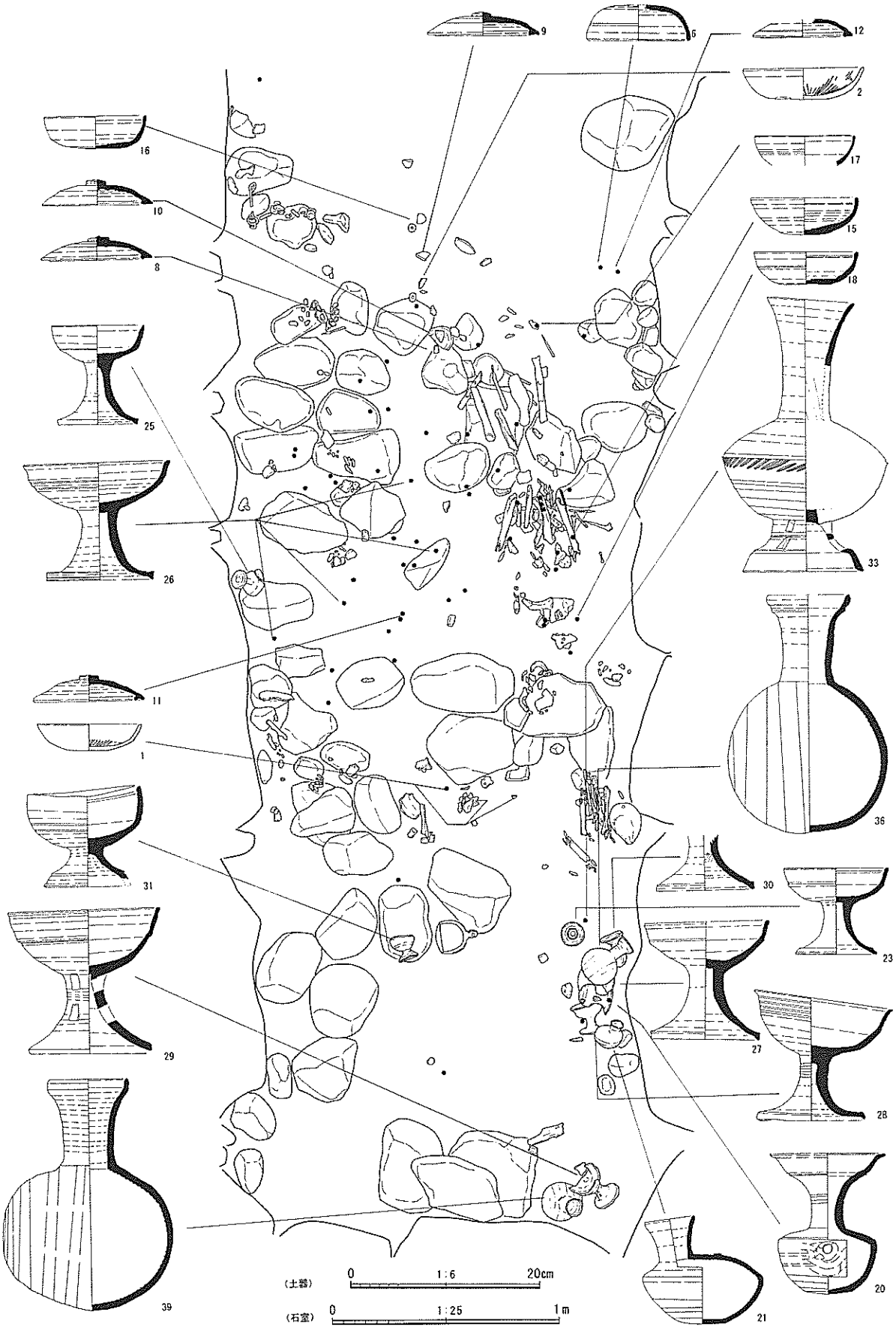


図42　副葬土器Ⅰ・Ⅲ群出土状況

た。

馬具は、石棺前から開口部にかけて、広範囲に認められた。右壁に沿って1号轡1点（1）、2号轡1点（7）、1号鐙2点（22、23）、2号鐙1点（24）、辻金具1類1点（25）、杏葉1点（30）、鉸具付飾金具4点（31～34）、貝座金具2点（37、38）、鉸具1類1点（56）、鉸具2類1点（58）、帯飾金具1類1点（39）、帯飾金具2類5点（41、43～46）、帯飾金具3類1点（51）が出土した。

奥壁と家形石棺の間の空間は鞍を2組配置したことがうかがえ、雲珠（29）、辻金具（25～28）といった尻繋がこの空間におさめられていたと考えられる。

これらの馬具の出土位置を総合すると奥壁と家形石棺の間には鞍2組と雲珠を含む尻繋が置かれ、右壁と家形石棺の間には1号鐙（22、23）や、2号轡（7）を含む面繋、辻金具1類（25）、杏葉（30）を含む尻繋が認められた。さらに石室中央には鉸具付飾金具（32、33）（31、34）が2点ずつ置かれている状態で、2号鐙（24）は開口部で認められた。

1号轡（1～6）の出土位置は不明瞭であるが、1号鞍金具（8、9）や1号鐙（23）、辻金具1類（25）、杏葉（30）などの古相の馬具は奥壁と家形石棺の間から右壁寄りを中心におかれたと推測される。

新相の馬具では2号鐙（22）は2次的移動を受けているものの、雲珠（29）、辻金具2類（26～28）、2号鞍金具（15、16）は奥壁と家形石棺の間と右壁寄りから出土しており、古相・新相の馬具の出土位置は類似する傾向にあった。

1号轡　1号轡は破片4点出土している。遺存状態は悪く、広範囲にわたり破片が分布していた。遺存部分が大きい1は石室中央から出土した。2、5、6は破壊された石棺付近石から出土した。

2号轡　2号轡（7）は右壁寄りの床石上からまとまって出土した。周辺には1号鐙（23）、辻金具1類（25）、杏葉（30）が認められる。一括して出土していることから、原位置から大きく離れていないと捉えられる。

1号鞍金具前輪　1号鞍金具前輪（8）は破片が分散した状態であった。

左磯金具は右壁寄りの家形石棺前から出土し、裏側を上にした状態であった。付近から1号鞍金具後輪の磯金具も出土している。右磯金具は左磯金具からやや離れた位置の空間から、表面を上にした状態で出土した。1号鞍金具前輪に伴う縁金具も左右磯金具周辺にみられ、州浜金具は右壁寄りの別の箇所から縁金具とともに出土した。

このように1号鞍金具前輪の出土位置は大きく3箇所にわたり、遺物の散布がみられた。

1号鞍金具後輪　1号鞍金具後輪（9）の破片はやや離れた位置から出土した。左磯金具は奥壁と家形石棺の間の右壁寄りで出土し、表を上にした状態であった。縁金具は左磯金具よりやや手前から集中して出土しており、2号鞍金具後輪の縁金具とともに出土した。右磯金具は家形石棺と左奥壁との間から出土し、裏側を上にして出土した。州浜金具はそこから手前で縁金具とともに出土している。

このように1号鞍金具後輪は左壁寄りと右壁寄りから出土しており、1号鞍金具前輪の散布状況と比べるとやや広範囲にわたる。

2号鞍金具前輪　2号鞍金具前輪（15）は完形で、奥壁の右壁寄りの須恵器と鉄鏃の間から表面を上にして出土した。1号鞍金具と比べると出土位置は数cm高い。

2号鞍金具後輪　2号鞍金具後輪（16）は大きく2箇所から出土した。左磯金具は左壁寄りから出土し、裏側を上にした状態で、縁金具とともに出土した。右磯金具は表を上にした状態で、右壁寄りの家形石棺隅から出土した。1号鞍金具後輪と比べると出土位置は数cm高い。

1号鐙　1号鐙（22、23）は2点出土し、これらは1組分と考えられる。23は家形石棺前の右壁寄りで出土した。正位の状態で出土し、完形であった。22は分散した状態で、家形石棺が廃棄された空閑地から出土した。22、23は比較的近接した位置から出土しており、本来は家形石棺手前の右壁寄りに置か

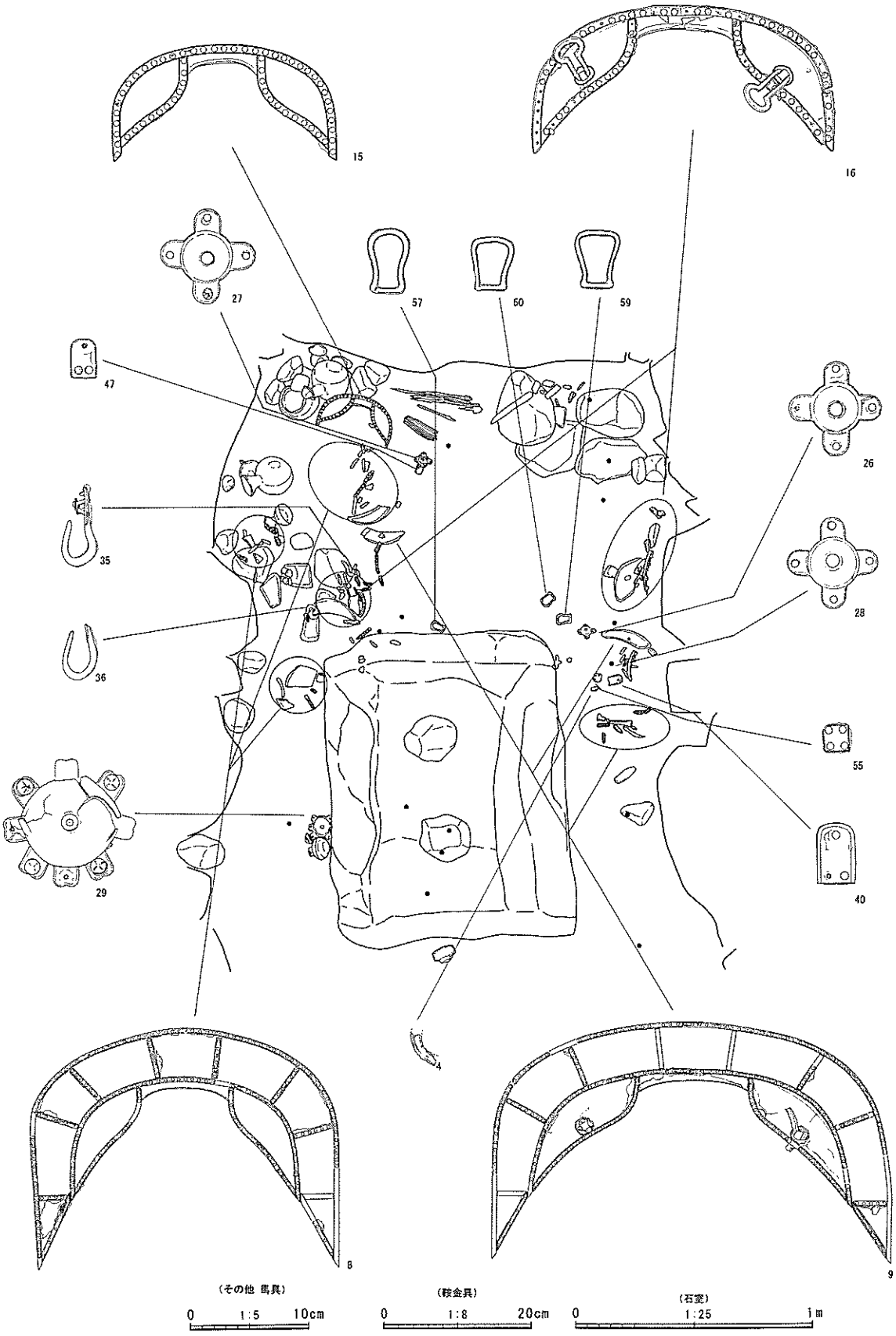

15
16
27
57
60
59
47
26
35
28
36
55
29
40
4
8
9
（その他 馬具）
0 1:5 10cm
（鞍金具）
0 1:8 20cm
（石室）
0 1:25 1m

図43　馬具出土状況（1）

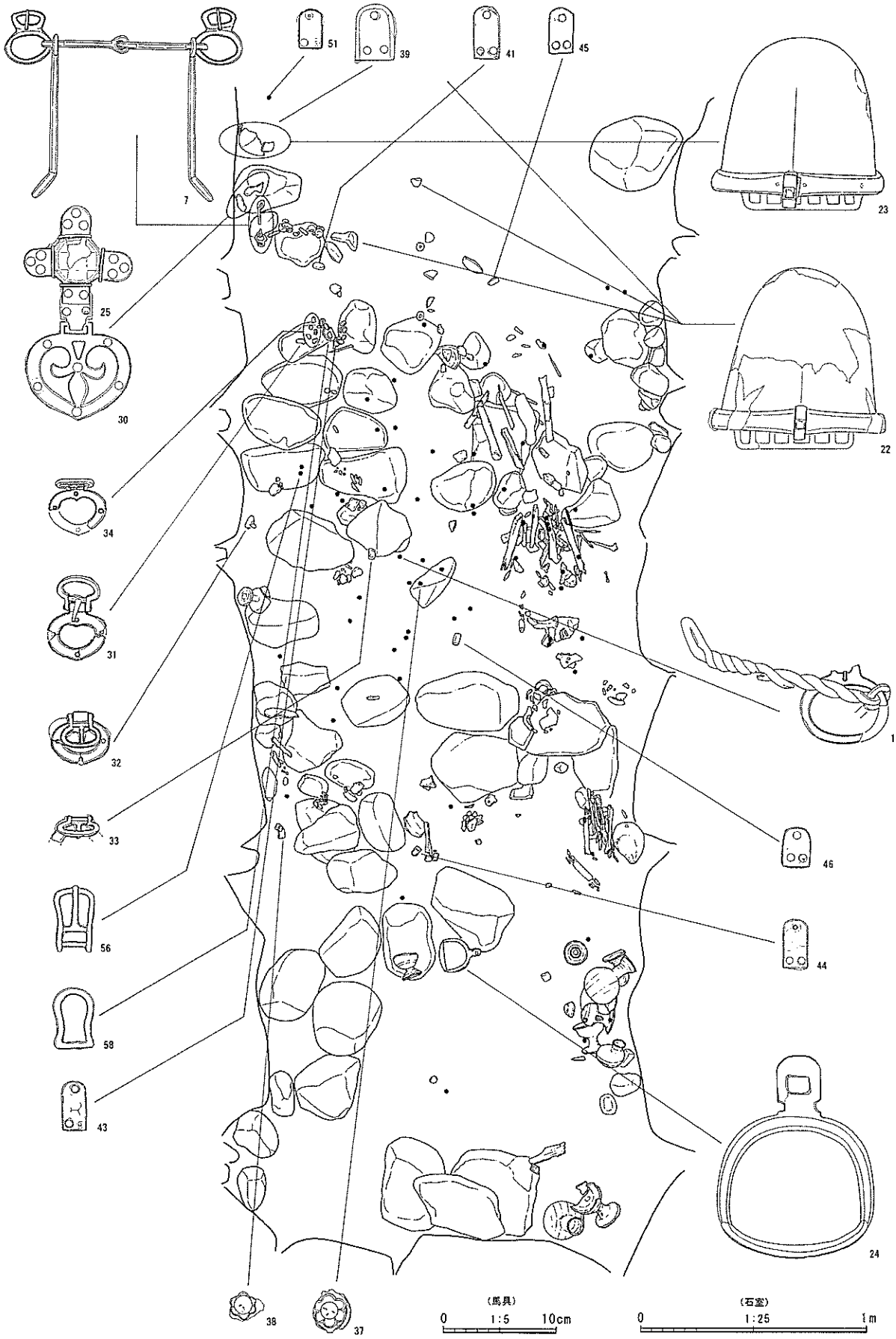

51
39
41
45
7
23
25
30
22
34
31
32
1
33
46
56
44
58
43
24
38
37
(馬具)
0 1:5 10cm
(石室)
0 1:25 1m

図44　馬具出土状況（２）

れていたと推測される。

2号鐙　2号鐙（24）は開口部寄りで出土した。1点のみの出土であり、完形である。24は鐙鞦受穴を左壁側に向け、横位の状態であった。片方は破片すら確認されない。後世に持ち去られた可能性が高いが、副葬当初から片方の鐙のみであったとも考えられる。

辻金具1類と杏葉　杏葉（30）は完形の1号鐙（23）の南側で出土した。杏葉（30）と辻金具1類（25）は分離していたが、杏葉の鉤金具と辻金具の脚に接合関係が認められた。杏葉は表面を下にした状態であった。

雲　珠　雲珠（29）は右壁と家形石棺の間の空間のやや開口部寄りで認められた。璁（19）とともに裏側を上にした状態であった。

鉸具付飾金具　鉸具付飾金具は4点出土した。出土位置は大きく棺台石の南端と北端の2箇所に分けられる。そのうち32、33は棺台石北側で、鉸具1類（56）、帯飾金具2類（46）と混在していた。31、34は棺台石の南側で出土した。31の近辺には1号轡（1）が認められる。

鉤金具　鉤金具2点（35、36）は奥壁と石棺の間の空間で、2号鞍金具後輪とともに出土した。

貝座飾金具　貝座飾金具は2点認められ、38は右壁寄りの開口部寄り、37は棺台石南側から出土した。2点が出土した高さは大きく異なる。38は標高36.1m前後と他の遺物とほぼ同一高で、37は標高36.5mとやや高い位置から出土した。

帯飾金具　帯飾金具は奥壁側から開口部の広い範囲にわたり出土した。出土位置が明確なものは、帯飾金具1類2点（39、40）、帯飾金具2類6点（41、43～45、46、47）、帯飾金具3類1点（51）、帯飾金具4類1点（55）の合計10点である。

帯飾金具1類（40）は奥壁側で出土しており、2類（47）は奥壁から開口部の広い範囲で認められた。帯飾金具3類（51）は家形石棺手前の右壁寄りから出土した。帯飾金具4類（55）は奥壁側の左壁付近からの出土であった。このほか一括で取上げたものもあり、出土位置が不明瞭であるが、石室中央から奥壁部分（A区・B区）から帯飾金具2類4点（42、48、49、50）、帯飾金具3類2点（52、53）が出土した。

鉸　具　出土位置が明確なものは5点ある。鉸具2類（57、59、60）は奥壁と石棺の間の中央部から出土した。鉸具1類（56）、鉸具2類（58）は石室中央の棺台石上で認められた。58は鉸具付飾金具（32、33）帯飾金具（43）とともに出土した。このほか一括で取上げられたものがあり、鉸具2類（61、62）は石棺と奥壁の間のA区からの出土である。

（5）刀剣類出土状況

概　要（図45・48）　大刀は切先の数から少なくとも4点分が確認され、最大6点が想定される。装具との組合せから、金銅装圭頭大刀1点、銀象嵌円頭大刀1点、二円孔鍔を有する大刀1点、無窓鍔を有する大刀1点が確認できる。

これらの大刀の出土位置は大きく奥壁と家形石棺の間と開口部側の2箇所に分けられる。奥壁と石棺の間から2点の大刀切先（31、39）が出土した。開口部では金銅装大刀装具（2～6）の破片が散乱した状態で、金銅装圭頭大刀と想定される刀身（32）、切先（33）が出土した。家形石棺の破砕状況を考慮すると本来は家形石棺内に納められていた可能性が高い。このほか開口部では二円孔鍔1点（22）、鉄鉾1点（40）、鉄製刀子1点（41）が出土した。

以下、馬具と同様に種別ごとに出土状況を報告する。

銀象嵌円頭大刀　円頭大刀柄頭（26）は左奥壁隅の台状の施設で柄頭の先端を開口部側に向け、横位に出土した。

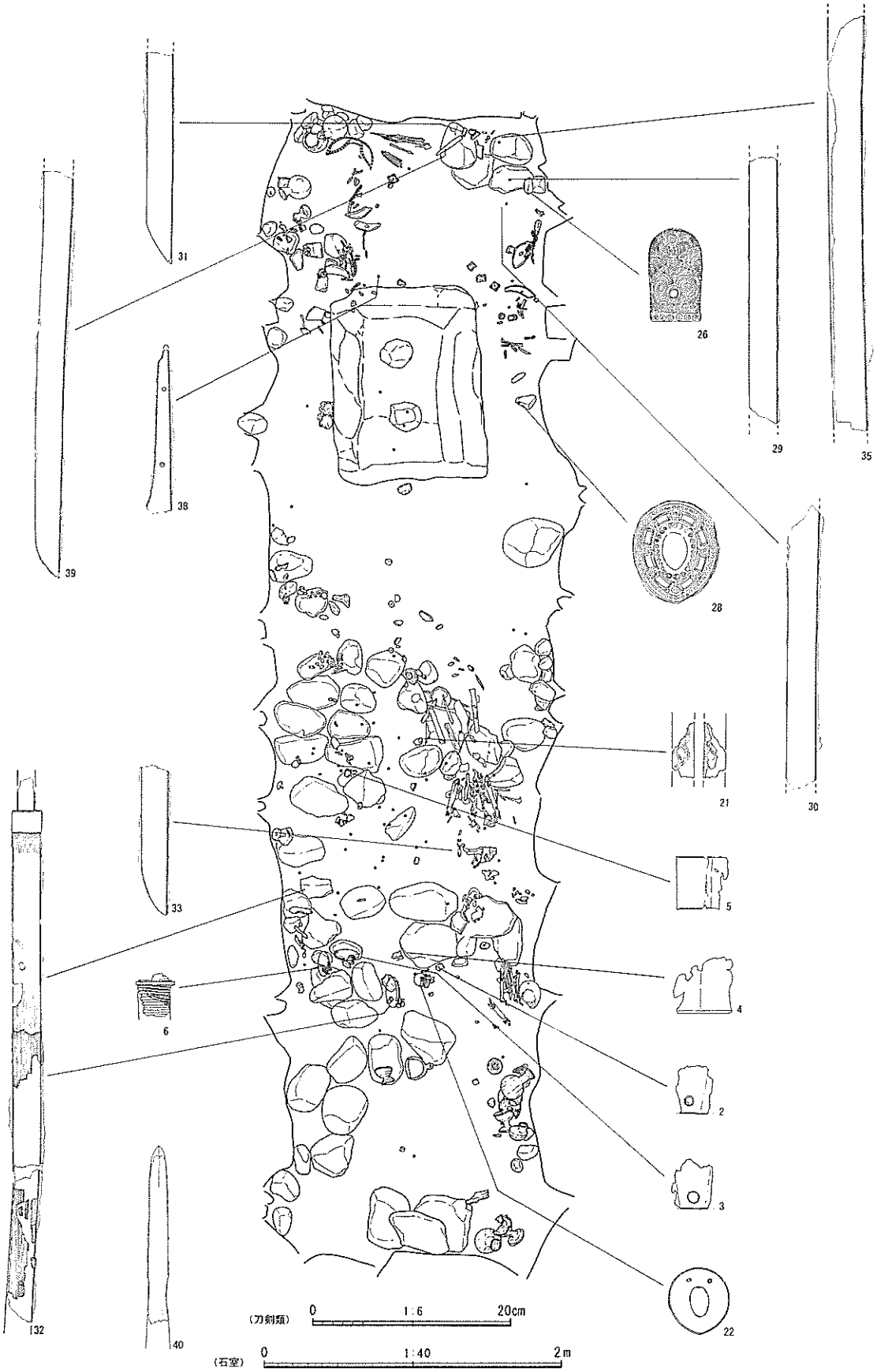


図45　刀剣類出土状況

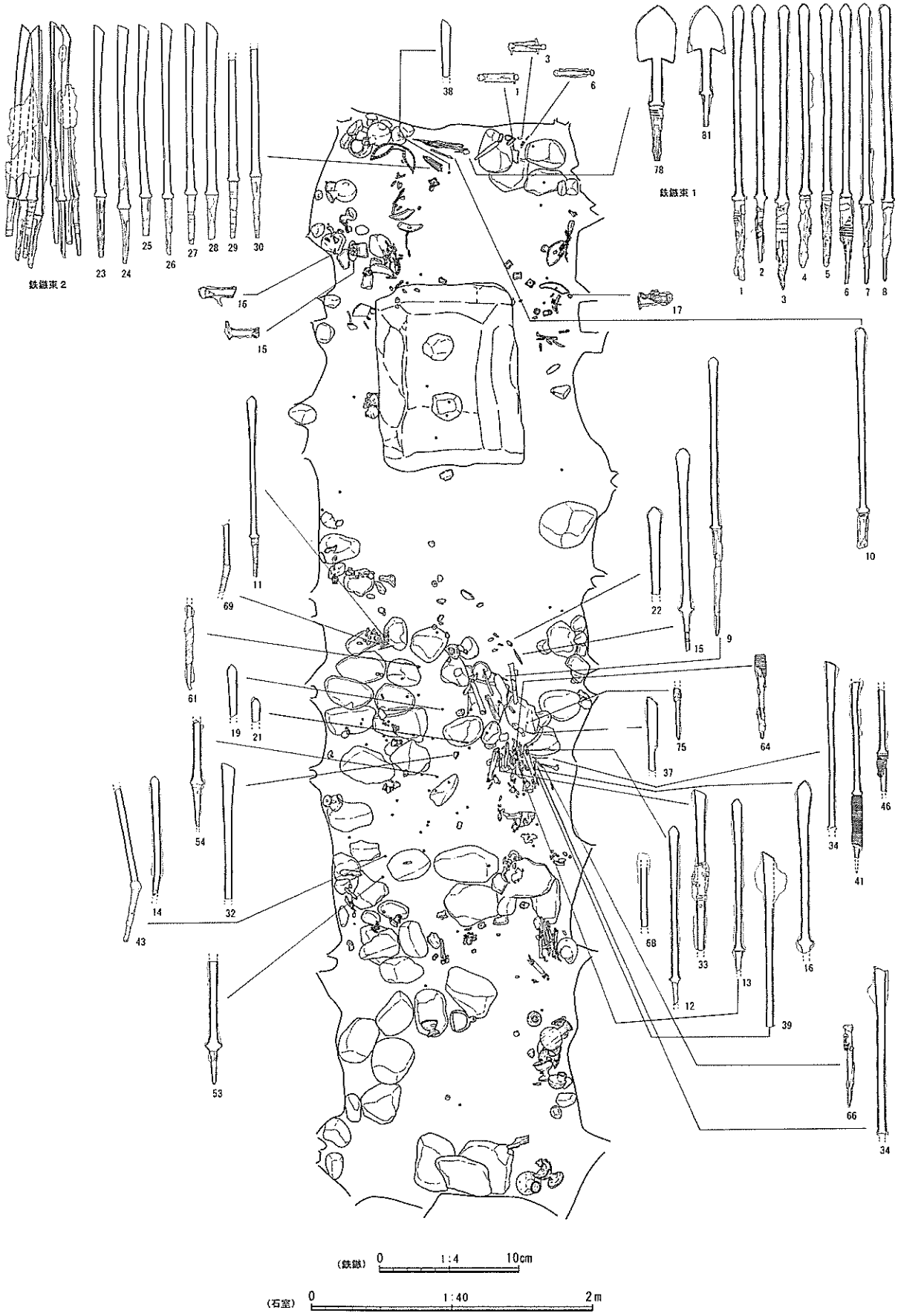


図46　鉄鏃・弓金具出土状況

銀象嵌鍔（28）は家形石棺と左壁の間から出土している。銀象嵌鍔(28）の出土した高さは標高36.2mで、坏身、摘蓋が出土した高さと同一であった。

銀象嵌円頭大刀に伴う刀身は奥壁左隅の刀身（35、36）が想定される。

鍔と柄頭が出土した位置は近接しているものの２次的な移動があった可能性が高い。刀身（35）が立て掛けられていることから、切先を下に向けて置かれていたと推定できる。なお、出土位置は明確ではないが、柄縁金具（27）は石室中央付近から出土した。

金銅装圭頭大刀　金銅装圭頭大刀の装具（２～６）は今回出土した大刀の中で最も散乱した状態であった。出土した高さは他の遺物とそれほど変わらず、標高36.1m前後の範囲にまたがっている。

出土位置は石室中央から開口部寄りにかけて柄頭（２、３）、柄間金具（４、５）、推定大刀装具（24）の破片が多く認められた。

推定される金銅装圭頭大刀の刀身(32）と切先（33）は床面より１m高い位置から出土しており、２次的な移動が認められる。家形石棺の破砕状況と金銅装圭頭大刀と推定される刀身（32）の遺存状況から、金銅装圭頭大刀は石棺内に納められた可能性が高い。

金銅装推定大刀装具　７点が図示できたが、出土位置は石室全体にわたる。そのうち奥壁と家形石棺の間からは18が出土し、15、17は石室中央の人骨近辺で、19は開口部から出土した。

鉄製二円孔鍔　鉄製二円孔鍔（22）は石室開口部より出土した。周辺に

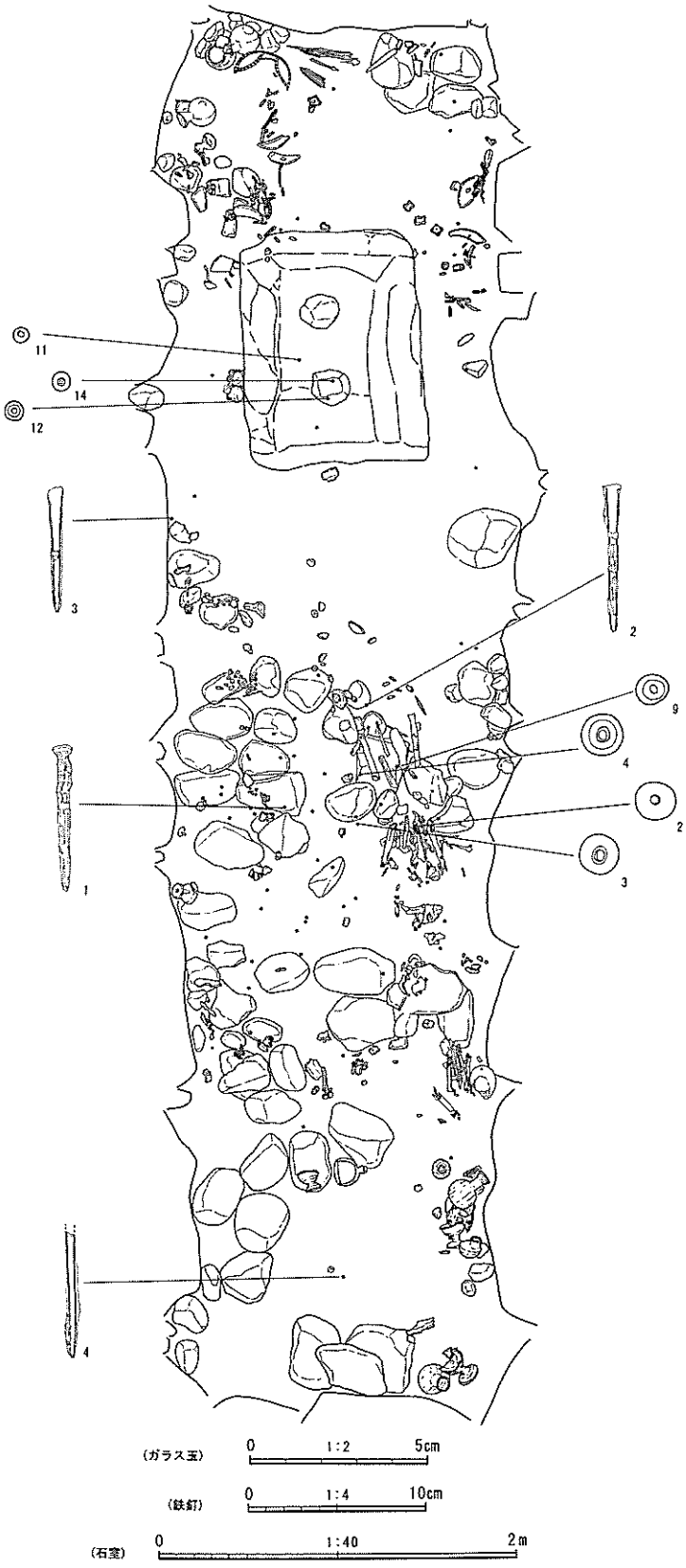


図47　ガラス玉・鉄釘出土状況

は金銅装圭頭大刀柄頭（５、６）や金銅製鐔を有する刀身（32）が認められた。

無窓鍔　鉄製無窓鍔（23）の出土位置は不明である。

刀　身　奥壁の左隅には５個の石から構成される施設があり、この場所から３点の大刀破片が出土した。31、39はいずれも切先を下方に向け、斜位に出土していることから立て掛けられていたと考えられる。特に39は床面に切先をつけ、31の切先は石積みの段の上に切先を下に向けており、切先が段差をなしていた。ただし、31に伴う刀身（30、29）は標高36.4m台と高く、離れた場所から出土した。

隅抉尻細茎（38）は奥壁と家形石棺の間の空間から出土した。高さは標高36.3m台と比較的高い位置で立てかけられた可能性が高いと判断できる。

（６）鉄鏃出土状況

概　要（図46）　鏃身の形態を確認できる鉄鏃は41点である。出土位置は大きく、石棺と奥壁の間と石室中央の２箇所に分けられる。石棺と奥壁の間では平根式五角形鏃（78）、平根式三角形鏃（79）と９点の尖根式鑿箭鏃（１～８）で構成される鉄鏃束１と８点の尖根式片刃箭鏃（23～30）で構成される鉄鏃束２が床面中央から出土した。これらの鉄鏃束を収納する靫、胡籙といった武具の存在は不明であった。

鉄鏃束１　鉄鏃束１は完存しており、やや東側に切先を向けて出土した。平根式五角形鏃（78）、三角形鏃（80）の２点と９点の尖根式鑿箭鏃（1～8、10）で構成される。２つの束はほぼ同一面から検出した。

鉄鏃束２　鉄鏃束２は切先を南東側に向けて出土した。８点の尖根式片刃箭鏃（23～30）で構成され、鏃身は２点欠損しているが、ほぼ完形である。

その他の鉄鏃　その他の鉄鏃は石室中央から出土し、Ｂ・Ｃ人骨の長骨が混じる下層から散乱した状態であった。少なくとも尖根式鑿箭鏃９点（９、12～16、19、21、22）、尖根式片刃箭鏃６点（32～34、37、39、40）は出土位置が明確である。

詳細な出土位置は不明確であるが、鉄鏃には図48に示されるように一括して取上げられたものがある。石室中央に相当するＢ区、Ｃ区から尖根式片刃箭鏃（31、35、38、）、尖根式鑿箭鏃（17、20）が出土した。さらに開口部寄り（Ｄ区）から尖根式鑿箭鏃（18）が出土した。

（７）弓金具出土状況

概　要（図46）　弓金具は17点（１～17）ある。このうち出土位置が判明したものは弓金具１類が３点（１、３、６）、弓金具４類が３点（15、16、17）合計６点である。一括で取り上げたものを含めると、17点の弓金具の出土位置は大きく奥壁と石棺の間と石室中央に分けられる。

４点の弓　弓金具は小型で、移動しやすいため、大きさの復原、末弭、本弭の位置関係、さらに末弭側、本弭側に弓金具がつく個数に関しても不明であった。材質と形態から４点の飾弓が想定され、これらの出土位置はそれほど大きく移動していないことから、奥壁と家形石棺の間には３点の飾弓、石室中央に１点の飾弓がおさめられたと考えられる。そのうち弓金具１類が伴う１号飾弓は立て掛けられていたと想定される。また、弓金具２類、４類が伴う２号飾弓、４号飾弓も奥壁と家形石棺の間の空間におさめられたと考えられる。

弓金具１類　弓金具１類は左壁隅から３点（１、３、６）出土している。この隅には、人頭大の礫が置かれており、大刀が立て掛けられていた場所である。弓金具１類もこの礫の上面から出土した。出土位置は明確ではないが、同類の弓金具（２、４、５）も奥壁と家形石棺の間から出土した。このように大刀とともに弓金具１類を装着した１号飾弓も立て掛けられたと想定される。

弓金具２類　出土位置の詳細は図示できないが、奥壁と石棺の間から弓金具２類が４点（７～10）出土した。このことから、弓金具２類を装着した２号飾弓は奥壁と石棺の間に納められていたと考えられる。

弓金具３類　弓金具３類は詳細な出土位置は不明であるが、石室中央（Ｂ区）から２点（11、13）出土している。このほか弓金具３類１点（12）は詳細な位置は不明である。

弓金具４類　弓金具４類は奥壁と家形石棺の間から４点出土している。15、16は右壁寄りで確認された１号鞍金具前輪の州浜金具とともに出土した。17は石棺と左壁の間から出土し、周辺には１号鞍金具後輪の左磯金具や州浜金具がある。出土位置は明確ではないが、14は奥壁と石棺の間に相当するＡ区から出土した。

（８）ガラス玉出土状況

ガラス玉は合計で14点（１～14）出土した。そのうち出土位置が明確なものは７点（２～４、９、11、12、14）である（図47）。大きく、家形石棺部分と石室中央の２箇所にガラス玉の分布が認められる。家形石棺は破壊を受けており、石室中央のＢ・Ｃ人骨は集積された状態で、いずれもこの周囲は遺物が散乱した状態であった。

破壊された家形石棺上部よりガラス玉３点（11、12、13）が出土した。家形石棺内の被葬者に伴うものであろう。一方で、径１cm程度のガラス玉はＢ・Ｃ人骨に伴う長骨や大腿骨が集積された位置から４点（２、３、４、９）出土した。

（９）金銅製装身具出土状況

馬具、刀剣類に伴わない金銅製遺物は９点（１～９）出土した。詳細な出土位置は不明であるが、花弁形歩揺（１）、円形文付飾金具（３）は石室中央に相当するＣ区から出土した（図48）。歩揺釣り手（２）も石室中央の上層から出土した。金銅製遺物（１～９）は高い位置からの出土で、石棺が破壊されていることから、本来は石棺内の被葬者に伴うものであろう。

(10) 鉄釘出土状況

図化できた釘は６点（１～６）あるが、出土位置が明確なものは４点（１～４）である（図47）。

１は標高36.5m前後と高い位置から出土しており、原位置をとどめていない可能性がある。２は標高36.3m前後と坏蓋、坏身が出土した高さと同様で、石室中央から出土した。３は石室中央床面上で１号鐙とともに出土した。いずれもこれらの釘先方向は不明であった。

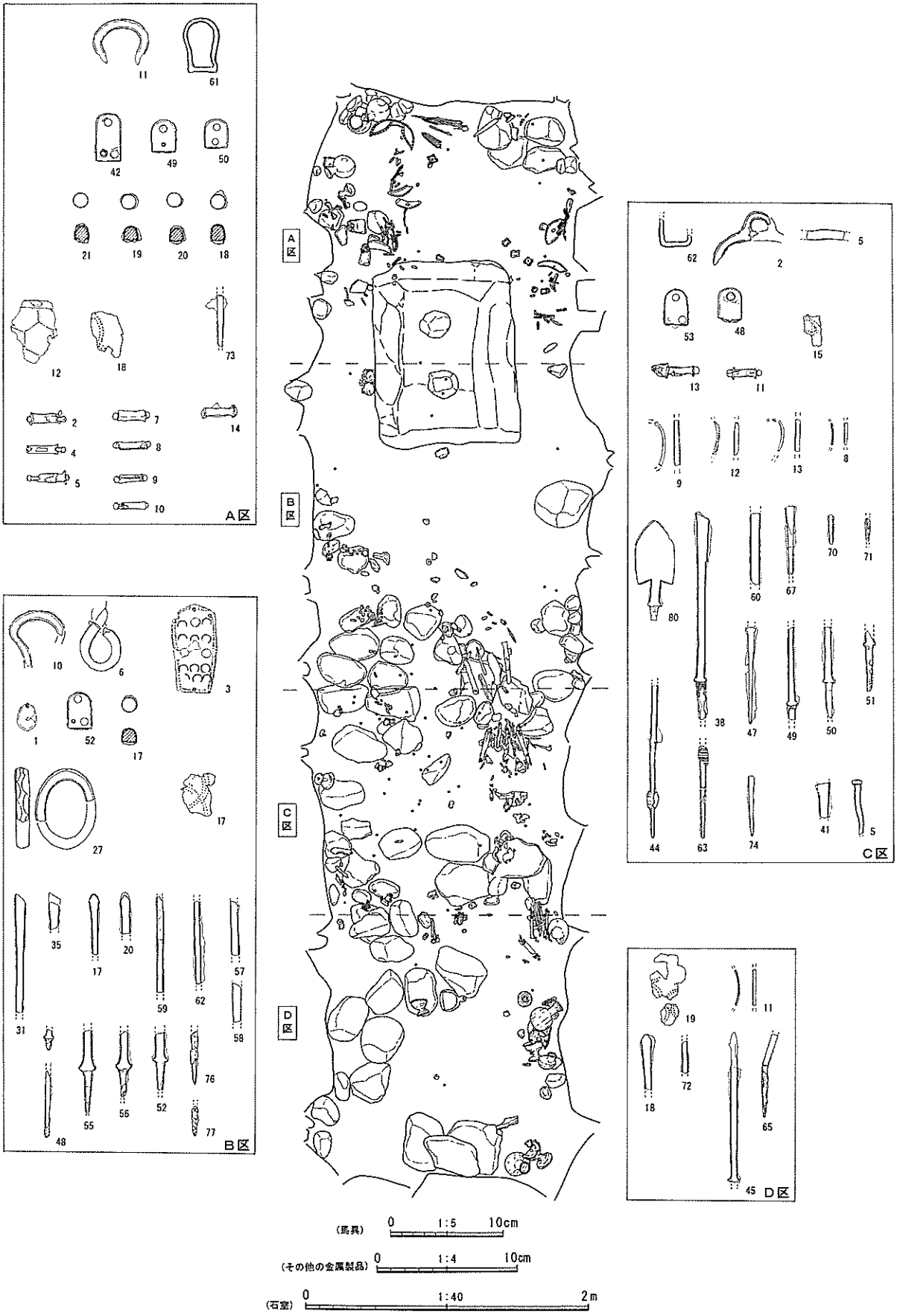


図48　遺物出土状況（一括取り上げ）

第4節　副葬遺物

横穴式石室内からは豊富な土器、馬具、大刀、鉄鏃、飾弓を主体とする副葬遺物が出土した。以下、出土した遺物の種類をまとめ、総数を示す。

土器	土師器	4
	須恵器	37
馬具	轡	2
	鞍金具	4（2組分）
	壺鐙	2（1組分）
	輪鐙	1
	辻金具	4
	杏葉	1
	雲珠	1
	帯飾金具	17
	貝座飾金具	2
	鉸具付飾金具	4
	鉤金具	2
	鉸具	9
武器	圭頭大刀	1
	円頭大刀	1
	大刀	2 以上
	鉄鉾	1
	鉄鏃	43 以上
	弓金具	17
工具	刀子	2
装身具	ガラス玉	14
	金銅板	9 片
棺金具	釘	6

以下、これら区分をもとにして各品目の概要、事実関係、編年的位置付けなどの報告を行う。編年的位置付けが困難な遺物にかんしては評価として触れる。

1　土器

石室内から出土した土器は土師器4点、須恵器37点である。駿河東部おいて1基の古墳からこれだけの量の須恵器が出土することはまれである。須恵器では中でもフラスコ瓶、高坏の量が多い点が目立つ。土師器は坏が主体で、暗文をもつ坏3点（1～3）、黒色処理を施した模倣坏1点（4）がある。

須恵器には、坏蓋3点（5～7）、摘蓋7点（8～14）、坏身4点（15～18）、瑕2点（19、20）、平瓶1点（21）、高台坏（22）、高坏8点（23～30）、ワイングラス形高坏1点（31）、短頸壺1点（32）、脚付長頸壺1点（33）、フラスコ瓶7点（34～40）、甕の破片1点（41）が認められた。

これらの須恵器は湖西産が主体を占めるが、フラスコ瓶（34）、高坏（24、25）、脚付長頸壺（33）は猿投産の可能性が高い。そのほか、産地を特定できないが、フラスコ瓶（40）や高坏（30）は湖西窯以

外の在地で生産された可能性がある。

須恵器の編年的位置付けについては湖西産が主体を占めることから、遠江編年（鈴木2004）を用いる。なお、土師器については山本恵一が整理したものを参考にし（山本1995）、遠江編年に対応させて表記する。

（1）土師器暗文坏

概　要（図49）　1は副葬土器Ⅰ群、2は副葬土器Ⅲ群、3は副葬土器Ⅱ群に属する。1～3は内面に放射状、螺旋状の暗文が入った土師器である。胎土からいわゆる畿内産土師器ではなく、明らかに在地で生産されたものである。

特　徴　1は口径10.8cm、器高2.7cmで、平底である。横ナデにより体部中位で屈曲し、外方へ延びる。内面は細い放射状の暗文が入る。見込み部には螺旋状の暗文が認められる。色調は明赤褐色で、発色は良好である。胎土に含まれる砂粒はごくわずかで、精良である。

2は、口径12.6cm、器高2.4cmで、平底である。多数の破片が接合し、ほぼ完形である。体部は緩やかに立ち上がる。口縁端部は横ナデによりやや外反する。内面は縦位に細い暗文がつき、口縁端部近くまで施される。外面底部はユビ押さえが残る。色調は明赤褐色で、発色は良好であるが、内外面とも、表面が剥がれ落ちている。胎土は緻密で、精良である。

3は口径11.9cm、器高3.3cmである。やや丸底状で、皿状を呈する。口縁部はやや内湾ぎみに立ち上がる。外面底部はユビ押さえが残り、接合痕が観察される。口縁端部は丸く仕上げ、内面には沈線が1条巡る。内面には放射状の暗文が施され、見込み部に暗文は認められない。色調は明赤褐色で、1、2よりやや黒味を帯びる。胎土に含まれる砂粒はごく僅かで、精良である。

編年的位置　暗文坏の出土例は時期は下るものの富士市花川戸3号墳（志村2003）などで確認されている。編年的な位置付けは困難であるが、いずれも1～3の暗文は細く精緻で細い。須恵器との供伴関係から1、3は遠江Ⅳ期前葉で、2は遠江Ⅳ期後葉としたい。

（2）土師器模倣坏

概　要（図49）　4は副葬土器Ⅱ群に属し、模倣坏である。駿河東部の集落遺跡から出土するものの、古墳からの出土は少ないものである。

特　徴　4は内外面とも黒色を呈する模倣坏である。口径11.9cm、器高4.2cmで丸底を呈する。体部中位で屈曲し、やや内湾しながら立ち上がる。内面は見込み部から口縁部にかけて横方向のミガキが密に施される。外面下半部はケズリ調整が施こされ、その後、不定方向にミガキが施される。上半部は横方向のミガキが認められる。内外面とも黒色処理を施しており、色調はやや茶色を帯びた黒色である。焼成は良好であるが、風化により表面が剥がれ落ちている。

編年的位置　駿河東部では主に富士川流域の古墳群に認められる。ほとんどが土師器坏で、中でも口縁部が横ナデにより稜をもつものが主流を占める。これら土師器坏は遠江Ⅲ期後葉から認められるが、出土量が多くなるのは遠江Ⅳ期後葉以降である（山本1995）。今回、出土した土師器坏の類例として富士川町谷津原6号墳（井鍋編2001）が挙げられる。

この土師器の初現は明確ではないが、遠江Ⅲ期後葉には駿河東部の各遺跡から出土している。模倣坏はそれほど形態差を変えずに遠江Ⅳ期末葉まで存続する。また、この坏は相模や甲斐からも一定量出土しており、東国的な色彩が強い土器といえる。須恵器との供伴関係から遠江Ⅳ期後葉としたい。

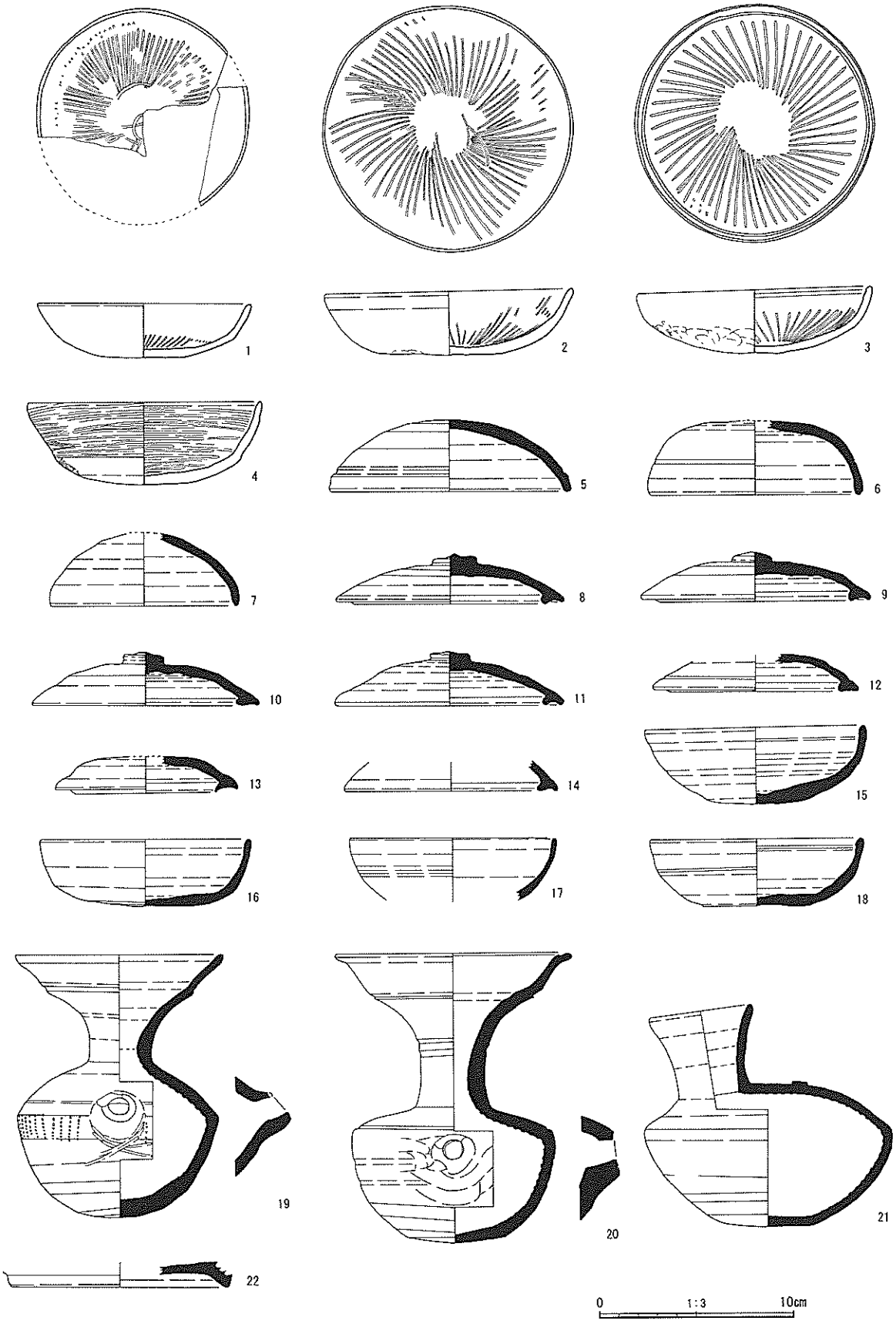


図49　石室内出土土器（1）

（3）坏　蓋

概　要（図49）　坏蓋は3点出土している。石棺前の石室中央周辺から破片で出土しており、ある程度まで復元ができた。副葬土器Ⅲ群に含まれる。原分古墳では坏蓋に伴う坏身が確認されていない。寸法、形態から坏蓋としたが、坏身として使用された可能性が考えられる。

特　徴　5は推定口径12.2cmである。天井部は丸みを帯び、体部中位までケズリ調整が認められる。外面には沈線が1条認められる。

6は推定口径10.6cmである。天井は平らで、口縁端部は立ち上がる。外面は体部中位に1条の沈線が巡る。

7は球形の体部で、推定口径9.6cmである。端部は内湾する。天井部にはヘラケズリ、ヘラ記号がわずかに認められる。

編年的位置　5は遠江Ⅲ期末葉的な様相が認められるが、遠江Ⅳ期前葉と考えられる。湖西産以外の可能性がある。6、7は遠江Ⅳ期前葉で、湖西産であろう。

（4）摘　蓋

概　要（図49）　8～14は摘蓋である。石棺前の石室中央周辺からの出土で、副葬土器Ⅲ群に属する。完形、破片資料が認められるが、概ね遺存状況は良好である。

特　徴　8は受部径9.9cm、器高2.5cmである。天井部外面はケズリが施される。摘みの形状は扁平で摘径2.3cmである。返りは受け部より突出しない。外面は自然釉が付着する。焼成は良好で黄灰色を呈する。

9は推定受部径9.8cm、器高2.5cmである。低く扁平な摘みがつき、中位まで回転ヘラケズリが施される。天井部からやや稜をもち、受け部にかけて外反する。受け部形成後、返りがついており、接合痕が明瞭である。

10は受部径10.6cm、器高2.8cmである。低く扁平な摘みがつく。天井部からやや稜をもち、中位まで回転ヘラケズリが施される。外面は自然釉が付着する。返りは受け部より突出しなく、受け部形成後、返りがつき、接合痕が明瞭である。

11は受部径11.4cm、器高2.8cmである。扁平で低い摘みがつく。天井部から丸みをもち、上位まで回転ヘラケズリの痕跡が残る。外面には白色、暗緑色の自然釉がほぼ全面に付着する。

12は受部径8.8cmである。天井部からやや稜をつけ、中位まで回転ヘラケズリが明瞭に残る。外面には1条の浅い沈線が認められ、自然釉が全面に付着する。

13は受部にかけて屈曲しながら内湾する。屈曲部まで回転ヘラケズリが施され、自然釉が付着する。わずかではあるが返りは受部より突出する。長頸壺の蓋の可能性がある。

14は摘蓋である。外面には1条の沈線が巡る。返りは受部より突出しない。

編年的位置　8～11は口径、摘みの形状も類似しており、湖西産である。遠江Ⅳ期後葉であろう。

（5）坏　身

概　要（図49）　15～18は坏身である。坏身は摘蓋と同様石棺前の石室中央周辺から出土し、副葬土器Ⅲ群に含まれる。破片資料であるが、個体数を把握できる。いずれも口径11cm前後、器高4cmで平底状を呈している。

特　徴　15は口径11.1cm、器高4.0cmである。突出した底部をもち、ヘラケズリ後ナデが認められる。口縁端部は丸く仕上げ、内面には浅い1条の沈線が巡る。色調は黄灰色で、焼成は良好である。

16は口径10.7cm、器高3.5cmである。底部は平坦で、ヘラ切り後ナデが施される。色調は褐灰色で、

胎土は砂質である。

17の口縁部は内湾しながら丸くおさめる。色調は灰色である。

18は口径10.8cm、器高3.5cmである。外面はわずかであるが浅い沈線が巡る。端部は丸く仕上げ、端部下内面に浅い沈線が認められる。底部はヘラ切り後、ナデが施される。色調は黄灰色で、焼成は良好である。胎土は砂質である。

編年的位置　15～18はいずれも遠江Ⅳ期後葉で、湖西産であろう。

（6）瓶

特　徴（図49）　瓶は2点出土しており、19は副葬土器Ⅱ群、20は副葬土器Ⅰ群に属する。

19は、瓶である。口径10.6cm、体部最大径10.3cmで、口径と体部最大径はほぼ同じである。体部は球形で、上位でゆるやかに屈曲する。丸底で、体部下半でケズリが認められる。屈曲部下位には櫛状工具により、7単位の刺突文が連続して、巡る。注口部は屈曲部からその下位にかけて取り付き、その接合部には棒状工具によるナデがX字状に認められる。頸部は体部に対してやや太く、短い。外反しながら立ち上がり、わずかな段差を設けて、口縁部は外方へ直線的に延びる。

20は、瓶である。口径11.8cm、体部最大径10.4cmで、口径が上回る。底部はケズリにより尖り気味で上面で強く屈曲し、1条の沈線がつく。注口部は屈曲部下位で取り付き、ナデによる痕跡が明瞭である。体部中位には2条の沈線が巡る。頸部は細く外反し、中位で2条の沈線が巡る。口縁部は屈曲し、そこに1条の沈線がつく。さらに口縁端部は外方へ強く屈曲する。自然釉は体部上面に顕著に認められる。

編年的位置　19は丸底で、口径と体部径がほぼ同じであることから遠江Ⅳ期前葉であろう。20は口頸部が長いことからやや古相の様相を示し、遠江Ⅲ期末葉から遠江Ⅳ期前半であろう。

（7）平　瓶

特　徴（図49）　21は平瓶である。口径5.2cm、体部最大径12.8cmで、やや口縁部が体部を上回る。頸部は直立ぎみに短く立ち上がり、ハ字状に開く。体部は扁球状で上面には円形の浮文が1点つく。体部底面には回転ヘラケズリが認められる。

編年的位置　遠江Ⅳ期前葉に比定できる。

（8）高台坏

特　徴（図49）　22は高台坏である。石棺身が破壊され、廃棄されていた位置から出土しており、石棺が破壊された時期を示すものと考えられる。推定高台径11.0cmである。高台端部は内傾する。8世紀代のものであろう。色調は黄灰色である。

編年的位置　遠江Ⅴ期であろう。

（9）高　坏

概　要（図50）　高坏は合計8点出土している。23、27～30は副葬土器Ⅰ群、24は副葬土器Ⅱ群、25、26は副葬土器Ⅲ群に属する。坏部の径から口径10cm台（23～25）と14cm～15cm台（26～29）2種の高坏が認められる。口径10cm台の小型の高坏の坏部は浅く、外面の段差はわずかである。口径15cm台の高坏には半球状の坏部をもつ28、29と浅い坏部をもつ26、27がある。いずれも坏部外面の段差はわずかで、沈線で表現される。

特　徴　23は口径10.9cm、器高9.1cmで小型の高坏である。坏部は浅く、上位で段差をもうけ、外方へのびる。端部は丸くおさめる。坏部内面には1条の沈線が巡る。脚部はハ字に開き、脚部径8.5cmで

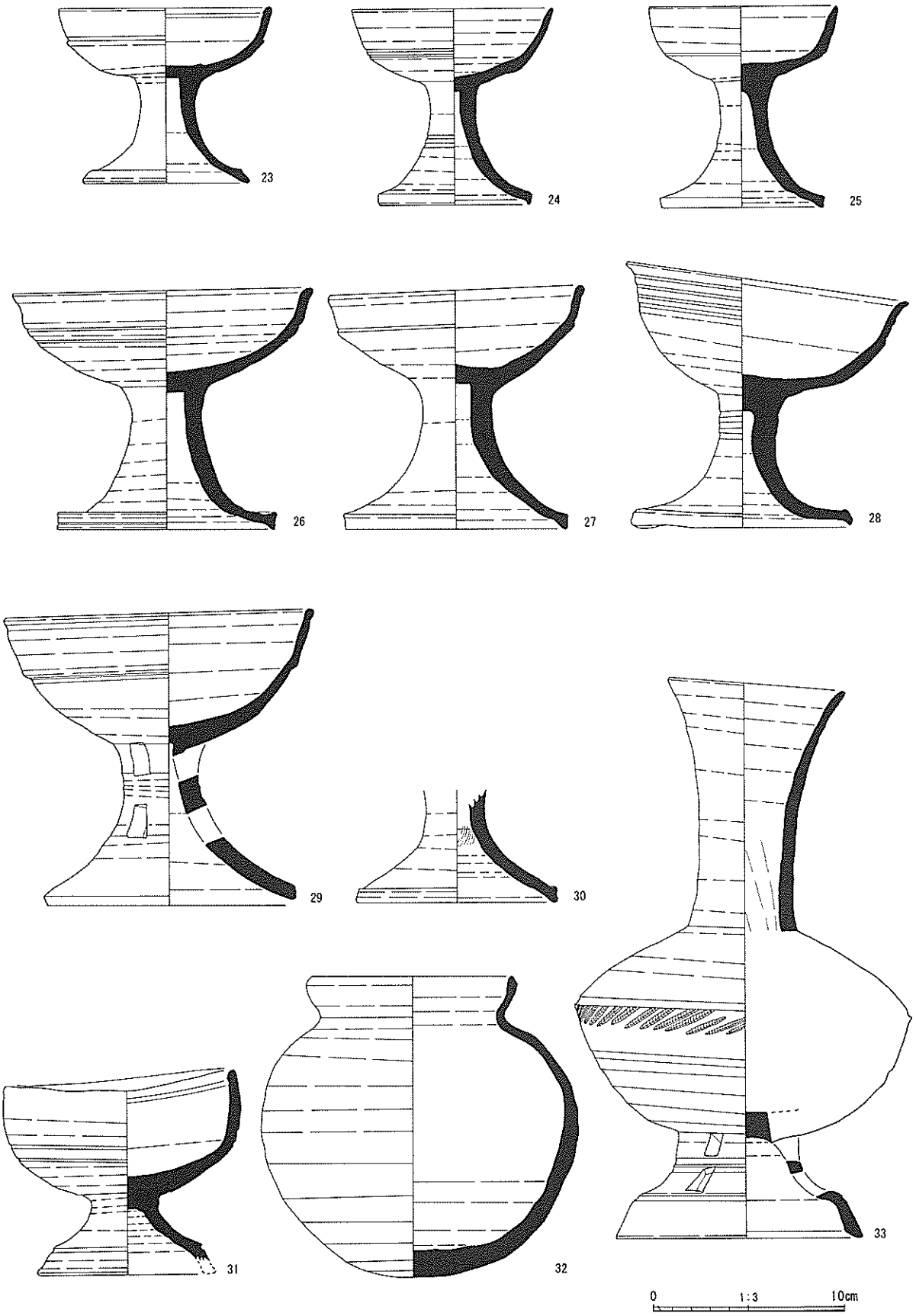


図50　石室内出土土器（2）

ある。上位には痕跡程度に残る１条の沈線が巡る。端部は鋭角的で、斜め下方へのびる。

24は口径10.4cm、器高10.2cm、脚部径7.7cmで小型の高坏である。坏部は緩やかに立ち上がり屈曲しながら立ち上がる。端部は細く尖らせている。屈曲部には浅い沈線が施され、坏に対して脚部は細い印象を受ける。ハ字に広がり、中位には２条の沈線が巡る。端部はやや内傾する。高坏全体に暗緑色の自然釉がかかっている。

25は口径9.7cm、器高10.5cm、脚部径8.4cmで、小型の高坏である。坏部は緩やかに立ち上がり、屈曲しながら端部は外反する。屈曲部には２条の細い沈線がつく。脚部はハ字に広がり、端部は下方に垂下する。24、25はほぼ胎土、器形、大きさとも類似する。これらは猿投産の可能性もある。

26は口径13.3cm、器高10.9cm、脚部径11.2cmである。やや浅い坏部に短い脚部がつく。坏部は緩やかに立ち上がり、屈曲しながら端部は外反する。屈曲部には２条の細い沈線がつく。脚部はハ字に広がり、端部は下方に垂下する。

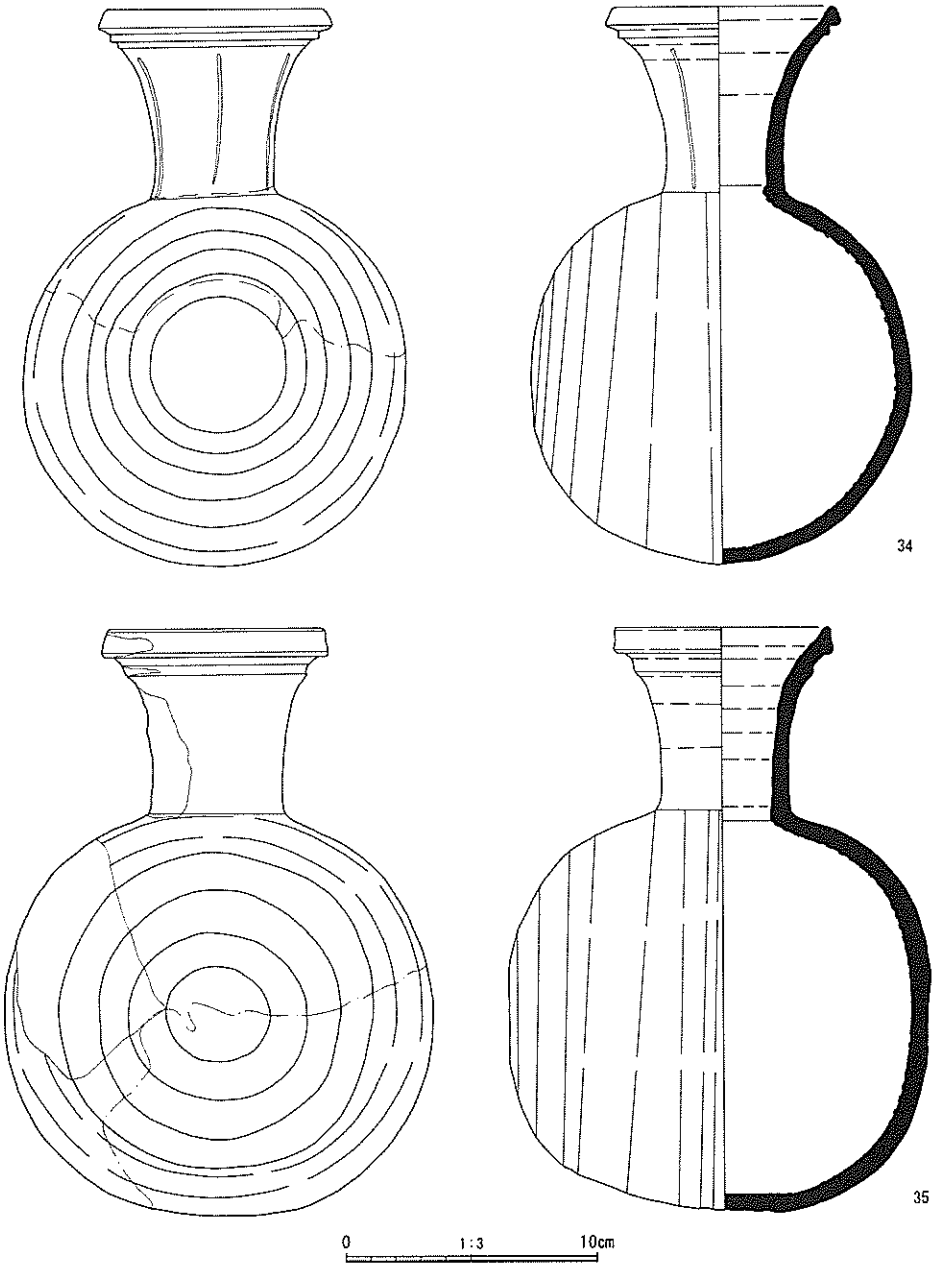


図51　石室内出土土器（３）

27は口径13.0cm、器高12.6cmである。浅い坏部で短い脚部がつく。坏部は緩やかに立ち上がり、上方で強く屈曲する。端部は丸くおさめる。屈曲部には１条の沈線が巡る。坏部下半部はケズリ調整が施され、脚部との接合でナデ消されている。ハ字に開く。端部はやや内傾する。

28は口径14.5cm、器高13.8cmである。深い坏部で緩やかに立ち上がり、屈曲しながら、口縁部は外反する。屈曲部には浅い沈線が３条巡る。坏部内面には焼きぶくれが数箇所認められる。脚部は低く、細い印象である。脚部上位から中位にかけて２条の浅い沈線が巡る。端部は斜め下方へ垂下する。自然釉は坏部、脚部にかかっているが、脚部内面の絞り部分にも自然釉が付着しており、斜位の状態で窯詰めされたと推測される。

29は口径15.8cm、器高13.8cmである。やや深い坏部に短い脚部がつく。坏部は中位で段差を設け、外

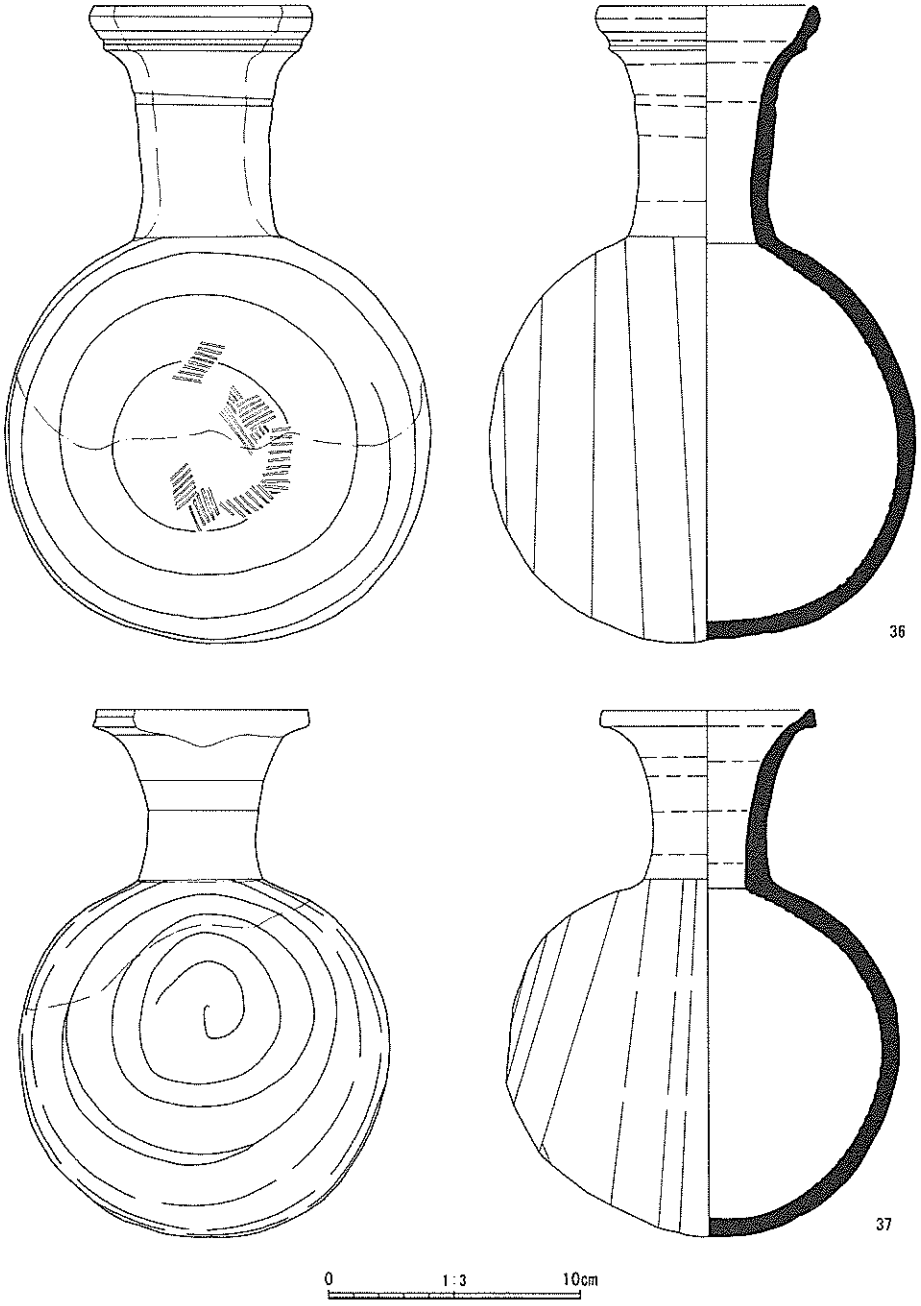


図52　石室内出土土器（４）

方へ延びる。端部は外反しながら丸く仕上げる。透かしは2段で脚部の上位から中位にかけてみられる。

30は脚部のみで脚部径は10.4cmである。ハ字に開いた後、端部は斜め下方に垂下させている。内面には絞り痕が観察される。色調は灰オリーブ色で、焼成は良好である。

編年的位置　25は胎土から猿投産の可能性があり、遠江Ⅳ期前葉に比定できよう。28は口唇部に内傾面をもち、沈線が施され、無窓の脚部がつき、遠江Ⅲ期末葉的様相を残すが、遠江Ⅳ期前葉であろう。29は突帯状の稜をもち、深い坏部であること、2段の方形スカシをもつことから遠江Ⅲ期の様相を残すが、供伴関係から遠江Ⅳ期前葉であろう。

(10) ワイングラス形高坏（脚付盌）

特　徴（図50）　31の坏部は焼き歪みが大きく、底径9.0cm、器高10.9cmである。坏部外面には2条の沈線が下位につく。口縁部は丸く仕上げ、内面には沈線が1条つく。脚部はハ字に開き、にぶい段差を設けている。その段差には1条の沈線が巡る。

編年的位置　胎土から湖西窯以外の在地窯の可能性がある。供伴関係から遠江Ⅳ期前葉であろう。

(11) 広口壺

特　徴（図50）　32は口径10.3cm、体部最大径15.7cmである。体部は内湾し、最大径は体部中位で丸底である。体部下位には回転ヘラケズリが認められる。口縁部は内湾しながら端部は直立する。

編年的位置　肩は張らず、底部は尖気味ではない。口縁部が三角形状を呈することから遠江Ⅳ期前葉であろう。

(12) 脚付長頸壺

特　徴（図50）　33は口径9.2cm、器高19.1cm、体部最大径17.4cm、脚部径12.7cmである。頸部は細く口縁部近くから外反する。体部は算盤形でやや上位に明瞭な稜がつく。その稜には1条の沈線がつく。その下位には斜位に刺突文がつく。下半にはヘラケズリが施される。上面には頸部との接合痕が観察された。脚部は屈曲しながら底部につく。端部は内傾し、屈曲部と脚部中位の沈線間に2段にわたり、長方形のスカシ孔が3箇所つく。

編年的位置　短脚に2段スカシといった古相の様相を示しており、遠江Ⅲ期末葉から遠江Ⅳ期前葉のなかでおさまるであろう。胎土から猿投産の可能性がある。

(13) フラスコ瓶

概　要（図51～53）　フラスコ瓶は閉塞石内での出土数を含めると石室内から7点出土している。遺存状況は良好で、ほとんどが完形品である。36、39は副葬土器Ⅰ群、34、35、37は副葬土器Ⅱ群に属し、38は閉塞石内からの出土である。

フラスコ瓶はⅢ期末葉に提瓶から派生し、7世紀に盛行する特徴的な器種のひとつとされている（鈴木2004）。体部には長胴のものと球胴のものが認められる。口頸部も長いもの、短いもの、端部は内湾するもの、断面三角形状に肥厚したものがある。

特　徴　34は口径8.6cm、器高22.1cm、体部最大径15.2cmである。体部は球形で、やや縦に長い形状である。外面には回転ヘラケズリが施される。体部の高さに対して短い頸部がつく。頸部は外反しながら立ち上がり、断面三角形状の段をつけ、端部は端部を折り曲げ三角形状である。稜は明瞭である。頸部は縦位に沈線がつく。

35は口径8.4cm、器高23.2cm、体部最大径16.9cmである。体部は球形である。短い頸部がつき、外反

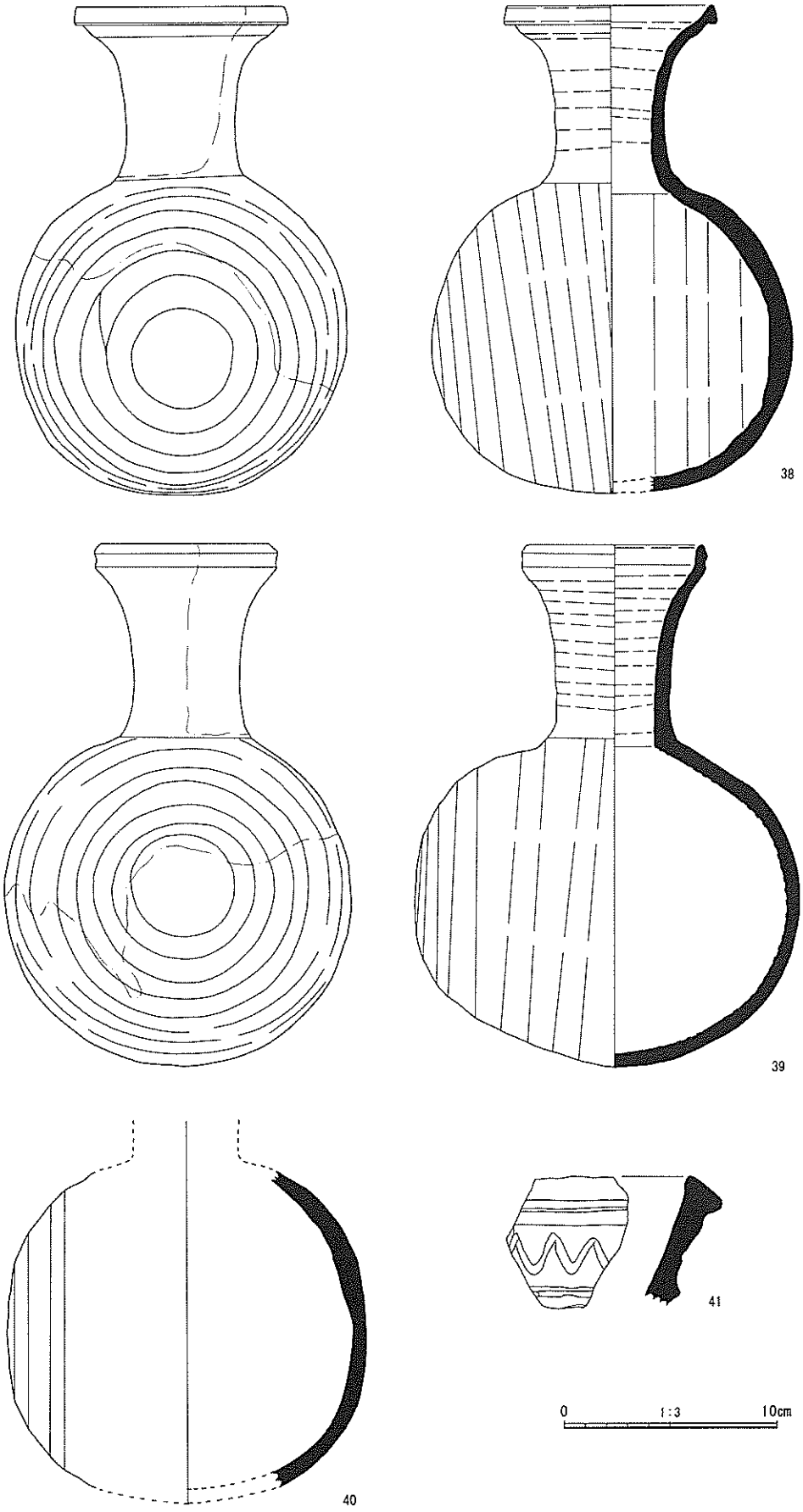


図53　石室内出土土器（5）

しながら立ち上がる。口縁部には段を設け、端部は断面三角形状である。体部は回転ヘラケズリが認められる。自然釉が体部上面に顕著に認められる。

36は口径8.4cm、器高25.2cm、体部最大径16.9cmである。体部はやや縦長の球胴状で肩の張りは弱い。ケズリが施された側面中央には円形の蓋をした後に平行タタキ痕が残る。その周囲の外面は回転ヘラケズリが施される。頸部は直立ぎみに立ち上がり、口縁部近くで急激に外方へ延び段差をつけながら端部は内湾する。

37は推定口径8.3cm、器高20.9cm、体部最大径15.5cmである。体部はやや横長の球胴状である。短い頸部がつき、外反しながら立ち上がる。端部は外傾する斜面に仕上げられる。体部外面は回転ヘラケズリが施される。

38は推定口径9.6cm、器高22.8cm、体部最大径17.8cmである。体部は横長で最大径はやや下位にくる。外面には回転ヘラケズリが施される。頸部は外反しながら立ち上がり、口縁部はやや外方へ延びていく。端部は斜めに下がる形状である。

39は口径8.2cm、器高24.4cm、体部最大径17.9cmである。体部は横長の球胴状である。外面には回転ヘラケズリが認められる。頸部は外反しながら立ち上がり、口縁部にかけてゆるやかに内湾する。内湾する変換点に1条の太い沈線がつく。

40の体部最大径は16.8cmで、球形を呈する。体部はヘラケズリが施されている。色調は灰白色で、焼成は良好である。胎土には白色粒子が認められる。

編年的位置　34～39のフラスコ瓶は遠江Ⅳ期前葉～遠江Ⅳ期後葉の範疇に含まれるものである。明確に時期を区分することは困難である。出土状況を加味すれば、副葬土器Ⅰ群のものは受口状の口縁部で頸部は長いものが主体を占める。一方、副葬土器Ⅱ群のフラスコ瓶は口縁部断面は三角形状で、頸部は短く、球状である。

(14) 甕

特　徴（図53）　石室内で唯一認められた甕片である。41の端部は断面三角形状で下位には2条の低い隆帯がつく。その間には棒状工具による波状文が施される。色調は褐灰色である。

編年的位置　遠江Ⅳ期であろう。

2　馬具

原分古墳から出土した馬具は量、種類ともに豊富で、面繋（轡）、鞍、鐙、尻繋（雲珠・辻金具・杏葉）と馬装の大部分が復元できる。また、轡や鞍、鐙などの主要な馬具は、２組分認められることから、副葬品として２組の馬具が収められていた可能性が高い。２組の馬具の組み合わせ関係については、次章で検討することとし、以下の報告では、事実関係、編年的位置付けなどにかんして触れる。

２組ある馬具については、古相を示すものを１号、新相を示すものを２号とし、３点以上あるものについては、適宜、１類、２類といった具合に分類する。

また、編年的位置づけについては、古墳時代後期（TK209型式期前半、飛鳥Ⅰ期前半併行、遠江Ⅲ期後葉併行）までは陶邑編年（田辺1966、1981）を用い、古墳時代終末期（TK209型式期後半／TK217型式併行期、飛鳥Ⅰ期後半併行、遠江Ⅲ期末葉併行）以降については、飛鳥編年（西1978、1982、古代の土器研究会1997）を基軸に記述を行う。静岡県内の事例に触れる場合には、遠江須恵器編年（山村ほか1966、川江1979、鈴木2004）を併用する。なお、以下の記述では、煩雑さを避けるため、TK209型式期の前半（狭義のTK209型式期）を指す場合、たんに「TK209型式期」と表現する。

（１）１号轡

概　要（図54）１号轡（１～６）は鉄製環状鏡板付轡である。鏡板の立聞は、鉸具造りである。引手の長さは19.0cm、鏡板の幅は7.8cm、高さは推定で7.6cmである。遺存状態は悪く、片方の鏡板と引手が大きく残る個体（１）があるほかは細片化している。細片化している轡の部材としては、鏡板３点（２～４）、銜１点（５）、引手１点（６）が認められる。

構　造　鏡板は鉸具造りの円環で、最も遺存部分が大きい破片（１）によって、ほぼ全体形をうかがうことができる。円環本体は、幅7.8cm、高さ6.2cmの大型品で、断面は長方形を呈している。立聞部分には、鉸具がとりつけられているが、破損部分が大きく、正確な形状や寸法を知ることができない。鉸具の形態は、もう一方の鏡板（２）によって、半円形で比較的小型であることが判明する。鉸具の刺金は一本の鉄棒を用い、円環と具の連結部にあけられた小孔に根元を蕨手状に巻きつけることによって可動する。

銜は、直径0.7cmほどの鉄棒が用いられている。銜先環は円環の先端に途切れた痕跡が確認でき、両側から先端を合わせて環状部を成形したことが分かる。

引手は、直接、鏡板とは連結されず、銜先環を介して繋がっている。引手本体は、断面円形の鉄棒を２条に束ねて捩りを加えたもので、いわゆる２条捩りの技法で作り出されている。捩りは荒く、２本の鉄棒が絡み合った様子が明瞭にうかがえる。引手には、捩りの単位に長短がみられる。とくに引手壺に近い位置では、細かく捩りが加えられている。

このほか、１号轡の部材と考えられる破片を６点図示する。２～４は鏡板の破片である。とくに２は鉸具の円環が残存しており、本来の形態がうかがえる。５は銜の破片と考えられる。６は、２本の鉄棒を捩って円環を作り出したものであり、形状的な特徴から、１と対になる、もう一方の引手壺にあたると捉えられよう。捩りの方向は１と同様であり、左右で捩りの方向を造り分けたものではないことが判明する。

編年的位置　本例は鉸具造鉄製環状鏡板付轡の中でも、鏡板の円環が大きく、刺金がＴ字形ではなく一本の蕨手状をなすという特徴がある。鉸具造鉄製環状鏡板付轡は島根県上島古墳例（池田1954、宮代1997）や和歌山県鳴滝１号墳例（樋口編1967）などにみるようにTK43型式期には出現しており、

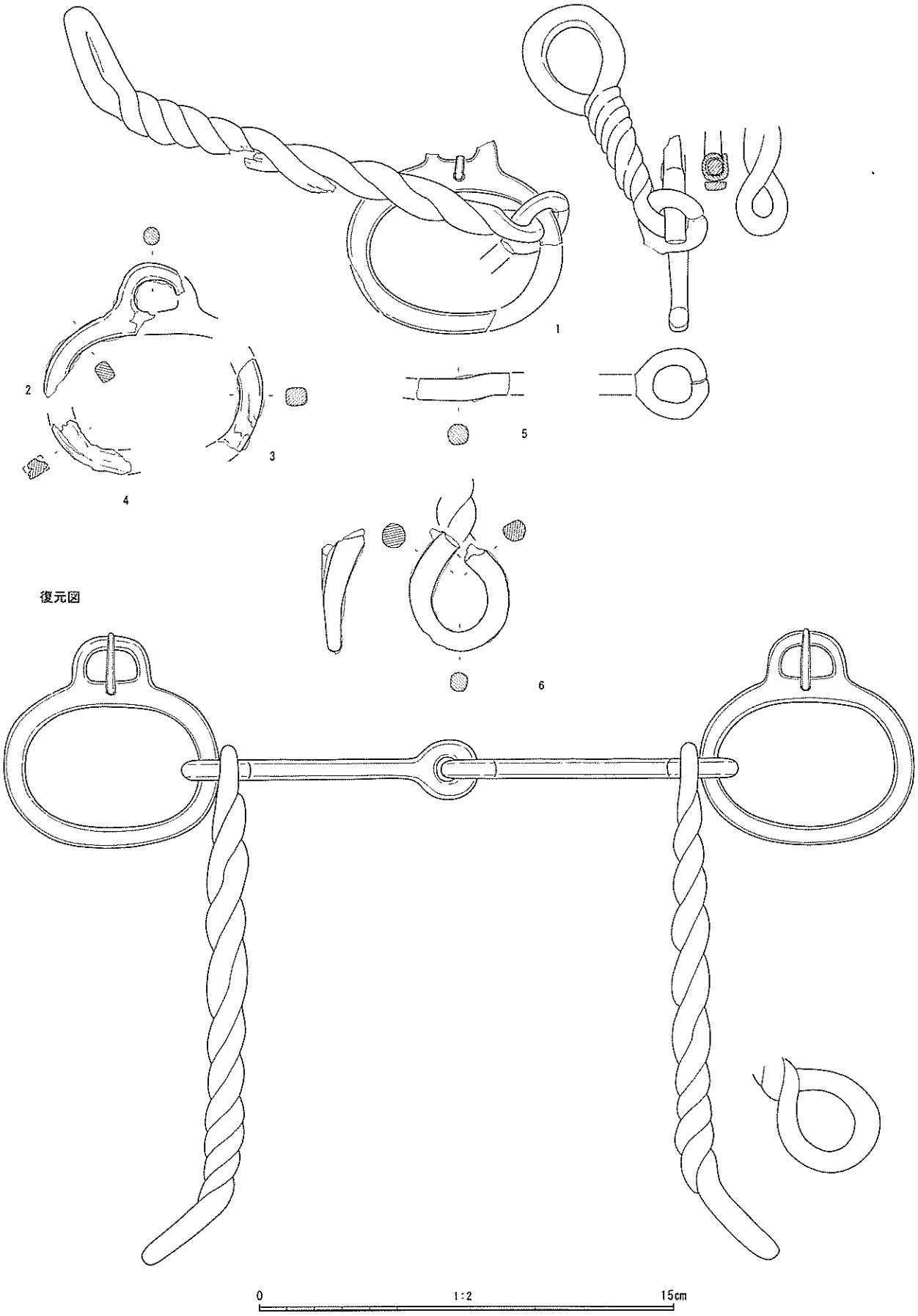


図54　1号轡

TK209型式期において増加する。古い時期は鏡板が大きく、新しい時期になると鏡板が小型化する傾向にある（岡安1984）。本例のように、幅約８cm、高さ約９cmという大きさは、鉸具造鉄製環状鏡板付轡の中でも古相を示す山梨県天神のこし古墳例（野沢ほか1976、TK209型式期）を凌駕し、大型の部類に入る。いっぽう、鉸具造りの鉄製環状鏡板付轡は、鉸具の刺金が、Ｔ字形から一本の蕨手状を呈するものへの変遷が認められ、蕨手形の刺金をもつ本例は、新しい要素を併せ持つ（岡安2003）。蕨手形の刺金をもつ鉸具造鉄製環状鏡板付轡は、TK209型式期～飛鳥Ⅰ期の中で定型化し、京都府湯船坂２号墳例（奥村編1983）にみられるように、鏡板の幅６cm前後、高さ８cm前後のものが数多くみられるようになる（岡安1985）。本例は、こうした規格的な大きさから逸出していることから、鏡板が小型化する以前の段階に製作されたものと捉えられよう。本例の引手が、単位が比較的粗い２条線捩りであることも、注目できる。捩りの単位が細かい１条線捩りの引手に先行する形態と捉えることが可能であろう。

以上の特徴から、本例は、蕨手状刺金を備える鉸具造鉄製環状鏡板付轡の最古段階に位置づけることができる。本例の編年的位置はTK209型式期と考えられ、その中でも比較的古い段階に中心があるといえよう。

（２）２号轡

概　要（図55）２号轡（７）も１号轡と同様の鉄製環状鏡板付轡である。鏡板の立聞が、鉸具造りである点も１号轡と共通する。ただし、鏡板は小さく、１号轡との形態的な差異は著しい。図示した位置での幅は21.0cm、長さ17.2cmである。２号轡の遺存状態は良好であり、保存修復によって、鏡板、銜、引手のすべてが可動する状態にされている。左右の別は特にみられないが、以下、図示する方向で便宜的に左右をあてはめる。

構　造　鏡板は立聞が鉸具造りの円環で、左右ともに完存している。円環本体の断面は、やや扁平

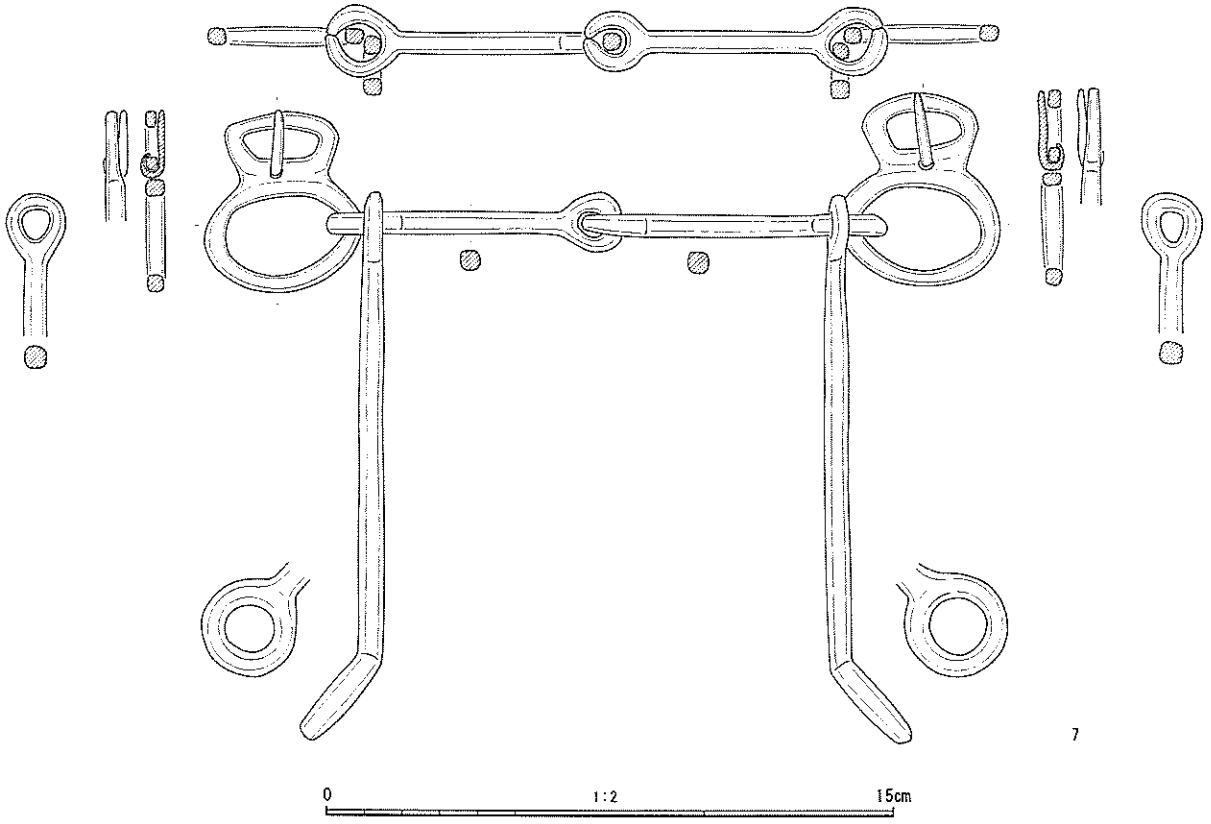


図55　２号轡

の隅丸方形を呈しており、本来は八角形であった可能性もある。左鏡板は、幅4.2cm、高さ4.8cmであり、輪金の幅3.0cmの鉸具が連接する。右鏡板は幅4.3cm、高さ5.2cmであり、幅3.1cmの鉸具が連接する。左右ともに、鉸具部分は円環部分よりも薄く扁平である。刺金は一本の鉄棒を用い、円環と鉸具の連結部にあけられた小孔に根元を蕨手状に巻きつけることによって可動する。

銜は、鏡板よりはやや太い直径0.6cmほどの鉄棒を用いている。左の銜の長さ7.8cm、右の銜の長さ8.0cm、左右の銜を連結して伸ばした状態の長さは14.8cmである。銜先環は左右ともに外法の直径1.9cmの円形に成形され、鏡板と引手が連接する。喞金は左右ともに外法の直径1.7cmほどの円形に成形されている。銜先環、喞金ともに円環の先端に途切れた痕跡が確認でき、両側から先端を合わせて円環を成形したことが分かる。

引手は、直径0.6cmほどの鉄棒を用いている。左の引手の長さは14.5cm、右の引手の長さは14.6cmである。引手は銜との連結部分がやや細く、引手本体に移行するに従い太さを増している。銜と連結する円環の寸法は、左右ともに外法で直径1.6cmである。引手壺は、円環が引手本体と鈍角で連接する。左引手壺の円環は外法で直径2.6cm、右引手壺の円環は外法で2.7cmである。引手に取りつく円環には途切れた部分が観察できず、成形技法をうかがうことが困難である。

編年的位置　本例は鉸具造鉄製環状鏡板付轡の中でも、鏡板が小さく、1号轡と比べると新相を示している。鏡板の幅4.2cm、高さ約5cmという寸法は、鏡板が最も小型化した段階であることを示している。飛鳥Ⅰ期後半～飛鳥Ⅱ期（遠江Ⅲ期末葉～遠江Ⅳ期前葉）に盛行する鉸具造鉄製環状鏡板付轡の鏡板の寸法は、幅約6cm、高さ約7cm程度に集中する傾向がある（岡安1985）。この値よりも小さい数値を示す本例は、より新しい傾向をもつといえ、その編年的位置は飛鳥Ⅱ期～飛鳥Ⅲ期（遠江Ⅳ期前葉～遠江Ⅳ期後葉併行）に相当すると考えてよいだろう。

（3）1号鞍金具

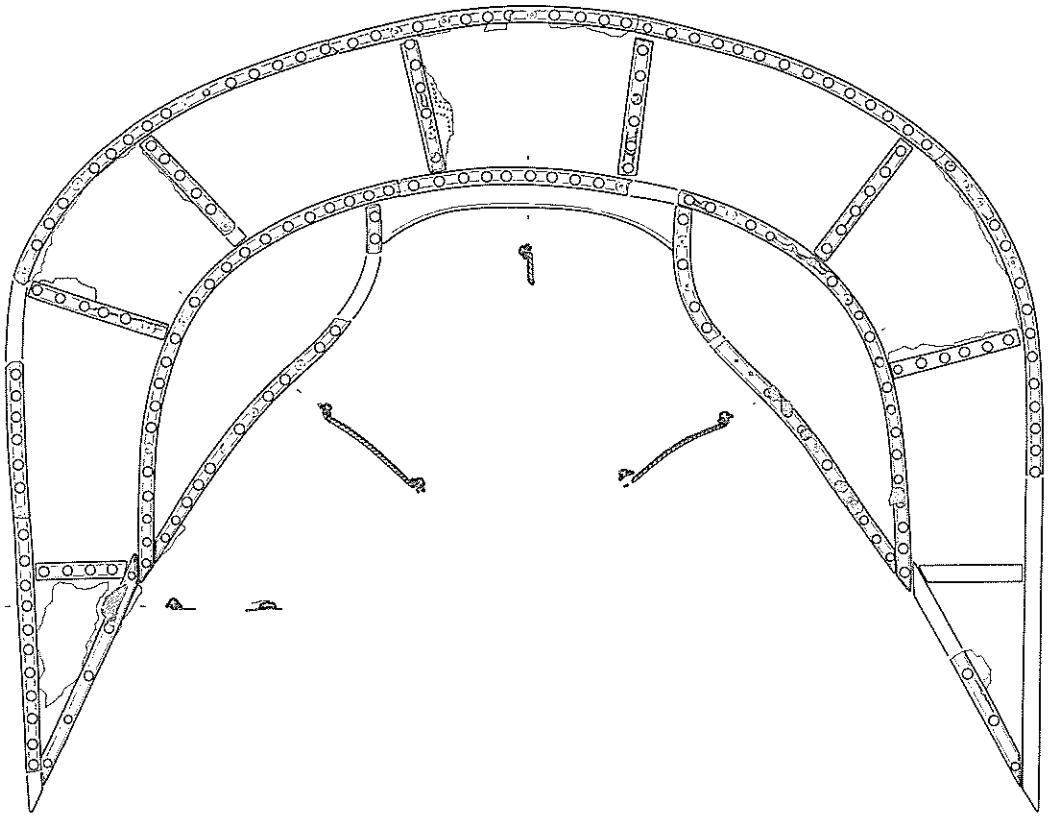
概　要（図56～58）1号鞍金具（8～14）は金銅装鞍金具で、磯、州浜、海の各部位を、縁金具を用いて覆うもので、磯金具と州浜金具はそれぞれ独立している形式である。金属製の覆輪は伴わない。後述する2号鞍金具と比べると縁金の幅が狭く、使用される鋲も小さい。前輪（8）、後輪（9）の双方がほぼ完形に復元でき、全体をうかがうことができる。前輪の幅40.4cm、高さ32.0cm、後輪の幅53.2cm、高さ32.2cmである。磯金具、州浜金具、縁金具、鋲は鉄地金銅張であり、海金具は部分的で金銅板のみで構成されている。縁金具は前輪、後輪の双方の部材が混在していたため、両者を裁然と分離することは困難であった。とくに、海金具を留める区画部分の縁金具（海区画用縁金具）は、前輪、後輪の別や詳細な部位など不明確なものが多い。現状では図示するような位置にあてはめて台座が作成されているが、海区画用縁金具の位置は確定的でない。また、海金具にかんしても、縁金具と遊離しているものがあり（12～14）、前輪、後輪どちらに帰属するのか不明である。

保存処理を経た現在、磯金具、州浜金具を中心に金銅の色調が鮮明である。金銅板は、2号鞍金具と比べるとやや脆弱で、色調は2号鞍金具と比べ、やや白みがかっている。こうした色調の違いは、2号鞍金具の金銅板より銀の含有量が多いことに起因する可能性がある【第2部　構造解析編　pp.46-50、pp.65-67】。

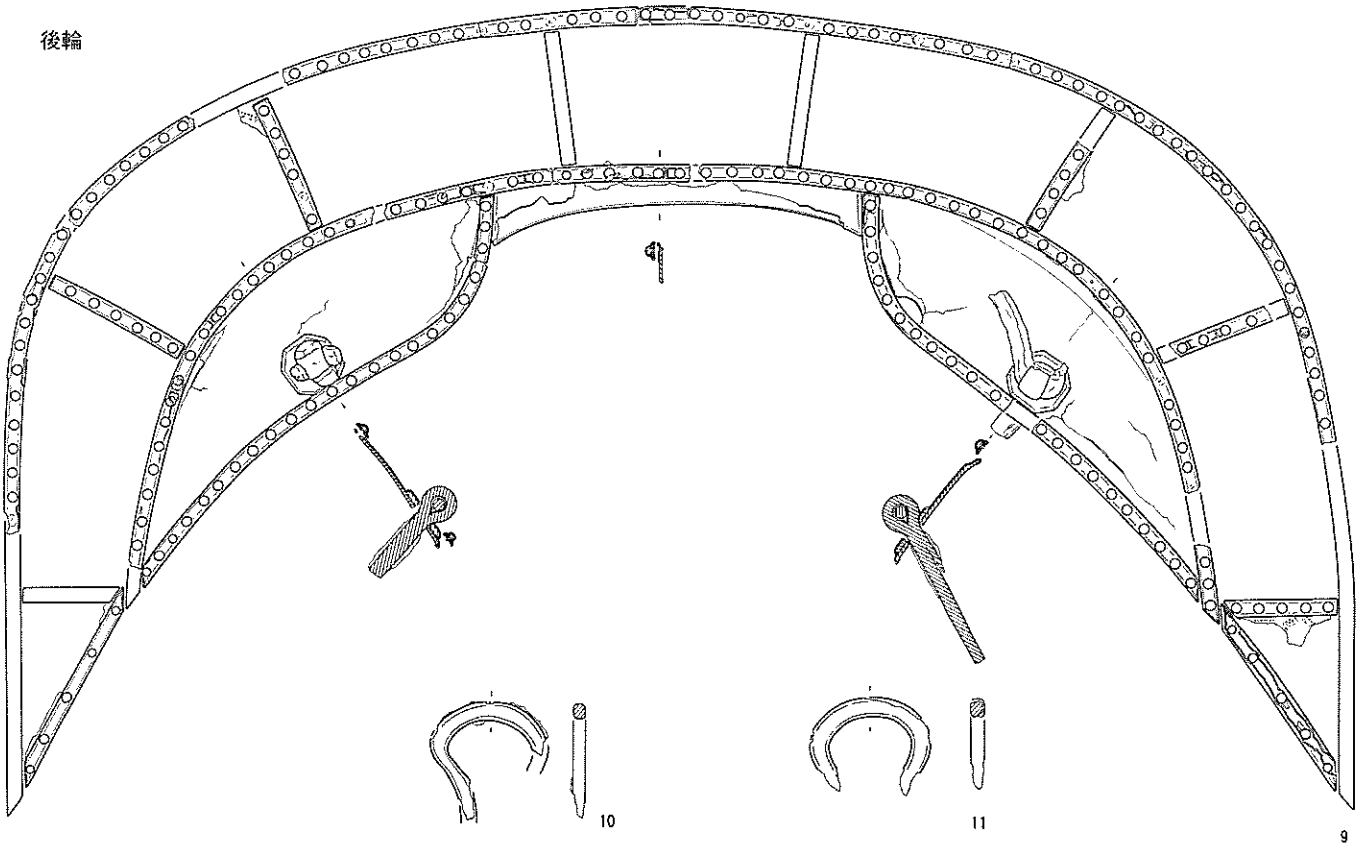
前輪の構造　前輪（8）は、磯金具2、州浜金具1、外枠用縁金具4、海区画用縁金具10、海金具5の合計22点の部材で構成される。ただし、縁金具にかんしては、欠損している部分があり、すべての部材が遺存しているわけではない。また、海金具は脆弱なため、全形がうかがえる部分がなく、縁金具から遊離したものについては、前輪、後輪どちらに伴うのか明確でない。

鉄地金銅張の部分は、裏面の縁に金銅板を折り曲げて地板に密着させている様子が観察できる。磯金

前輪



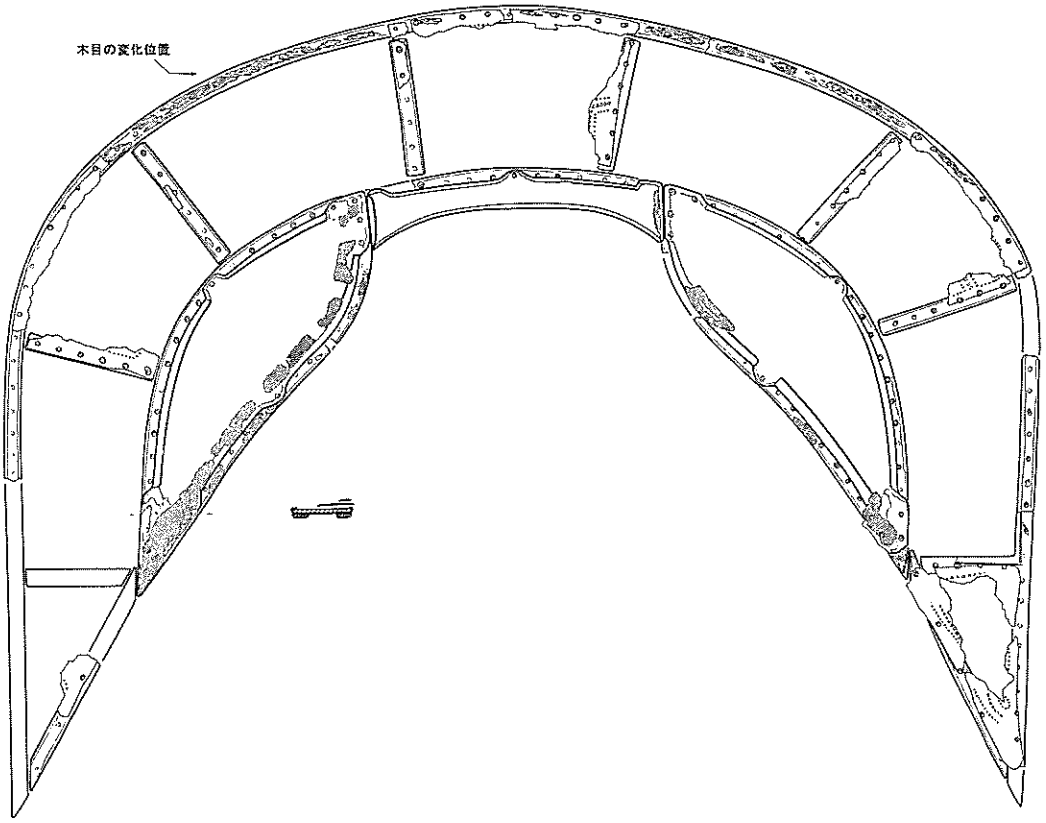
後輪



0　1:3　20cm

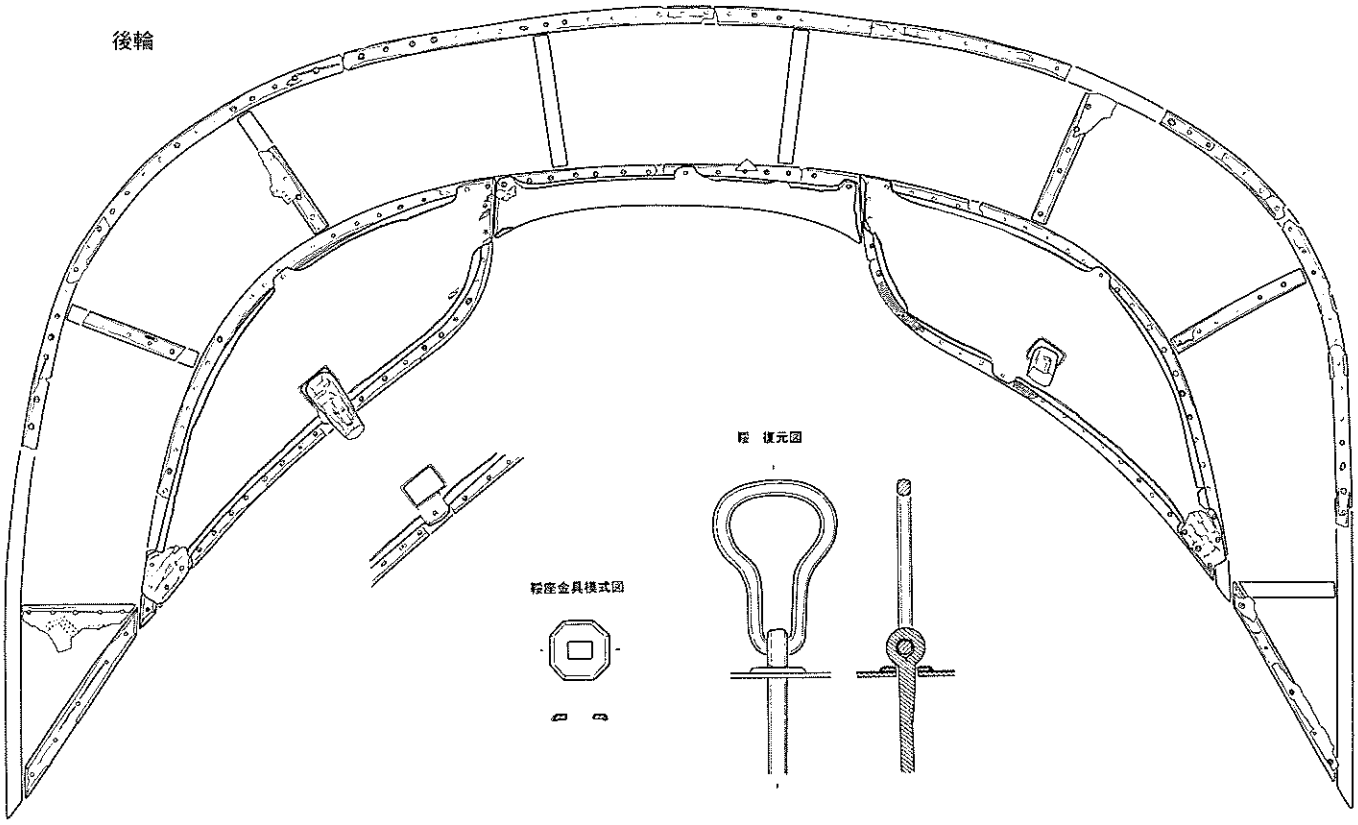
図56　1号鞍金具（外面）

前輪



8

後輪



9

0 1:3 20cm

図57　1号鞍金具（内面）

具、州浜金具の金銅板は比較的明瞭であることに対し、縁金具の金銅板は裏面の折り曲げ部分が不明瞭である部分が多い。

磯金具は左右２枚の鉄地金銅張の部材で構成される。左の磯金具は最大幅4.2cm、長さ17.2cm、右の磯金具は最大幅4.5cm、長さ17.0cmである。左右ともに、磯金具の地板は、わずかに彎曲している。磯金具の上端と下端、および側縁には突起があり、縁金具と結合されている。それ以外の部分では、縁金具の鋲は磯金具を貫通せず、鞍橋（前輪本体）に直接、打ち込まれている。磯金具の縁は、縁金具との連結を容易にするため、本体よりも薄く成形されている。

州浜金具は１枚の鉄地金銅張の部材で構成される。幅11.7cmの州浜形に成形された地板には、縁金具との結合のため３箇所に突起が形成されている。州浜金具の下端には、特別な造作はみられない。

外枠用縁金具は、幅5.8mm～6.0mm、高さ1.8mm～2.0mmほどの鉄地金銅張の本体に、直径4.5mm、高さ2.0mmの鉄地金銅張の鋲がうたれている。外枠用縁金具は、右側下端部に欠損が著しい。鋲の間隔は比較的詰まっており、隣り合う鋲どうしの間隔は中心間で0.8cm～1.0cmである。縁金具の断面は角が不明瞭な台形状をなしている。縁金具表面には、被せられた金銅板の上から稜線がみられる。鋲脚は遺存状態がよい部分では、裏面に長さ0.5cmほどが突出しているが、鋲脚の多くは根元で折れて、欠損している。鋲脚の長短は観察できず、飾り鋲と打ち付け用の鋲との差異はみられない。

海区画用縁金具は10点分あると想定できるが、保存修復作業によって図示するように９点分があてはめられている。このうち、左下端部とその上、右下端部における海区画用縁金具の位置は確定的であるが、残り６点の海区画用縁金具の位置は、前輪、後輪どちらに伴うかという点を含めて不明である。海区画用縁金具は外枠用縁金具と同様の形態的特徴をもつ。下端区画用の４点を除き、ほぼ同じ大きさであり、長さ5.3cm～5.7cmの本体に６個の鋲が打たれている。鋲の間隔も外枠用縁金具と同様に中心間で1.0cm程度である。下端区画用の縁金具のみ、区画に合わせた形状をなしており、右下端直上の縁金具には４個、右下端の縁金具には５個の鋲が用いられている。下端の海区画用縁金具のみ鋲の間隔が広いことは、前輪、後輪ともに共通した意匠である。鋲間隔を統一するよりは、海区画用縁金具に用いられる鋲数を５個から６個程度とすることに規定された結果と捉えられるだろう。この特徴から、海における最下端の縁金具は、外枠を構成するものではなく、海を区画する部位として認識されていたことがうかがえる。

海金具は薄い金銅板で構成される。金銅板の厚さは0.5mm以下で、非常に脆弱である。金銅板は、海区画金具で囲まれた上部中央、左右肩、左右最下端の５区画に嵌められている。海金具に用いられた金銅板には、表裏から打たれた列点によって、模様が描き出されている。模様の詳細は、遺存状態が悪く必ずしも判然としないが、左下端部の区画で唐草文と推定できる円弧模様が、上部中央と左右肩の区画には亀甲文が描き出されているように観察できる。このうち、唐草文が描かれる左下端部の区画は、前輪に伴うことが確実であるが、亀甲文が描かれる上部中央と左右肩の区画は前輪に伴うか後輪に伴うのか必ずしも確定的でない。前輪の左下端部の海金具には、唐草文が用いられていたことが確実であるが、それ以外の区画には、亀甲文が用いられた可能性と、全ての区画に唐草文が用いられていた可能性の双方が考えられる。

後輪の構造　後輪（９）も前輪と同様に、磯金具２、州浜金具１、外枠用縁金具４、海区画用縁金具10、海金具５の各部材に左右の鞍の鉸具２、左右鞍の座金具２の合計26点の部材で構成される。縁金具は欠損している部分が前輪と比べて多い。海金具も全形がうかがえる部分がなく、縁金具から遊離したものについては、前輪、後輪どちらに伴うのか明確でないことは前述の通りである。鉄地金銅張の技法、色調などは前輪と共通する。

磯金具は左右２枚の鉄地金銅張の部材で構成される。左の磯金具は最大幅5.2cm、長さ20.8cm、右の

磯金具は最大幅5.4cm、長さ21.5cmである。磯金具の形状、製作技法などは前輪と共通するが、鞍装着用に左右に幅1.3cm～1.5cm、高さ1.0cmの方形の鞍穴があけられている。

鞍は、磯金具の左右1箇所ずつに取り付けられている。鍵穴形の鉸具本体と居木に差し込む基部からなる。鉸具の輪金は破損しており、根本しか残存していない。ただし、鞍金具周辺から出土した鉸具の破片の中に、寸法、遺存状態から1号鞍金具の鞍に相当する可能性が高いものが認められる（10、11）。鞍の基部は幅0.7cmほどの帯状鉄板を折り曲げ、鉸具を巻きつけている。基部には居木の木材が銹化して付着している。基部先端は左右ともに欠損しており、詳細な形状は不明である。鞍の座金具は、鉄地金銅張で八角形を呈する。幅、高さともに2.3cmであり、左右ともに完存する。

州浜金具は1枚の鉄地金銅張の部材で構成される。幅14.5cmであり、形状、製作技法などは前輪の州浜金具と共通する。

縁金具の特徴も、前輪と共通する。外枠用縁金具は、海外縁の下端部を中心に破損がみられる。海区画用縁金具は、現在、3点分が欠落した状態で復元されている。ただし、海区画用縁金具の位置は左右下端、左の下端直上の3点分については確定的であるが、それ以外のものにかんしては、前輪、後輪のどちらに伴うかということを含めて不明確である。前輪の海区画用縁金具として配置されているものが、後輪の部材である可能性も残されている。海区画用縁金具は、長さ5.4cm～5.8cmの本体に6個の鋲が用いられている。下端とその直上の縁金具には5個の鋲が用いられており、鋲数が異なる。下端の海区画用縁金具の鋲間幅が広いことは、前輪と共通する。

海金具は前輪と同様に薄い金銅板で構成される。金銅板が嵌められる位置は、海区画金具で囲まれた上部中央、左右肩、左右最下端の5区画である点も前輪と共通する。海金具に施された列点文は破損が大きく、全体像をうかがうことが難しいが、後輪に伴うことが確定的な右下端の区画において、亀甲文が確認できる。その他の区画に用いられた金銅板にどのような模様が描かれていたのか、必ずしも明確でない。

海金具の詳細　海金具は薄い金銅板で、破損が著しいが、いくつか模様がうかがえる破片がある。海金具に施された列点文は細かく、金具の遺存状態によって観察が困難な箇所もある。

縁金具から遊離した海金具を3点分（12～14）図示する。12と13は亀甲文が表現されている。亀甲文は列点文で表現される。列点文は3列からなり、裏からは中心の1列が、表からは中心列に沿って2列が打たれている。亀甲文の大きさは中心の列点文において一辺1.2cm～1.3cm程度、幅2.0cm、対角線上の長さ2.5cm程度である。

14は唐草文が表現されている。列点文の技法は亀甲文と同様に、裏からの1列と表からの2列が組み合って模様を作出している。唐草文の全体像はうかがうことが難しいが、群馬県綿貫観音山古墳例（徳江編1999）などが復元するにあたり参考になるだろう。

亀甲文と唐草文という異なる模様が、具体的にどの区画に用いられたのかは、必ずしも明確ではない。確実に部位が判明するのは、前輪の左下端部（唐草文）と後輪の右下端部（亀甲文）のみである。このため、①前輪、後輪の各区画に唐草文、亀甲文が混在する、②前輪には唐草文が後輪には亀甲文が用い

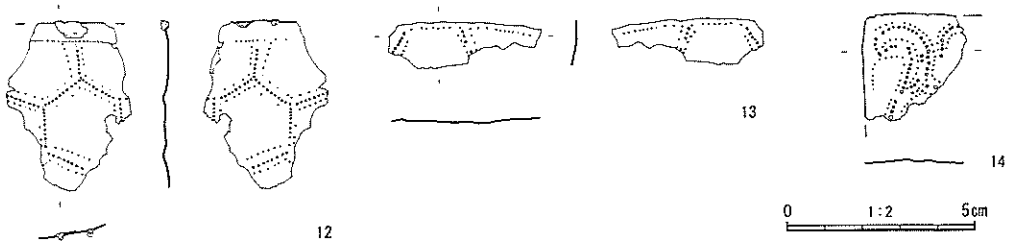


図58　1号鞍金具　海金具

られている、という２種の復元案を提示せざるを得ない。

有機物の付着　鞍金具の裏面には有機物の付着がみられる。前輪では、鞍橋（前輪本体）の木材が観察できる部分があり、図中に示した部分で大きく木目が変わる。前輪本体の木材の組み合わせ位置を示すものといえよう。

また、前輪・後輪ともに、磯金具の下端と内縁の縁金具には、布の痕跡が確認できる。居木下端に巻かれた布の端部と捉えられよう。内面に残る布は平織りで、織り目は比較的細かい。状態のよい部分では、２枚の布が重ねられている様子がうかがえる。

編年的位置　１号鞍金具は、磯金具と州浜金具を別作りにし、海を縁金具で放射状に区画し、部分的に金銅板を嵌めこむ特徴をもつ。類例として、海の区画が７区画の奈良県市尾墓山古墳例（河上1984）、同じく７区画の奈良県東大寺山６号墳例（千賀編2003）、９区画の群馬県伝藤岡市出土例（米田1987）などがあげられる。これらの事例と本例を比べると、区画の数に差異があるが、磯金具・州浜金具の形状、縁金具や鋲の大きさ、鋲の間隔など類似する要素が多い。これらの類例と１号鞍金具を含めて、「海金具部分張系列」と呼ぶ。これらの類例を出土した古墳の築造時期は、MT15型式期～TK43型式期であり、ｆ字形鏡板付轡や剣菱形杏葉、鐘形杏葉などが共伴する。上述の類例では、部分的に張られた金銅板は無文であるか、遺存状態が悪いために詳細が不明であり、本例のように、亀甲文もしくは唐草文を用いたものは知られていない。また、本例は、上述の類例と比べると金銅板が嵌められている面積が少ない。こうした違いは、本例が、海金具部分張系列の中でも新相に位置づけられることを示すといえよう。

この他、海の全面に金銅板を張る鞍金具として、奈良県藤ノ木古墳（勝部ほか1990）Ｂセット例、千葉県金鈴塚古墳例（滝口編1952）、群馬県綿貫観音山古墳例（徳江編1999）などが知られている。これらは、海金具に唐草文を用いることでも共通性が高く、海金具部分張系列の鞍金具とは異なる。これらの類例を、「海金具全面張系列」と呼ぶ。この他、詳細は不明ながら、海に金銅板を用いる鞍金具として、千葉県法皇塚古墳例（小林・熊野編1976）、島根県上島古墳例があげられ、掛川市宇洞ケ谷横穴例（大谷ほか1971）も縁金具の形状から、海に金銅板が張られている可能性が高い。上島古墳例、宇洞ケ谷横穴例は、縁金具の配置から、海金具部分張系列に近いと捉えられよう。

海金具に亀甲文をあしらうことは、製作技法は大きく異なるものの、藤ノ木古墳Ａセット例や栃木県足利公園麓古墳例（東京国立博物館1980）などにもみられる。亀甲文は、鞍金具の装飾として一般的であるといえるだろう。また、海金具部分張系列の可能性が高い上島古墳例には、海金具に唐草文がみられ、上述の通り、海金具全面張系列の鞍金具の多くが唐草文で装飾されている。海金具に唐草文や亀甲文を取り入れることは、TK43型式期～TK209型式期に盛行する造形といえよう。ただし、本例では、区画ごと、もしくは、前輪と後輪にそれぞれ異なる模様が用いられたと考えられ、複数系統の模様構成が弛緩、混交した特徴が見出せる。なお、本例にみられる八角形の板状鞍座金具は類例が少なく、島根県上島古墳例などが類似例としてあげられるにすぎない（宮代1996）。

以上のことから、本例は、海金具部分張系列の鞍金具の中でも新しい傾向をもつことが分かる。本例の編年的位置は、TK43型式期～TK209型式期に求められ、模様の混在・弛緩を重視すれば、より新しい段階にその中心があるといえよう。

（４）２号鞍金具

概　要（図59・60）２号鞍金具（15～21）も金銅装鞍金具で、磯、州浜の各部位を、縁金具を用いて覆い、磯金具と州浜金具はそれぞれ独立している形式である。１号鞍金具と比べ、縁金の幅が広く、使用される鋲も大きい。また、海金具や金属製の覆輪は伴わない。前輪（15）、後輪（16）の双方がほぼ完存している。前輪の幅29.8cm、高さ15.5cm、後輪の幅40.3cm、高さ19.7cmである。磯金具、州浜金具、縁金具、鋲は鉄地金銅張である。前輪はほぼ完形の状態で出土し、後輪は縁金具が若干散乱した

状態から復元された。後輪の縁金具は変形が著しく、全体として歪みが生じている部分が大きい。金銅板は、１号鞍金具と比べると状態がよく、色調も１号鞍金具と比べ、金により近い。色調の違いは、金属組成に起因する可能性がある【第２部　構造解析編　pp.48-50、pp.65-67】。

前輪の構造　前輪は、磯金具２、州浜金具１、縁金具３の合計６点の部材で構成される。金銅張にされている部分は、裏面の縁に金銅板を折り曲げて地板に密着させている様子が観察できる。磯金具、州浜金具の金銅板は比較的明瞭であることに対し、縁金具の金銅板は裏面の折り曲げ部分が不明瞭である部分が多い。

磯金具は左右２枚の鉄地金銅張の部材で構成される。左の磯金具は最大幅5.4cm、長さ15.7cm、右の磯金具は最大幅5.5cm、長さ15.7cmである。磯金具の地板平面は、１号鞍金具より強く彎曲している。左右の磯金具の縁には突起があり、縁金具と結合されている。突起の位置や数、形状は、左右で異なる。左の磯金具の突起は、上端と側縁２箇所の合計３箇所に、右の磯金具の突起は、下端と側縁３箇所の合計４箇所にみられる。それ以外の部分では、基本的に縁金具の鋲は磯金具を貫通せず、鞍橋（前輪本体）に直接、打ち込まれている。また、右の磯金具上端部分においては、縁金具の上から磯金具の本体を鋲が貫通している。磯金具の縁は、縁金具との連結を容易にするため、本体よりも薄く成形されている。

州浜金具は１枚の鉄地金銅張の部材で構成される。幅9.9cmほどの州浜形に成形された地板には、縁金具との結合のための突起がみられない。州浜金具の上縁は縁金具が覆い、鋲列が州浜金具の端部を貫いている。州浜金具の寸法が鞍橋に比べて大きかったことがうかがえ、舌状の突起も切り落とされた可能性がある。州浜金具の下端は地板に縁金状の帯をめぐらせて縁取りし、その上を金銅板が覆っている。

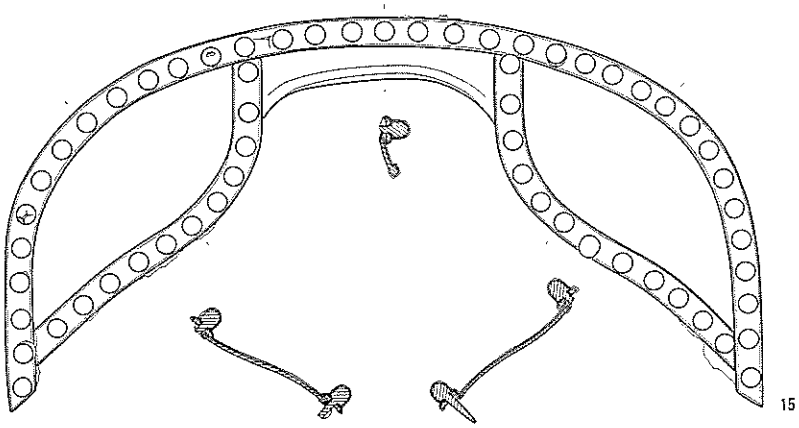
縁金具は、幅11.0mm～12.0mm、高さ2.0mm～2.5mmほどの鉄地金銅張の本体に、直径8.0mm、高さ7.0mm～8.0mmの鉄地金銅張の鋲が打たれている。縁金具は完存しており、打たれた鋲数は、左磯金具下縁で11、右磯金具下縁で12、上縁の縁金具で36の合計59である。鋲の間隔は鋲の大きさと比べて狭く、隣り合う鋲どうしの間隔は中心間で1.3cm～1.5cmである。縁金具の断面は角がやや不明瞭な台形状をなしている。縁金具表面には、被せられた金銅板の上から稜線がみられる。鋲脚は、遺存状態がよい部分では、裏面に長さ1.4cmほどが残っている。鋲脚の断面は方形であり、比較的長く脚が遺存している鋲が多い。鋲脚の長短は観察できず、いわゆる飾り鋲と打ち付け用の鋲との差異はみられない。

後輪の構造　後輪は、磯金具２、州浜金具１、縁金具３に、左右の鞍の鉸具２、左右鞍の座金具２の合計10点の部材で構成される。ほぼ部材は完存するが、縁金具を中心に劣化、変形が著しく、鋲頭が欠落している箇所も多い。遊離した鋲頭は５点分（17～21）を図示する。

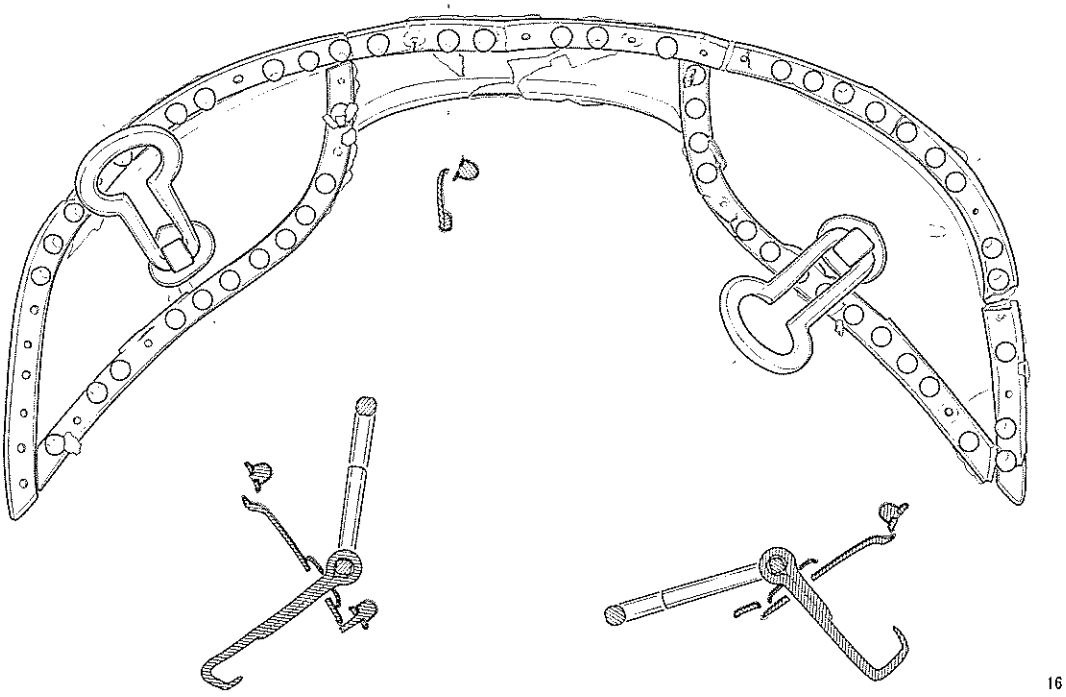
磯金具は左右２枚の鉄地金銅張の部材で構成される。左の磯金具は最大幅6.0cm、推定長20.0cm、右の磯金具は最大幅6.4cm、推定長19.9cm、である。形状、製作技法などは前輪と共通するが、鞍装着用に左右に幅1.4cm～1.5cm、高さ1.1cmの方形の鞍穴があけられている。縁金具との連結用突起は、左右ともに、上端と下端の２箇所と側縁２箇所の合計４箇所に設けられている。突起以外の部分では、基本的に縁金具の鋲は磯金具を貫通せず、鞍橋（後輪本体）に直接、打ち込まれている。磯金具の縁は、縁金具との連結を容易にするため、本体よりも薄く成形されている。また、外縁の縁金具と、磯金具との接合の角度が急なことから、磯金具の外縁には明確な段差が形成されている。

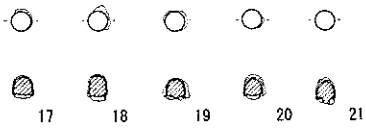
鞍は、州浜金具の左右１箇所ずつに取り付けられている。鍵穴形の鉸具本体と居木に差し込む基部からなる。鉸具は左右ともに完存しており、幅4.4cm～4.5cm、長さ7.2cmである。鉸具の断面形は、隅丸方形状を呈するが、状態がよい部分を観察すると、隅切方形（八角形）にされている可能性が高いと判断できる。鞍の基部は扁平な方形をなす鉄板が用いられる。基部鉄板の幅は0.8cm～1.0cmである。基部の一端は短く、先端は不明確な形態で片方の基部に叩きつけられている。基部の片方の先端も左右ともに完存し、鍵の手状に成形されている。先端の形状は、方形であるが、幅は若干狭くされてい

前輪



後輪





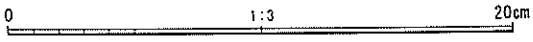
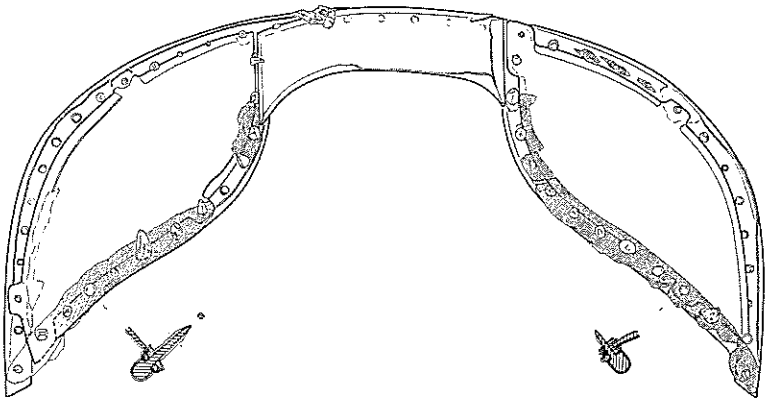


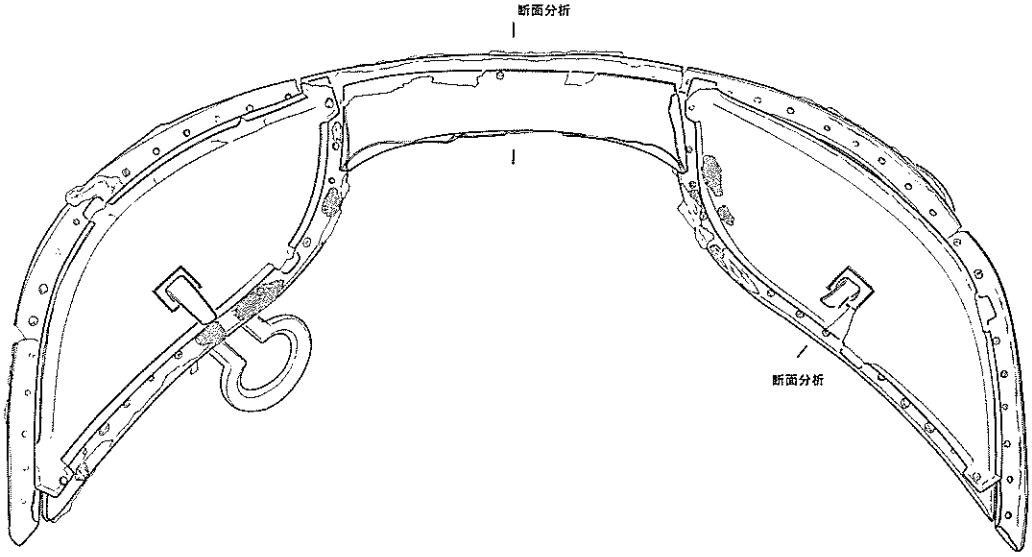
図59　2号鞍金具（外面）

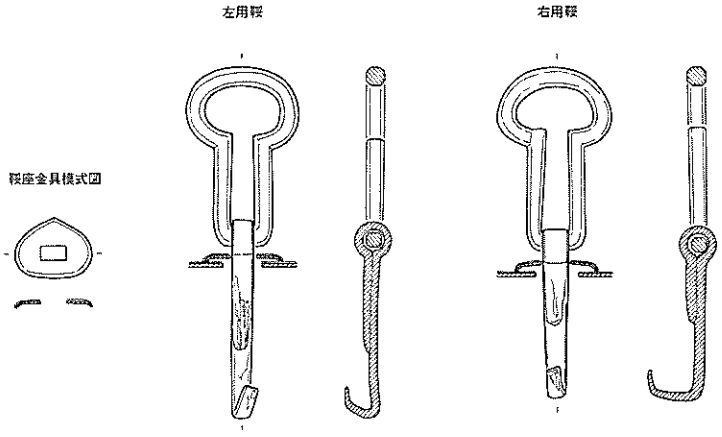
前輪



15

後輪





16

0　1:3　20cm

図60　2号鞍金具（内面）

る。鞍の基部には居木の木材が付着している。

鞍の座金具は、鉄地金銅張で桃形を呈する。幅3.0cm、高さ2.4cmであり、左右ともに完存する。鞍座金具は現状で左右ともに脱着可能であり、磯金具の表面には、鞍座金具があてられていた痕跡が傷となって残っている。

州浜金具は1枚の鉄地金銅張の部材で構成されるが、上縁を中心に破損部分が比較的多い。幅13.8cmほどであり、形状、製作技法などは前輪と共通する。州浜金具の下縁は、別の帯状部材が被せられ、厚く縁取りされている。また、前輪の州浜金具と同様に、縁金具との接合用の突起がみられず、縁金具の鋲が直接州浜金具の上縁を貫通している。

縁金具の特徴も、前輪と共通する。ただし、後輪の縁金具は前輪の縁金具と比べて遺存状態が悪く、破損、変形が著しい。現状では、5分割された状態で配置されている。欠落した鋲頭は5個体分（17～21）が別に遺存している。破損箇所が多いものの、鋲数はほぼ確定する。復元された状況によると、鋲数は、左磯金具下縁で15、右磯金具下縁で15、上縁の縁金具で44の合計74である。

有機物の付着　前輪、後輪の裏面には有機物の付着がみられる。前輪の裏面には、鞍橋（前輪本体）の木材が観察できる部分があるが、その付着はわずかで、木材の組み合わせ位置などはうかがうことができない。後輪の裏面には木材の付着がほとんどみられない。1号鞍金具と同様に、磯金具の下端と内縁の縁金具の裏面には布の痕跡が確認できる。居木下端に巻かれた布の端部と捉えられよう。内面に残る布は平織りで、織り目は比較的細かい。状態のよい部分では、2枚の布が重ねられている様子がうかがえる。

編年的位置　2号鞍金具は、磯金具と州浜金具を別作りにし、海金具や金属製の覆輪を伴わない。縁金具の幅は11.0mm～12.0mmと広く、使用される鋲も大型で、1号鞍金具と比べると新しい様相をもつ。類例として、島根県岡田山古墳例（松本編1987）、千葉県金鈴塚古墳例（滝口編1952）などがあげられる。また、金属製の覆輪を伴うが、岡山県王墓山古墳例（間壁ほか1974）、静岡市賤機山古墳例（川江1992）も比較的近い形態といえるだろう。

金銅装の磯金具と州浜金具を別作りにする鞍金具（以下、金銅装磯州浜分離鞍金具と呼ぶ、千賀2003）は、古墳時代後期（MT15型式期～TK209型式期）においては一般的である。金銅装磯州浜分離鞍金具は、縁金具の幅が狭いものから広いものへ、鋲は小さいものから大きいものへ、使用する鋲は多いものから少ないものへ、という大まかな変遷の傾向がある（宮代1996）。原分古墳から出土した2組の鞍金具はいずれも金銅装磯州浜分離鞍金具で、古相と新相の双方が知られる。このうち、2号鞍金具は、幅が広い縁金具をもち、大型の鋲を少量打つという新相の特徴をもつ。こうした新相の鞍金具の初源は、岡田山古墳例にみるようにTK43型式期に相当する。いっぽう、金銅装磯州浜分離鞍金具は、飛鳥Ⅰ期後半には急速に衰退し、磯と州浜が一体になった金銅装磯州浜一体鞍金具が一般化する。以上のことから、金銅装磯州浜分離鞍金具のうち大型鋲を用いる新相の系譜は、TK43型式期～飛鳥Ⅰ期後半が存続時期といえるだろう。

さらに、本例の州浜金具における下縁を厚く縁取りする技法は、新相金銅装磯州浜分離鞍金具の初源的な事例である岡田山古墳例にはみられず、新しい時期の特徴といえる。縁取り技法の初源は、島根県上塩冶築山古墳例（松本編1999）にみられるようにTK43型式期に位置づけられるが、多用されるようになるのは、TK209型式期以降である。とくに、飛鳥Ⅰ期後半以降に盛行する金銅装磯州浜一体鞍金具においては、縁取り技法が一般化する。本例の州浜金具にみられる特徴は、こうした新型式の鞍金具との技術的な接点が見出せる点で、製作年代は比較的新しく捉えることができるだろう。

以上の属性をふまえると、本例の編年的位置は、TK209型式期～飛鳥Ⅰ期後半（遠江Ⅲ期後葉～遠江Ⅲ期末葉）に求めておくのが妥当であろう。

（5） 1号鐙

概　要（図61・62） 1号鐙（22、23）は鉄製壺鐙で、左右に用いた2点がある。柄と壺部との接続方向、全体の形状から、左右の別があったことが分かる。左用鐙（22）は遺存状態が悪く、復元で補填した部分が多い。全長16.0cm、幅15.3cm、高さ20.1cmである。右用鐙（23）は若干変形しているものの、ほぼ完存している。全長15.1cm、幅15.2cm、高さ19.8cmである。

左用鐙　22は、底板の形状、柄との接合方向から、左用の鐙と考えられる。胸板や底板の先端部を中心に破損が著しい。また、格子状の踏込も大部分が欠損しているが、ほぼ完存する右用鐙を参考に全体形が復元されている。

柄はほぼ完存する。長さ8.4cm、厚さ1.0cm、上端幅3.0cm、下端幅2.1cmであり、断面は長方形を呈する。柄の先端には、長さ1.0cmほどの小突起が成形されている。柄の上端には、幅1.4cm、高さ0.9cmの鐙鞦受穴が壺部の口に対して直交方向にあけられている。

輪部は部分的に破損しているが、全体形は十分にうかがうことができる。断面は蒲鉾形を呈しており、左側面における幅は1.8cm、厚さ0.6cmである。柄部に接合する上部は幅が広げられ、柄の幅と同一にされている。踏込部との接合部は不明瞭で、現状では輪部と踏込部は一体になっている。

踏込部は踏込舌部と踏込底板で構成される。踏込舌部は、幅4.0mm、高さ9.0mmの板状の部材を折り曲げて外枠をつくり、その上端に幅0.5cm、厚さ3.5mmの棒状の部材を梯子状に配置して形成されている。踏込底板は、踏込舌部の下からあてられている。踏込舌部を構成する梯子状の各部材は、現状ではすべて一体になっているようにみえるが、図示した部分における切断面の観察では、鍛接の痕跡や接着材などが用いられた状態は一切確認できなかった【第2部　構造解析編　pp.56-57】。当該部分では、梯子状に配置された棒状部材と外枠は、接合されていないと判断できる。別の部位で何らかの手段によって接合されていると捉えられよう。

胸板は一枚の鉄板によって構成されている。破損が大きく、製作技法を明確にうかがえないが、底板との接合部分は内外ともに明瞭に観察できる。また、柄部に隣接する胸板上部の中軸線には、わずかに稜線が確認できる。輪部との接合の痕跡は比較的明瞭であることから、鍛接はされていないと判断できる。

底板は、半楕円形の一枚の鉄板が用いられている。内側は胸板との接合の痕跡が明瞭で、踏込部との境界も端面が残されている。外側は、胸板との違いが明確であるが、踏込部との境は判然としない。踏込部と底板は足の力が最もかかる部位であり、組立工程において、この部分を特に丹念に鍛接したものと捉えられよう。

右用鐙　23は柄と壺部の接合方向から、右用の鐙と考えられる。ほぼ完存しているが、左側の胸板が若干膨らんでおり、底板からはずれている。本来の形状は、現状より左側が内側に偏っていたと考えられよう。

柄は若干の膨れがあるが、完存している。長さ8.3cm、厚さ1.1cm、上端幅3.0cm、下端幅2.1cmであり、断面は長方形を呈する。柄先端の小突起の状態は左用鐙と同一である。柄の上端には、幅1.4cm、高さ1.0cmの鐙鞦受穴が壺部の口に対して直交方向にあけられている。壺部の口の観察では、柄は輪部を突き抜け、胸板に接している可能性が高い。柄と輪部との接合技法は必ずしも明確でない。

輪部は、若干の変形があるが、完存している。断面は蒲鉾形をしており、右側面における幅は1.6cm、高さ0.7cmである。全体の形状、踏込部との接合状況は左用鐙と同一である。

踏込部も完存する。踏込部の形状は左用鐙と共通している。なお、踏込底板と梯子状の踏込舌部との一体性は左用鐙より著しく、部材どうしの接合方法は外面からではうかがえない。

胸板は一枚の鉄板によって構成されている。左側が若干膨らみ、底板からはずれているほかは、大き

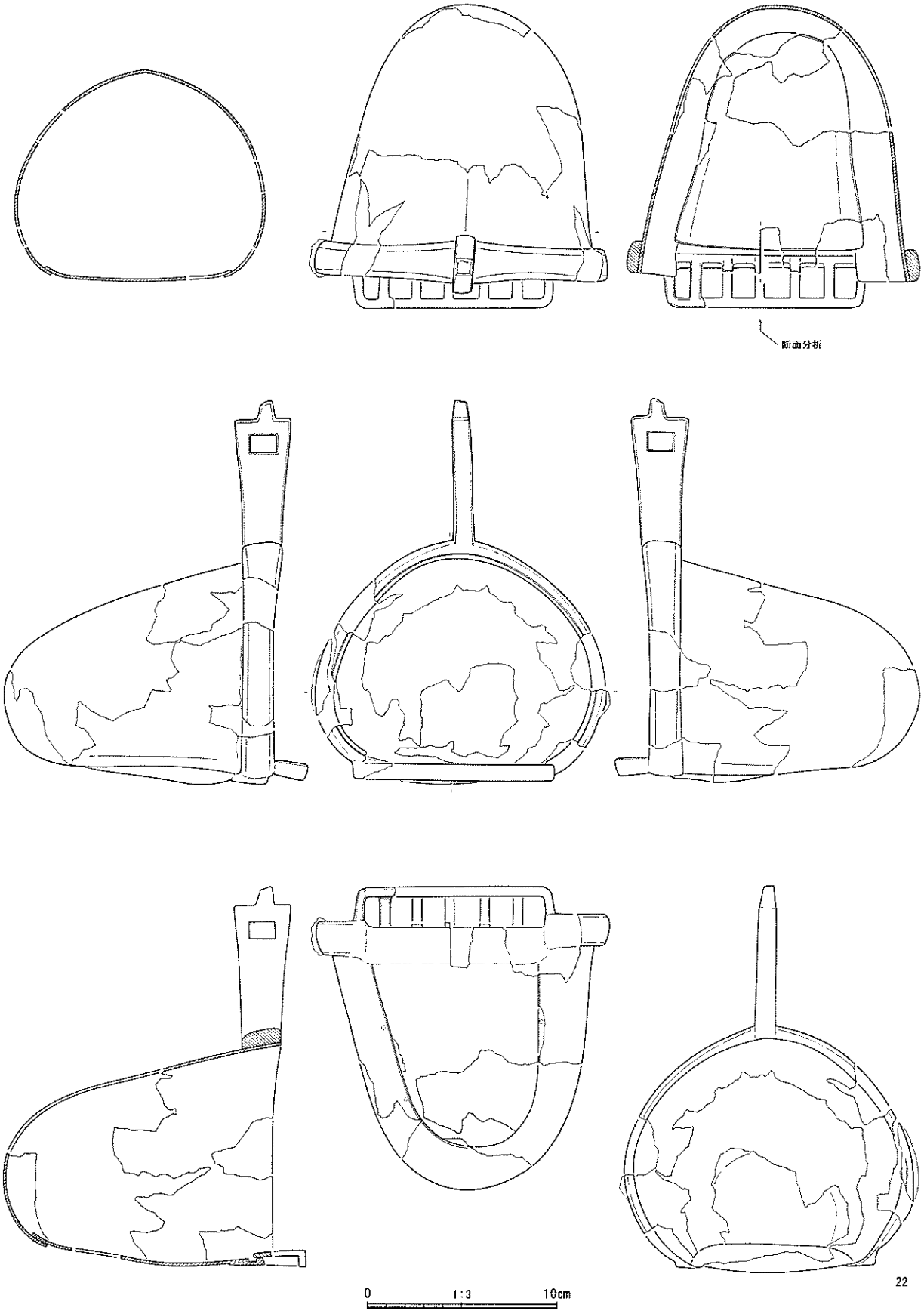


図61　1号鐙（左）

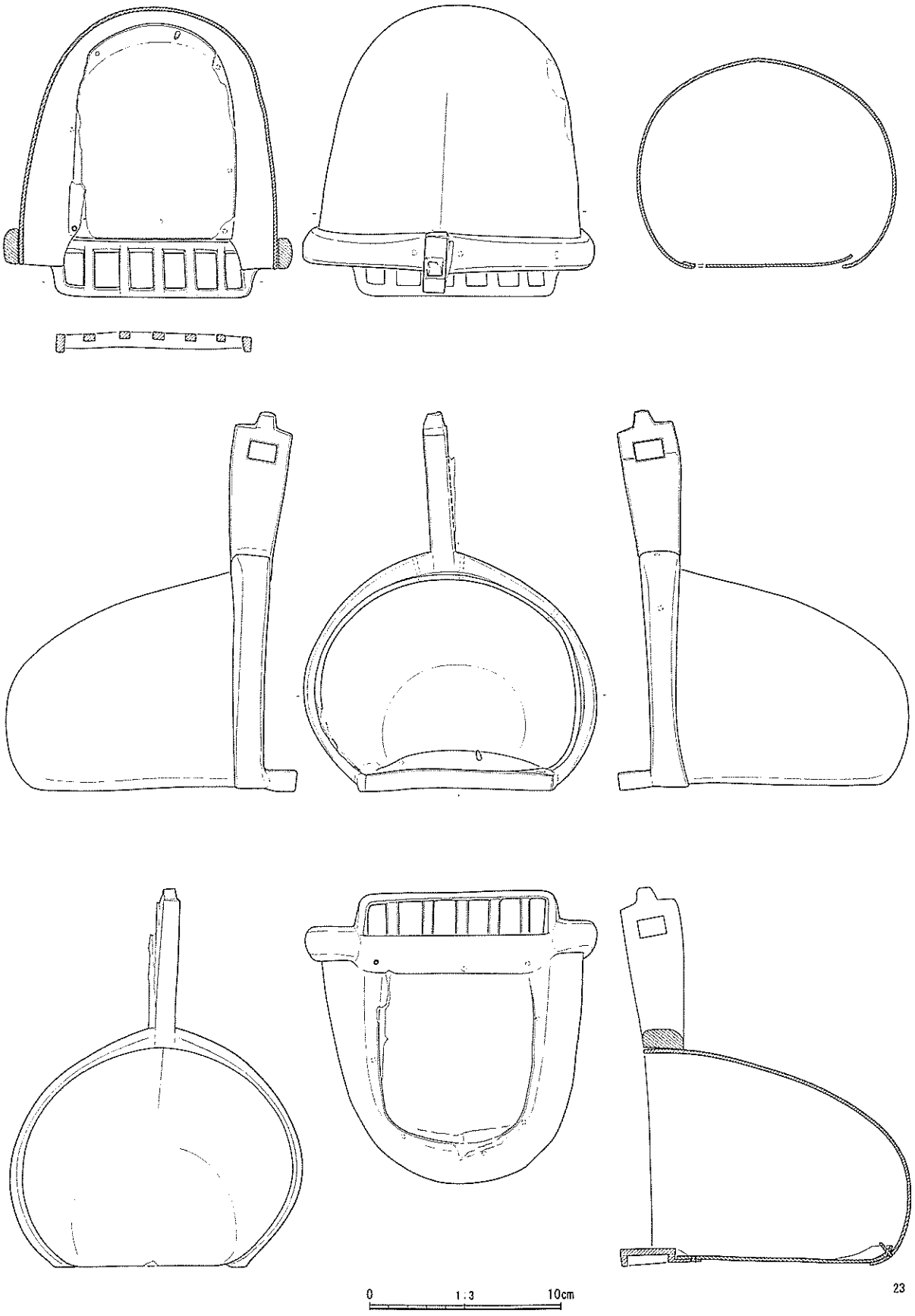


図62　1号鐙（右）

な破損、変形はみられない。柄に隣接する胸板上部の中軸線には、明瞭に稜線が確認できる。胸板と輪部の境界は明瞭である。X線写真の観察によって、胸板と輪部は、鋲によって連結されていることが判明する。鋲の痕跡は表面には現れていないことから、鋲頭、鋲脚ともに削り取られていると推定できる。

底板は、半楕円形の一枚の鉄板が用いられている。底板が充てられている痕跡は内面、外面ともに明瞭である。底部左側は、胸板の変形により、底板と胸板の間に空間が生じている。底板と胸板、踏込底板との連結も鋲が用いていることがX線写真の観察によって、明確に分かる。また、内面爪先部分には、鋲脚が切り落とされず、内面に突き出ている様子が確認できる。

製作工程の復元　1号鐙は、製作技術や組立工程がうかがえる痕跡が随所に観察できる。上述の観察所見から、その組立工程を復元すると、以下のような各段階が設定できる。

①踏込舌部における棒状部材の加工、組立（詳細な技法は不明瞭）

②柄と輪部の接合、踏込舌部と踏込底板との接合　（鍛接の可能性が大きい）

③輪部と踏込部との接合（鍛接の可能性が大きい）

④胸板と底板の接合（鋲を使用）

⑤胸板・底板と輪状部・踏込部との接合（鋲を使用、底部は鍛接の可能性もある）

なお、上述の段階設定のうち、②・③と④の工程の前後関係は必ずしも明確ではない。ただし、工程⑤において鋲を用いていることを重視し、類似した技法を用いる④の工程を②・③より後と捉える。

編年的位置　1号鐙は、鉄製壺鐙で比較的長い柄をもち、鐙靼受穴は壺部の口に対して直交方向にあけられている。金属製壺鐙は柄の長いものから短いものへの変遷が指摘されており（斉藤1985・1986）、長い柄をもつ本例は、鉄製壺鐙の出現期に近い製品であることを示している。鉄製壺鐙は群馬県綿貫観音山古墳例を初源例に、古墳時代終末期を通して存続する。鉄製壺鐙は、柄の鐙靼受穴周辺が拡張されて方形に突出することが多いが、本例は、鐙靼受穴近辺でも柄の幅が変わっていない。こうした特徴は、古相を示す木心鉄張杓子形壺鐙とも共通し、比較的古い様相といえるだろう。類似した形態の柄をもつ鉄製壺鐙として、長野県南方古墳例（関沢ほか1990）があげられ、韓国忠清南道論山・伝新岩里出土例（国立清州博物館1990）も形態的に関連が高いものとして注目できる（註1）。また、本例にみられる梯子状を呈する踏込舌部も、踏込に方形の透かしを入れるものや、鋲を打つものなどに先行する形状といえる。胸板や底板の接合技法も明確に観察できることも、本例が必ずしも鍛造技術を駆使したものではなく、技術の揺籃状態を示すものと捉えられる。

以上のことから、本例の製作時期は金属製壺鐙の初源的段階と考えられ、編年的位置は、おおよそTK209型式期に相当すると捉えられよう。

（6）2号鐙

概　要（図63）2号鐙（24）は鉄製輪鐙で、1点のみ出土した。もう1点は盗掘によって持ち去られたと想定できるが、副葬時から1点のみで、片方にしか鐙をもたない馬装であった可能性もある。遺存する1点は完形で、幅14.0cm、高さ18.1cmである。

形　状　本例は、扁平な柄に楕円形の輪部をもち、下縁は外反する板状の踏込部が連接する。輪部と踏込部の面とは厳密には直交せず、僅かに片方に傾いている。前後の別があった可能性があるだろう。

柄は幅3.9cm、高さ5.3cmの扁平な形態で、輪部との連接部分には、左右から半円形の抉りが入れられている。柄の厚さは0.3cmであるが、半円形の抉りから下は厚みが増している。柄には、幅1.9cm、高さ1.4cmの鐙靼受穴が輪部の口に対して並行方向にあけられている。輪部の断面は、やや扁平な隅切長方形（八角形）を呈する。上縁が最も扁平で、踏込部に近くなるに従い、次第に幅を減じている。

踏込部の平面は楕円形を呈しており、最大幅は6.1cmである。前後の端部は若干、折り曲げられ、足

をかけやすくしている。踏込表面には滑り止めなどの細工がみられず、平滑である。

編年的位置　本例のような板状の踏込をもつ鉄製輪鐙（板状踏込鉄製輪鐙）の類例として、長野県茅野大塚古墳例（宮坂1973）、藤枝市白砂ケ谷C２号墳例（八木ほか編1980）、神奈川県下尾崎1号横穴例（立花1995）があげられ、福島県八幡９号横穴例（吉田ほか2001）も残存部分の形態から同型式である可能性が高い。白砂ケ谷C２号墳では、飛鳥Ⅳ期～飛鳥Ⅴ期に併行する須恵器（遠江Ⅳ期末葉）がまとまって出土しており、下尾崎１号横穴の築造時期も飛鳥Ⅲ期を遡らない。以上のことから、本例のような板状踏込鉄製輪鐙の編年的位置は、飛鳥Ⅲ期～飛鳥Ⅴ期（遠江Ⅳ期後葉～遠江Ⅳ期末葉併行）に中心があると捉えられる。ただし、原分古墳出土馬具の組合せ関係を考慮すると、飛鳥Ⅱ期（遠江Ⅳ期前葉併行）までその出現時期が遡る可能性がある。

（７）辻金具

概　要（図64・65・68）　金銅装四脚辻金具が4点（25～28）ある。このうち、25の1点と26～28の3点がそれぞれ全体の形態や構造などが大きく異なり、別々の馬装の組み合わせと判断できる。前者を辻金具１類、後者を辻金具２類と呼ぶ。共に本体は鉄地金銅張であるが、辻金具１類は鮮やかな金色を呈していることに対し、辻金具２類は色調がややくすみ、銀色に近い。

辻金具１類（25）は、平面が八角形を呈しており、直線的な稜線が明確である。脚部には3箇所にやや大型の鋲が打たれ、金銅製の責金具が伴う。25は後述する三葉文心葉形杏葉（30）と組合った状態で出土している。

辻金具２類（26～28）は、やや扁平な半球形状の鉢をもち、頂部との間に稜線が巡る。頂部には、宝珠形の飾り鋲が、脚部には扁平で小型の鋲がそれぞれ1箇所ずつ打たれている。

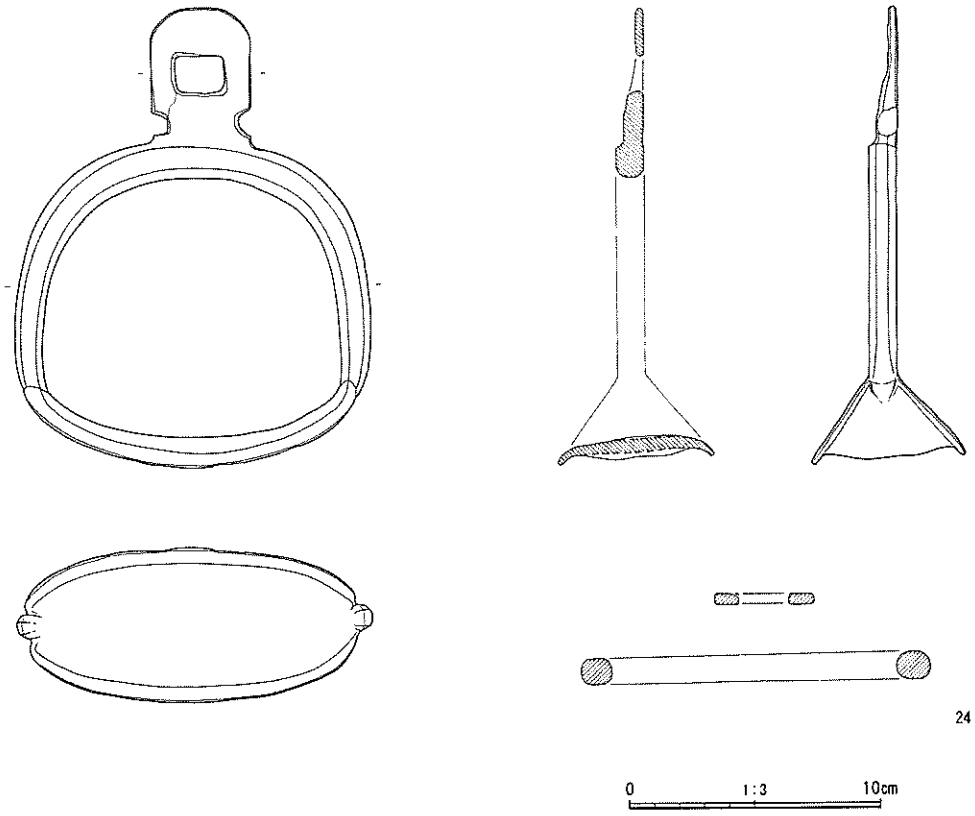


図63　２号鐙

辻金具１類　辻金具１類は、１点（25）のみが出土した。鉢部が部分的に欠損しており、若干変形している。図示した位置で幅9.7cm、吊金具を除いた長さ8.7cm、鉢の高さは2.5cmである。鉢本体、鋲頭は鉄地金銅張、責金具は金銅製である。

鉢部は平面形が八角形を呈しており、直線的な稜線が明確である。頂部はそれぞれの稜線が収斂し、ゆるやかな正方形を描く。鉢部下縁には、幅1.5mmほどの突帯が2条巡っている。脚が連接しない鉢部下端は、2.0mm～3.0mmほど外側に屈曲し、外側に向く端面は斜めに成形されている。

脚部は３箇所が半円形を呈し、1箇所が方形で杏葉の吊金具が鋲留されている。鉄地金銅張の鋲頭は比較的大型で、直径7.5mm～8.0mm、高さ5.0mm程度である。杏葉の吊金具は、側面を覆う折返し部がある。吊金具にも鋲が2箇所打たれている。なお、吊金具と杏葉は鋳着して出土したが、現在、杏葉と切り離されている。

責金具は、金銅製で幅3.0mmの棒状を呈する。断面は蒲鉾形をしており、裏面には、革帯を留めた脚が残存している。

内面には、革帯の痕跡が比較的明瞭に残存する。鋲脚には座金がはめられた状態が確認できる部分がある。

辻金具１類の編年的位置　辻金具１類の類例として、奈良県牧野古墳（河上編1987）から出土した馬具Ａがあげられる。牧野古墳例は、三葉文心葉形杏葉が伴うことでも本例と共通性が高い。本例は多角形の稜線を明確に表現していること、鉢下半部の装飾が突帯表現であること、責金具が金銅製であることなど、造りが丁寧で、多くの属性に古い様相が看取できる（宮代1986）。本例と牧野古墳例はほぼ同時期の製作と捉えてよいだろう。以上のことから、本例の編年的位置はTK209型式期といえ、牧野古墳から出土した須恵器の時期（TK209型式期の初頭）にその中心が求められよう。

辻金具２類　辻金具２類は、26～28の3点が出土した。3点とも完存しており、ほぼ同形、同大、諸特

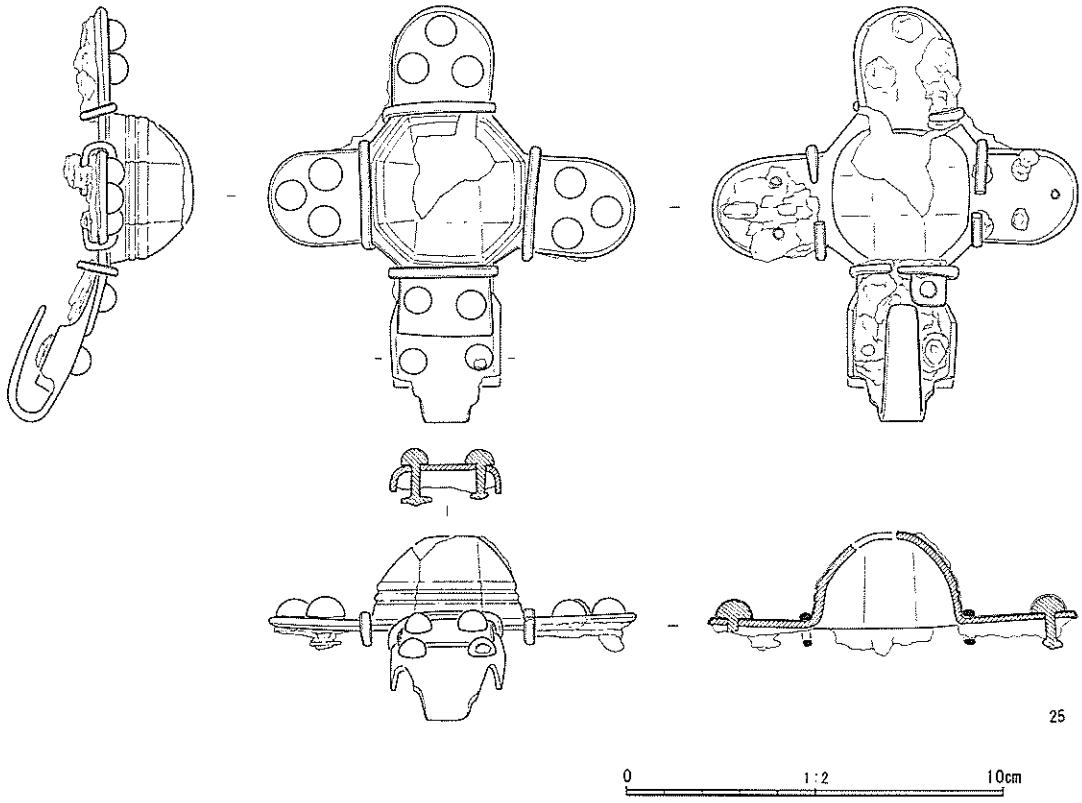


図64　辻金具１類

徴も一致する。図示した位置で、26が、幅7.8cm、長さ7.9cm、高さ2.8cm、鉢高1.6cm、27が、幅8.0cm、長さ7.9cm、高さ3.0cm、鉢高1.5cm、28が、幅7.8cm、長さ7.8cm、高さ3.2cm、鉢高1.6cmである。鉢本体、鋲頭は鉄地金銅張であるが、辻金具１類とくらべると金銅の発色は鈍く、銀色がかってみえる。

鉢部は扁平な半球形で、鉢高中ほどに稜線が巡る。鉢の直径は4.4cm程度である。稜線は明瞭で、内面にも抉れた状態が確認できる。頂部にもかすかな傾斜変換線を認めることができるが、明確な稜線とはいいがたい。頂部には、別造りの鉄地金銅張の宝珠飾が付けられている。宝珠飾の直径は1.2cm、高さは1.0cm～1.2cm程度である。宝珠飾は、鋲頭中ほどにやや幅が広い凹線を巡らせている。宝珠飾の鋲脚は長く、鉢部の高さを超えている。鋲脚先端は、折り曲げられているもの（26）や、別造りの座金具が取り付けられているもの（28）があり、革帯を結束していたことがうかがえる。

脚部は４箇所とも半円形を呈し、それぞれ１箇所ずつ鋲が打たれている。鋲は鉄地金銅張で、直径7.0mm、高さ2.0mm～2.5mm程度である。内面には、革帯の痕跡がわずかに残存する。

辻金具２類の編年的位置　辻金具２類は、稜線をもつ半球形鉢部をもち、下部には突帯や凹線などの装飾は施されない。頂部には宝珠飾が設けられ、半円形を呈する脚部に鋲はそれぞれ１箇所ずつ打たれている。こうした特徴をもつ辻金具は、宝珠飾の細差はあるものの、全国的にも比較的多く認められる。静岡県内に限っても、藤枝市白砂ケ谷Ｃ１号墳例（八木ほか編1980）や、静岡市賤機山古墳例（新相馬具）、静岡市池田山２号墳例（望月・若尾編1968）、富士宮市別所１号墳例（川江1992）などがあげられる。これらの事例には、遠江Ⅲ期末葉～

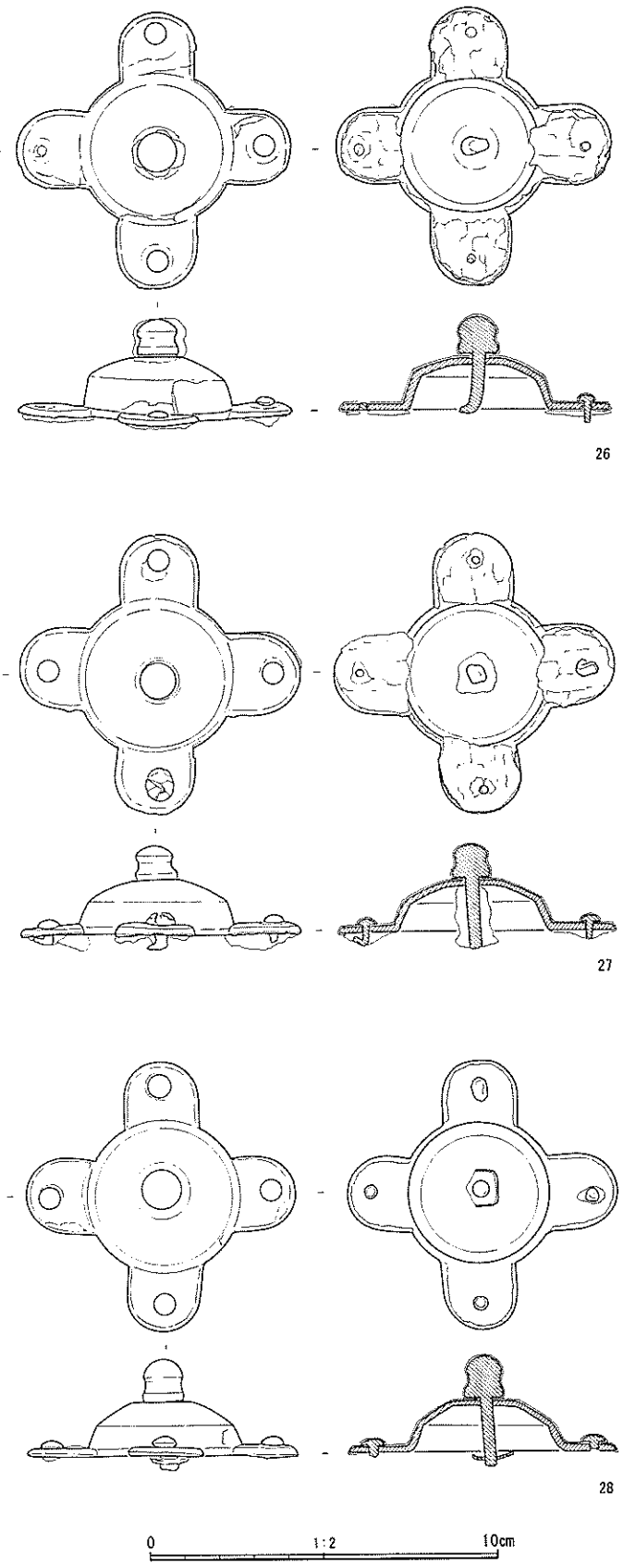


図65　辻金具２類

遠江Ⅳ期前葉（飛鳥Ⅰ期後半～飛鳥Ⅱ期併行）の須恵器が伴うことが多い。以上のことから、辻金具２類の編年的位置は、飛鳥Ⅰ期後半（遠江Ⅲ期末葉併行）に中心があり、飛鳥Ⅱ期（Ⅳ期前葉併行）に降る可能性もあると捉えられよう。

（８）雲　珠

概　要（図66）　金銅装八脚雲珠が１点（29）ある。鉄地金銅張で、形態的特徴、金銅板の色調などが辻金具２類と類似しており、辻金具２類に伴うものであることが知られる。遺存状態は若干悪く、脚部は２箇所が欠損しているほか、大きな亀裂が2箇所、鉢部を貫いている。この亀裂のために鉢部は変形し、本来の大きさより若干広がっている。図示した位置における復元幅11.2cm、復元長10.9cm、高さ4.5cm、鉢高3.3cmである。

構　造　鉢本体、鋲頭は鉄地金銅張りであるが、辻金具１類とくらべると金色の発色は鈍く、銀色がかってみえる。

鉢部は扁平な半球形で、鉢の中ほどに稜線が巡る。復元的に求めた鉢の直径は7.6cm程度である。辻金具２類と同様に、鉢の中ほどの稜線は明瞭であり、内面にも抉れた状態が確認できる。頂部の稜線は認められない。頂部には、別造りの鉄地金銅張の宝珠飾が付けられている。現状で、宝珠飾の直径は1.3cm、高さは1.1cmである。宝珠飾は、辻金具２類とは若干異なり、裁頭円錐形の台座の上に半球形状の突起を連接する形状である。宝珠飾の鋲脚は内面にほぼ完存している。鋲脚はサビに覆われ、正確な形状がうかがえないが、現状では先端が２方向に伸びる状態が観察できる。

脚部は現存する6箇所すべてが花弁状の切り込みをもつ。脚部には、それぞれ１箇所ずつ大型の宝珠飾鋲が打たれている。鋲は鉄地金銅張で、直径1.3cm、高さ1.2cm程度である。宝珠飾鋲は、やや幅が広

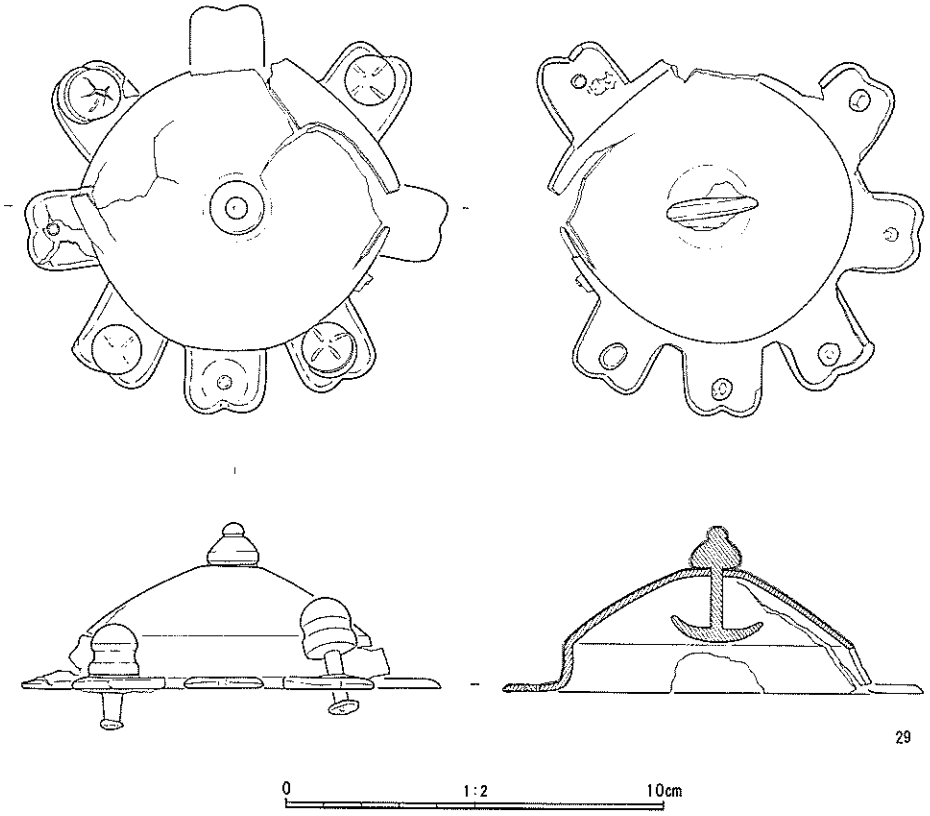


図66　雲　珠

い凹線を巡らせており、遺存状態が良好な部分を観察すると、鋲頭には、4方向の凹線によって花弁状の意匠を表現していることが分かる。鋲脚には若干扁平な部位が観察でき、小型の座金具が伴う可能性がある。内面は遺存状態が悪く、有機物の痕跡などは観察できない。

編年的位置　本例は、稜線をもつ半球形鉢部をもち、下部には突帯や凹線などの装飾を施さない点で、先述の辻金具2類と特徴が共通する。辻金具2類と本例は同工の馬具で、両者が組合うことを示しているだろう。全国的にみても、辻金具2類の類例が出土する古墳の馬具には、本例と類似した雲珠が共伴することが多い。静岡県内でも、静岡市賤機山古墳例（新相馬具）、静岡市池田山2号墳例、富士宮市別所1号墳例には、本例と共通する鉢部の形態をもつ雲珠がみられる。いっぽう、本例にみられる花弁状脚部に宝珠飾鋲が用いられる特徴は、やや特殊な事例といえる。ただし、宝珠飾鋲の製作技法、意匠は、先の類例にあげた雲珠・辻金具と同一系譜にあり、編年的位置を考える上では、大きな問題はない。

以上、本例の編年的位置については、辻金具2類と同様、飛鳥Ⅰ期後半（遠江Ⅲ期末葉併行）に中心があり、飛鳥Ⅱ期（遠江Ⅳ期前葉併行）に降る可能性もあると捉えられよう。

（9）杏　葉

概　要（図67・68）　金銅装三葉文心葉形杏葉が1点（30）ある。鉄地金銅張で幅9.3cm、長さ8.6cmである。辻金具1類（25）と連接された状態で出土しており、組み合うことが知られる。金銅板の色調も辻金具1類と類似している。地板と縁金が若干、浮いた部分があるが、完形である。

構　造　本例は、鉄製地板に金銅板を張り、その上から、別作りの鉄地金銅張の模様板が被せられている。模様板は、三葉文と縁金が一体に形成されたもので、三葉文の上下で縁金と連接している。三葉文は肉厚で、斜辺の稜線も明瞭である。三葉文の上縁は二又にされ、縁金と連結する。鋲は鉄地金銅張で、直径8.0mm、高さ4.0mm～5.5mmである。縁金に5箇所、三葉文の中心に1箇所の合計6箇所に鋲が打たれている。鋲脚は比較的明瞭で、裏面にはつぶされた鋲脚が直径4.0mmほどの円盤形になって遺存している。

立聞は幅2.9cm、高さ1.1cmほどである。辻金具との直接連結された鈎金具が銹着していたが、保存処理の過程で切り離された。辻金具と杏葉との連接状況を図68に示す。

編年的位置　本例は、鉄製地板に金銅板を張り、その上から別造りの鉄地金銅張の模様板を連結している点が特徴である。また、三葉文は流麗で、肉厚に表現されており、丁寧なつくりであることを示している。鋲数は6と比較的少ないことも留意しておこう。

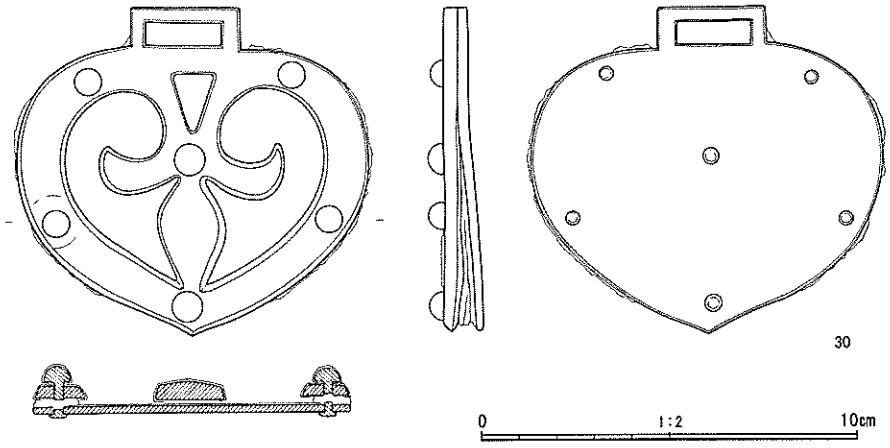


図67　杏　葉

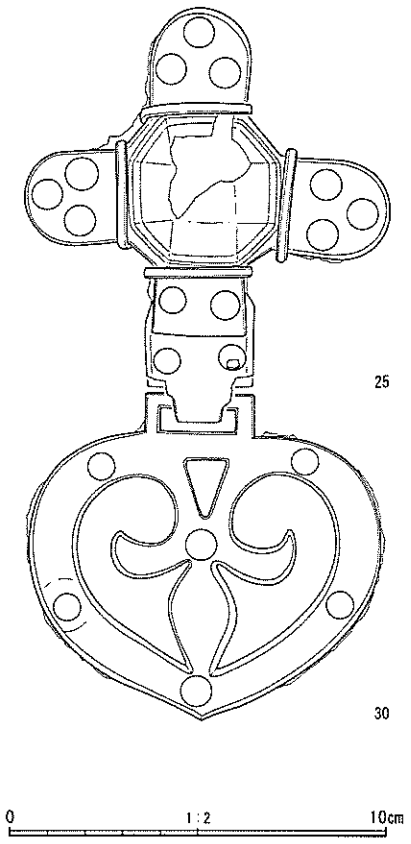


図68　杏葉・辻金具組合せ模式図

三葉文心葉形杏葉は、後期前半（MT15型式期）からみられるが、後期後半（TK209型式期以降）以降に盛行する形態との差異が大きい。本例は、TK209型式期に定型化する新相の三葉文心葉形杏葉の系譜上に連なるものである。

地板に張られた金銅板とは別造りの鉄地金銅板張の模様板をもつ点で、比較的古い様相を留める。類例としては、奈良県牧野古墳から出土した杏葉Ａがあげられるが、この事例は鋲数が21と、密に打たれている点で本例よりさらに古い様相をもつ。いっぽう、おなじく牧野古墳の杏葉Ｂは、金銅板が一枚被せであるが、三葉文上部が二又にされ、鋲数が８と本例と類似した形態的特徴をもつ。奈良県平林古墳（坂編1994）にも牧野古墳出土杏葉Ｂと類似した金銅板一枚被せの三葉文心葉形杏葉が出土しているが、この事例における鋲数は7である。三葉文心葉形杏葉は、TK209型式期の後半には、金銅板一枚被せの技法に収斂し、使用される鋲数も飛鳥Ⅰ期後半には、４～３と減少する傾向がある。

別造りの模様板をもつ技法と、金銅板一枚被せの技法は、輸入品と国産品という製作地の差異を示すという指摘がある。このことについての当否は別に検討する必要があるが、本例のような別造りの縁金をもつものは、比較的古い時期にみられるという評価は変わらないだろう。いっぽう、本例にみられる鋲数６という特徴は、使用する鋲数が減少化をみせ始めた段階にあることを示す。このことから、本例は、金銅板一枚被せの技法が盛行する以前の製品と捉えられ、鋲数６という特徴から、牧野古墳杏葉Ｂや平林古墳例と同段階にあると位置づけられよう。帰属時期は、辻金具１類と同様に、TK209型式期と捉えられ、牧野古墳から出土した須恵器の時期（TK209型式期の初頭）にその中心があるといえる。

(10) 鈒具付飾金具

概　要（図69）　鉄製鈒具付心葉形飾金具が４点（31～34）ある。本体は鉄製で、鋲のみ金銅を用いている。4点ある飾金具のうち、２点（31、32）はほぼ全体形がうかがえ、２点（33、34）は心葉形金具の一部が欠損している。心葉形金具には、金銅鋲が４箇所打たれ、革などの有機物の板状部材が連結されていたものと捉えられる。なお、裏面の遺存状態からは、地板の素材を知ることができない。

本例のような鈒具付心葉形飾金具は、杏葉として用いられた可能性が古くから主張されてきたが、近年、島根県上島古墳例などをもとに泥障吊金具である可能性が指摘されている（大谷編1996　p.25）。その根拠として、①鈒具付きの構造であること、②有機物の本体を取り付けて使用する構造であること、③心葉形金具の本体が装飾性を欠く鉄製であるものが多いこと、④４点が組合って出土することが多いこと、などがあげられる（宮代1997　pp.72-73）。根拠④にあげる４点という使用数は、杏葉としては類例が少なく、左右２点ずつ振り分けて使用する泥障吊金具と捉えると都合がよい。本例も４点分の金具が知られており、鈒具付心葉形飾金具を泥障吊金具と捉える見解と整合する。

ただし、宮代栄一も指摘するように（宮代1997）、４点が組合う杏葉の事例が少数例であるものの認められ、鈒具や有機物の本体を取りつける杏葉も知られることから、上記にあげた特徴は、鈒具付心葉形飾金具を泥障吊金具と捉える絶対的な根拠とはなりえない。出土状態からも泥障の存在を示す良好

な事例が知られないことも留意すべきである。福岡県沖ノ島遺跡例（鏡山ほか1958）のように、鉸具付心葉形飾金具の地板に金銅板を使い、杏葉やその他の飾金具として用いたと捉えられる事例もある。また、藤ノ木古墳では、鉸具付心葉形飾金具を含む馬装（Aセット）に別の泥障吊金具が伴い、鉸具付心葉形飾金具は、泥障吊金具とは異なる別の飾金具として用いられていたことが知られる（註２）。このように、鉸具付心葉形飾金具のすべてを泥障吊金具と断定することも困難で、杏葉などの飾金具として用いられた可能性も完全に排除することができない。

以上のことから、原分古墳から出土した鉸具付心葉形飾金具は泥障吊金具である可能性が高いと想定できるが、杏葉や別の部位を装飾する飾金具として用いられた可能性も考慮すべきである。以下、本書では、機能を特定しない「鉸具付心葉形飾金具」という名称を用いて記述を進める。

構　造　本例は、鉸具および心葉形金具が鉄製で、鋲は銅製である。心葉形飾金具の大きさは、31が幅5.2cm、高さ4.2cm、32が幅5.1cm、高さ3.8cmである。

心葉形飾金具は厚さ2.0mmほどで、断面半円形をしている。銅鋲を打つための円孔が4箇所みられる。

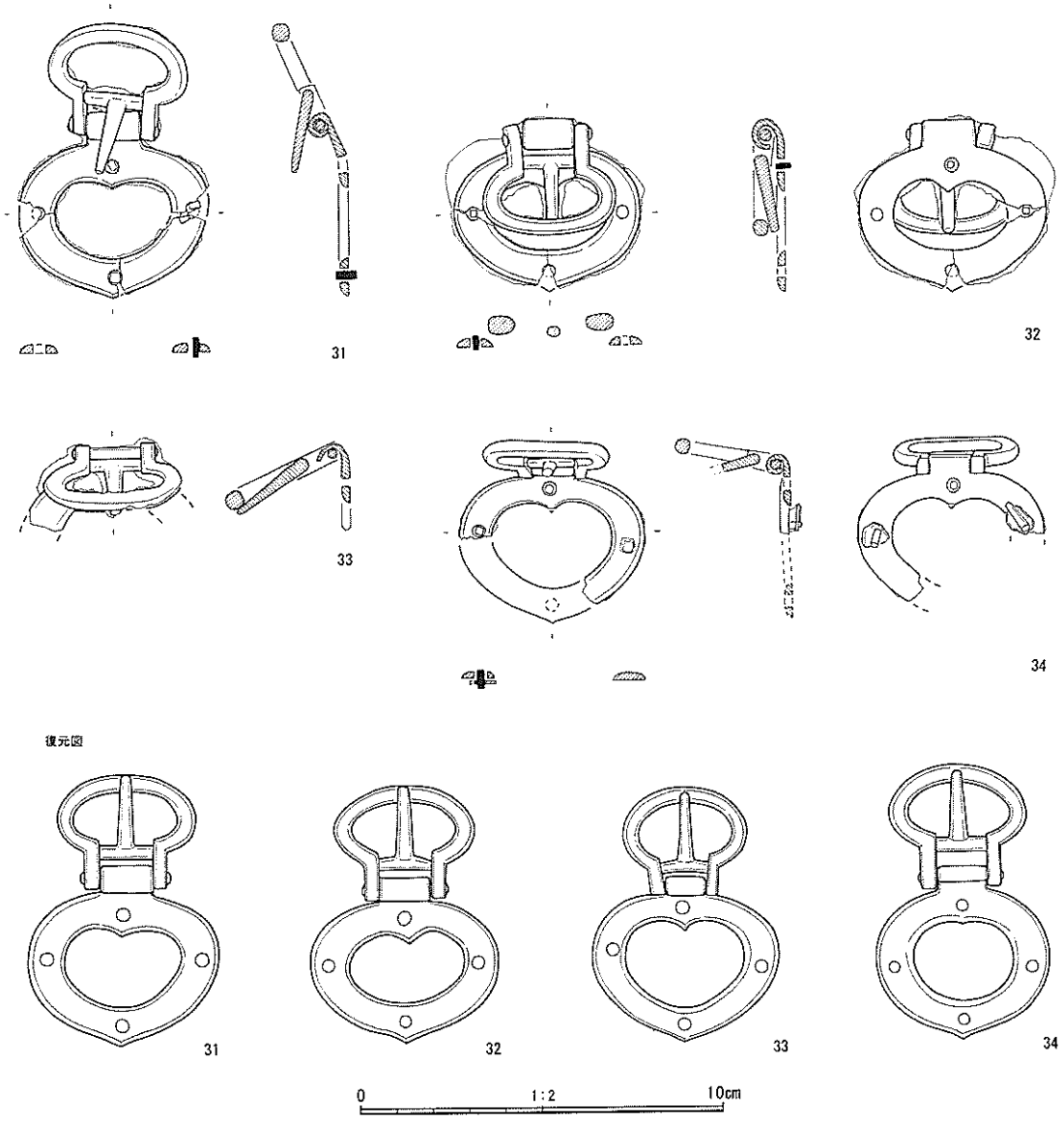


図69　鉸具付飾金具

上端は板状に成形され、鉸具を裏から巻きつけて連結している。

鉸具はT字形の刺金をもつものである。輪金の側面には刺金の芯が観察できないことから、刺金の両端を挟みこむ構造であると考えられる。

鋲は銅製で、鋲脚の断面形は方形であることが明確に観察できる。鋲頭は遺存状態が悪く、正確な形状が把握できないが、金銅製であった可能性が高いだろう。現状では、鋲頭が方形にみえる部分があるが、方形の鋲脚が露出していると判断でき、本来は半球形であったと捉えられる。鋲脚の多くは欠損しているが、座金が用いられていた部分がある。

裏面には、地板もしくは本体として用いた有機物が付着している可能性があるが、現状では遺存状態が悪く、明確な特徴がうかがえる付着物は観察できない。

編年的位置　鉸具付心葉形飾金具は、内区に三葉文などの装飾をもつものと、装飾をもたないものがあり、大まかに前者から後者への変遷が想定できる。鋲数は多いものから少ないものへ変遷する傾向が指摘できよう。材質は金銅製と鉄製の双方が知られる。単純に材質の変化が新古の別を示すものではないが、金銅製のものは古い時期に多く、新しい時期になると鉄製のものが増加する傾向がある。本例のように、鋲に金銅を用いるのも、金銅製品の系譜に僅かながら連なることを示していると捉えられよう。

内区に三葉文などの装飾がなく、鋲数が4と比較的少ない本例は、鉸具付心葉形飾金具の中でも新しい段階の事例といえる。近隣地域の類例としては、鉄製のものとして、長野県南方古墳例が、金銅製のものとして、静岡県宮下古墳例（川江1992）が知られる。南方古墳は飛鳥Ⅲ期以降の築造、その他の地域における類例も、飛鳥Ⅰ期後半以降の事例が多い。本例の編年的位置を明確に示すことが難しいが、類例が示す時期、すなわち、飛鳥Ⅰ期後半～飛鳥Ⅲ期（遠江Ⅲ期末葉～遠江Ⅳ期後葉併行）を中心に捉えることができるだろう。

(11) 鉤金具

概　要（図70）　鉄製鉤金具が2点（35、36）ある。1点（35）は完形、1点（36）は鉤部のみが遺存する。完形の35は、幅2.2cm、高さ6.6cmである。本例は、鏡板付轡や杏葉などを吊る通有の鉤金具と形態的に一致するが、吊り下げた本体の痕跡が全くみられない。鉤部に別の金属が銹着することがなく、遺存状態も良いことから、吊り下げた本体は、金属製の部材ではなく、有機物製のものであった可能性がある。

構　造　本例は、革帯などに留める板状部に鉤部が連接するもので、両者は一体に成形されている。板状部には、金銅板などが被せられた痕跡はみられず、鉄地がむき出しになっている。板状部に打たれた鋲は、35では5箇所みられる。鋲頭は小さく、直径4.0mm、高さ1.0mm～1.5mm程度であり、現状で

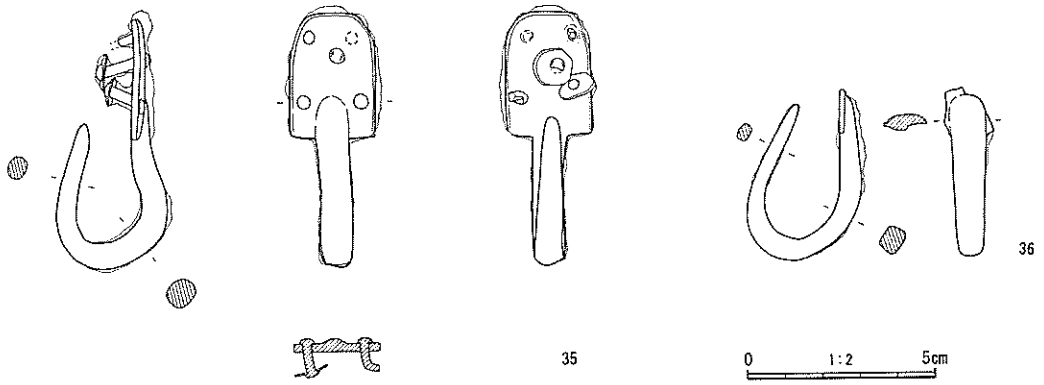


図70　鉤金具

は鋲頭に金銅や銀が被せられたような痕跡はみられない。鋲脚には方形の薄い座金具が用いられており、裏面には僅かに有機物が付着している。

編年的位置　本例のような鉤金具を用いて、鏡板や杏葉を吊るす構造は、TK209型式期までは一般的であり、飛鳥Ⅰ期後半以降になると急速に衰退する。使用される鋲が小さいことも古相を示す。他の馬具との組合せ関係の中で年代を議論すべきであるが、以上のことから、本例の編年的位置は、飛鳥Ⅰ期後半（遠江Ⅲ期末葉併行）以前の段階と考えられる。

(12) 貝座飾金具

概　要（図71）　金銅装イモガイ座飾金具が2点（37、38）ある。イモガイを螺頭から数cmの位置で裁断した上に鉄地金銅張の飾り鋲を打ったもので、面繋もしくは尻繋の革帯に付ける装飾として用いられたものである。2点とも、イモガイの遺存状態は悪く、本来の大きさをうかがうことが難しい。37の花弁形座金具の最大幅3.0cm、宝珠飾鋲の直径1.7cm、高さ1.3cmである。2点とも金銅の発色は鈍く、銀色がかってみえる。

構　造　本例は、裁断したイモガイの螺頭を台座とし、鉄地金銅張の花弁形座金具を間に挟み、鉄地金銅張の宝珠飾鋲で両者を貫いている。遺存例が良好な千葉県蕨塚古墳例（大久保1995）を参考に、復元図を作成した。

台座のイモガイは遺存状態が悪い。37はかろうじて螺旋形の螺頭内面の状態が観察できる。37の内面には、円管状の鉄製別部材がはめられた状況が観察できる。円管は、革帯との装着のための造作とも考えられるが、欠損部分が多く、詳細な機能は不明である。38はイモガイ本体の多くが欠損しているが、銹化作用によって表面が保護され、イモガイの痕跡がうかがえる部分がある。

本例に用いられた花弁形座金具は、六弁である。端面は緩やかな稜線をもち、花弁と花弁の間は僅かな窪みによって表現されている。宝珠飾鋲は、凹線をめぐらすもので、鋲頭には、4方向の凹線によって花弁状の意匠を表現している。同様の特徴は本古墳から出土した雲珠の鋲にもみられることから、両者は同工品であるといえよう。辻金具2類（26～28）、雲珠（29）、イモガイ座飾金具（37、38）ともに金銅の色調も類似しており、三者は一組の馬装であったと捉えられる。鋲脚断面は円形で、端部は欠損している。

編年的位置　イモガイ座飾金具は、TK209型式期～飛鳥Ⅱ期にかけてみられる（宮代1989）。花弁形座金具に多様性がみられ、その形態の変遷から編年が可能と捉えられるが、詳細な検討はなされていない。本例における宝珠飾や金銅板の特徴が辻金具2類（26～28）や雲珠（29）と共通していることから、これらは同工の製品であることが知られる。本例の帰属時期も、辻金具2類や雲珠と同様、飛鳥Ⅰ期後半（遠江Ⅲ期末葉併行）に中心があり、飛鳥Ⅱ期（遠江Ⅳ期前葉併行）に降る可能性もあると捉えられよう。

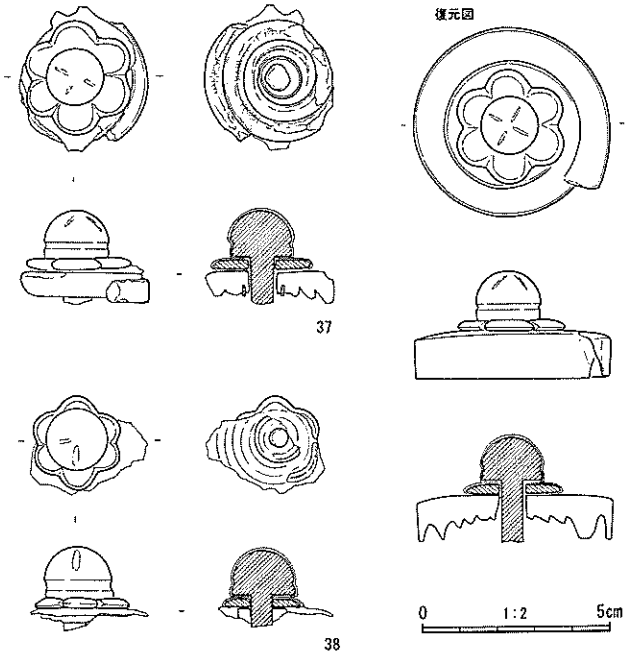


図71　貝座飾金具

表２　帯飾金具計測表

遺物番号	類型	鋲数	長さ	幅	鋲頭径	鋲頭高	備考
39	１類	3	5.1	3.3	0.6－0.65	0.5－0.55	
40		3	5.0	3.4	0.6－0.65	0.5－0.55	
41	２類	3	4.7	2.3	0.7	0.15－0.2	鋲脚に緑錆
42		3	4.3	2.2	0.6－0.7	0.25	
43		3	4.4	2.2	0.7 0.75	0.2－0.25	鋲脚折り曲げ
44		3	4.4	2.2	0.7	0.2	
45		3	4.1	2.2	0.55－0.6	0.2	
46		3	3.5	2.4	0.65－0.7	0.25	
47		3	3.4	2.2	0.7－0.75	0.2	
48		3？	－	2.2	0.7	0.2	
49		2	2.9	2.2	0.7	0.25	
50		2	2.6	2.2	0.65－0.7	0.25	
51	３類	3	3.5	2.0	0.65 0.7	0.25	
52		3	3.2	2.1	0.7	0.25	
53		3	3.2	2.1	0.7－0.75	0.25	
54	４類	3	2.7	2.3	－	－	鋲頭欠損
55		4	2.3	2.2	0.6	0.2	

単位　cm

（13）帯飾金具

概　要（図72）　面繋や尻繋の革帯等に取り付けられた金銅装（一部鉄製のものを含む）帯飾金具が17点（39～53）ある。このうち、39、40の２点と41～50の10点、51～53の３点、54、55の２点が、それぞれ形態や寸法、表面の状態などが類似している。39、40を帯飾金具１類、41～50を帯飾金具２類、51～53を帯飾金具３類、54、55を帯飾金具４類と呼ぶ。各個体の寸法は表２に示す。

帯飾金具１類と２類は表面が金色を呈し、鉄地金銅張であることが明瞭である。帯飾金具３類の表面は厚く鉄サビに覆われており、一見すると鉄製の金具に見える。ただし、帯飾金具３類の裏面には金銅板の折り返しが観察できるので、鉄地金銅張であることが分かる。帯飾金具４類は金銅板が確認できず、鉄製金具の可能性がある。

帯飾金具１類　39と40の２点が相当する。革帯の表面のみならず、側面も覆う形態のもので、爪形を呈している。突出度が比較的大きい鋲を３箇所に留めている点でも他の帯飾金具と大きく異なる。帯飾金具１類は、辻金具１類や杏葉と同様に、鮮やかな金色を呈している。側面を覆う形態は、辻金具１類（25）に鋲留された吊金具と共通し、組合せ関係にあることがうかがえる。

39は幅3.3cm、長さ5.1cm、高さ0.6cm、40は幅3.4cm、長さ5.0cm、高さ0.6cmである。直径6.0mm～6.5mm、高さ5.0mm～5.5mmほどの鉄地金銅張の鋲が３箇所に打たれている。内面には、革帯が比較的良好に遺存している。

帯飾金具２類　41～50の10点が相当する。このうち、３箇所に鋲が打たれるもの（41～47）と、２箇所に鋲が打たれるもの（49、50）がある。さらに、３箇所の鋲が打たれるものは、形態の違いから、41～45の5点、46、47の２点に細分できる。なお、48は端部が欠損しているため、詳細な形態的特長がうかがえない。しかし、ある程度の長さがみられることから、3箇所に鋲が打たれたものの一群に含まれるものと考えられよう。

帯飾金具２類は幅2.2cmであることでほぼ共通し、鋲頭の大きさも直径6.0mm～7.0mm、高さ2.0mm～2.5mm程度と一致している。金銅板の遺存状態は比較的良好で、鮮やかな金色を呈しているものがある。帯飾金具２類は、つくりが共通しており、すべて一つの馬装に用いられた金具と捉えてよいだろう。金銅板の色調は異なるが、鋲頭の形状は辻金具２類と共通していることから、辻金具２類と同じ馬装に用いられたものと想定できる。

帯飾金具３類　51～53の３点が相当する。３箇所に鋲が打たれており、形状的には46や47に似る。帯飾金具１類・２類と比べて鉄サビで厚く覆われ、表面の観察だけでは、金銅板が張られていたか不明瞭である。金具の幅が2.0cm～2.1cmと帯飾金具２類と比べて若干狭く、鋲頭が緑錆で覆われている点でも、違いがある。ただし、裏面には表面に張られた金銅板が折り返されている状態が確認でき、帯飾金具３

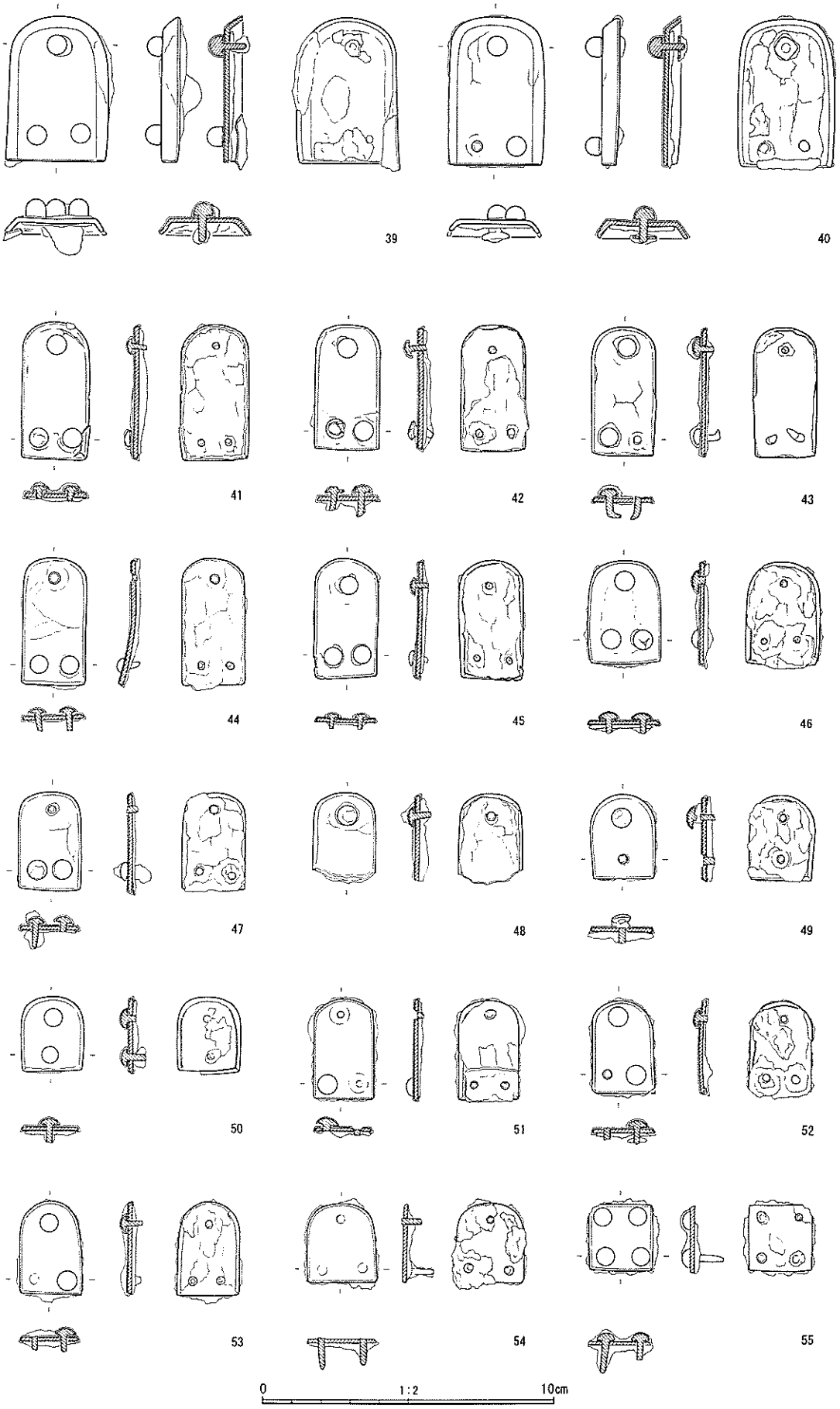


図72　帯飾金具

類も鉄地金銅張であることが判明する。寸法の差異、遺存状態の違いがあるが、形態的の特徴、鋲頭の大きさは、帯飾金具２類と共通しており、帯飾金具２類と帯飾金具３類は、同一の馬装で用いられていた可能性が高いだろう。

帯飾金具４類　54、55の２点が相当する。金具本体および、鋲頭に金銅板が張られていたか不明瞭であり、鉄製金具の可能性がある。帯飾金具とするより、鉄製留金具と捉える方が妥当ともいえるが、便宜的に帯飾金具に含めて報告する。54は爪形、55は方形を呈している。

54は、爪形の金具で３箇所に鋲が打たれている。長幅比が他の飾帯金具と異なることからも、帯飾金具２類や帯飾金具３類と違う種類の金具であることがうかがえる。54は鋲頭を含め表面が完全に剥落しており、金銅板がはがれた可能性も考えられる。

55は方形の金具で、４箇所に鋲が打たれている。方形の金具としては唯一の個体である。金具本体、鋲ともに鉄サビで覆われている。鋲脚が長く遺存しており、長い部分で1.0cmを超える箇所がある。鋲頭の形状や遺存状態は、他の帯飾金具と異なっている。

編年的位置　帯飾金具各類の編年的位置については、それぞれ組み合う馬装との関連のなかで検討可能である。帯飾金具１類は、辻金具１類と形状が共通することから、TK209型式期に中心があると評価できる。いっぽう、帯飾金具２類は、辻金具２類と共通性が高いことから、飛鳥Ⅰ期後半（遠江Ⅲ期末葉併行）に中心があり、飛鳥Ⅱ期（遠江Ⅳ期前葉併行）に降る可能性もあると捉えられよう。帯飾金具２類の類例は、静岡県内でも比較的多く確認できるが、共伴する須恵器は遠江Ⅲ期末葉～遠江Ⅳ期前葉に位置づけられ、先の想定と矛盾しない。帯飾金具３類も形態的に帯飾金具２類と類似することから、同じ馬装に用いられた可能性が高いであろう。帯飾金具４類については、使用部位を含めて組合せ関係が明確でなく、明確に位置づけることが困難である。

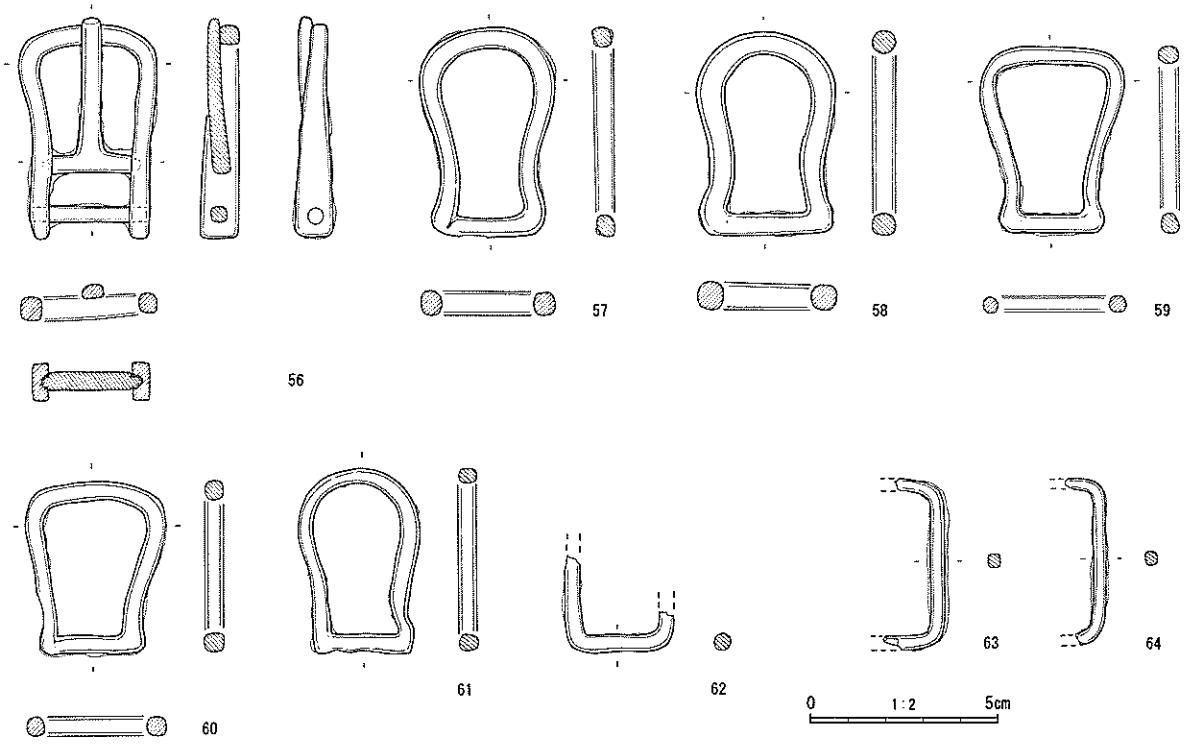


図73　鈒　具

表3　鈹具計測表

遺物番号	類型	長さ	基部幅	先端幅	最小幅	備考
56	1類	5.8	3.0	3.3	3.1	T字刺金
57	2類	5.5	3.9	3.6	2.6	鉄脚に緑錆
58		5.4	4.5	4.7	3.0	
59		4.9	2.8	3.8	2.4	
60		4.5	2.8	3.7	2.6	
61		4.9	2.7	3.2	2.6	
62		－	3.0	－	－	先端欠損
63		4.5	－	－	－	側部欠損
64		4.5	－	－	－	側部欠損

単位　cm

(14) 鈹　具

概　要（図73）　面繋や尻繋の革帯等をつなぎ留めていたと考えられる鉄製鈹具が9点（56～64）ある。このうち、別づくりの刺金をもつものが1点（56）と、輪金のみのものが8点（57～64）ある。前者を鈹具1類、後者を鈹具2類と呼ぶ。鈹具2類は、完形のもの5点と破片3点がある。鈹具2類には、輪金の形状に細差があるがみられる。各個体の寸法は表3に示す。

鈹具1類　鈹具1類は、T字形の刺金をもつもので、56の1点がある。長さ5.8cm、幅3.3cmであり、別つくりの鉄棒からなる基部がある。輪金側面は長方形にされ、刺金の両端を挟み込み、基部の鉄棒を介して留められている。このため、側面には、基部の鉄棒が露出しているが、刺金の端部は隠れている。なお、刺金が挟み込まれた状態は、マイクロフォーカスX線CT画像によって明確に確認できる【第2部　構造解析編　p.62】。

鈹具2類　鈹具2類は、刺金がなく輪金のみの形態である。8点分（57～64）が知られている。輪金断面は円形をなしており、1本の鉄棒を折り曲げて鈹具本体の形状をつくりあげたことが分かる。基部の片方（図示下方向では、左下）には、鉄棒を接合したような痕跡がみられ、製作技法の一端がうかがえる。57、58、61は、輪金先端が円形を呈し、59、60は輪金先端が直線的である。また、欠損部分が大きい62～64は、遺存している部分から全体形を想定すると、側辺に括れをもたず、直線的な形態であると考えられる。

編年的位置　鈹具それぞれの編年的位置を示すことは難しい。出土状態においても、鈹具はさまざまな副葬品と混在している様子が確認でき、馬装との組合せ関係も明らかにしがたい。このため、鈹具の編年的位置づけについては、原分古墳の馬装の年代観、すなわち、TK209型式期～飛鳥Ⅱ期という幅の中で捉えざるをえない。

註

註1　このほか、韓国では、全羅南道潭陽大峙里遺跡（金ほか2004）でも、1号鐙と同形態の柄をもつ壺鐙が出土している。朝鮮半島では、統一新羅の時期においても、全羅南道光陽馬老山城（崔・李2005）から出土した鉄製壺鐙や、韓国中央博物館収蔵の黄海道平山から出土した金銀刺繍張壺鐙など、1号鐙と類似した形態の壺鐙が散見できる。金属製壺鐙は、柄の形態、舌部の形態など、複数系統に分離して、変遷を整理する必要があるだろう。

註2　藤ノ木古墳の鈹具付心葉形飾金具をAセットではなく、Bセットに伴うと捉えれば、鈹具付心葉形飾金具が泥障吊金具として用いられた可能性もある。

3　刀剣類

刀剣類は奥壁左壁側と、石室中央から入口付近でまとまって確認されている。奥壁側に刀身破片６点のほか、銀象嵌円頭大刀柄頭、銀象嵌鍔、銀象嵌柄縁金具（あるいは責金具）が出土しており、刀身幅から３点が副葬されていた可能性が高い。一方、石室中央部では鉄製鍔２点、金銅装大刀１点（刀身破片２点を含む）が出土している。刀身が金銅装大刀以外に出土していないが、鍔２点が奥壁側の大刀と伴わないとすれば３点が存在することになる。つまり、銀象嵌円頭大刀を含む３点が奥壁側に、金銅装大刀を含め３点が石室中央に、最大６点（鍔が奥壁側の大刀に伴うと仮定すれば最小で４点）が副葬されていた可能性がある。また、家形石棺の破片と、金銅装大刀の破片の出土状況を考慮すると、石棺内部に副葬されていたのは金銅装大刀である可能性が高い。このほか石室框石付近で鉄鉾１点、玄室中央の家形石棺のすぐ南側で刀子２点が出土している。

なお、編年的位置づけの考え方、表記については、馬具の報告（本報告p.76参照）と同一である。

（１）金銅装圭頭大刀

概　要（図75）　金銅装大刀の部品は柄頭（１、２、３）、柄間金具（６～14）、鞘口金具（あるいは鞘尻金具、５）、鞘中金具（４）が出土している。柄頭片の形状を考慮すると図74に示したように茨城県梶山古墳出土例（汀編1981）に類似する金銅装圭頭大刀である可能性が高い（註１）。また、近接して出土した刀身（32）と切先（33）が圭頭大刀の刀身である可能性が高い。

柄頭の構造　金銅装柄頭は２片以上に破壊されており全体的な形状は不明である。残存している破片からみると、木製柄にキャップ状の圭頭柄頭をはめ込んで装着した可能性が高い。柄頭には懸通孔が穿たれ、鳩目金具を用いて固定されている。鳩目金具は金銅板を筒状に折り曲げ、蝋付けしたものと考えられる。また、柄頭の外に出る頭部分は金銅板を折り曲げて玉縁にする形態ではなく、先端を潰してやや突起させている形態である。

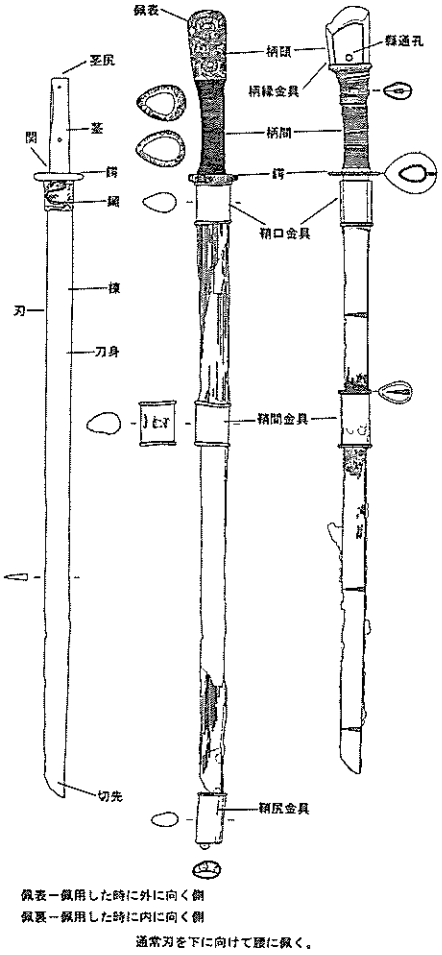


図74　大刀の名称

柄間の構造　６は金銅装柄間金具である。この柄間金具と同一個体であったと考えられる刀身（32）は鉄製茎が残存しており、柄間の縁金具部分に残る木質（木製柄）から、柄間金具は柄頭側が残存している可能性が高い。

柄間金具は、木柄に中実の蒲鉾形金銅線を螺旋状に巻き付ける金銅線（蔓）巻である。現状で責金具から3.5cmまで残存している。このほかに７～14の金銅線巻の破片が出土しており、少なくとも柄間は3.5cm以上であったことが判明する。

柄間端部には圭頭柄頭の金銅装責金具（縁金具）と想定する金具を装着している。責金具の平面は先端がとがらない倒卵形で、断面は外側の幅が狭い台形である。長軸長4.0cm、短軸幅2.5cmである。また、内孔長3.3cm、幅1.7cmで、厚さ４mmである。

木製柄は切先側幅が狭い先端が尖らない倒卵形で、金銅線巻の内側からみると長軸長3.1cm、短軸幅1.4cmと想定できる。

刀身の構造　この金銅装圭頭大刀の刀身は、出土位置を考慮すると金銅製鎺が残存している刀身（32、33）である可能性が高い。

金銅製鎺は覆い部分の中央に切先側の幅が狭い長台形の孔が穿たれるキャップ（覆い）状金具である。断面は倒卵形であり、長軸長2.9cm、短軸幅1.6cmである。鎺の長さは2.2cmである。孔の長さ1.8cm以上、棟側幅６mm、刃側幅４mmである可能性が高い。

刀身は直刀で、鎬は確認できない。関は鎺により明確ではないが茎と刀身の幅差からみると両関である可能性が高い。茎には木製柄の痕跡が残るが、二枚合わせ技法か一木造り落とし込み技法による柄であるか判断できない。刀身に残る木目は、佩表・佩裏で若干方向を異にすることから、木製鞘は二枚の板を組み合わせて製作された可能性が高い。

切先は出土位置が金銅装圭頭大刀の刀装具・刀身と近接して出土した（33）である蓋然性が高い。切先は緩やかなフクラ切先である。刀身に鎬は確認できない。

32、33からみると、圭頭大刀は残存長69.6cm、刀身残存長64.1cm、刀身幅2.9cm、棟側厚さ６mmである。茎幅1.8cm、棟側厚さ５mm、刃側厚さ３mmである。

鞘の構造　鞘に伴う金銅製飾金具は、金銅製鞘口金具、金銅製鞘間金具（あるいは鞘尻金具）が出土している。圭頭大刀金銅製金具の全長からみると、鞘間金具のほうが鞘口金具よりも大きい傾向にあることから、５が鞘口金具、４が鞘間金具（あるいは鞘尻金具）である可能性が高い。鞘口金具（５）は全長5.3cm、幅4.3cmである。金銅板の厚さは0.5mmである。鞘間金具（４）は破壊が著しく、片側の小口部分が欠損している。残存長5.75cmである。金銅板の厚さは鞘口金具同様0.5mmである。

この２点の飾金具のほかには鞘尻金具が金銅装であった可能性が高く、それ以外には飾金具が伴わない蓋然性が高いことから、この鞘は瀧瀬芳之のいう、鞘尻・鞘口以外にも飾金具を用いる「準素鞘」に該当する可能性が高い（瀧瀬1984）。なお、現状では佩用金具と想定する吊手金具などは出土していないため、菊地芳朗分類のＣ類（基本的に吊金具を伴わない）に該当する可能性が高い（菊地2003）。

編年的位置　本例は、拵え及び柄頭の形状が明確ではないことから時期を特定することは困難であるが、残存する破片の特徴からこれまでの研究を参考にして考えておきたい。

滝瀬芳之の研究によれば、原分古墳の圭頭大刀は金銅線巻・準素鞘である特徴からＬ１類（瀧瀬1984）、Ⅱｄ式（瀧瀬1986）である可能性が高い。滝瀬はこのような柄間に金属線巻を伴う圭頭大刀はTK43型式期～TK217型式期（飛鳥Ⅱ期）に比定しているが、類似する茨城県梶山古墳（汀編1981）や埼玉県吉見かぶと塚古墳例（滝瀬1984）からすると、TK43型式期～TK209型式期の可能性が高い。また、菊地芳郎の圭頭大刀の分類からは、原分古墳の圭頭大刀は佩用装具をもたないことから、Ａ類・Ｂ類ではなくＣ類の可能性が高く、菊地はＣ類をＢ段階～Ｃ段階（TK43型式期～TK209型式期）に位置づけている（菊地2003）。

したがって、原分古墳の圭頭大刀の特徴は、瀧瀬・菊地の研究ではTK43型式期以降飛鳥Ⅱ期（TK217型式期）に収まるが、TK43型式期～TK209型式期に位置づけられる可能性が高い。

（２）推定装飾付大刀飾金具（金銅装飾金具）

概　要（図75）　金銅製品小片が多数出土しており、主要な７点（15～21）を図示した。金銅装大刀の鞘飾金具の可能性がある。しかし、金銅装大刀の鞘金具が柄や鞘に固定された後で打ち込み点刻が施される場合が多いが、本金銅製品は、裏面から打ち出し点刻されていること、金銅装飾鞘金具が唐草文や双連珠文であることが多いことから、鞘飾金具の可能性は低いと想定する。同様の遺物が少ないこと

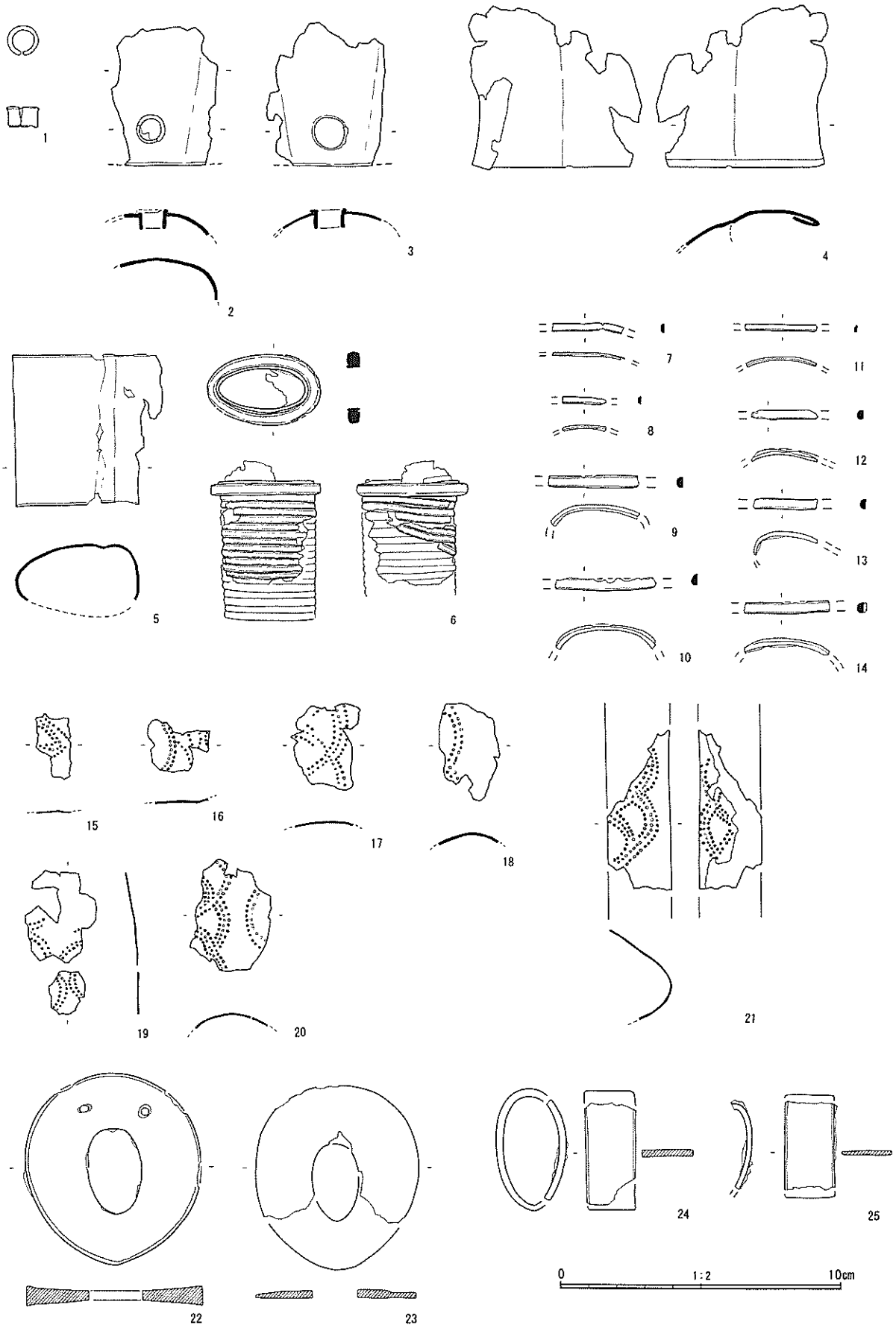


図75　大刀装具

から用途は不明といわざるをえないが、筒状の飾金具であった可能性が高い。

なお、当該飾金具が鞘飾金具であった場合には、原分古墳出土の圭頭大刀は飾鞘（滝瀬1984）である可能性が高い。

構　造　文様は表面からの打ち込みと裏面からの打ち出しで構成されており、二列の打ち込みの間に裏面（内面）からの打ち出しがくるように配置されている。また、全体的な文様は唐草文や蕨手文ではなく、丸みを帯びた山形を連ねた文様である。24の残存状況が最も良好であり、横断面U字形の金具であるいは、円筒形金具であった可能性が高い。金銅板は0.2mm程度と非常に薄く、点刻の１点は直径0.5mm、高さ・深さ0.5mm程度である。

（３）銀象嵌円頭大刀

概　要（図77）　銀象嵌円頭大刀は柄頭（26）、銀象嵌八窓鍔（28）、銀象嵌縁金具（27）で構成される可能性が高く、これ以外に当該大刀に伴うことが明確な刀装具は存在していない。鞘に伴う飾金具は一切出土していないことから、銀象嵌円頭大刀の鞘は鞘尻及び鞘口以外に飾金具を装着しない「素鞘」（瀧瀬1984）、柄間は金銅装の飾金具（金銅線・銀線巻、金銅板巻）を持たないものであった蓋然性が高い（註２）。佩用方法についても金属製吊手金具が出土していないことからそれらを伴わない紐などでの佩用であった可能性が高い。

円頭柄頭の構造　円頭柄頭（26）は、横断面は切先側がやや窄まる倒卵形を呈している。側面形態は左右対象ではなく、やや切先側が棟側と比較して若干下がる。柄縁は別造りの鉄製縁金具が装着されるのではなく、柄縁を一段突出させ有段縁にしている可能性が高い。柄頭の固定には懸通孔を穿ち、銅地金銅張鳩目金具を用いる。懸通孔は中心よりやや切先側にずらした位置に穿孔されている。柄頭内部の鳩目金具は佩裏側と佩表側の金具が一直線に配置されておらず、現状では「く」字形に残存している。柄頭内部に刀身茎は遺存していないことを考慮すると、本来茎が柄頭まで及ばない構造であった可能性が高い。円頭柄頭の寸法は全長9.3cm、最大幅5.2cm～5.4cm、厚さ4.4cm、鉄板厚さ５mm、柄縁部幅5.1cm～5.2cm、柄縁全長７mmである。柄縁は柄頭部より２mm程度突出している。

鳩目金具は片側（頭部）の縁を折り曲げ肥厚させた後、金銅板を筒状に折り曲げ蝋付けしている。（註３）。鳩目金具は佩表側が直径１.0cm、高さ1.5cm、厚さ１mm、上端肥厚部1.5mm、佩裏側が直径１.0cm、高さ1.5cm、厚さ１mm、上端肥厚部1.5mmである。

円頭柄頭の文様　円頭柄頭の象嵌文様は、変形亀甲繋渦巻文であり、亀甲文（六角形）が四角形・五角形に変形した変形亀甲文の中に、渦巻文・半円文を基調とする文様を充填したもので、頂部を含めて４段９区画構成である。

変形亀甲繋文は、支点環文が三重円で構成され、連結線は二重線（圏線）の間を連続円文で充填する構成である。以下の各区画の文様について記述する。

１区画（佩表側）は、五角形の変形亀甲文の中央やや下位に懸通孔が穿たれ、そこに鳩目金具を据え、その周囲は二重円文を配置している。その左右に時計回りの渦巻文を懸通孔を挟んで対で施し、その間には亀甲繋文の繋ぎ目の支点環文を基点として波文（半円形文）を配している。

２区画（佩裏側）は１区画と同様の文様配置であるが、懸通孔の左右の渦巻文は反時計回りで懸通孔を挟んで対

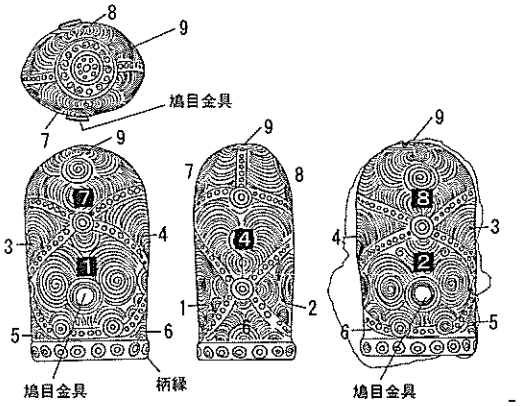


図76　銀象嵌の区画番号

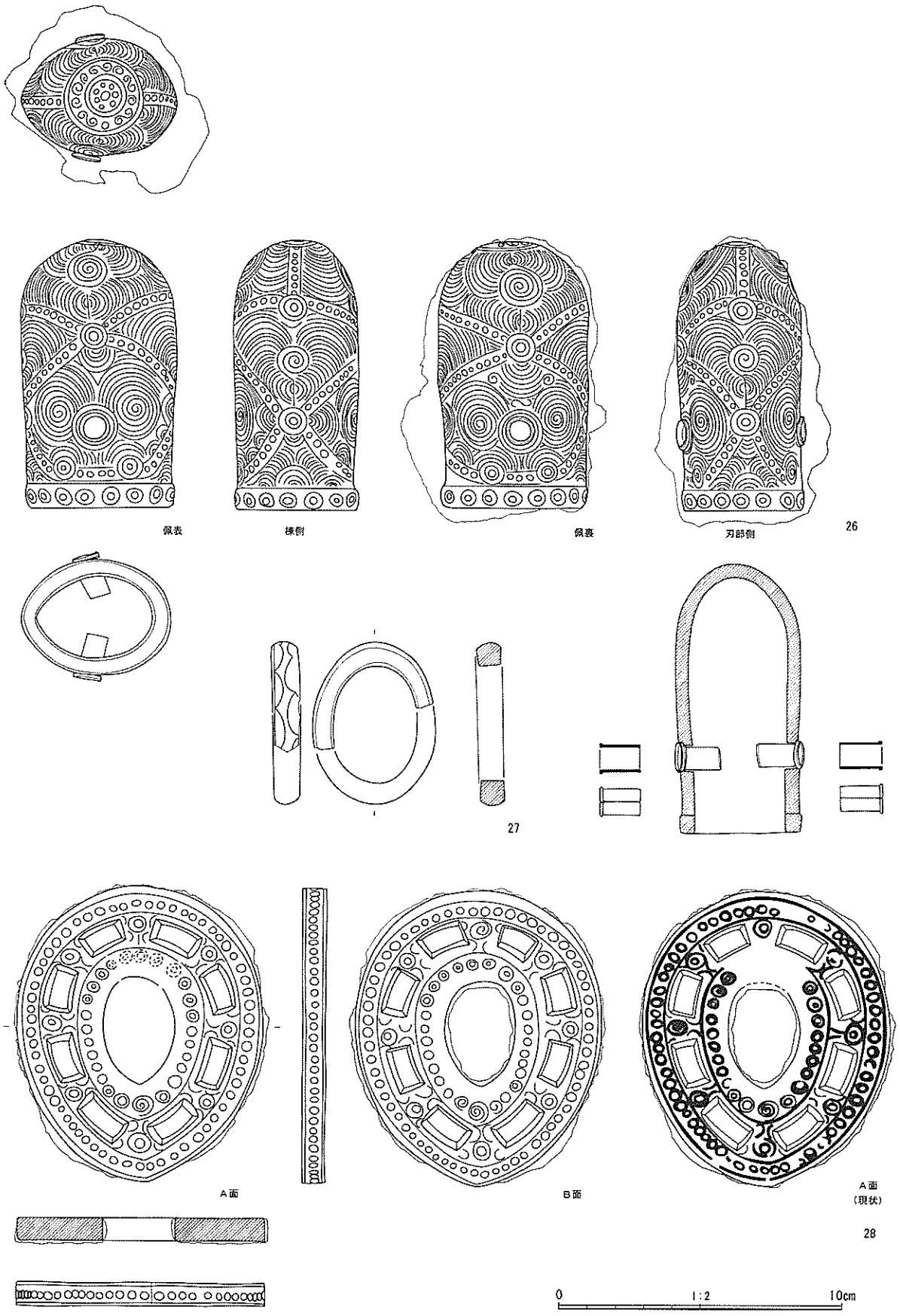


図77　銀象嵌円頭柄頭・鍔

に配置し、鳩目金具の上部には１区画には施されない蕨手文や髭状の渦巻文が施されている。

３区画（切先側）・４区画（棟側）は四角形（変形菱形）の変形亀甲文の中央に反時計回りの渦巻文を中心に配し、それを挟んで半円文を充填しているが、上部は半円文というよりも枝垂れ状である。

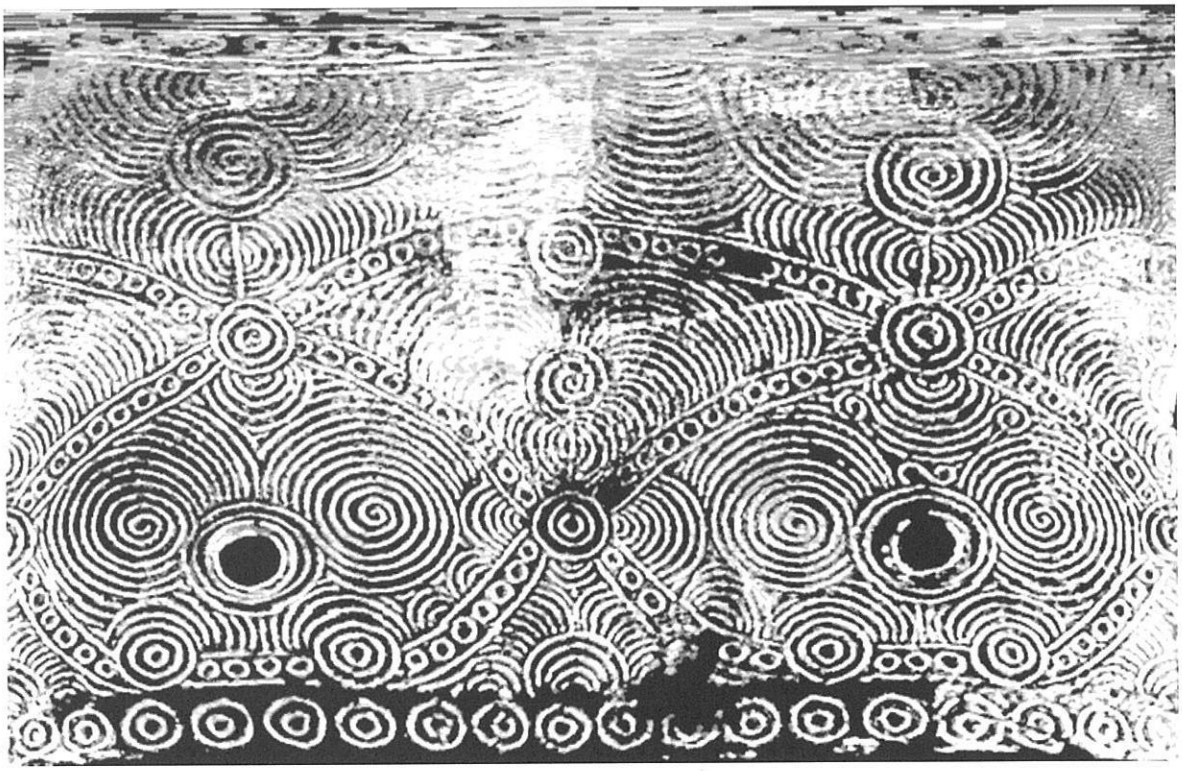
５区画（切先側）・６区画（棟側）は中心に五重の半円文を配し、その半円文と亀甲繋文の間に半円形文を充填している。上部は支点環文を基点として半円文が連続して施されている。

７区画（佩表側）は変形亀甲文の中央の上部に反時計回りの渦巻文を施し、その線は頂き部に向かい直線的に延びる。また渦巻文の下位に直線文を配している。この二本の直線文を中心として半円形文で変形亀甲文内は充填される。８区画（佩裏側）は同様文様構成であるが、渦巻きの方向が時計回りである点が、７区画と異なる。

９区画（頂部）は単円文を中心として、その周囲に連珠文、その外部に二重圏線、さらに外側に時計回り渦巻文→蕨手文→時計回り渦巻文→蕨手文→時計回り渦巻文３個→蕨手文→時計回り渦巻文→蕨手文（ただし、どの文様から象嵌がはじめられたかは不明）が施され、７・８区との境に二重の圏線を回している。頂部の中心に配された円形文は１＋７の八葉文と想定することも可能である。

柄頭縁部は主文様部分より、一段高くなっている。この部分に二重円文を一周施している。

銀象嵌鍔の構造　銀象嵌鍔（28）は鉄製方形八窓鍔である。平面形態はいわゆる倒卵形であり、切先側の先端がやや尖る。長軸長10.3cm、短軸幅8.4cmで長軸のほぼ中央に短軸が位置する。内孔は一部欠損しているが、外形と同じく倒卵形で切先側先端は丸く仕上げられている。内孔長軸3.7cm、短軸幅2.5cmである。面の幅は棟側3.1cm、切先側3.5cm、左右が3.0cm～3.1cmである。面のほぼ中央に方形八窓が鍔の長軸を対象軸とし左右均等に配置されている。窓の大きさは　1.5cm～1.8cmである。鍔の断面は長方形であり、厚さ８mmと重厚である。



３区画　７区画　４区画　８区画　３区画
５区画　１区画　６区画　２区画　５区画

写真12　柄頭の象嵌文様を展開した様子

銀象嵌鍔の文様　象嵌鍔は、両面と耳の３箇所に象嵌が施されている。鍔が刀身から遊離しており柄側、刀身側の区別ができないため、便宜的にＡ面・Ｂ面とする。Ａ面・Ｂ面ともにほぼ同一の文様であるが、一部に差異がある。

Ａ面は内孔側に連珠円文（一部渦巻文を含む）を巡らせ、連珠円文と窓との間に単線の圏線を施す。連珠円文は棟側６個が二重円で、切先側は先端部分が時計周りの渦巻文でその左側２つ及び右側１つが二重円である。窓の間には二重円を配置し、その両側に半円文を、その上部にも半円を刻んでいる。外側は圏線に囲まれた連珠円文（単円のみ）を巡らせている。

Ｂ面は、窓内側に連珠円文（一部渦巻文を含む）を巡らせる点は同一であるが、棟側の二重円の位置がやや異なる。また、切先側の右回りの渦巻文の左右には一つずつ二重の渦巻文が刻まれ、右側はその渦巻文から二つ目に二重円を施している。残りはすべて単円文である。窓の間には棟側を除いて二重円を配置し、その左右と上部に半円文を描いている。棟側のみ左回りの渦巻きが配置されている。外周にはＡ面と同様圏線に囲まれた連珠円文（単円のみ）が巡る。

耳は二条圏線の間に単円を連続的に施す連珠円文が施されている。

なお、Ａ面・Ｂ面、耳ともに幅0.5mm以下の銀線であり、鏨や銀線を巧みに操る非常に高い技術で施されていたことが判明した。また、自然科学分析により表面の色調を推定するための分析を行ったが色調の特定には至らなかった。

鍔銀象嵌線の特徴　銀象嵌部分の自然科学的分析【第２部　構造解析編　pp.52-56】によると、線象嵌であることが判明した。銀象嵌を施すための溝は0.3mm前後で断面三角形である。銀線は1.0mm～1.3mm幅の銀線を撚って螺線状の銀線に変形させた後、溝に嵌め込んでいることが判明した。

柄縁金具の構造　柄縁金具（27）と推測する象嵌刀装具は、棟側部分が欠損し、１/２程度の残存である。平面形態は外形・内形ともに倒卵形である。断面は外側が緩やかな弧状を呈する方形である。残存長軸長3.8cm（復元で5.8cm）、長軸内長3.0cm（復元で4.１cm）、短軸外4.2cm、短軸内幅2.8cm、厚さ1.0cmである。象嵌文様は弧状に間延びした半円文を交互に施す交互半円文であり、個々の半円文は1.2cm～1.5cmの幅がある。

刀身の構造　鍔の内孔の長軸長を考慮すると、鍔の刀身からの離脱を防ぐためには３cm以上の幅が必要であると想定されることから、刀身幅が３cmを超える（あるいは超える可能性が高い）34、35、36の刀身が円頭大刀の刀身である蓋然性が高い。この仮定が正しければ、円頭大刀は切先（36）が緩やかなフクラ切先をもつ直刀である。刀身に鎬は確認できない。

34は残存長18.6cm、35は残存長41.7cm、36は残存長9.0cmであり、円頭大刀の刀身は最低69.3cm以上である蓋然性が高い。残存幅は3.3cm～3.5cm、棟の厚さは７mm～８mmである。

銀象嵌円頭柄頭の編年的位置　上記したように、原分古墳出土の銀象嵌円頭柄頭の文様は変形亀甲繋文であり、亀甲文（六角形）が完全に失われ、四角形・五角形となっている。また変形亀甲繋文の内部文様も鳳凰の頭部は完全に失われ、その痕跡もとどめず、渦巻文に変化している。また、鳳凰の頭部の周りに施された「旋毛状文」（橋本1993）も確認できず、半円文や枝垂れ状の文様に変化している。これらの特徴から橋本博文編年の６期（飛鳥Ⅰ期～飛鳥Ⅱ期併行）に位置づけることができる（橋本1993）。

原分古墳と同様の文様を有する円頭柄頭としては、山梨県古柳塚古墳（飛鳥Ⅱ期、古柳塚古墳研究会2004）、石川県須曽蝦夷穴古墳（飛鳥Ⅱ期～飛鳥Ⅲ期、冨田・関森ほか編2001）、宮城県鷹ノ巣古墳群（飛鳥Ⅱ期、橋本1994、高橋編2002）出土の円頭柄頭があり、これらの古墳は飛鳥Ⅱ期～飛鳥Ⅲ期に位置づけることが可能であることから、原分古墳の円頭柄頭も飛鳥Ⅱ期～飛鳥Ⅲ期併行期に位置づけられるが、橋本氏の研究を参考として飛鳥Ⅱ期の可能性が高い。

銀象嵌鍔の編年的位置　象嵌鍔は、面に施された文様からＣ字文系、心葉（ハート）形文系、渦（巻）

文系などに区分される（橋本1993、西澤2002ほか）。原分古墳は円文と渦巻文が主体であるが圏線を伴っていることからC字文系に近く、文様の一部に渦巻文が採用される点は渦巻文系列に近い。つまり、その両方の特徴を有することからC字文系・渦巻文系列の最終段階に位置づけられる可能性が高い。また、円文を多用する鍔は、富士市東平1号墳（飛鳥Ⅱ期、遠江Ⅳ期前半、川江1992)、岡部町篤沢1号墳（飛鳥Ⅱ期、遠江Ⅳ期前葉、東海古墳文化研究会2006)、宮城県上蟹沢古墳（7世紀、高橋編2002）等で出土しており、円頭柄頭の文様が同時期に位置づけられる須曽蝦夷穴古墳出土の象嵌鍔（飛鳥Ⅱ期、冨田・関森ほか編2001）も円文を主体としている。したがって、原分古墳出土の象嵌鍔は、飛鳥Ⅱ期に位置づけることができる。

（4）鉄製二円孔鍔

構　造（図75）　鉄製二円孔鍔（22）の形態は、いわゆる倒卵形であり、切先側がやや尖り気味である。長軸長6.8cm、短軸6.2cmであり、直軸のほぼ中央が最大幅（短軸）である。内孔も「倒卵形」であるが、切先側は尖らず丸みを帯びている。内孔長軸長3.0cm、短軸幅1.9cmである。断面は内孔側の幅が狭い台形であるが、外縁がやや厚みを増しており、本来はT字形に近い形態であった可能性がある。外縁の厚さ7mm、内縁の厚さ3.5mmである。円孔透は棟側に二孔穿たれ、長軸を対称軸に左右均等に配置されている。直径3mmである。

編年的位置　鉄製二円孔鍔は西澤正晴の静岡県の鍔の集成には見られず（西澤2002)、管見では静岡県内初出土である。このような二円孔鍔は折原洋一の研究により、房総半島から東北南部の太平洋岸地域に偏在することが確認されている（折原1997)。これらの分布地域の同様の鍔が出土した古墳からみるとTK209型式期～飛鳥Ⅱ期に集中するようであり、原分古墳出土例もTK209型式期～飛鳥Ⅱ期に位置づけられる可能性が高い。

（5）鉄製無窓鍔

構　造（図75）　鉄製無窓鍔（23）は切先側が1/3程度欠損しており全体形状は不明確であるが、楕円形に近い倒卵形であった可能性が高い。内孔も楕円形に近い倒卵形である可能性が高い。長軸の残存長は4.8cm（復元で長軸長6.5cm前後)、短軸幅5.8cmである。長軸長の中間よりやや棟側が短軸の最大幅であるが、長軸のほぼ中央に最大幅がある形態である。長軸と短軸の差は1cm以内であると推測する。鍔の断面は鉄の剥離が著しく明確ではないが、平板であった可能性が高い。現状で残存する厚さ3mmである。

編年的位置　鉄製無窓鍔（23）は鍔の出現期から存在しており、形態的な変化も少ないことから明確に時期を特定することは難しい。静岡県内の古墳時代の鍔を集成し、編年を行った西澤正晴の研究（西澤2002）によれば、正円に近い倒卵形で、長軸と短軸の差が1cm以内とされる無窓鍔A類に位置づけられる可能性が高い。この形態の鍔は静岡県内ではTK43型式期に出現するがTK209型式期以降増加するとされ、飛鳥Ⅲ期まで副葬される（西澤2002)。したがって、原分古墳の無窓鍔はTK209型式期～飛鳥Ⅲ期に位置づけできる。

（6）鉄製鞨

構　造（図75）　鉄製鞨片が2点（24・25）出土している。両片ともに1/2程度の残存である。出土箇所が近いことから同一個体の可能性もある。また、鉄製鞨は鉄製二円孔鍔を伴う大刀、象嵌円頭大刀、隅抉尻細茎をもつ大刀すべてに確認できるため、どの大刀に伴うか明瞭ではない。両片ともに倒卵形である可能性が高く、ともに幅1.75cmである。鉄板の厚さは24が2mm、25が1.5mmである。

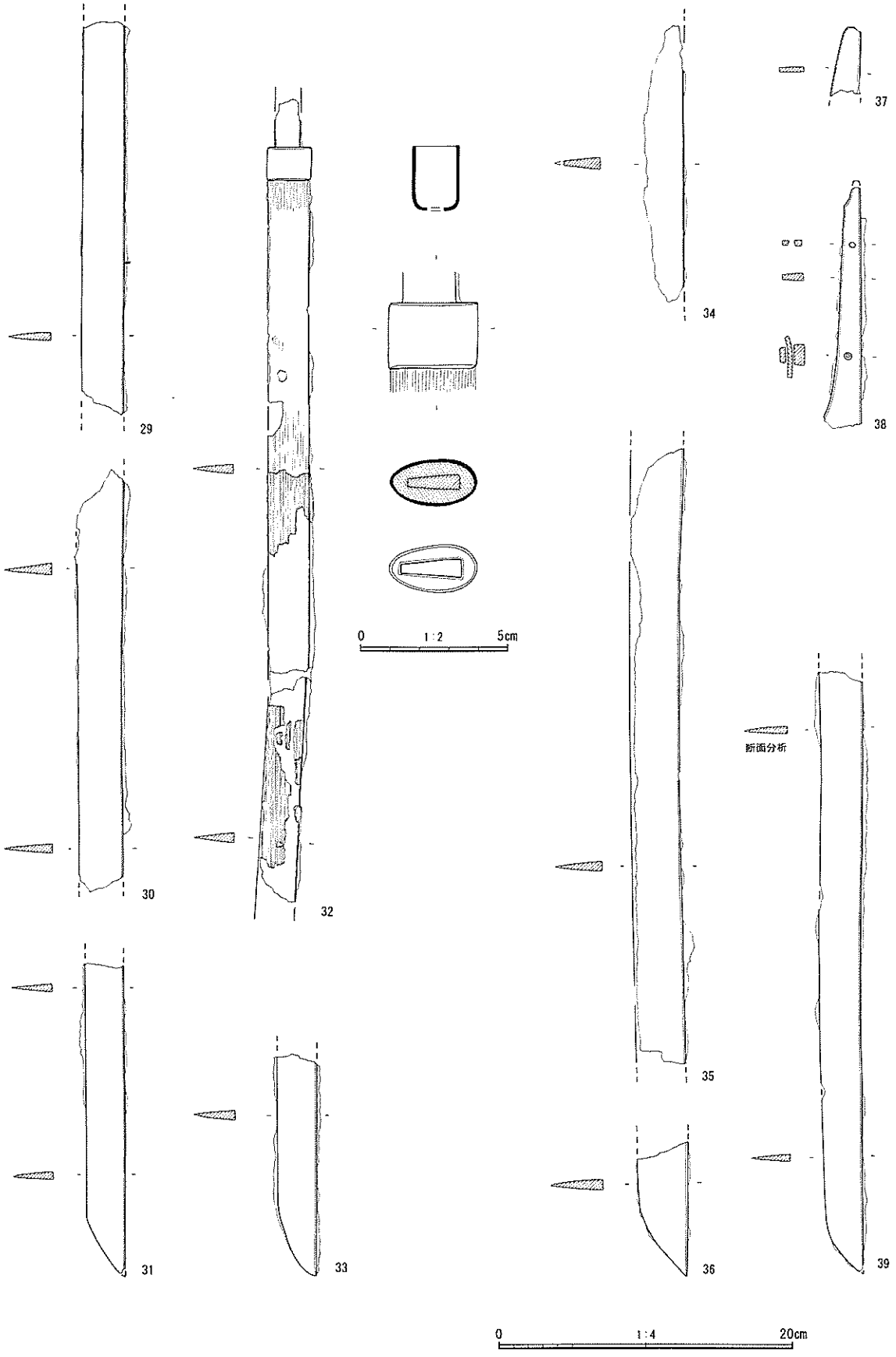


図78 刀 身

編年的位置　鉄製鍔の時期を特定することは困難である。原分古墳出土の鉄製鍔や銀象嵌円頭大刀の位置づけから考えると、TK209型式期～飛鳥Ⅲ期に位置づけることができる可能性が高い。

（7）刀　身

概　要（図78）　上述した鉄製銀象嵌円頭大刀及び圭頭大刀に伴うと推測した刀身以外の鉄製大刀（29～31・37～39）について報告する。

大刀の構造　37は茎片であり、関から茎尻に向かい幅を狭めるもので、茎尻は丸く収められている。目釘孔は確認できない。断面は長方形である。残存長4.9cm、残存部最大幅2.0cm、厚さ3.5mmである。

38は茎片であり、関が欠損していることから両関・片関かは判断できないが、切先側は撫関である。茎は茎尻に向かい徐々に幅を狭める。茎尻は隅抉尻である（臼杵1984）。茎断面は切先側が棟側より幅が狭い長台形である。残存長16.4cm、関側2.1cm以上、隅抉上部幅1.2cm、厚さ4mm、茎尻近くの幅7mm、厚さ4mmである。関側から4.8cmと12.4cmのところに直径3mm～5mmの目釘孔が穿たれており、関に近いほうの目釘孔には鉄製目釘が残存している。目釘は長さ2.9cm、直径3.5mmである。したがって、目釘の長さから木製柄の厚さは2.9cm以上であることが判明する。茎には木質は残存していない。

なお、円頭大刀、圭頭大刀の茎尻は一文字尻か栗尻が多いことを考慮すると、隅抉尻である本例は、それ以外の大刀に伴う茎である蓋然性が高い。また、二円孔鍔を伴う大刀は千葉県胡摩手台16号墳（萩原編1994）や福島県白河観音山3号横穴墓（菊地1993）出土例等から一文字尻か栗尻であり、それに伴う大刀の茎でもない可能性が高い。

刀身（31）は、切先がカマス切先で、刀身に鎬は確認できない。残存長21.1cm、幅2.5cm、棟の厚さ5mmである。刀身（39）は切先がフクラ切先で、刀身に鎬は確認できない。残存長40.7cm、幅2.9cm、棟の厚さ5mmである。刀身（29）は、刀身のみの破片であり、刀身に鎬は確認できない。残存長26.6cm、幅29cm、棟の厚さ5mmである。刀身（30）は、刀身のみの破片であり、刀身には鎬は確認できない。残存長28.6cm、最大幅3.4cm、棟の厚さ6mm～7mmである。

刀身の編年的位置　38は「撫角片関隅抉尻細茎」で、TK43型式期～TK209型式期に位置づけられている（臼杵1984）。この他は刀剣類の時期的な位置づけからTK209型式期～飛鳥Ⅱ期に位置づけられる可能性が高い。

（8）鉄　鉾

構　造（図79）　鉾身断面四角形の両鎬の鉾（40）であり、鉾身と袋部はわずかに山形に突起した関により区分されている。袋部は関から一旦幅を狭めた後袋縁に向かって徐々に幅を広げている。袋部の断面は円形である。残存長17.2cm、鉾身残存長12.2cm、最大幅2.1cm、厚さ1.2cm、関幅は復元で2.3cm、袋部は残存する部分の最大径は2.1cmである。また関から約2.0cmのところまで袋部の内孔が及んでいる。

編年的位置　鉄鉾は古墳時代後期に入ると副葬数自体が減少する遺物である。形態的な特徴からは時期を特定することは難しいが、狭峰であることから臼杵編年Ⅲ段階～Ⅴ段階に位置づけられる。中でも関が不明瞭なことなどを考慮すると、臼杵氏編年のⅤ段階に位置づけることができ（臼杵1985）、おおよそTK43型式期～TK217型式期（飛鳥

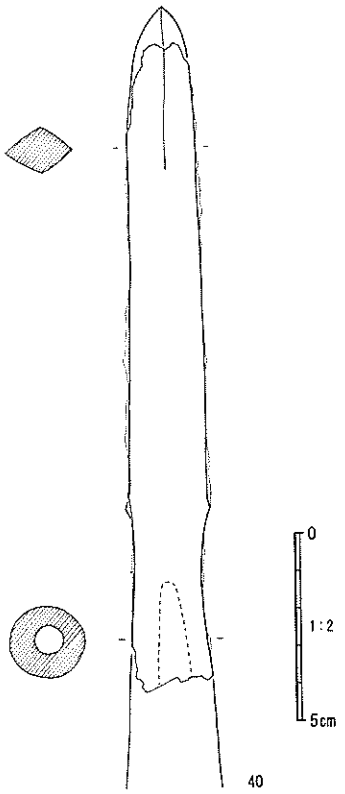


図79　鉄　鉾

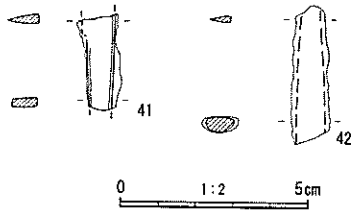


図80　鉄製刀子

Ⅱ期）に位置づけられる可能性が高いが、古墳時代終末期以降鉄鉾の副葬が極端に減少することを考慮するとTK209型式期までには入手していた可能性が高い。

（9）鉄製刀子

概　要（図80）　原分古墳では2点（41、42）の鉄製刀子が出土している。

構　造　41の関は刃部側の直角片関であり、茎は茎尻に向かってやや先細りする形態である。茎の断面は長方形である。残存長2.4cm、刃部幅9mm、棟の厚さ3mm、茎幅7mm、茎厚さ2mmである。刃部片（42）は残存長3.4cm、最大幅8mm、棟の厚さ2mmである。

編年的位置　刀子自体に特徴的な部位は確認できないことから、TK209型式期～飛鳥Ⅳ期の範囲としておきたい。

註

註1　原分古墳から出土した金銅装大刀は砕片であり、全体的な形状を特定するには至らない。拵えの破片の特徴を考慮すると、円頭、圭頭、方頭大刀の可能性があるが、瀧瀬芳之の研究成果により、方頭大刀の鞘は鞘尻及び鞘口以外に飾りを持たない「素鞘」であることが特徴であるとされる（瀧瀬1984）。原分古墳では鞘口及び鞘間金具が出土していることから「準素鞘」であり、方頭大刀の可能性は低い。一方、円頭大刀にも柄間を金属線巻にするものが存在するが、銀線であることが多く、また銀線には細かい刻み目が施されている。また、金銅線巻のものは少ないうえ、金銅線巻の場合は柄頭が漆塗であることが多いようである（瀧瀬1984）。したがって、原分古墳の金銅装大刀の拵えの特徴から最も蓋然性が高いのが圭頭大刀であり、本報告では原分古墳より出土した金銅装大刀を「圭頭大刀」として報告する。

註2　なお、円頭柄頭及び八窓鍔の銀象嵌は保存処理前の分析結果から、銀の劣化が著しく、研ぎ出しを行った場合銀まで除去してしまう可能性があること、マイクロフォーカスX線CT撮影により鮮明な画像が得られたことから、円頭柄頭について象嵌の研ぎ出しは行わず、鍔についてはA面及び耳の一部を表出するにとどめている。したがって、鍔B面・耳及び円頭の象嵌文様はX線画像を参考に作成したものであることをあらかじめ断わっておく。また、円頭柄頭の計測値も一部錆で覆われた部分での推測部分もあり、数ミリ程度実際の寸法と異なる可能性があることも了承願いたい。

註3　鳩目金具はX線CT画像では、頭部が鉄製柄頭から錆化により乖離しているため、図上では元の位置に戻して図化している。また、鳩目金具の構造はX線CT画像の観察により記述しているため、細部において実際と異なる可能性があることを了承願いたい。

4　鉄　鏃

石室内から出土した鉄鏃のうち、鏃身の形状が確認できるものは41点である。このうち、38点が尖根式、３点が平根式である。鏃身部の形状は、尖根式では鑿箭鏃22点、片刃箭鏃16点、平根式では、五角形鏃２点、腸抉三角形鏃１点がみられ、少種多量の鉄鏃構成といえる。この他にも、頸部や茎のみの遺存に留まった資料もあり、茎関が遺存するものは、総数で43点である。したがって、少なくとも43点以上の鉄鏃が副葬されていたことがいえよう。なお、本稿で用いる鉄鏃の名称は、大谷宏治の整理（大谷2003a)に準拠する。

鉄鏃は、圧倒的に尖根式が多く、鏃身形態は鑿箭鏃と片刃箭鏃の２種類に集約される。ただし、鏃身関や茎関の形状からさらに細分することが可能である。今回、出土した鉄鏃束１、２にはそれぞれ鑿箭鏃、片刃箭鏃で構成される。これらは規格性の高い一群で、一括生産された鉄鏃群である可能性が高いことがうかがえる。また、原分古墳から出土した鉄鏃のうち、矢柄の固定方法が判明するものは糸巻きを施していることが判明した。

鉄鏃の出土状況は奥壁と石棺の間と石室中央からの２箇所に分けられる。このうち、奥壁と石棺の間からは、尖根式鑿箭鏃と平根式で構成される鉄鏃束１と尖根式片刃箭鏃で構成される鉄鏃束２が出土している。これらの矢を収納した容器を示す痕跡はみつかっていないが、何らかの容器に入れられた上で副葬された可能性もあるだろう。

（１）尖根式鑿箭鏃

概　要（図81）　１～22が尖根式鑿箭鏃である。このうち、鏃身から茎に至るまで完存するのは、３、７～９の４点であり、17～22は鏃身と頸部の一部の遺存に留まる。これ以外のものは、茎の先端部を欠く。鏃身や茎関の状況だけをみるならば、いずれも十分に観察に耐えられる遺存状況である。

鏃身の断面形は片丸造りである。茎関の状況がうかがえるものについてはいずれも棘関である。なお、出土位置は、１～８、10が奥壁と石棺の間、残りは石室中央からの出土である。

特　徴　22点の尖根式鑿箭鏃は、鏃身形態ならびに茎関の形態は非常に近似する。鏃身は小さく、幅は0.65cm～1.00cm、刃部の研ぎ出しは、鏃身の先端から0.5cm前後の長さに限られている。鏃身の断面形はいずれも片丸造である。鏃身からは明瞭な境を持たずに、頸部へと移行する。頸部は長方形の断面形を持つが、幅と厚さの差が１mm程度で、方形に近い断面形を呈するものもある。頸部の幅は0.45cm～0.60cm、厚さは0.25cm～0.40cmである。

茎関は形状が判明するものは、全て棘関であった。頸部からは２mm前後の幅で２mm～３mm程突出する。厚さは頸部よりごく僅かに薄くなる。ただし、15、16は、１～13と異なる。棘状突起は鍛造後の仕上げ工程の一部を省略しているようであり、ほかに比べ関付近の幅が広く、棘状突起と頸部や茎部の境もやや不明瞭となる。なお、茎は頸部と接点では、長方形の断面形を呈するが、先端に向かい幅と厚さを減じていく。

形態的な違いはほとんど見られないが、鏃身から茎まで遺存するものについては、鏃身と頸部を合わせた長さから長・短の２群に大別できる。以下、全長13cm～14cm前後の一群を鑿箭鏃1類、全長が短い一群を鑿箭鏃２類と呼ぶ。さらに、後者については、形状から細分できる。

鑿箭鏃１類　１～８、10が相当する。これらは、鏃身と頸部を合わせた長さが13cm～14cm前後、鏃身幅が0.８cm±0.１cm、頸部の厚さが0.35cm前後で非常に規格性が高く、全て奥壁と石棺の間からの出土である。なお、出土位置と鏃身と頸部を合わせた長さが異なるものの、全長の相似から９も鑿箭鏃

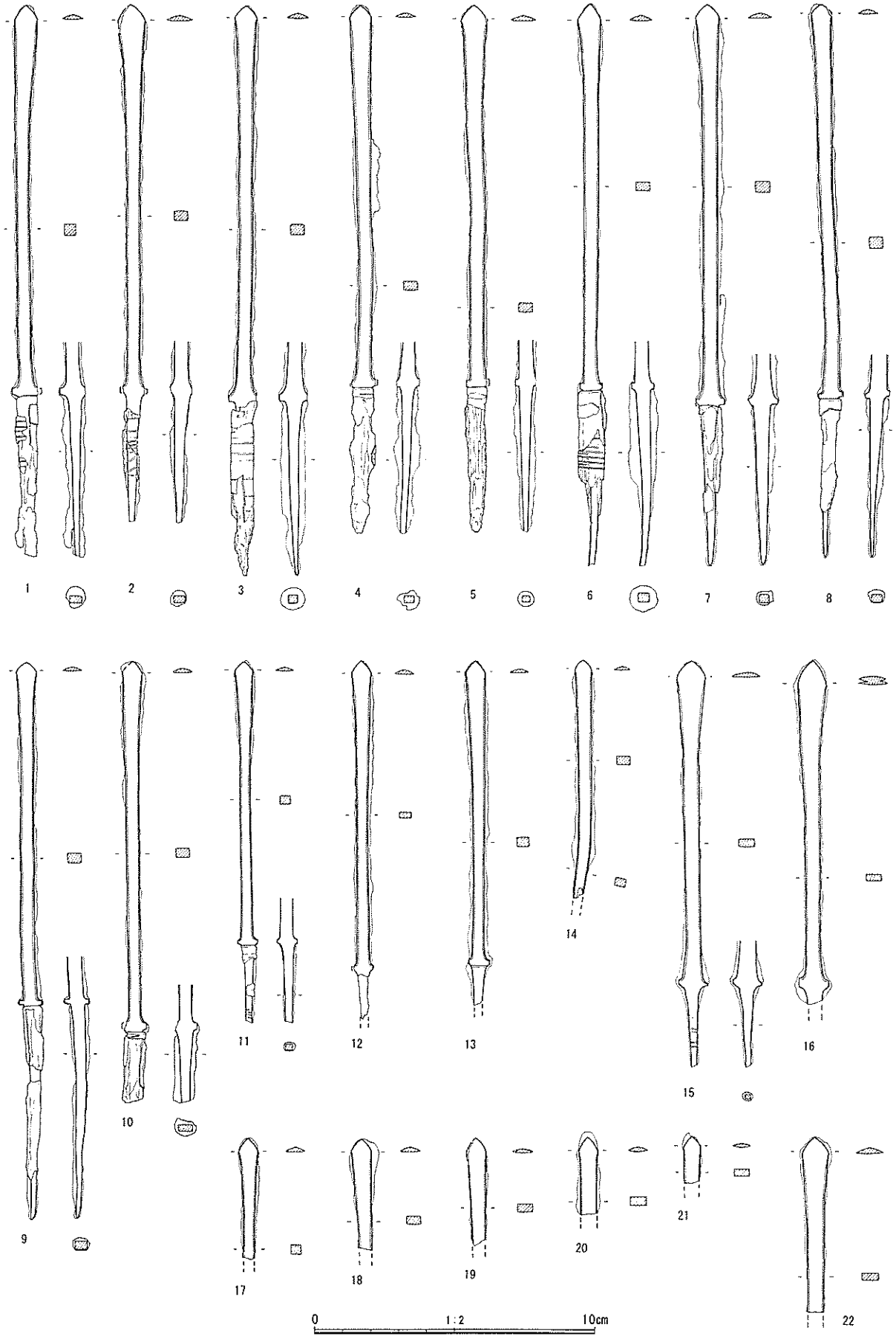


図81　尖根式鑿箭鏃

１類に含まれる。

鑿箭鏃２類　11～13、15、16があげられる。いずれも石室中央からの出土である。これらは、茎関の状況と鏃身幅の違いから２分できる。

鏃身や頸部の幅が狭いものを鑿箭鏃２ａ類と呼ぶ。11～13が該当する。出土位置を勘案すると17～21も鑿箭鏃２ａ類に属する可能性がある。

茎関整形の一部に省略化が認められ、鏃身幅が1.0cmとほかに比べ幅広という特徴を持つものを鑿箭鏃２ｂ類とする。15、16が相当する。22も幅広であることから鑿箭鏃２ｂ類に含まれるであろう。

以上、鏃身部と頸部を合わせた長さから、鑿箭鏃１類、鑿箭鏃２類に大別できる。このうち、鑿箭鏃１類は、形態的特徴に加え、各部の大きさも近似し、規格性が高く一括生産された可能性が高いことが指摘できる。

いっぽう、鑿箭鏃２類は３本前後の単位での規格性は認められるが、鑿箭鏃１類ほどのまとまった本数での規格性は持たない。

編年的位置　茎関が棘関であることから、いずれも、TK43型式期以降の所産であることはいえよう。鑿箭鏃は駿河東部においては、TK209型式期以後に一定量の出土が認められるが（井鍋2003）、出土量が増加するのは、飛鳥Ⅰ期～飛鳥Ⅱ期以降という指摘もある（大谷2003b）。

鑿箭鏃２ｂ類（15、16）は茎関整形の一部に省略化が認められ、出土した尖根式鑿箭鏃のなかでは、最も新しい時期に位置付けられる可能性を持つ。出土位置からも追葬に伴うものと考えられる。

類例に乏しいが、飛鳥Ⅱ期～飛鳥Ⅲ期の所産である島田市水掛渡Ｃ１号墳（菊池1998）からも同様に茎関整形の一部を簡略化したものが出土している。上記の２点は、水掛渡Ｃ１号墳出土資料ほどの簡略化は認められないため、この古墳よりは先行するものと考えられる。

以上の点から、原分古墳出土の尖根式鑿箭鏃については、奥壁と石棺の間から出土した鑿箭鏃１類（１～10）をTK209型式期～飛鳥Ⅱ期、石室中央から出土した鑿箭鏃２ｂ類（15、16）を飛鳥Ⅱ期～飛鳥Ⅲ期と捉えておきたい。なお、15、16を除く石室中央から出土した鑿箭鏃２ａ類（11～13）も、鑿箭鏃２ｂ類とほぼ同時期と考えられるが、別の被葬者に伴う副葬品であった可能性も残しておきたい。

（２）尖根式片刃箭鏃

概　要（図82・83）　23～28、31～40は尖根式片刃箭鏃である。また、23～30と銹着して出土した29、30も鏃身は遺存しなかったが、片刃箭鏃であろう。この２点を含むと、原分古墳からは18点の尖根式片刃箭鏃が出土していることとなる。

出土位置は、23～30、36が奥壁と石棺の間、32～34、37～40は石室中央、31と35は両者の中間付近である。

特　徴　鏃身の形状がうかがえる尖根式片刃箭鏃は16点出土している。鏃身関の形状は、２種類見られる。一つは、明確な関を持たない、いわゆる端刃の片刃箭鏃である。一つは、僅かながらも関を持つものである。ただし、後者も刃部の研ぎ出しは、先端付近に限られている。以下、鏃

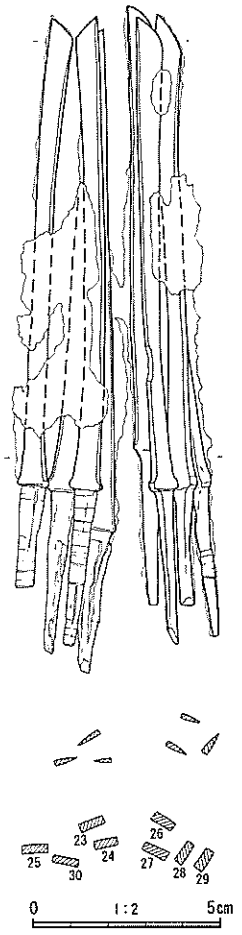


図82　鉄鏃束２銹着状況

身関をもつものを片刃箭鏃１類、端刃のものを片刃箭鏃２類とする。片刃箭鏃１類は37～40が相当し、片刃箭鏃２類は23～28、31～36である。

茎関は鏃身関の有無を問わず、確認できるものは全て棘関である。棘状突起は２mm前後の幅で、２mm程度突出する。頸部や茎部との境は明瞭であるが、鏃身関を持たないタイプよりも、鏃身関を持つ38の方が頸部との境は明瞭である。なお、茎の断面形は方形で、先端に向かい幅と厚さを減じる。茎には、矢柄の木質が遺存するものが見られ、38は矢柄の上に口巻きの一部が残存する。断定はできないが、口巻きは糸のようである。

片刃箭鏃１類　37～40の４点が相当する。鏃身関は、１mm～２mmではあるが、頸部との境が明瞭な直角関である。鏃身長は3.40cm～3.60cm、鏃身幅は0.55cm～0.80cmであるが、37をみると、刃部は

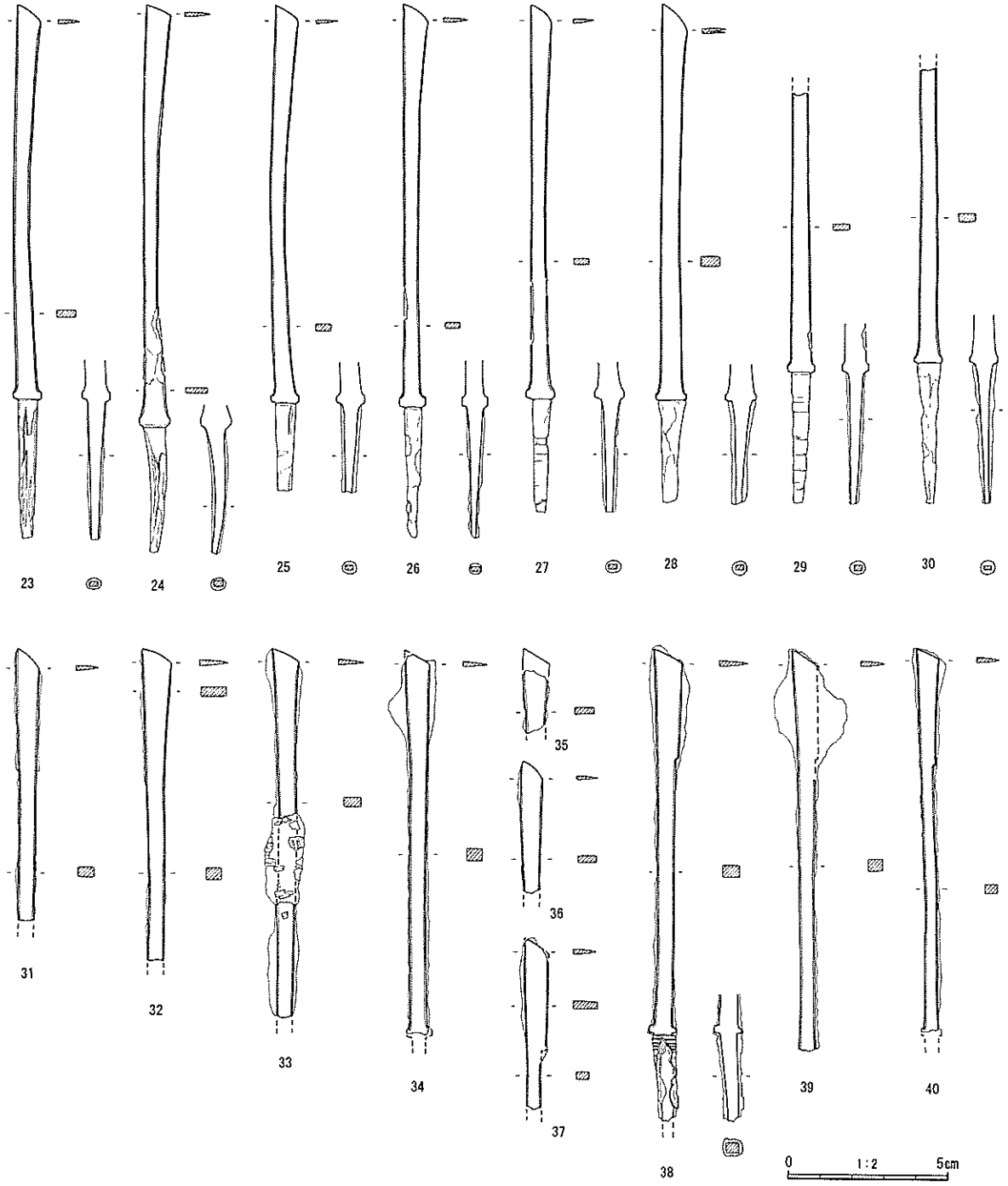


図83　尖根式片刃箭鏃

先端付近にのみ限られるという特徴を持つ。他の３点も同様に、刃部の研ぎ出しは先端の0.5cm程度であり、鏃身のほとんどには刃が付けられていないものとして捉えられる。鏃身関の有無という違いはあるが、後述する片刃箭鏃２類と刃部の造りは近い。なお、４点のうち茎部まで残存するのは38のみである。38の鏃身から茎関までの長さは11.95cmであり、大きさの面でも鏃身関を持たないタイプとの差はみられない。

片刃箭鏃２類　片刃箭鏃２類のうち、23～28は束となり出土しており、鏃身から茎関までの長さは、12.30cm～13.10cmである。24のみ、他に比べやや長いが、規格性が高い一群といえる。刃部の研ぎ出しは、先端部の0.5cm前後に限られる。鏃身の幅は頸部幅に比べ、0.3cm前後広くなる程度のものである。

編年的位置　尖根式片刃箭鏃は、存続期間の長い型式の鉄鏃である。原分古墳出土のものは、茎関が棘関であること、端刃造りであるから、TK209型式以降のものであることはいえよう（杉山1988）。

駿河東部から伊豆では尖根式片刃箭鏃は決して珍しい形態ではないが、５本以上が出土した古墳となると少なく、富士川町室野坂Ｂ４号墳（稲垣1994）、富士川町山王J４－２号墳（稲垣1975）、富士川町谷津原７号墳（井鍋編2001）、富士市横沢古墳（志村1981）、沼津市石川98号墳(小野1976)、沼津市清水柳北２号墳（鈴木1990）、沼津市平沢１号墳（滝沢1999）、三島市夏梅木９号墳（鈴木2000）、函南町柏谷102号横穴（山内編1975）、伊豆の国市平石４号墳（小野1973）などがあげられるにすぎない。上記の古墳はTK209型式期～飛鳥Ⅲ期に位置付けられ、原分古墳出土の片刃箭鏃もこの時期の所産ととらえられる。ただし、原分古墳と同一のものは抽出しがたく、類例から時期を絞りこむことはできない。なお、片刃箭鏃１類と片刃箭鏃２類は鏃身関の有無という違いはあるが、全体的な造りの相似から時期的な差は少ないものと考えられる。

（３）その他の鉄鏃

概　要（図84）　鏃身形態の判明する資料のほかにも、頸部や茎のみの出土に留まった資料もある。これらの中には、先述した尖根式鑿箭鏃や片刃箭鏃のうち、鏃身部付近の出土に留まった資料の頸部や茎部が含まれるであろう。

頸部や茎のみの出土に留まった資料のうち、茎関が遺存するものをみると、いずれも茎関は棘関であることがうかがえる。ただし、尖根式鑿箭鏃でみられたように、棘状突起の最終仕上げ工程の一部を簡略化したかのような資料も含まれる。また、茎に矢柄の木質や口巻きが遺存した資料も少なくない。

特　徴　図84に示した鉄鏃のうち、41、43～56は茎関が遺存する。確認し得る限りでは、茎関はいずれも棘関である。

ただし、尖根式鑿箭鏃で確認されたように、棘状突起の整形を丁寧に行い、頸部や茎との境がほぼ直角的で明瞭なものと（41、45～52）、整形の一部を簡略化し、頸部や茎との境が鈍角となり不明瞭なものに（53～56）、大別できる。このうち、後者は形態的な類似から、鑿箭鏃２ｂ類の頸部から茎の可能性が高い。なお、頸部・茎はいずれも断面が長方形で、茎は先端に向かい幅と厚さを減じている。

有機物の付着　茎に有機質の付着物が確認できたものは、48、61で、左下方から右上方に向かい１mm前後の間隔で樹皮状の有機物が巻き付けてある。77は、左上方から右下方へ巻かれた後に、左下方から右上方へ巻き重ねられている様子がうかがえる。41、63、64、66は矢柄の木質の上に１mm強の間隔で糸が巻かれている様子が確認できる。46も同様に糸を巻き付けている可能性がある。

編年的位置　茎関が棘関であることから、TK43型式期以降の所産と考えられる。尖根式鑿箭鏃や尖根式片刃箭鏃をみる限りでは、これらの一部分のみの出土に留まった鉄鏃も、飛鳥Ⅱ期を中心とした時期の可能性が高いといえる。このうち、棘状突起の工程を一部簡略化したものは、丁寧な仕上げのものよりも若干、新しいものであろう。

（4）平根式五角形鏃

概　要（図85）　平根式五角形鏃は２点出土している。ともに鏃身関の腸抉は明瞭で、茎関は棘関である。78は刃部が直線的であるのに対し、80は僅かに孤を描くという相違がある。また、鏃身長と頸部長の比率も異なる。出土位置は79が奥壁と石棺の間、80が石室中央である。

特　徴　上記のとおり、ともに腸抉の鏃身関を持ち、茎関は棘関であるが、細部には違いが見られる。

奥壁と石棺の間から出土した79は、鏃身から茎の先端に至るまで残存し、全長10.90cmである。鏃身長は4.10cm、頸部長は3.30cmである。刃部は直線的であり、典型的な五角形鏃といえる。鏃身の断面形は扁平な両丸造りである。茎関は、頸部と茎との境は明瞭で、２mm～３mm程度の幅で、頸部から２mm程度突出する。茎には、矢柄の木質が遺存し、茎関付近には、口巻きの一部が残る。口巻きは糸巻きのようであるが、断定はできない。

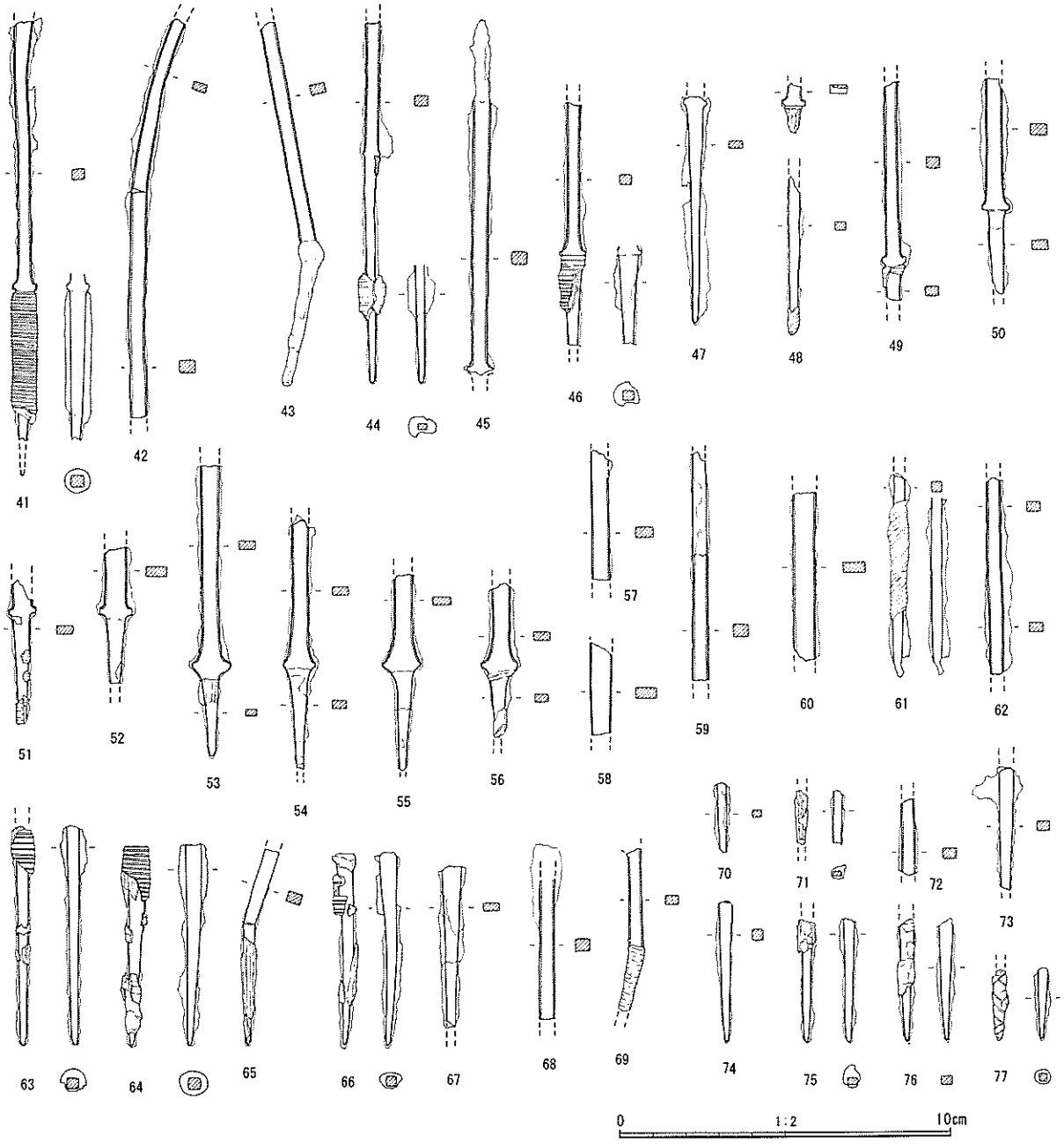


図84　鏃身形態不明鉄鏃

石室中央から出土した80は、茎の先端付近を欠損し、残存長7.20cmである。鏃身長は4.55cmで、頸部長は1.90cmである。78と比較すると鏃身に対する頸部の長さが短いといえる。また、鏃身の断面形は平造りで、78の半分程度の厚さである。茎関は、78と同様に頸部や茎との境は明瞭で、2mm～3mmの幅で2mm程度突出する。

編年的位置　78については、類例を付近の古墳で求めるならば、沼津市石川119号墳（小野1976）、富士市赫夜姫古墳（後藤編1958）、富士川町谷津原12号墳（井鍋編2001）、由比町室ヶ谷4号墳（由比町1990）例などが類似した形態を散見できる。いずれも、TK209型式期～飛鳥Ⅱ期に位置付けられる古墳である。平根式五角形鏃の出現はTK209型式期であるが、当古墳出土の2点のように、フクラの幅と鏃身関の幅がほぼ同じとなるものは、飛鳥Ⅰ期～飛鳥Ⅱ期以降のものといわれている（大谷2003b）。

以上の点を勘案すると、78は飛鳥Ⅰ期～飛鳥Ⅱ期の所産と捉えられる。80については、これと同一視できる資料をみないが、78と大きな時間差を看取することはできない。ただし、全体的な造りは78の方が丁寧であることから、78よりは新相のものである可能性が考えられる。そこで、80については、同じく飛鳥Ⅰ期～飛鳥Ⅱ期ではあるが、78よりも新しいものと位置付けたい。

（5）平根式三角形鏃

概　要（図85）　平根式三角形鏃は奥壁と石棺の間から1点出土している（79）。茎先端部と鏃身の一部を欠くものの、全体的な形状をうかがうことは十分に可能である。鏃身関は腸抉が明瞭であり、茎関は棘関である。出土位置は78と近く、奥壁と石棺の間の鉄鏃束1では、この2点を対として、尖根式鑿箭鏃の束に加えていたと考えられる。

特　徴　79は茎の先端を欠き、残存長8.07cmであるが、本来的な全長もこれを数mm上回る程度であろう。鏃身長は3.3cmと推測され、鏃身幅は2.70cmと推測される。刃部はふくらが張り、鏃身先端部から緩やかな孤を描いて鏃身関へと至る。鏃身の断面形状は、両丸造りである。頸部は長さ3.3cmで、茎関は棘関である。茎関と頸部・茎との境は明瞭で、2mm～3mmの幅で2mm～3mm程、頸部から突出する。茎には、矢柄の木質が一部付着していた。

編年的位置　駿河・遠江では、腸抉を持つ平根式三角形鏃はTK209型式期から出現し、古墳の造営が終了する時期まで存続する。駿河東部の事例をみると、当古墳出土例と類似する平根式三角形鏃は、沼津市平沢1号墳（滝沢1999）、沼津市石川119号墳（小野1976）、富士市船津寺ノ上1号墳（平林ほか1987）、富士市中里K99号墳（植松編1975）、富士川町谷津原6号墳（井鍋編2001）などでみられる。これらの古墳は、TK209型式期に位置付けられる。以上の点から、79はTK209型式期～飛鳥Ⅱ期の所産として位置付けたい。

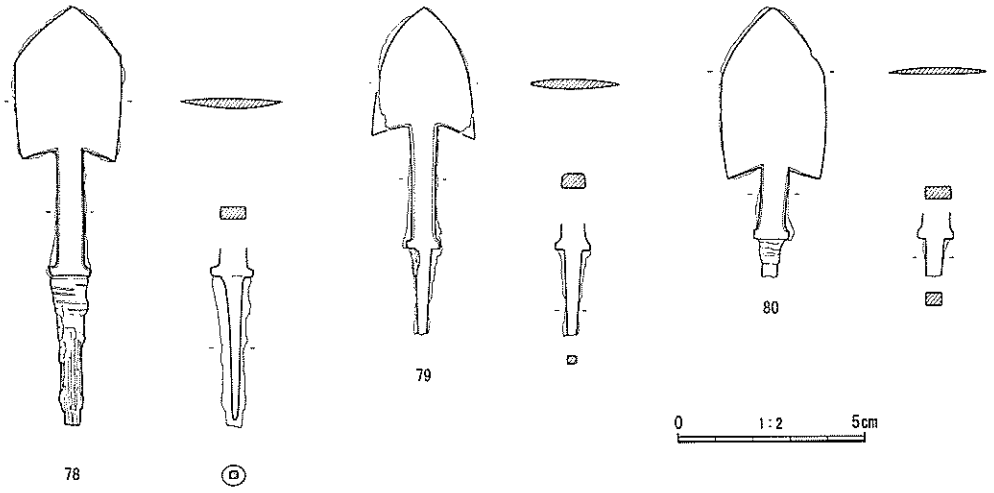


図85　平根式鉄鏃

表 4　鉄鏃計測表

報告書図版番号	鏃身形状	残存長 (cm)	鏃身部 長さ (cm)	鏃身部 幅 (cm)	鏃身部 厚 (cm)	頸部 長 (cm)	頸部 幅 (cm)	頸部 厚 (cm)	茎部 長 (cm)	茎部 幅 (cm)	茎部 厚 (cm)	重量 (g)	備考
1	尖根式鑿箭	(19.70)	0.60	0.75	0.20	13.40	0.45	0.40	(5.70)	0.40	0.25	12.934	糸巻き
2	尖根式鑿箭	(18.40)	0.50	0.90	0.20	13.40	0.45	0.35	(4.50)	0.40	0.25	11.583	
3	尖根式鑿箭	20.30	0.50	0.70	0.20	13.70	0.50	0.35	6.10	0.35	0.30	14.352	糸巻き
4	尖根式鑿箭	(18.80)	0.45	0.70	0.15	13.20	0.50	0.30	(5.15)	0.35	0.30	11.773	
5	尖根式鑿箭	(18.80)	0.60	(0.90)	0.20	13.10	0.50	0.35	(5.10)	0.30	0.20	12.227	
6	尖根式鑿箭	(20.00)	0.60	0.80	0.20	13.20	0.50	0.30	(6.20)	0.40	0.30	15.079	糸巻き
7	尖根式鑿箭	20.00	0.50	0.90	0.20	13.80	0.45	0.40	5.70	0.35	0.30	20.137	
8	尖根式鑿箭	19.70	0.35	(0.70)	0.15	13.75	0.50	0.40	5.60	0.40	0.30	12.510	
9	尖根式鑿箭	19.90	0.40	0.70	0.15	11.85	0.50	0.35	7.65	0.45	0.30	13.857	
10	尖根式鑿箭	(15.65)	0.45	0.70	0.20	12.65	0.50	0.25	(2.55)	0.50	0.25	11.721	
11	尖根式鑿箭	(12.95)	0.35	0.70	0.20	9.80	0.40	0.30	2.80	0.30	0.20	6.189	
12	尖根式鑿箭	(12.80)	0.45	0.70	0.20	10.65	0.40	0.20	(1.70)	0.30	0.20	7.737	
13	尖根式鑿箭	(12.30)	0.45	0.80	0.20	10.50	0.40	0.30	(1.35)	0.35	0.20	10.199	
14	尖根式鑿箭	(8.50)	0.25	0.55	0.25	(8.25)	0.50	0.30	-	-	-	6.270	
15	尖根式鑿箭	(14.50)	0.85	1.00	0.30	10.85	0.45	0.25	(2.80)	0.20	0.20	10.942	
16	尖根式鑿箭	(12.25)	0.85	1.00	0.30	10.85	0.45	0.25	(0.55)	0.45	0.25	8.073	
17	尖根式鑿箭	(4.35)	0.50	0.70	0.20	(3.85)	0.40	0.35	-	-	-	2.446	
18	尖根式鑿箭	(4.05)	0.50	0.80	0.20	3.55	0.50	0.40	-	-	-	2.450	
19	尖根式鑿箭	(3.90)	0.50	0.60	0.20	(3.40)	0.55	0.40	-	-	-	1.909	
20	尖根式鑿箭	(2.80)	0.50	0.60	0.20	(2.30)	0.65	0.40	-	-	-	(2.036)	
21	尖根式鑿箭	(1.70)	0.40	0.60	0.20	(1.30)	0.55	0.30	-	-	-	0.861	
22	尖根式鑿箭	(6.30)	0.60	1.00	0.20	(7.90)	0.50	0.30	-	-	-	4.810	
23	尖根式片刃箭	16.60	0.50	0.70	0.20	11.80	0.60	0.20	4.30	0.30	0.20		
24	尖根式片刃箭	17.20	0.35	0.80	0.20	12.75	0.70	0.20	4.10	0.30	0.20		
25	尖根式片刃箭	15.10	0.65	0.70	0.20	12.75	0.60	0.25	2.80	0.20	0.20		
26	尖根式片刃箭	16.60	0.55	0.75	0.20	11.95	0.50	0.20	4.10	0.30	0.20		
27	尖根式片刃箭	15.80	0.55	0.70	0.20	11.75	0.50	0.20	3.50	0.30	0.20		
28	尖根式片刃箭	15.60	0.85	0.75	0.20	11.45	0.60	0.20	3.30	0.25	0.20		
29	尖根式片刃箭	12.80	-	-	-	(8.15)	0.60	0.30	4.15	0.25	0.20		
30	尖根式片刃箭	13.50	-	-	-	(9.15)	0.65	0.20	4.35	0.25	0.20		
31	尖根式片刃箭	(8.50)	(0.60)	0.80	0.20	(7.90)	0.50	0.30	-	-	-	4.491	
32	尖根式片刃箭	(9.70)	0.45	0.80	0.20	(9.25)	0.50	0.40	-	-	-	5.337	
33	尖根式片刃箭	(11.50)	0.50	0.80	0.20	11.00	0.60	0.30	-	-	-	9.096	
34	尖根式片刃箭	(12.00)	(0.50)	0.80	0.20	11.50	0.35	0.30	-	-	-	7.989	
35	尖根式片刃箭	(2.00)	-	-	-	(2.00)	0.65	0.30	-	-	-	0.764	
36	尖根式片刃箭	(4.10)	0.55	0.80	0.20	(3.55)	0.55	0.30	-	-	-	1.361	
37	尖根式片刃箭	(5.35)	3.50	0.80	0.20	1.85	0.40	0.30	-	-	-	2.702	鏃身関
38	尖根式片刃箭	(14.65)	3.45	-	-	-	-	-	(2.70)	-	-	11.759	鏃身関有
39	尖根式片刃箭	(12.45)	3.40	0.80	0.20	(9.05)	0.40	0.30	-	-	-	10.076	鏃身関有
40	尖根式片刃箭	(11.90)	3.60	0.80	0.20	(8.30)	0.30	0.30	-	-	-	5.736	鏃身関有
41	頸部	(12.50)	-	-	-	(8.00)	0.35	0.30	(4.50)	0.40	0.35	9.050	糸巻き
42	頸部	(12.00)	-	-	-	(12.00)	0.45	0.40	-	-	-	6.472	
43	頸部	(11.05)	-	-	-	(7.35)	0.50	0.40	(3.70)	0.50	0.20	7.715	
44	頸部	(10.80)	-	-	-	(4.10)	0.40	0.30	6.70	0.25	0.20	5.555	糸巻き？
45	頸部	(10.70)	-	-	-	(10.70)	0.35	-	-	-	-	8.406	
46	頸部	(7.30)	-	-	-	(4.70)	0.40	0.30	(2.60)	0.35	0.30	5.623	糸巻き
47	茎	(6.90)	-	-	-	(0.30)	-	-	6.60	0.40	0.20	3.369	
48	茎	(4.80)	-	-	-	-	-	-	(4.80)	0.30	0.20	1.686	
49	頸部	(6.65)	-	-	-	(5.50)	0.40	0.30	(1.10)	0.40	0.20	5.741	
50	頸部	(6.55)	-	-	-	(4.05)	0.30	0.25	(2.50)	0.40	0.25	4.913	
51	茎	(4.35)	-	-	-	(1.10)	(0.60)	0.30	(3.25)	0.40	0.20	2.128	
52	頸部	(4.10)	-	-	-	(2.10)	0.60	0.30	(2.00)	0.50	0.30	2.169	
53	頸部	(8.75)	-	-	-	(6.40)	0.50	0.30	2.35	0.35	0.20	6.991	
54	頸部	(6.65)	-	-	-	(4.40)	0.50	0.30	(2.25)	0.40	0.25	3.889	
55	頸部	(5.95)	-	-	-	(3.00)	0.55	0.25	2.95	0.50	0.20	4.204	
56	頸部	(4.65)	-	-	-	(2.70)	0.50	0.25	(1.95)	0.40	0.20	3.296	
57	頸部	(3.95)	-	-	-	(3.95)	0.55	0.30	-	-	-	2.247	
58	頸部	(2.80)	-	-	-	(2.80)	0.60	0.40	-	-	-	2.185	
59	頸部	(6.90)	-	-	-	(6.90)	0.45	0.40	-	-	-	4.162	
60	頸部	(5.10)	-	-	-	(5.10)	0.65	0.30	-	-	-	5.111	
61	茎	(6.15)	-	-	-	-	-	-	(6.15)	0.35	0.35	2.891	
62	頸部	(5.95)	-	-	-	(5.95)	0.40	0.30	-	-	-	4.057	
63	茎	(6.60)	-	-	-	-	-	-	(6.60)	0.35	0.35	2.729	糸巻き
64	茎	(6.00)	-	-	-	-	-	-	(6.00)	0.40	0.40	3.597	糸巻き
65	茎	(6.00)	-	-	-	-	-	-	-	0.30	0.25	2.378	
66	茎	(5.90)	-	-	-	-	-	-	(5.90)	0.30	0.30	2.669	
67	茎	(4.85)	-	-	-	-	-	-	(4.85)	0.45	0.25	2.750	
68	頸部	(4.50)	-	-	-	(4.50)	0.45	0.40	-	-	-	4.115	
69	頸部	(5.00)	-	-	-	(2.80)	0.40	0.30	(2.20)	-	-	2.235	
70	茎	(2.10)	-	-	-	-	-	-	(2.10)	0.30	0.25	0.701	
71	茎	(1.75)	-	-	-	-	-	-	(1.75)	0.30	0.15	0.460	
72	頸部	(2.25)	-	-	-	(2.25)	0.40	0.30	-	-	-	1.346	
73	茎	(3.75)	-	-	-	-	-	-	(3.75)	0.40	0.40	2.437	
74	茎	(4.30)	-	-	-	-	-	-	(4.30)	0.35	0.20	1.556	
75	茎	(3.70)	-	-	-	-	-	-	(3.70)	0.30	0.25	1.329	
76	茎	(3.70)	-	-	-	-	-	-	(3.70)	0.30	0.25	1.270	
77	茎	(2.15)	-	-	-	-	-	-	(2.15)	0.25	0.20	0.504	
78	平根式五角形	10.90	4.10	2.80	0.40	3.30	0.70	0.40	3.80	-	-	18.115	糸巻き？
79	平根式三角形	(8.70)	(3.50)	(2.70)	0.30	3.30	0.65	0.40	(2.30)	-	-	10.212	
80	平根式五角形	(7.20)	4.55	2.80	0.20	1.90	0.70	0.35	1.05	0.35	0.35	9.928	

5　弓金具

概　要（図86）　弓金具は合計17点出土している。材質は軸部が銅製のもの、鉄地で両頭部に銀薄板被覆のもの、鉄製の３種が認められる。さらに断面の形状から少なくとも４点の飾弓が副葬されたと考えられる。弓の先端につける弓弭金具や縁金具といった金属製品は出土していない。

以下、材質と形態から、芯棒が銅製のものを弓金具１類、両頭部に銀薄板被覆のものを弓金具２類、鉄地で花弁数が６弁のものを弓金具３類、断面が方形を呈し、花弁数が４弁であるものを弓金具４類と呼び、それぞれの弓金具を用いた弓本体を１号、２号、３号、４号飾弓とする。

構　造　弓金具の構造は球状の頭部をもち、軸棒のまわりに薄い鉄板を巻いたもので、鉄管の中に芯が通されている。

弓金具の製作技法は福島県小申田北18号横穴墓例により試みられている（樫村編1998）。製作工程は次の①～③の手順をふんでいる。①弓の末弭・本弭部分に円孔を穿ち、筒形を弓本体に挿入する。②弓本体に筒形を固定するために切り込みを入れ、折り返して固定する。このときに平面的には花弁状をなす。③両頭棒（片側は筒形より小さく挿入できるようにしてある）を差込み、片側の頭部を打ち敲くことではずれないようになる。

これにより、軸は筒の中で稼動できるようになるとしている。筒の表面には木質が残存していることが多く、この部分の長さにより弓の太さを推定することができる。

今回、弓金具１類の（５）についてマイクロフォーカスＸ線ＣＴ撮影を行い、銅軸と片方の頭部から構成される棒に別造りの頭部を被せて、固定する構造であることが判明した。つまり、弓に銅軸を差し込んでから、片側の頭部とかしめる技法で、弓金具のあらたな製作技法を示すものである【第２部　構造解析編　p.62】。

弓金具１類（図86　1～6）　６点出土している。弓金具１類は奥壁左隅から出土しており、大刀とともに立て掛けられた可能性がある。末弭・本弭に付けられていた個数や弓本体の規模は不明である。弓の幅は1.9cm～2.2cmであったと考えられる。軸は銅製、筒は鉄製である。筒の断面は円形をなし、端部

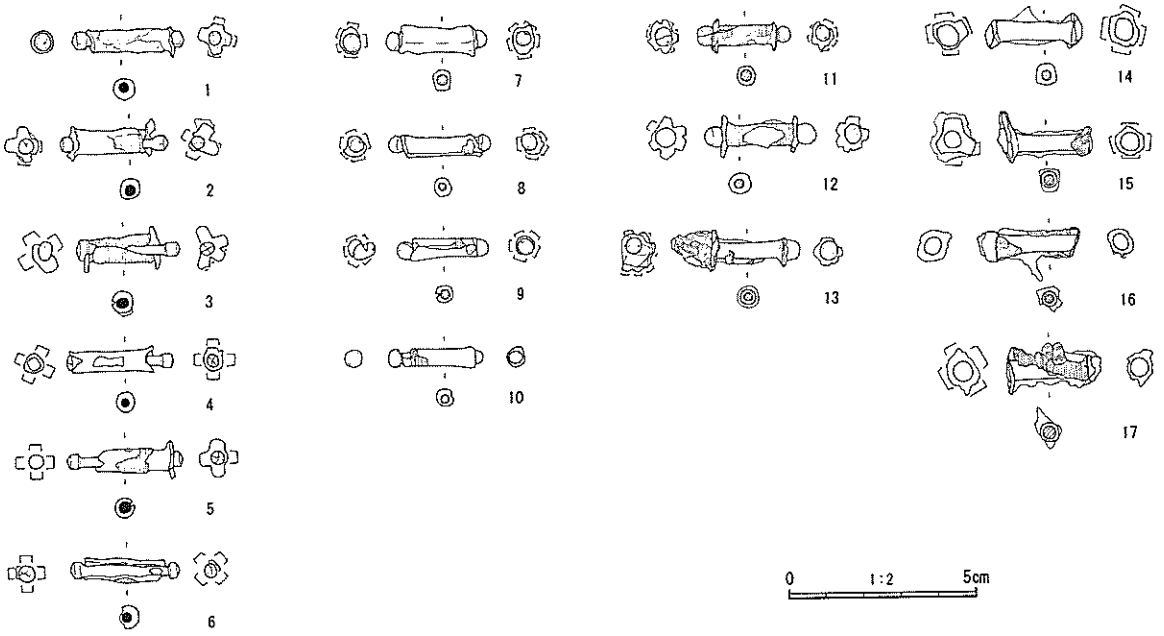


図86　弓金具

は4弁の花弁状に折り曲げられている。

両頭部と軸部の境は明瞭に作り出されており、頭部の先端は先細り、側面は五角形を呈する。先端部には敲打痕が残る。銅製の両頭部には鍍金が施されておらず、銅無垢であった。【第2部　構造解析編 pp.62-64】。

弓金具2類（図86　7～10）　蛍光X線測定により、両頭部に銀薄板が被覆されていたことが判明した【第2部　構造解析編　p.61】。銀薄板被覆の弓金具は4点出土している。出土位置は明確ではないが、奥壁と石棺の間からの出土である。鉄製の軸をもち、花弁の残存状態は良好ではないが、5弁と考えられる。全長2.7cm～2.4cmで、弓幅2.1cm～1.7cmである。正円形の両頭部をもち、軸部と両頭部の境は明瞭である。8、9には筒を巻いた接合部が観察された。木質もわずかながら付着していた。

両頭部を銀薄板被覆した弓金具の出土は全国的にみても数が少なく、現状では静岡県函南町柏谷D2号横穴墓（山内）、岡山県定北古墳（新納・光本編2001）などで類例が認められるに過ぎない。

弓金具3類（図86　11～13）　鉄製の弓金具で、断面形状は円形である。花弁は6弁である。出土位置は明確ではないが、石棺手前の石室中央付近からの出土である。全長2.95cm～2.45cm、弓幅1.7cm～1.6cmである。花弁の残存状況は比較的良好で、両端とも6弁から構成される。幅2mm～4mmの間隔で切り込みを入れており、正六角形をなしてはいない。両頭部は円形である。木目は軸に対して直交方向に観察される。

弓金具4類（図86　14～17）　鉄製の弓金具で、断面が方形を呈するものである。出土位置は石棺と奥壁の間のやや右壁寄りで2点出土し、左壁と石棺の間の空間から1点出土している。鞍金具の破片が出土している箇所に近く、いずれも原位置とは考えにくい。花弁は4弁を呈する。両頭部の残存状況は明瞭ではなく、ほとんどが潰れている。他の弓金具と比較するとやや断面厚で、全長も2.4cmと短い。

評　価　今回の出土により1古墳から4点の飾弓が副葬されていることが確認された。そのうち1号飾弓、2号飾弓、4号飾弓の3点の飾弓が家形石棺と奥壁の間に副葬されていたと考えられる。なかでも弓金具1類を有する1号飾弓は奥壁左隅に置かれていたと推定される。さらに石室中央にも鉄製6弁を有する3号飾弓が認められ、飾弓の副葬箇所は奥壁と石棺の空間と石室中央の2箇所に分けられる。

また、関連資料調査より、静岡県長泉町下土狩西1号墳出土の弓金具2点についても軸部が銅製で、両頭部に鍍金が施されていたことが確認された【第1部　調査報告編　図版88】。

弓金具1類のように銅と鉄の2種の金属を用いる弓金具は、近隣では下土狩西1号墳が見出せる程度であり、全国的にみても類例は少ない。

下土狩西1号墳は原分古墳に近接する場所に所在し、遠江Ⅳ期前葉（TK217型式期）に造営された有力墳である。駿河東部の遠江Ⅳ期前葉に築造される有力墳には、軸部が銅製で、筒形が鉄製である2種類の素材を用いる弓金具を備えた飾弓が副葬されたといえよう。

表5　弓金具計測表

報告書図版番号	全長(cm)	弓幅(cm)	筒状部径(cm)	花弁形状	材　質	重量（処理後）(g)
1	2.95	2.20	0.60	4弁	芯棒銅製	1.921
2	2.85	2.05	0.60	4弁	芯棒銅製	2.322
3	2.75	1.95	0.55	4弁	芯棒銅製	2.166
4	2.80	2.25	0.50	4弁	芯棒銅製	1.938
5	3.05	2.40	0.55	4弁	芯棒銅製	2.137
6	2.85	2.25	0.65	4弁	芯棒銅製	1.632
7	2.70	2.10	0.50	5弁	両頭部銀被覆	1.815
8	2.70	1.80	0.50	5弁	両頭部銀被覆	1.311
9	2.40	1.70	0.50	5弁	両頭部銀被覆	1.233
10	2.50	1.90	0.45	5弁	両頭部銀被覆	1.291
11	2.45	1.70	0.50	6弁	鉄製	1.531
12	2.95	1.70	0.50	6弁	鉄製	2.010
13	2.70	1.60	0.40	6弁	鉄製	2.661
14	2.60	1.70	0.45	4弁	鉄製	2.691
15	2.50	1.40	0.40	4弁	鉄製	2.183
16	2.70	2.00	0.40	4弁	鉄製	2.547
17	2.50	1.90	0.50	4弁	鉄製	2.463

6　ガラス玉

概　要（図87）　ガラス玉は合計14点出土している。出土位置が明確なものは７点あり、出土位置は破壊された石棺周辺（11、12、14）と、左壁側の石室中央のＢ、Ｃ人骨周辺部（２～４、９）に分けられる。それ以外のガラス玉も石室中央と石棺周辺から出土した。径0.95cm～1.15cmのガラス玉（１～５、９）は石室中央より出土し、径0.4cm前後のガラス玉（11、12、14）は棺身上より確認されている。

ガラス玉は形態・規模により細分できる。以下、丸みを帯びたものをガラス玉１類、孔の周囲に平坦面をもつものをガラス玉２類、粟玉をガラス玉３類とする。

ガラス玉１類　丸みを帯びたガラス玉１類は６点（１～３、５～７）出土した。色調は青紺色である。透明度が高く、平滑であった。白濁した筋や不純物が横方向に流れていることから巻き付け技法によるものと考えられる。重量は1.20g～1.43ｇを測る。

ガラス玉２類　平坦面を持つガラス玉２類は３点（４、８、９、10）が相当する。色調は青紺色である。ガラス玉１類と比してやや不整形な円形もしくは方形をなしている。とくに９のガラス玉には縦方向に延びる白い筋がみえることから平坦面をもつガラス玉は管引き技法によるものと考えられる。径0.95cm～1.15cmで、重量は0.61ｇ～1.95ｇである。

ガラス玉３類　11～14が相当する。11、13のガラス玉は径0.40cm～0.45cm、0.08ｇを測る。筒形を呈し、色調は水色である。12、14は径0.5cmで、0.09ｇ～0.10ｇを測る。扁平な形状で、粟玉であろう。表面は白濁しているが、青紺色を呈する。

評　価　出土位置は石棺付近とＢ、Ｃ人骨周辺でいずれも遺物が散在していた場所である。しかし、ガラス玉３類は破壊された棺身上から出土しており、石棺内の被葬者に伴う可能性がある。一方、石室中央のＢ、Ｃ人骨付近から出土したガラス玉は主にガラス玉１類で構成される。出土位置から石棺以外の被葬者に伴う可能性も指摘できる。

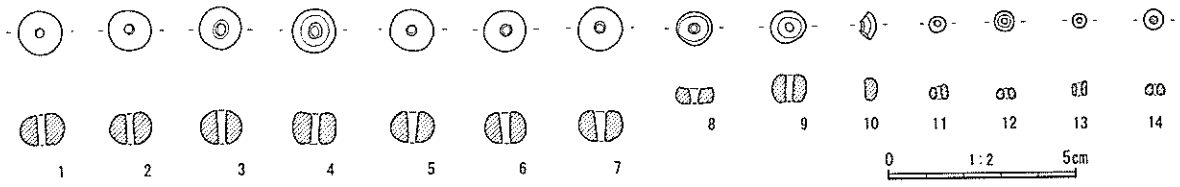


図87　ガラス玉

表６　ガラス玉計測表

報告書 図版番号	出土位置	色調	径 (cm)	高 (cm)	穴径 (cm)	重量 (g)	残存状況
1	Ｃ区	青紺色	1.15	0.80～0.85	0.20	1.34	完形
2	Ｂ・Ｃ人骨周辺部	青紺色	1.15	0.80～0.85	0.20～0.25	1.29	完形
3	Ｂ・Ｃ人骨周辺部	青紺色	1.05	0.90	0.20～0.25	1.35	完形
4	Ｂ・Ｃ人骨周辺部	青紺色	1.15	0.80～0.85	0.20	1.95	完形
5	Ｄ区	青紺色	1.15	0.85	0.30	1.20	完形
6	Ｃ区	青紺色	1.10	0.80～0.85	0.30	1.27	完形
7	Ｃ区	青紺色	1.15	0.80～0.85	0.30	1.43	完形
8	Ｂ区	青紺色	0.95	0.45	0.25	0.61	完形
9	Ｂ・Ｃ人骨周辺部	青紺色	0.95	0.73	0.20	0.80	完形
10	Ａ区	青紺色	?	0.60	?	0.20	1／2
11	石棺上	水色	0.45	0.35～0.40	0.15	0.08	完形
12	石棺上	青紺色	0.50	0.25～0.30	0.15	0.09	完形
13	Ａ区	水色	0.40	0.30～0.40	0.15	0.08	完形
14	石棺上	青紺色	0.50	0.30	0.10	0.10	完形

7　金銅製装身具類

原分古墳から出土した金銅製遺物のうち、馬具・刀剣類に伴うと判断できず、冠などの可能性があるものを取り上げ、９点を図示する（図88）。内訳は花弁形歩揺１点（１）、歩揺釣り手１点（２）、円形文付飾金具１点（３）、列点文付飾金具片３点（４～６）、鋲・鋲付金具片３点（７～９）である。

（１）花弁形歩揺・歩揺釣り手

概　要（図88）　１は、石棺破壊部分から出土した金銅製の花弁形歩揺である。２は、石室内中央の床面よりやや上の層から出土した金銅の針金であり、その特徴から歩揺の釣り手であると判断できる。

特　徴　１の平面形は、下膨れの楕円で下端がわずかに尖る。長さは1.9cm強、幅は最大1.4cm弱である。金銅板は薄く、両面に金が観察できる。匙状に湾曲しており、その凹凸による高さは0.1cm強である。上端には、直径0.1cm強の円孔がある。孔の縁は凸面側にめくれており、凹面側から穿たれた可能性が指摘できる。孔には環状になった針金が通されている。針金の直径は0.1cm弱である。

２の針金は、二つ折りにして捩られている。図化した上が折り返しにあたり、環状を呈する。この状態は、１に付いている針金と同様である。図化した下端には、金銅板が付いている。金銅板は小片であるが、金のある面が左側に図示した面（表面）だけであり、歩揺の破片ではないことがわかる。冠や履などといった、歩揺で飾られた本体の破片であると判断できる。この金銅板片には２つの小さな穿孔が確認でき、針金の両端がそれぞれの小孔に通されている。孔は直径0.1cm前後であり、穿孔に伴うめくれはない。針金の端部は金銅板の裏面側で折り曲げられ、本体に固定されている。釣り手の捩りが本体への固定の後とするならば、折り返し側を時計回りに４回転させて捩りを設けたと復元できる。

評　価　１、２のような針金状の釣り手を伴う花弁形歩揺は、奈良県藤ノ木古墳（前園編1995）をはじめとする有力墳において、金銅製の冠や履を飾るものとして確認することができる。さらに、石棺周囲の出土であることから、石棺内の被葬者が身に着けるものであった可能性が評価できる。１、２の出土は、原分古墳石棺内に金銅製の冠もしくは履などが副葬されていた可能性を示す。

（２）円形文付飾金具

概　要（図88）　３は、石棺周辺の東側から出土した板状の金銅製金具である。後述するように、冠の部品や帯金具といった可能性が考慮される。しかし、いずれにおいても根拠や類例にとぼしく、明確に用途を特定することができない。使用時の方向も不明であるが、以下の説明においては、図示した方向で記述する。

特　徴　平面形は、縦長の五角形を呈する。上下の最大長6.3cm弱、幅は下辺において2.4cm弱、上部がやや広く3.1cm強になる。上縁は中央が鈍角に尖るが、その角はやや緩い。金銅板の湾曲・凹凸は把握できない。金は図化した面（表面）だけに確認できる。下辺中央と上縁中央・両端の計４ヶ所に、直径0.2cm～0.3cmの小孔がある。いずれの小孔も縁が裏面側にめくれており、表面から穿たれた可能性が指摘できる。金銅板の周縁には、表面側が凸になる列点がめぐる。列点は２列に配置されているが、外側が金銅板の縁から外れる部分がある。列点で囲まれた範囲内には、直径0.7cm前後の円形の透かしが３個、同様の大きさの円文11個が配置されている。円文は凹線によって表現されているが、それぞれの円文の下部は凹線が薄くなって途切れる。

評　価　裏面に金がなく、４つの小孔があることから、この板状の金具は４ヶ所留めによって布や革に付けられていた可能性が指摘できる。さらに、装着に伴う耐久性は求められず、むしろ装飾性が高い金具として評価できる。冠であるならば立飾りのように頭巾に付けられた金具、帯金具であるならば帯

先金具である可能性が考慮される。平面形態や小孔の配置などは、金銅製帯先金具に比較的近い例がある（町田1970）。文様については、群馬県奥原25号墳出土の長方形金銅板に類似している（松本・石塚1983）。しかし、これらも形態・文様の双方が詳細まで類似する事例ではない。

（3）列点文付飾金具片

概　要（図88）　4～6は、石室内流入土中から出土した列点を伴う金銅板片である。形態・色調や文様の特徴から、いずれも出土馬具や刀剣に伴うとは判断できない。また、この3点が同一個体である可能性も確認できない。

特　徴　4は、幅0.95cm～1.05cmの帯状で弧を描く。両面に金が確認できるが、色調は1～3に比べて銀に近い。図示した面（表面）がわずかに凸面になる。両縁に表面側が凸になる列点がめぐる。図示した下側の列点は、縁の形状に合わせて弧状に並ぶ。上側の列点は直線的に並び、角をもって曲がる。5は、破断面が全周する小破片であり、本来の形状は全く復元できない。凹凸のない平らな板状であることは確認できる。金は図示した面（表面）にのみ確認でき、その色調は4および1～3に比べて黄色味が強い。平行する2列の列点が確認できる。表面側が凹になる点が、細かい間隔で直線的にならぶ。6は、半球状部分のある金銅片である。破断面が全周する破片であり、本来の形状は全く復元できない。金は図示した面（表面）にのみ確認でき、色調は1～3に比較的近い。半球状部分は直径0.9cm強、突出は約0.2cmである。その周囲には表面が凹になる列点がめぐるが、図示した右側に列点が途切れる部分を確認することができる。

評　価　馬具や刀剣に伴うとは判断できない金銅製飾金具片として取り上げたが、冠や履もしくは帯金具の可能性があるという判断も難しい。不明の金銅片である。

（4）鋲付金具片

概　要（図88）　7～9は、銅製鋲のついた銅板片である。出土馬具や刀剣に伴うとは特定できない。いずれも小破片であり、出土位置は石室中央付近から奥壁寄りの範囲で散在しているが、

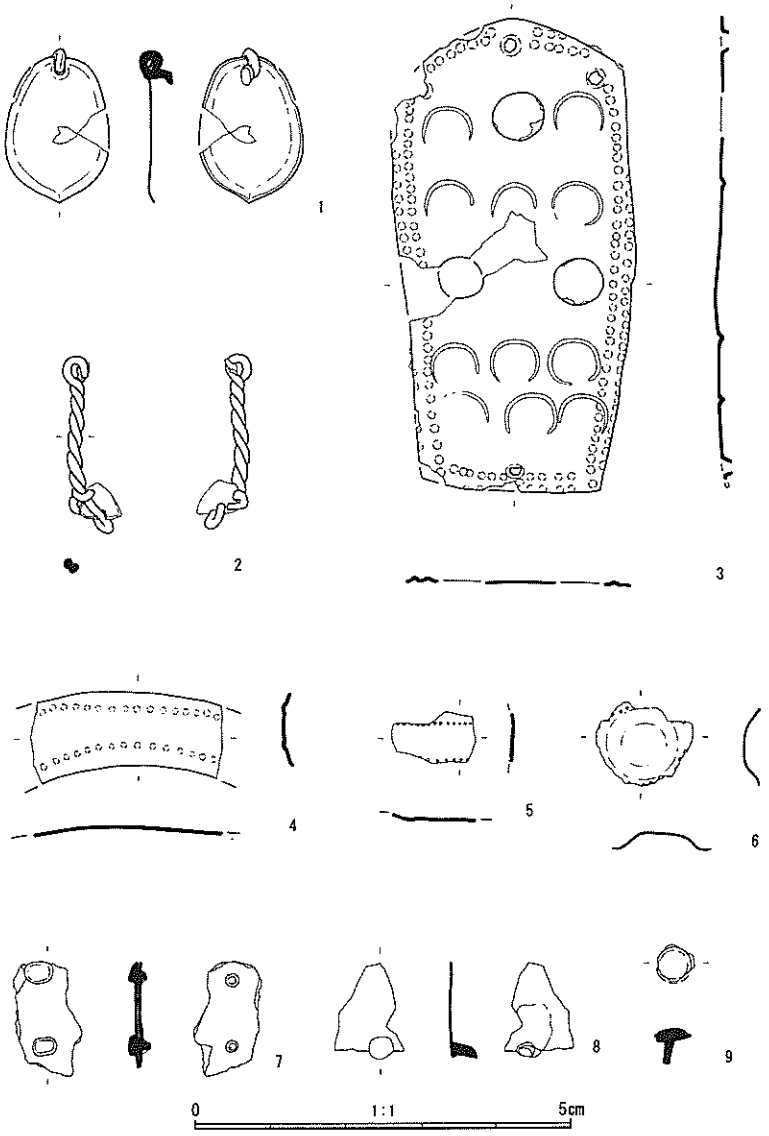


図88　金銅製装身具類

鋲や銅板の特徴が非常に良く似ていることから、同一個体の可能性も考慮される。

特　徴　銅板については、破断面が全周する破片で占められており、本来の形状を復元することはできない。湾曲・凹凸のない平らで薄い銅板であり、列点などの文様は確認できない。金については、劣化による消失の可能性もあるが、現状で確認することはできない。鋲は銅製であり、長さは最大で約0.5cmである。銅板と同様に金は確認できない。鋲頭は最大径約0.5cm、平面不定形である。高さは潰されたように低い。

評　価　鞍の一部の可能性もあるが、冠などの破片であってもよい。特定することは極めて難しい。

8　鉄　釘

概　要（図89）　鉄釘は6点を図示した。1、2、3は石室中央から右壁側で出土している。この周囲に棺台石があることからも釘付木棺が配置されていた可能性が高い。ただし、釘先端部の方向や詳細な出土位置については不明確であるため、釘付木棺の構造の復原は困難である。

頭部の形状が判明しているのは1、5で、L字に折り曲げるタイプ（A類）である（田中1978）。さらに規模と頭部の形状から2種類の釘が使用されていたことがわかる。

特　徴　1は全長8.0cmで、幅0.5cm、厚さ0.4cmである。頭部の形態はL字に折れ曲がるタイプである。頭部の形状は楕円形をなしており、0.5cmほど折れ曲がる。木目は釘全体に及んでいる。釘頭部から3.8cmで木目の境界がある。頭部から上半部にかけて直交する木目がつき、頭部の側辺まで遺存していた。その下部から先端部にかけて、平行する木目がつく。木目の方向が異なることから組合式であったことを示している。これにより、釘付木棺の厚さを推定することができる。ほかの2・3についても同様の木目の残存状態を示している。

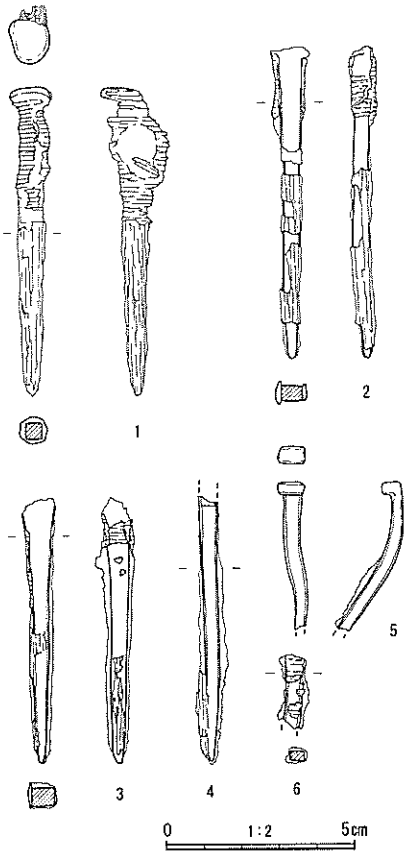


図89　鉄　釘

2は残存長8.25cm、幅0.5cm、厚さ0.4cmである。頭部は欠損しており、先端部から6.0cmのところで木目の境界がある。上部の木質は側辺のみ遺存していた。

3は残存長7.0cm、幅0.4cm、厚さ0.4cmで、頭部は欠損していた。先端部から4.3cmのところで木目の境界がある。横方向に筋が通る木目は釘の側辺のみに木質が遺存しており、2と共通する。

4は先端部に付着している木質が縦方向であることから釘とした。残存長7.0cm、幅0.4cm、厚さ0.3cmである。

5は残存長3.9cm、幅0.45cm、厚さ0.35cmである。歪んでおり、頭部の形状、厚さも1～4と形態が異なる釘である。頭部の形状は0.3cmL字に折れ曲がり、上面観は長方形を呈する。

評　価　遠江では大谷宏治により鉄釘の集成、検討が行われ、横穴式石室墳20基、横穴墓5基と少ないとされる。さらに東の地域へいくほど鉄釘の出土割合は少なく、同一古墳群中に集中すると指摘する（大谷2004）。本古墳から6点、長泉町下土狩西1号墳で確認され、遠江と同様に東駿河地域でも遠江Ⅲ期末葉以降の有力墳に認められる。

第５節　その他の遺構

１　土器廃棄土坑

土器廃棄土坑（ＳＸ１）は調査区南西部の古墳の周溝外で検出された。浅い掘り込みを有し、長楕円形を呈する（図90）。長軸4.8m、短軸3.9m、深さ0.1mである。長軸は南北方向を向き、土層は２層に分層できる。遺物は土器廃棄土坑の中央からやや北西寄りで集中的に出土した（図91）。ほとんどが破片資料で、１層から２層に分散していた。遺物の垂直分布より、やや北東側から南側にかけて傾斜している様相を示す。須恵器は６個体が確認され、瓶１点、フラスコ瓶１点、大型平瓶２点、甕２点であった。

石室内で出土している土器組成と比較すると瓶、フラスコ瓶は石室内にも認められ、大型甕、大型平瓶は石室内からはほとんど出土していない点が注目される。

古墳周辺において、大型平瓶、フラスコ瓶、甕を用いた葬送儀礼が行われ、その後、廃棄されたものであろう。

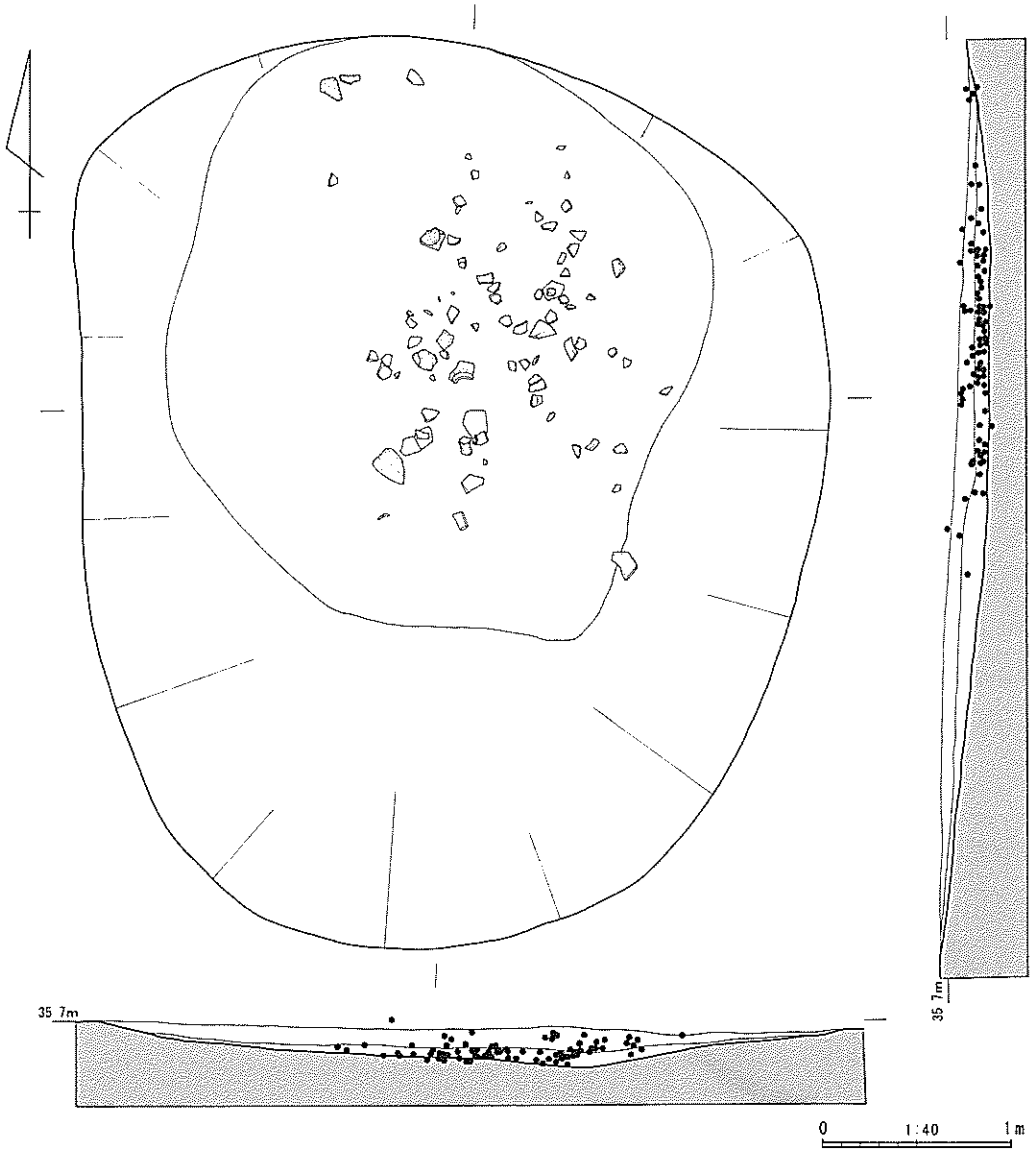


図90　土器廃棄土坑実測図

（1）出土土器（図92・93）

概　要（図92・93）　土器は瓶１点、フラスコ瓶１点、大型平瓶２点、甕２点である。石室内や周溝内外から出土している遺物との接合関係を試みたが、接合状況は確認されなかった。最も接合状況が良好なものは大型平瓶と甕の底部であった。

特　徴　１は、瓶である。口縁部と頸部を欠失している。頸部から上部の破片は土器廃棄土坑内からは確認されなかった。体部最大径は10.0cmである。体部外面はケズリが認められる。屈曲部には２条の沈線が巡り、ややその下の位置から注口部が上方にむけてつく。注口部径は1.2cmである。接合部分はナデによる調整が顕著に観察される。

２はフラスコ瓶である。口縁部から体部上半部まで残存し、体部のほとんどは土器廃棄土坑から確認されていない。口縁部の残存率もわずか30%程度である。口径9.6cmで逆ハ字に開き、端部は斜下方に垂下する。頸部と体部の接合痕が観察される。

３は大型平瓶である。口径12.2cm、体部最大26.8cmである。底部は欠失し、口縁部の残存率は70%である。接合面には何箇所か敲打痕が観察されるが、意図的な破砕かどうかは不明であった。ただ、体部は外側に向かって放射状に亀裂が入っている。短い頸部がつき、端部は斜め下方に垂下する。下には１条の沈線がつく。体部はやや上位に最大径がつき、やや丸みを帯びた深い形状である。体部下半にはタ

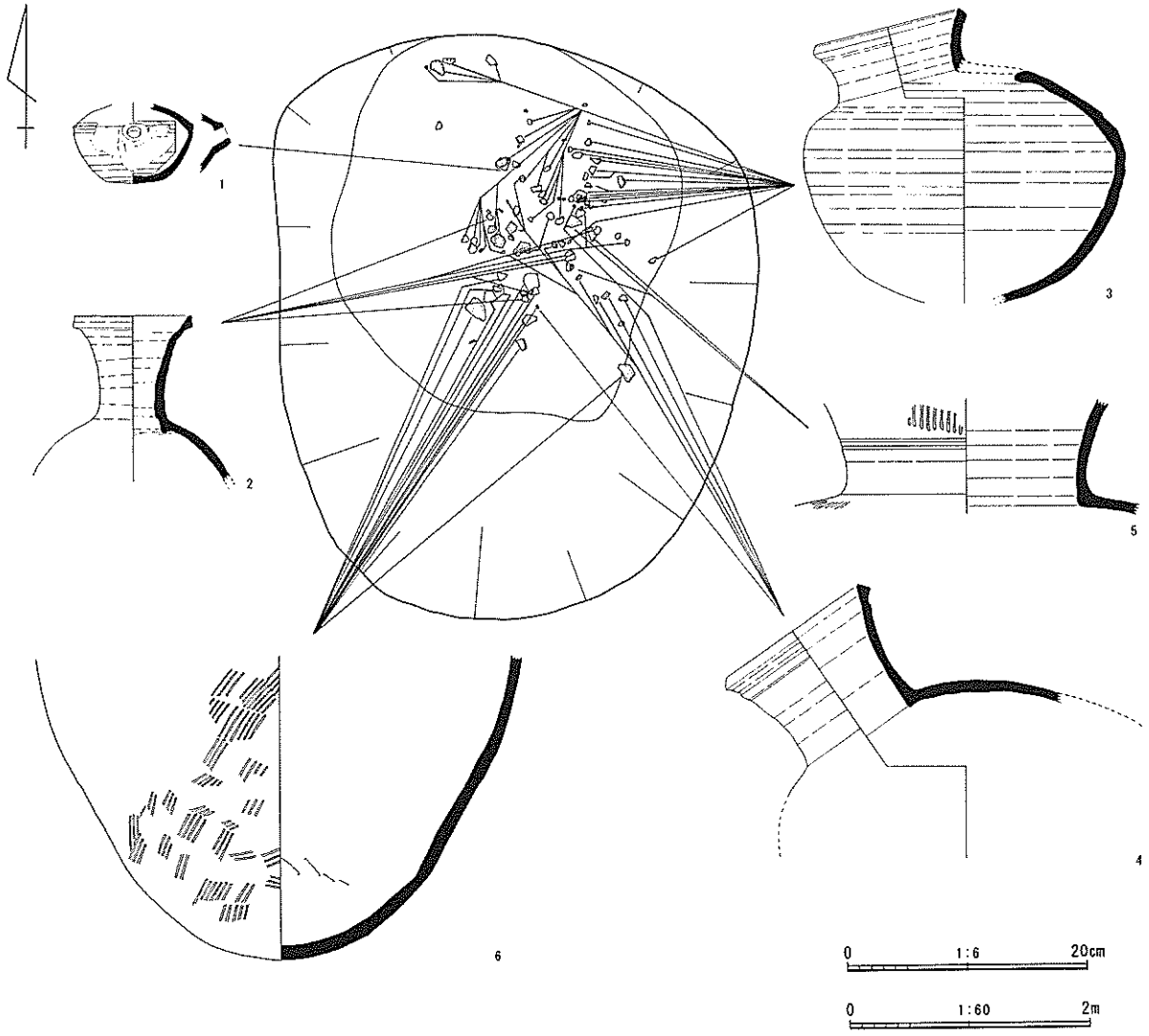


図91　土器廃棄土坑出土状況

タキ板のような工具でナデ調整が施される。体部上面には暗緑色の自然釉が降灰している。体部の中心部には径9.4cmの円形の孔と隣接して径6.5cmの孔が穿たれており、径6.5cmの孔に円形の蓋がされていた。

4は大型平瓶である。口径13.2cmである。口縁部の残存率は30%程度で、体部上部から下部にかけては欠失していた。体部は放射状に亀裂が走るが、明らかな敲打痕は確認されなかった。

口縁部は段差をもうけ、端部は斜め下方へ垂下する。頸部は逆ハ字に開き、太く長い。体部上面は丸みを帯び、暗緑色の自然釉が降灰する。体部外面には平行タタキが斜位につく。

体部には円形孔が重なりあう。径9.4cmの孔には頸部がつき、径9.1cmの孔に蓋がされる。体部内面に

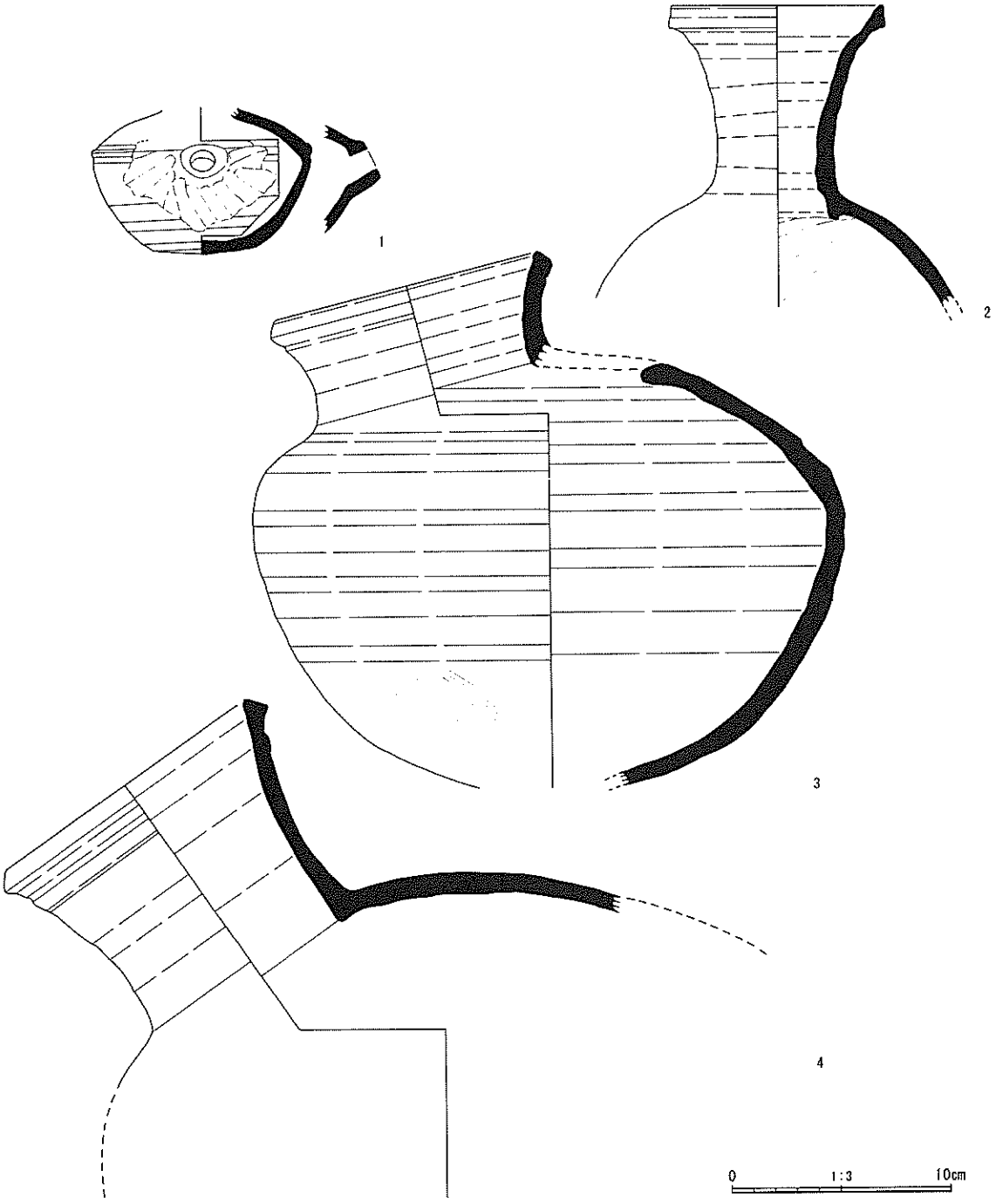


図92　土器廃棄土坑出土土器（1）

は棒状工具による強いナデが横方向にみられ、頸部と体部の境には接合痕が僅かに残る。

5は甕の頸部片である。口縁部は確認されなかった。頸部は外反し、体部との境には低い段差が設けられる。浅い沈線が1条巡り、ヘラ状工具による刺突文が縦位につく。体部には平行タタキが残る。頸部径は19.9cmである。外面には暗緑色の自然釉が厚く降灰している。

6は丸底の甕である。土器廃棄土坑から口縁部は確認されていない。器壁は1.2cm～1.0cmと厚い。外面には平行タタキがつくが、丁寧なナデにより痕跡が残る程度である。内面底部は特に念入りにナデ調整が施される。色調は灰黄色であり、径2mmの砂粒を僅かに含む。

編年的位置　これら1～6の須恵器はいずれもは石室内に副葬された時期とそれほど変わらず、遠江Ⅳ期前葉～後葉であろう。

2　墳丘外出土土器

概　要（図94・95）　墳丘外の表土及び包含層出土土器11点を図示した。今回の調査区内においていずれも石室開口部前と東側周溝外側からの出土が多く、古墳から離れるほど遺物量は少なくなる傾向を示している。ほとんどが須恵器甕片であり、坏類やその他の遺物は確認されなかった。

隣接する的場遺跡においても古墳時代に伴う遺構は皆無であり、土師器の細片や須恵器片のみであった。周溝外から出土している甕は少なくとも11点の甕の個体数を示しており、周溝外側でも甕を用いた儀礼行為の存在を想定させる。

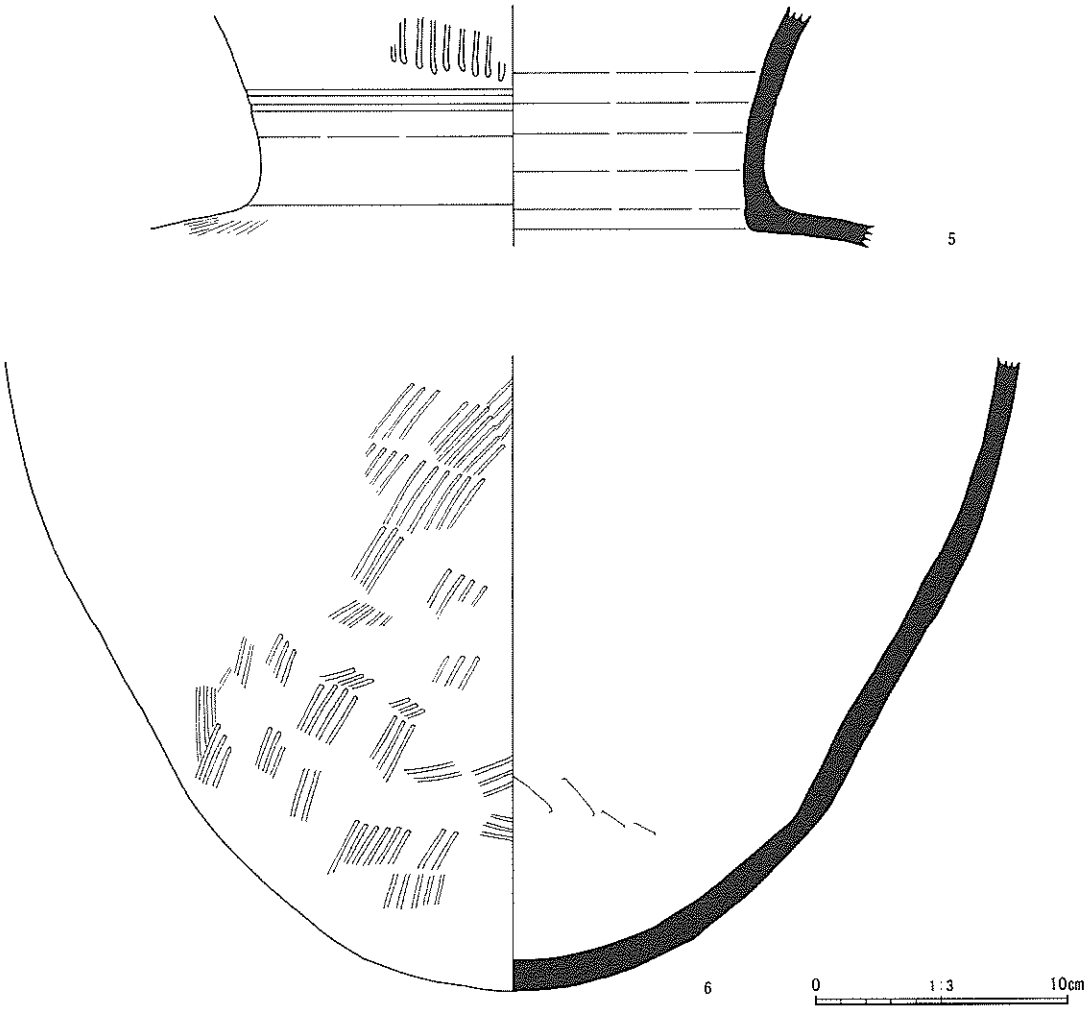


図93　土器廃棄土坑出土土器（2）

特　徴（図95）　1の頸部は外方へ延び、やや内湾しながら立ち上がる。端部は斜め下方に垂下する。上位に隆帯がつき、下位には沈線がつく。その間には波状文が上下に施される。

2は大型の甕である。体部に平行タタキが残り、頸部には沈線間に波状文が2段にわたり、つく。色調は暗黄灰色である。

3は頸部中位に1条の低い隆帯が巡る。端部は外反しながら斜め方向に垂下する。区画帯には文様はみられない。口縁部付近には自然釉が認められる。4の口縁端部は折り返し、低く稜をつけ、器壁は厚い。

5の口縁部はやや外反しながら立ち上がり、端部はつまみ上げ、内傾する。体部外面には平行タタキが残る。

6の頸部は直線的にのび、口縁端部は斜め下方に突出する。3条の浅い沈線間に櫛状工具による斜位の刺突文が施される。刺突文は右上から左下方向に認められる。刺突文間の間隔はやや広い印象を受ける。外面全体に自然釉が付着する。

7の頸部は逆ハ字に開き、口縁端部は斜め方向に垂下する。頸部上位から下位にかけて2本で1単位の3条の沈線間に櫛状工具による刺突文がつく。櫛歯は10を数える。6と非常に類似するが、別個体である。8の端部は斜め方向に垂下する。沈線下には斜め方向に刺突文がつく。

9の口縁端部はやや斜め方向に突出する。沈線間にはハケ状工具の押し引きにより、刺突文がつく。

10の口縁端部はやや斜め下方に垂下する。2本の沈線間には棒状工具による波状文が2段にわたり施される。

11は緩やかな肩の張りをもつ体部片である。頸部は垂直ぎみに立ち上がる。頸部径は21.0cmで外面は

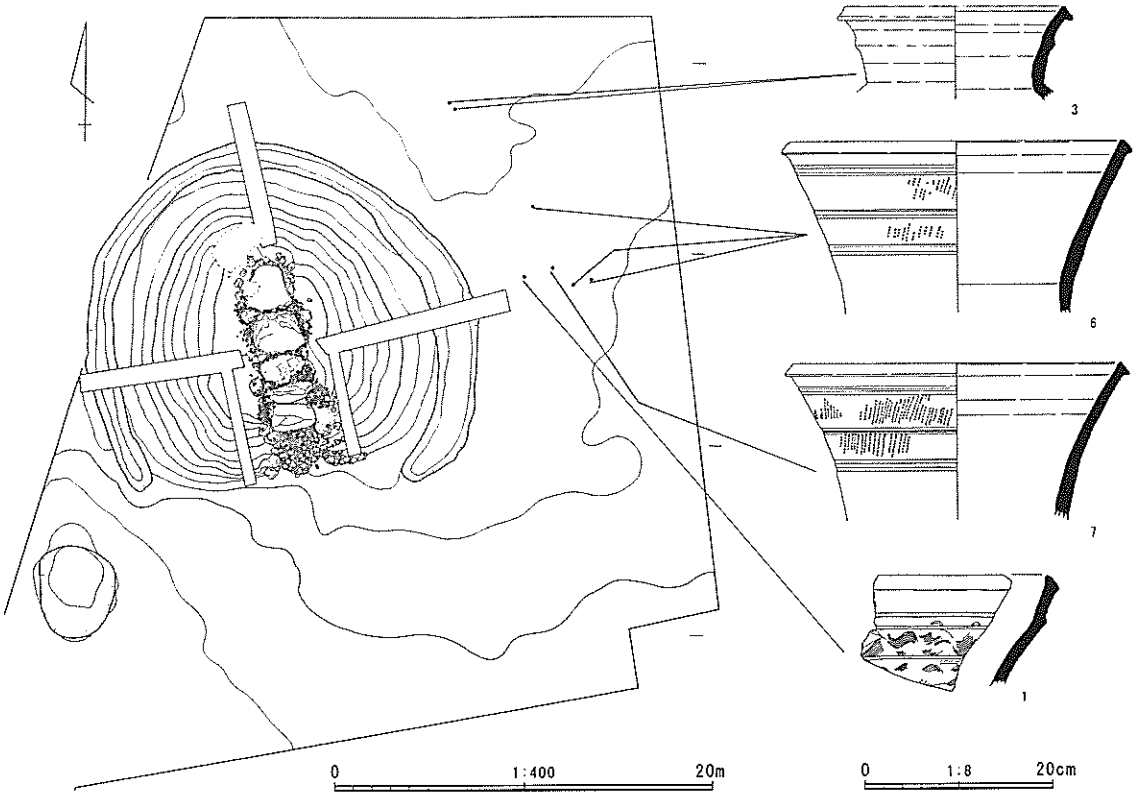


図94　包含層出土状況

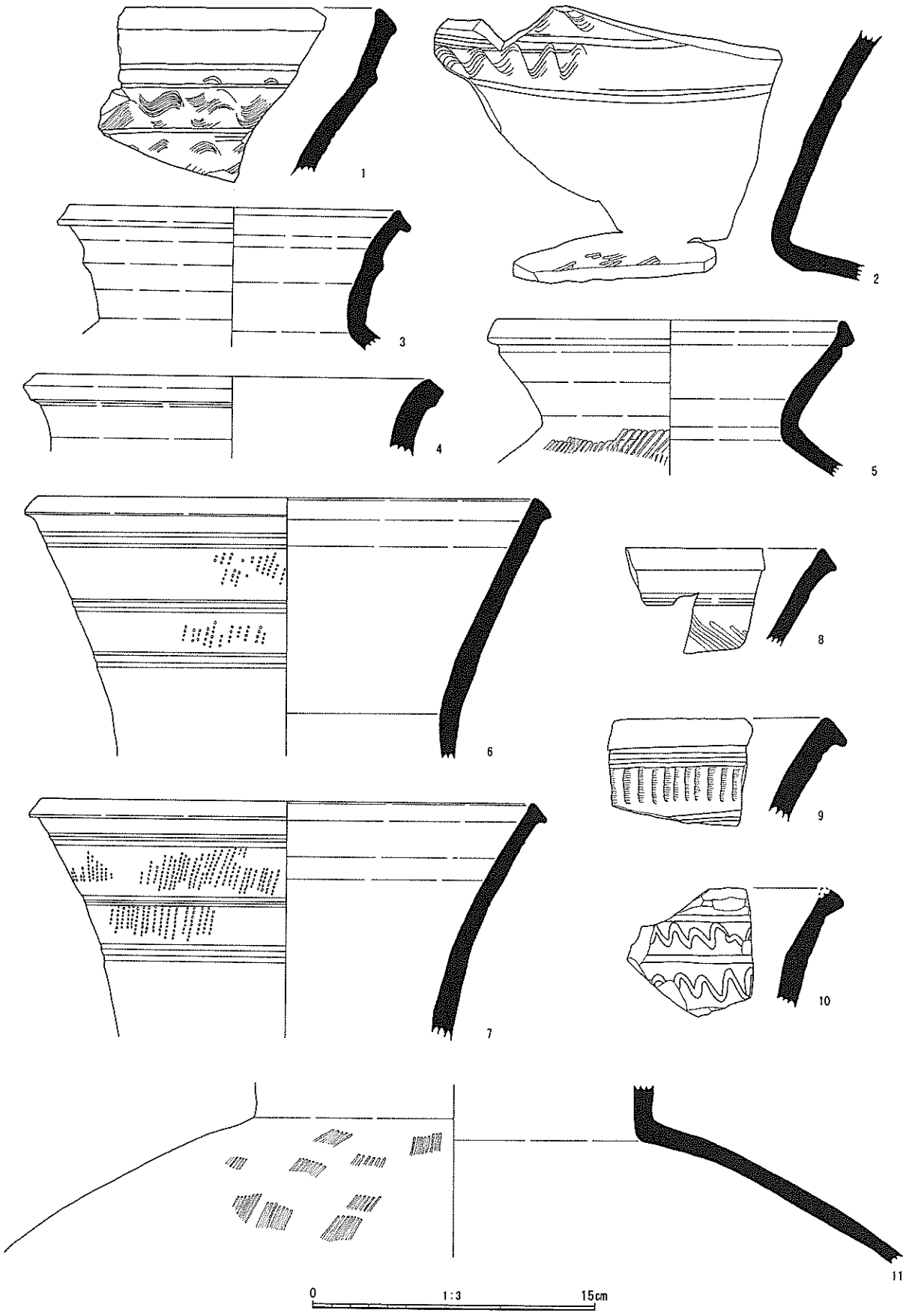


図95　包含層出土土器

平行タタキが残り、暗緑色の自然釉が降灰する。

編年的位置　1～11の甕片は遠江Ⅳ期前葉～遠江Ⅳ期後葉にかけてのもので、色調や体部内面の調整から湖西産であろう。

3　古代以降の遺物

概　要（図96～98）　古代以降の遺物は8点を図示した。瓦（12）は古墳外の表採資料である。灰釉陶器（13）は石室中央上層から出土した。かわらけ（14）、皇宋通寶（15）は石室中央の標高38m付近から出土し、周辺からは人骨・獣骨片が多数みられた。寛永通寶（16）は墳丘上から出土し、17は石室内流入土の上層である。

18・19は石室内流入土の上層から出土した。

特　徴　12は丸瓦片である。内側には布目が残る。色調は浅黄色で、胎土は精緻である。時期は不明である。

原分古墳の所在する黄瀬川下流域には白鳳寺院である日吉廃寺や東方には伊豆国分寺が存在する。

13はK14号窯式期の灰釉陶器である。この周囲からは人骨片や獣骨片も多数出土しており、この時期の石室内には墓を含めた再利用が考えられる。方形の高台がつき、外面底部はケズリ調整が残る。内面や高台の接地部に摩滅痕が残り、平滑であった。

14はかわらけである。口径10.4cm、器高2.7cmで、底部は糸切痕が残る。端部は丸く仕上げ、橙色を呈し、径3mm程度の砂粒を含む。底部外面は煤が付着している。

15は皇宋通寶である。初鋳年は1037年で、北宋銭である。かわらけや人骨とともに出土していることから墓などの再利用時に伴うものであろう。

16・17は寛永通寶である。江戸時代には原分古墳は山の神としての対象であり、それに伴うものであろう。

18は明治19年の半銭銅貨である。19は大正10年の五銭銅貨である。

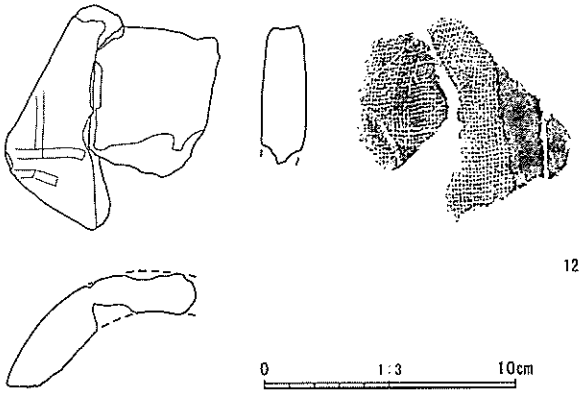


図96　瓦

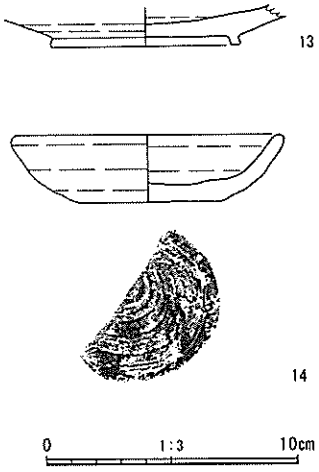


図97　古代以降の土器

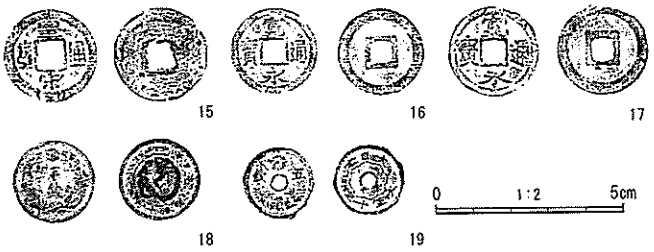


図98　銭　貨

参考文献

日本文献

青木　敬　2004　「横穴式石室と土木技術」『古墳文化』創刊号

安藤鴻基　1990　「千葉県成田市瓢塚40号墳の資料吟味」『房総風土記の丘年報』13

池田満雄　1954　「出雲上島古墳調査報告」『古代学研究』第10号　古代学研究会

伊藤寿夫　1992　『賤機山古墳 平成３年度保存整備事業発掘調査概報』静岡市教育委員会

伊藤寿夫　1996　「史跡賤機山古墳の保存整備」『ふちゅ～る』№４　静岡市教育委員会

稲垣甲子男　1975　『駿河山王』富士川町教育委員会

稲垣甲子男　1994　『室野坂古墳群静岡県富士川町室野坂古墳群第１次調査報告書』富士川町教育委員会

井鍋誉之（編）　2001　『富士川SA関連遺跡』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

井鍋誉之　2003　「富士川西岸～箱根山西麓地域」『研究紀要』第10号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

井鍋誉之　2003　「静岡県内の飾り弓について」『研究紀要』第10号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

植松章八（編）　1976　『中里大久保(K)第95号墳』富士市教育委員会

臼杵　勲　1984　「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号　古墳文化研究会

臼杵　勲　1985　「古墳出土鉾の分類と編年」『日本古代文化研究』２号　古墳文化研究会

大久保奈奈　1995　「イモガイと飾り鋲」『古代探叢Ⅳ』早稲田大学出版部

大谷晃二（編）　1996　『黄金に魅せられた倭人たち』島根県立八雲立つ風土記の丘資料館

大谷　猛　1985　「日本出土の「鑣轡」について」『論集日本原史』吉川弘文館

大谷宏治・西澤正晴　2001　「東海の後期古墳データベース（CD)」『東海の後期古墳を考える』　第８回
東海考古学フォーラム三河大会実行委員会

大谷宏治　2003a　「地域区分、時期区分と鉄鏃分類」『研究紀要』第10号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷宏治　2003b　「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鏃の変遷とその意義」『研究紀要』第10号
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷宏治　2004　『大屋敷Ｃ古墳群・大屋敷1号窯』第1分冊

大谷純仁ほか　1971　『掛川市宇洞ケ谷横穴墳』掛川市教育委員会

岡林孝作　1995　「木棺系統論-釘を使用した木棺の復元的検討と位置づけ-」『橿原考古学研究所論集』10

小野真一　1973　『大仁町の古墳文化（付）大仁町の弥生文化』大仁町教育委員会

小野真一　1976　『石川古墳群第三次発掘調査報告書』加藤学園沼津考古学研究所

岡安光彦　1985　「いわゆる「素環の轡」について―環状鏡板付轡の型式学的分析と編年―」『日本古代文化研究』第1号
古墳文化研究会

岡安光彦　1985　「環状鏡板付轡の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』第２号　古墳文化研究会

岡安光彦　2003　「馬具生産と流通の諸画期」『武器生産と流通の諸画期』七世紀研究会

奥村清一郎（編）　1983　『湯舟坂2号墳』久美浜町教育委員会

折原洋一　1997　「房総地域における有窓（孔）鍔について」『倉田芳郎先生古稀記念論集生産の考古学』　同成社

鏡山　猛（編）　1958　『沖ノ島』宗像大社復興期成会

樫村友延　1988　『小申田横穴群』（財）いわき市教育文化事業団

勝部明生ほか　1990　『斑鳩藤ノ木古墳　第一次調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所

金関恕・置田雅昭　1972　『下関市岩谷古墳発掘調査報告』山口県教育委員会

川江秀孝　1979「静岡県下の須恵器について」『須恵器―古代陶質土器―の編年』静岡県考古学会

川江秀孝　1992　「馬具」『静岡県史』資料編3　考古3　静岡県

川江秀孝　1992　「飾大刀」『静岡県史』資料編3　考古3　静岡県

河上邦彦　1984　『市尾墓山古墳』高取町教育委員会

河上邦彦（編）　1987　『史跡牧野古墳』広陵町教育委員会

菊池吉修　1998　『水掛渡Ｃ古墳群』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

菊地芳朗　1993　「東北地方における横穴の出現年代」『福島県立博物館紀要』７号

菊地芳朗　2003　「装飾付大刀からみた古墳時代後期の東北・関東」『後期古墳の諸段階』東北・関東前方後円墳研究会

木ノ内義昭　2001　「須恵器流入以降の土師器の様相－主として東平遺跡・沢東A遺跡出土遺物からー」
『東平遺跡第16（三日市廃寺跡）、第27地区発掘調査報告書』
古代の土器研究会　1997　『古代の土器５-１』７世紀の土器
後藤守一（編）1958『吉原市の古墳』吉原市教育委員会
小林三郎・熊野正也（編）　1976　『法皇塚古墳』市立市川博物館
古柳塚古墳研究会　2004　「古柳塚古墳の研究」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』12集
斉藤　弘　1985　「古墳時代の金属製壺鐙」『日本古代文化研究』第２号　古墳文化研究会
斉藤　弘　1986　「古墳時代の壺鐙の分類と編年」『日本古代文化研究』第３号　古墳文化研究会
（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所2003『研究紀要』第10号
静岡市教育委員会（編）　1997　『甦る賤機山古墳』静岡市教育委員会
志村　哲　1993　『平井地区１号古墳』　藤岡市教育委員会
志村　博　1981　『西富士道路（富士地区）・岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書　横沢古墳・中原１号墳・伝法遺跡群（伝法Ａ～Ｅ地区）天間地区』富士市教育委員会
志村　博　2003　『花川戸第２・３号墳発掘調査報告書』富士市教育委員会
関川尚功　1994　「大和東南部の大型横穴式石室について」『橿原考古学研究所論集』第十一　吉川弘文館
関沢　聡（編）　1990　『大塚古墳　南方古墳　南方遺跡』松本市教育委員会
杉山秀宏　1988　「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第八　吉川弘文館
鈴木一有　1998　『宇藤坂古墳群』（財）浜松市文化協会
鈴木一有　2007　「東海の横穴式石室にかんする分布と伝播」『近畿の横穴式石室』横穴式石室研究会
鈴木敏中　2000　『夏梅木遺跡群』三島市教育委員会
鈴木敏則　2004　「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』浜松市教育委員会
鈴木直人　1991　「墳丘構造と石室の構築について」『大室古墳群』上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書3-長野市その1-（財）長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書13　長野県教育委員会
鈴木裕篤　1990　『清水柳北遺跡発掘調査報告書』その２　沼津市教育委員会
田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ
田辺昭三　1981　『須恵器大成』角川書店
東京国立博物館　1980　『東京国立博物館図版目録　古墳遺物編（関東Ⅰ）』
野沢昌康（編）　1976　『天神のこし古墳』春日居町教育委員会
坂　靖（編）　1994　『平林古墳』當麻町教育委員会
高橋　満（編）　2002　『弘法山のよこあな』　福島県文化財センター白河館
滝口　宏（編）　1952　『上総金鈴塚古墳』早稲田大学考古学研究室
滝沢　誠　1999　「平沢古墳群出土胡?」『沼津市史研究』９沼津市教育委員会
滝沢　誠・西澤正晴　2000　「井田松江18号墳出土の象嵌刀装具類について」『井田松江古墳群』　静岡県戸田村教育委員会
瀧瀬芳之　1984　「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号　古墳文化研究会
瀧瀬芳之　1986　「円頭大刀・圭頭大刀の編年と佩用者の性格」『考古学ジャーナル』266号
瀧瀬芳之　1991　「大刀の佩用について」『埼玉考古学論集』埼玉県埋蔵文化財調査事業団
田中彩太　1978　「古墳時代木棺に用いられた緊結金具」『考古学研究』第25巻第２号
田中新史　1979　「古墳出土の飾り弓-鋲飾弓の出現と展開-」『伊知波良』1伊知波良刊行会
田中新史　2006　「野間古墳出土遺物の検討」『古墳の在り方』土筆９
田辺昭三　1966　『陶邑古窯址群Ⅰ』平安学園考古クラブ
田辺昭三　1981　『須恵器大成』角川書店
千賀　久　2003「日本出土の「新羅系」馬装具の系譜」『東アジアと日本の考古学Ⅲ』同成社
千賀　久（編）　2003　『古墳時代の馬との出会い―馬と馬具の考古学―』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館
千賀　久　2003　「金・銀・金銅製品」『考古資料大観』第7巻　小学館
千葉県　2002　『千葉県史編さん資料　印旛郡栄町浅間山古墳発掘調査報告書』千葉県
土橋理子ほか　2003　『天理市ハミ塚古墳発掘調査報告書』奈良県文化財調査報告書　第102集　奈良県橿原考古学研究所

汀　安衛（編）　1981　『常陸梶山古墳』　茨城県大洋村教育委員会
東海古墳文化研究会　2006　『東海の馬具と飾大刀』
徳江秀夫（編）　1999　『綿貫観音山古墳Ⅱ　石室・遺物編』群馬県教育委員会
冨田和気夫2001　「まとめ」『史跡須曽蝦夷穴古墳Ⅱ』能登川町教育委員会
冨田和気夫・関森香住ほか　2001　『史跡須曽蝦夷穴古墳Ⅱ』石川県能登川町教育委員会
新納　泉・光本　順（編）　2001　『定東塚・西塚古墳』岡山県北房町教育委員会
西澤正晴　2000　「井田松江18号墳出土の金銅装圭頭大刀について」『井田松江古墳群』静岡県戸田村教育委員会
西澤正晴　2002　「遠江・駿河における鉄製板鐔の変遷と展開」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』９号
西　弘海　1978　「土器の時期区分と型式変化」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱ』奈良国立文化財研究所
西　弘海　1982　「土器様式の成立とその背景」『考古学論考』
萩野谷悟　1988　「埋没溝を有する古墳について」『竜角寺古墳群第101号古墳発掘調査報告書』千葉県教育委員会
萩原恭一（編）　1994　『山武町胡摩手台16号墳発掘調査報告書』千葉県教育委員会
橋本博文　1993　「亀甲繋鳳凰文象嵌大刀再考」『翔古論集』久保哲三先生追悼論文集刊行会
土生田純之　1994　「横穴式古墳構築過程の復元」『専修史学』第26号
樋口隆康（編）　1967　『和歌山県文化財学術調査報告』第二冊　和歌山県文化財研究会
平石　充　2005　「文献からみた装飾付大刀の機能とその分布」『装飾大刀と後期古墳』島根県教育庁古代文化センター・
　島根県教育庁埋蔵文化財センター
平林将信　1987　『船津寺ノ上　第1号墳』富士市教育委員会
平野吾郎　1976　「家形石棺について」『大師山横穴群』静岡県伊豆長岡町教育委員会
前園実知雄（編）　1995　『斑鳩藤ノ木古墳第二次・三次調査報告書』奈良県立橿原考古学研究所
間壁忠彦ほか　1974　「王墓山遺跡群」『倉敷考古館集報』10
増田一裕　2004　「家形石棺の基礎的分析(下)」古代学研究164　古代学研究会
松本岩雄（編）　1987　『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会
松本岩雄（編）　1999　『上塩冶築山古墳の研究』島根県古代文化センター
松本浩一・石塚久則　1983　『奥原古墳群』群馬県埋蔵文化財調査事業団
町田　章　1970　「古代帯金具考」『考古学雑誌』56－1
右島和夫　2003　「横穴式古墳の構築過程を調査する-群馬県富岡市田篠遺跡1号墳-」『古墳構築の復元的研究』雄山閣
宮坂光昭　1973　「茅野市大塚古墳について」『長野県考古学会誌』７
宮代栄一　1986　「古墳時代雲珠・辻金具の分類と編年」『日本古代文化研究』第３号　古墳文化研究会
宮代栄一　1989　「いわゆる貝製雲珠について」『駿台史学』第67号
宮代栄一　1996　「古墳時代の金属装鞍の研究」『日本考古学』第３号
宮代栄一　1997　「島根県上島古墳出土馬具の再検討」『島根県考古学会誌』第14集
望月薫弘・若尾俊平（編）　1968　『駿河池田山古墳』静岡英和女学院
望月薫弘・手島四郎（編）　1962　『駿河丸山古墳』静岡市教育委員会
八木勝行ほか（編）　1980　『原古墳群白砂ケ谷支群』藤枝市教育委員会
山内昭二（編）　1975　『伊豆柏谷横穴』静岡県文化財保存協会
山村　宏・向坂鋼二・平野和男 1966　「出土須恵器の編年」『大沢・川尻古窯調査報告書』湖西文化研究会
山本恵一　1995　「静岡県下の６～７Ｃの土師器-駿河東部・伊豆北部の現状について-」『東国土器研究』４号　東国土器研究会
吉田文孝ほか　2001　「荒田目条里遺跡」いわき市教育委員会
米田文孝　1987　「群馬県藤岡市出土馬具考―鐘形杏葉を中心に―」『文化史論叢』横田健一先生古稀記念会
渡井義彦（編）　1988　『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』富士市教育委員会

韓国文献

国立清州博物館　1990　『三国時代　馬具特別展』
崔仁善・李順葉　2005　『光陽馬老山城Ⅰ』順天大学校博物館
金健洙ほか　2004　『潭陽大峙里遺蹟』（財）湖南文化財研究院

第３章　原分古墳の評価

原分古墳にみる古墳構築過程の復元

井鍋　誉之

1　はじめに

原分古墳の調査では、移築を前提とした解体調査を実施した。古墳の盛土はすべて除去し、側壁も解体したことにより、古墳構築に関わる幾多の造作が確認できた。

横穴式石室の研究は、形態や構造の差異をもとに、各地で編年作業が進められ、石室伝播の過程や地域間交流の実態が明らかにされてきた。また、近年、研究の視点は、儀礼や古墳構築過程にも向けられている。古墳構築に関わる研究は個別の報告内で扱われることが多いが、横穴式石室を主体とする古墳構築に関わる普遍化への試みとして土生田純之の研究が挙げられる。土生田は墳丘内に埋没している列石に注目し、墳丘構築と石室構築が同時に行われていることを明らかにした（土生田1994）。本稿では、土生田の整理に導かれながら、墳丘構築と石室構築の関係性を念頭におき、原分古墳の構築過程を復元したい。

2　原分古墳の概要

原分古墳は、直径17m、高さ２mの円墳である。主軸はN－19°－Wを示し、やや南北に長い楕円形を呈する。左側壁側から奥壁側にかけての墳端には幅1m前後の平坦部が巡っており、墳丘は截頭円錐状の墳丘側面観を呈している。周溝は浅く、幅1.2m、深さ0.3mである。

横穴式石室の規模は、長さ7.5m、幅1.7m、高さ2.0mである。ハ字形に開く前庭側壁もち、この部分を含めると全長10.4mに及ぶ。開口部に框石状の大型の石材が据えられ、玄室床面は開口部より一段低く下がる構造の無袖式石室である。石室内から出土した遺物から、７世紀中葉の早い頃（遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉／飛鳥Ⅱ期／TK217型式期）に築造されたと考えられる。

使用石材　原分古墳の横穴式石室に用いられた石材は、玄武岩、硬質玄武岩、多孔質玄武岩の３種に分類できる。これらの石材は古墳近隣の黄瀬川河床に転石として散在しており、周辺から採取されたものと推測される。

石材強度は３種の石材の中で、多孔質玄武岩が最も弱く、側壁２段目に多用されていた。玄武岩を用いる石室は、駿河東部においては、富士川流域から富士山麓の範囲と黄瀬川流域の２箇所で認められる。その多くは開口部に段を有する無袖式石室に採用される。

天井石の推定重量は奥壁側から4.0ｔ、8.1ｔ、3.4ｔ、2.7ｔ、2.4ｔで、天井石総重量は合計で20.6ｔであった。また、壁体の主要石材もそれに匹敵する重量で、構造的に石室は安定した状態を示していた【第２部　構造解析編　pp.16-24】。

3　古墳構築過程の復元

原分古墳の構築過程を、墓域の確保から古墳の完成に至るまで、７項目に分けて解説する。墳丘の調査内容をふまえ、墳丘東西トレンチから側壁構築に伴う盛土工程を復元し、石室主軸トレンチでは前庭側壁構築に伴う盛土工程を復元する。横穴式石室構築にかんしては、現地調査で得られた知見と解体・復元の過程で明らかになった事実を踏まえ、側壁構築を下段（基底石・側壁１段目）、中段（側壁２段

目)、上段（側壁３段目）の３段階に分離して把握する。また、各段の側壁構築に伴う作業工程を、それぞれ、側壁構築１段階から３段階とする。側壁構築の段階ごとに、墳丘が拡大されていることが明らかになっており、墳丘盛土の工程にかんしても、側壁構築とあわせて記述する。

石材の先後関係については垂直方向の移動を基本とし、横目地を構築するという前提をふまえる。隅角ついては石材と石材が接する場合にのみ、先後関係をとらえることができる。ただし、この判断基準は石材が十分に接し合う場合に限られる。

（１）墓域の選定

古墳の築造には墓域の選定から始まる。原分古墳は黄瀬川扇状地上の扇央に近い安定した場所を選地している。古墳西側には比高差３ｍの低い河岸段丘があり、黄瀬川が南流する。東側には南東方向へ低く傾斜する低位段丘がある。

原分古墳は周囲を見渡せる場を選定している。同時代の集落は東側の低位の段丘上に展開しており、居住域とは完全に隔絶している。用地の選定にあたっては、標高が高く安定した場、大型の用材が入手しやすい場、集落と隔絶している場といった３つの条件が主眼に置かれている。この条件を満たしているのは、原分古墳とも近い長泉町下土狩西1号墳や長泉町土狩長塚古墳などであり、７世紀中葉（TK217型式期）に築造される大型墳に共通する。

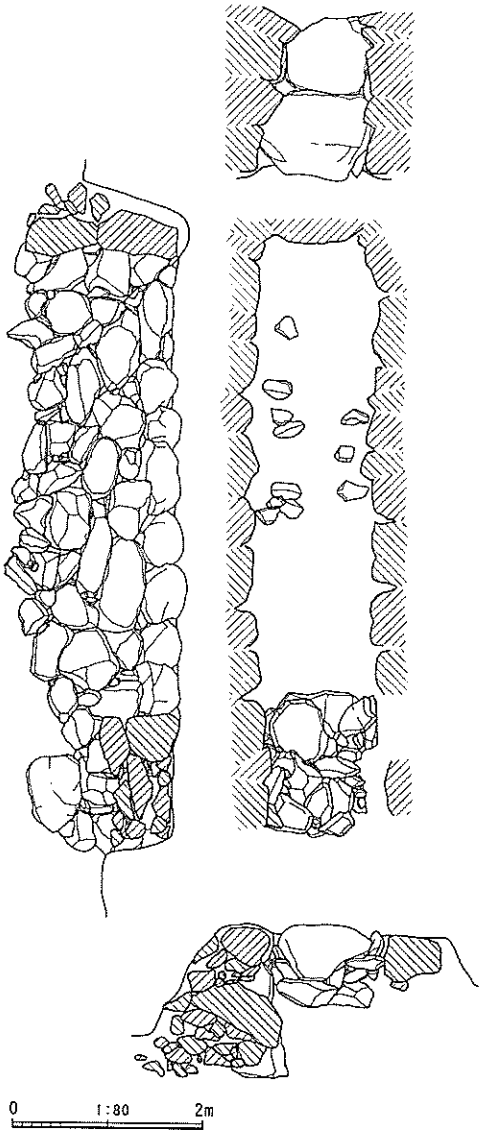


図１　沼津市虎杖原古墳

（２）墓坑掘削

墓坑の形状　長さ10.0ｍ、幅5.5ｍ、深さ0.6ｍの長方形の墓坑を表土上から掘削する。東京都熊野神社古墳（塚原・紺野編　2005）では、玄室床面下から小穴が検出されており、石室の中軸線を示す基準杭の跡と捉えられている。古墳を築造する際には、石室の位置を示す何らかの基準が設置されたと想定できるが、原分古墳では石室周辺において、このような基準を示す痕跡は確認できなかった。

墓坑は、表土から60cm掘削したところで砂岩凝結層に達する。この層は非常に硬質の地盤である。墓坑の深さは基底石の高さに足りていない。墓坑底面には、基底石を据えるために硬質の岩盤を刳り抜き、安定的に石を据える造作がみられた。基底石を据えた痕跡には、布掘り状の溝や、単独で石材を据える穴がみられる。奥壁の据付痕跡は墓坑底面のなかで最も深く掘り込まれていた。框石状の大型石材下部分でも据付痕跡が確認された。

墓坑の深さ　立地条件にもよるが、駿河東部における無袖式石室は、墓坑を深く掘りこみ、地下式構造である場合が多い。沼津市虎杖原古墳（笹原2003）が典型例として挙げられる。虎杖原古墳は、愛鷹山麓に位置し、原分古墳と同様に開口部に段を有する石室である。虎杖原古墳の墓坑は石室規模と比べて、約１ｍと深く、すべての側壁が墓坑内におさまる。天井石は墓坑上面に架けられ、盛土量は少ない構造である。こうした東駿河に一般的な墓坑形状、盛土量と比べ、原分古墳の墓坑は浅く、墳丘の盛土量は多いと評価できる。

墳丘内埋没溝　墳丘東トレンチ、西トレンチ、北トレンチでは周溝より内側において、旧表土が途切れていた状況が確認できた。墳丘の内側の旧表土上に浅い掘り込みがあったことが分かる。この掘り込みは平面的に確認できなかったが、古墳築造当初に盛土の範囲や墳丘規模を規定する墳丘内埋没溝が掘削されていた可能性が指摘できる。

（3）側壁構築１段階

奥壁の設置　奥壁は一枚石で構成される。長さ2.2m、最大幅1.7m、奥行き１mの大型の石材を用い、ほぼ垂直に据えていた。石室の構築には、奥壁の設置が重要と思われる。奥壁は１枚石で構成されており、最初の段階で奥壁を立てる必要がある。原分古墳の立地環境は平坦地であるため、墓坑は奥壁側に張り出し、奥壁専用ともいうべき穴を掘削している。奥壁の設置は、この穴に落とし込むようにした可

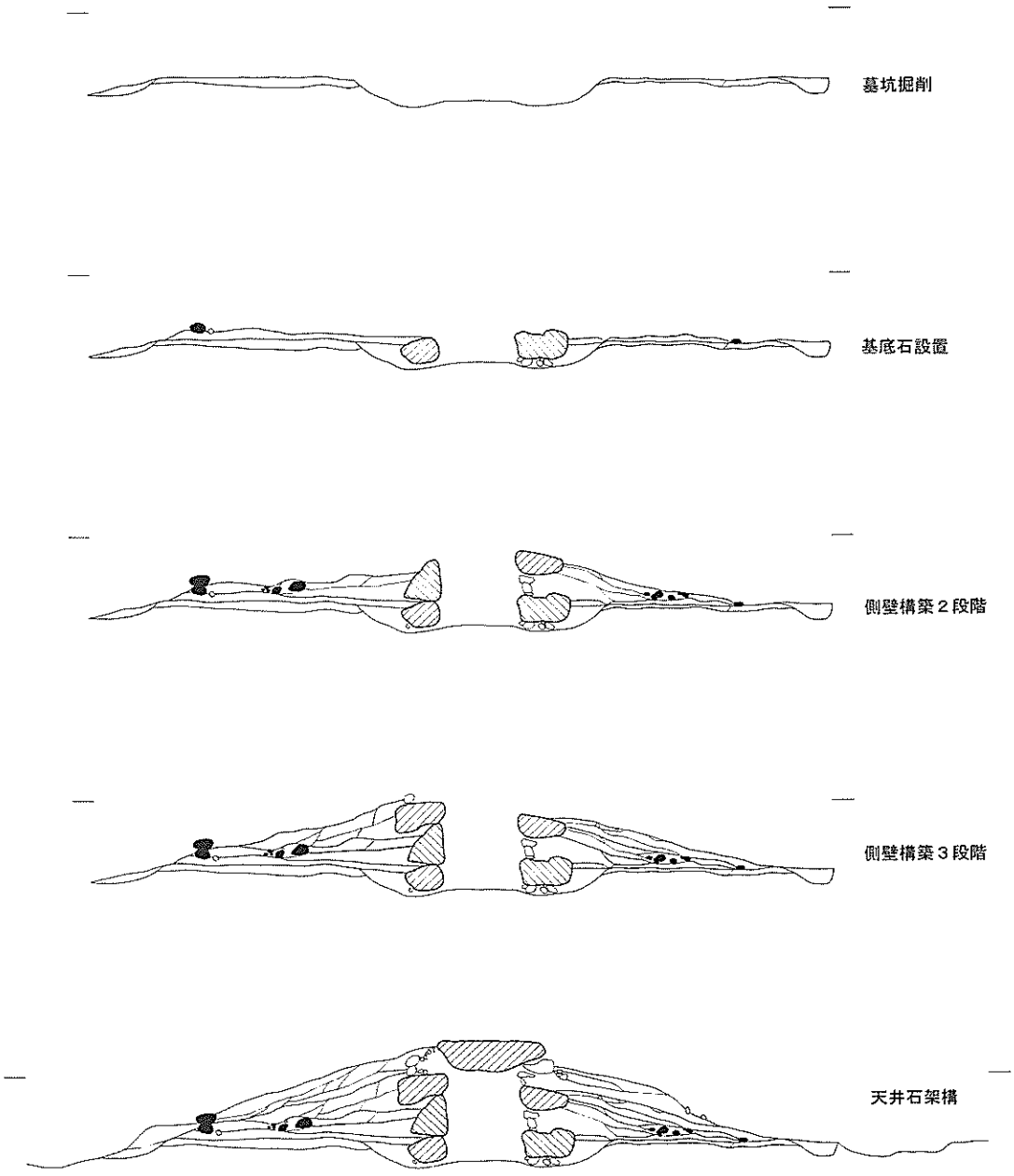


図２　墳丘盛土と指標石

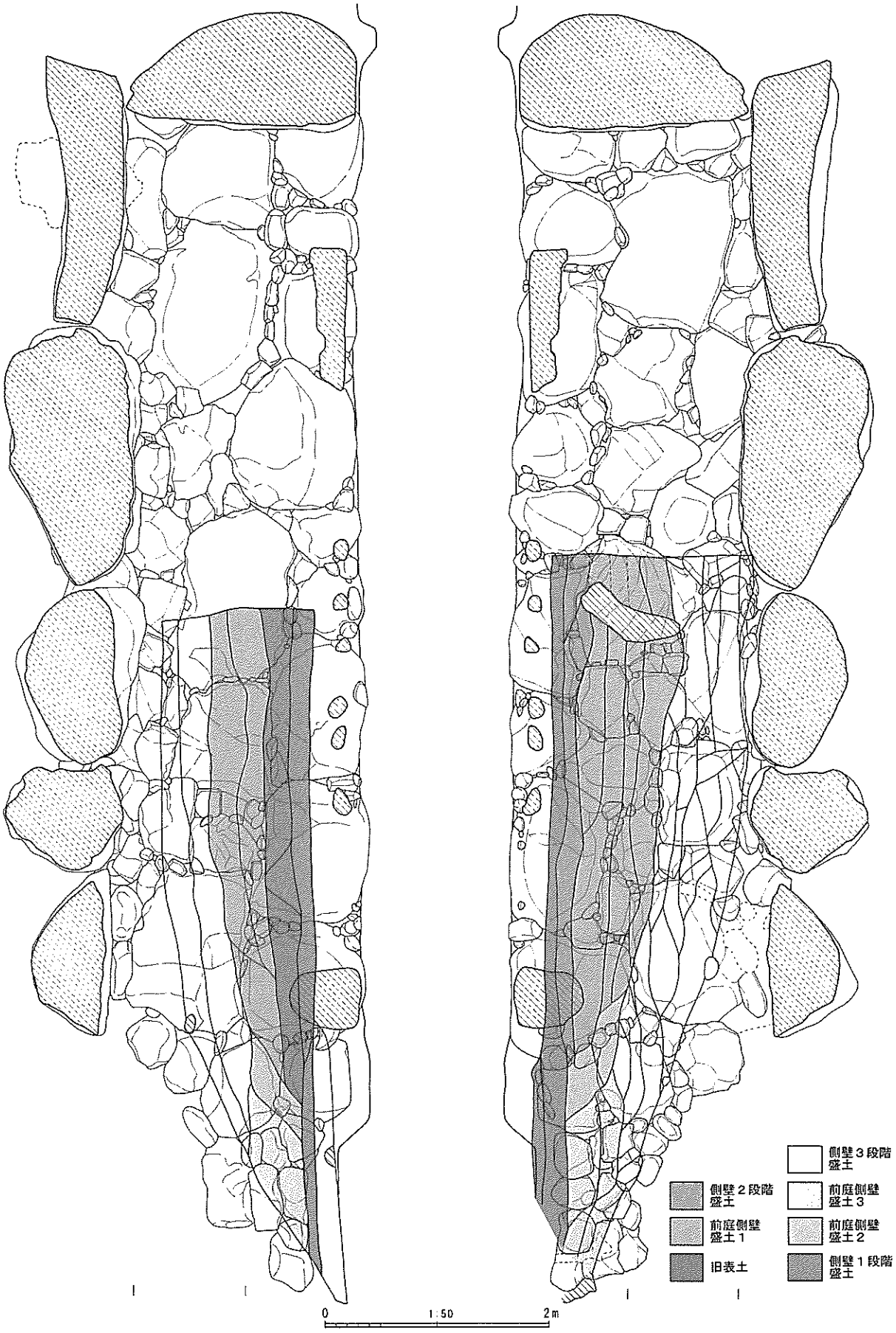


図３　前庭側壁と墳丘の関係

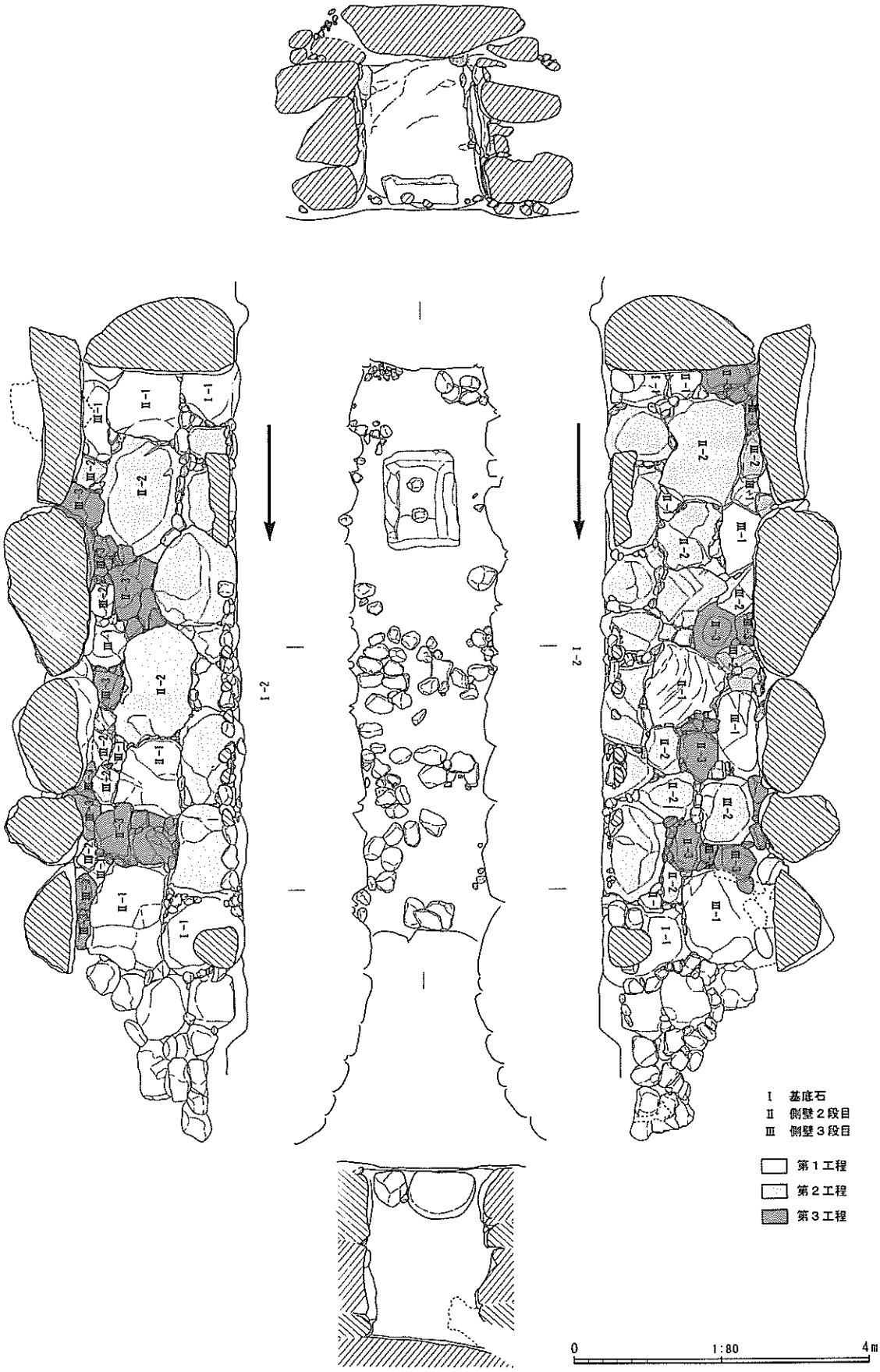


図４　壁体構築過程

能性が指摘できる。奥壁の設置後に、側壁の基底石を据えるため墓坑を拡張して長方形に整えた可能性がある。同様の事例は三島市田頭山1号墳（井鍋2004）においても確認することができる。

框石状の大型石材の設置　框石状の大型石材は墓坑内に配置される。框石状の大型石材は２石から構成され、広口に面を揃えて設置する。下部には側壁と同様に、据え位置を安定させるために小礫が用いられている。墓坑と框石状の大型石材の間の裏込めには礫が充填され、前庭側壁の基底部に揃えられる。開口部との段差は0.6mである。

側壁基底石の設置　右壁の基底石は９石が配される。そのうち奥側から４石目の石材のみがやや大型の石材を用いられる。それ以外は、標高35.6mから35.7mの高さにそろえ、開口部に向かってやや高くなる。基底石は、まず、奥壁寄りと開口部寄りに１石ずつ置き、次に、奥壁側から順に配置されている。

左側も基底石は９石で構成され、開口部の石材は大型の石材を用いている。基底石の高さは一定しており、その上面の高さは標高37.7mである。基底石の構築順序は右壁と同様である。

左右側壁の基底石下部には、拳大の石材や人頭大の石材が散見された。詰石を繰り返し据えながら、基底石の高さを調整し、目地を合わせた痕跡と思われる。縦の目地にも小型の石材が入っており、隣りあう基底石との高さの調整がなされている。石室構築にあたり、最も手間のかかる工程と思われる。

側壁構築１段階の盛土　基底石の設置後、墓坑内を埋め、石材の上面まで土を盛っている。墓坑埋土内には礫を用いず、粘性やしまりが弱い黒褐色土を充填している。墓坑を埋めた後には、旧表土上に高さ10cmにわたり墳丘を水平に盛っている。墳丘東・西・北のトレンチで土層断面を確認する限り、水平盛土された土層は、墓坑端から、埋没溝が想定できる旧表土が途切れる部分までしかみられない。この段階の盛土は楕円形を呈し、平坦である。

ここで注目されるのは、主に東側と西側において、水平に盛土をした後、初期盛土の裾部に人頭大の礫を設置していることである。この礫は、墳丘内石列のように精美に巡らせているわけではないが、１個から数個程度のまとまりがある。各工程における盛土範囲を示す指標石（註１）としての性格を有していたと考えられる。

（４）側壁構築２段階

側壁２段目の設置　側壁２段目の右壁は大型石材５石と小型石材から構成される。目地は比較的通っており、開口部にむけて、やや斜め上方に延びている。奥壁から３石目、６石目には小型の礫を積み上げており、目地の調整が図られている。左壁は大型石材３石と小型石材から構成される。目地は開口部に向かって低く傾斜していた。側壁構築２段階では石材の上下関係から、側壁の積み上げ工程がうかがえる。

右壁２段目構築順序　右壁２段目の構築は、以下に示す①～③の石材積み上げ順序が復元できる。

① 奥壁から１石目、７石目、９石目を開口部先端部に石を配する。

② １石目、７石目の間隙に２石目、４石目を配する。２石目と４石目は大型の石材を用いる。

③ 奥壁から３石目は小型石材を用い、基底石上面で乱れていた目地の調整を図る。

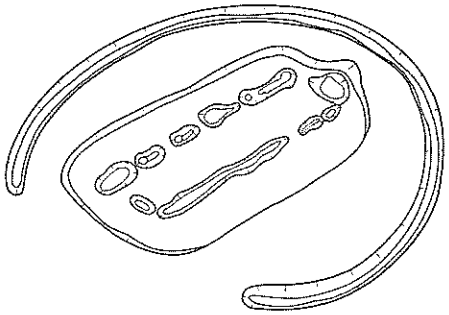
左壁２段目構築順序　左壁２段目の構築においても、同様に①～③の石材積み上げ順序が復元できる。

① 奥壁から１石目および、側壁中央に大型の石材を配する。

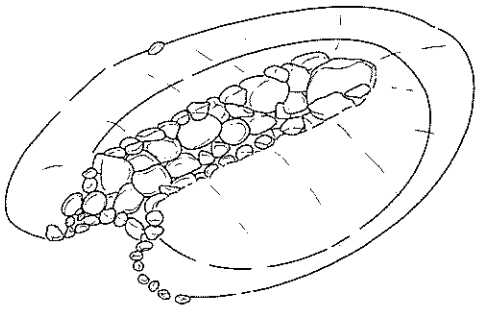
② 奥壁寄りでは２石目と奥壁の間隙に大型礫を配する。開口部側で小型の石材を配する。

③ 側壁中央で小型の礫を配し、目地の調整を図る。

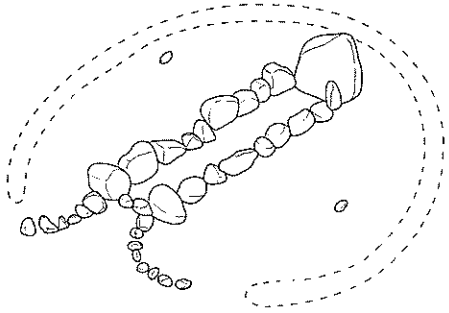
側壁２段目の特徴　側壁２段目においては、両側壁とも、大型石材を開口部、中央部、奥壁側に設置し、その間隙を埋めるためにやや小型の石材を用いている。この造作は、大型石材を連続して構築する



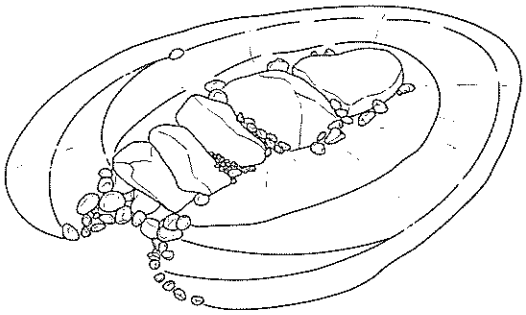
1　墓坑掘削　埋没溝掘削



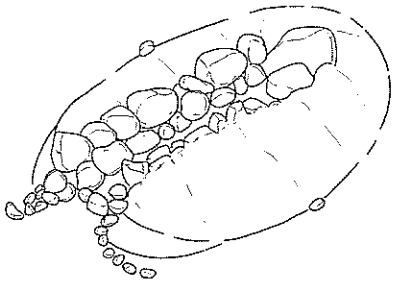
4　側壁構築３段階



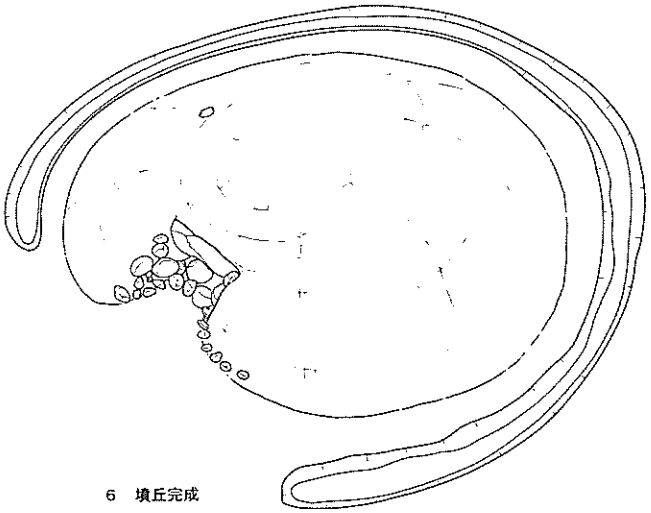
2　基底石設置　指標石設置



5　天井石架構



3　側壁構築２段階



6　墳丘完成

作図　平塚智久

図５　原分古墳構築の復元

よりも、細部が調整可能な小型の礫を用いる利点があり、効率的である。また、側壁の目地の通り具合から、右側壁が左側壁より丁寧に石材が積まれていたと評価できる。

前庭側壁　側壁構築２段階から、開口部に接する前庭側壁を構築する。墓坑は前庭側壁の最後部を含む範囲まで掘削するが、前庭側壁は墓坑が埋められた後に設置する。前庭側壁の基底石は左側壁で８石、右側壁で５石確認している。玄室の側壁と接する前庭側壁は大型の石材を用い、それより前では小型の石材を小口積み、横口積みにして設置している。

側壁構築２段階の墳丘盛土　側壁構築２段階に伴う墳丘は、石室主軸から東西４ｍ～4.5ｍの位置に据えた指標石を境界に、細かく丁寧に盛土をする。石室北側では指標石は認められないが、東西方向の裾と合わせて丁寧に土を盛る。

側壁構築２段階時における墳丘盛土は、しまりの強い褐色土や暗褐色土を丁寧に積み上げ、前庭部にはしまりの弱い暗褐色系、黒褐色系の土が用いられていた。この段階の墳丘は小墳丘状で楕円形である。

前庭部の盛土（図４）　原分古墳ではハ字形に開く前庭側壁が設置されており、石室主軸トレンチにおいて盛土との関係を確認することができた【本報告　p.23】。前庭部の盛土は、前庭側壁の構築とともに積み上げていく。玄室側壁と前庭側壁は傾斜角度や積石法が異なるものの、盛土は外護列石に向かって土を貼り付け、徐々に墳丘規模を拡大していく造作が認められた。前庭側壁の基底石間には縦方向の目地あきが確認されており、玄室側壁構築ほど強固に盛土との関連性はうかがえない。しかし、側壁構築２段階時には前庭側壁の構築・盛土が、玄室側壁の構築と連動していたことを指摘できる。なお、前庭側壁の設置はこの段階でほぼ終了している。

左側前庭部の盛土　左側前庭部では、玄室左壁２段目を構築した後に前庭側壁構築に伴う盛土が確認された。前庭部の盛土は、大きく３単位に区分でき、玄室側壁と前庭側壁との境には土層の変換点が確認できる。前庭部盛土の２単位目では、開口部列石まで徐々に盛土を貼り付け、墳丘規模を拡大している様子がうかがえた。前庭部盛土の３単位目では、玄室側壁の盛土との一体化をはかるための盛土が被覆されていた。

右側前庭部の盛土　右壁前庭部では、左壁と同様に側壁開口部と前庭側壁の境に土層の変換点が確認できた。右側前庭部の盛土は大きく２単位に分離できた。側壁構築２段階の右側前庭部盛土は、前庭側壁構築に伴い、徐々に土を貼り付け、墳丘規模を大きくしている。右側前庭部において玄室側壁と前庭側壁を一体化する工程は、この段階ではみられず、側壁構築３段階時に実施されている。

（５）側壁構築３段階

側壁３段目の設置　側壁構築３段階では、側壁最上段（３段目）に石材を積み、天井石が乗せられる状態にする。天井石を架構するために、やや小振りで扁平な石を用いて上端を揃えながら調整していく造作がみられた。側壁３段目においても、側壁２段目と同様に、奥壁側、開口部、中央に小型石材を配し、その間隙を埋めていく様子がうかがえた。また、石材の上下関係から、以下に示すような積み上げ工程がうかがえる。

右壁３段目構築順序　右壁３段目の構築は、以下に示す①～③の石材積み上げ順序が復元できる。

① 側壁２段目の１石目と２石目の間、３石目と４石目の間、４石目と５石目の間、６石目と７石目の間に礫を配する。

② ①で積まれた石材の間隙に小型の礫を配していく。

③ さらに、その間隙に小型石材を配する。

左壁３段目構築順序　左壁３段目の構築においても、同様に①～③の石材積み上げ順序が復元できる。

① 指標となる大型石材を奥壁、石室中央、開口部にそれぞれ配する。

② ①で設置した大型石材の周囲にやや小型の石材を配する。

③　小型石材を配し、間隙部分を埋め、高さの調整を図る。

側壁構築3段階の墳丘盛土　側壁構築3段階に伴う墳丘盛土は、先述の側壁構築2段階時の盛土と異なり、厚く、しまりの弱い盛土を用いていた。この段階の盛土は、外護列石まで被覆し、墳丘規模を大きくしていく様子がうかがえた。奥壁裏側も同様である。

（6）天井石架構

天井石の設置順序は明確ではないが、開口部側から順に天井石を架けていったと推定する。天井石と側壁上面の間には小礫が散見できる。天井石を上から架ける段階に石を差込みながら微調整をした結果と捉えられよう。このため、天井石の架構には地面を引きずるようにしたのではなく、側壁最上段との空間が確保される工程が想定される。ただし、側壁3段目の上面は比較的平坦であるため、調整作業にそれほど時間はかからなかったと推測される。むしろ、基底石下面における小礫の多さから考えると、側壁構築のなかでは、基底石の設置が最も念入りな調整作業であるといえる。

天井石の架構後、隣り合う天井石の境には隙間ができることから、細かい礫を充填し、盛土の崩落を防止する。また、天井石のずれを防ぐため控えとして大型の石材を配置し、固定していく様子がうかがえた。

（7）墳丘の整備

原分古墳の墳丘盛土は、側壁の高さまでしか良好に残存していなかった。天井石上の土は、土質工学的に礫混りシルト質砂である。いわゆる黒ボク砂であるため、締め固め度は低い。さらに砂分を主体としていることから、石室保護の防水性が不足していたとされる。

原分古墳は、調査前から天井石が露出している状態であった。このため、本来、天井石の上に被覆されていた盛土は失われていた可能性が高い。調査時に確認した天井石上の土は、古墳に伴うものではなく、2次的に堆積したものと捉えられよう。推測の域は出ないが、天井石の上面には、粘土などの不透水層を被覆して、1次墳丘を構築したと想定される。また、石室の完成とともに、周溝を掘削しながら墳丘を整えていったと考えられる。

周溝の掘削は、盛土の確保や古墳周囲の排水、墓域を示す境界表示などさまざまな機能、用途を持ち合わせていると思われる。しかしながら、原分古墳の周溝は浅く、盛土の確保という点では、明らかに土量が不足している。墳丘の土は、大半が周溝以外から確保されたといえよう。

原分古墳の墳丘の完成形は、周溝の内側に幅1mの平坦部があり、天井石を被覆する程度に土が盛られた状態であったと考えられる。

4　結　語

原分古墳の解体調査を通じて古墳の構築過程の復元を試みた。今回は墳丘内に存在する指標石、側壁にみられる指標石、前庭側壁を手がかりに石室構築と墳丘構築が連動して行われていることを確認した。さらに側壁構築において大型石材を指標に2～3区画に区別し、その間隙を埋めていく様子がうかがえ、小単位を抽出することができた。

従来では墳丘内の列石や精美に巡る外護列石の存在から石室構築と墳丘構築の関連が捉えられてきた。原分古墳ではそのような列石は認められなかったが、墳丘内にみられる礫（指標石）の存在からも石室構築と墳丘構築が捉えられることができた。

前庭側壁の構築は少なくとも墓坑内に埋土をした後に行っていた。前庭側壁と側壁とでは傾斜角度や積石法が異なることから小工程に分離できるものの、側壁構築と連動して構築されたものと推測できる。側壁に伴う盛土と前庭側壁の盛土も同様に、複数の工程に分けられ、盛土を貼り付けることにより墳丘規模を拡大していく様子がうかがえた。

残念ながら家形石棺の設置が石室の構築途上なのか、石室完成後かは明確にできなかった。また、天井石より上部の構造は不明であり、墳丘の完成形態は不明瞭である。

当地域では虎杖原古墳例にみられるように、墓坑を深く掘り込み、墳丘盛土を極力少なくする方式の古墳築造法が基本である。この工法は、群集墳においては簡便かつ合理的な古墳築造法として捉えることが可能である。虎杖原古墳と原分古墳は同一形態の石室でありながらも、墓坑の深さ、盛土量に差異が見出せる。原分古墳は7世紀中葉に構築された古墳として、墳丘規模・石室規模が群を抜いている。原分古墳の墓坑は浅く、墳丘盛土量も他の古墳と比べると圧倒的に多い。巨石を用いている点からも墳丘、石室構築に関わる専門の工人集団が従事していた可能性が高いだろう。

原分古墳の石室形態は無袖式石室で、開口部に段を有するという地域性が強いものであった。しかし、巨石使用、多くの盛土構築とういう観点にたてば、倭王権との技術的な連携なくして原分古墳は構築されなかったであろう。原分古墳から出土した豊富な副葬品は、その可能性を強く示している。

本稿で示したような、墳丘と石室との一体性という視点で横穴式石室の調査を行えば、壁体構築技術や盛土工法など、さらに細部にわたる工程も復元が可能である。巨石を用いる横穴式石室の構築技術は、未だ不明な点が多く、さらなる事例の蓄積が必須である。原分古墳と倭王権や他の有力首長層とのかかわりについても、畿内中枢部をはじめ他地域における大型石室との比較検討を通じて、より具体性が帯びるといえよう。

註

1　指標石とは石室構築段階において墳丘内にみられる礫や壁体において基点となる大型の石材を指す。

参考文献

青木　敬　2004　「横穴式石室と土木技術」　『古墳文化』　創刊号

井鍋誉之　2004　『田頭山古墳群』　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

金関恕・置田雅昭　1972　『下関市岩谷古墳発掘調査報告』　山口県教育委員会

菊池吉修　2008　「駿河における無袖式石室」　『東国に伝う無袖式石室』　静岡県考古学会

菊池吉修　2005　「横穴式石室の裏込めにみる地域性―駿河の事例」　『研究紀要』第11号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

菊池吉修　2004　「外護列石をもつ古墳-静岡県の事例-」　『財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年記念論文集』　（財）　静岡県埋蔵文化財調査研究所

笹原千賀子　2003　『寺林遺跡・虎杖原古墳』　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

鈴木一有　1998　『宇藤坂古墳群』　（財）浜松市文化協会

鈴木直人　1991　「墳丘構造と石室の構築について」『大室古墳群』上信越自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書３-長野市その１-　（財）　長野県埋蔵文化財センター発掘調査報告書13　長野県教育委員会

関川尚功　1994　「大和東南部の大型横穴式石室について」　『橿原考古学研究所論集』第11　吉川弘文館

塚原二郎・紺野英二（編）　2005　『武蔵府中熊野神社古墳』　府中市教育委員会・府中市遺跡調査会

津曲大祐　2004　「博多湾沿岸地域の石室構築技術-後期古墳を中心に-」　『福岡大学考古学論集小田富士雄先生退職記念』　同事業会

土生田純之　1994　「横穴式古墳構築過程の復元」　『専修史学』第26号

萩野谷悟　1988　「埋没溝を有する古墳について」　『竜角寺古墳群第101号古墳発掘調査報告書』千葉県教育委員会

右島和夫　2003　「横穴式古墳の構築過程を調査する-群馬県富岡市田篠遺跡1号墳-」　『古墳構築の復元的研究』雄山閣

原分古墳における埋葬と儀礼

田村　隆太郎

1　はじめに

静岡県長泉町の黄瀬川東岸に位置する原分古墳は、墳丘直径17mの円墳である。調査によって、駿河東部では最大級の横穴式石室を埋葬施設とすること、家形石棺が用いられていること、7世紀の金銅装馬具や装飾付大刀を含む豊富な副葬品を伴うことなどが明らかになった。墳丘・石室や副葬品による被葬者像の検討は、上位にある階層的位置を証明するだけではなく、7世紀における黄瀬川流域の地域的特質にも言及することになると考える。

一方、原分古墳は追葬が可能な横穴式石室を埋葬施設としており、実際に数度の埋葬を把握することができる。ここでは、石室内・石室外の状況について整理し、そこで行われた埋葬と儀礼の過程を復元したい。そして、7世紀における黄瀬川流域の一有力墳について、古墳に伴う儀礼行為からみた性質について検討する。

2　石室内の破壊・埋没と残存

最初に、数度の埋葬や儀礼などの諸行為、さらに石室が埋没するまでの過程を復元するために、石室内の状態について把握する。なお、本稿で使用する石室の部分呼称は、図1のとおりとする。

床面の残存と石棺の破壊　石室床面上において、奥部や中央・前部に多くの副葬品が出土している。その出土状態をみる限りでは、片付けなどの移動の様子がうかがえるものの、大きな破壊や盗掘の影響は認め難い。また、床石や中央部の人骨の検出状態についても、同様に判断することができる。以上から、床面は数度の埋葬を経て形成された状態を概ね保っており、その後の撹乱・盗掘による破壊などはほとんどなかったと把握することができる。

ただし、石棺付近については、明確な破壊行為を確認することができる。本来は長さ2.4mの家形石棺が配置されていたと判断できる【本報告　pp.46-48】が、配置された状態で残存していたのは、棺身底面の奥寄り半分だけであった。その他の部分は粉々に破砕されており、残存部においても、穴が開けられるなどの破壊が及んでいた。粉々になった石棺の石材は、石室内にも少なからず残されていたが、大半は失われていた。さらに、破壊に伴う工具痕などが石棺に観察できることから、石材の入手を目的として故意に破壊した可能性が高いと判断できる。なお、石棺の周辺からは金銅製装身具や刀装具などの破片が散在した状態で出土している。石棺内については盗掘も確認することができる。

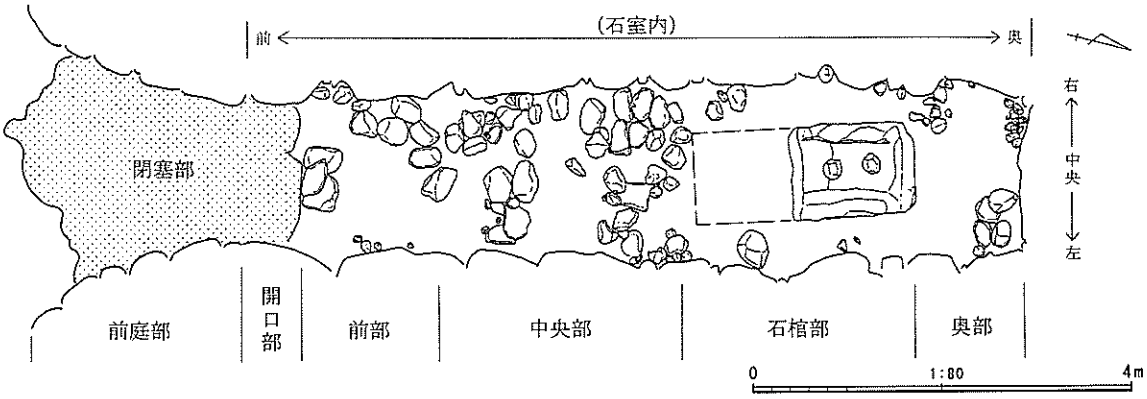


図1　石室床面の状況と部分呼称

遺物の出土と石室内埋没過程　図２において、石室内の遺物出土位置の立面分布と、７世紀代の遺物の出土状況平面図を示した。立面分布については、詳細な出土位置が特定できない遺物（篩いによって発見された遺物など）も多く、全ての遺物が示されているわけではないことから、厳密性には欠ける。しかし、この図が現地調査の所見と矛盾するということはなく、遺物出土の概ねの傾向は示していると理解できる。本稿では、この分布の粗密と後述する出土遺物の内容によって、石室内の埋没層位を上位・下位・床面上の３つに区分する。

床面上では、７世紀代の遺物が数多く出土している。しかも、平面図に示したように、残存状態は比較的良い。埋葬に伴う副葬と片付けなどの移動が行われた状態、すなわち横穴式石室が古墳の埋葬施設として機能していた頃の最終状態が保たれている可能性が高い。８世紀以降の遺物の出土はない。

下位では、前部や石棺部・奥部からの遺物出土が少なく、中央部からの出土にかたよる。さらに、床面上のように良好な残存状態で出土する遺物はほとんどなく、土器や金属器などの破片が散らばった状態であった。ただし、その内容は馬具・釘・歩揺や須恵器・土師器といった、７世紀代の副葬品で占められている。図4の中段から下段に、後述において副葬土器Ⅲ群とする中央部下位出土土器の出土分布を示した。石棺部前寄りの出土土器片と接合する場合が多いことから、本来は石棺の前あたりにあった土器が、石棺破壊に伴って壊され、中央部の下位に巻き上げられた可能性を考慮することができる。

上位では、若干の遺物とともに骨の出土が多い。人骨は床面上においても検出されているが、上位の人骨には破片化したものが多く、動物に噛まれた痕跡などが認められる。また、灰釉陶器や中近世の土器・銅銭、明治・大正期の硬貨の出土もあることから、平安時代から中近世に至る幾度かの再利用（埋葬など）を経て、近代にほぼ完全に埋まった可能性が指摘できる。

以上から、床面上は7世紀代の埋葬の状況（石棺は破壊）、下位は石棺破壊時の状況、上位は平安時代以降の再利用の状況が示されていると判断でき、層位的な埋没過程を把握することができる。

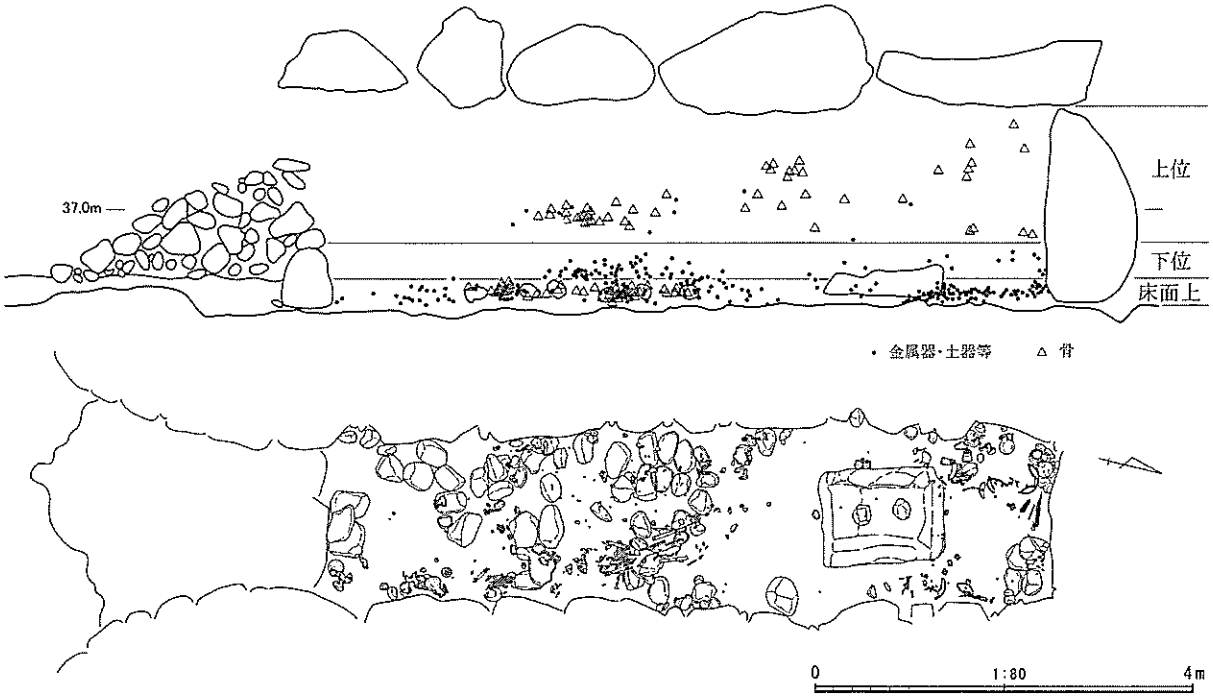


図２　石室内遺物出土状況

3　埋葬について

埋葬主体と棺　床面上にある7世紀代の埋葬主体（遺体）の痕跡として、中央部床面上の人骨をあげることができる（図3）。左側の前寄りに女性1人、奥寄りに男性2人、右側に小児1人の人骨が検出されている。小児の骨は把握し難いが、男女3人の骨は不自然に集められた状態であった。男性1人の頭骨には、床石と石材が異なる枕石が伴う。その一方で、男性の四肢骨は中央部左側の奥寄りに集積されており、2人の識別が不可能な状態であった。また、各人の骨は部分的な骨格に限られている一方、男性四肢骨群には獣骨の混在が確認できる【本報告　p.50】。石室の中央付近で検出されたことも含めて考えると、片付けによる集骨というよりも、改葬などによる埋葬があった可能性が評価できる。さらに、鉄鏃群が男性人骨の下から散らばった状態で出土していることから、この人骨が7世紀代における比較的新しい段階の埋葬であった可能性が考慮される。

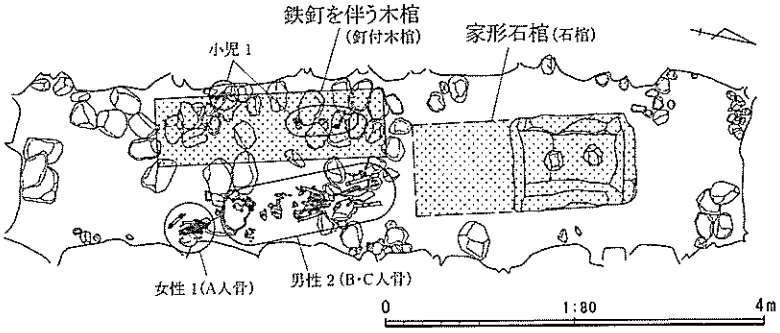


図3　埋葬主体の残存と棺の復元

棺については、先述の家形石棺のほかに、鉄釘の出土によって釘を伴う木棺（釘付木棺）があった可能性が指摘できる。出土位置が特定できる鉄釘は、中央部やや右寄りの下位に出土がある一方、床面上においては前部からの出土が確認できる。中央部右寄りには、本報告p.49で棺台石と評価している床石の多い範囲がある。また、この範囲には副葬品が少ない。以上から、中央部右寄りに釘付木棺が置かれた可能性が指摘できる（図3）。奥寄りに使用された鉄釘は、石棺破壊に伴って中央部下位に巻き上げられ、前寄りに使用された鉄釘は、7世紀代の間に崩落したと推察できる。なお、石室内における位置関係から、釘付木棺は石棺よりも後に持ち込まれたと判断することができる。

このように、7世紀代における原分古墳の埋葬については、①石棺による埋葬、②木棺による埋葬、③改葬による埋葬の3種を把握することができる。また、棺の配置や人骨の検出状況から、①→②→③の順序が指摘できる。埋葬①は1棺であり、1回の埋葬を基本とするが、同一棺へ追葬を考慮する必要もある。埋葬②については、鉄釘を伴う木棺1棺を復元したが、この木棺とは別に、中央部左寄りなどに鉄釘を伴わない木棺があった可能性もある。しかし、中央部左寄りの床石の配置に棺台の可能性が考慮されるものの、埋葬③の人骨やそれ以前の副葬品が多く検出されていることから、本稿では木棺があった可能性を積極的には評価しない。埋葬③は、3人分の埋葬主体が確認できるが、埋葬①・②とは大きく異なる埋葬方法であると評価でき、埋葬回数については埋葬主体より少ない可能性が高い。なお、埋葬②で述べた中央部左寄りの棺台状の石の配置について、男性2人の改葬に伴う木板や木棺などを置いた可能性は考慮される。また、小児は釘付木棺の範囲に検出されてはいるが、残存状態が悪い。釘付木棺（埋葬②）に伴う可能性については評価できない。

副葬品にみる埋葬数　石室内からは装身具や馬具・武器、さらに土器が多く出土しており、埋葬に伴う副葬と儀礼が行われたことがわかる。馬具や武器の詳細は【本報告　pp.53-63】などに詳しく述べているが、それらによると、馬具や大刀では時期の異なる2群の組成を把握することができ、鉄鏃は奥部に2つの束、中央部に奥部とは別の一群が抽出できる。また、馬具や大刀の出土状況に乱れがあることから、追葬に伴う片付けを指摘することもできる。このように、副葬品の分析によっても複数の埋葬があったことが把握されており、先述した埋葬の復元と矛盾することがない。一方、土器群の副葬についても、次に述べるように複数の埋葬を把握することができる。

副葬土器群の大別と時期　7世紀代の埋葬に伴うと判断できる土器の出土は、石室内、閉塞部（閉塞石内）、土器廃棄土坑、周溝および周溝外において確認することができる。さらに、副葬土器として評価できる石室内の土器については、前部を中心とした範囲の床面上から出土したものを副葬土器Ⅰ群、奥部を中心とした範囲の床面上から出土したものを副葬土器Ⅱ群、中央部の下位を中心にして出土したものを副葬土器Ⅲ群として大別することができる。なお、前寄りの上位からも若干の土器片が出土している。以上のように出土位置から分類できる土器（群）について、図4・図5に整理した。

副葬土器の時期については、まず、遠江須恵器編年（鈴木2004、註1）Ⅳ期前葉の土器とⅣ期後葉の土器に大別することができる。副葬土器Ⅰ群・Ⅱ群は前者で占められており、副葬土器Ⅲ群には後者が多い。さらに、副葬土器Ⅱ群が典型的な遠江Ⅳ期前葉の土器で占められているのに対して、副葬土器Ⅰ群には遠江Ⅲ期末葉にみられる特徴も見出すことができる。以上のように、土器群の違いに時期差を伴

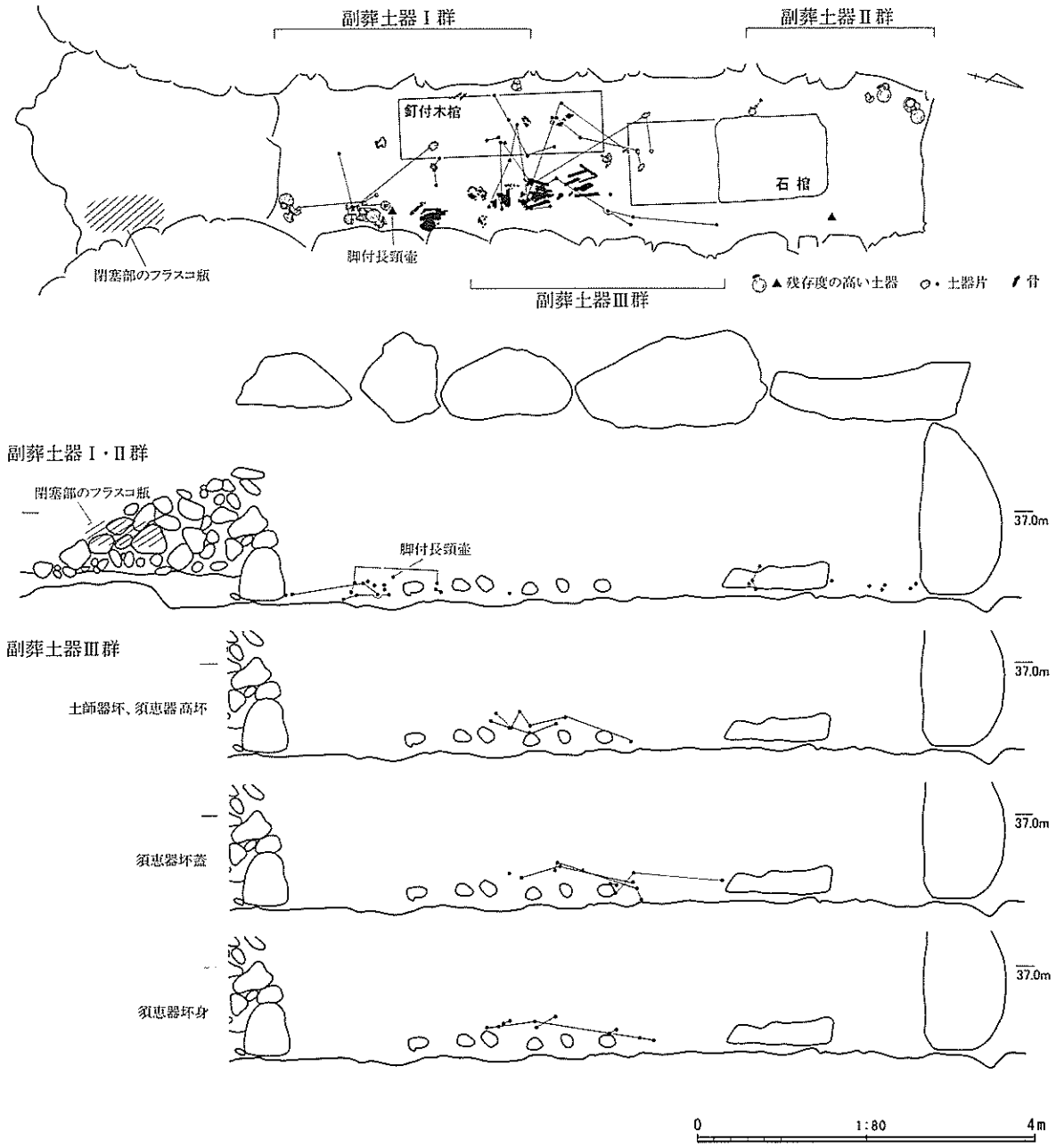


図4　副葬土器Ⅰ群～Ⅲ群の出土状況

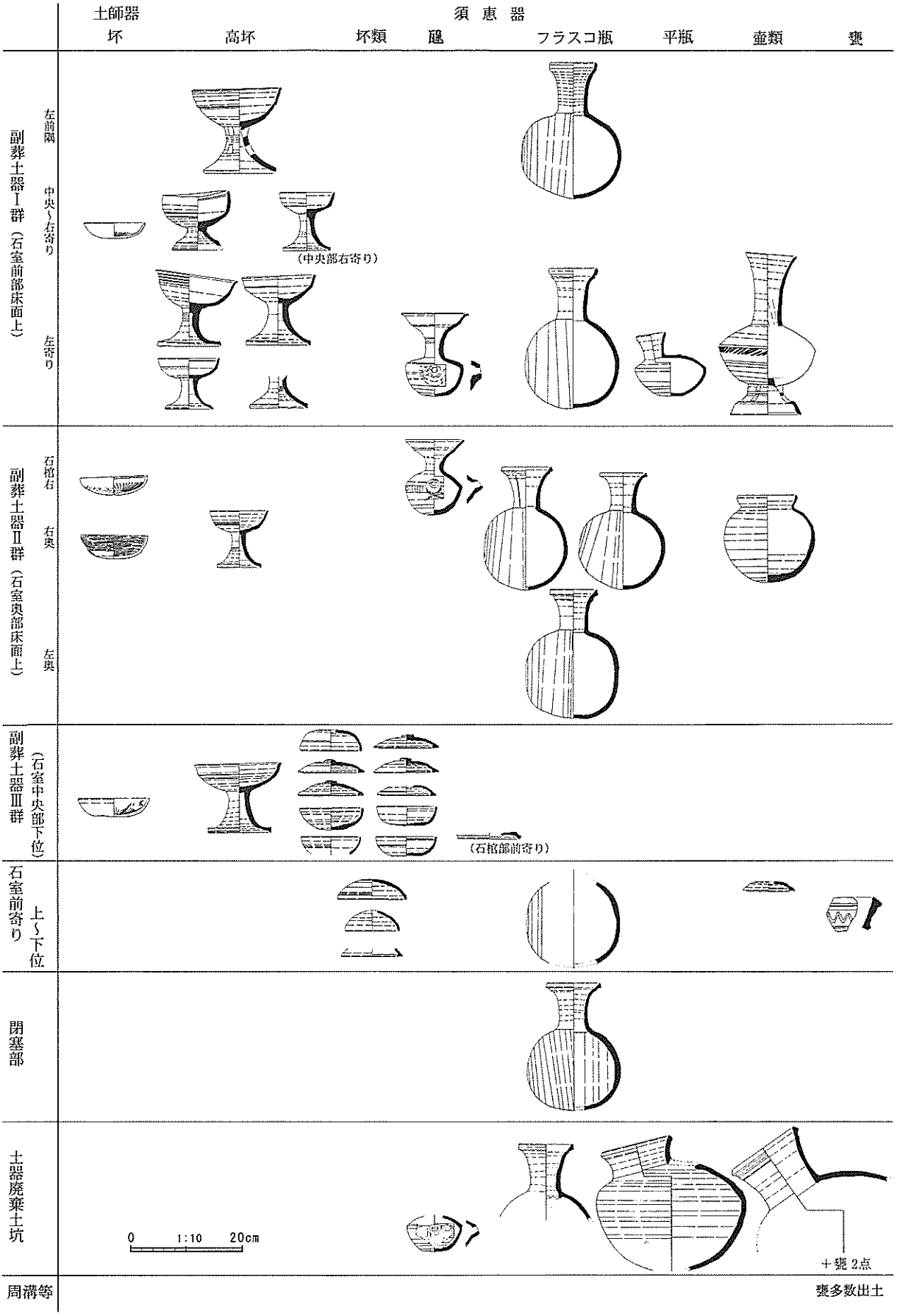


図５　出土位置別土器組成

う可能性が指摘でき、副葬土器Ⅰ群は概ね遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉、副葬土器Ⅱ群は概ね遠江Ⅳ期前葉、副葬土器Ⅲ群の多くは概ね遠江Ⅳ期後葉に位置づけることができる。

このように、副葬された土器においても複数の時期を確認することができ、３つの副葬土器群に区分することができる。さらに、副葬土器Ⅰ群と副葬土器Ⅱ群の時期差は小さく、組成においても共通する部分が多いのに対して、副葬土器Ⅲ群だけは遠江Ⅳ期後葉であり、組成の特徴においても副葬土器Ⅰ・Ⅱ群と大きく異なることがわかる（図５）。埋葬①～③と副葬土器Ⅰ群～Ⅲ群の対応関係については、より詳細な検討を要する。しかし、複数時期の埋葬があったことは明らかであり、各副葬土器群の組成の違いについて、埋葬における諸様相との関連性も考慮する必要はあると考える。

4　石室内の土器

石室内において、土器は馬具や武器とは異なり、埋葬主体からやや離れた位置で出土する場合が多い。土器は石室外からの出土もあり、石室内外における儀礼の道具であったと把握することができる。ここでは、先に分類したⅠ群～Ⅲ群の副葬土器群について諸要素を検討し、石室内における土器群を用いた儀礼について把握する。

副葬土器Ⅰ群の評価　副葬土器Ⅰ群は、先述のとおり概ね遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉に位置づけでき、原分古墳出土土器の中で最も古い一群として把握できる。なお、フラスコ瓶の口縁部などについて、副葬土器Ⅰ群の中で共通した形態的特徴が指摘できるが、その特徴が副葬土器Ⅱ群や石室外出土の土器にはないことも確認できる。副葬土器Ⅰ群が一つのまとまりとして把握できる一方、副葬土器Ⅱ・Ⅲ群や石室外の土器群とは使用時期・機会が異なるものと把握できる。

前部の左寄りにまとまった土器の出土があるほかに、前部左前隅に２点、中央から右寄りに散在して３点（１点は中央部）が把握できる。概ね良好な残存状態であるといえるが、若干の破片の散らばりもあり、左寄りと中央との間、左前隅と左寄りとの間において、接合関係を確認することができる。したがって、儀礼に使用する際には同じ土器群としてあったものが、儀礼後の移動、追葬に伴う片付けなどによって３つに分割された可能性が指摘できる。ただし、唯一中央部にある高坏1点については、これらと同じ土器群であったことを示す積極的な根拠がない。

土器群の組成は、６個体程度の須恵器高坏に瓶１点、フラスコ瓶２点、平瓶１点、脚付長頸壷１点、さらに土師器の坏１点が加わる。最も種類・数の豊富な副葬土器群であることがわかる。白澤崇による静岡県内の後期古墳副葬土器組成の分析（白澤1998）によれば、坏類＋壷類＋瓶＋瓶類等という副葬土器Ⅰ群の組成は、一般的に豊富な土器群の組成として評価でき、馬具・武器などによる評価と矛盾することなく上位の階層に位置づけることができる。

副葬土器Ⅰ群の時期は、出土馬具・武器においても最も古い段階として指摘される時期に該当し、より古い時期に位置づけできるものはない。したがって、初葬に伴う可能性が高いと判断できる。さらに、土器群の組成においては、家形石棺による埋葬に対する儀礼として最も相応しいものと評価することができる。なお、奈良県牧野古墳や奈良県藤ノ木古墳、静岡市賤機山古墳などの首長墓級の横穴式石室においても、初葬に伴う土器群が袖部や羨道に検出される場合が少なくない。原分古墳は段構造を伴う無袖式石室である点でこれらと異なるが、初葬の副葬土器群の在り方に違いはない。

須恵器高坏と土師器坏　後期古墳の副葬土器群には複数の坏類が伴う場合が一般的に多く、駿河東部においても、群集墳では須恵器坏類の多用が確認できる。しかし、原分古墳の副葬土器Ⅰ群（およびⅡ群）においては、須恵器坏身・蓋が確認できず、かわりに複数の須恵器高坏と数点の土師器坏が伴う。

複数の高坏が主体となる土器群については、県内では賤機山古墳の右袖部の一群があり、畿内でも牧野古墳や藤ノ木古墳などの主要古墳で確認できる。牧野古墳について河上邦彦が指摘するように、高坏

の採用には丁寧な儀礼を意識した可能性が推察される（河上1995）。また、寺前直人は、京都府乙訓地域の後期古墳出土土器を分析し、脚付器種の有無が階層性における古墳秩序に対応することを示している（寺前2005）。原分古墳の副葬土器Ⅰ群においては、群集墳中の古墳とは異なる単独立地の有力墳として、高坏が意識的に選択された可能性を指摘したい。

一方、土師器坏１点もしくは数点が加わることについては、駿河東部では富士川町谷津原６号墳、富士市中原４号墳、富士市実円寺西１号墳、長泉町下土狩西１号墳などに認められる。土器の生産・流通における地域的傾向も考慮する必要はあるが、原分古墳などにおける土師器坏１～数点の存在について、そうした傾向が単純に反映されただけとは把握し難い。土師器生産との関係も背景にしながら、駿河東部・黄瀬川流域の一定範囲を掌握する者の埋葬として、積極的に土師器坏１～数点を加えた組成を指向したと考えたい。なお、近畿地方の上位階層にある主要古墳においては、波状文のある土師器壺１点が伴う場合が確認でき、意図的な土師器の採用を指摘することもできる（岡本2002）。

脚付長頸壺の特性　原分古墳においては、副葬土器Ⅰ群にだけ脚付長頸壺１点を伴う。また、出土須恵器の多くが湖西産であるのに対して、この脚付長頸壺は猿投産の可能性が指摘できることから、副葬土器Ⅰ群の中において特徴的な存在として評価できる可能性もある。

横穴式石室の副葬土器群における脚付長頸壺への注目は、既に諸研究において確認することができる。藤原学は、賤機山古墳における斎藤忠の指摘（後藤・斎藤1953）などを引用しながら、６世紀後半以降に多く認められる台（脚）付長頸壺について、横穴式石室という新たな墓制に伴う儀礼によって出現・発達したものと評価している（藤原1985）。さらに、寺前は先にあげた研究において、脚付器種によって強調される土器の高さに階層性が反映されており、従来の葬送儀礼との差別化を意図して、横穴式石室に特化した脚付器種を創出・使用した可能性を指摘している（寺前2005）。

賤機山古墳における土器群の状況とは、多数の須恵器高坏と提瓶３点、瑟２点が玄室右袖付近に雑然と積まれているのに対して、脚付長頸壺２点が石棺の前方に供献の具のごとく並立されていたというものである。藤ノ木古墳や牧野古墳では、袖部や羨道において多くの土器が倒されていた中で、器台もしくは脚付長頸壺が目立つように立てられた状態

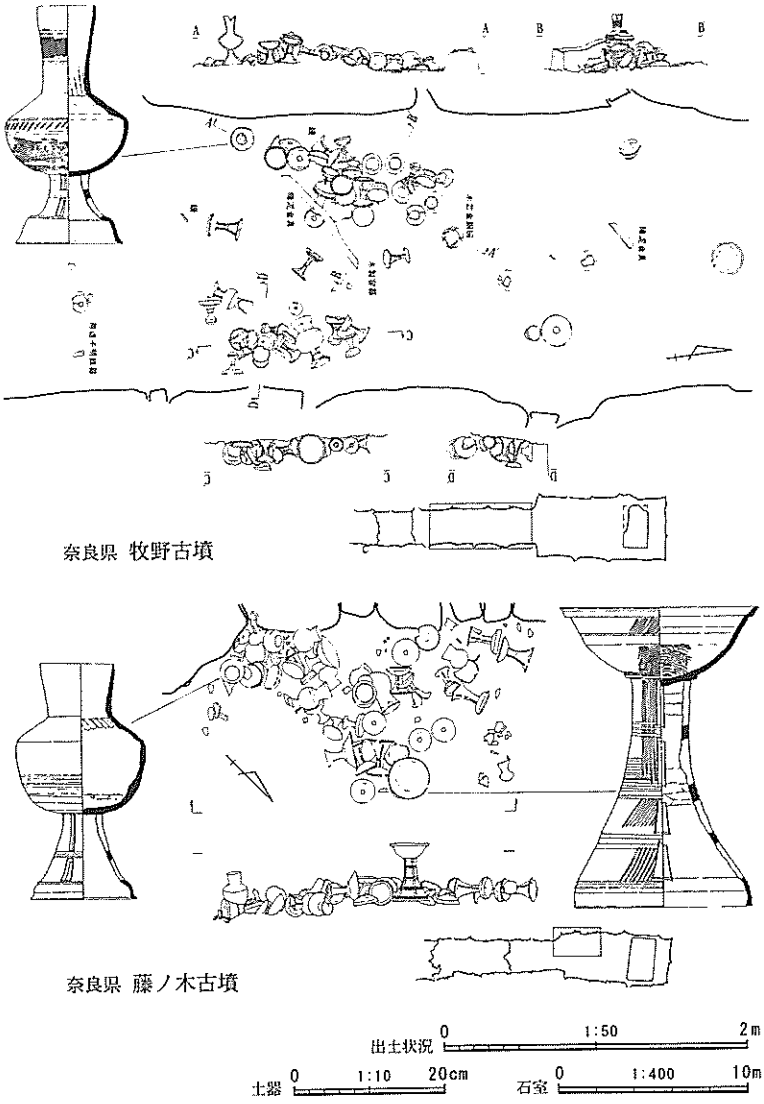


図６　牧野古墳と藤ノ木古墳の土器出土状況

で検出されている（図６、註２）。以上のような状況から、儀礼において器台や脚付長頸壺が特別な存在として使われ、その役割・意識が儀礼後の移動もしくは追葬に伴う片付けを経ても保持された可能性を指摘することができる。

原分古墳においては、残念ながら脚付長頸壺の詳細な出土状況が不明であり、立てられていた確証がない。しかし、周囲の土器が低い位置で転倒した状態で発見されているのに対して、やや高い位置で発見されて取り上げられていることから、藤ノ木古墳の器台などと同様の評価ができる可能性がある。

副葬土器Ⅱ群の評価　奥部を中心とした範囲の床面上で出土した一群であり、概ね遠江Ⅳ期前葉に位置づけることができる。右奥隅に須恵器のフラスコ瓶と広口壺、その少し前方に土師器坏と須恵器高坏・フラスコ瓶、石棺右横に土師器坏と須恵器瓿、石棺の左奥側にフラスコ瓶が検出されている。この区域では、新旧の馬具・武器が崩壊して入り乱れた状態で出土している。しかし、その中で土器は概ね良好な残存状態で出土しており、馬具などのような時期差の混在も認め難い。さらに、転倒や重なり合う状態は認められるが、副葬土器Ⅰ群のような破片の散在はなく、離れた場所との接合関係もない。したがって、顕著な移動や片付けはなかった可能性が考慮される。

先述した各副葬土器群の編年的位置づけによって、副葬土器Ⅱ群は副葬土器Ⅰ群よりも後の時期に用いられた可能性が指摘でき、追葬に伴うものと把握することができる。なお、副葬土器Ⅱ群は4ヶ所に分かれて土器が出土しており、各所間での接合関係がないこと、右奥隅の２点だけが他と異なって正位に立てられていることなどから、複数回の副葬土器群の集合である可能性も否定はできない。しかし、分散していながらも、土師器坏、須恵器高坏、瓿、フラスコ瓶といった様々な器種があり、土器群全体として副葬土器Ⅰ群との組成の類似性を認めることができる。したがって、同一回に用いられた副葬土器群である可能性も評価できる。このように、副葬土器Ⅱ群は副葬土器Ⅰ群に近い組成の土器群であると評価できるが、脚付長頸壺ではなく広口壺を伴う点、高坏の数が少ない点などは異なっており、副葬土器Ⅰ群に比べて豊富さに欠ける組成であるともいえる。

副葬土器Ⅲ群の評価　中央部の下位から出土した一群である。破片が散在した状態で出土しているが、先述したとおり、接合関係の分布（図４）によって、本来は石棺前付近の床面にあったものが、石棺破壊に伴って乱されて中央部下位に巻き上げられた可能性が指摘できる。土師器坏と須恵器高坏が各１点、須恵器坏身・坏蓋が計11点確認できる。遠江Ⅳ期後葉に位置づけできる土器が多いが、Ⅴ期（８世紀代）に位置づけできる須恵器坏身の底部片１点も含まれている。

遠江Ⅳ期後葉の一群は、主に須恵器坏身・坏蓋によって構成されている。破壊を受けた土器群であることから、出土土器が土器群の全てであったかは不明である。石室前寄りの上位～下位で出土した須恵器坏類片（図５）などについても、この土器群に含まれていた可能性が考慮できる。しかし、いずれにしても、副葬土器Ⅰ・Ⅱ群とは時期が異なるだけでなく、組成においても明らかに異なる様相であるといえる。白澤の土器群組成に関する研究（白澤1998）などを参考にすると、遠江Ⅳ期後葉の土器群（副葬土器Ⅲ群）は、遠江Ⅳ期前葉までの土器群（副葬土器Ⅰ・Ⅱ群）に比べて階層的に劣ると判断できる。以上かから、この土器群については、副葬土器Ⅰ・Ⅱ群よりも後の段階の埋葬に伴う副葬土器群であり、被葬者像などにおいても明確な差異を感じさせるものとして評価できる。

８世紀代の須恵器坏身の高台付底部片については、その時期にも埋葬があったことを示す可能性と石棺破壊の時期を示している可能性の両方が考えられる。前者については、ほかに８世紀代の遺物の出土がないことから、この土器が副葬土器である可能性を積極的に評価することが難しい。一方の後者についても、この土器が石棺破壊に伴うという明確な根拠はない。ただし、この土器が下位において最も新しい時期の遺物であり、上位では人骨とともに９世紀前半の灰釉陶器が出土していることから、石棺破壊および下位の埋没が８世紀の間にあった可能性は十分に考慮できる。

5　石室外の儀礼痕跡

埋葬に伴う儀礼は、石室内だけで行われたわけではない。原分古墳では、その痕跡として閉塞部での土器の出土、周溝等での土器の出土、古墳の南西にある土器廃棄土坑の検出をあげることができる。

閉塞部の土器　閉塞石を除去する途中において、フラスコ瓶１点が出土している（図４・図５）。概ねの出土範囲を図示したが、閉塞石１～２段分の上面において、ばらばらに壊れた破片が散在した状態であった。また、このフラスコ瓶の形態的特徴について、副葬土器Ⅱ群のフラスコ瓶と類似することがわかる。以上から、土器破砕を伴う閉塞部の儀礼行為が、初葬ではなく追葬時において行われたことがわかり、さらに、下１～２段分を除く多くの石積みは、その際の閉塞であると判断することができる。

石室内や閉塞部における土器を伴う儀礼は、多くの横穴式石室で確認することができる。小林行雄は、石室内の儀礼について古事記にある「黄泉戸喫（ヨモツヘグイ）」に関連させて、死者への供食儀礼であると理解した（小林1951）。さらに、白石太一郎は閉塞部の儀礼痕跡について、同様に「事戸度し（コトドワタシ）」に関連させて理解している（白石1975）。原分古墳における閉塞部の儀礼についても、石室内の埋葬・儀礼を終え、そこから外出して閉塞する際の呪的逃亡や禊に似た行為として把握できる。

閉塞の過程　京都府物集女車塚古墳の調査では、初葬と数度の追葬が把握されており、最終埋葬までの諸過程が復元されている（秋山・山中編1988）。それによれば、羨道から前庭部において、各埋葬に伴う複数回の閉塞・埋め土と掘り返しが把握でき、最終埋葬までは集石と土を用いた仮閉塞が行われ、最終埋葬後に閉塞石を施し、羨門まで完全に埋め戻したという復元が示されている。この報告書の中では類例もあげられており、岡山県こうもり塚古墳の墓道について、埋葬ごとの墓道掘削（掘り返し）と埋め戻しが把握でき、最終段階において墓道上部までを完全に埋め戻している様子が指摘されている。この他にも、多くの横穴式石室で羨道・墓道の埋め戻しと掘り返しが把握されている。物集女車塚古墳のように段階的な閉塞過程が把握できるものばかりではないが、大半の事例において、当初の墓道・羨門の場所を正確に特定して掘り返していることがわかる。追葬が計画されている場合に、次回に掘り返す場所が特定できなくなる程には埋め戻さなかった可能性が指摘できる。

段階的な閉塞過程は、追葬が当初より計画されていたことをうかがわせる。森岡秀人が言及しているように、横穴式石室は構築時において埋葬される初代と初代関係者が特定できており、その範囲（世代）における初葬と追葬の回数が計画されていた可能性が考慮される。なお、森岡はさらに、古墳によって検出される顕著な片付けを伴う埋葬（追葬）について、一斉に行われる改葬の場合が多く認められ、構築当初の計画にない次世代以降の埋葬である可能性を指摘している（森岡1983）。

原分古墳については、遺構の状態から閉塞過程の詳細を判断することは難しい。しかし、遠江Ⅳ期前葉までの初葬と追葬が完了した段階で、フラスコ瓶による閉塞儀礼があったことがわかり、残存する閉塞石の大半についても、その際の石積みであると判断することができる。この段階で完

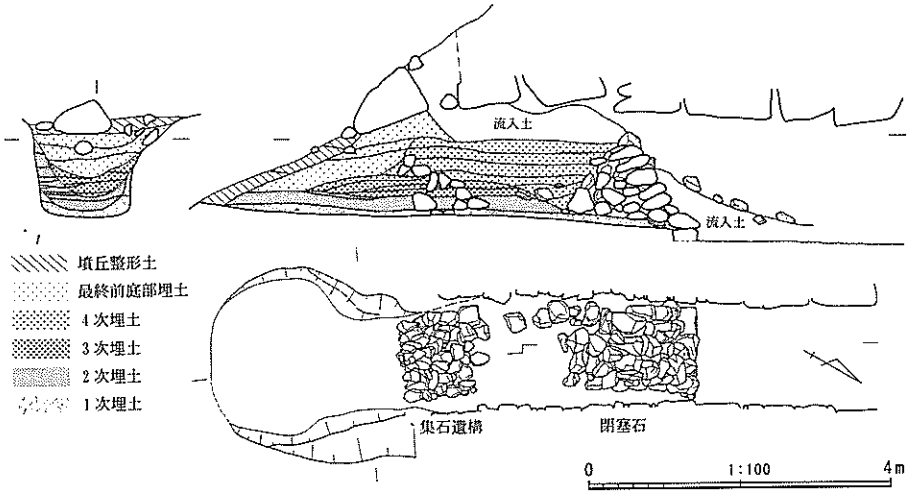


図７　物集女車塚古墳の閉塞

全閉塞したと把握できるのであれば、遠江Ⅳ期前葉までの初葬・追葬が構築当初の計画にある埋葬であったと指摘することができる。

甕を含む石室外の土器群　古墳の南西に浅い土坑（土器廃棄土坑）が検出され、そこからフラスコ瓶1点、瓶1点、大型平瓶2点、甕2点が出土している。それぞれの土器は破片が散在した状態で検出されており、使用後に廃棄された可能性が指摘できる。古墳の東側では、周溝や古墳外から須恵器甕の破片が多く出土している。個体数は10点以上になる。

これらの詳細な時期を特定し、分類して使用回数を求めることは難しい。しかし、複数回の埋葬が行われていた7世紀の間に、墳丘周囲で儀礼が行われたことは明らかである。さらに、出土位置・状況および土器群の組成から、土器廃棄土坑の土器群が他と異なる段階や意図によるものであった可能性も考慮できる。いずれにしても、器種組成は石室内の土器群とは明らかに異なり、大型の須恵器甕が多く用いられていることから、酒宴の要素が含まれた墓前祭祀的な儀礼であったと推察できる。

6　結　語

埋葬・儀礼過程の復元　これまで、原分古墳の7世紀における埋葬と儀礼に関連する事柄として、埋葬主体と棺、石室内の土器、石室外の土器の諸様相についてとりあげてきた。それらから復元できる埋葬と儀礼の過程を、表1に整理した。

埋葬については、初葬＝石棺（埋葬①）＝遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉、追葬＝釘付木棺（埋葬②）＝遠江Ⅳ期前葉～後葉、最終埋葬＝改葬（埋葬③）＝遠江Ⅳ期後葉～Ⅴ期の3点を確実なものとして把握することができる。先述のとおり、この他に石棺内への追葬や釘付木棺以外の木棺による追葬があった可能性も否定はできない。石棺・木棺による埋葬（埋葬①・②）が4回程度あったとしてもよい。

石室内の儀礼痕跡と把握できる副葬土器群について、初葬には前部の副葬土器Ⅰ群が伴い、次の追葬に奥部の副葬土器Ⅱ群が伴うと把握できる。さらに、その後の埋葬に伴って副葬土器Ⅲ群が石棺前（釘付木棺・改葬主体の奥）に配置されたと復元できる。先述したとおり、土器群の組成において、副葬土器Ⅰ群と副葬土器Ⅱ群の類似性が指摘できる一方、それらと副葬土器Ⅲ群との間には大きな差異が認められる（図5）。本章別稿で述べている馬具や武器の検討においても、時期差のある2組が同じ様に副葬されている可能性が指摘されており、2人目までの被葬者は比較的似た社会的性格を伴っていた可能性が指摘できる。その一方で、その後の被葬者については、2人目までとの大きな隔絶や格差があったと把握することができる。埋葬過程の復元においては、埋葬回数と全ての時期を特定することはできず、提示した以上の可能性も存在する（註3）が、この格差を石棺と釘付木棺との間に求めるならば案1、棺による埋葬と改葬による埋葬との間に求めるならば案2のように把握することができる。

表1　埋葬・儀礼過程の復元案

<table>
<tr><th rowspan="2">時期</th><th rowspan="2">埋葬過程</th><th colspan="4">埋葬方法</th><th colspan="3">土器群による儀礼</th></tr>
<tr><th colspan="2">案1</th><th colspan="2">案2</th><th>石室内</th><th>閉塞部</th><th>周溝等</th></tr>
<tr><td>遠江Ⅲ期末葉～Ⅳ期前葉</td><td>初葬</td><td rowspan="3">埋葬①</td><td>石棺</td><td rowspan="2">埋葬①</td><td>石棺</td><td>副葬土器Ⅰ群</td><td rowspan="4">閉塞儀礼と完全閉塞</td><td rowspan="6">須恵器甕を用いた儀礼 ―複数回―</td></tr>
<tr><td rowspan="4">遠江Ⅳ期前葉</td><td rowspan="5">追葬</td><td rowspan="2">石棺内追葬</td><td>石室内追葬？</td><td rowspan="3">副葬土器Ⅱ群</td></tr>
<tr><td>埋葬②</td><td>釘付木棺</td></tr>
<tr><td></td><td>木棺？</td></tr>
<tr><td>遠江Ⅳ期後葉</td><td>埋葬②</td><td>釘付木棺</td><td rowspan="2">埋葬③</td><td rowspan="2">改葬</td><td>副葬土器Ⅲ群</td><td></td></tr>
<tr><td></td><td>木棺？</td></tr>
<tr><td>遠江Ⅳ期末葉～Ⅴ期</td><td>埋葬③</td><td>改葬</td><td></td><td></td><td></td><td></td><td></td></tr>
</table>

石室内以外の儀礼痕跡として、フラスコ瓶による閉塞儀礼が把握できる。遠江Ⅳ期前葉の追葬に伴うことがわかり、この段階で完全な閉塞が施された可能性も指摘できる。したがって、埋葬過程における区切りを意味する儀礼として評価することもできる。一方、墳丘周囲においては、須恵器甕を用いた儀礼が把握できる。各所から多くの甕が出土していることから、儀礼が複数回行われた可能性もある。

儀礼からみた初葬の特徴　初葬に伴う副葬土器Ⅰ群については、階層性において上位に位置づけできる組成であり、坏類ではなく高坏を多く用いること、特別に扱われる脚付長頸壺を含むことについて、畿内（大和）および駿河の6世紀の首長墓（横穴式石室）に類例があることを示した。

汎日本列島的に広がる横穴式石室と葬送観念との関連については、土生田純之による研究があり、畿内系横穴式石室の伝播・導入と展開とともに、ヨモツヘグイやコトドワタシと関連するような新たな葬送観念が定着した様相が指摘されている（土生田1998）。本稿では、調査によって良好な状態が把握できている古墳の一部しか取り上げていない。しかし、畿内を含む各地の首長墓において、同様の土器群による儀礼が用いられた可能性は考慮される。

原分古墳の初葬に伴う副葬土器Ⅰ群についても、高坏の数などに類例の首長墓との明らかな差はあるが、6世紀の首長墓がもつ特徴を比較的多く残すものと評価できる。原分古墳は7世紀の駿河東部・黄瀬川流域における最上位階層墳であり、大型の横穴式石室、家形石棺、金銅装馬具、装飾付大刀などを伴う小首長墓に相応しいものとして、首長墓における横穴式石室の儀礼を意識したことがうかがえる。一方、原分古墳は在地的な無袖の横穴式石室を埋葬施設としており、副葬土器群においては、在地の生産や流通によって入手したと考えられる土器が多く、特別な搬入品が目立つわけではない。外来的であるというよりも、被葬者がもつ地域内外への実力が黄瀬川流域に定着している点を評価したい。

追葬までの儀礼と閉塞　追葬は、石棺内への追葬などの可能性もあって不確定な部分が多く、釘付木棺による埋葬の時期も不確定である。一方、遠江Ⅳ期前葉の追葬に伴う土器として、石室内の副葬土器Ⅱ群のほかに、閉塞部のフラスコ瓶をあげることができる。また、墳丘の南側では、初葬から追葬の間に須恵器甕を用いた儀礼があったことがわかっている。

本稿では、閉塞部のフラスコ瓶について、横穴式石室構築当初の計画にあった初葬と追葬が完了し、完全に閉塞することに対する儀礼痕跡であると理解した。副葬土器Ⅱ群については、1回の追葬に対するものであるのか、複数回の累積であるのかを特定することが難しいとしたが、その組成は全体として副葬土器Ⅰ群との類似性が指摘できる。推測の域は出ないが、当初計画にあった初葬・追葬の完了段階に配置された可能性も考慮される。さらなる検討を必要とするが、横穴式石室の初葬および初葬関係者の埋葬が完了する意味について、石室内と閉塞・墳丘周囲の儀礼を含めて評価する必要があると考える。

埋葬の終焉とその後　石室内では、遠江Ⅳ期後葉の副葬土器Ⅲ群も把握されている。先述した閉塞儀礼の後になることから、構築当初の計画にあった初葬・追葬とは異なる段階のものと判断できる。須恵器坏類を主体とする組成も、それまでの副葬土器群とは大きく異なる。一方、中央部左寄りの改葬人骨について、埋葬方法の違いや先葬に伴う鉄鏃が下敷きになっていることなどから、初葬以降の石棺・木棺による埋葬とは異なる段階の、新たな埋葬として評価することができる。改葬人骨に副葬土器Ⅲ群が伴うかは判断し難いが、いずれにしても、当初の予定を超えて埋葬施設として機能したことがわかる。

8世紀の須恵器片が石棺破壊時の層位（下位）から出土していることなどから、その頃に石棺破壊があった可能性を指摘した。8世紀には埋葬施設としての機能が失われていたと把握できるが、意図的に原分古墳の石棺から石材を入手した様子がうかがえ、放置される存在ではなかったことがわかる。原分古墳はその後、古代においては墓などの再利用があり、中世ではカワラケや銅銭が石室内に残され、近世には山の神として祀られる存在となる。原分古墳がもつ存在感は強く、古代・中世・近世と変容しながらも活かされ、守られていく。

註

1　本稿では、湖西産須恵器を多く含む出土土器に関連した内容が主体となることから、遠江須恵器編年（鈴木2004）によって時期を示すこととする。なお、遠江Ⅲ期末葉は、陶邑編年TK209型式併行期・飛鳥編年Ⅰ期の新相に概ね対応し、7世紀前葉頃に位置づける。遠江Ⅳ期前葉は、陶邑編年TK217型式併行期古相および飛鳥編年Ⅱ期に概ね対応し、7世紀中葉頃に位置づける。遠江Ⅳ期後葉は、陶邑編年TK217型式併行期新相以降および飛鳥Ⅲ期に概ね対応し、7世紀後葉に位置づける。

2　賤機山古墳、牧野古墳、藤ノ木古墳のいずれにおいても、後世の人の出入りがあったと判断できる状態が把握されているが、床面における遺物出土状況については、後世の盗掘や破壊があった可能性は低いと把握することができる（後藤・斎藤1953、河上編1987、勝部編1990）。

3　本文で述べてきた以外に、石棺への追葬と釘付木棺による埋葬との先後関係などについても、特定できない点としてあげることができる。こうした点も考慮していくと、表1にある以上に多くの可能性を考えることができる。

参考文献

秋山浩三・山中　章（編）　1988　『物集女車塚古墳』　向日市教育委員会

井鍋誉之（編）　2001　『富士川SA関連遺跡』　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷宏治・西澤正晴　2001　「東海の後期古墳データベース（CD）」『東海の後期古墳を考える』
　第8回東海考古学フォーラム三河大会実行委員会

岡本敏行　2002　「後・終末期古墳における埋葬の背景」『未盗掘古墳の世界』　大阪府立近つ飛鳥博物館

勝部明生（編）　1990　『斑鳩藤ノ木古墳　第一次調査報告書』　奈良県立橿原考古学研究所

河上邦彦（編）　1987　『史跡牧野古墳』　広陵町教育委員会

河上邦彦　1995　『後・終末期古墳の研究』　雄山閣

後藤守一・斎藤　忠　1953　『静岡賤機山古墳』　静岡県教育委員会

小林行雄　1951　「黄泉戸喫」『考古学集刊』第2冊　東京考古学会

白石太一郎　1975　「ことどわたし考－横穴式石室墳の埋葬儀礼をめぐって－」『橿原考古学研究所論集三十五周年記念』

白澤　崇　1998　「組成から見た古墳主体部の副葬土器－静岡県・三重県の事例を中心に－」
　『網干善教先生古稀記念考古学論文集』

白澤　崇　1998　「組成から見た古墳主体部の副葬土器２」『静岡県考古学研究』№30

鈴木敏則　2004　「静岡県下の須恵器編年」『有玉古窯』　浜松市教育委員会

田辺昭三　1981　『須恵器大成』　角川書店

寺前直人　2005　「後期古墳における土器副葬の階層性」『井ノ内稲荷塚古墳の研究』　大阪大学考古学研究室

長泉郷土誌編集委員会　1965　「古代社会　第１節古墳文化」『長泉郷土誌』　長泉町教育委員会

長泉郷土誌編集委員会（編）　1982　『長泉郷土誌』　長泉町教育委員会

土生田純之　1998　『黄泉国の成立』　学生社

平林将信・川上敏朗　1983　『実円寺西古墳保存修理工事報告書』　富士市教育委員会

藤原　学　1985　「須恵器からみた古墳時代葬制の変遷とその意義」『末永先生米寿記念献呈論集』

前園実知雄（編）　1995　『斑鳩藤ノ木古墳　第二・三次調査報告書』　奈良県立橿原考古学研究所

前田勝己　1994　『中原第3号墳・第4号墳発掘調査概要報告書』　富士市教育委員会

図出典

図１～５　原分古墳発掘調査資料より作成

図６　河上編1987、勝部編1990より作成（一部改変・再トレース）

図７　秋山・山中編より作成（一部改変・再トレース）

原分古墳出土馬具の時期と系譜

鈴木　一有

1　はじめに

報告で明らかにしたように、原分古墳から出土した馬具は量、種類ともに豊富で、攪乱や盗掘などで多少の欠損、製品そのものの欠落などが想定できるが、概ね埋葬当時の馬装が復元できる。轡や鞍、鐙などの主要な馬具がすべて２組分認められ、附属具を含めて３組目の部品が確認できないことから、副葬品として2組の馬具が収められていた可能性が高い。その内容は、以下のように整理できる。

①轡	2（2組分）	１号轡、２号轡
②鞍金具	4（2組分）	１号鞍金具、２号鞍金具
③鐙	3（2組分）	１号鐙（2点）、２号鐙（1点）
④辻金具	4（2組分）	辻金具１類（1点）、辻金具２類（3点）
⑤雲珠	1（1組分）	（辻金具２類と同工）
⑥杏葉	1（1組分）	（辻金具１類と同工）
⑦鉸具付飾金具	4（1組分）	
⑧鉤金具	2（1組分）	
⑨貝座飾金具	2（1組分）	（辻金具２類と同工）
⑩帯飾金具	17（2組分か）	（辻金具１類、２類と同工）
⑪鉸具	8以上	

本稿では、これらの馬具から構成される馬装の組合せ関係、帰属時期を明らかにするとともに、個別馬具にかかわる問題点について整理する。これらの基礎作業をふまえたうえで、馬具の系譜、および原分古墳の葬送過程との関連を通じ、その被葬者像に迫りたい。

なお、本稿で用いる編年的位置づけについては、馬具報告の内容に順じ、古墳時代後期（TK209型式期前半、飛鳥Ⅰ期前半併行、遠江Ⅲ期後葉併行）までは陶邑編年を用い、古墳時代終末期（TK209型式期後半／TK217型式併行期、飛鳥Ⅰ期後半併行、遠江Ⅲ期末葉併行）以降については、飛鳥編年を基軸に記述を行う。静岡県内の事例に触れる場合には、遠江須恵器編年を併用する。また、以下の記述では、煩雑さを避けるため、TK209型式期の前半（狭義のTK209型式期）を指す場合、たんに「TK209型式期」と表現する。

2　原分古墳出土馬具の組合せ関係

原分古墳の横穴式石室内は大きく攪乱され、初葬の家形石棺も底部の半分を残し破壊されていた。このため、出土状態からは馬装の組合せ関係を明確になしえない。出土位置にかかわる情報は、個別の馬装を復元した上で、補完的に検討する必要がある。

原分古墳から出土した馬具のうち、２組分みられるものには、古相、新相の時期差が認められる。よって、２組ある馬具の組合せ関係を復元するには、個々の馬具の編年的位置づけを検討することが必要である。２組分認められる馬具は、①～④、および⑩の一部（⑩－１、帯飾金具１類、２・３類）であり、いずれも古相、新相の分離が容易である。このうち、古相・新相の二者がみられる辻金具は、形態、鋲、金銅板の特徴から、他の馬具との関連がうかがえる点で重要である。

１組分しか出土せず、古新の差異が抽出できない部品も、辻金具１類、２類との比較が可能なものがある。⑤、⑥、⑨が該当し、その組合せ関係が明確である。⑤は形態や金銅板の特徴などが新相の辻金

表１　原分古墳出土馬具の組合せと年代

	１号馬具	２号馬具

馬具各部品

①　轡	鉄製鉸具造環状鏡板付轡（１号轡）　（１～６）	鉄製鉸具造環状鏡板付轡（２号轡）　（７）
②　鞍金具	金銅装鞍金具（１号鞍金具）　（８～14）	金銅装鋲鞍金具（２号鞍金具）　（15～21）
③　鐙	鉄製壺鐙（１号鐙）　（22・23）	鉄製輪鐙（２号鐙）　（24）
④　辻金具	金銅装四脚辻金具（辻金具１類）　（25）	金銅装四脚辻金具（辻金具２類）　（26～28）
⑤　雲　珠	－	金銅装八脚雲珠　（29）
⑥　杏　葉	金銅装三葉文心葉形杏葉　（30）	－
⑦　鉸具付飾金具		鉄製鉸具付心葉形飾金具　（31～34）
⑧　鉤金具	鉄製鉤金具　（35・36）	
⑨　貝座飾金具	－	金銅装イモガイ座飾金具　（37・38）
⑩－１　帯飾金具（１）	金銅装帯飾金具（帯飾金具１類）　（39・40）	金銅装帯飾金具（帯飾金具２・３類）　（41～53）
⑩－２　帯飾金具（２）	推定鉄製帯飾金具（帯飾金具４類）　（54・55）	
⑪　鉸　具	鉄製鉸具（１・２類）　（56～64）	

註）⑦、⑧の帰属は必ずしも明確ではない　⑩－２、⑪の帰属は保留

馬装の帰属時期

陶邑／飛鳥編年	TK209型式期	飛鳥Ⅱ期
遠江須恵器編年	遠江Ⅲ期後葉	遠江Ⅳ期前葉

馬装の使用年代

陶邑／飛鳥編年	TK209型式期～飛鳥Ⅰ期後半	飛鳥Ⅱ期
遠江須恵器編年	遠江Ⅲ期後葉～遠江Ⅲ期末葉	遠江Ⅳ期前葉
推定使用年代	600～630年代頃	640～660年代頃

副葬順位と棺

副葬順位	初　葬	追　葬
想定被葬者の棺	家形石棺	家形石棺（追葬）／釘付木棺
副葬年代（遠江編年）	（遠江Ⅲ期末葉～）遠江Ⅳ期前葉（初頭）	遠江Ⅳ期前葉
推定副葬年代	630～640年代頃	640～660年代頃

註）推定年代は、遠江編年を基軸として併行する飛鳥編年のおおよその年代を示した

具２類と共通し、⑥は古相の辻金具１類と連結された状態で出土している。⑨は、宝珠飾鋲の形態や金銅板の特徴が⑤と共通し、辻金具２類と組み合うことが分かる。

辻金具との比較が困難な⑦、⑧については、個別の編年的位置づけが問題になる。とくに泥障吊金具の可能性が指摘できる⑦の帰属時期は、飛鳥Ⅰ期後半～飛鳥Ⅱ期に中心があり、原分古墳出土馬具の中でも比較的新しい段階の製品といえる。この年代観から、⑦は新相馬具に伴う蓋然性が高いと判断できるが、後述するように、古相馬具の総合的な帰属時期、副葬時期を考慮すると、古相馬具に伴う可能性も否定できない。同様に、⑧の帰属時期もTK209型式期以前と捉えられ、比較的古い様相をもつことから古相馬具に伴う可能性が高いと判断できるが、明確な組合せ関係を示す根拠は薄い。⑦、⑧の組合せ関係については、参考程度に留めておくのが妥当であろう。

また、⑩の一部（⑩－２、帯飾金具４類）および、⑪については、古相、新相どちらの馬装に伴うか、検討材料がさらに少ない。⑩－２、⑪といった馬具は、古相、新相のどちらの馬具に伴っても構わないことから、その組合せ関係については、判断を保留せざるを得ない。

上述の認識から、表１に示すとおり馬装の基本的な組合せを整理し、古相を示す馬装を１号馬具、新相を示す馬装を２号馬具とする。

各々の馬装を構成する部品には、型式的に時間幅が認められるものがある。とくに、２号馬具と捉えた組合せは、鞍金具や雲珠、辻金具（金銅装馬具）が古く、轡や鐙（鉄製馬具）が新しい。同様の傾向は１号馬具にも認められ、組合せとしてふさわしくないという見方もあるだろう。この問題にかかわり、金銅装馬具と鉄製馬具がそれぞれ別の馬装であり、原分古墳には３組以上の馬具が副葬されていた可能

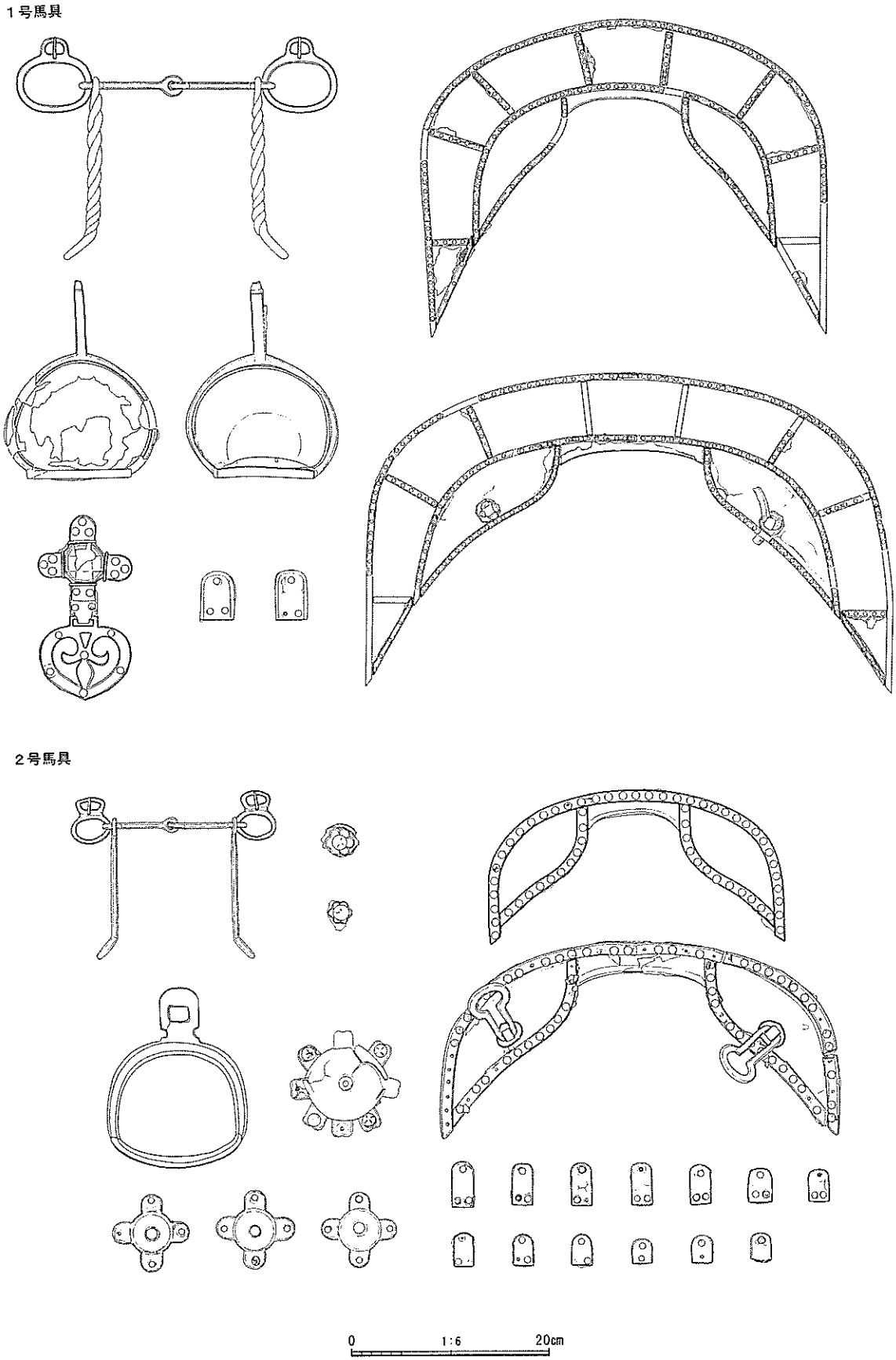


図1　原分古墳出土馬具の組合せ

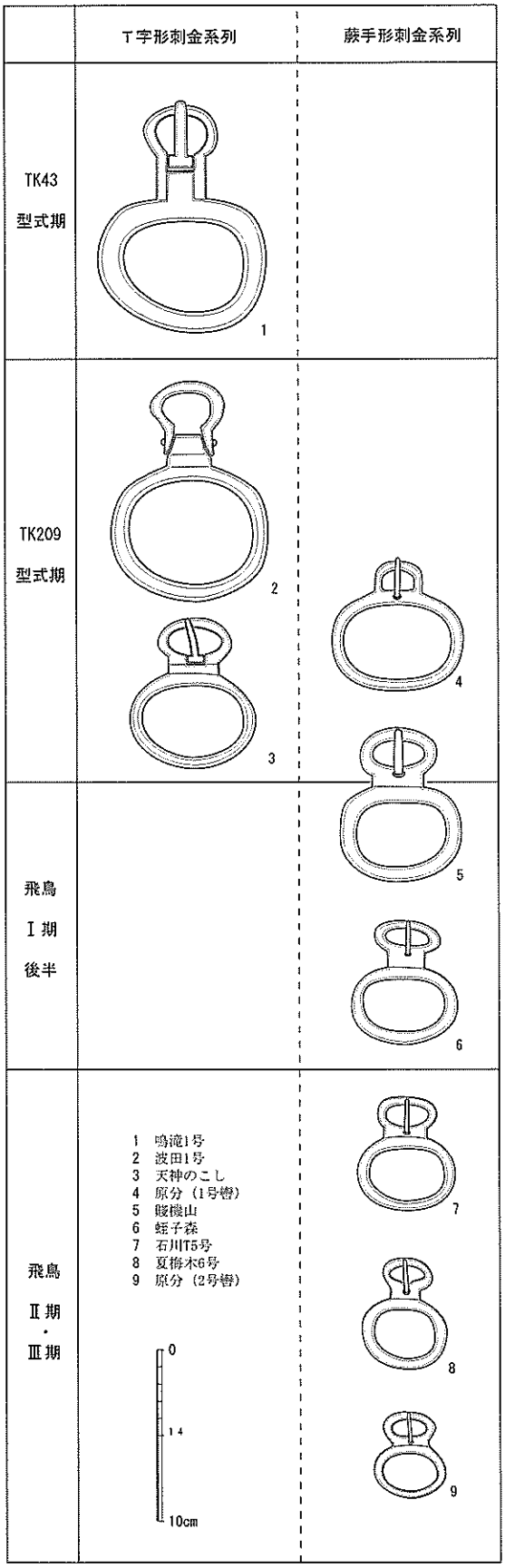


図２　鉸具造鉄製環状鏡板の諸例

性も考慮する必要がある。しかし、金銅装馬具に伴うと想定する第３、第４の轡や鐙のみが撹乱、盗掘で持ち去られたと捉えるのは、無理があるだろう。ここでは、調査で確認できた馬具に３組以上の部位が確認できないことを重視し、表１に示す組合せが最も蓋然性が高いものとして捉えたい。

個々の馬具の編年的位置づけを検討する上で、金銅装馬具の類例は西日本の資料が多く、鉄製馬具の類例は東日本の資料が多い点も留意しておきたい。原分古墳の馬装が、同時に製作されたものではなく、製作地が各々異なる馬具が個別に組み合わされた可能性があるだろう。

3　原分古墳出土馬具の帰属年代

原分古墳から出土した馬具を古相の１号馬具と新相の２号馬具に分離した。これら２組の馬装を構成する各馬具の編年的位置を検討し、総体としての各馬装の帰属年代を検討する。１号馬具、２号馬具の大まかな編年的位置づけについては、報告の中で触れてきた。ここでは、各馬具の位置づけを明確にするうえで基軸となる、轡、鞍金具、鐙、杏葉を取り上げ、関連資料をふまえつつ、編年的位置について再度確認し、馬装全体の使用年代について明らかにしておく。

轡の構造と編年的位置　原分古墳から出土した2組の轡は、いずれも、鉸具造りの鉄製環状鏡板付轡である。１号轡は、大型の鏡板を用い、２号轡は非常に小型の鏡板を用いる。鏡板の大きさは、１号轡が、幅約8cm、高さ約9cm、２号轡が、幅4.2cm、高さ約5cmである。鉸具はともに刺金が蕨手状にされた1本の鉄棒が用いられ、引手は１号轡が捩りを加えた2条線、２号轡は単純な１本の鉄棒で構成されている。

鉸具造鉄製環状鏡板付轡は、TK43型式期に出現し、古墳時代終末期にかけて轡の主流をなす。古い時期は鏡板が大きく、新しい時期になると鏡板が小型化する傾向にあり（岡安1985）、編年的位置づけの指標となっている。また、鉸具の刺金が、T字形から一本の蕨手状を呈するものへの変遷が知られ、その移行期は概ねTK209型式期と考えられる。前者をT字形刺金系列、後者を蕨手形刺金系列と呼んで

おこう。

鉸具造鉄製環状鏡板付轡のうち、古相を示す島根県上島古墳例や和歌山県鳴滝１号墳例（図２－１）は、鏡板の大きさが１号轡より大きい。鏡板の大きさは、前者が幅約10cm、高さ約14cm、後者が幅9.7cm、高さ約13cmである。いずれもＴ字形刺金系列で、TK43型式期に位置づけられるが、上島古墳例は、TK10型式期（MT85型式期）に遡る可能性もある。Ｔ字形刺金系列はTK209型式期に客体化し、主体は刺金蕨手形系列に移る。TK209型式期においては、Ｔ字形刺金系列の山梨県天神のこし古墳例（図２－３）などが知られるが、鏡板の小型化がみられ、幅７cm、高さ９cm程度である。１号轡の鏡板の大きさは、こうしたTK209型式期の古相を示すＴ字形刺金系列の事例と近似し、蕨手形刺金系列の最古級の事例として把握できる。蕨手形刺金系列の鉸具造り鉄製環状鏡板付轡は、TK209型式期の中で定型化し、静岡市賤機山古墳例（図２－５）や、静岡市東久佐奈岐３号墳例にみられるように、鏡板の幅６cm前後、高さ８cm前後のものが数多くみられるようになる（岡安1985）。１号轡は、この規格的な大きさから逸脱していることから、鏡板が小型化する以前の段階に製作されたものと捉えられよう。なお、同段階に位置づけられる静岡県内の鉸具造鉄製環状鏡板付轡として、島田市波田１号墳例（図２－２）があげられる。

いっぽう、鏡板の小型化が顕著な２号轡は、飛鳥Ⅰ期後半～飛鳥Ⅱ期（遠江Ⅲ期末葉～遠江Ⅳ期前葉）に盛行する鉸具造鉄製環状鏡板付轡の寸法（岡安1985、幅約６cm、高さ約７cm）より小さい。静岡県内においても、幅約６cm、高さ6.5cm～７cm程度の鏡板をもつ鉸具造環状鏡板付轡の出土例は多く、浜松市蛭子森古墳例（図２－６）、菊川市大淵ヶ谷Ｂ６号横穴例、藤枝市女池ヶ谷９号墳例、富士市中里大久保古墳例、沼津市石川Ｔ５号墳例（図２－７）などがあげられる。原分古墳２号轡は、鏡板が最も小型化した段階のものと考えられ、より新しい傾向をもつ。その編年的位置は飛鳥Ⅱ期～飛鳥Ⅲ期（遠江Ⅳ期前葉～遠江Ⅳ期後葉併行）に相当すると捉えられる。さらに、鏡板の大きさが最小化した段階であることを重視すると、同形態の轡の盛行時期は、飛鳥Ⅳ期（遠江Ⅳ期末葉併行）に降る可能性も考えてよいだろう。

鞍金具の構造と編年的位置　原分古墳から出土した２組の鞍金具は、いずれも金銅装磯州浜分離鞍金具（宮代1996、千賀2003）で、古相の１号馬具には小型鋲を使用した１号鞍金具が、新相の２号馬具には大型鋲を使用した２号鞍金具が伴う。とくに、１号鞍金具は、海を縁金具で放射状に区画し、部分的に金銅板を嵌めこむ特徴をもつ点で注目できる（海金具部分張系列）。金銅板が嵌められていない部分には、有機物製の装飾板（漆塗板や織物など）が充てられていた可能性があり、遺存している金属部分のみで製作当初の姿を復元することには注意が必要である。海金具部分張系列のうち、全体形がうかがえるものとして、海の区画が７区画の奈良県市尾墓山古墳例（河上1984）、同じく７区画の奈良県東大寺山６号墳例（千賀編2003）、９区画の群馬県伝藤岡市出土例（米田1987）などがあげられる。原分古墳１号鞍金具は９区画である。区画が大きく金銅板が大きいものから、区画が小さく金銅板が小さいものへという変遷の傾向が認められよう。

１号鞍金具の海金具には、亀甲文と唐草文が列点によって施されている。亀甲文と唐草文という異なる模様が、具体的にどの区画に用いられたのかは、必ずしも明確ではない。確実に部位が判明するのは、前輪の左下端部（唐草文）と後輪の右下端部（亀甲文）のみである。このため、①前輪、後輪の各区画に唐草文、亀甲文が混在する、②前輪には唐草文が後輪には亀甲文が用いられている、という２種の復元案を提示せざるを得ない。ここでは、②の復元案を可能性が高いものとして図示しておく（図２）。海金具部分張系列の海金具に列点文が施されるのは新しい時期の特徴であり、本例の編年的位置は、TK43型式期～TK209型式期に求められる。

２号鞍金具は、幅が広い縁金具をもち、大型の鋲を少量打つという金銅装磯州浜分離鞍金具の中でも新相の特徴をもつ。類例として、島根県岡田山古墳例（松本編1987）、千葉県金鈴塚古墳例（滝口編

1952）などがあげられる。また、本例は、州浜金具の下縁が厚く縁取りされており、これら類例の中でも新しい属性を備える。金銅装磯州浜分離鞍金具は、飛鳥Ⅰ期後半には急速に衰退し、磯と州浜が一体になった金銅装磯州浜一体鞍金具が一般化することをふまえると、本例の編年的位置は、TK209型式期～飛鳥Ⅰ期後半（遠江Ⅲ期後葉～遠江Ⅲ期末葉）に求めることができる。

鐙の構造と編年的位置　原分古墳から出土した２組分の鐙は、いずれも鉄製で、古相を示すものが鉄製壺鐙、新相を示すものが鉄製輪鐙である。古相の１号馬具に伴う鉄製壺鐙（１号壺鐙）は、比較的長い柄をもち、鐙鞋受穴は壺部の口に対して直交方向にあけられている。金属製壺鐙は柄の長いものから短いものへの変遷が指摘されており（斉藤1985･86）、長い柄をもつ本例は、鉄製壺鐙の出現期に近い製品であることを示している。踏込の特徴、鐙鞋受穴近辺の形態的特徴も古相を示しており、本例の製作時期は金属製壺鐙の初源的段階と考えられる。編年的位置は、おなじく初源的な鉄製壺鐙を出土した群馬県綿貫観音山古墳（徳江編1999）との関連から、TK209型式期に相当すると捉えられよう。

いっぽう、新相の２号馬具に伴う板状踏込鉄製輪鐙（２号鐙）の類例は少なく、編年的位置づけの詳細な検討は難しい。須恵器が共伴し、年代が絞り込める例としては、神奈川県下尾崎１号横穴例（立花1995）や、藤枝市白砂ケ谷Ｃ２号墳例（八木他編1980）があげられるにすぎない。白砂ケ谷Ｃ２号墳では、飛鳥Ⅳ期～飛鳥Ⅴ期に併行する須恵器（遠江Ⅳ期末葉）がまとまって出土しており、下尾崎１号横穴の築造時期も飛鳥Ⅲ期を遡らない。このことから、板状踏込鉄製輪鐙の編年的位置は飛鳥Ⅲ期～飛鳥Ⅴ期（遠江Ⅳ期後葉～遠江Ⅳ期末葉併行）に中心があると捉えられる。しかし、従来の資料では、検討材料が限られており、詳細な出現時期を断定的に捉えるには限界がある。後述するように、２号馬具の組合せ関係と、共伴すると想定する須恵器の年代観を考慮すると、板状踏込鉄製輪鐙の出現時期は飛鳥Ⅱ期（遠江Ⅳ期前葉併行）まで遡る可能性があると捉えられよう。

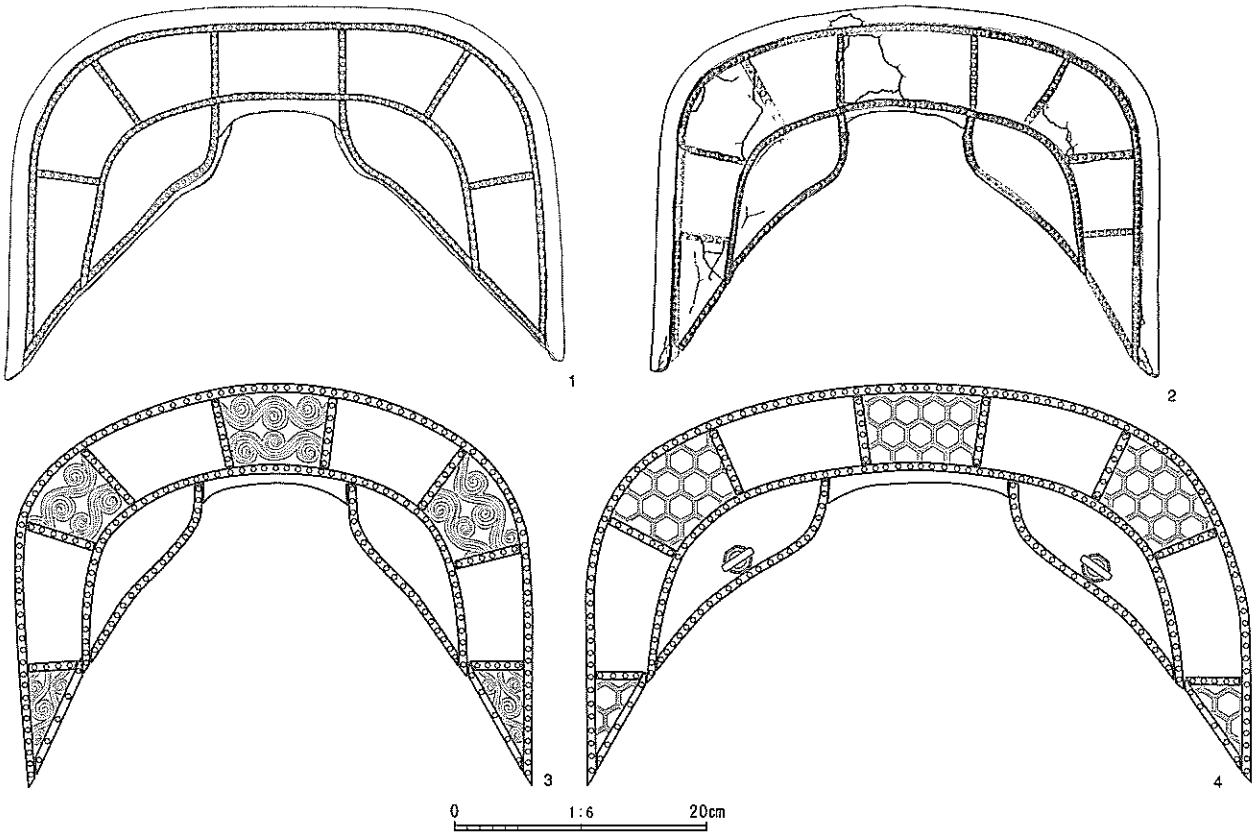


図３　鞍金具の類例と想定復元図
１：市尾墓山　２：伝藤岡市　３・４：原分１号鞍金具（復元図）

杏葉の構造と編年的位置　1号馬具に伴う三葉文心葉形杏葉は、鉄製地板に金銅板を張り、その上から別造りの鉄地金銅張の模様板（三葉文と縁金が一体となったもの）を連結している点が特徴であり、模様板には6箇所にわたり鋲が打たれている。三葉文心葉形杏葉は、後期前半（MT15型式期）からみられるが、後期後半（TK209型式期以降）以降に盛行する形態との差異が大きい。本例は、TK209型式期に定型化する新相の三葉文心葉形杏葉の系譜上に連なるものである。

本例は、地板に張られた金銅板とは別造りの鉄地金銅板張の模様板をもつ点で、比較的古い様相を留める。類例としては、奈良県牧野古墳（河上編1987）から出土した杏葉Aがあげられるが、この事例は鋲数が21と、密に打たれている点で本例よりさらに古い様相をもつ。いっぽう、おなじく牧野古墳の杏葉Bは、金銅板が一枚被せであるが、三葉文上部が二又にされ、鋲数が8と本例と類似した形態的特徴をもつ。奈良県平林古墳（坂編1994）にも牧野古墳出土杏葉Bと類似した金銅板一枚被せの三葉文心葉形杏葉が出土しているが、この事例における鋲数は7である。

三葉文心葉形杏葉は、TK209型式期の中でも比較的新しい時期には、金銅板一枚被せの技法に収斂し、使用される鋲数も4～3と新しい段階ほど減少する傾向がある。また、立聞の特徴は、飛鳥Ⅰ期後半以降、方形の立聞孔に通された鉤金具を介して革帯と連結する構造（有鉤系列）から、立聞孔をもたず立聞の突起に鋲を直接打ちつけて革帯を留める構造（無鉤系列）に変化する。さらに、新しい様相として、三葉文の模様が簡便化し二葉化することや、二葉化した葉文の先端の向きが上を向くものから下を向くものへ変化するといった傾向が指摘できる。これら無鉤系列にみられる変化は、飛鳥Ⅰ期後半を中心に展開したものと捉えられ、飛鳥Ⅱ期には三葉文心葉形杏葉の生産がほぼ終焉を迎えていると捉えられる。

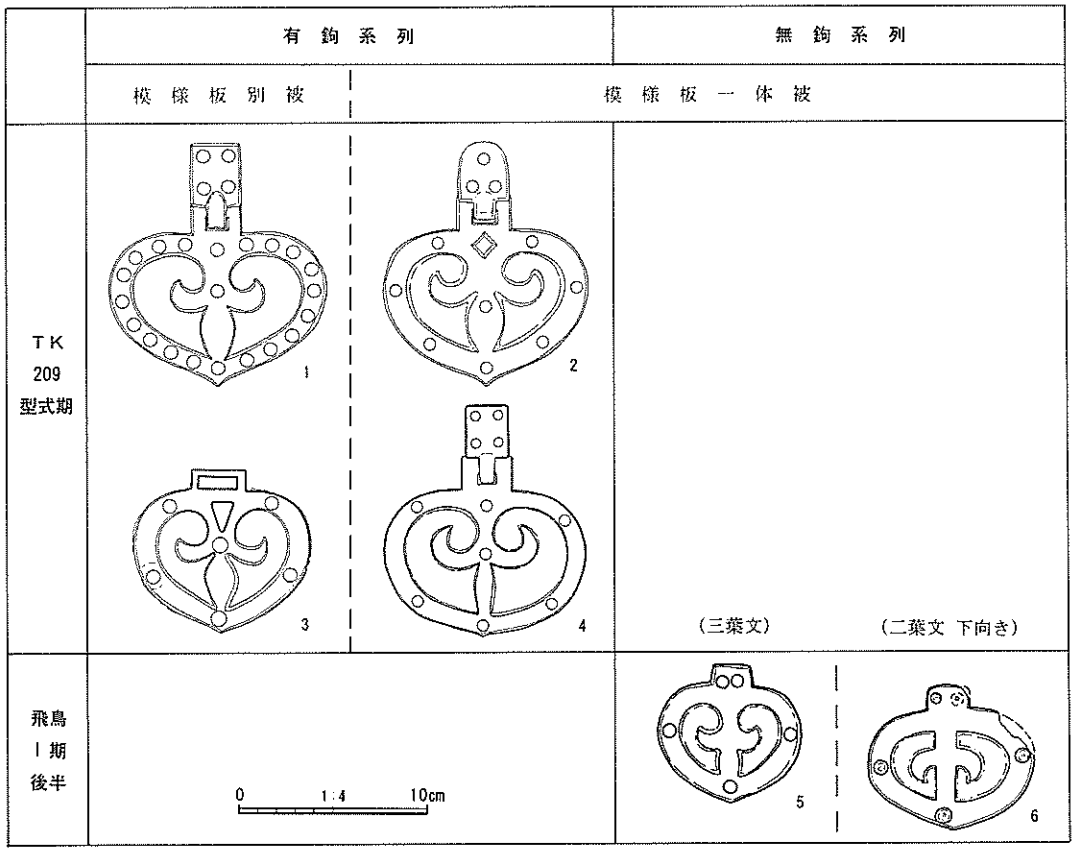


図4　三葉文心葉形杏葉の諸例

以上の事柄をまとめると、牧野古墳例を祖形として始まる新式の三葉文心葉形杏葉の変遷は、図４に示すように、整理できる。原分古墳例は、金銅板一枚被せの技法が盛行する以前の段階の製品と捉えられ、鋲数６という特徴から、金銅板一枚被せの牧野古墳杏葉Ｂや平林古墳例と同段階にあると位置づけられよう。帰属時期は、TK209型式期と捉えられ、牧野古墳から出土した須恵器の時期（TK209型式期の初頭）にその中心があるといえる。

馬装の帰属年代　原分古墳の馬具は多彩で、各馬装の部位ごとに、帰属年代に相違がみられる。遺物相互の編年観の調整も必要であるが、ここでは、図５に示すように、相互の編年的位置づけを整理しておく。以下、この図をもとに、本稿で想定した１号馬具、２号馬具の組合せが成立する年代を検討してみよう。

１号馬具は鞍金具、辻金具、杏葉といった金銅装馬具に古い傾向が認められ、轡と鐙といった鉄製馬具にやや新しい様相が看取できる。とくに、海金具部分張系列の金銅装鞍金具は、TK43型式期以前に類例の大半が求められ、原分古墳から出土した馬具の中で最も古式の様相をもつ。ただし、上述の検討から、原分古墳例は、海金具部分張系列のなかでも最新の特徴を備えていると評価できることから、鞍金具のみに長い伝世期間を想定する必要はないだろう。１号馬具における鞍金具、杏葉、辻金具などの金銅装馬具は、TK209型式期のものと捉えて矛盾はない。いっぽう、轡や鐙といった鉄製馬具は新しい時期にまで残存する傾向があるが、それぞれその出現期に近い頃に年代を想定すれば、金銅装馬具との時期的な開きはみられない。以上のことから、１号馬具の全体が示す帰属年代は、TK209型式期と評価できる。

２号馬具も鞍金具、辻金具、雲珠といった金銅装馬具が古相を、轡と鐙といった鉄製馬具が新相を呈する。金銅装馬具の中でも鞍金具により古い様相がみられることも１号馬具と共通する。古相を示す金銅装馬具の中心的な年代は、飛鳥Ⅰ期後半であるが、新相を示す鉄製馬具の中心的な年代は、飛鳥Ⅲ期～飛鳥Ⅳ期である。このように、古相を示す馬装と、新相を示す馬装の年代観は、須恵器型式で１～２

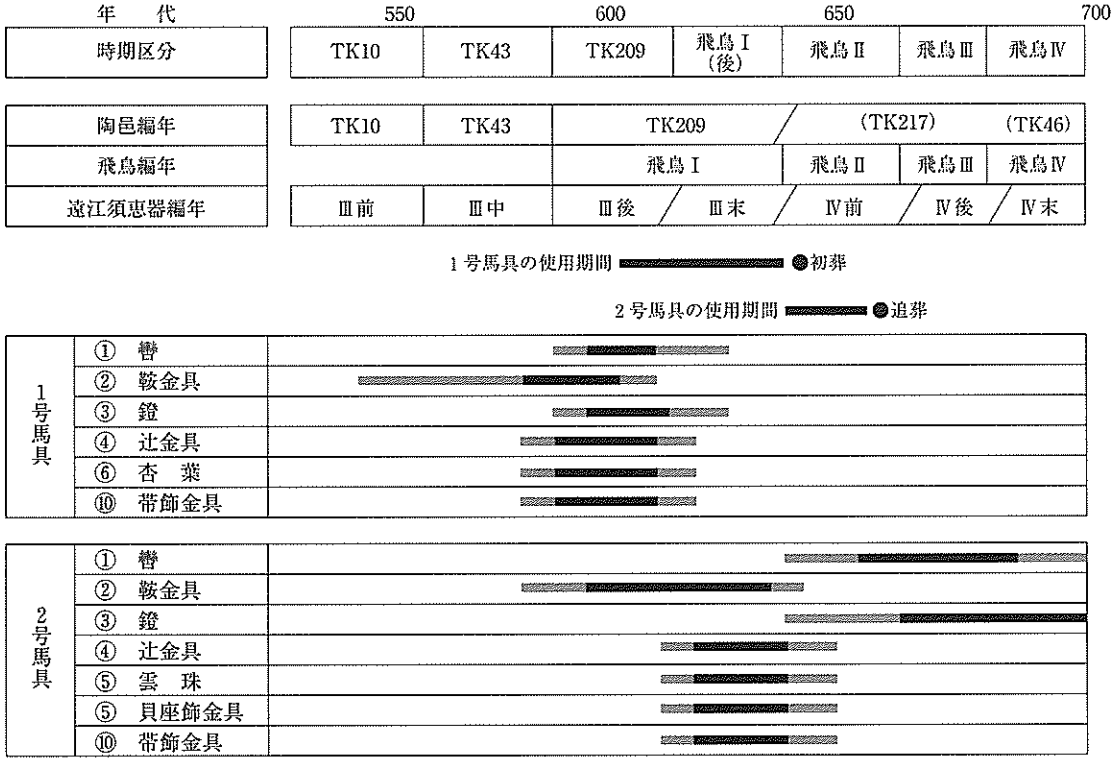


図５　原分古墳出土馬装の帰属年代

型式ほどの開きがある。この年代観の開きの調整には、古相を示す金銅装の馬装に、ある程度の伝世期間を想定し、いっぽう、鉄製馬具については、出現期をそれぞれ、若干、遡って捉えるという操作が必要である。金銅装馬具の伝世は、須恵器型式における１型式期程度であれば、想定可能であり、鉄製馬具の年代観については、資料が少なく年代の根拠が不明瞭な現状をふまえると、再検討の余地が多い。以上のことから、２号馬具の全体が示す帰属年代は、轡や鐙が示す年代の上限、すなわち、飛鳥Ⅱ期に求めておくのが最も妥当であろう。

4　原分古墳出土馬具と被葬者

年代差と使用者　金銅装馬具は、突出した有力階層の古墳を除くと、ほとんど1基の古墳から１組分しか出土しない。築造の契機となった被葬者の埋葬に伴って、１組分の金銅装馬具が副葬されたものと捉えられる。このことから、金銅装馬具は被葬者への属人性が高く、被葬者一人に１組の金銅装馬具が伴うことが分かる。原分古墳は、直径17mほどの規模で、地域の小首長層が築いた古墳と評価でき、その被葬者に突出的な上位階層の人物を想定することができない。さらに、２組の馬具には年代差があることを考慮すると、原分古墳から出土した２組の金銅装馬具を、一人の被葬者に伴うと捉えることは少々困難であろう。

１号馬具と２号馬具が示す年代差は、須恵器型式で、１～２型式、実年代では20～40年ほどの開きがある。原分古墳から出土した２組の馬具は、異なる２人の被葬者にそれぞれ伴い、副葬年代にもそれぞれ差があるとみるのが最も妥当であると判断できる。

副葬年代　２組の馬具の副葬年代を示すものは、副葬された須恵器である。原分古墳から出土した須恵器は、大きく遠江Ⅳ期前葉、Ⅳ期後葉の２時期に分離できる。馬具と関連する須恵器は、遠江Ⅳ期前葉のものと捉えられるが、同段階の須恵器には、副葬位置から数群のまとまりが抽出できる。このうち、開口部付近から出土した須恵器の一群には、脚部二段透かしをもつ高坏（29）や長頸壺（33）、口縁部が長い甕（20）など遠江Ⅲ期末葉的な様相が認められる。須恵器組成の総体としては遠江Ⅳ期前葉としてよいが、その中でも比較的古い時期の遺物群として捉えられよう。いっぽう、奥壁付近の須恵器の中には、古相を示す個体がみられず、遠江Ⅳ期前葉の典型例として認識できる。石室内出土の遠江Ⅳ期前葉の須恵器の群中には時期差があると捉えられるだろう。以上のことから、初葬の時期を遠江Ⅳ期前葉の初頭（遠江Ⅲ期末葉を含む可能性がある）、追葬の時期を遠江Ⅳ期前葉の後半頃に想定できる。併行する飛鳥編年に対応させるなら、初葬の時期が、飛鳥Ⅰ期の終わりから飛鳥Ⅱ期の初め頃、追葬の時期が飛鳥Ⅱ期の後半頃にあたるだろう。

使用年代　馬装全体の帰属年代から、副葬年代までの間が馬具の使用年代といえる。ここまでの検討によって、１号馬具の使用年代は、TK209型式期～飛鳥Ⅰ期後半（遠江Ⅲ期末葉併行）にあたり、２号馬具の使用年代は、飛鳥Ⅱ期（遠江Ⅳ期前葉併行）の中に収まるといえる。１号馬具に比較的長い使用期間が想定できるが、数十年の時間幅の中に収まることから、大きな矛盾はないといえるだろう。

副葬位置と被葬者の棺　１号馬具が初葬の被葬者に、２号馬具が追葬の被葬者に伴うと想定した。ここで注目できるのは、２組の馬具の出土状態である。石棺と奥壁に挟まれた空間は、比較的まとまった状態で副葬品が検出でき、大きく撹乱を受けていないと判断できる。この空間では、鞍金具を典型に、１号馬具、２号馬具の部材が入り乱れて出土している。これは、副葬当初から、１号馬具、２号馬具の双方が、石棺の奥に収められていたことをうかがわせる。１号馬具、２号馬具ともに、共通した副葬位置を選択していることを示しているといえよう。また、大刀や鉄鏃、弓金具、須恵器などの型式差や出土量を考慮すると、互いによく似た副葬品組成をもつ２人の被葬者が無理なく想定できる。初葬、追葬ともに、類似した副葬品組成をもち、副葬位置の共通性も高いと判断できる。

初葬の被葬者が納められた棺は玄室中央の家形石棺と捉えて問題はないだろう。いっぽう、1号馬具と同様に石棺と奥壁に挟まれた空間を2号馬具の副葬空間として利用していること、初葬と追葬は共通した副葬品組成をもち親縁性が高いことをふまえると、追葬の被葬者も家形石棺に合葬された可能性を考慮してよいだろう。ただし、追葬の被葬者の棺は、家形石棺とは断定できず、次に階層的に高いと判断できる棺、すなわち、石棺の前に置かれた、釘を使用した木棺である可能性も否定できない。

馬具の系譜　ここまで検討したように、原分古墳から出土した2組の馬具から、世代が異なる2人の被葬者が浮かび上がる。その被葬者像の実態に迫る上で、馬装の系譜関係について触れておこう。

1号馬具、2号馬具ともに、大きく、金銅装馬具と鉄製馬具に分離できることを指摘した。年代的な開きにかんしても、金銅装馬具が古相を、鉄製馬具が新相を示す点で共通する。また、両者には、類例の分布に差異があり、互いに系譜関係を異にする可能性がある。以下、馬装の系譜を金銅装馬具と鉄製馬具に分けて検討しておこう。

1号馬具における鞍金具の類例には、市尾墓山古墳、東大寺山6号墳といった大和の古墳があげられ、その他の鞍金具の類例にも倭王権と関係が深いf字形鏡板付轡が伴う場合が多い。1号馬具の鞍金具にかんしては、畿内中枢部との強いかかわりがうかがえるだろう。1号馬具に伴う三葉文心葉形杏葉についても、類例が牧野古墳や平林古墳など、大和における有力古墳からの出土が知られ、倭王権もしくは畿内中枢部の有力氏族との関連が高い装飾という評価が可能である。さらに、2号馬具の鞍金具についても、西日本地域に多くの類例が求められ、1号馬具における金銅装馬具と同様に倭王権や畿内有力氏族との結びつきを示すといえる。

いっぽう、鉄製馬具の分布や系譜にかんしては、金銅装馬具と対照的なあり方を示している。鉄製環状鏡板付轡の出土例が東日本に多いことは古くから指摘されているが（岡安1986）、ここでは、鐙の類例、分布を整理しておく。図6、表2において明らかであるように、原分古墳から出土した鉄製鐙の出土地は信濃、甲斐、駿河を境界域にして、東日本に分布の中心がある。近畿地方における出土例がほとんどみられないことを考えると、原分古墳の1号鐙、2号鐙のような鉄製馬具は、東日本地域において生産されていた可能性も考慮すべきである。

このように、原分古墳から出土した2組の馬具は、ともに畿内を中心とした西日本に系譜をもつ金銅装馬具と、東日本に系譜が連なる鉄製馬具が組合わされていると評価できる。原分古墳の被葬者は、金銅装馬具を倭王権や畿内有力氏族から入手し、轡や鐙といった鉄製馬具は近在に流通している製品を付加して使用した可能性がある。こうした系譜の差が1号馬具、2号馬具における金銅装馬具と鉄製馬具の時期差として現われているともいえるだろう。

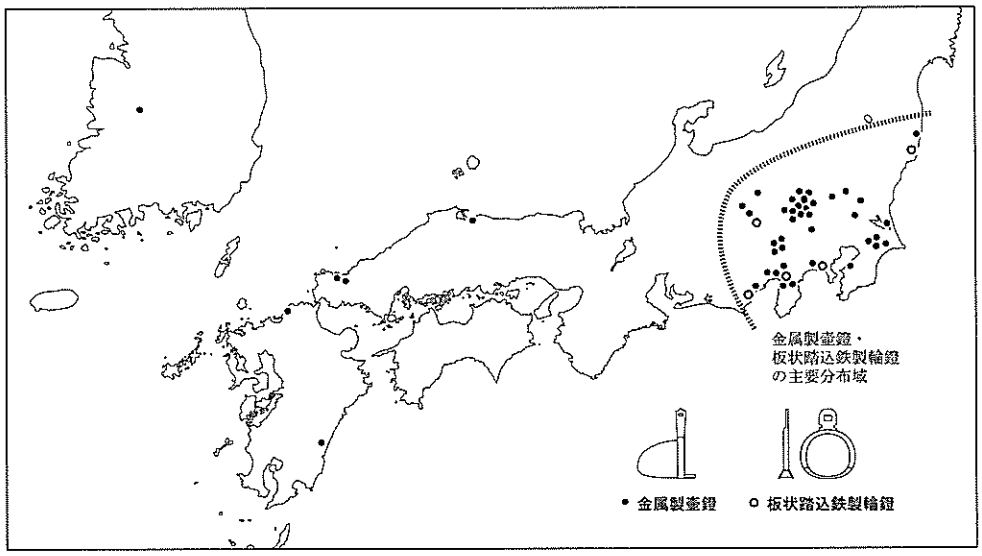


図6　金属製鐙の分布

表２　金属製壺鐙・板状踏込鉄製輪鐙出土例

所在地　古墳名	墳　形	埋葬施設	文　献
金属製壺鐙			
韓国　論山　伝新岩里出土	－	－	国立清州博物館1990『三国時代　馬具特別展』
岩手県　藤沢狄森古墳群	－	－	東日本埋蔵文化財研究会1997『遺物からみた律令国家と蝦夷』
福島県　名古谷新２号横穴	－	横穴	馬目順一1989『名古谷横穴群調査報告』楢葉町教育委員会
茨城県　前林古墳	不明	不明	東京国立博物館1980『東京国立博物館図版目録　古墳遺物編（関東Ⅰ）』
茨城県　成田３号墳	円墳	横穴式石室	黒澤秀雄1998『北浦複合団地造成事業内埋蔵文化財調査報告書Ⅰ』（財）茨城県教育財団
茨城県　伝茨城県出土	－	－	名古屋市博物館1985『特別展　古墳時代の馬具』
栃木県　足利公園麓古墳	円墳	横穴式石室	東京国立博物館1980『東京国立博物館図版目録　古墳遺物編（関東Ⅰ）』
栃木県　藤井38号墳	円墳	横穴式石室	大和久震平1967『藤井古墳群発掘調査報告書』壬生町教育委員会
栃木県　東浦古墳	円墳？	横穴式石室？	斉藤弘1985「古墳時代の金属製壺鐙」『日本古代文化研究』第２号
群馬県　綿貫観音山古墳	前方後円墳	横穴式石室	徳江秀夫（編）1999『綿貫観音山古墳Ⅱ　石室・遺物編』群馬県教育委員会
群馬県　佐野村58号墳	円墳	横穴式石室	群馬県古墳時代研究会1996『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』
群馬県　しどめ塚古墳	円墳	横穴式石室	尾崎喜左雄1981「しどめ塚古墳」『群馬県史』資料編３　原始古代３　古墳　群馬県
群馬県　川額軍原14号墳	円墳	横穴式石室	高崎市観音塚考古資料館1994『第7回企画展　馬具　古墳時代に馬がいた』
群馬県　前山古墳	前方後円墳	横穴式石室	右島和夫・徳江秀夫1999「前山古墳」『高崎市史』資料編1　原始古代1　高崎市
群馬県　諏訪神社古墳	前方後円墳	横穴式石室	石渕保1993「諏訪神社古墳」『藤岡市史』資料編　原始・古代・中世
群馬県　向吹張古墳	円墳	横穴式石室？	東京国立博物館1983『東京国立博物館図版目録　古墳遺物編（関東Ⅱ）』
群馬県　水泉寺古墳	円墳	横穴式石室	群馬県古墳時代研究会1996『群馬県内出土の馬具・馬形埴輪』
群馬県　奈良力古墳	円墳？	横穴式石室	梅澤重昭1995『奈良古墳群』『沼田市史』資料編1　原始古代中世　沼田市
群馬県　伝倉賀野出土	－	－	東京国立博物館1983『東京国立博物館図版目録　古墳遺物編（関東Ⅱ）』
群馬県　伝美九里出土	－	－	天理大学1988『ひとものこころ　天理大学附属天理参考館蔵品　縄文・弥生・古墳』天理教道友社
群馬県　伝金井出土	－	－	群馬県立博物館1990『群馬県立歴史博物館所蔵資料目録』
埼玉県　古凍14号墳２号土坑	円墳	馬埋葬土坑	江原昌俊1999『古凍14号墳（第１次・２次）』東松山市教育委員会
千葉県　鬣塚39号墳	方墳	横穴式石室	千葉県企業庁1975『公津原』
千葉県　天王・船塚４号墳	円墳	横穴式石室	千葉県企業庁1975『公津原』
千葉県　松面古墳	方墳	横穴式石室？	白石太一郎・白井久美子・山口典子2002『千葉県史編さん資料　千葉県古墳時代関係資料』千葉県
千葉県　玉造古墳※1	－	－	荻悦久1992「下総東部における終末期古墳の様相」『国立歴史民俗博物館研究報告』第44集
千葉県　西大須賀横穴墓群※2	－	横穴	白石太一郎・白井久美子・山口典子2002『千葉県史編さん資料　千葉県古墳時代関係資料』千葉県
神奈川県　上栗原５号横穴	－	横穴	立花実（編）1995『三ノ宮・下尾崎遺跡　三ノ宮・上栗原遺跡発掘調査報告書』伊勢原市教育委員会
山梨県　さんごし塚古墳	－	－	後藤守一1928「原始時代の武器と武装」『考古学講座』第６巻
山梨県　梅沢無名墳	－	－	坂本美夫1999「馬具」『山梨県史』資料編２　原始・古代２　山梨県
山梨県　古柳塚古墳	不明	横穴式石室？	古柳塚古墳研究会2004「古柳塚古墳の研究」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』第12集
山梨県　伝右左口出土	－	－	坂本美夫1999「馬具」『山梨県史』資料編２　原始・古代２　山梨県
長野県　コウモリ塚古墳	円墳	横穴式石室	藤森栄一ほか1966「岡谷市コウモリ塚古墳」『松本諏訪地区新産業都市地域内埋蔵文化財緊急分 布調査報告』長野県考古学協会
長野県　南方古墳	不明	横穴式石室	関沢聡ほか1990『大塚古墳　南方古墳　南方遺跡』松本市教育委員会
長野県　伝浄楽寺上塚出土	－	－	名古屋市博物館1985『特別展　古墳時代の馬具』
静岡県　宮原２号墳	不明	横穴式石室	川江秀孝1992「馬具」『静岡県史』資料編３　考古三　静岡県
静岡県　藤明18号墳	不明	横穴式石室	川江秀孝1992「馬具」『静岡県史』資料編３　考古三　静岡県
静岡県　原分古墳	円墳	横穴式石室	井鍋誉之（編）2008『原分古墳』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　**（本書）**
静岡県　下土狩西１号墳※2	円墳	横穴式石室	川江秀孝1992「馬具」『静岡県史』資料編３　考古三　静岡県
静岡県　東平１号墳※3	円墳	横穴式石室	久松義昭1990『東平第1号墳発掘調査概報』富士市教育委員会
静岡県　半兵衛奥古墳※3	円墳？	横穴式石室	川江秀孝1992「馬具」『静岡県史』資料編３　考古三　静岡県
鳥取県　石州府１号墳	円墳	横穴式石室	小原貴樹・下高端哉1989『石州府古墳群発掘調査報告書』米子市教育委員会
山口県　稼塚横穴墓群※4	－	横穴	中村徹也2000『稼塚横穴墓群』『山口県史』資料編　考古1　山口県
福岡県　宮地獄古墳※1	円墳	横穴式石室	保坂三郎・西村強三1968『国宝宮地獄古墳出土品修理報告書』宮地獄神社
宮崎県　西都原地下式横穴墓※3	－	地下式横穴	宮代栄一1995「宮崎県出土の馬具の研究」『九州考古学』第70号
板状踏込鉄製輪鐙			
福島県　八幡９号横穴※5	－	横穴	吉田生哉ほか2001『荒田目条里遺跡』いわき市教育委員会
神奈川県　下尾崎１号横穴	－	横穴	立花実1995『三ノ宮・下尾崎遺跡　三ノ宮・上栗原遺跡発掘調査報告書』伊勢原市教育委員会
長野県　茅野大塚古墳	不明	横穴式石室？	宮坂光昭1973「茅野市大塚古墳について」『長野県考古学会誌』７
静岡県　原分古墳	円墳	横穴式石室	井鍋誉之（編）2008『原分古墳』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　**（本書）**
静岡県　白砂ヶ谷Ｃ２号墳	円墳	横穴式石室	八木勝行ほか（編）1980『原古墳群白砂ケ谷支群』藤枝市教育委員会

※１：金銅製　※２：壺部有機物製　※３：壺部青銅製　※４：鋳銅製、２組出土　※５：踏込部欠損

５　結　語

ここまでの検討で、原分古墳から出土した２組の馬具は、初葬と追葬という世代差のある２人の被葬者に伴い、それぞれ共通した副葬品組成をもち、類似した副葬手順をふんでいる可能性を指摘した。また、２組の馬具は、金銅装馬具と鉄製馬具に分けられ、ともに、畿内と東日本という系譜の差をもつことでも共通していることが確認できた。これらの検討によって、原分古墳の被葬者は、倭王権や畿内有力氏族との結びつきが強いとともに、東日本における実用的な鉄製馬具の生産と流通にもかかわりをもつ人物であったことがうかがえる。

世代差がありながら、互いによく似た性格をもつ２人の被葬者は、卓越する武器、馬具の様相から男性の可能性が高い。原分古墳の被葬者像には、７世紀の前半代を通じて、２代にわたり畿内中枢部に軍事的な出仕、奉仕を行い、いっぽうで地元において馬匹生産や騎馬集団の編成を統括する役割を担うという、累代の舎人的性格（岡安1986）を読み取ることができるだろう。

参考文献

岡安光彦　1985　「いわゆる「素環の轡」について―環状鏡板付轡の型式学的分析と編年―」『日本古代文化研究』第１号　古墳文化研究会

岡安光彦　1986　「馬具副葬古墳と東国舎人騎兵」『考古学雑誌』第71巻第4号

川江秀孝　1992　「馬具」『静岡県史』資料編３　考古三　静岡県

河上邦彦　1984　『市尾墓山古墳』高取町教育委員会

河上邦彦（編）　1987　『史跡牧野古墳』広陵町教育委員会

斉藤　弘　1985　「古墳時代の金属製壺鐙」『日本古代文化研究』第２号　古墳文化研究会

斉藤　弘　1986　「古墳時代の壺鐙の分類と編年」『日本古代文化研究』第３号　古墳文化研究会

立花　実（編）　1995　『三ノ宮・下尾崎遺跡　三ノ宮・上栗原遺跡発掘調査報告書』伊勢原市教育委員会

坂　靖（編）　1994　『平林古墳』當麻町教育委員会

滝口　宏（編）　1952　『上総金鈴塚古墳』早稲田大学考古学研究室

千賀　久　2003　「日本出土の「新羅系」馬装具の系譜」『東アジアと日本の考古学Ⅲ』同成社

千賀　久（編）　2003　『古墳時代の馬との出会い―馬と馬具の考古学―』奈良県立橿原考古学研究所附属博物館

徳江秀夫（編）　1999　『綿貫観音山古墳Ⅱ　石室・遺物編』群馬県教育委員会

松本岩雄（編）　1987　『出雲岡田山古墳』島根県教育委員会

宮代栄一　1996　「古墳時代の金属装鞍の研究」『日本考古学』第３号

八木勝行ほか（編）　1980　『原古墳群白砂ケ谷支群』藤枝市教育委員会

米田文孝　1987　「群馬県藤岡市出土馬具考―鐘形杏葉を中心に―」『文化史論叢』横田健一先生古稀記念

図出典

図１　本書掲載図より作成

図２　下記文献より改変、再トレース　鳴滝1号墳例（１）：樋口隆康・近藤喬一・吉本堯俊1967『和歌山県文化財調査報告第二冊』和歌山県文化財協会、波田1号墳例（２）・賤機山古墳例（５）・石川T5号墳例（７）：川江秀孝1992「馬具」『静岡県史』資料編３　考古三　静岡県、天神のこし例（３）：野沢昌康ほか1976『天神のこし古墳』春日居町教育委員会、蛭子森古墳例（６）：鈴木敏則1995「浜松市指定文化財-古墳-　石室を見学できる古墳」浜松市教育委員会、夏梅木６号墳例（８）：三島市教育委員会2000『夏梅木遺跡群』

図３　下記文献より引用　市尾墓山古墳例（１）：河上邦彦1984『市尾墓山古墳』高取町教育委員会、伝藤岡市（２）：米田文孝1987「群馬県藤岡市出土馬具考―鐘形杏葉を中心に―」『文化史論叢』横田健一先生古稀記念　原分古墳例（３・４）は筆者作成

図４　下記文献より引用　牧野古墳例（１・３）：河上邦彦（編）1987『史跡牧野古墳』広陵町教育委員会、平林古墳例（４）坂　靖（編）1994『平林古墳』當麻町教育委員会、別所1号墳例（５）・池田山2号墳例（６）：川江秀孝1992「馬具」『静岡県史』資料編３　考古三　静岡県

図５・６　筆者作成

原分古墳出土刀剣類の復元と被葬者の性格

大谷　宏治

1　はじめに

原分古墳からは金銅装圭頭大刀、銀象嵌円頭大刀をはじめ４点（註１）、鉄鉾１点の刀剣類が出土しているが、これらは著しく破壊を受け、拵えの全容が判明するものは存在しない。したがって、まずこれまでの研究成果や出土例をもとに原分古墳出土刀剣類の復元を試みたい。さらに、各刀剣類の編年的位置を確認した上で、刀剣類からみた原分古墳の被葬者像を描き出したい。

2　原分古墳出土刀剣類の復元と編年的位置

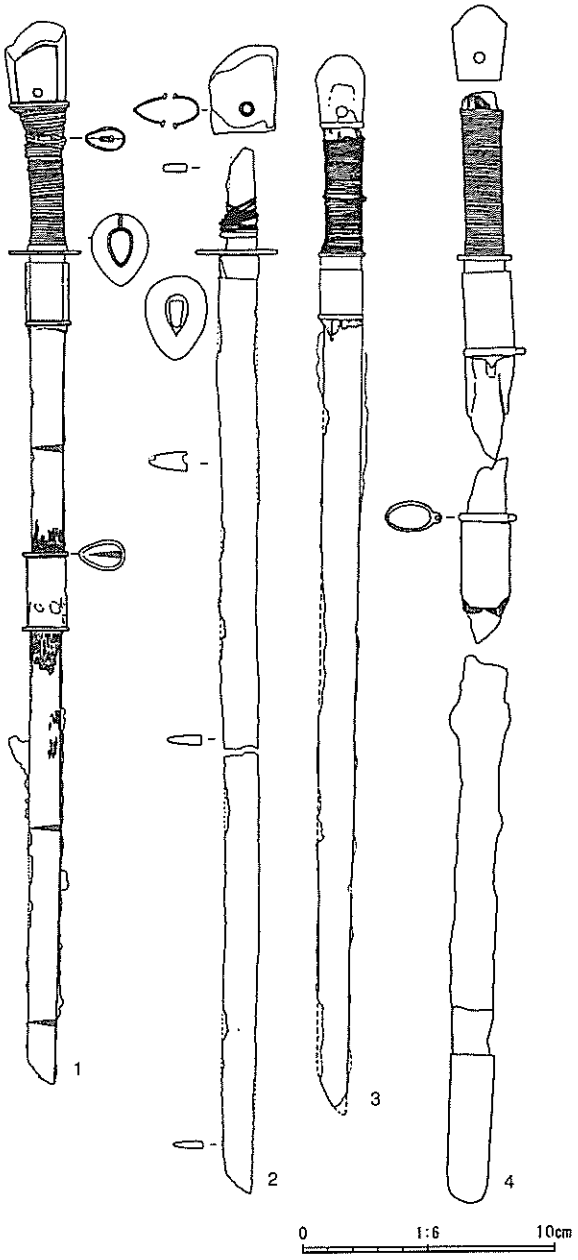
(1) 金銅装圭頭大刀

拵えの復元　原分古墳の圭頭大刀は木製柄に金銅線を螺旋状に巻き付ける金銅線巻柄間であり、鞘は少なくとも金銅装鞘口金具、鞘間金具をもつ「準素鞘」（瀧瀬1984、以下素鞘、準素鞘、飾鞘は瀧瀬1984による）である可能性が高い。この想定が正しければ、茨城県梶山古墳（汀編1981）、埼玉県吉見かぶと塚古墳（瀧瀬1984）、福島県蝦夷穴古墳（瀧瀬1984）などの事例に類似する。また、柄頭は梶山古墳のような金銅板２枚を覆輪状の金具で覆うものではなく、蝦夷穴古墳例や吉見かぶと塚古墳例のごとく一体作りのキャップ状の柄頭であった可能性が高い。現状では金銅装を含め佩用のための吊手金具（足金物）は出土しておらず、本来伴わない可能性が高い。

上記の３古墳出土例は瀧瀬芳之により「金属線巻柄準素鞘二足佩用圭頭大刀（Ｌ１類）」とされ、無窓鍔（あるいは喰出鍔）を伴う（瀧瀬1984）。また、菊地芳朗による圭頭大刀C2類（註２）に該当する可能性が高い（菊地2003）。

したがって、原分古墳出土圭頭大刀は無窓鍔をもち、柄は吉見かぶと塚古墳例、蝦夷穴古墳例と類似し、鞘は梶山古墳例と類似する、キャップ状柄頭、金銅線巻柄間、準素鞘で、布紐などによる佩用（横佩）であった可能性が高い。

編年的位置　原分古墳例と同様の特徴を有する圭頭大刀を瀧瀬は「金属線巻準素鞘二足佩用圭頭大刀（L1）」としTK43型式期～TK217型



1　茨城県梶山古墳　2　静岡県神明４号墳
3　埼玉県吉見かぶと塚古墳　4　福島県蝦夷穴古墳

図１　原分古墳と類似する圭頭大刀の拵え（瀧瀬分類L1類）

式期に位置づける（瀧瀬1984）。また、菊地はＣ２類を含むC類をB段階～C段階（TK43型式期～TK209型式期）に位置づける（菊地2003）。さらに、西澤正晴は圭頭大刀を柄頭の形状からⅠ類～Ⅳ類に分類した上でⅡ類～Ⅳ類を3段階区分し、原分古墳と同様な拵えをもつ梶山古墳例、吉見かぶと塚古墳例などをTK43型式期～TK217型式期（飛鳥Ⅱ期）に位置づけている（西澤2000）。

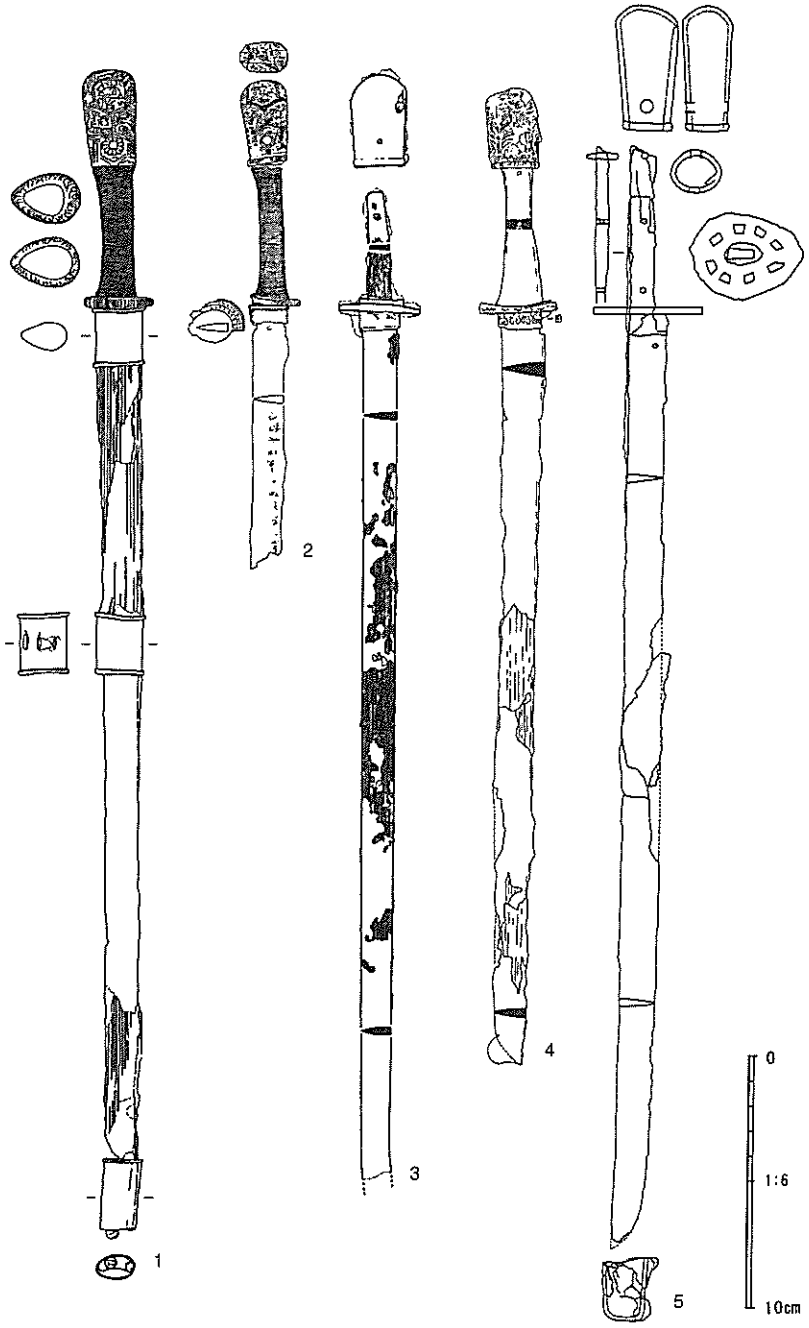
したがって、原分古墳出土圭頭大刀は同様の特徴を有する事例からTK43型式期～飛鳥Ⅱ期（TK217型式期）の所産であることが判明し、菊地の編年観からするとTK209型式期以前の可能性がある。また、原分古墳の圭頭大刀は出土地点が家形石棺の破片と近いことから家形石棺内部に埋葬された初葬者に伴う副葬品である可能性が高い。

(2) 銀象嵌円頭大刀

銀象嵌円頭大刀は、全国で約50例（註３）が出土している。残存状況が良好なものは少ないが、拵え全体がほぼ判明する事例（図２・３）を参考に復元してみたい。

柄の構造　柄は、橋本博文編年１・２段階（橋本1993）に位置づけられる群馬県平井地区1号墳例（志村編1993）、島根県岡田山１号墳例（松本編1987）は柄間に銀線巻を施す（図2）。また、同段階の香川県母神山古墳群出土の鬼面文金銀象嵌円頭大刀は、町田章により、銀線巻柄に復元され（町田1991）、兵庫県勝福寺古墳例が銀線巻の可能性が高い（瀧瀬1984ほか）。

一方で、橋本編年３段階以降に位置づけられるもののうち、群馬県筑波山古墳例は銀線巻柄が別個体で存在することから、銀線巻であった可能性が指摘される（橋本1985）が、千葉県瓢塚40号墳例（安藤1990）、梶山古墳出土例、山梨県稲荷塚古墳例（末木編1988）、石川県須曽蝦夷穴古墳例（冨田・関森ほか編2001）、栃木県トトコチ山古墳例（橋本1993）は銀線巻や金銅板巻などの金属製柄間金具



1　群馬県平井地区1号墳　2　島根県岡田山1号墳　3　茨城県梶山古墳　4　千葉県瓢塚40号墳　5　栃木県トトコチ山古墳

図２　銀象嵌円頭大刀の拵え

を伴わない形態である（註４）。

鞘の構造　橋本編年２段階の平井地区１号墳例は、鞘口・鞘間・鞘尻金具が銀装で、飾鞘ではないものの、「準素鞘」と装飾性の高い拵えである。

一方、橋本編年３段階の梶山古墳例は、鞘には金属製鞘金具を用いていない。また、このほかの３～５段階の事例も鞘尻に銀象嵌鞘尻金具を、鞘に責金具、佩用（吊手）金具を用いるものは存在するが、基本的に「素鞘」であり、金・銀装の飾金具を用いない。さらに、原分古墳と同段階に位置づける須曽蝦夷穴古墳例（図３）は刀装具の残存状況が良く、鞘尻、佩用金具、責金具などに銀象嵌の刀装具を用いるが、これ以外に鞘金具はなく、「素鞘」である。

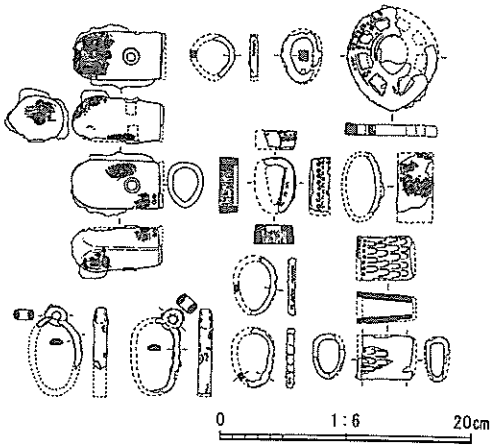
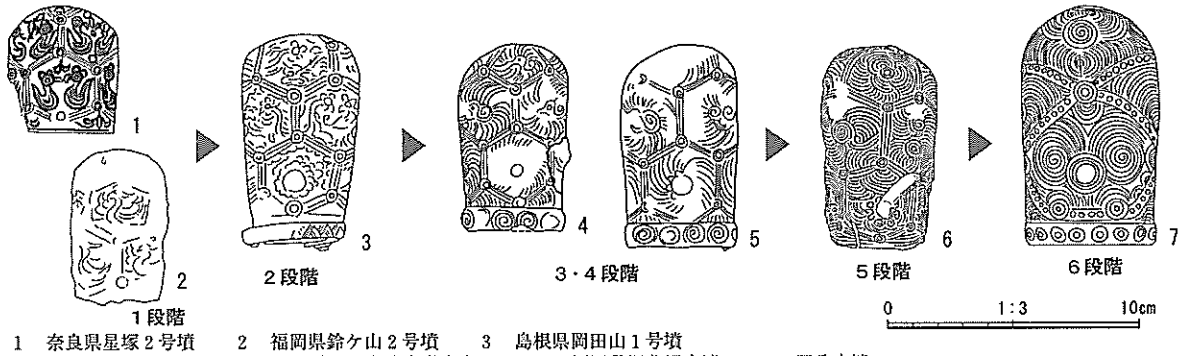


図３　須曽蝦夷穴古墳出土銀象嵌円頭大刀装具

銀象嵌円頭大刀の復元　上述したように銀象嵌円頭大刀は初期段階（橋本編年1・2段階）に位置づけられる平井地区1号墳例、岡田山1号墳例などには銀線巻柄、金銅装・銀装「準素鞘」構造であったものが、量産化がはじまる3段階以降（橋本1993）、柄間には特別な金属製の装飾を持たず、鞘にも鞘尻金具を除いて金属製の飾りを施さない素鞘に変化している。つまり、橋本編年6段階に位置づけられる原分古墳例も、梶山古墳例、瓢塚40号墳例をはじめとする3段階以降の多くの事例同様、柄間には特別な金属製の飾りをもたず、鞘尻や佩用金具を用いない「素鞘」であった可能性が高い。

円頭柄頭の編年的位置　亀甲繋鳳凰文をはじめとする象嵌円頭大刀は西山要一（西山1986、1996）や橋本博文などが編年案を示している。橋本は梶山古墳例の検討（橋本1981）に始まり、筑波山古墳例（橋本1985）やトトコチ山古墳例（橋本1986）の検討を加え、最終的に懸通孔・目釘孔の位置、亀甲繋文と内部の文様の変化の相関関係から１～９段階に区分する編年案を提示した（橋本1993）。図4に橋本のおおよその編年順序を示した。橋本によれば、鳳凰が頭部・翼などの表現が明確なもの（第１・２段階）から頭部は明確であるが翼の表現が曖昧になる段階（第３段階）、頭部・亀甲繋文のどちらかが変形する段階（４・５段階）、鳳凰文の頭部が完全に失われ、亀甲繋文が変形し六角形ではなくなる段階（６段階）に編年している。原分古墳例は、亀甲繋文・鳳凰文がともに変形しているため、6段階に位置づけられる。橋本氏は6段階の帰属時期を特定していないが、５段階をTK209型式期～TK217型式期に、7段階をTK217形式期に比定している（橋本1993）ことから、６段階は飛鳥Ⅰ期～飛鳥Ⅱ期に位置づけられる。

原分古墳と同一段階の象嵌円頭柄頭の製作順序　原分古墳例とほぼ同段階（橋本編年６段階）の象嵌



1　奈良県星塚２号墳　2　福岡県鈴ケ山２号墳　3　島根県岡田山１号墳
4　群馬県藤岡市本郷出土　5　群馬県高崎市岩鼻出土　6　福岡県塚花塚古墳　7　原分古墳

図４　銀象嵌円頭大刀の変遷（橋本1993を参考に作成）

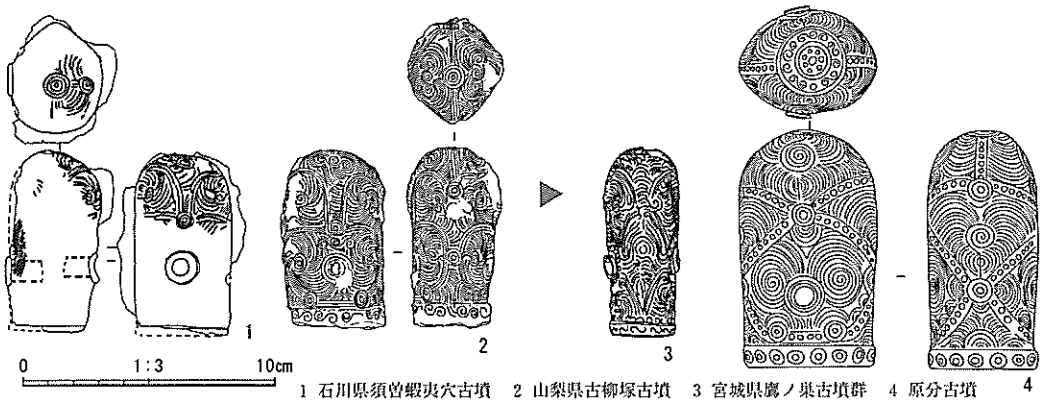


図5　変形亀甲繋文銀象嵌円頭大刀の製作順序

円頭大刀はパルメット文象嵌のトトコチ山古墳例（橋本1986)、長野県上溝11号墳（澁谷・羽生編2004）例を含め8例あるが、このうち変形亀甲繋文円頭大刀の4例の製作順序についてみておこう（図5)。

石川県須曽蝦夷穴古墳雌穴石室例（冨田・関森ほか編2001）　変形亀甲繋文で、変形亀甲繋文の支点環文は三重円文で、連結線は三本である。変形亀甲繋文の内部には中心に渦巻文を配し、その周囲は「旋毛状文」を巡らせている。頂部は四重円文である。

山梨県古柳塚古墳例（古柳塚古墳研究会2004）　変形亀甲繋文で、変形亀甲繋文の支点環文は三重円文で、連結線は三本線、頂部は四重円文である。主文様は渦巻文と一部鳳凰の頭部の形を想起させる渦巻文を3つ合わせた文様であり、その周囲には「旋毛状文」を配置する。上記した須曽蝦夷穴古墳例と酷似しており、同一工人の手による可能性が高い。

宮城県鷹ノ巣古墳群例（橋本1993、高橋編2002）　変形亀甲繋文で、亀甲繋文はほぼ消滅している。変形亀甲繋文の支点環文は2ヵ所のみ確認でき、二重円文である。これ以外の本来支点環文が配置されるべき場所は渦巻文であったり、連結線を繋げたりして終了する。変形亀甲文内部には左右対象に二重円文を起点とした旋毛状文を配置する。頂部は単円を中心に蜘蛛のような文様である。

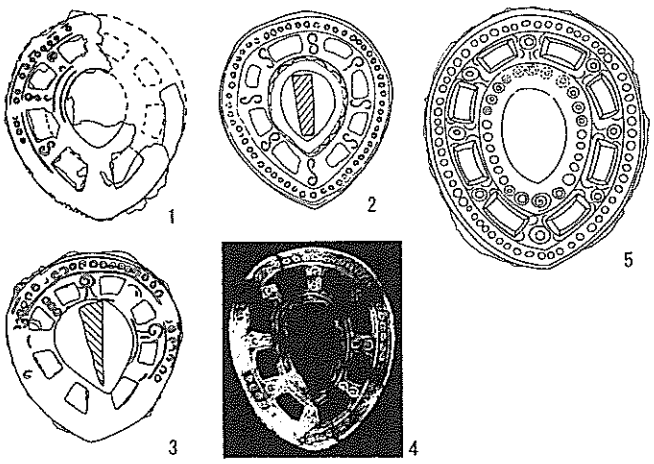
原分古墳例　変形亀甲繋文で、変形亀甲繋文の支点環文は三重円文で連結線は二重圏線の間を連続円文で充填している。主文様は渦巻文と半円文を配置している。頂部は二重圏線で区画された中に円文、渦巻文、蕨手文を配置している。

上記の4例のうち、須曽蝦夷穴古墳例、古柳塚古墳例は変形亀甲繋文内部の渦巻文の周囲には「旋毛状文」が配されており、橋本編年3～5段階までの文様構成を留める。一方で、原分古墳例は「旋毛状文」はなく、中心の文様を挟んだ半円文・枝垂れ状文に変化しており、上記2例より新しく位置づけられる。また、原分古墳例のみ亀甲繋文の連結線が三本線ではなく、二重圏線の間を円文で充填しており、この文様から見ても一段階新しく位置づけられる。一方、鷹ノ巣古墳群例は亀甲繋文や内部の文様がさらに変容していることから須曽蝦夷穴古墳例、古柳塚古墳例よりは新しく位置づけられるものの、原分古墳例とは文様に差異が大きく前後関係は明確ではない。したがって、橋本編年6段階の中でも須曽蝦夷穴古墳例、古柳塚古墳例→原分古墳例、鷹ノ巣古墳群例という時期的な前後関係を想定できる。

象嵌鍔の編年的位置　原分古墳の銀象嵌鍔には同様の文様を有する鍔が存在する（図6)。宮城県上蟹沢古墳例（高橋編2002)、富士市東平1号墳例（川江1992)、岡部町筧沢1号墳例（東海古墳文化研究会編2006)、須曽蝦夷穴古墳例（冨田・関森ほか編2001）である。これらは八窓鍔であり鍔の平の外周に連珠円文を巡らせる点、耳にも連珠円文を施す点で共通しており、同一工房で近接時期に生産された可能性が高い。特に須曽蝦夷穴古墳例、東平1号墳例、上蟹沢古墳例は、窓間、内孔縁の文様等が酷似

しており、同一工人の手になる可能性が高い。

これらはすべて飛鳥Ⅰ期～飛鳥Ⅱ期に位置づけることができ、原分古墳や須曽蝦夷穴古墳の象嵌円頭柄頭の編年観と一致する。また、鍔は新しくなるにつれ縦長傾向にあること（橋本1993、菊地1993、西澤2002ほか）を考慮すると、円形に近い須曽蝦夷穴古墳例、東平１号墳例、筧沢古墳例が若干古く、縦長傾向にある原分古墳例と上蟹沢古墳例が新しい可能性がある。



1　石川県須曽蝦夷穴古墳　2　静岡県東平1号墳　3　静岡県筧沢１号墳
4　宮城県上蟹沢古墳　5　原分古墳

図６　原分古墳出土例と類似する銀象嵌鍔

(3) 二円孔鍔付大刀

拵えの復元　二円孔鍔は、折原洋一の集成により房総半島～東北地方を主体に分布することが明らかにされている（折原1997）。この鍔を伴う大刀の拵えは千葉県胡摩手台16号墳（萩原編2004）をはじめ鉄製鍬を有するほかは、柄・鞘ともに特別な金属製の飾りを持たない（図７）。また、刀身は一部両関があるが片関が多く、茎尻は一文字尻あるいは栗尻（丸尻）である。したがって、原分古墳例も鉄製二円孔鍔・鉄製鍬を備え、刀身が片関、茎尻が一文字尻あるいは栗尻で、鞘は佩用金具をもたない「素鞘」であった可能性が高い。

なお、千葉県我孫子市内（千葉県資料研究財団編2002）から出土した二円孔鍔の二円孔部分に革紐が残存しており、この二つの孔には、皮や紐等の手貫緒が通されていた可能性が高い。

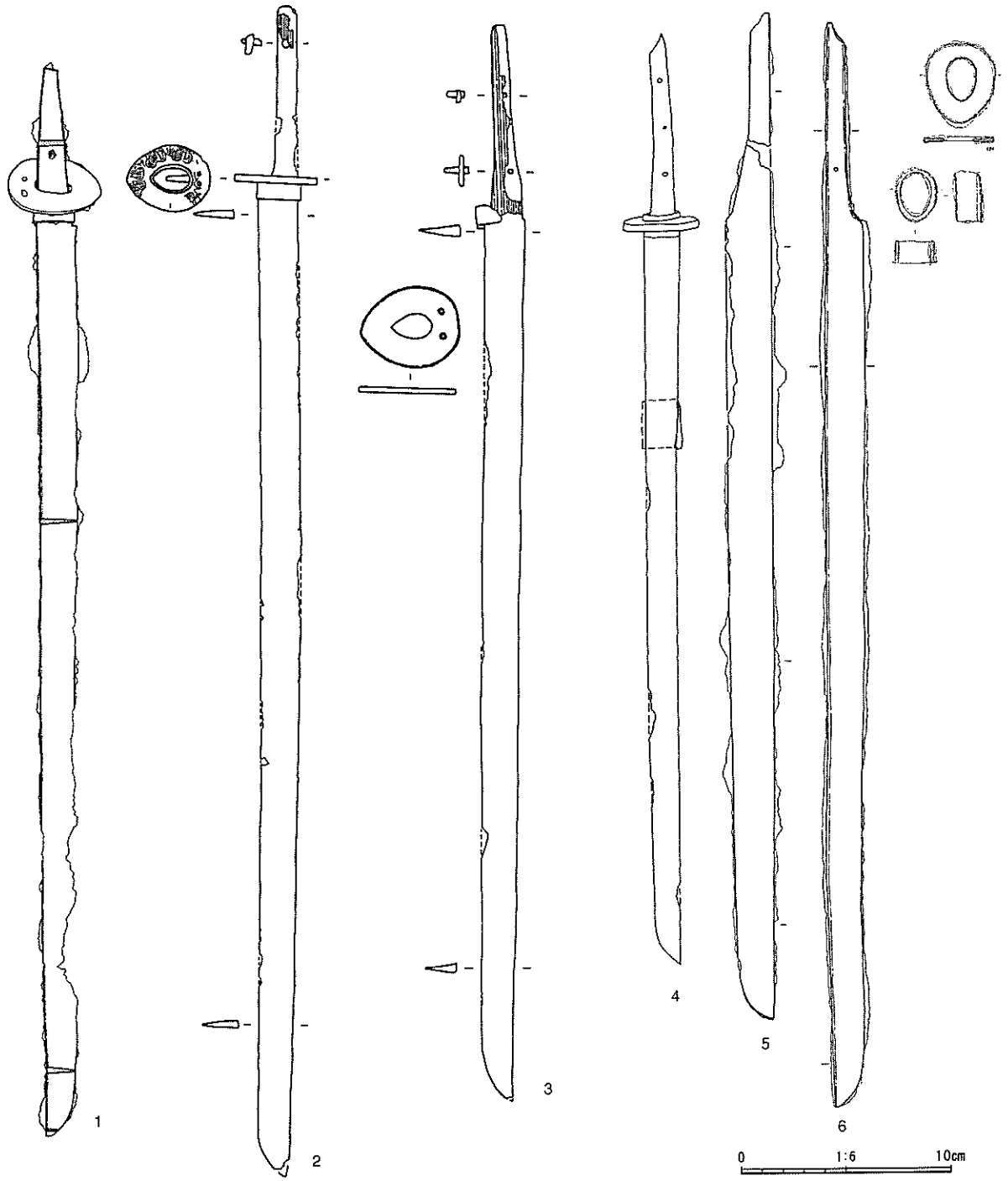
編年的位置　二円孔鍔付大刀は宮城県大年寺山1号横穴墓出土（佐藤・菊地編1990）の銀象嵌二円孔鍔は象嵌文様からTK209型式期に位置づけられる（橋本1993）など東北地方出土６例の一部はTK209型式期に遡及する可能性があるが（菊地1993）、二円孔鍔付大刀の半数が出土する房総半島では飛鳥Ⅰ期～飛鳥Ⅱ期に集中する。したがって、二円孔鍔付大刀は一部にTK209型式期まで遡る可能性があるが、飛鳥Ⅰ期～飛鳥Ⅱ期が多いため、原分古墳例も飛鳥Ⅰ期～飛鳥Ⅱ期に位置づけられる蓋然性が高い。

(4) 無窓鍔撫関隅抉尻細茎大刀

拵えの復元　原分古墳出土大刀のうち遺物番号38は「撫関隅抉尻細茎」（臼杵1984）に位置づけられる。静岡県内で古墳時代後期後半（TK43型式期）以降に撫関隅抉尻細茎の特徴を有するものは、遠江地域では森町林5号墳（註5）、牧之原市小堤山1号横穴墓（大谷2001）、同・大寄C6号横穴墓（松下・小谷ほか編2000）があり（図7）、駿河地域では富士市中里75号墳（後藤編1958）、同・東平1号墳（静岡県編1992）がある。東平1号墳が銀象嵌八窓透鍔を伴うが、小堤山1号横穴墓、林5号墳は無窓鍔を伴う。つまり、原分古墳には少なくとも圭頭大刀、円頭大刀、二円孔鍔付大刀、無窓鍔付大刀の4点の副葬があり、前三者には隅抉尻茎が伴わない可能性が高いことからすれば、無窓鍔（23）を伴う大刀茎である可能性が高い。したがって、原分古墳の撫関隅抉尻細茎の大刀は無窓鍔で鍬を備え鞘の飾りは持たない「素鞘」の大刀であった可能性が高い（素鞘無窓鍔付撫関隅抉尻細茎大刀）。

なお、これにより大刀装具はほぼすべて帰属する大刀が判明することから、原分古墳に副葬された大刀は4点であることがほぼ確定する。

編年的位置　臼杵勲は「撫関隅抉尻細茎」をTK43型式期～TK209型式期に位置づける（臼杵1984）。静岡県の事例はTK43型式期～飛鳥Ⅱ期に位置づけられるが、東平1号墳以外はTK43型式期～TK209型式期であり、原分古墳の事例もTK43型式期～TK209型式期まで遡及する可能性が高い。



二円孔鍔付大刀　1　千葉県胡摩手台16号墳　2　宮城県大年寺山１号横穴墓　3　福島県白河観音山３号横穴墓
撫関隅抉尻細茎大刀　4　富士市東平１号墳　5　牧之原市大寄Ｃ６号横穴墓　6　牧之原市小堤山１号横穴墓

図７　二円孔鍔付大刀と撫関隅切尻細茎大刀の類例

4　刀剣類からみた原分古墳被葬者の性格

ここでは刀剣類個々の位置づけを行った上で、それらを有する原分古墳の被葬者像について考えたい。

(1) 圭頭大刀

圭頭大刀は、全国で150例以上が出土している（瀧瀬1992)。このうち約90例が遠江（４例）・駿河(11例)、関東（63例、菊地2003)、東北（陸奥12例、菊地2003）で出土しており、信濃・甲斐を含めれ

ば100例以上が遠江、信濃以東、つまり東日本に偏在する。同様の分布傾向を示すものに頭椎大刀（新納1983）、銀象嵌円頭大刀（橋本1993、西山1996）があり、それらとともに東日本に重点的に配布された装飾付大刀といえる。

(2) 象嵌円頭大刀

分布　日本列島内で銀象嵌円頭大刀は西山要一の集成（西山1996）に新しく発見された事例を加えると約50例（註３）出土している。東北地方1例、関東14例、東海・中部12例、北陸1例、近畿７例、中国３例、四国３例、九州２例、不明２例である。初期のものが近畿地方と九州、四国、群馬で確認され、橋本編年３段階以降は関東地方を中心に分布する傾向にあった（橋本1993）が、原分古墳をはじめ近年東海地方、甲信地方での確認が相次いでおり、関東と東海・中部地方がほぼ同数分布している。これは金銅装圭頭大刀や頭椎大刀と同様、東日本に多い分布傾向を示すといえる。

銀象嵌円頭大刀の位置づけ　銀象嵌円頭大刀は岡田山1号墳出土例から「額田部臣」銘文が発見されたことで一躍有名になったが、銀象嵌円頭大刀が出土した古墳をみると、静岡市賤機山古墳、千葉県野々間古墳や筑波山古墳のように旧郡単位で最有力な古墳がある一方で小地域の首長墳や群集墳中の有力な古墳と考えることができる古墳から出土することも多い（橋本1993ほか）。原分古墳も石室規模や豊富な副葬品から地域の有力墳に位置づけることができ、象嵌円頭大刀出土古墳の様相と合致している。

橋本博文は、岡田山１号墳出土例の「額田部臣」が『出雲国風土記』に「郡少領」としてみえることを参考に、岡田山１号墳の被葬者を地域の最高権力者を補佐する役割を担った「地方豪族」として想定している（橋本1993）が、この想定に合致するような古墳が多いといえる。

また、野々間古墳では新羅系土器が出土するなど朝鮮半島を含めた広域流通にかかわる首長像が想定され（橋本1993）、岡田山1号墳も三累環頭大刀の出土から百済との直接的な交流が想定されている（橋本1993）。古柳塚古墳は豊富な遺物を副葬するなど地域の代表的な古墳の一つであるが、千賀久により「新羅系」馬具（千賀2003）とされた唐草文心葉形杏葉が出土しており、朝鮮半島との交流も想定できる。また、古柳塚古墳は、中道往還・「若彦路」など駿河と畿内方面への交通の要衝に位置していることから、近畿地方との強い関係を持ちつつも九州や東日本との関係も深い首長像が想定されている（古柳塚古墳研究会2004）。須曽蝦夷穴古墳も石室形状から九州地方との直接的な交流も想定される（冨田2001）。さらに、658年の阿倍比羅夫の北方侵攻と、それに従い東北方面への遠征を行った「能登臣馬身龍」との関連性が暗示されており（冨田2001）、九州・東北という日本の東西との交流関係をもつ被葬者像とともに軍事的側面をもった首長が想定されている。沼津市井田松江18号墳は、伊豆半島の北西縁の崖近くに位置しており、眼下に耕作に適する場所は少なく、農業経営に基盤をもつような首長ではなく、海上交通を担う被葬者像がイメージされている（滝沢2000）。

したがって、銀象嵌円頭大刀を副葬する古墳は豊富な副葬品を有することが多く各地域の有力墳と考えることができ、原分古墳はこの様相に合致する。また、一概に銀象嵌円頭大刀が被葬者の性格すべてを表すとはいえないが、橋本博文が象嵌円頭大刀副葬古墳の被葬者を「半島渡来の人物、ないしは半島経営上重要な役割を果たした人物と関わりが深い人物」としている（橋本1993）ように、銀象嵌円頭大刀を保有する被葬者は朝鮮半島を含め東西の広域的交流や武人的・軍事的側面を持っていた可能性が高く、原分古墳の被葬者もこのような役割を担っていたと考えられる。

(3) 鉄製二円孔鍔付大刀

二円孔鍔は折原洋一により集成が行われ、房総半島の太平洋沿岸に集中的に分布することから、この地域で在地生産が行われたと想定されている（折原1997）。一方、近畿地方出土の鍔を研究した豊島直

表1　二円（方）孔鍔付大刀出土古墳地名表

古墳名	所在地	主な副葬品	形態	規模	孔形	文献
桜小路18号横穴墓	宮城県亘理町	刀子	横穴墓		●	菊地1993
大年寺山１号横穴墓	宮城県仙台市太白区	金銅装鞘尻金具・大刀	横穴墓		●	佐藤・菊地編1990
亀井囲20号横穴墓	宮城県大崎市		横穴墓		●	菊地1993
小申田北18号横穴墓	福島県いわき市	金銅装弭金具・金銅製弓両頭金具・鉄製鏟・銅釧	横穴墓		●	樫村編1988
弘法山１号横穴墓	福島県西白河郡矢吹町	大刀６ほか	横穴墓		●	高橋編2002
白河観音山３号横穴墓	福島県白河市	金銅装圭頭大刀	横穴墓		●	菊地1993
染谷古墳群	茨城県石岡市				●	折原1997
藤井38号墳	栃木県壬生町	壺鐙・大刀２	円	22	●	大和久1967
田木山１号墳	埼玉県東松山市	大刀３ほか	円	12	●	埼玉県教委編1974
我孫子市内出土	千葉県我孫子市		不明		●	千葉県資料研究財団2002
阿玉台北遺跡Ａ地点006号墳	千葉県香取市	大刀３・須恵器ほか	方	13	●■	矢戸・菊地ほか1975
台の内古墳	千葉県香取市	大刀３・鉄鏃６ほか	円	17.5	●	平岡編1984
金鈴２号墳（山田67号墳）	千葉県芝山町	ガラス小玉134・土玉116	円墳	24	●	芝山町教委編1992
胡摩手台16号墳	千葉県山武市	鉄鏃ほか	前方後円	86	●	萩原編1994
森台19号墳	千葉県山武市	大刀１・鉄鏃10	円	18	●	折原1997
鷲ノ山Ａ２号横穴墓	千葉県匝瑳市		横穴墓		●	折原1997
吉田小下原14号横穴墓	千葉県匝瑳市		横穴墓		■	折原1997
野中５号墳	千葉県佐倉市	挂甲・鉄刀４	前方後円	31.4	●	山田・四柳ほか編1995
小金沢1号墳	千葉県千葉市	大刀３	円	27	■	関口・大内編2005
小金沢７（９）号墳	千葉県千葉市	大刀３・鉄鏃57以上	前方後円	40.5	●	山田編1982
小金沢８（10）号墳	千葉県千葉市	大刀５・鉄鏃35	円	19	■	山田編1982
六通金山１号墳	千葉県千葉市	大刀３・鉄鏃24	円	26	■	関口編1981
ムコアラク10号墳	千葉県千葉市	鉄鏃15	円	24.8	■（●？）	関口・大内ほか編2005
熊ヶ谷21号横穴墓	神奈川県横浜市	大刀１	横穴墓		●	池上・遠藤ほか1984
原分古墳	静岡県長泉町	圭頭大刀・銀象嵌円頭大刀、金銅装鞍金具２組・銀装・銅製弓両頭金具	円	17	●	本報告

● 二円孔鍔　■ 二方孔鍔

図８　二円孔鍔の分布

博によれば、近畿地方では四円孔鍔は存在するものの（豊島2001）、二円孔鍔は確認されていない。また、管見では東海地方では駿河中部以西には確認できず、原分古墳例が最も西に位置している。現状では静岡東部（原分古墳）から宮城までの太平洋岸を中心に20例が確認でき（図８）、千葉県に９例とほぼ半数が集中する。千葉県内では、このほか二方孔鍔が６例出土しており、折原が想定するように房総半島で生産され、房総半島との交流により各地に伝播した可能性が高い。したがって、二円孔鍔付大刀は地域的な偏在が確認できる遺物のひとつであり、その中心が房総半島の太平洋岸から東北南部の太平洋岸にあることが興味深い。当該鍔は全国的にみた場合も類例は決して多くないことが予想でき、折原が想定したように房総半島で製作されたとすれば、原分古墳の被葬者が、東海道（海路）を経由し房総半島の太平洋岸地域と交流をもっていた可能性が高いことが想定できる。

また、二円孔鍔付大刀出土古墳をみると、胡摩手台16号墳は86mの前方後円墳であり、山武地域の最終の大型前方後円墳の一つと考えられ（萩原編1994）、千葉県小金沢7（9）号墳（山田編1982）は40.5mの、野中5号墳は31.4mの前方後円墳である。千葉県野中5号墳第1埋葬施設（矢戸・菊地ほか1975）では挂甲小札が出土し、福島県白河観音山3号横穴墓（菊地1993）では圭頭大刀、福島県小申田北18号横穴墓（樫村編1988）は鉄製鏟、金銅製弭、栃木県藤井38号墳（大和久1967）では鉄製壺鐙などが共伴している。さらに小金沢7（9）号墳では鉄鏃57本、同８（10）号墳では35本以上のまとまった鉄鏃が出土している。

このように二円孔鍔付大刀を副葬する古墳には40mを超える前方後円墳や30m前後の円墳、豊富な副葬品を有する有力墳が多く、また挂甲、飾弓（金銅装弭など）、鉄鏃多数、大刀多数副葬するなど武人

的な様相が強い古墳が多い。さらに、小申田北18号横穴墓では鉄製鏟、飾弓が出土するなど、特殊な交易や祭祀などに関わる特異な役割を担っていた首長像も想定できる。

なお、二円孔鍔付大刀と同じような分布傾向を示す遺物として原分古墳からも出土している飾弓金具（銀装・金銅装両頭金具や金銅装弭、井鍋2003）がある。二円孔鍔との共伴例は原分古墳と小申田北18号横穴墓のみであるが、房総半島に多い点、分布の中心が駿河以東にあること、東海道のルート上（太平洋岸）に存在するなど共通点が多い。二円孔鍔付大刀の入手にあたり、飾弓の入手と同じように房総半島の勢力とのかかわりを有するとともに東北まで含めた交流がおこなわれていた可能性がある。

(4) 無窓鍔付撫関隅抉尻細茎大刀

撫関隅抉尻細茎大刀は、上記したように県内５古墳・横穴墓（註６）から出土しているが、中里75号墳では銅碗、東平１号墳では金銅装馬具、象嵌鍔付鉄製円頭大刀、小堤山１号横穴墓、大寄C６号横穴墓では鉄製馬具などが出土しており、ある程度有力な古墳から出土しているといえる。一方、遠江の事例の林５号墳は生産にかかわる集団と想定される（田村2004に詳しい）ことが多い横穴式木室からの出土であり、また小堤山1号横穴墓は同一規格の平根腸抉柳葉式鉄鏃を多数副葬しており、鉄鏃の生産と関連する被葬者像が描かれる（田村2003）。中里75号墳、東平１号墳例や他地域の事例を詳細に検討していないことから、撫関隅抉尻細茎大刀が生産と結び付いた人物と関連するとは断言できないが、原分古墳の被葬者がこうした生産的な側面も持つ人物であった可能性も考慮に入れておく必要があるだろう。

(5) 鉄　鉾

編年的位置　『東海の後期古墳を考える』および『東海の横穴墓』の集成（大谷・西澤編2001、白澤編2001）に新出資料を加えると、東海地方では27基の古墳、２基の横穴墓から鉄鉾が出土している。それらはほぼMT15型式期～TK209型式期に収まり、飛鳥Ⅰ期以降の古墳に副葬されたのは愛知県赤ざれ３号墳、静岡県梶ヶ谷横穴墓群（註7、向坂2006）の２基のみである。つまり飛鳥Ⅰ期以降、全国的にみても副葬されるのが稀有な遺物である（臼杵1985）ことから、原分古墳の鉄鉾はTK209型式期までに入手されていた可能性が高い。

鉄鉾副葬古墳の特徴　静岡県内で６世紀以降の古墳で鉄鉾が副葬された古墳は、磐田市甑塚古墳、掛川市宇洞ヶ谷横穴墓、賤機山古墳、原分古墳をはじめ遠江・駿河の2000基近くの古墳・横穴墓のうち９基に限定される。鉄鉾出土古墳は賤機山古墳（32mの円墳）、甑塚古墳（30mの円墳）、宇洞ヶ谷横穴墓（全長８mの横穴墓）、愛知県馬越長火塚古墳（55mの前方後円墳）をはじめ地域の最有力古墳や中核的な古墳が多く、それ以外の古墳でも馬具や装飾付大刀、鉄刀・鉄鏃など副葬品を豊富に副葬するなど有力な古墳が多い。したがって、臼杵勲（臼杵1985）が想定したように東海地方でも古墳時代後期には鉄鉾を有する階層が上位階層や特別な役割を担う被葬者にほぼ限定されていたことが判明し、原分古墳も石室規模や副葬品の豊富さなどからみても鉄鉾を副葬するに相応しく、地域内では最有力な古墳である。

(6) 刀剣類からみた原分古墳の被葬者像

被葬者の埋葬時期差　上述したように原分古墳出土の刀剣類はほぼTK209型式期～飛鳥Ⅱ期に位置づけることができる（図９）が、TK209型式期～飛鳥Ⅰ期に遡る可能性があるものとして圭頭大刀、無窓鍔付撫関隅抉尻茎大刀（以下、無窓鍔付大刀）、鉄鉾があり、飛鳥Ⅱ期としては銀象嵌円頭大刀がある。二円孔鍔付大刀の時期区分は難しいが、圭頭大刀・無窓鍔付大刀・鉄鉾と銀象嵌円頭大刀とは馬具と同様に少なくとも須恵器の１型式前後の時期差がある可能性が高い。この想定が正しければ、原分古墳に

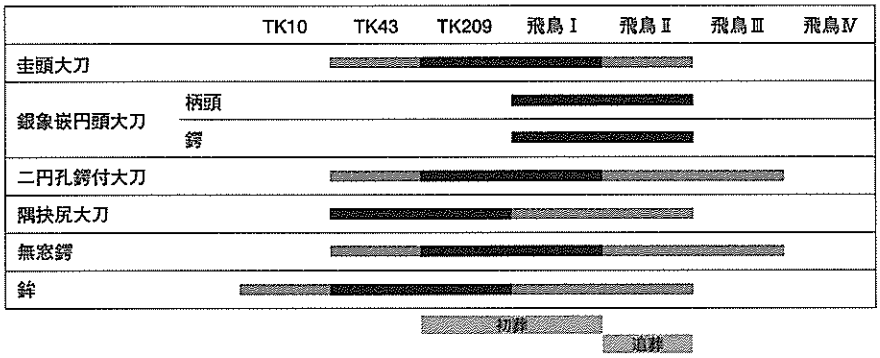


図9　原分古墳出土刀剣類の編年的位置

は装飾付大刀を有する同じような階層にある被葬者が二人葬られていた可能性が高い。前者が初葬者、後者が第二埋葬者に伴う副葬品である蓋然性が高い。

被葬者の二面性　原分古墳出土刀剣類のうち装飾付大刀2振は高い技術で生産されるとともに同様な製品が複数の地域で確認されることから倭王権で生産され東日本を中心に配布された可能性が高く、王権とかかわりの深い被葬者像が描ける。一方で二円孔鍔付大刀は房総半島を中心とする東日本とのかかわりにより入手した可能性が高い。つまり原分古墳の被葬者は銀象嵌円頭大刀や二円孔鍔付大刀出土古墳の位置づけで検討したように海上交通を担い、東・西日本との広域的な流通や軍事にかかわるような首長像が想定できる。

駿河東部における装飾付大刀出土古墳からみた原分古墳　駿河東部（富士川西岸～狩野川流域）では、約30例の装飾付大刀が出土している（東海古墳文化研究会編2006）。TK43型式期までは単龍環頭大刀が東海地方の中でも偏在するが、その一方でTK209型式期～飛鳥Ⅱ期ではさまざまな形式の大刀が地域に偏在することなく分布する（岩原2005）。原分古墳出土例を加えても分布傾向に特定形式が偏在するような状況はなく、駿河東部地域全体として王権内の特定の勢力と結びついていたとは考え難い。原分古墳は装飾付大刀をその時の役割等に応じて入手していた可能性が高い。

また、駿河東部地域では装飾付大刀副葬古墳の規模は原分古墳（17m）に近接する長泉町下土狩西１号墳がほぼ同規模の20m以上の可能性がある以外は、ほぼ10～20mの規模に収まり、墳丘規模で圧倒的に優位に立っている古墳は確認できず（岩原2005、平石2005）、石室規模においても原分古墳と同様の規模の古墳が多い。つまり駿河東部地域では突出した古墳は確認できず、原分古墳は駿河東部の中で最上位に位置づけられる複数の古墳の中のひとつであると評価できる。

5　結　語

原分古墳出土の刀剣類は上述したような拵えに復元することができ、今回の復元からは金銅装圭頭大刀、銀象嵌円頭大刀、鉄製二円孔鍔付大刀、無窓鍔付大刀の４振の可能性が高いと考える。

刀剣類からみると原分古墳の被葬者は、二時期にわたり装飾付大刀を入手し、継続的に同じような役割を担った黄瀬川流域の２人の首長像が浮かび上がる。また、金銅装圭頭大刀、銀象嵌円頭大刀のように倭王権とのつながりを示す遺物を有し中央と直結する一方で、二円孔鍔付大刀のように房総半島とのつながりが強い遺物を有するなど東日本とのかかわりも有しており、海上交通や交易、軍事などに活躍した首長像が想定できる。

註

1　出土状況からすると最多で６点副葬されていた可能性を想定できるが、筆者は後述するように圭頭大刀、円頭大刀、二円孔鍔付大刀、無窓鍔付大刀の４点の可能性が高いと考えている。

2　菊地氏は圭頭柄頭の形状により、Ａ・Ｂ１・Ｂ２・Ｃ１・Ｃ２類の５類型に区分している。Ａ・Ｂ２・Ｃ２類は木製柄頭にキャップ状金具をはめ込む形式、Ｂ１・Ｃ１類は木製柄頭に金銅板2枚を当てそれを覆輪状金具で覆うものである（菊地2003）。原分古墳の柄頭はキャップ状である可能性が高いことから、Ｂ１・Ｃ１類の可能性は低く、またＡ類が銀装を多用すること、Ｂ２類は数自体が少ないことから、C2類の可能性が最も高いと考えている。

3　福岡県鬼塚２号墳や三重県垣内田３号墳出土の鉄製銀象嵌圭頭大刀は含めていない。また、同鬼塚２号墳出土の鞘尻の可能性があるものも含めていない。これらを含めれば、100例以上になる。
4　柄間が糸巻で、漆塗りなどが施された可能性は排除しない。
5　現在、静岡県埋蔵文化財調査研究所で資料整理中。資料整理を担当する田村隆太郎氏よりご教示を得た。
6　このほか、臼杵勲によりほぼ同時期に位置づけられる「直角片関隅抉尻細茎」は、浜松市瓦屋西Ｂ５号墳、島田市白岩寺2号墳、藤枝市衣原11号墳で出土しており、静岡県内の事例でもTK10型式期～TK43型式期に位置づけられる。したがって、隅抉尻細茎はほぼTK43型式期～TK209型式期に位置づけることができる可能性が高い。（文献省略。衣原11号墳については静岡県埋蔵文化財調査研究所で資料整理中。菊地吉修・福島志野両氏よりご教示を得た。）
7　ただし、梶ヶ谷横穴群の出土横穴墓が不明確である（向坂2006）。梶ヶ谷１号横穴墓であるとすれば、TK209型式期の須恵器が出土しており、鉄鉾が三角穂式鉄鉾であることを含めて、TK209型式期まで遡る可能性が高い。

参考文献

安藤鴻基　1990　「千葉県成田市瓢塚40号墳の資料吟味」『房総風土記の丘年報』13
池上　悟・遠藤政孝ほか　1984　『奈良地区遺跡群発掘調査報告Ⅱ　No.８地点・熊ヶ谷横穴墓群』　奈良地区遺跡調査団
井鍋誉之　2003　「静岡県内の飾り弓について」『研究紀要』10号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
岩原　剛　2005　「東海地域の装飾付大刀と後期古墳」『装飾付大刀と後期古墳』　島根県教育庁古代文化センターほか
臼杵　勲　1984　「古墳時代の鉄刀について」『日本古代文化研究』創刊号　古墳文化研究会
臼杵　勲　1985　「古墳出土鉾の分類と編年」『日本古代文化研究』２号　古墳文化研究会
大谷晃二　1999　「上塩冶築山古墳出土大刀の時期と系譜」『上塩冶築山古墳の研究』島根県教育委員会
大谷宏治・西澤正晴（編）　2001　「東海の後期古墳データベース（CD）」『東海の後期古墳を考える』　東海考古学フォーラム
大谷宏治　2001　「相良町小堤山１号横穴墓・稲荷山1号墳出土の鉄製品」『研究紀要』９号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
大和久震平　1967　『藤井古墳群発掘調査報告書』　栃木県壬生町教育委員会
折原洋一　1997　「房総地域における有窓（孔）鍔について」『倉田芳郎先生古稀記念論集生産の考古学』　同成社
樫村友延（編）　1988　『小申田横穴群』　いわき市
川江秀孝　1992　「飾大刀」『静岡県史』資料編３　考古３
菊地芳朗　1993　「東北地方における横穴の出現年代」『福島県立博物館紀要』７号
菊地芳朗　2003　「装飾付大刀からみた古墳時代後期の東北・関東」『後期古墳の諸段階』東北・関東前方後円墳研究会
後藤守一（編）　1958　『吉原市の古墳』　吉原市教育委員会
古柳塚古墳研究会　2004　「古柳塚古墳の研究」『帝京大学山梨文化財研究所研究報告』12集
埼玉県教育委員会（編）　1974　『関越自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告Ⅲ』　埼玉県教育委員会
佐藤則之・菊地芳朗（編）　1990　『大年寺山横穴群』　宮城県教育委員会・仙台市教育委員会ほか
芝山町教育委員会（編）　1992　『芝山町史』資料集1　原始・古代編第２分冊　芝山町
澁谷恵美子・羽生俊郎（編）　2004　『上溝11号古墳』　飯田市教育委員会
志村　哲（編）　1993　『平井地区1号古墳』　藤岡市教育委員会
白澤　崇（編）　2001　「静岡県横穴墓データ表・図版」『東海の横穴墓』　静岡県考古学会
末木　健（編）　1988　『稲荷塚古墳』　山梨県埋蔵文化財センター・山梨県教育委員会
杉山　満・大川敬夫（編）　2002　『神明山第4号墳発掘調査報告書』　清水市教育委員会
関口達彦（編）　1981　『千葉東南部ニュータウン11』　千葉県文化財センター・日本住宅公団
関口達彦・大内千年（編）　2005　『千葉東南部ニュータウン32』　独立行政法人都市再生機構・千葉県埋蔵文化財センター
関口達彦・大内千年ほか（編）　2005　『千葉東南部ニュータウン31』　独立行政法人都市再生機構・千葉県埋蔵文化財センター
高橋　満（編）　2002　『弘法山のよこあな』　福島県文化財センター白河館
滝沢　誠　2001　「総括」『井田松江古墳群』　静岡県戸田村教育委員会
滝沢　誠・西澤正晴　2000　「井田松江18号墳出土の象嵌刀装具類について」『井田松江古墳群』　静岡県戸田村教育委員会
瀧瀬芳之　1984　「円頭・圭頭・方頭大刀について」『日本古代文化研究』創刊号　古墳文化研究会
瀧瀬芳之　1986　「円頭大刀・圭頭大刀の編年と佩用者の性格」『考古学ジャーナル』266号
瀧瀬芳之　1991　「大刀の佩用について」『埼玉考古学論集』　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
瀧瀬芳之　1992　「出土品の考察　大刀と刀子について」『観音塚古墳調査報告書』　高崎市教育委員会
瀧瀬芳之・野中　仁　1995　「埼玉県内出土象嵌遺物の研究」『研究紀要』12　埼玉県埋蔵文化財調査事業団
田村隆太郎　2003　「副葬鏃群への指向」『研究紀要』10号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
田村隆太郎　2004　「副葬鏃群からみた遠江の横穴式木室」『静岡県埋蔵文化財調査研究所設立20周年論文集』

千賀　久　2003　「日本出土の『新羅系』馬装具の系譜」『東アジアと日本の考古学』Ⅲ　同成社
千葉県史料研究財団（編）　2002　『千葉県古墳時代関係資料』第1分冊　千葉県
千葉県史料研究財団（編）　2003　『千葉県の歴史』資料編　考古2　千葉県
東海古墳文化研究会（編）　2006　『東海の馬具と飾大刀』
徳江秀夫　1992　「上野地域における装飾付大刀の基礎調査」『研究紀要』10号　群馬県埋蔵文化財調査事業団
冨田和気夫　2001　「まとめ」『史跡須曽蝦夷穴古墳Ⅱ』　石川県能登島町教育委員会
冨田和気夫・関森香住ほか（編）　2001　『史跡須曽蝦夷穴古墳Ⅱ』　石川県能登島町教育委員会
豊島直博　2001　「古墳時代後期における直刀の生産と流通」『考古学研究』34巻3号
汀　安衛（編）　1981　『常陸梶山古墳』　茨城県大洋村教育委員会
新納　泉　1983　「装飾付大刀と古墳時代後期の兵制」『考古学研究』30巻3号
西澤正晴　2000　「井田松江18号墳出土の金銅装圭頭大刀について」『井田松江古墳群』　静岡県戸田村教育委員会
西澤正晴　2002　「遠江・駿河における鉄製板鐔の変遷と展開」『静岡県埋蔵文化財調査研究所研究紀要』9号
西山要一　1986　「古墳時代の象嵌－刀装具について－」『考古学雑誌』72巻1号
西山要一　1996　「日韓古代象嵌遺物の基礎的研究（一）　日本古墳時代の象嵌大刀」『青丘学術論集』第9集
　韓国文化研究振興財団
萩原恭一（編）　1994　『山武町胡摩手台16号墳発掘調査報告書』　千葉県教育委員会
橋本博文　1981　「亀甲繋鳳凰文象嵌円頭大刀について」『常陸梶山古墳』　茨城県大洋村教育委員会
橋本博文　1985　「亀甲繋鳳凰文象嵌円頭大刀・小刀及び鞘本を象嵌装飾する大刀と佩用者の性格」『板倉町史』通史編上巻
　群馬県板倉町
橋本博文　1986　「パルメット文銀象嵌円頭大刀をめぐって」『よみがえる古墳－佐野とその周辺』　佐野市郷土博物館
橋本博文　1993　「亀甲繋鳳凰文象嵌大刀再考」『翔古論聚』　久保哲三先生追悼論文集刊行会
平石　充　2005　「文献からみた装飾付大刀の機能とその分布」『装飾付大刀と後期古墳』　島根県教育庁古代文化センター他
平岡和夫（編）　1984　『台の内古墳調査報告』　山武考古学研究所
町田　章　1987　「岡田山1号墳の儀仗大刀についての検討」『出雲岡田山古墳』　島根県教育委員会
町田　章　1991　「鬼面紋象嵌柄頭について」『瀬戸内海歴史民俗資料館紀要』第6号　瀬戸内海歴史民俗資料館
松尾充晶　2001　「装飾付大刀の評価と諸問題」『かわらけ谷横穴墓群の研究』島根県古代文化財センター
松下善和・小谷亮二ほか（編）　2000　『大寄横穴群・山下遺跡』　静岡県相良町教育委員会
松本岩雄（編）　1987　『出雲岡田山古墳』　島根県教育委員会
大和久震平　1967　『藤井古墳群発掘調査報告書』壬生町教育委員会
向坂鋼二　2006　「古墳」『浜岡町史』資料編　考古　静岡県浜岡町
村岡恭子・関邦一・徳江秀夫　1998　「邑楽町松本23号墳出土の象嵌装大刀」『研究紀要』15号　群馬県埋蔵文化財調査事業団
矢戸三男・菊地槙太郎ほか　1975　『阿玉台北遺跡』　千葉県土地開発公社・千葉県都市公社
山口典子・四柳　隆ほか（編）　1995　『佐倉市池向遺跡』　千葉県文化財センター
山田常雄（編）　1982　『千葉東南部ニュータウン10』　千葉県文化財センター・住宅都市整備公団
横田義章　1985　「古墳時代の象嵌文様」『研究論集』10　九州歴史資料館

図出典

図１　梶山古墳（汀編1981）、神明４号墳（杉山・大川編2002）、吉見かぶと塚古墳・蝦夷穴古墳（瀧瀬1984）

図２　平井地区１号墳（志村編1993）、岡田山1号墳（松本編1987）、梶山古墳（汀編1981）、瓢塚40号墳（安藤1990）、トトコチ山古墳（橋本1993）

図３　須曽蝦夷穴古墳（冨田・関森ほか編2001）

図４　星塚２号墳・鈴ヶ山２号墳・岡田山１号墳・塚花塚古墳（横田1987）、藤岡市本郷出土・高崎市岩鼻出土（村岡・関・徳江1998）

図５　須曽蝦夷穴古墳（冨田・関森ほか編2001）、古柳塚古墳（古柳塚古墳研究会2004）、鷹ノ巣古墳群（橋本1993）

図６　須曽蝦夷穴古墳（冨田・関森ほか編2001）、東平１号墳（川江1992）、筧沢１号墳（東海古墳文化研究会編2006）、上蟹沢古墳（高橋編2002）

図７　胡摩手台16号墳（萩原編1994）、大年寺山１号横穴墓（佐藤・菊地編1990）、白河観音山３号横穴墓（菊地1993）、東平１号墳（静岡県編1992）、大寄Ｃ６号横穴墓（松下・小谷ほか編2000）、小堤山１号横穴墓（大谷2001）

原分古墳出土の鉄鏃について

菊池　吉修

1　はじめに

近年、古墳時代の鉄鏃に関する研究は、進展がめざましい。静岡県でも、鉄鏃の集成が行われ（静文研2003）、地域的な様相の詳細が明らかになりつつある（長谷川2003・大谷2004）。原分古墳の所在する駿河東部（註１）における鉄鏃の地域的様相としては、多種少量の平根式と小種多量の尖根式の組み合わせが一般的であること（註２）、平根式では五角形鏃の占める割合が高く、尖根式では三角形、長三角形、柳葉、片刃箭、鑿箭が主流となる形態であることなどが指摘されている（長谷川2003）。特に、五角形鏃は、駿河とこれに接する相模・遠江・甲斐・信濃に分布の中心があることが指摘されており（杉山1988・水野1995・大谷2004）、この地域を象徴する鉄鏃形態の一つといえる。

原分古墳からは、40点をこえる鉄鏃が出土している。駿河東部においては、最もまとまった量の鉄鏃を出土した古墳の一つといえる。このうち、平根式は３点のみで、ほかは全て尖根式である。鏃身部の形状は、平根式では三角形式と典型的な五角形式がみられ、尖根式では鑿箭式と片刃箭式がみられる。平根式の３点は、いずれも短頸の鉄鏃であり、長頸鏃を主体とした小種多量の鏃構成ともいえる。原分古墳は、形態、組成とも、地域的な色彩の濃い鉄鏃の保有状況といえる。出土位置は、奥壁際と開口部側に集中箇所がある。このうち、奥壁際からは、一括生産されたものと考えられる規格性が高い鑿箭鏃と片刃箭鏃が出土している。周辺の古墳をみると、数本程度の出土に留まる古墳であっても、個々の鉄鏃は細部が異なる場合が多い。規格性の高い尖根式鑿箭鏃と片刃箭鏃の保有も、原分古墳の特徴の一つといえる。

このように、原分古墳の鉄族は、大枠としては駿河東部の地域的様相に沿いながらも、まとまった量の出土や、規格性の高さなど、周辺古墳ではあまりみられない特徴ももちあわせる。そこで、ここでは、はじめに原分古墳出土の鉄鏃について概観し、鏃群と副葬時期をとらえ、そのうえで、鉄鏃から読みとれる原分古墳の特質をとらえてみたい。

2　出土鉄鏃の概要

原分古墳からは、平根式、尖根式あわせて、40本以上の鉄鏃が出土している。鏃身部が遺存したものは、41点である。そのうちわけは、平根式五角形鏃２点、平根式三角形鏃１点、尖根式鑿箭鏃22点、尖根式片刃箭鏃16点である。それぞれの細部をみると、尖根式鑿箭鏃は長・短の二つのグループに大別でき、さらに、後者は茎関の特徴から二つに細分できる。片刃箭鏃は鏃身関の有無により２分できる。また、平根式五角形鏃の２点は互いに細部が異なる。

尖根式鑿箭鏃　尖根式鑿箭鏃は22点出土している。いずれも、形状は近似し、小ぶりの鏃身は先端部

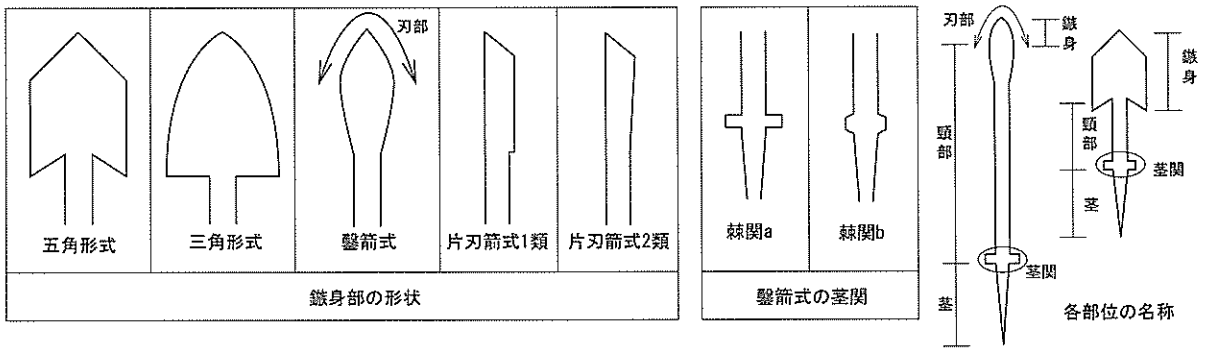


図１　出土鉄鏃の分類

の一部にのみ刃部の研ぎ出しが行われ、茎関は棘関である。ただし、鏃身と頸部を合わせた長さをみると、13cm～14cm程度の一群と、11cm前後の一群に区分することができ、前者を鑿箭鏃1類、短いものを鑿箭鏃２類と呼称する。

また、茎関をみると、茎関と頸部や茎との境が明瞭で直角的となるものと、不明瞭となるものがみられる。前者を棘関ａ、仕上げ工程の一部を省略化したものとみられる後者を棘関ｂと呼称すると、鑿箭鏃１類は全て棘関ａであるが、鑿箭鏃２類には棘関ｂとなるものが含まれる。そこで、鑿箭鏃２類のうち、棘関ａをもつものを鑿箭鏃２ａ類、棘関ｂのものを鑿箭鏃２ｂ類と呼称する。

鑿箭鏃１類は９点確認でき（１～８・10)、鏃身幅も0.8cm前後と近似する。これらは、奥壁と石棺の間から出土している。特に、まとまって出土した８本（１～８）は、規格性の高い一群といえる。

鑿箭鏃２類は、いずれも石室中央部からの出土である。このうち、鍛造後の仕上げ工程の一部を省略したものとみられる茎関をもつ鑿箭鏃２ｂ類は、２点（15・16）みられる。この２点は、石室中央部から出土しており、鏃身と頸部を合わせた長さが11.7cm、鏃身幅は1.0cmと、寸法も近似する。鏃身幅の近い22もこのタイプと考えられる。また、鏃身が遺存しないものの、後述する片刃箭鏃や平根式鏃には、棘関ｂがみられないことから、22・52～55もこのタイプの可能性が高い。

鑿箭鏃２ａ類には、11～13の３点が該当し、出土位置からは17～21もその可能性がある。鑿箭鏃２ａ類は、長さが鑿箭鏃１類よりも短いものの、鏃身幅や茎関の形状は、近くから出土している鑿箭鏃２ｂ類よりも、出土位置の離れる鑿箭鏃１類と近似する。

３タイプとも茎関は棘関であるが、鑿箭鏃２ｂ類の棘関は鍛造後の仕上げ工程の一部に省略化が認められ、後出する要素がうかがえる。いっぽう、鑿箭鏃１類と鑿箭鏃２ａ類とでは、寸法の違いはあるものの、形状的な違いは見いだせず、前後関係を明確にはできない。

鑿箭鏃においては、鑿箭鏃１類・２ａ類よりも鑿箭鏃２ｂ類が後出することがいえる。

尖根式片刃箭鏃　片刃箭鏃は16点が出土している、鏃身関の有無により２分できる。直角関のものを片刃箭鏃１類、鏃身関をもたないものを片刃箭鏃２類とする。

片刃鏃１類の４点（37～40)は、いずれも石室中央部付近から出土している。鏃身関は、直角関であるが、頸部とはわずかに段を造る程度のものである。また、刃部は、先端部のみに研ぎ出しがおこなわれ、後述する片刃箭鏃２類と共通する。

いっぽう、片刃箭鏃２類は、14点が確認できる（23～28・31～36)。このうち、奥壁と石棺の間から銹着して出土した６点（23～28）は、形状に加え、寸法も近似し、規格性の高い一群といえる。鏃身を欠くものの、この６本とともに出土した２点（29・30）も、このタイプの片刃箭鏃と考えられる。片刃箭鏃１類の中には、奥壁際のみならず、石室中央部付近から出土したものもある（32～34)。

なお、片刃鏃１類は鏃身関をもつものの、形骸化したものであり、刃部がの研ぎ出しは、裁ち落とした先端部のみに限られている。通有なら刃部の研ぎ出しが行われている「フクラ」から鏃身関までの部分には研ぎ出しが認められないため、片刃箭鏃１類の刃部の造りは片刃箭鏃２類と非常に近似する。原分古墳出土の片刃箭鏃１類と２類は、鏃身関と茎関の細部が異なるものの、刃部の造りなどの製作技法には共通性が看取できるため、両者の製作には関連性があるものと考えられる。片刃箭鏃の変遷が一様でないことは指摘されている（大谷2003)。ただし、この製作者集団における片刃箭鏃の変遷を図２のように理解するならば、片刃箭鏃１類は、大量生産に伴う製作工程の簡略化により、片刃箭鏃が鏃身撫関端刃造りへと移行する過渡的段階のものととらえることができ、片刃箭鏃２類にわずかながら先行するものと理解できる。なお、１類、２類とも茎関は、鑿箭

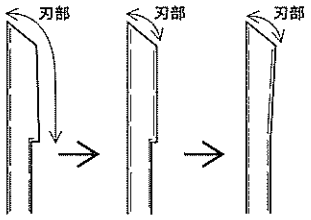


図２　片刃箭鏃の変遷

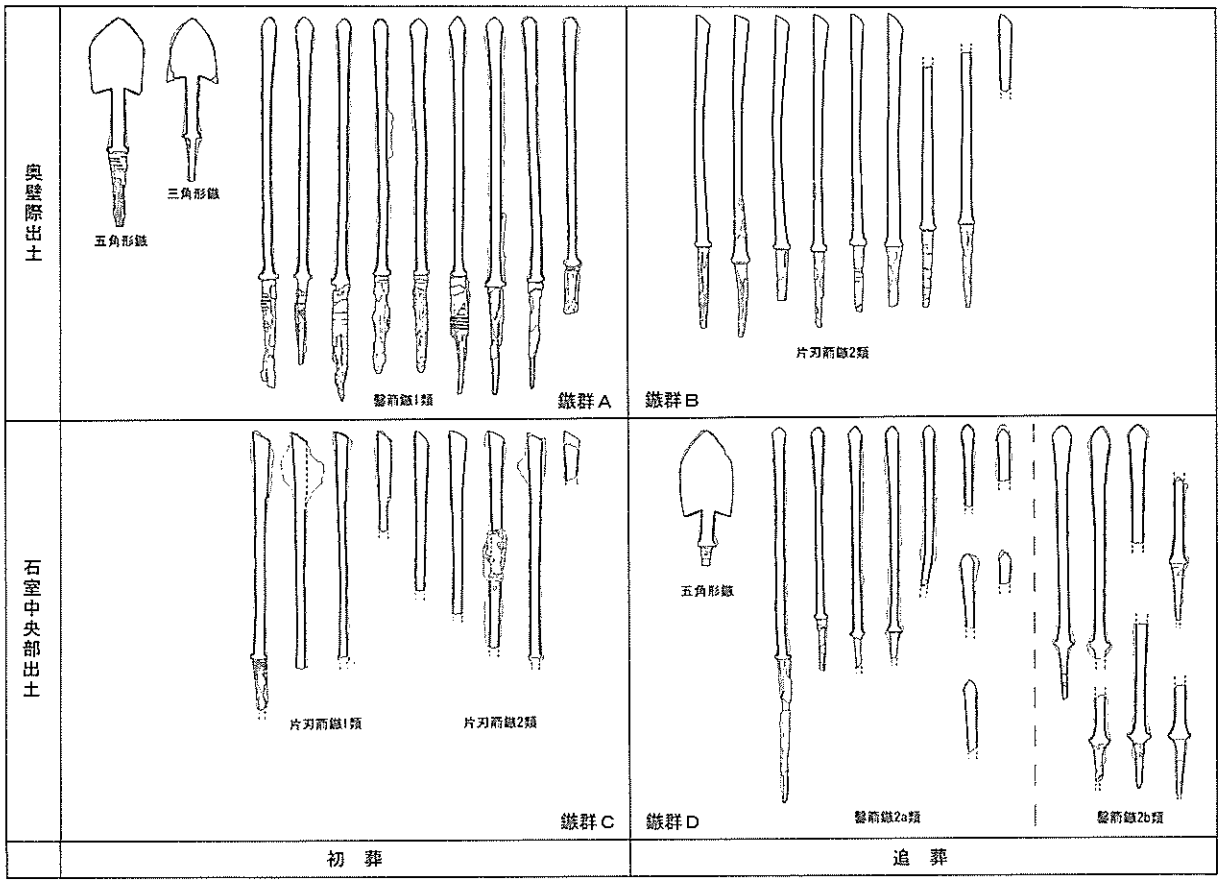


図3　鉄鏃の副葬位置と時期

鏃2ｂ類ほどの仕上げ工程の省略はみられない。

平根式五角形鏃・三角形鏃　五角形鏃は奥壁際と石室中央部付近からそれぞれ1点、三角形鏃は奥壁際から1点出土しているにすぎない。いずれも短頸の鉄鏃で、腸抉の鏃身関、棘関の茎関をもつ。また、奥壁際から出土した五角形鏃（78）は、鏃身長と頸部長の比率が、石室中央部で出土した五角形鏃（80）と異なり、同じ奥壁際の間から出土した三角形鏃（79）に近い。

3　鏃群と副葬時期

以上、原分古墳出土の鉄鏃を、形態別に特徴と出土位置を概観した。出土位置をみると、大きく2つに分かれる。一つは、奥壁際、もう一つは、石室中央部付近である。

出土位置と鏃群　奥壁際から出土したのは、平根式五角形鏃と三角形鏃が各1点、尖根式鑿箭鏃1類が9点、尖根式片刃箭鏃2類が6点とその可能性が高い2点、合計19点である。このうち、鑿箭鏃1類のうち8点は束となって出土しており、平根式の2点その近傍からの出土である。また、片刃箭鏃2類も、銹着し束となって出土した。鑿箭鏃1類のうち1点（10）のみ、両者の間からの出土であるが、形態的には本来的には前者の群に含まれていたものと考えられる。このように、奥壁際から出土した鉄鏃は、鑿箭鏃1類＋平根式のグループと片刃箭鏃2類のみのグループに細分できる。ここでは前者を鏃群A、後者を鏃群Bと呼称する。

石室中央部付近からは、平根式五角形鏃が1点、鑿箭鏃が13点、片刃箭鏃が9点出土している。ただし、原位置を留めていないと考えられるものも多く、出土状況は奥壁際ほどのまとまりはない。奥壁際の鏃群のように、出土状況から区分することはできないが、ここでは、片刃箭鏃の鏃群Cと鑿箭鏃の鏃群Dに区分する。平根式五角形鏃は、鏃群Aの状況から鏃群Dに含まれるものと考えられる（図3）。

なお、奥壁際では鑿箭鏃は１類、片刃箭鏃は２類に集約されていたが、石室中央部では鑿箭鏃は２ａ類と２ｂ類が混在し、片刃箭鏃も１類と２類が混在する。

鏃群と副葬順序　以上、原分古墳出土の鉄鏃を出土位置と形状から４群に大別した。これらは、それぞれが異なる副葬に伴うものである可能性や、幾つかの鏃群が一括して副葬された可能性、全てが同時期の副葬鏃である可能性がある。各鏃群の前後関係については、主要構成鏃の形状が異なるものについては、明言しがたいが、同タイプの鏃身をもつ鏃群同士は、ある程度把握することができる。

鑿箭鏃を主体とする鏃群Ａと鏃群Ｄをみると、鏃群Ａは鑿箭鏃１類、鏃群Ｄには鑿箭鏃２ａ類と２ｂ類がみられる。鑿箭鏃においては、茎関の仕上げに省略化がみられる２ｂ類を最も新しい時期の所産ととらえることができる。茎関の形状に差異のない１類と２ａ類とでは、前後関係は掴みがたい。ただし、２ａ類の鏃身部と頸部の長さは、規格性の高い１類とは異なり、２ｂ類に近い。この点のみでは断言できないが、２ａ類は１類よりも２ｂ類に近い時期の可能性は考えられる。そのため、鏃群Ａと鏃群Ｄとでは、後出要素をもつ形態が含まれる鏃群Ｄが新しい時期におくことができる。

片刃箭鏃で構成される鏃群Ｂと鏃群Ｃとでは、前項に記した鏃身関の違いから、先行する形態とらえられる片刃箭鏃１類を含む鏃群Ｃを、片刃箭鏃２類のみで構成される鏃群Ｂより古くおくことができる。

以上、先行要素をもつのは鏃群Ａと鏃群Ｃ、後出するととらえられるのは鏃群Ｂと鏃群Ｄである。注目できるのは、先行要素をもつ二つの鏃群（鏃群Ａ・鏃群Ｃ）と、後出要素をもつ鏃群（鏃群Ｂ・鏃群Ｄ）は、それぞれ、出土位置が奥壁際と石室中央部との組み合わせ、主要構成鏃が鑿箭鏃と片刃箭鏃の組み合わせ、という２つの点である。そこで、ここでは、先行要素をもつ鏃群Ａと鏃群Ｃが初葬時の副葬鏃群（図３左側）、後出要素をもつ鏃群Ｂと鏃群Ｄが追葬時の副葬鏃群（図３右側）と考えたい。

この観点にたつと、原分古墳では、尖根式鑿箭鏃、尖根式片刃箭鏃、平根式五角形鏃を基本とする非常によく似た構成の鏃群が２度に渡って副葬されたと理解することができる。また、副葬箇所も奥壁際と石室中央部の２箇所であり、ともに鏃身形態を意識して、同じ箇所に副葬されたものといえる。ただし、初葬時には奥壁際に鑿箭鏃、石室中央部に片刃箭鏃を置いたのに対し、追葬時には、反対に奥壁際に片刃箭鏃、石室中央部に鑿箭鏃を置くという違いはみられる。

なお、片刃箭鏃は、初葬時の副葬鏃群と追葬時の副葬鏃群では、数量的な差は少ない。いっぽうで、鑿箭鏃の本数は、鏃群Ａと鏃群Ｄとでは異なる。ここで注目したいのは、鏃群Ｄにおける鑿箭鏃２ｂ類の存在である。追葬に伴うととらえた鏃束Ｄには、鑿箭鏃２ａ類と２ｂ類が混在する。このうち、鑿箭鏃２ｂ類は、原分古墳出土の鉄鏃のなかでは、一つだけ茎関の形態が異なるタイプであり、もっとも新しい時期に位置付けられる可能性をもつ。鏃群Ｄのうち、鑿箭鏃２ｂ類は他の鉄鏃とは、副葬時期が異なることも想定できる。鑿箭鏃２ｂ類を除くと、鏃群Ｄにおける鑿箭鏃の本数は、鏃群Ａの鑿箭鏃の本数と近くなる。これらの点を勘案すると、鏃群Ｄのうち鑿箭鏃２ｂ類は、さらなる追葬に伴う副葬鏃であることも考えられ、原分古墳では鉄鏃を副葬品とする埋葬が３回あった可能性がある。

副葬時期　次に、副葬の時期について考えたい。原分古墳出土鉄鏃は、いずれも茎関が棘関であるため、TK43型式期以降に位置付けられる（杉山1988）。初葬時の副葬鏃ととらえた鏃群Ａには、フクラと鏃身関の幅がほぼ同じになるタイプの五角形鏃が含まれる。五角形鏃はTK209型式期以降本格的に展開するが、原分古墳のようなタイプは、飛鳥Ⅰ期～飛鳥Ⅱ期以降のものと指摘される（大谷2003ｂ）。また、鏃群Ｂと鏃群Ｃにみられる尖根式片刃箭鏃２類は、端刃造であるため、共にTK209型式期以降に位置付けられる（杉山1988）。駿河で鑿箭鏃や片刃箭鏃の副葬例が増えるのは、飛鳥Ⅰ期～飛鳥Ⅱ期以降という指摘（大谷2003ｂ）も勘案すると、原分古墳における初葬時の副葬鏃群Ａ・Ｃは、飛鳥Ⅰ期～飛鳥Ⅱ期以降と考えたい。

いっぽう、最も新しい時期の可能性があるのは、鑿箭鏃２ｂ類である。このタイプは、茎関に仕上げ工程の一部に省略化が認められる。棘関の仕上げ工程の一部を省略化した例を周辺遺跡の事例から抽出

することは困難であるが、飛鳥Ⅱ期～飛鳥Ⅲ期の所産である島田市水掛渡Ｃ１号墳は、鍛造後の整形工程を簡略化した棘関が確認できる数少ない事例である。原分古墳における茎関ｂは、水掛渡Ｃ１号墳例ほどの著しい簡素化ではないため、鑿箭鏃２ｂ類は飛鳥Ⅱ期～飛鳥Ⅲ期以前の所産ととらえられる。後出的要素の強い鏃群Ｄは、飛鳥Ⅱ期～飛鳥Ⅲ期以前に位置付けられる。

以上、原分古墳出土の鏃群、もっとも古く位置付けられる鏃群が飛鳥Ⅰ期～飛鳥Ⅱ期以降、もっとも新しく位置付けられる鏃群が飛鳥Ⅱ期～飛鳥Ⅲ期以前であることがいえる。先述のとおり、原分古墳の鉄鏃は２回あるいは３回に渡って副葬されたものと考えた。ここでは、初葬に伴う鏃群Ａ・Ｃを飛鳥Ⅰ期～飛鳥Ⅱ期、追葬時の鏃群Ｂ・Ｄを飛鳥Ⅱ期～飛鳥Ⅲ期ととらえておく。鉄鏃を伴う追葬が２回あり、鑿箭鏃２ｂ類のみが別個に副葬されたとみるならば、鉄鏃の最終副葬時期を飛鳥Ⅱ期～飛鳥Ⅲ期、１回目の追葬時期は飛鳥Ⅱ期のうちに収まるものととらえられる。なお、片刃箭鏃１類は初葬と追葬の両者にみられ、鑿箭鏃１類と２ａ類は形態的差が少なく、鑿箭鏃２ａ類は寸法的には２ｂ類と近い。これらの点から、副葬回数が２回であっても３回であっても、上述した副葬時期の時間幅は、より狭いものと考えられる。

鏃群と収納容器　原分古墳では束になって鉄鏃が出土していることから、矢が何らかの容器に入れられた上で副葬されたことは十分に想定できる。ただし、靫や胡籙に関わる金具類の出土はない。もっとも、鉄鏃が副葬されたと考えられる飛鳥Ⅰ期以降は、金具を使用する靫・胡籙がほぼ廃れている。矢を収納した容器があるならば、有機質のみで構成されたものといえる。しかし、後期古墳において、靫に収納された状況が確実視できる事例においては、100本前後となる場合が多いことを勘案すると（註３）、原分古墳の場合、その可能性は低く、副葬本数からは胡籙の可能性が高いといえる。ただし、鉄鏃の鏃身、あるいは頸部などには、有機物の付着はほとんど認められなかった。これらの部位に付着物がないことを重視するならば、胡籙に収納されて副葬された可能性も低いといわざるをえない。以上から、原分古墳では、何らかの容器に収納した上で矢を副葬した可能性は低いと考えたい。

4　鉄鏃からみた原分古墳

冒頭に記したとおり、原分古墳は地域色の強い鉄鏃をもつ。また、長頸鏃にみられる規格性の高さも特徴の一つである。ここでは、駿河東部を代表する鉄鏃形態の一つである五角形鏃と、規格性の２点について検討を行う。

駿河東部における五角形鏃　五角形鏃は駿河・遠江では決して珍しい形態ではないが、分布状況は、特に富士川以東で目立つことが指摘される（長谷川2003）。駿河東部を象徴する鉄鏃形態ともいえる。

駿河において、五角形鏃を出土した古墳をみると（表１）、馬具や装飾付大刀も出土している傾向が指摘できる。また、馬具や飾大刀の出土が確認されていない古墳であっても、富士川町谷津原６号墳のように、古墳群中では最

表１　駿河東部における五角形鏃出土古墳

古墳名	五角形鏃本数					馬具	装飾付大刀
	無・腸	短・腸	短・直	長・腸	長・直		
室野坂E２-１号墳			1			○	
室野坂Ｂ４号墳				1		○	
谷津原６号墳		1					
谷津原12号墳		2					
東平１号墳		4		1		○	○
横沢古墳			(2)			○	
大阪上古墳			3	2	4		○
かぐや姫古墳	11					○	
花川戸３号墳					1		
富士岡F-22号墳					1		
中里大久保古墳		1			7	○	○
船津寺ノ上１号墳		1					
船津L-62号墳		1				○	
船津L-208号墳			1				
船津L-209号墳	4					○	
石川119号墳		2	1			○	○
井出１号墳			1				
本宿上ノ段２号墳			1			○	
原分古墳		2				○	○
夏梅木６号墳		1				○	○
平沢１号墳		1	1			○	
井田松江18号墳			1				○
柏谷104号墳		4					
花ヶ崎古墳		2					
平石４号墳			1				○

長：長頸鏃　短：短頸鏃　無：無茎・短茎鏃　直：鏃身直角関　腸：鏃身腸抉

大規模の石室を持つ古墳の一つであるものや、富士市船津寺ノ上１号墳のように、石室規模から駿河東部における最上位層に位置付けられる古墳がみられる。一部の例外は含まれるが、駿河東部においては、五角形鏃は一定以上の階層から出土する傾向があることはいえよう。長頸で鏃身関が直角関となるものより、短頸あるいは腸抉をもつものの方が、その傾向がより強いようである。

五角形鏃はTK43型式期に出現し、飛鳥Ⅳ期～飛鳥Ⅴ期まで存続する。この時期は、鉄鏃の地方生産が活発化するなかで、古墳時代後期に至るまで特定の形態の鉄鏃が保有していた威信財的側面や儀器としての側面が衰退し、日常財へとの質的変換を遂げていく段階と指摘される時期（鈴木2003ａ、2003ｂ）とほぼ重複する。鉄鏃が質的に変質する過程のさなかではあるが、駿河東部における五角形鏃は、その出土傾向をみると、一定以上の階層が保有する傾向にある形態であることから、当地においては、ある種の象徴的な意味が付加されていた形態の鉄鏃である可能性を指摘したい。

威信財や儀器としての性格を持つ鉄鏃が消えていくいっぽうで、鉄鏃がそのような性格を持ち合わせるという漠然とした概念のみが存続した結果、駿河東部では、五角形鏃に新たな意味が付与されて、有力者が保持したものと理解したい。もちろん、威信財ほどの政治性をもちあわせるものではない。また、儀仗的な矢鏃においては、２本１組に用いられる傾向をもつことが指摘されるが（鈴木2004ほか）、原分古墳を始め、五角形鏃が２本１組となっていたとみられるものは、少例に限られることから、単独での儀器としての性格も強いものとはいい難い。ほかの鏃身形態の平根鏃と併用されるようである。駿河東部における五角形鏃は、地域内の有力者間における種のステイタスシンボルであるとともに、地域的な紐帯を示す程度の性格であろう。

また、地域の有力層が、五角形鏃に意味を付加するとことで、単に工程の一部を簡略化させた形態ではなく、この形態を意識的に製作させていた可能性もある。TK209型式期以降の五角形鏃は、角（フクラ）が強調され、三角形や長三角形鏃とは異なる形態であることが意識されている（大谷2003ｂ）。これが、駿河東部における五角形鏃の偏在傾向の背景にある可能性もある。地域的な生産については、富士市船津L209号墳における無茎の五角形鏃から、既に指摘されるところであるが（大谷2004）、五角形鏃の出土は、富士山南麓から愛鷹山南麓西部に特に集中する。分布状況からは、この付近に製作地の一つがあったことも想定できる。

原分古墳からは２点の五角形鏃が出土している。特に奥壁と石棺の間から出土した五角形鏃（78）は、直線的な刃部を持ち、フクラが強調されるという、五角形鏃の特徴を示す典型例といえる。２点の五角形鏃は、出土状況をみると、それぞれ尖根式を主体とする別個の鏃束に含まれるものととらえられる。原分古墳では、尖根式長頸鏃が鏃束の主体となっており、特定の鏃群に１本ないしは２本の平根式短頸鏃が副えられており、「多数の尖根式鏃と少数の平根式鏃」という鉄鏃構成といえる。

なお、平根式鏃を「上差矢」とした「多数の尖根式鏃と少数の平根式鏃」の鏃束構成については、平根式鏃が儀礼的側面を強く示しているという末永雅雄の指摘を基に（末永1942）、儀礼的側面を強調した鏃構成である可能性が指摘されている（田村2003）。原分古墳の場合、駿河東部を代表する形態であり、この地域の有力層が嗜好する形態でもある五角形鏃を「上差矢」として鏃群にそえていることは、象徴的といえよう。

尖根式と規格性　冒頭に記したとおり、原分古墳は地域的な色彩の濃い鉄鏃の構成といえる。尖根式は、鑿箭鏃と片刃箭鏃が出土しているが、鑿箭鏃は原分古墳の所在する黄瀬川流域と箱根山西麓では、主流形態の一つであり、箱根山西麓では片刃箭鏃も主流形態であることが指摘されている（井鍋2003）。

原分古墳と同様に尖根式が鑿箭鏃と片刃箭鏃、あるいはその一方のみで構成されるのは、富士市土手内１号墳、沼津市天神洞４号墳、三島市夏梅木９号墳、函南町柏谷102号横穴など、少数にとどまるが、土手内１号墳以外は、駿河東部でもその東端部に所在する。尖根式の構成をみると、原分古墳は、駿河

東部の中でも東端部の黄瀬川流域～箱根山西麓の様相に沿ったものといえる。

なお、原分古墳の鉄鏃をみると、奥壁際の鏃群Ａと鏃群Ｂは、それぞれ一括生産されたとみられる規格性の高い尖根式鑿箭鏃と片刃箭鏃を主体とする。駿河東部の古墳においては、原分古墳の鏃群Ａや鏃群Ｂのように規格性の高い長頸鏃が、５本前後まとまって出土している古墳は少ない。富士川町室野坂Ｂ４号墳、富士市土手内１号墳、富士市中里大久保古墳、船津寺ノ上１号墳、沼津市清水柳北２号墳・３号墳、夏梅木９号墳があげられる程度である。多くの古墳は、沼津市天神洞１号墳のように、似たような形状・寸法ではあるものの、細部には違いがあるものを一群として保有する傾向にある（図４）。原分古墳の鏃群Ａ・鏃群Ｂにみられる規格性の高さは、駿河東部においては、数少ない事例といえる。

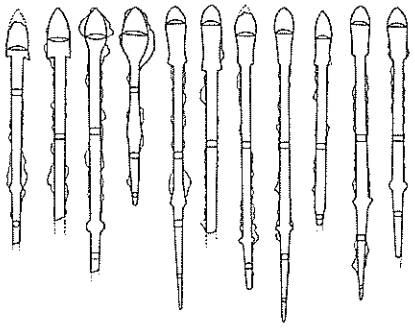


図４　細部の異なる副葬鏃群（１／４）

鏃の本数が増えると、必然的に細部の異なる同種の鏃を保有する可能性は高くなるだろう。しかし、鉄鏃の出土総数が少ない場合であっても、細部に差異があるものを保有している場合は少なくない。また、規格性の高い鉄鏃を保有する古墳は、有力墳の傾向があるものの、富士市横沢古墳のように、上位階層の古墳であっても、規格性が低い鏃群を保有する場合もある。規格性の高い鏃群を持つ古墳は独自の鉄鏃入手経路をもっていたことも想定されており（井鍋2003）、保有する鉄鏃における規格性の高低の違いは、鉄鏃生産と配布の関係が背景にあるものと考えられる。規格性が低い鏃群をもつ古墳は、一度、集約された鉄鏃が再分配されるなかで、近い形状として認識された鉄鏃を鏃群として入手しているものととらえられ、規格性の高い鏃群をもつ古墳は、集約された鉄鏃群をほぼそのままの状況で入手しているか、あるいは鉄鏃製作や鉄鏃の集約・分配に近い立場にいたことも考えられる。駿河東端部の地域色が強いうえに、規格性が高い鏃群Ａと鏃群Ｂを保有したと考えられる原分古墳の二人の被葬者は、この地における鉄鏃流通との関連性が強かった可能性も考慮に入れることができよう。

５　結　語

以上、原分古墳出土の鉄鏃について概観し、検討をおこなった。以下、概要を再度記すとともに、鉄鏃からみる原分古墳の被葬者像を述べ、結びとしたい。

原分古墳の鉄鏃は、尖根式長頸鏃を主体とした鉄鏃構成であり、出土位置と形態から４つの鏃群に大別できる。鏃群は、奥壁際の鏃群Ａと石室中央部の鏃群Ｃ、奥壁際の鏃群Ｂと石室中央部の鏃群Ｄがそれぞれ、同時期の副葬鏃ととらえる。このうち前者が初葬、後者が追葬に伴う副葬鏃群である。鉄鏃を副葬品とする埋葬は、すくなくとも２回はあるといえ、さらにもう一回の追葬がある可能性をもつ。いずれにせよ、飛鳥Ⅱ期を中心とした、短期間にあいついで副葬されたことがうかがえる。

初葬に伴う鏃群Ａ・Ｃと、追葬に伴う鏃群Ｂ・Ｄは、石棺もしくは釘付木棺の被葬者に伴うものと推測される。両者は、尖根式鑿箭鏃と尖根式片刃箭鏃を主体とし、数点の平根式がこれに加わるという、非常によく似た構成である。さらに、副葬箇所も奥壁際と石室中央部の２箇所に分けられているという共通点がみられる。量的な差異や質的な差異は見られないことから、被葬者の階層や社会的立場は近いものと考えられる。ともに、駿河東部で有力階層が嗜好する五角形鏃を保有していることから、両被葬者が地域に根ざした有力階層であることもうかがえる。また、地域色の強さは、駿河東端部の黄瀬川～箱根山西麓に分布傾向をもつ尖根式鑿箭鏃と片刃箭鏃の保有からもがうかがえる。

いっぽうで、追葬が２回あるとみた場合、最終副葬鏃群は鑿箭鏃のみで構成されることから、量的にも質的にも、初葬や１回目の追葬における被葬者との違いが明白である。特に注目できるのは、五角形

鏃を保有しない点である。埋葬時期の差があることから、鉄鏃をともなう副葬の最終段階では、当地における五角形鏃もつ意味が薄れ、被葬者がそれを欲しなかったことも十分に考えられるが、被葬者の階層や社会的立場の違いを反映しているものとみたい。

註

1　ここでは静岡県の大井川以東を駿河として扱い、駿河東部とは富士川流域以東を指す。

2　鉄鏃の形状と各部名称は、大谷宏治の整理（大谷2003ａ）に基づく。ただし、「尖根」という名称については、中世の故実や文献などからうかがえる「尖根」が、幅広く扁平な鏃を含むことから、適切な呼称ではないという指摘もある（松木2004)。いっぽう、末永雅雄の指摘（末永1942）以来、鏃身長に対し幅が狭いものを「尖根」と呼びあらわされてきた経緯もある。ここでは、あくまでも大谷の整理にならい「細身」の鏃を「尖根」と呼ぶ。

3　島根県上塩冶築山古墳、島根県御崎山古墳、三重県井田川茶臼山古墳などがあげられる。

参考文献

井鍋誉之　2003　「富士川西岸～箱根山西麓地域」『研究紀要』第10号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷宏治　2003ａ　「地域区分・時期区分と鉄鏃分類」『研究紀要』第10号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷宏治　2003ｂ　「遠江・駿河・伊豆における古墳時代後期の鉄鏃の変遷とその意義」『研究紀要』第10号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

大谷宏治　2004　「東と西の狭間」『設立20周年記念論文集』（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　2003　『研究紀要』第10号

末永雅雄　1942　『日本上代の武器』弘文堂書房

杉山秀宏　1988　「古墳時代の鉄鏃について」『橿原考古学研究所論集』第８集　橿原考古学研究所

鈴木一有　2003ａ　「後期古墳に副葬される特殊鉄鏃の系譜」『研究紀要』第10号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

鈴木一有　2003ｂ　「副葬鏃の変質」『武器生産と流通の諸画期』七世紀研究会

鈴木一有　2004　「平根系鉄鏃の諸相」『古代武器研究』第５号　古代武器研究会

田村隆太郎　2003　「副葬鏃群への指向」『研究紀要』第10号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

長谷川睦　2003　「静岡県における鉄鏃の地域色と生産・流通」『研究紀要』第10号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所

松木武彦　2004　「戦闘用鏃と狩猟用鏃－打製石鏃大型化の再検討－」『古代武器研究』第５号　古代武器研究会

水野敏典　1995　「東日本における古墳時代鉄鏃の地域性」『古代探叢』Ⅳ　早稲田大学出版部

水野敏典　2003　「鉄鏃にみる古墳時代後期の諸段階」『後期古墳の諸段階』第８回東北・関東前方後円墳研究大会実行委員会

古墳時代終末期における駿河東部の有力古墳

井鍋　誉之

1　はじめに

原分古墳の埋葬施設は、開口部に段をもつ大型の無袖式石室で、石室内には凝灰岩製の家形石棺がおさめられていた。原分古墳の石室は、駿河東部において最大級の規模であり、凝灰岩製の石棺をもつ古墳は、本例を含めて６例が知られるにすぎない。本稿では、駿河東部における横穴式石室と石棺について整理するとともに、近隣に所在する長泉町下土狩西１号墳（小野1965）の内容を紹介し、駿河東部における古墳時代終末期の様相について素描することにしたい。

なお、本稿では、富士川流域から箱根山北麓までの範囲を対象とする。この範囲は、古墳の分布・立地状況から、①富士川西岸域から富士山麓、②愛鷹山麓から黄瀬川流域③箱根山麓の３つの地域に大別できる。このうち、①地域、②地域は横穴式石室を埋葬施設とし、横穴墓は展開しない。いっぽう、③地域は横穴墓と横穴式石室墳が混在する。

2　駿河東部における横穴式石室の変遷

時期区分　本稿では、以下のように時期を区分し、駿河東部の横穴式石室の変遷を整理する。

１期　導入期　遠江Ⅲ期中葉　　TK43型式期

２期　展開期　遠江Ⅲ期後葉～遠江Ⅳ期前葉　　TK209型式期～TK217型式期（飛鳥Ⅰ期～飛鳥Ⅱ期）

３期　変容期　遠江Ⅳ期後葉～遠江Ⅴ期前葉　　飛鳥Ⅲ期～飛鳥Ⅴ期（平城Ⅰ期）

１期においては①、②地域の一部の古墳に横穴式石室が採用される。石室の導入は遠江、駿河中部より遅れ、遠江Ⅲ期中葉である。

２期にはいると横穴式石室が①～③の全地域に築造されるようになる。大型化する横穴式石室が各地域で散見されるとともに、群集墳の形成が活発である。③地域においては横穴墓の造営が開始される。

３期になると①～③の全地域にわたり、古墳の築造数は減少していく。横穴式石室は小型化、単次葬化がすすむ。さらに②地域において遠江Ⅴ期前葉に石櫃を納めた上円下方墳が造営される（清水柳北１号墳）。③地域では多くの横穴墓が奈良時代にも築造され続け、なかには火葬骨が納められるものもある。

石室形態分類　駿河東部に分布する石室は、基本的に無袖式石室の一系統である。無袖式は玄室と羨道の区別が明確でないものを指す。側壁、開口部の構造から１類から３類まで、３系統に細分する。

１類　開口部に段をもち、玄室床面が横口部分より低くなる石室を１類とする。この石室は、竪穴状の墓坑をもち、天井構造は平天井である。１類の石室は、石室の規模から、さらに２種に分けられる。

１ａ類　開口部に段をもつ横穴式石室で、石室長４～５ｍのものを指す。この石室は、①地域を中心とし、②地域まで分布が確認できる。典型例として富士市中原３号墳、４号墳（富士市1994）、富士市東平１号墳（久松1994）、富士市大渕片倉１号墳（志村1983）などの石室が挙げられる。

１期に築造された古墳としては、中原４号墳が相当する。中原４号墳は、駿河東部において最も早く横穴式石室を導入した古墳であると評価できる。中原４号墳の石室は、全長4.3m、幅1.3mと小型である。奥壁は基底部に１石が配置され、基底石も小さい。２段目以上には小型の礫が配される。開口部には小型礫を小口積みにして、段が形成されている。開口部の側壁には大型礫を３段縦積みされる。

図１　駿河東部の主要古墳分布

２期に築造された古墳には東平１号墳が挙

げられる。石室は、全長4.7m、幅1.4mである。石室の遺存状況は良好ではないが、奥壁は低い基底石を用い、1石以上で構成される。開口部は小型礫による小口積みである。中原4号墳と東平1号墳は石室規模や奥壁の構造、開口部の構造が類似する（註1）。

3期においても、1a類の石室は、①地域～②地域で多く確認できる。奈良時代になって築造された古墳においても、石室規模には大きな変化がない。なお、3期には、開口部の段構造に、框石状の大型礫を1石設置する事例が多くなる。

1b類　開口部に段をもつ横穴式石室で、石室長7m以上のものを指す。こうした大型の石室は、①～②地域に認められる。類例として原分古墳が挙げられるほか、富士市横沢古墳（志村1981）、富士市実円寺西1号墳（平林1987）が含まれる。いずれも直径20m級の円墳である。

1期に築造された古墳には、横沢古墳がある。横沢古墳は、石室長8.3mであり、奥壁には大型石材と両側に配された小型石材で構成される。石室幅は2.3mと大きい。また、わずかではあるが、前庭側壁がつく。開口部には段を有するものの大型礫の設置はみられず、段の上に閉塞石が設置される。

2期に築造された古墳として、原分古墳をはじめ、実円寺西1号墳が挙げられる。いずれも石室平面形は矩形である。奥壁は2石あるいは1石で構成される。開口部の段は大型石材が1石～2石が配置され、その上に閉塞石が設置される。側壁の開口部では大型石材が垂直に3段積まれている。前庭側壁は長大化し、原分古墳のようにハ字形に開く構造をもつものがある。

3期以降では石室長7m以上の大型の石室はみられない。

2類　玄室と羨道の区別がみられない石室を2類とする。石室平面形は矩形で、平天井である。石室長に対し、石室幅が狭く、長大なものが多い。2類の石室は①～③の全域で認められ、典型例として沼津市清水柳北2号墳（鈴木1989）、富士市船津寺ノ上1号墳（平林1987）、富士市大阪上古墳（後藤1958）などの石室が挙げられる。

1期に築造された古墳としては、清水柳北2号墳が該当する。清水柳北2号墳の石室は、全長5.25m、幅0.9mである。石室内には組合式箱形石棺がおさめられる。奥壁は基底石に大型石材を用い、上段には小型礫を積み上げている。平面形は矩形である。

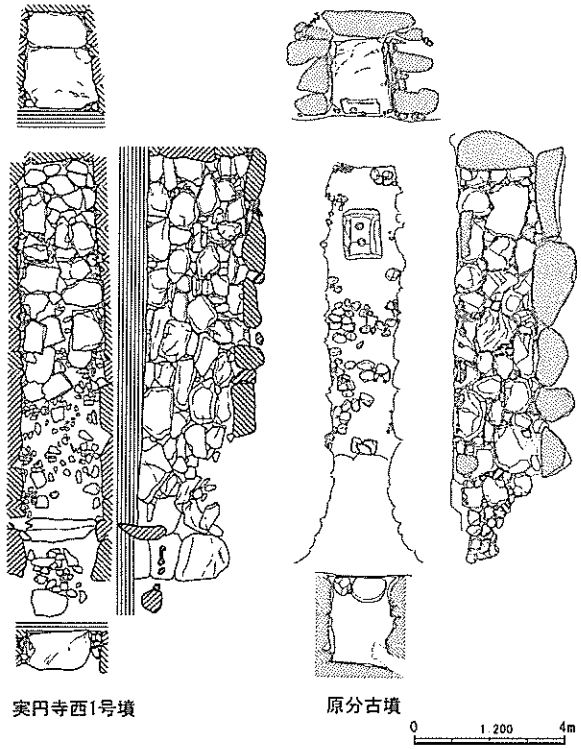


図2　実円寺西1号墳と原分古墳

2期に築造された古墳としては、船津寺ノ上1号墳が相当する。当墳は墳丘の直径が22mである。石室長約12.5m、奥壁寄り幅1.4m、高さ1.25mである。石室構造は地下式で、石室平面形は開口部に向かって狭くなる台形である。墓坑上面に天井石が架構される。奥壁には低い基底石を配し、上部には小型の礫が数段積み上げられる。開口部には扁平な石が3段ほど垂直に積み上げられる。このような異様ともいうべき狭長な石室は後続しないが、2期以降も石室長8m、幅2m前後の大型の石室が①～③地域で散見される。なお、3期においても、2類の石室は、規模を縮小しながらも継続的に築造される。

3類　開口部に立柱石をもつ無袖式石室を3類とする。石室前面には側壁が設置されず、立柱石は石室内側に張り出さない。石室平面形は矩形のものや、わずかに胴張りを呈するものがある。3

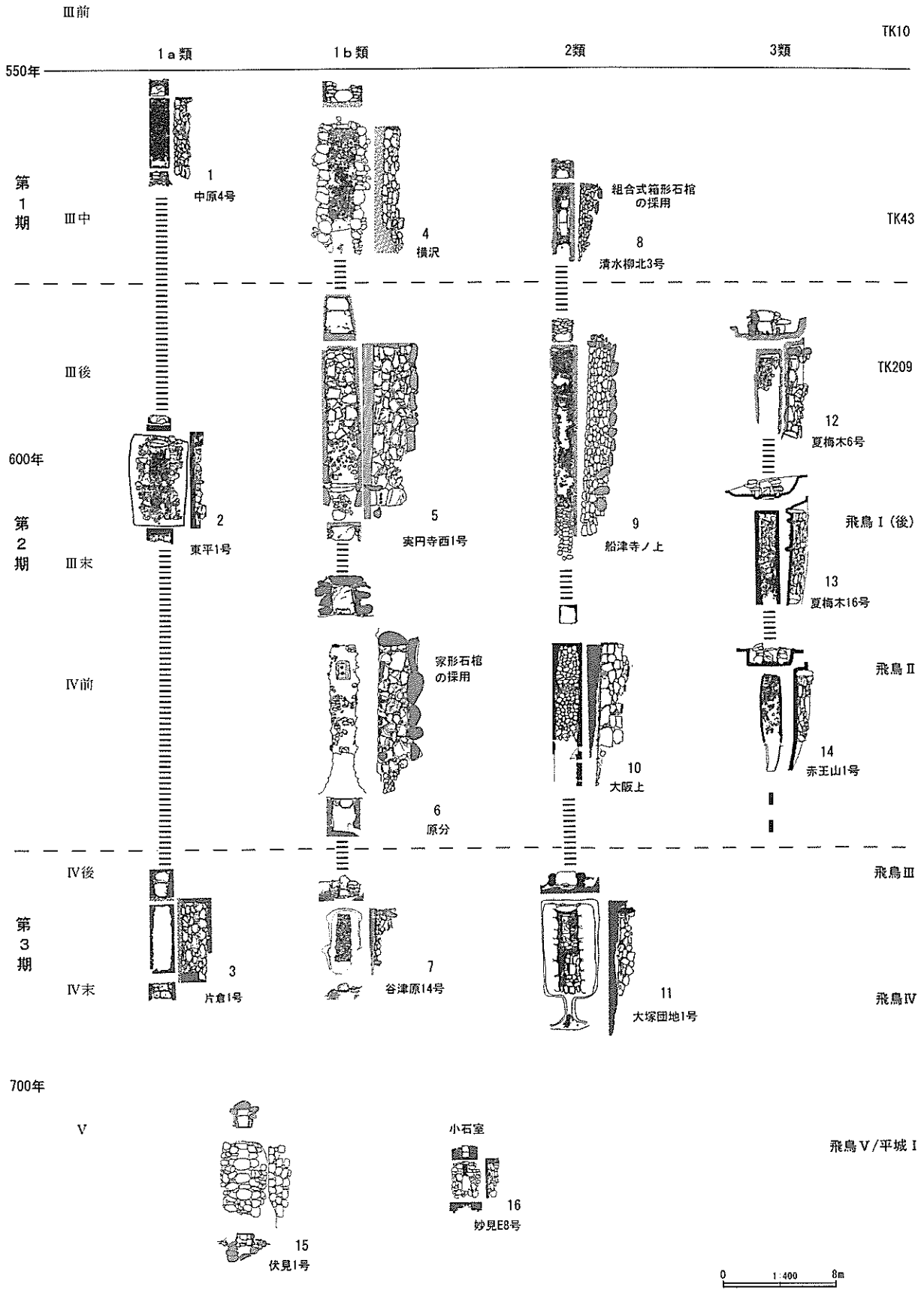


図3　駿河東部の横穴式石室の変遷

類の石室は③地域を中心に築造されており、一部②地域の愛鷹山東麓まで広がりをみせている。

3類の石室の導入は2期において確認できる。典型例として、三島市夏梅木6号墳、16号墳（鈴木2000)、三島市田頭山3号墳（井鍋2004)、沼津市清水柳北3号墳（鈴木1989）の石室が挙げられる。これらの石室の全長は、5m～6m前後、幅約1.5mである。奥壁は2石で構成される。立柱石は側壁2段分に相当する高さで、両側壁あるいは片側の側壁に配される。立柱石は、袖の意識の表れとともに、石室構築における指標石としての性格を持ち合わせていると考えられる。

石室変遷の特徴　1期では、1a類と2類が、ともに石室長が5m前後で、奥壁の構造も共通している。両系統の石室には、共通の規範が存在していたことがうかがえる。これらの石室の系譜関係については、いまだ明らかにし得ないが、奥壁と開口部の造作から三河の無袖式石室との関連が指摘できる。

2期にはいると、1類、2類の石室は石室規模が拡大し、狭長化していく様子がうかがえる。奥壁は1石ないし2石を用い、開口部側の側壁の積み方は大型礫を縦積みするなど共通点が見出せる。また、前庭側壁が長大化していく様子が認められる。大型石室を内包する直径20m級の古墳は、①～②地域の各所で認められるが、突出した規模の古墳は見られず、等質的である。

なお、③地域では開口部に立柱石をもつ3類の石室が導入される。石室平面形はやや胴張りを呈することから、同様の特徴をもつ石室が築かれる駿河以西の影響を受けている可能性が指摘できる。

原分古墳例の位置づけ　原分古墳の横穴式石室は、駿河東部でも上位階層の古墳が採用したⅠb類に属し、石室規模においても、駿河東部各地の石室との比較を通じて、大型の部類に入ることが判明する（図3）。石室の構造から導き出せる帰属時期は、本稿でいう2期（飛鳥Ⅰ期～飛鳥Ⅱ期）にあたり、駿河東部においては横穴式石室の規模が最も大きくなる段階に相当する。また、石室形態、石室規模、開口部にみられる造作など、実円寺西1号墳との共通性が高く、両者は、築造時期や被葬者の階層的位置などが近似すると捉えられる。副葬品組成が不明瞭であったⅠb類の横穴式石室の具体的内容を示すものとして、原分古墳の調査成果がもつ意義は大きいと評価できよう。

3　駿河東部における石棺の特徴

駿河東部の後期、終末期にみられる棺としては、石棺と釘付木棺がある。石棺は板状節理をもつ安山岩、もしくは、白色凝灰岩を用いている。安山岩は、組合式箱形石棺に用いられ、②～③地域の古墳に多く認められる。白色凝灰岩製の石棺は、②地域の黄瀬川流域から狩野川流域、田方平野南部の一部において確認できる。とくに、原分古墳が所在する黄瀬川流域の古墳には白色凝灰岩製の石棺をもつ石室が集中する。

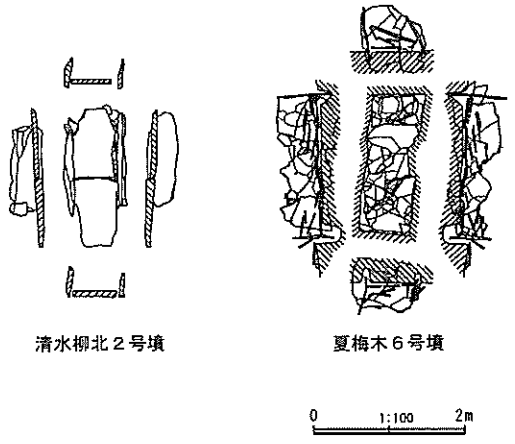


図4　組合式箱形石棺の諸例

安山岩製の石棺　安山岩で構成される棺はすべて組合式箱形石棺である。安山岩製の組合式箱形石棺は、駿河東部では71例が確認できる（井鍋2005)。分布は②から③地域の範囲に認められる。石棺材の安山岩は、②地域、③地域のほかに、天城山麓などで産出されるものがある。板状節理が発達した安山岩は、地元では「ヘギ石」と呼ばれ、板石として加工しやすい。

組合式箱形石棺は、長側石の継ぎ方から、平継ぎと重ね継ぎの2種に分類できる（井鍋2004)。横穴式石室への導入は沼津市清水柳北1号墳例が初現例である。この古墳に採用された組合式箱形石棺は、当地域では珍しい平継ぎである。初現例の組合式箱形石棺が

例外的に平継ぎであることから、横穴式石室導入以前にも、平継ぎの組合式箱形石棺を埋葬施設としていた可能性が指摘できる。それ以外の組合式箱形石棺はすべて重ね継ぎで、形態による階層差は認められない。

白色凝灰岩製の石棺　白色凝灰岩製の石棺には刳抜式と組合式がある。駿河東部では6例確認されている。白色凝灰岩製の石棺は②地域から狩野川流域の横穴式石室、③地域の横穴墓に認められる。当地域の白色凝灰岩は、通称「伊豆石」と呼ばれ、原分古墳石棺をはじめ、長泉町山ノ神道古墳石棺（平野1976)、下土狩西1号墳石棺はいずれも、沼津市江ノ浦産の石材を使用したとされる【第2部　構造解析編　pp.79-88】。

棺蓋がわかるものは5例あり、四辺傾斜のものと、二辺傾斜のものが認められる。このうち、原分古墳例は刳抜式であり、四辺傾斜で突起をもつ、狭義の「家形石棺」に相当する（増田2004)。復元案では長辺6、短辺2の8突起を示した。同様に、8突起を有する家形石棺は、静岡市賤機山古墳（後藤・斎藤1952）や静岡市駿河丸山古墳（望月編1962）に類例がある。縄掛突起数から駿河中央部の首長層と共通する棺をもつ可能性が指摘できる。

山ノ神道古墳は二枚継ぎの家形石棺で、無突起である。下土狩西1号墳例は二辺傾斜の石棺で、短辺部に円形の突起を有する（註2)。これらは畿内における型式変化を辿ることができず、在地的な形態に変化した石棺として捉えることができよう。

原分古墳例の位置づけ　原分古墳におさめられた凝灰岩製の刳抜式家形石棺は、8突起を有すると想定した。この石棺は、築造時期が原分古墳より遡るものの、駿河中央部の賤機山古墳や駿河丸山古墳の家形石棺との類似性が認められる。刳抜式の家形石棺は、駿河東部では初例であるが、本例の出土によって、駿河東部における凝灰岩製の石棺は、駿河中央部との関係によって導入された可能性が高い。原分古墳例が駿河東部の凝灰岩製の石棺の中でも初現的な事例であり、有力階層が備える棺としてふさわしいことがうかがえるだろう。賤機山古墳や丸山古墳は畿内に遡源がたどれる横穴式石室をもち、駿河中央部における優位性は動かしがたい。最有力の賤機山古墳に採用された家形石棺を模して、丸山古墳の石棺が製作されたと捉えられ、さらに地域を越えた伝播事例として原分古墳の家形石棺を位置づけることができる。原分古墳の横穴式石室は駿河中央との関連を見出し難いが、石棺において駿河中央部の

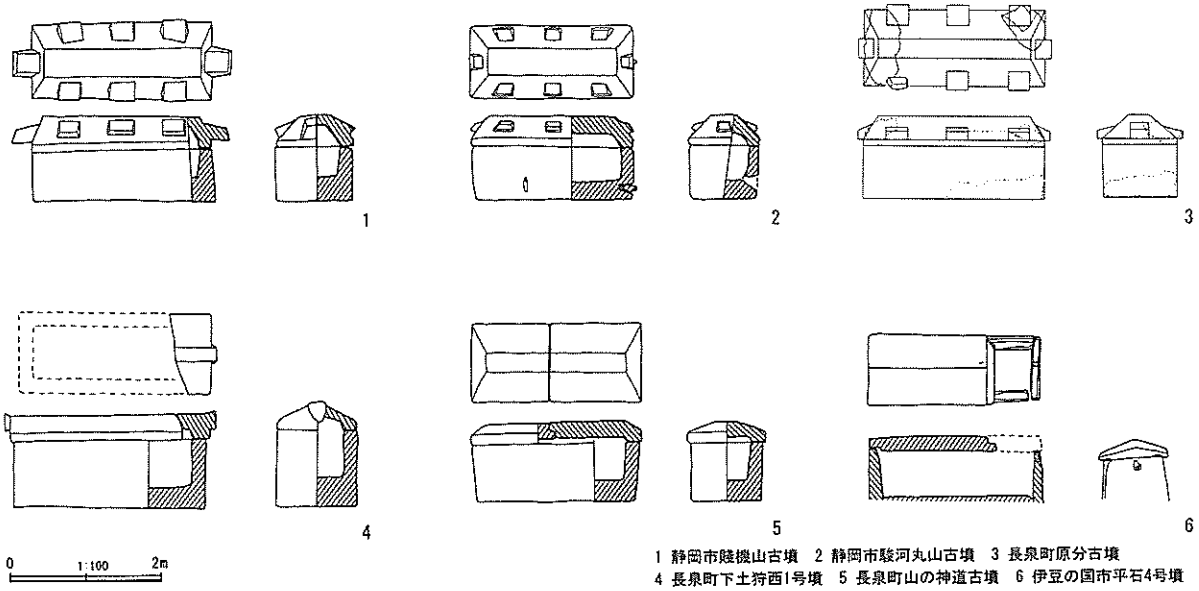


図5　白色凝灰岩製の石棺の諸例

有力階層との関係が見出せることは、原分古墳の被葬者が置かれた社会的位置を捉える上で注目できる。さらに、石棺形態の情報の淵源として、畿内中枢部を視野に入れる必要もある事例といえる。

4　原分古墳と下土狩西１号墳にみる共通性

原分古墳の被葬者が置かれた社会的位置を明確にするためには、近隣地域の古墳との比較検討が必須である。ここでは、原分古墳と至近距離にあり、墳丘規模、石棺、副葬品組成などに共通性が高い下土狩西１号墳を取り上げ、その内容をやや詳しく検討しておこう。なお、下土狩西１号墳の副葬品は、長らく全貌が不明瞭であったが、原分古墳にかかわる整理作業と併行して基礎的な状態確認調査、写真撮影を実施し、その成果の一部を本書に収めた【第１部　調査報告編　図版82～88】。

石　室　下土狩西１号墳は長泉町下土狩に所在する。原分古墳より北東方向へ500mの位置にある。調査は1962年の３日間にわたり実施された（小野1965）。報文によれば、墳丘は、直径20mの円墳とされる。石室の残存状況は良好ではなく、基底石のみが遺存している状態であった。石室形態は無袖式石室である。ただし、開口部は、閉塞石が積み上げられた状態のみが図化されており、詳しい構造が不明瞭である。玄室から入り口に向かって上り坂であることから、開口部に段がついていた可能性も否定できない。石室規模は石室長10m、幅２mとされるが、実測図をみる限り、開口部には側壁より小型の石材があることから前庭側壁が連接していた可能性が高い。この前提をふまえると、玄室の全長は７m程度であったと考えられよう。開口部の造作が明確ではないが、全長７mと規模が大きいことから、先述の石室分類では、１b類もしくは、２類に相当する。

玄室の全長が７m程度であることは、原分古墳と共通する。また、奥壁は抜かれているが１枚石で構成されることが明らかになっている。これらのことから、下土狩西１号墳の石室は、駿河東部では大型の部類に属し、原分古墳の石室と構造や規模が類似していることが分かる。

石　棺　下戸狩西１号墳では、奥壁よりに白色凝灰岩製の石棺が配置されていた。棺蓋は全体の１/４程度残存している。この石棺は、先述のとおり二辺傾斜のもので、短辺に円形の突起がつくものである。白色凝灰岩製の石棺をもつ点も、原分古墳と共通し、駿河東部の有力墳に共有される属性といえる。

築造時期　下土狩西１号墳の石室内から出土した須恵器は、最も古いもので遠江Ⅳ期前葉（飛鳥Ⅱ期併行）である。７世紀中葉という初葬の時期も、原分古墳とほぼ同一時期といえるだろう。

副葬品　石棺内からは、大刀、耳環、玉類が出土した。また、石棺外の遺物出土位置は、石棺と奥壁の間、石棺前の２箇所に分けられ、須恵器や大刀、馬具などが出土した。副葬品は、それぞれ詳細な出土位置が不明なものが含まれるが、須恵器11点以上、土師器３点以上、馬具１組分、大刀３点、小刀１点、鉄鏃14点以上、弓金具２点、耳環５点、玉類31点が確認できる。また、棺装具として鉄釘も４点認められる。

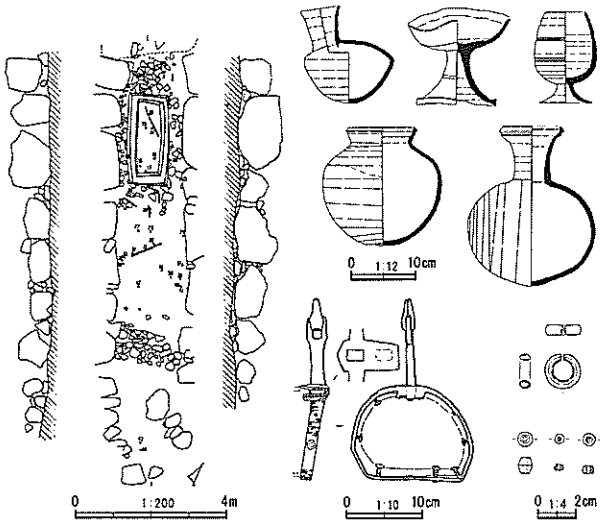


図６　下土狩西１号墳　関連資料

須恵器の内訳は、平瓶２点、広口壺２点、フラスコ瓶２点、脚付盌１点、高坏１点、高台坏１点、摘蓋１点があり、土師器は坏、埦がある。これら土器類は、上層、中層、下層の３層から出土しており、遠江Ⅳ期前葉（飛鳥Ⅱ期併行）～遠江Ⅴ期前葉（奈良時代）に位置づけられる。

下土狩西１号墳からは馬具や武器が豊富に出土した。馬具には、環状鏡板付轡１点と、壺鐙２点、

帯飾金具１点がある。壺鐙は、柄や、輪部、踏込が金属製壺鐙と同一のもので、有機物製の胸板を備える。形態的には、原分古墳から出土した１号鐙と同一系譜に連なるものである。

大刀には、金銅装頭椎大刀１点、銀装大刀１点、金銅装大刀１点が認められる。頭椎大刀は、柄頭、鍔、鞘尻金具、柄間金具などが遺存している。銀装大刀は遺存状況は良好ではないが、銀製鍔をもつ。金銅装大刀の形式は不明であるが、金銅製の鞘口金具、鞘尻金具が遺存する。

鉄鏃は14点分が遺存している。平根式の三角形鏃や柳葉形鏃の８点を中心に詳細な形態がわかるが、茎の存在から、尖根式鉄鏃も一定量含まれていたことがうかがえる。

弓金具は２点が確認できる。銅製の軸に鉄製の筒を有するもので、両頭部には鍍金が施されていた。金銅装の弓金具は類例が少なく、貴重である。なお、銅製の軸に鉄製の筒を有する構造は、原分古墳の弓金具１類と共通する。

釘付木棺　副葬品鉄器と混在して、鉄釘が確認できた。下土狩西１号墳には、石棺以外に、釘付木棺が用いられていたことが分かる。石棺と釘付木棺という組合せも原分古墳と共通する。釘付木棺の存在が確認できる古墳例は少なく、駿河東部では、原分古墳や下土狩西１号墳のほかに、伊豆ノ国市大北34号横穴墓（斎藤編1981）に認められる程度である。遠江でも鉄釘が出土する古墳は少なく、25例を挙げうるに過ぎない（大谷2003）。釘付木棺は、有力階層の棺として用いられる傾向があり、駿河東部においても同様の性格が指摘できる。

下土狩西１号墳の位置づけ　以上、下土狩西１号墳の内容を簡単に紹介してきたが、築造時期だけでなく、墳丘規模、石室、石棺、釘付木棺、副葬品組成など、原分古墳との類似点が非常に多いことは容易に了解できるだろう。両古墳に葬られた被葬者は、経済的な実力、職掌、地域社会での役割など、共通項が多かったと想定できる。原分古墳と下土狩西１号墳は、500m程度しか離れていない至近距離に相次いで築造されていることの意義を改めて評価する必要がある。黄瀬川流域の地域社会に根ざす人びとが置かれていた特殊な役割が、７世紀中葉の有力古墳を林立させる要因であったといえる。両古墳が示す豊富な副葬品からは、その特殊な役割に、畿内中枢が密接にかかわっていたと推測できる。

5　結　語

当地域の石室形態を３種に分類し、検討した。導入期における石室は小型であるが、２期以降、実円寺西第１号墳や原分古墳、船津寺ノ上１号墳にみられるように各地に直径20m級の古墳が構築され、横穴式石室も大型化する。これらの古墳は、地域における上位階層に位置づけられるものの、石室形態や規模による階層差は見出しにくく、等質的である。

原分古墳の家型石棺は縄掛突起を有しており、黄瀬川流域では初例である。突起数は８個が想定され、駿河中央部の賤機山古墳、駿河丸山古墳でみられる家形石棺と共通するものである。駿河中央部における最有力古墳と共通する家形石棺を内包することは、原分古墳例の優位性を雄弁に物語るといえる。いっぽう、鉄釘は原分古墳、下土狩西１号墳において確認できる。釘付木棺が存在する可能性が指摘でき、凝灰岩製の石棺と釘付木棺が用いられることは、有力墳に共通する埋葬方法であった可能性が高い。

組合式箱形石棺をもつ小型の無袖式石室が多く確認できる駿河東部において、７世紀前半代を通じて、原分古墳をはじめとした有力階層の古墳では石室の大型化が進行し、地元産の白色凝灰岩を用いた石棺が採用される。石室の大型化、凝灰岩製石棺の採用により、地域内の階層秩序が明確に表現されるようになる。駿河東部においても、古墳における地域秩序が表出した事象として捉えることができる。

駿河東部では、最上位に位置する石室は見出しにくいものの、７世紀前半の上位階層の古墳には大型の無袖式石室が採用され、豊富な馬具や装飾付大刀が副葬された。また、有力古墳には、凝灰岩製の石棺や釘付木棺が用いられることもあった。駿河東部の有力古墳はそれぞれに個性があるが、地域全体と

しての共通性も高い。原分古墳と下土狩西１号墳の類似は、駿河東部の地域社会に住む人びとが置かれた共通の社会的状況を明確に示しているとともに、その背景には倭王権の地域支配方式が転換された事象として捉えることができる。黄瀬川流域における石棺をもつ古墳の被葬者には、駿河中央部の首長との関わりや倭王権との結びつきをあらたに強めた新興の小首長層の姿をみることができよう。

註

1　中原４号墳からは鉄鉗といった鍛冶具、U字鍬先、針、象嵌剣などの豊富な鉄製品が出土し、後続する東平1号墳からは象嵌大刀、銅製壺鐙、丁字形利器が認められる。両古墳は、象嵌の刀剣類、馬具など、共通する副葬品組成をもつ。なかでも丁字形利器は全国で３例確認されているが（久松1994）、そのうち２例は駿河東部の古墳からの出土品である。時代は下るものの、多賀城住居跡SI2300工房跡からも同様の利器が出土している（多賀城跡研究所1995）。鍛冶具の出土や鍛冶工房から出土している丁字型利器の存在から、両古墳とも鉄器生産にかかわる被葬者が想定される。

2　下土狩西１号墳の石棺は『大師山横穴群』のなかで棺身のみ実測図が掲載されている。今回、原分古墳の移築復元に伴い、下土狩西１号墳の石棺を実見する機会を得て、棺蓋が存在することが判明した。長泉町教育委員会の廣瀬氏に確認したところ、写真からも棺蓋が確認することができた。報文にある鮎壺の石棺と規模・形態的特徴が同じであることから実測図が入れ替わって掲載された可能性が高い。よって、本稿では従来鮎壺の石棺とされる実測図を下土狩西１号墳の石棺として掲載した。

参考文献

稲垣甲子男　1980　『駿河妙見古墳群　静岡県富士川町室野坂・妙見古墳群調査報告書』　富士川町教育委員会
井鍋誉之　2003　「東駿河の横穴式石室」　『静岡県の横穴式石室』　静岡県考古学会
井鍋誉之　2004　『田頭山古墳群』　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
井鍋誉之　2004　「東駿河・伊豆における律令墓制の展開」　『財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所　設立20周年記念論文集』
井鍋誉之　2005　「組合式箱形石棺をもつ横穴式石室」　『研究紀要』　第11号　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
岩原　剛　2008　「三河の無袖式石室の様相」　『東国に伝う横穴式石室-駿河東部の無袖式石室を中心に』静岡県考古学会
大谷宏治　2003　『大屋敷C古墳群・大屋敷１号窯　第１分冊』　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所
小野真一　1965　「第３章　古代社会　第１節　古墳文化」　『長泉郷土誌』　長泉町教育委員会
菊池吉修　2008　「駿河における横穴式石室」　『東国に伝う横穴式石室-駿河東部の無袖式石室を中心に-』　静岡県考古学会
後藤守一・斎藤　忠　1952　『賤機山古墳』　静岡市教育委員会
後藤守一・中野国雄　1958　『吉原市の古墳』　吉原市教育委員会
齊藤　忠（編）　1981　『大北横穴群』　伊豆長岡町教育委員会
志村　博　1981　『西富士道路（富士地区）岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書』　富士市教育委員会
鈴木敏中　2000　『夏梅木遺跡群』　三島市教育委員会
多賀城跡調査研究所　1995　『多賀城跡第66次調査宮城県調査研究所　年報』
長泉町教育委員会　1965　『長泉郷土誌』
久松義昭　1994　『東平１号墳発掘調査概報』　富士市教育委員会
平野吾郎　1976　『大師山横穴群』　伊豆長岡町教育委員会
平林将信・川上敏朗　1986　『実円寺西古墳保存修理工事報告書』　富士市教育委員会
平林将信　1987　『船津寺ノ上第１号墳　発掘調査報告書』　富士市教育委員会
増田一裕　2004　「家形石棺の基礎的分析（下）」『古代学研究』164　古代学研究会
望月薫弘（編）　1962　『駿河丸山古墳』　静岡市教育委員会
渡井義彦（編）　1988　『富士市の埋蔵文化財（古墳編）』　富士市教育委員会

図出典

図１　筆者作成　図２　実円寺西第１号古墳：平林将信・川上敏朗　1986　『実円寺西古墳保存修理工事報告書』　富士市教育委員会再トレース原分古墳　本書掲載図　図３　筆者作成　１：（富士市1994）　２：（久松1994）　３：志村　博1983　『大渕片倉1号墳』　富士市教育委員会　４：志村　博　1981　『西富士道路（富士地区）岳南広域都市計画道路田子浦臨港線埋蔵文化財発掘調査報告書』　富士市教育委員会　５：（平林将信・川上敏朗1986）　６：本書掲載図　７：井鍋誉之編　2001　『富士川ＳＡ関連遺跡』　（財）静岡県埋蔵文化財調査研究所　８：（鈴木1989）　９：（平林1987）　10：後藤守一・中野国雄　1958　『吉原市の古墳』　吉原市教育委員会　11：植松章八　1976　『中里大塚団地塚古墳』　富士市教育委員会　12：（鈴木2000）　13：（鈴木2000）14：（鈴木1998）　15：小野真一　1971　『伏見古墳群-駿豆地方に於ける終末期古墳の研究』　加藤学園沼津考古学研究所　16：稲垣甲子男　1980　『駿河妙見古墳群　静岡県富士川町室野坂・妙見古墳群調査報告書』　富士川町教育委員会　図４　下記文献より再トレース　清水柳北２号墳：（鈴木1989）　夏梅木６号墳例：（鈴木2000）　図５　下記文献より再トレース　賤機山古墳：後藤守一・斎藤　忠　1952　『賤機山古墳』　静岡市教育委員会　駿河丸山古墳：望月薫弘（編）　1962　『駿河丸山古墳』　静岡市教育委員会　原分古墳：本書掲載図　下土狩西１号墳：平野吾郎　1976　『大師山横穴群』　伊豆長岡町教育委員会　山ノ神道古墳：（平野1976）　平石４号墳：（平野1976）図６　下土狩西１号墳　石室実測図：小野真一　1965　「第３章　古代社会　第１節　古墳文化」　『長泉郷土誌』　長泉町教育委員会　出土須恵器　装身具　再実測・再トレース

第4章　総　括

長泉町原分古墳の調査成果は駿河地方の古墳研究のみならず、終末期の古墳研究を進める上で欠かすことのできない貴重な資料を提供するものである。

以下、本報告で明らかになった成果をまとめ、総括としたい。

墳丘と横穴式石室　原分古墳は直径17mの円墳で、埋葬施設は開口部に段を有する無袖の横穴式石室を採用していた。横穴式石室の規模は、長さ7.5m、幅1.7m、高さ2mおよび、前庭側壁を含めれば10.4mにおよぶ長大な規模をもつ。出土遺物を総合的に検討した結果、古墳は7世紀中葉の早い頃に築造され、7世紀後葉まで追葬が行われたと考えられる。

駿河においては、無袖式石室が富士山麓を中心にして、6世紀後半に導入される。いまだこの石室の系譜関係は明らかではないが、相模、武蔵の一部にも分布している。原分古墳を含む黄瀬川流域の古墳群では7世紀に無袖式石室の築造を開始し、副葬品が卓越する有力墳が集中する。原分古墳は、豊富な内容から、これら有力墳のなかでも最も上位に位置づけられる。

古墳構築法　墳丘の残存状態は良好で、古墳構築過程を詳細に復元できた。側壁は3段構成で、墳丘内にみられた指標石の存在から、墳丘規模を拡大していく様子がうかがえた。また、側壁と前庭側壁の関係性や墳丘盛土との一体性が明らかにされ、細部にわたる工程が把握できた。駿河東部の横穴式石室は墓坑を深く掘り込み、墳丘盛土を極力少なくする地下式構造の石室が一般的である。これに対して、原分古墳の墓坑は浅く、墳丘盛土量は他の古墳を圧倒している。また、巨石を用いている点からも墳丘、石室構築に関わる専門の工人集団が関与していた可能性が指摘できる。巨石使用、大量の盛土構築という観点にたてば、倭王権との技術的な連携なくして原分古墳は構築されなかったであろう。

家形石棺　遺存状況は良好ではないが、原分古墳の石室内には、家形石棺がおさめられていた。棺蓋の破片から、縄掛突起を有する凝灰岩製の刳抜式家形石棺であることが判明した。静岡県内では凝灰岩製の石棺は14例が確認されている。黄瀬川流域では6例が存在し、いずれも7世紀代に位置づけられる。ただし、原分古墳で出土した縄掛突起をもつ刳抜式家形石棺は、黄瀬川流域では初例である。復元案では8突起を有すると想定され、築造時期が遡るものの静岡市賤機山古墳や静岡市駿河丸山古墳例の家形石棺との類似性が認められる。石材産出地にかんしては長泉町下土狩西1号墳例、長泉町山の神道古墳例とともに、沼津市静浦山系の海岸部に比定された。

釘付木棺　石室内からは、6点の鉄釘が出土した。出土位置から、石室中央右壁寄りに釘付木棺が配置された可能性が高い。駿河東部では鉄釘の出土は少なく、原分古墳のほかには、長泉町下土狩西1号墳や伊豆の国市大北横穴墓群に出土が知られるのみである。駿河東部では、7世紀以降の有力墳墓に釘を用いた木棺が採用されており、原分古墳の調査によって、その一例が追加された。

人　骨　石室床面では、4体分の人骨が確認された。このうち、成人人骨は3体認められ、残り1体は小児の人骨である。成人人骨は、A人骨が壮年女性（25～40歳）、B人骨が熟年男性（40～60歳）、C人骨が壮年後半（30歳～40歳）の可能性が高い。男女3人の骨は解剖学的に正常な位置関係（交連状態）になく、明らかに2次的な移動を経たものである。人骨の出土状態は、原位置から大きく乱れていないと判断でき、改葬による埋葬であったと判断できる。

埋　葬　原分古墳の埋葬方法については、①石棺による埋葬、②木棺による埋葬、③改葬による埋葬

の3種を把握することができた。さらに、棺配置や人骨の出土状況から、①→②→③の埋葬順序が想定できた。初葬の被葬者は、家形石棺に葬られたと考えられる。いっぽう、第1回目の追葬による被葬者は、釘付木棺に葬られたと考えられるほかに、時期差のある副葬品が類似した組成・出土位置を示すことを考慮すると、家形石棺に追葬した可能性も指摘できる。その後の追葬の回数は必ずしも明瞭でないが、石棺への追葬を認め、鉄釘の形態差から二つ目の木棺があったと評価するならば、①、②による埋葬は、最多で4回存在したと想定できる。

閉塞儀礼　閉塞石内よりフラスコ瓶1点分の破片が出土した。閉塞石の中位で出土していることや形態的特徴が副葬土器Ⅱ群と類似することから、追葬に伴う儀礼の存在が知られる。詳細な閉塞過程を復元することは困難であるが、少なくとも、追葬の後にフラスコ瓶を用いた閉塞儀礼があり、この段階で完全な閉塞が行われた可能性が指摘できる。

墳丘外の儀礼　古墳の南東側では土器廃棄土坑が1基検出できた。土坑内からは、瑳1点、フラスコ瓶1点、大型平瓶2点、甕2点の須恵器が出土した。須恵器は破片の状態で出土しており、使用後に廃棄された可能性がある。また、古墳東側の周溝内でも須恵器甕が集中的に出土した。いずれも原分古墳の埋葬と同時代の土器で、古墳周囲で儀礼が行われていたことは明らかである。器種組成は石室内の副葬土器群とは異なり、大型甕、大型平瓶が多く用いられていることから、酒宴的要素を含んだ墓前祭祀が執り行われていた可能性が高い。

副葬土器群　石室内から出土した土器は土師器4点、須恵器37点であった。埋葬に伴う土器は、出土位置より副葬土器Ⅰ群～副葬土器Ⅲ群に分けられた。副葬土器Ⅰ群は原分古墳の中で最も古い土器群であり、遠江Ⅲ期末葉的様相を残す遠江Ⅳ期前葉の初頭に相当する。副葬土器Ⅱ群は典型的な遠江Ⅳ期前葉の土器群で、副葬土器Ⅲ群は遠江Ⅳ期後葉に位置づけられる。副葬土器Ⅰ群と副葬土器Ⅱ群の時期差は少なく、土器組成においても坏類、壺類、瑳、瓶類と共通し、両群ともに湖西産須恵器を主体としながらも、一定量の猿投産の須恵器が認められる。副葬土器Ⅲ群は摘蓋、坏身を中心とし、副葬土器Ⅰ群やⅡ群の組成とは大きく異なる。

土師器は坏で構成され、黒色処理が施された模倣坏1点、暗文坏3点がある。模倣坏は駿河東部を中心に甲斐、相模などでも一定量認められるものである。原分古墳から出土した模倣坏は遠江、駿河西部ではみられないもので、東国的な色彩が強い土器である。暗文坏は畿内産の暗文土器を祖形とするもので、駿河東部で生産された可能性が指摘できる。

金銅装馬具と鉄製馬具　原分古墳から出土した馬具は、量、種類ともに豊富で、豪奢であった。盗掘や撹乱による欠落はあるものの、年代差がある馬装2組が復元できた。古相を示す1号馬具には鉄製鉸具造環状鏡板轡（1号轡）、金銅装鞍金具（1号鞍金具）、鉄製壺鐙（1号鐙）、金銅装四脚辻金具（辻金具1類）、金銅装三葉文心葉形杏葉、金銅装帯飾金具（1類）が組み合う。新相を示す2号馬具には鉄製鉸具付環状鏡板付轡（2号轡）、金銅装鞍金具（2号鞍金具）、鉄製輪鐙（2号鐙）、金銅装八脚雲珠、鉄製鉸具付心葉形飾金具、金銅装イモガイ座飾金具、金銅装帯飾金具（2・3類）が組み合うと想定できる。

馬具の年代差から、それぞれの馬具を保有する世代の異なる2人の男性の被葬者が浮かび上がる。また、時代が異なるものの、馬装の類似性も指摘できる。鞍金具や杏葉などの金銅装馬具は倭王権や畿内有力氏族との結び付きを示し、いっぽうで轡、鐙などの鉄製馬具は東日本との関わりをもつことが想定される。

装飾付大刀と鉄製大刀　出土した大刀は少なくとも4点分が確認でき、最大6点の大刀が副葬されていた可能性がある。そのうち2点は装飾付大刀で、金銅装圭頭大刀と銀象嵌円頭大刀である。金銅装圭頭大刀は、遺存状況や出土位置から、石棺内に納められた可能性が指摘できる。銀象嵌円頭大刀は奥壁

表１　原分古墳の埋葬と副葬品の関係

時期		埋葬	棺	土器	馬具	大刀等	鉄鏃	飾弓	
630年代 640年代	(遠江Ⅲ期末葉～) 遠江Ⅳ期前葉	初葉	石棺	副葬土器 Ⅰ群	1号 馬具	金銅装圭頭大刀 無窓鍔付大刀 鉄鉾	尖根式鑿箭1類 片刃箭1類 平根式	1号 2号 3号 4号 飾弓	(1・2号飾弓) (3・4号飾弓)
650年代	遠江Ⅳ期前葉	第1回 追葬	(石棺/木棺)	副葬土器 Ⅱ群	2号 馬具	銀象嵌円頭大刀 (二円孔鍔付大刀)	尖根式鑿箭2a類 尖根式片刃箭2類 平根式		(1・2号飾弓) (3・4号飾弓)
660年代		追葬	(木棺)	副葬土器 Ⅲ群	－	－	尖根式鑿箭2b類	－	
670年代 680年代	遠江Ⅳ期後葉			－	－	－	－	－	
690年代	遠江Ⅳ期末葉	最終 追葬	改葬 成人3体 (小児1体)	－	－	－	－	－	

(　) は位置づけが不確定なもの

と石棺の間から出土し、編年的位置づけから、追葬時に副葬された可能性が高い。銀象嵌円頭大刀は銀の遺存状態が良好ではなかったが、マイクロフォーカスＸ線CTによって鮮明な画像が浮かび上がった。円頭柄頭には変形亀甲繋文が施され、八窓鍔には円文と渦巻文を主体とする銀象嵌が認められた。本例には、当時の象嵌技術の結晶ともいうべき緻密さがうかがえる。

駿河東部は６世紀後半以降、装飾付大刀が多く出土する地域である。金銅装圭頭大刀、銀象嵌円頭大刀の存在は、金銅装馬具と同様、倭王権との結びつきを示すものである。

鉄製の大刀では、静岡県内では初例である二円孔鍔が1点確認された。この鍔は房総半島から東北南部の太平洋岸地域に偏在することが指摘されており、先述した鉄製馬具と同様、東日本との関わりを示すものである。

鉄　鏃　鏃身部の数からは少なくとも41点分の鉄鏃があったことが確認できた。鉄鏃束は２束出土しており、形態的な類似から、生産段階における一括性が保たれていたと評価できる。鉄鏃構成は少数の平根式五角形・三角形鏃と多数の尖根式鑿箭鏃と尖根式片刃箭鏃を基本とする。形態と出土位置により、４つの鉄鏃群に大別でき、尖根式鑿箭鏃と平根式五角形鏃で構成される鉄鏃束と尖根式片刃箭鏃で構成される鉄鏃束がそれぞれ２組分想定できた。２組の鉄鏃束は初葬、追葬に伴うと捉えられる。鉄鏃束に量的差異は認められず、形態的にも類似することから、２人の被葬者はよく似た性格をもっていたことが指摘できる。また、形態的な差異が著しい一部の尖根式鑿箭鏃は、さらなる追葬の人物に伴う可能性がある。

飾　弓　弓金具は17点確認された。１基の古墳からの出土数としては、異例の多さといえる。材質と形態から４点の飾弓が想定できる。静岡県は弓金具が福岡県とならび多く出土する地域であり、今回の調査でさらに事例を追加することになった。とくに、銅製の軸に鉄製の筒を有する弓金具1類は珍しく、静岡県内では近隣の長泉町下土狩西1号墳例と本例をあげうるにすぎない。金銅装の弓金具は上総・下総を中心に東日本で多く出土しており、その関連性が注目される。また、弓金具1類の両頭部は軸と片方の頭部から構成される棒に別造りの頭部を被せて、固定する構造であることが判明し、弓への装着方法を推測することができた。

４点の飾弓は、編年的位置づけが難しいが、数の多さと、馬具や大刀、鉄鏃で想定できる２人の被葬者の存在を考慮すると、２点ずつ、２組の組合せに分離できる可能性がある。銀や銅などをもちいた装飾性が高い弓金具と鉄製弓金具がそれぞれ組み合うと想定すると、表に示すような組成が提示できる。

金銅製品　馬具・刀剣類に伴わない金銅製品が僅かながら認められた。これらは冠あるいは帯金具などに用いられた金具であると想定できる。とくに、花弁形歩揺や歩揺釣り手は冠の存在が推定できる。円形文が施される板状の飾金具は明確に用途を特定することはできなかったが、冠の一部や帯金具である可能性が考えられる。

奈良時代の攪乱　7世紀後半の最終埋葬後、奈良時代（8世紀）には家形石棺への破壊が及んでいる。家形石棺の破片は後世の工具痕が明瞭で、棺身部分は切り出されていた。石室内でみつかった家形石棺材のみでは明らかに部品数が不足しており、石棺材が古墳の外に持ち運ばれたものと捉えられる。いっぽう、石棺以外の遺物は比較的遺存状況が良好であることから、奈良時代の攪乱は、凝灰岩製の石材採取を主目的にしていたと考えられる。

古墳の再利用とその後　奈良時代における家形石棺破壊後、石室内の上層では平安時代（9世紀）とそれ以降に、墓を含む再利用が認められた。この段階における人骨は9体分存在し、なかには獣骨も含まれていた。江戸時代に入ると石室内は土砂により完全に埋没し、山の神を奉る塚として信仰の対象となり、近年まで守られてきた。発掘調査を経た現在は古墳隣接地に移築・復元され、一般の見学に供されている。

被葬者像　駿河東部では6世紀中葉以降、前方後円墳の築造が停止し、河川あるいは山麓ごとに横穴式石室を主体とする古墳群が築造される。当地域に構築される石室は基本的に無袖式石室のみの一系統で、墓制面で強い規範がうかがえる。

突出した大型墳の存在は認められないものの、黄瀬川流域においては7世紀以降に直径20m級の円墳が数多く築造される。このような有力墳には凝灰岩製の石棺が伴い、金銅装馬具、装飾付大刀、銅鋺をはじめとした豊富な副葬品が出土する。ただし、地域全体として大局的にみれば、これら有力墳は群集墳の一角に位置しており、地域全体に規制を及ぼすような最上位階層の首長の存在は見出しにくい。原分古墳をはじめとした有力墳の造営主体には各地域に併存する小首長層が想定できる。

原分古墳にかかわる中心的な人物は、7世紀中葉に相次いで葬られた2人の被葬者である。原分古墳から出土した土器や馬具、大刀、弓矢などの主要な副葬品は、2組分に分離できる点が注目できる。初葬と追葬という世代差のある2人の被葬者が、それぞれ共通した副葬品組成をもち、類似した副葬手順をふんで葬られた可能性が指摘できる。また、多様な副葬品は、それぞれ畿内と東日本という系譜の差をもつことでも共通している。副葬品からうかがえる2人の被葬者は、階層的にも、性格的にもよく似ていると評価できる。

原分古墳における中心的な2人の被葬者は、金銅装馬具や装飾付大刀の入手にみられるように、倭王権や畿内有力氏族との強い結びつきを有するとともに、東日本における実用的な鉄製馬具、大刀、鉄鏃の生産と流通にもかかわりをもつ人物であったことがうかがえる。世代差がありながら、互いによく似た性格をもつ2人の被葬者は、卓越する武器・馬具の様相から男性の可能性が高い。原分古墳の被葬者像には、7世紀の前半代を通じて、畿内中枢部に出仕、奉仕を続けるいっぽうで、地元においては東日本をめぐる交易網を仲立ちとした武器・馬具の生産と流通に関与し軍事的な基盤を固めた、累代の在地首長の姿を読み取ることができるだろう。

図　版

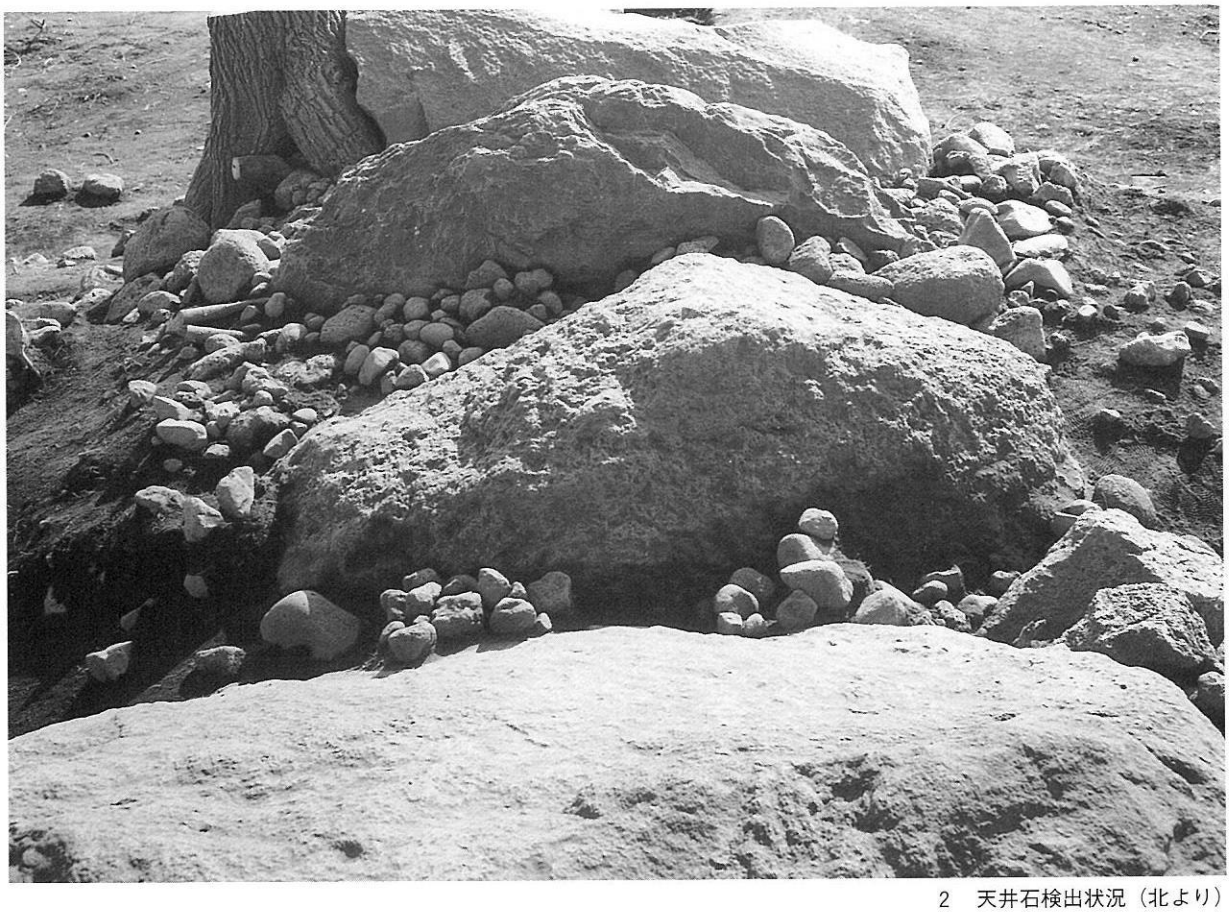
1　調査前全景（南東より）

2　墳頂部全景（南より）

図版 2

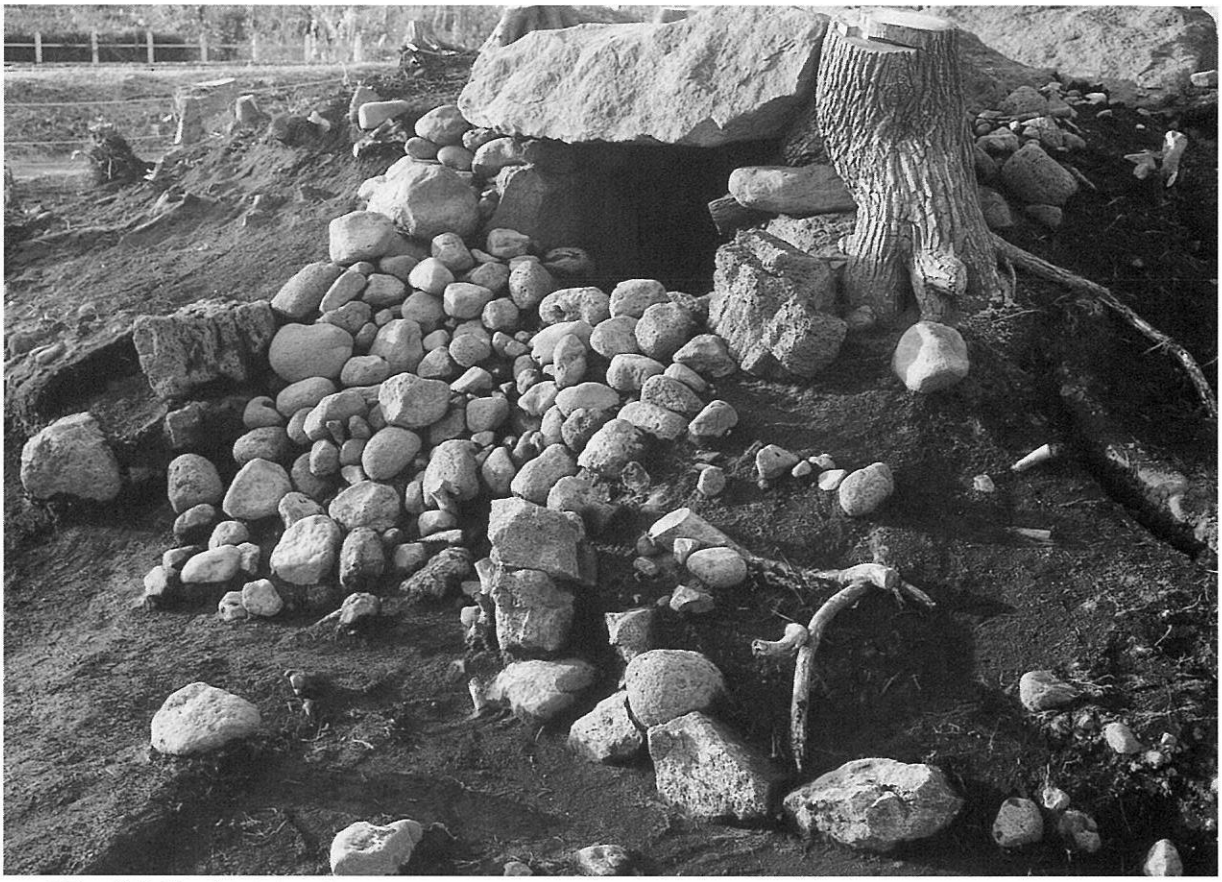
墳丘検出状況（南東より）

1　天井石検出状況（東より）



2　天井石検出状況（北より）

図版 4

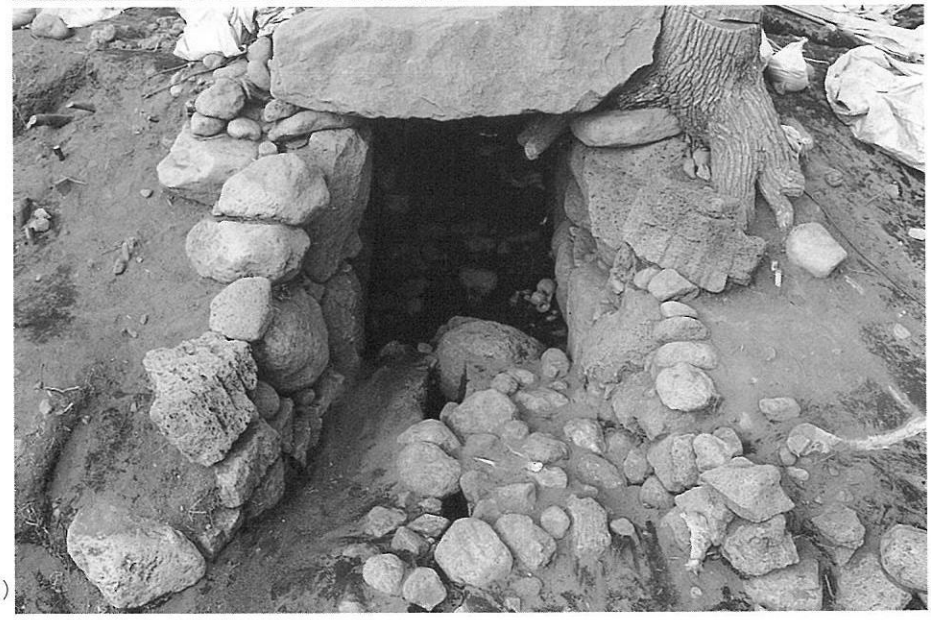


1　閉塞石検出状況（墳丘外より）

2　閉塞石検出状況（石室内より）

1　閉塞石半截状況（南西より）

2　閉塞石内土器出土状況（フラスコ瓶）

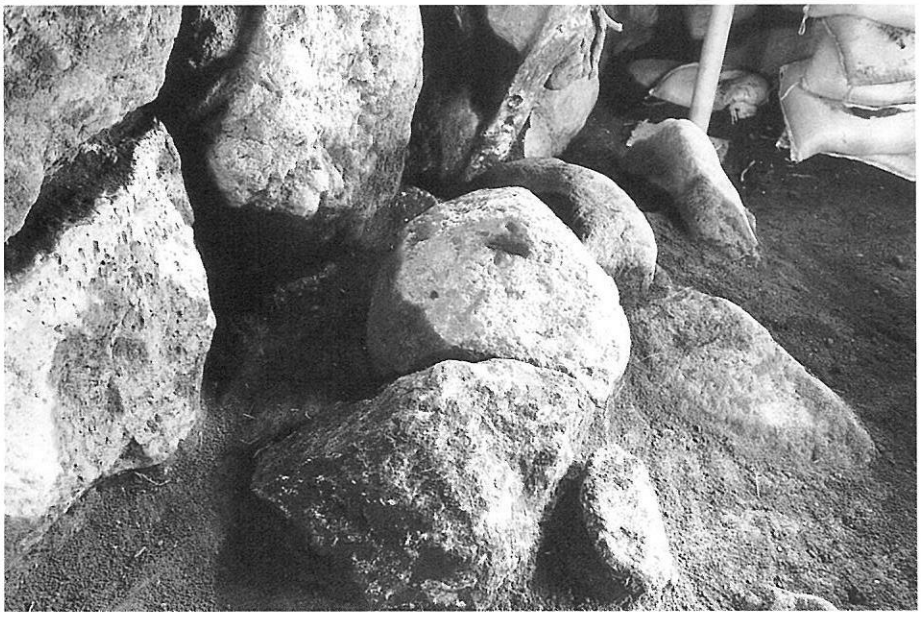


3　閉塞石下礫出土状況（南より）

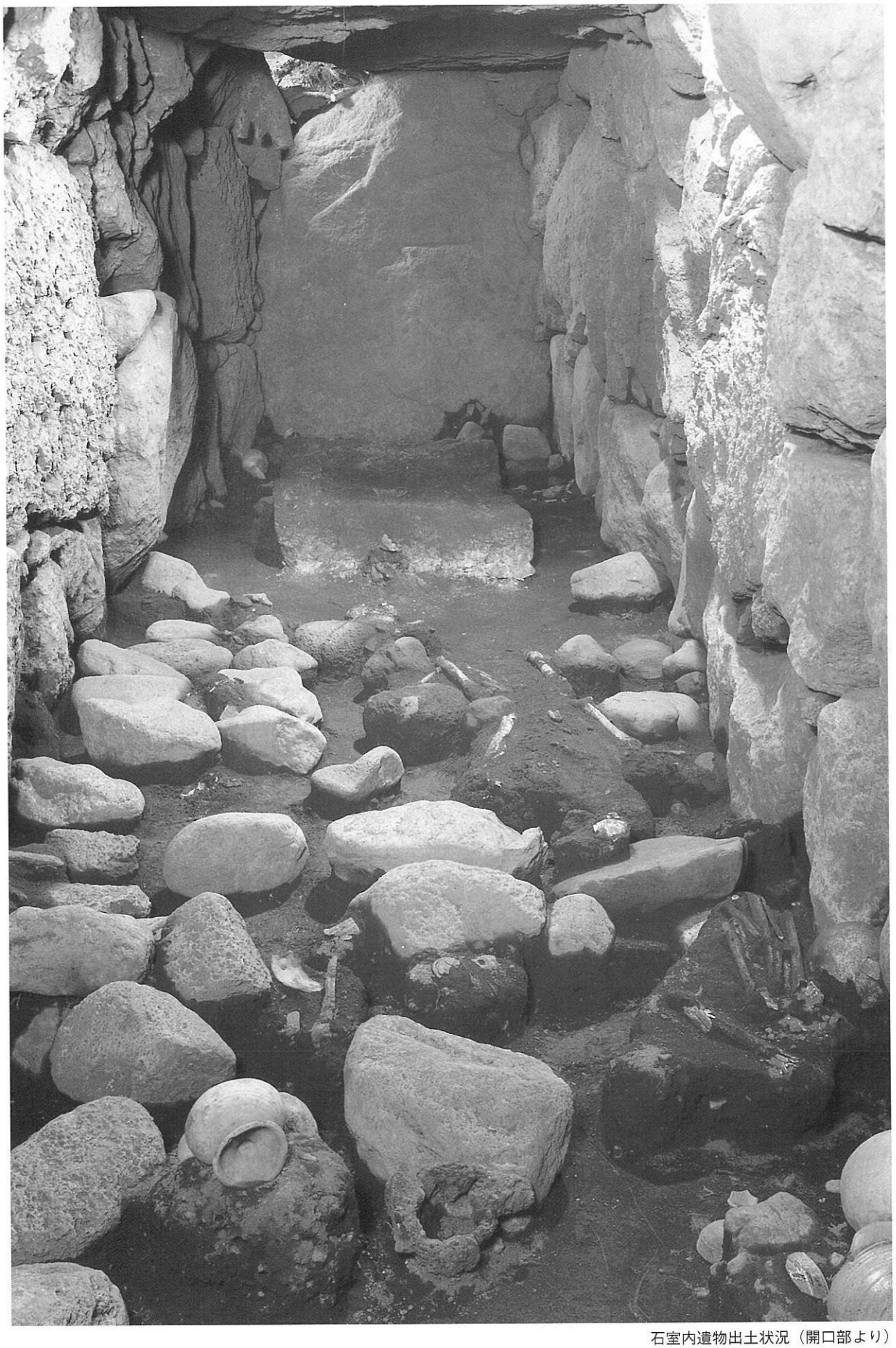
図版 6

1　奥壁側　石棺破片出土状況（南より）

2　奥壁側　棺蓋出土状況（南より）

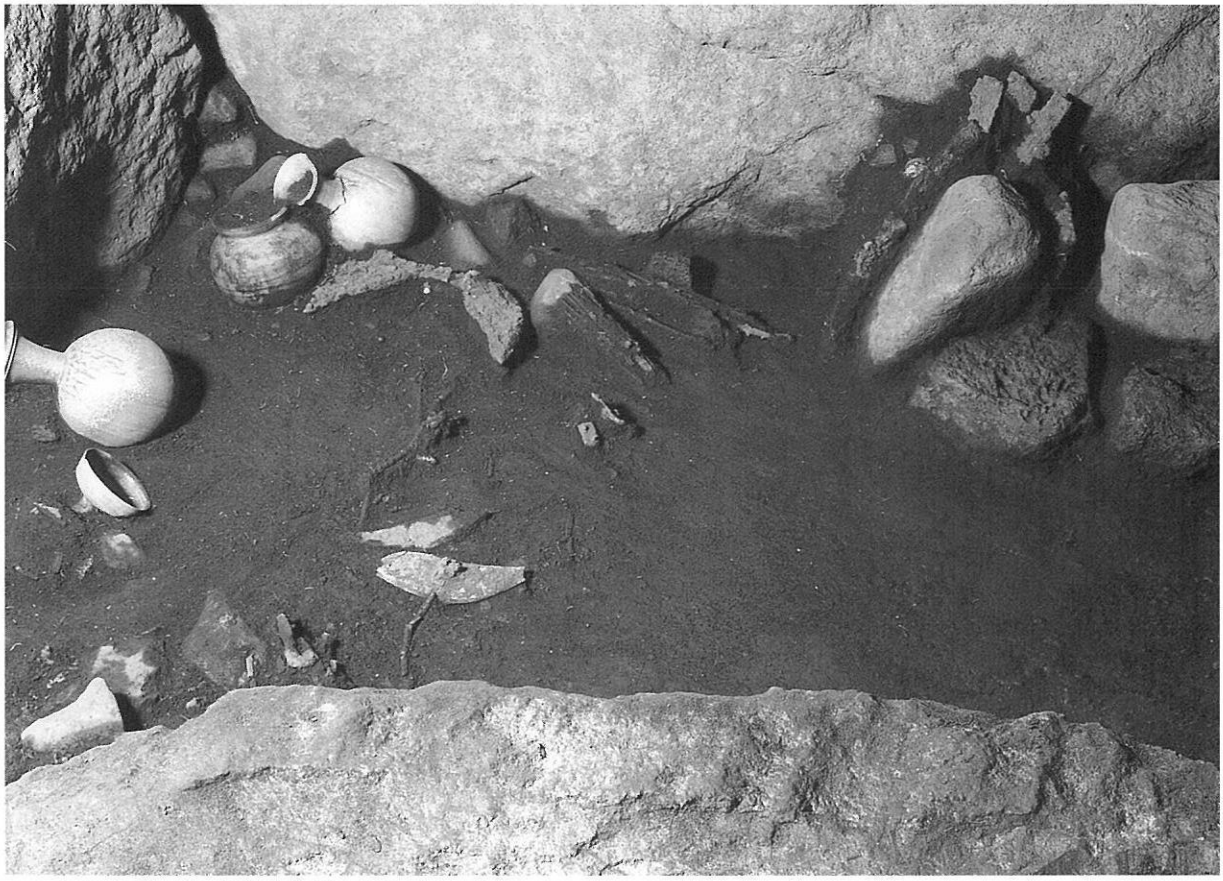


3　開口部側　石棺破片出土状況（奥壁より）



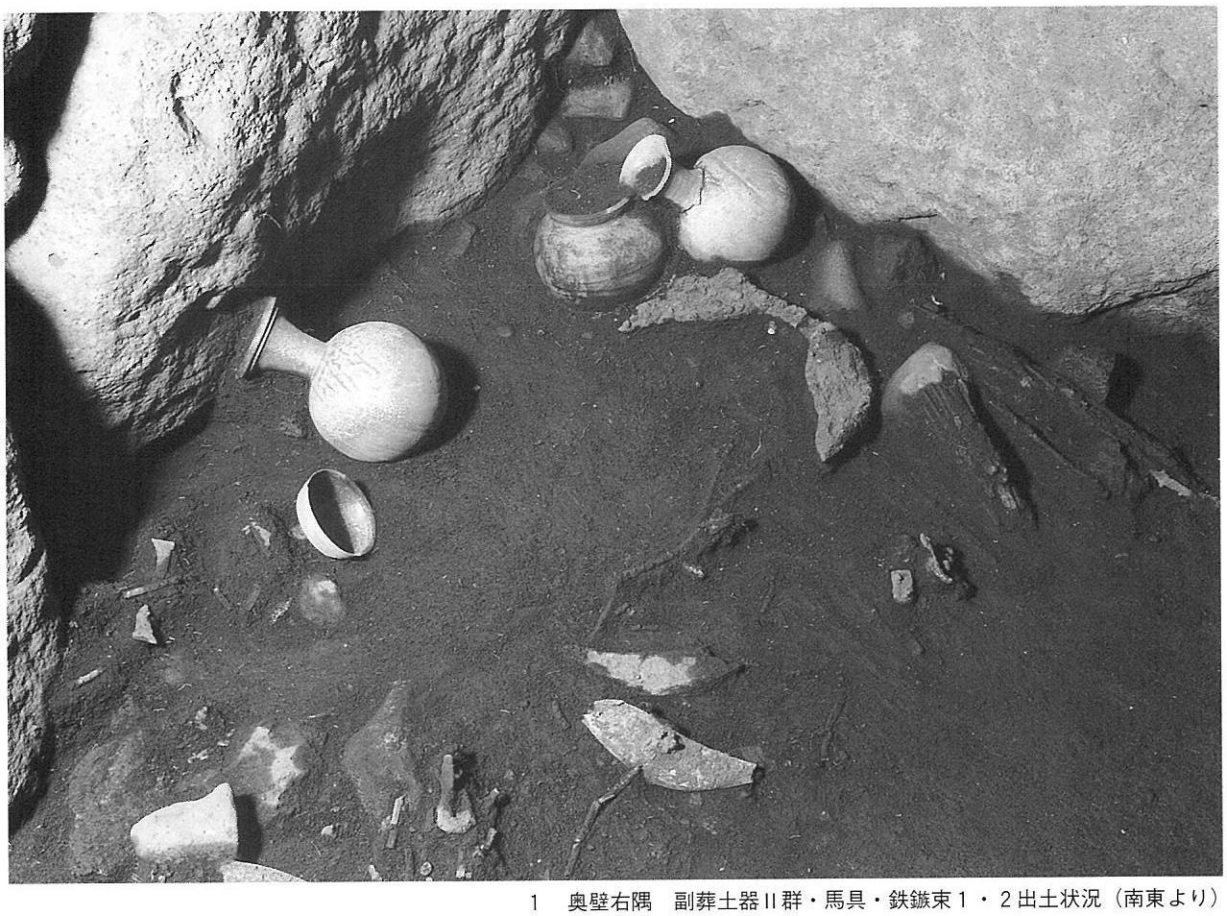
石室内遺物出土状況（開口部より）

図版 8

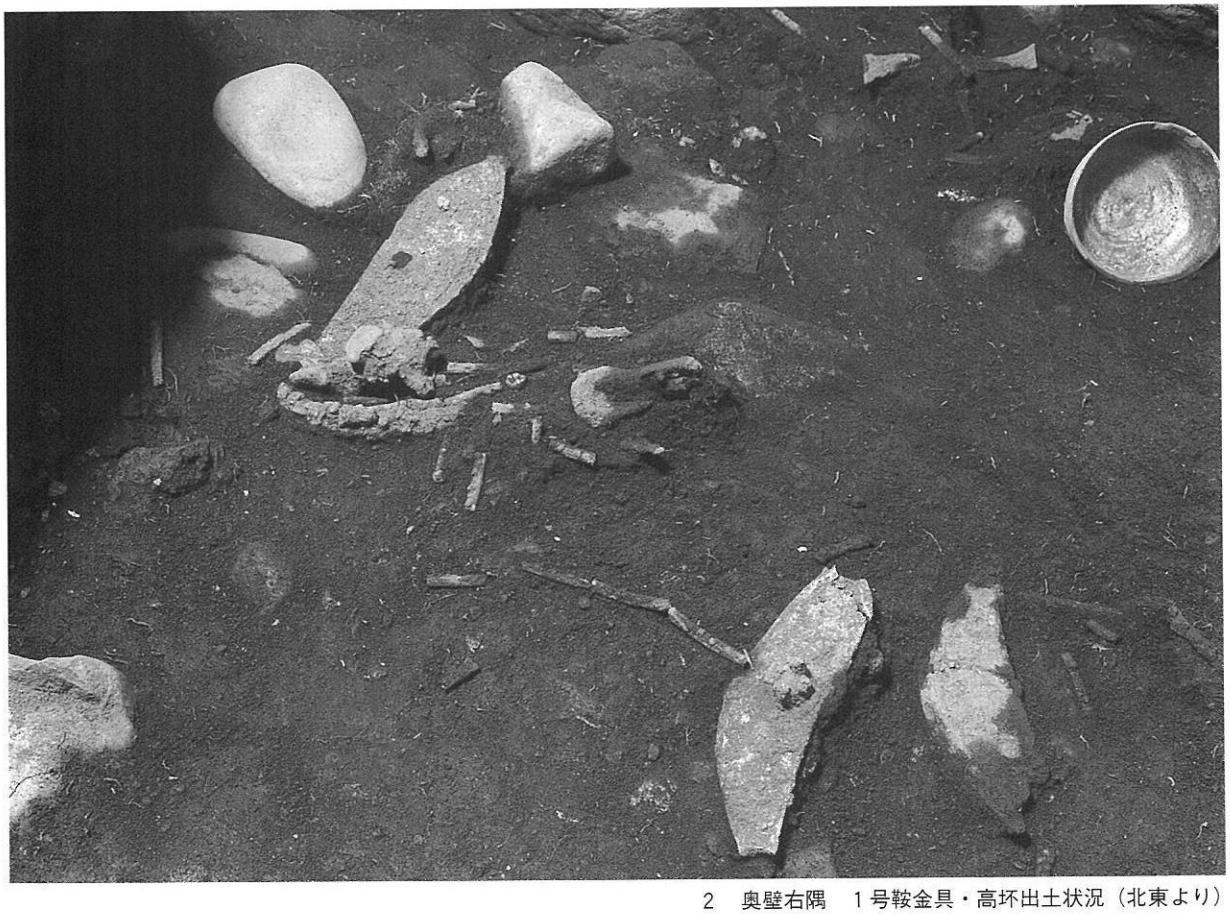


1　奥壁と石棺の間　遺物出土状況（開口部より）

2　奥壁左隅　円頭大刀柄頭・大刀・鉄鏃束１・２出土状況（南西より）

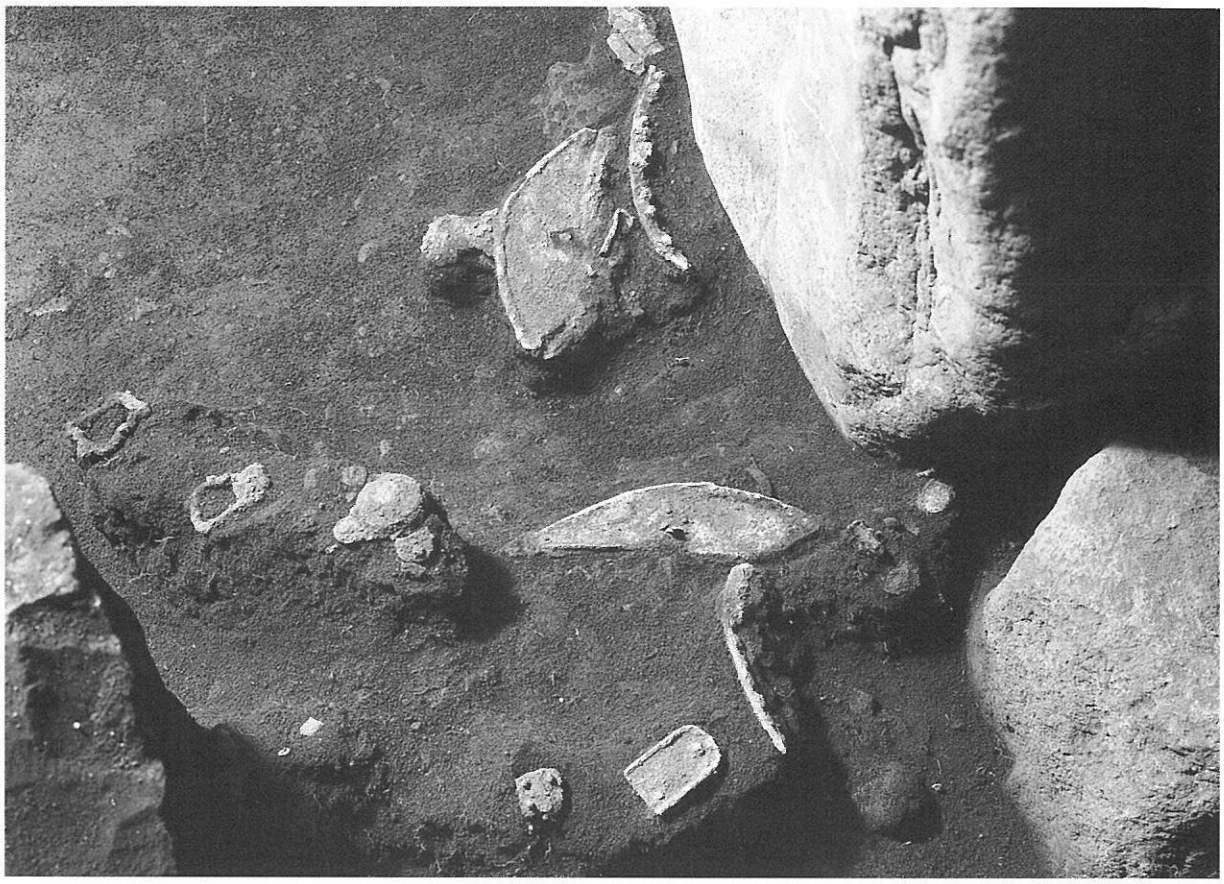


1　奥壁右隅　副葬土器Ⅱ群・馬具・鉄鏃束１・２出土状況（南東より）

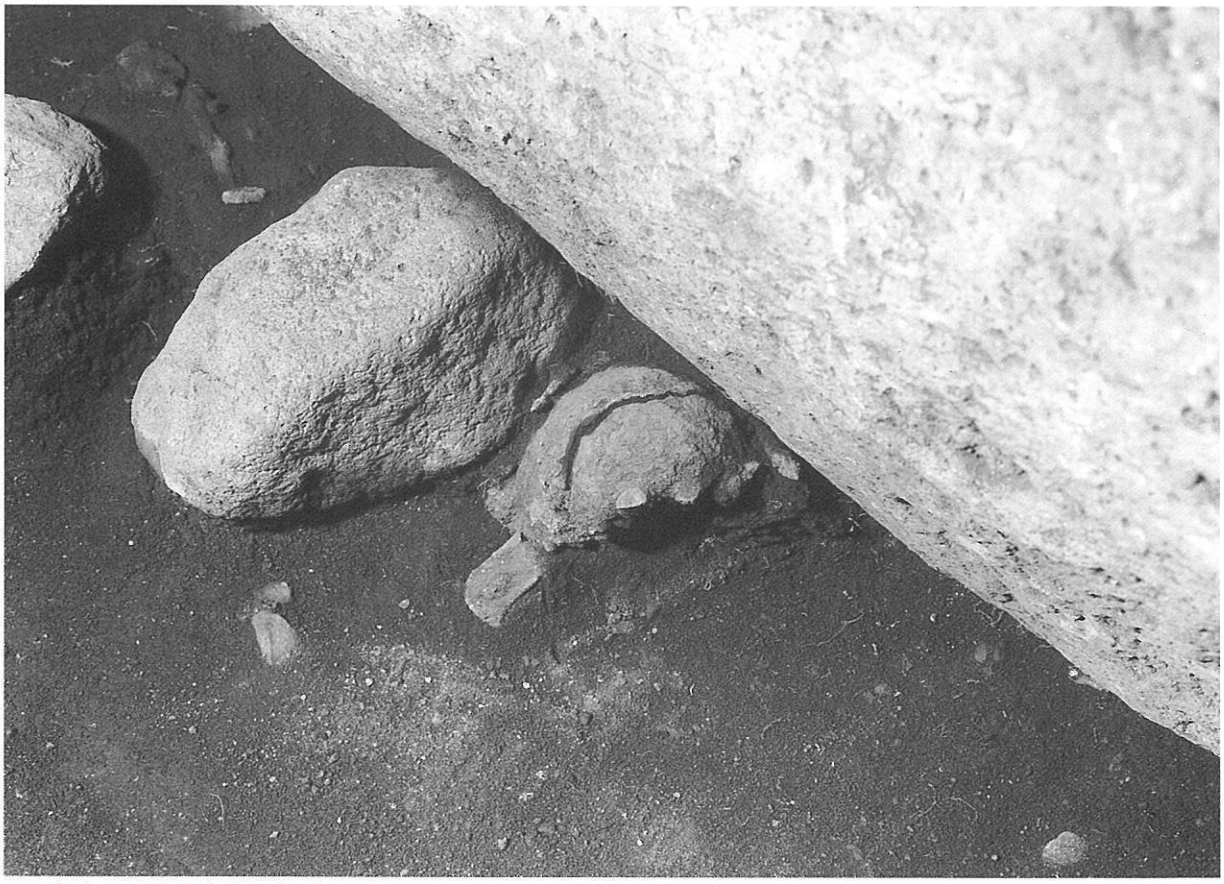


2　奥壁右隅　１号鞍金具・高坏出土状況（北東より）

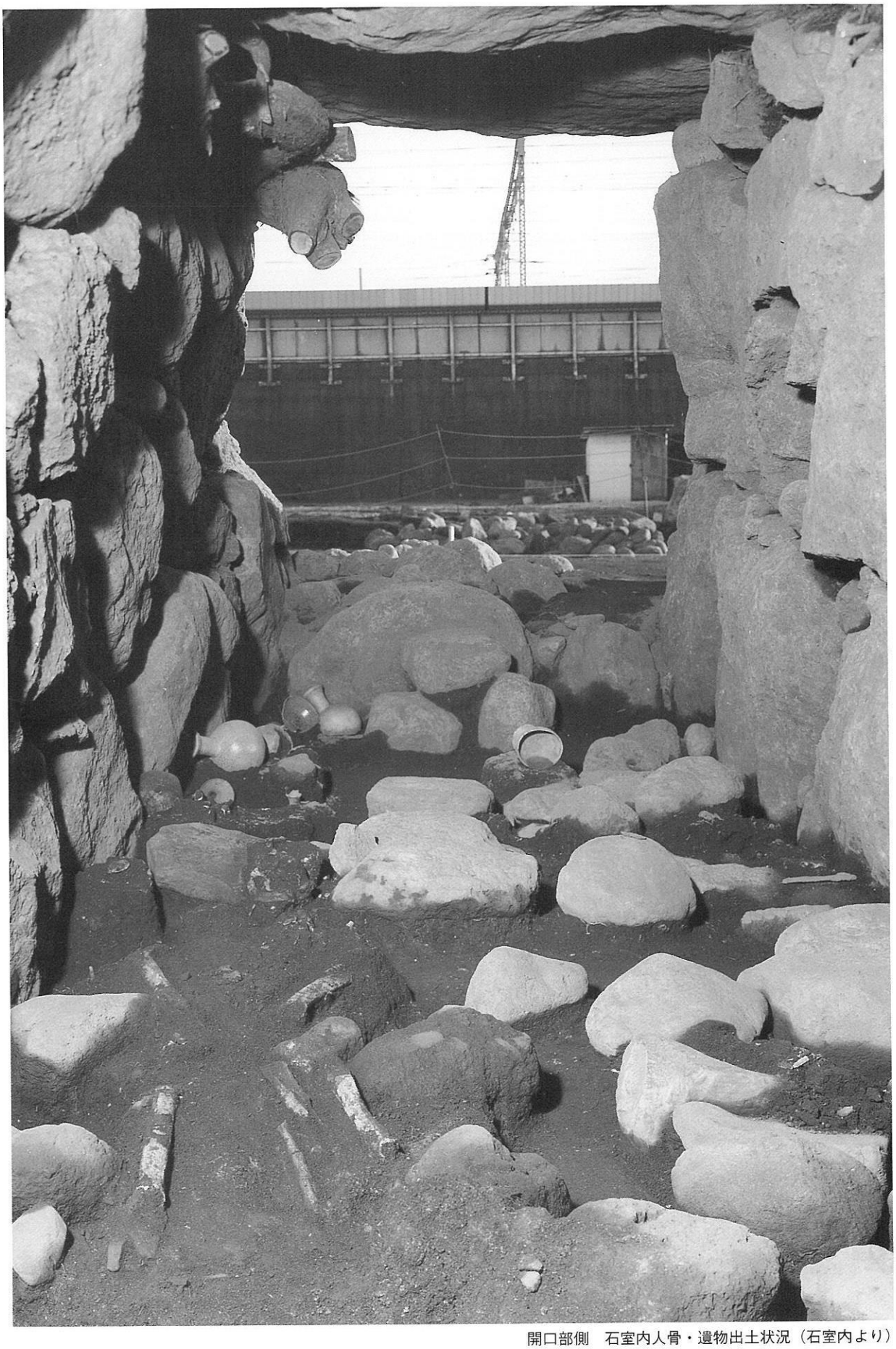
図版10



1　石棺左脇　1号鞍金具・帯飾金具・辻金具・鈒 具出土状況（南西より）



2　右壁　1号鐙出土状況（北東より）



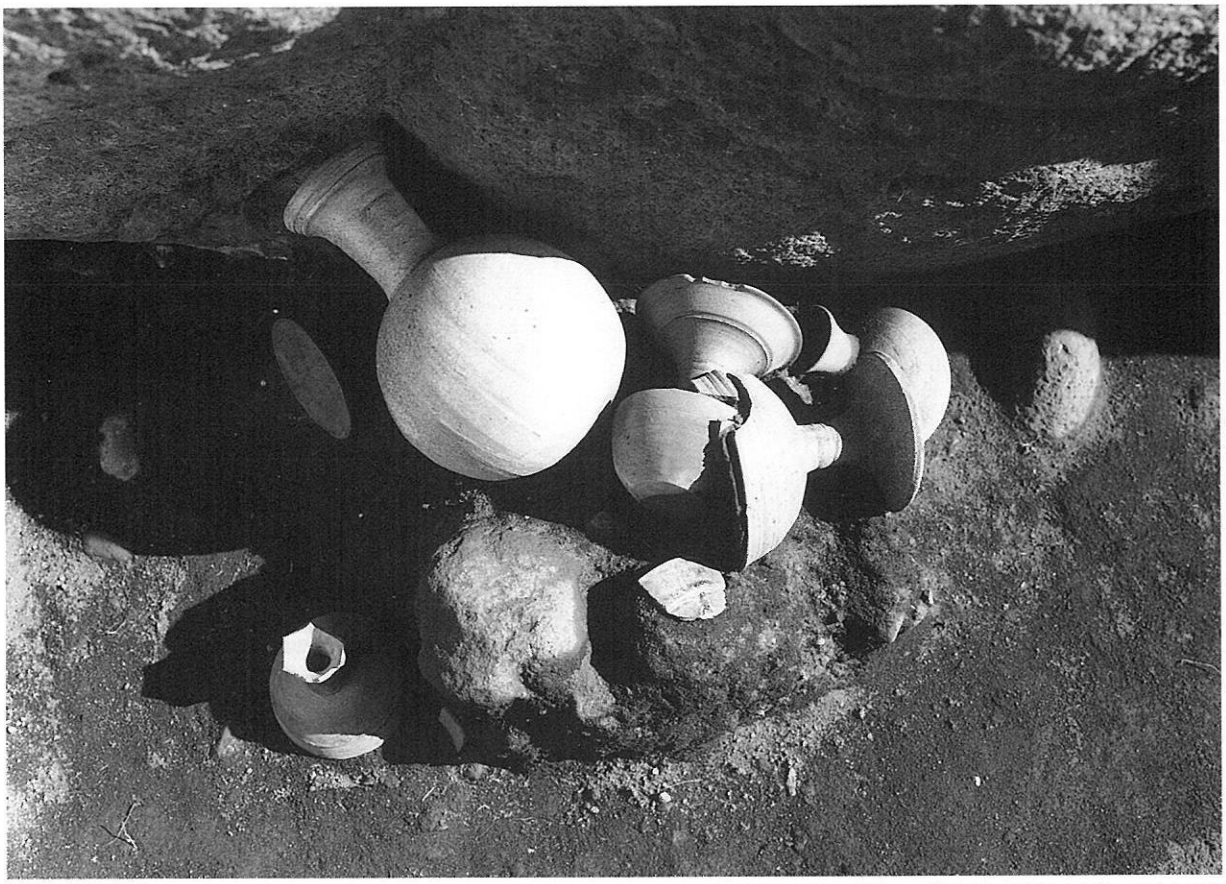
開口部側　石室内人骨・遺物出土状況（石室内より）

図版12

1　石棺右脇　雲珠・璉 出土状況（奥壁より）

2　右壁　2号轡出土状況（東より）

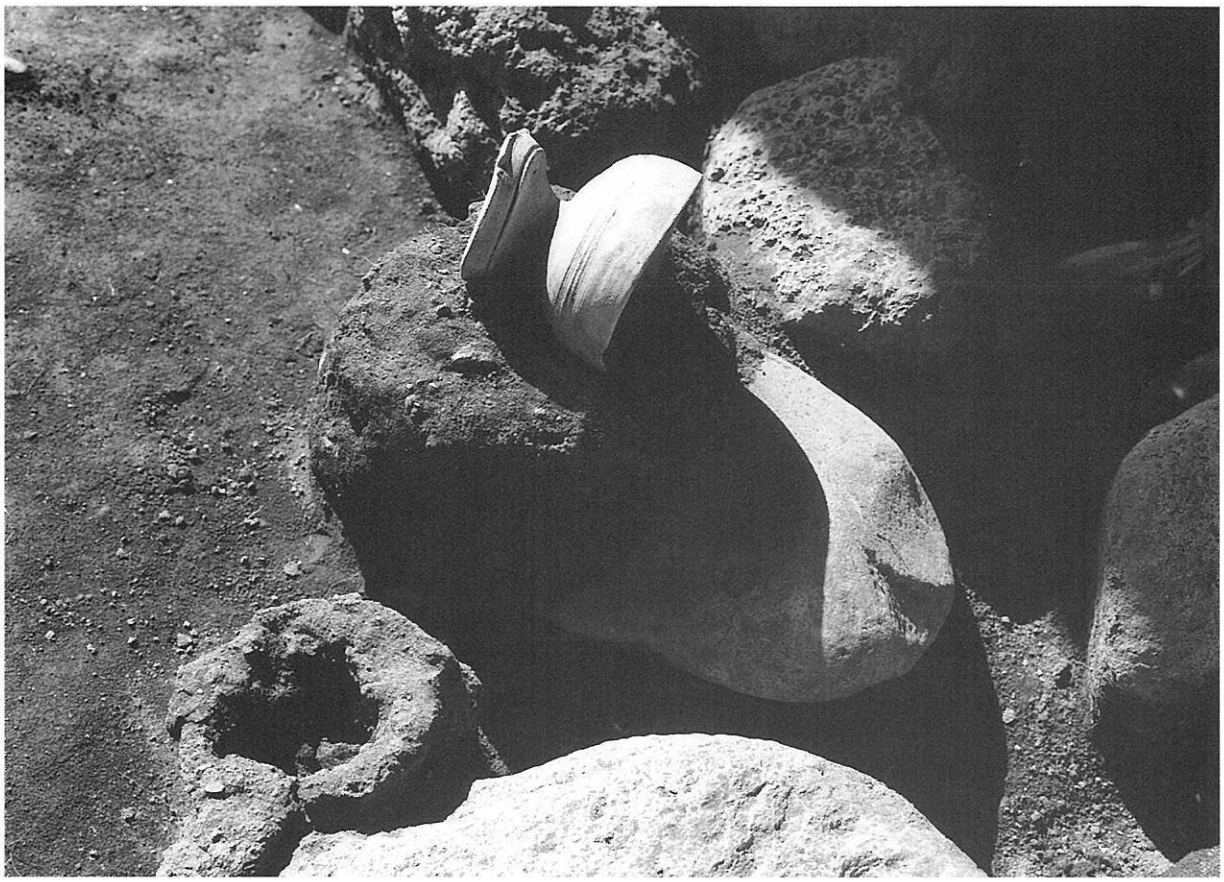
3　開口部側　刀装具出土状況（南東より）



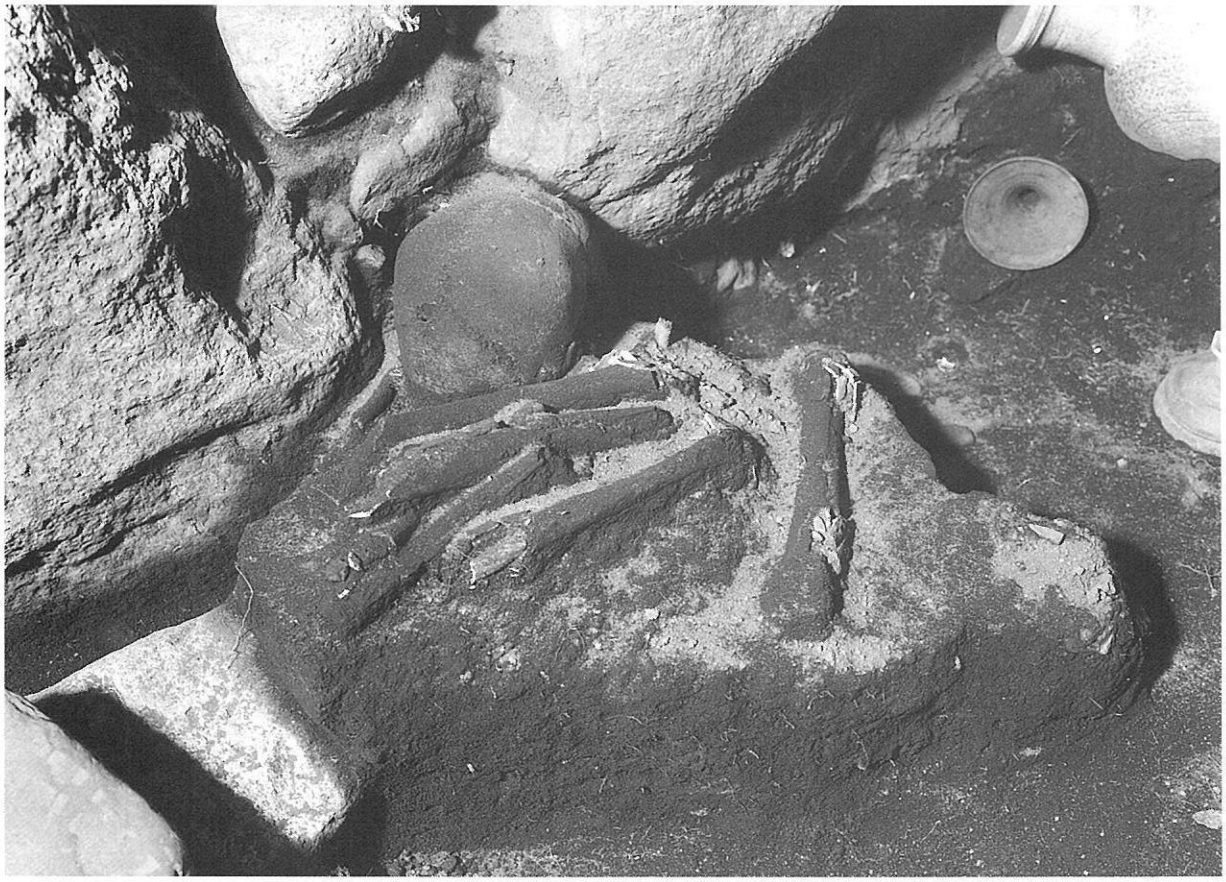
1　左壁　開口部側　副葬土器Ⅲ群出土状況（西より）

2　左壁　開口部側　副葬土器Ⅲ群出土状況（北西より）

図版14

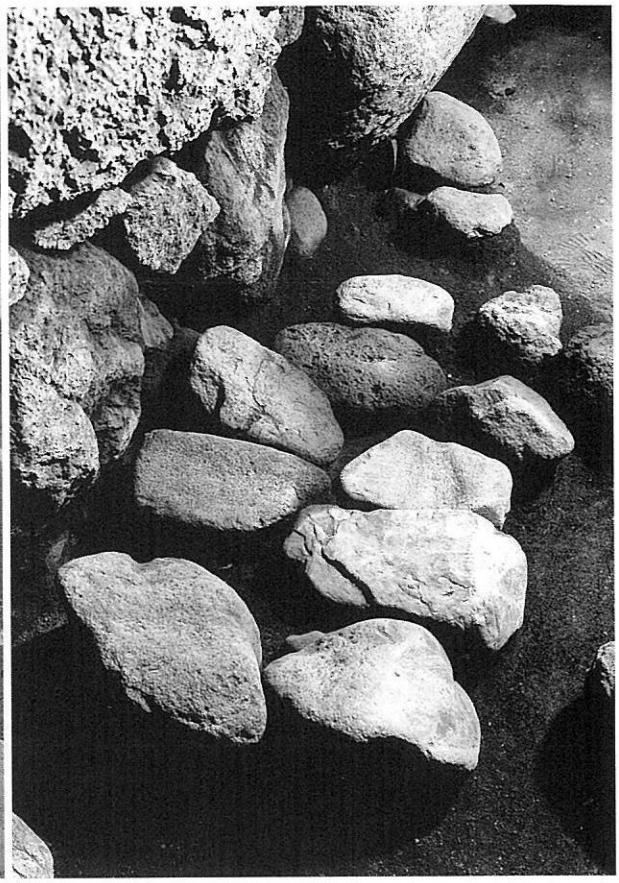


1　開口部側　高坏・２号鐙出土状況（奥壁より）



2　左壁　Ａ人骨出土状況（北西より）

1　左壁　人骨出土状況（奥壁より）



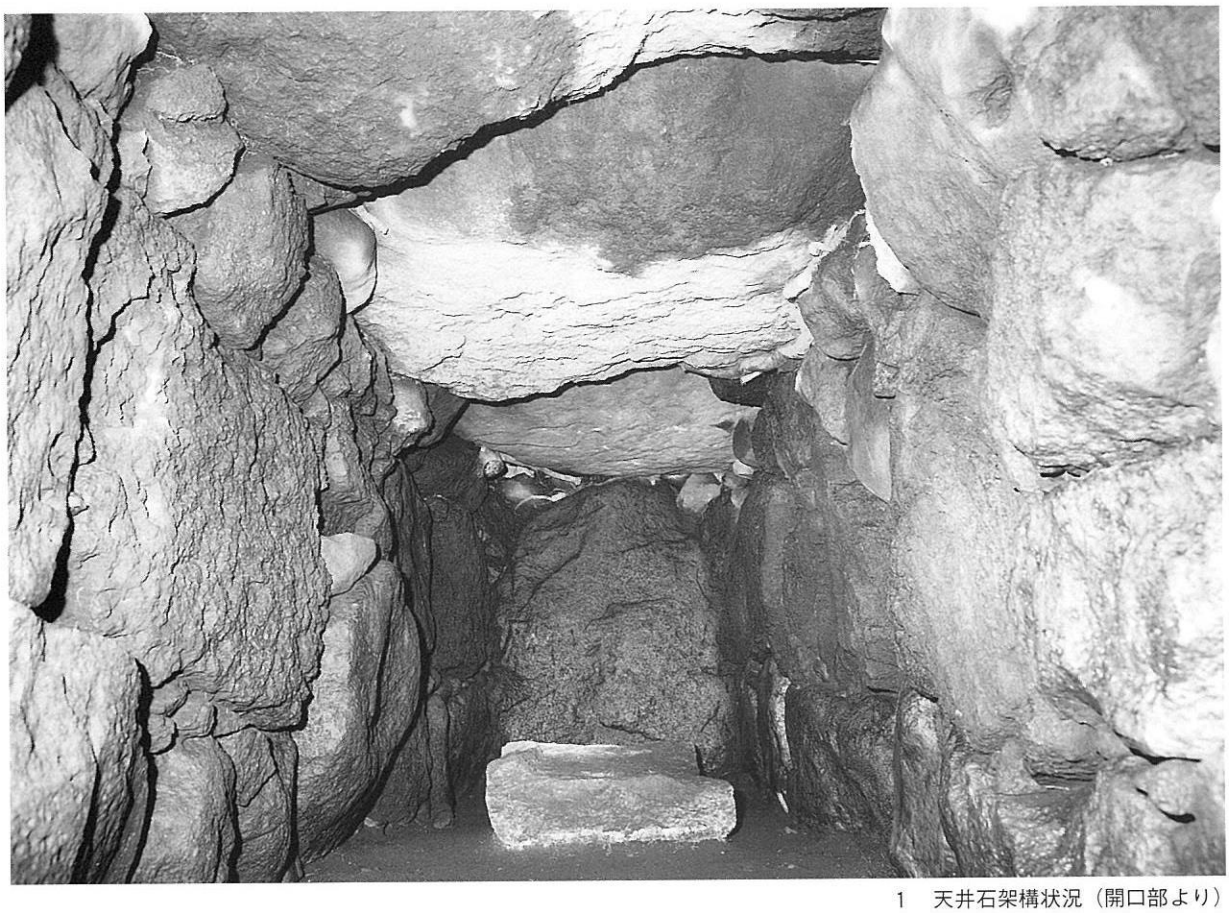
2　右壁　棺台石検出状況（南東より）

3　左壁　枕石・Ｂ人骨検出状況（奥壁より）

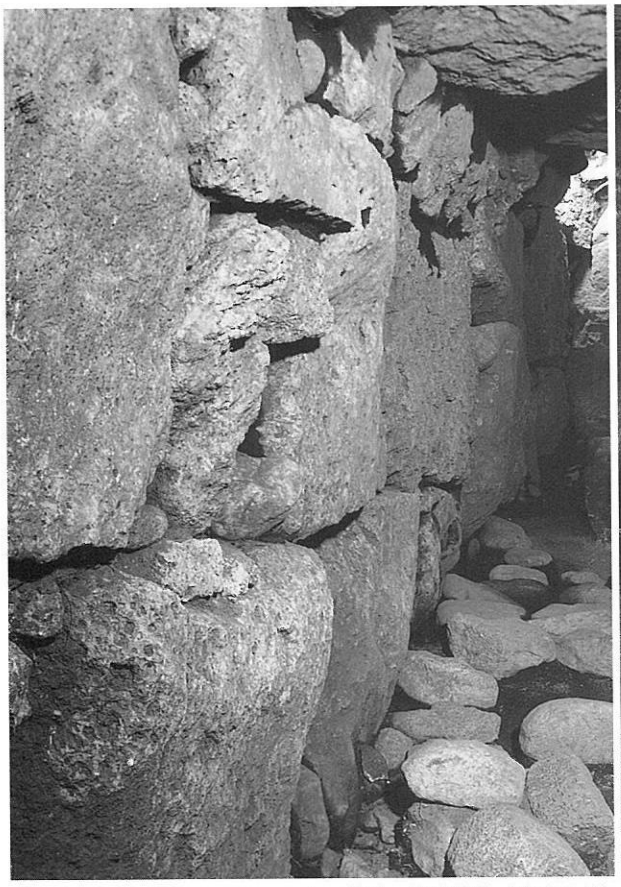
4　右壁　人骨・大刀出土状況（北東より）

図版16

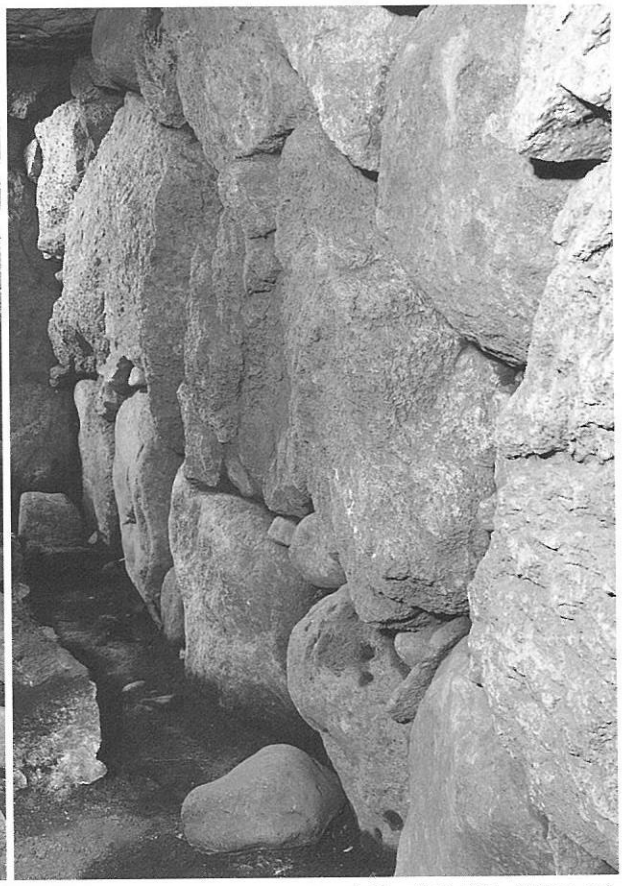
棺身検出状況（開口部より）



1　天井石架構状況（開口部より）

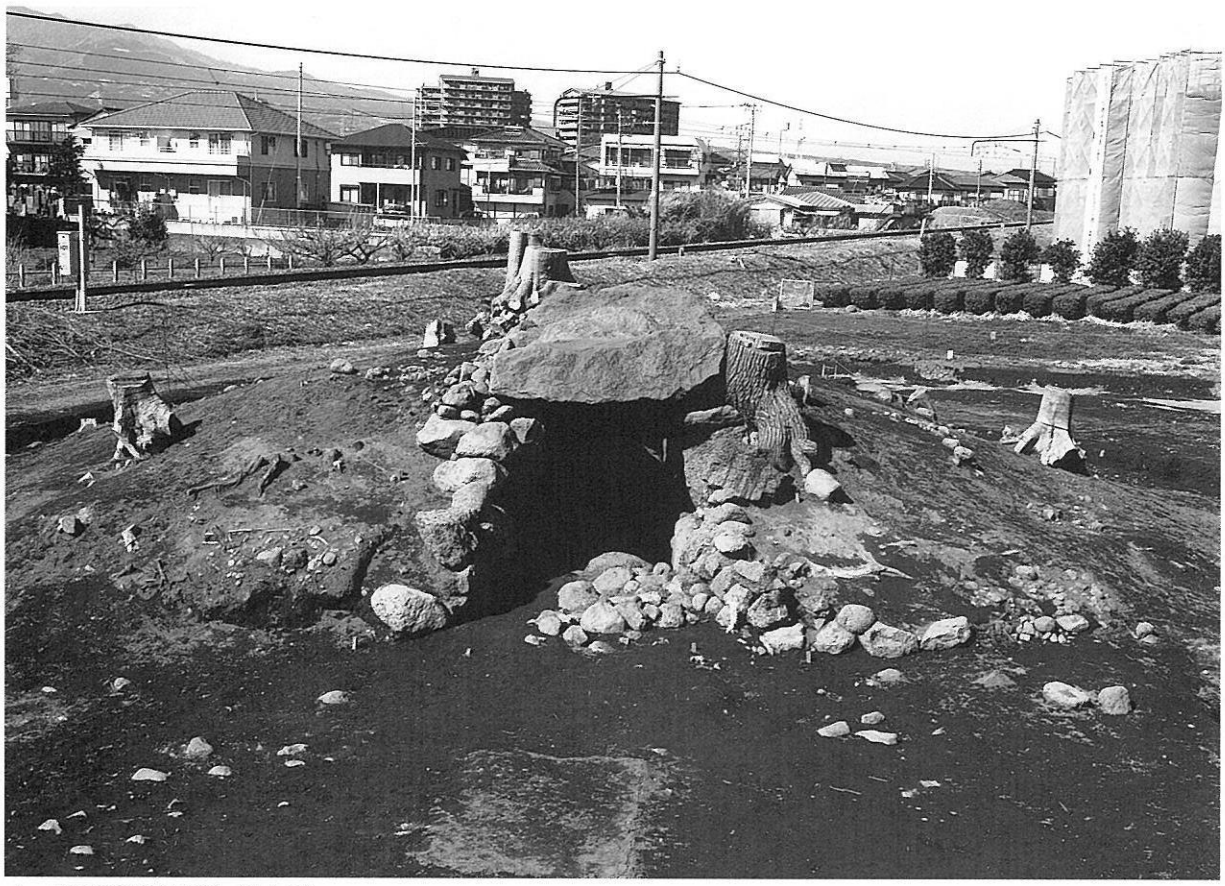


2　右壁　検出状況（南東より）



3　左壁　検出状況（南西より）

図版18



1　墳丘正面検出状況（南より）

2　天井石除去後　墳丘検出状況（南より）

天井石除去後　石室検出状況（南より）

図版20

1　天井石除去後　右壁検出状況（南東より）

2　天井石除去後　左壁検出状況（南西より）

1　天井石除去後　間詰石検出状況
（北東より）

2　天井石除去後　間詰石検出状況
（北東より）

3　天井石除去後　奥壁間詰石検出状況
（南東より）

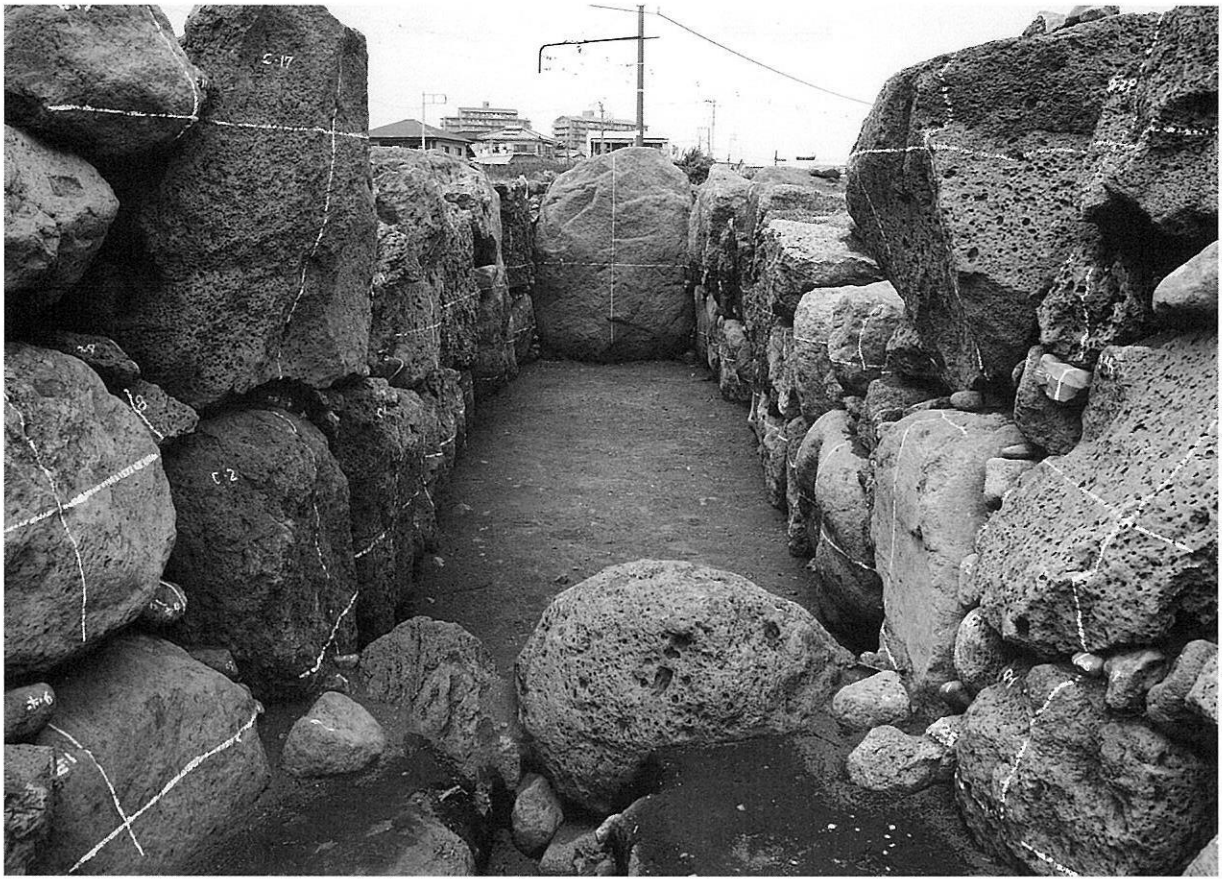
図版22

1　石室構築２段目　墳丘検出状況（南より）

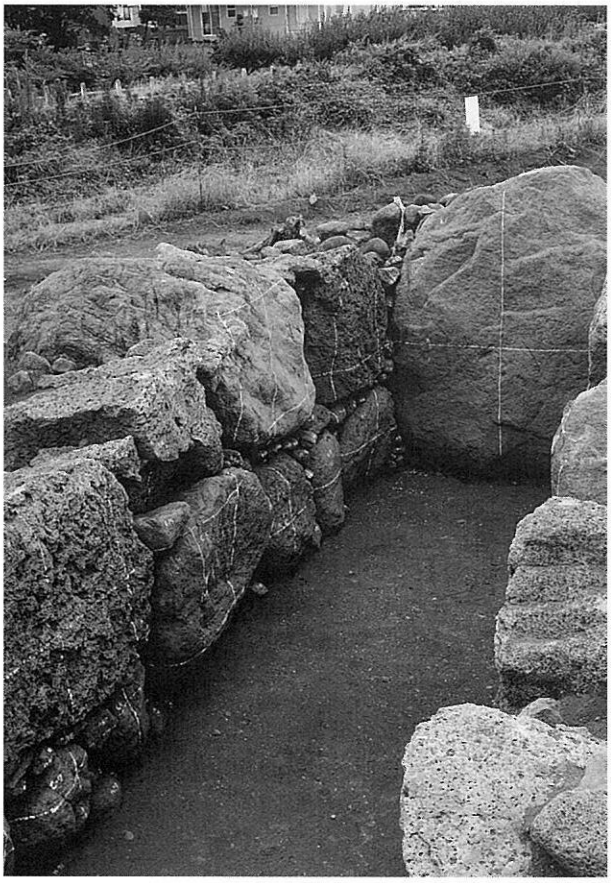
2　石室構築２段目　墳丘検出状況（南西より）

石室構築２段目　検出状況全景（南より）

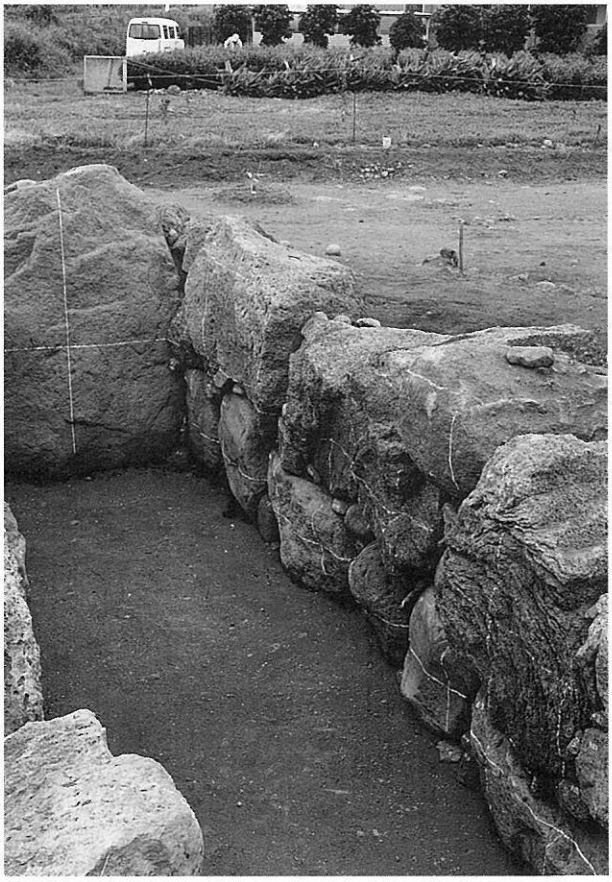
図版24



1　石室構築２段目　検出状況（南より）



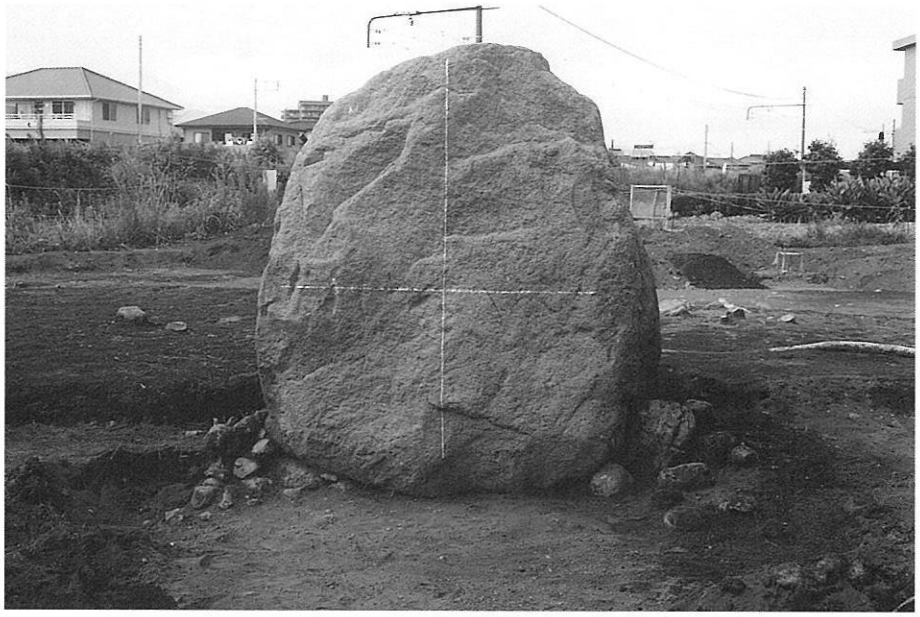
2　石室構築２段目　右壁検出状況（南東より）



3　石室構築２段目　左壁検出状況（南西より）

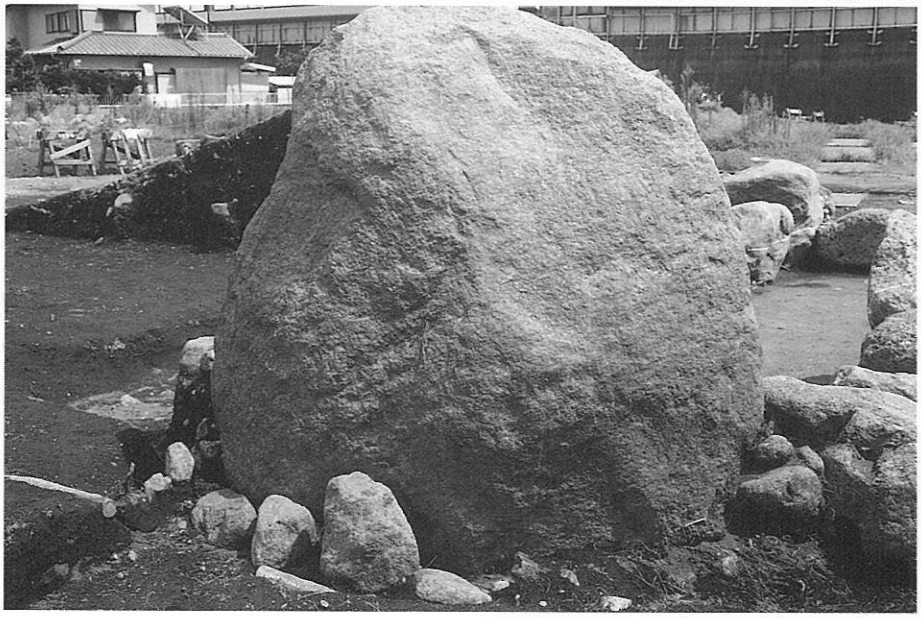
基底石検出状況（南より）

図版26

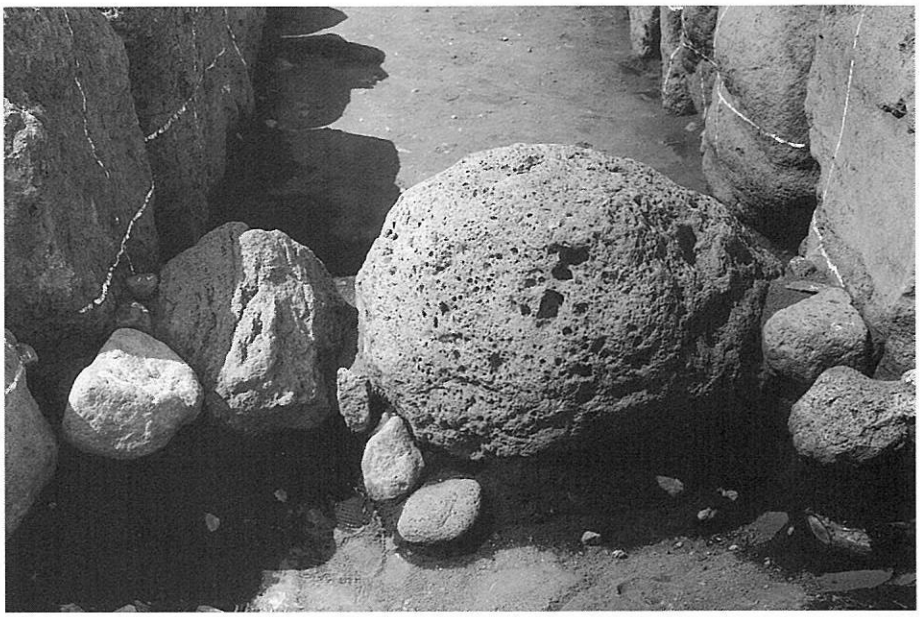


1　奥壁　正面検出状況（開口部より）

2　奥壁　側面検出状況（左壁側より）



3　奥壁　裏側検出状況（北より）

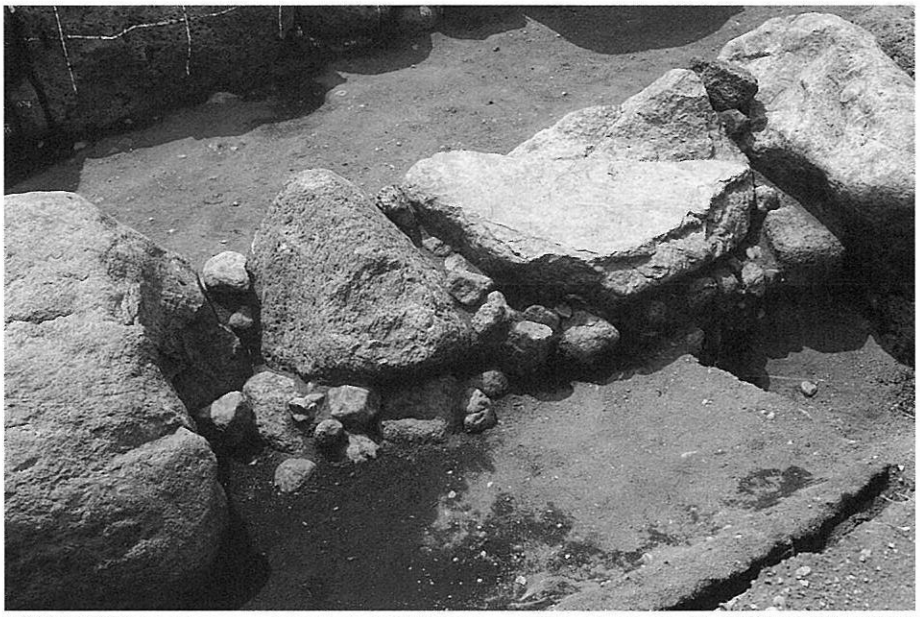


1　段構造礫検出状況（南より）

2　左前庭側壁　基底石検出状況
（北東より）

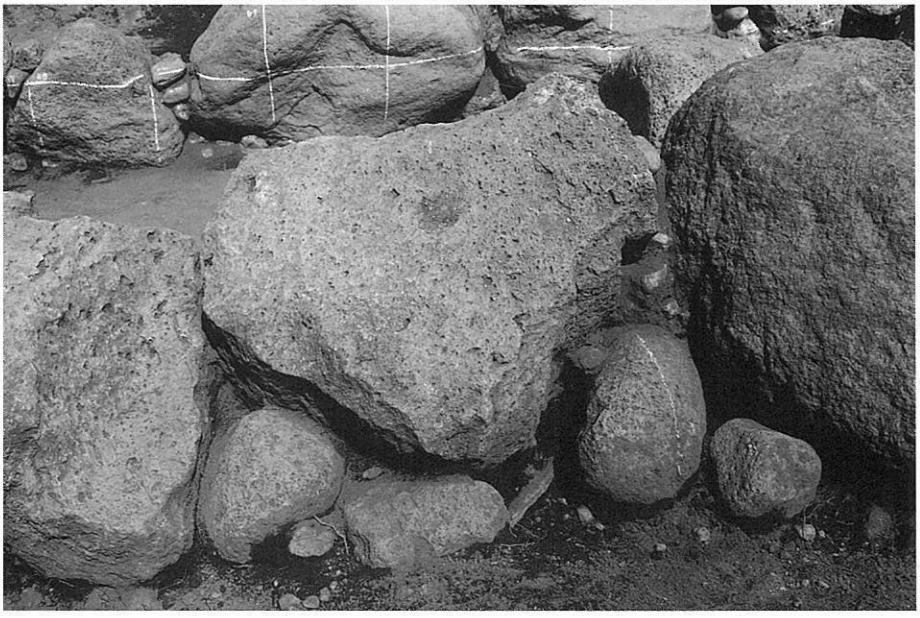
3　右前庭側壁　基底石検出状況
（北西より）

図版28



1　左壁基底石と裏込め検出状況
（南東より）

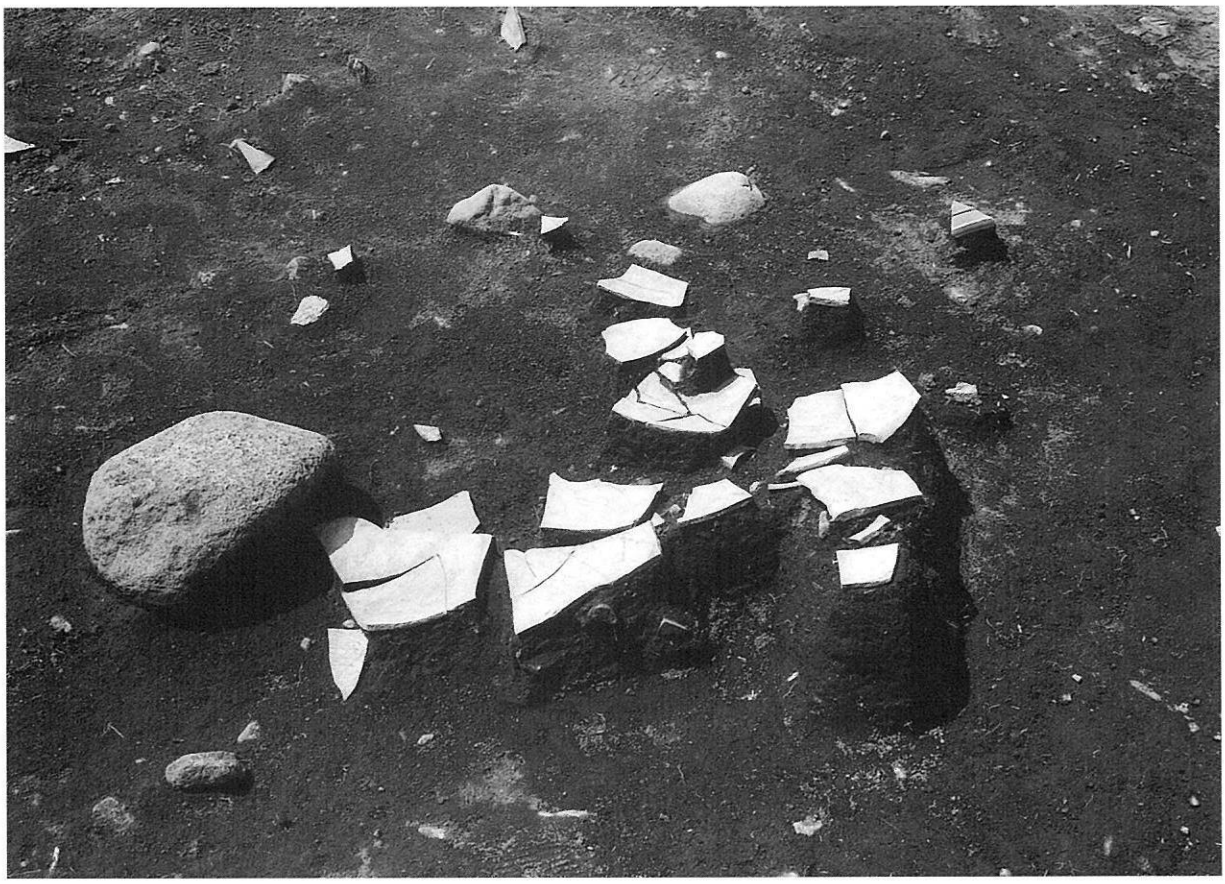
2　左壁基底石と裏込め検出状況
（南東より）



3　右壁基底石と裏込め検出状況
（西より）

墓坑検出状況（南より）

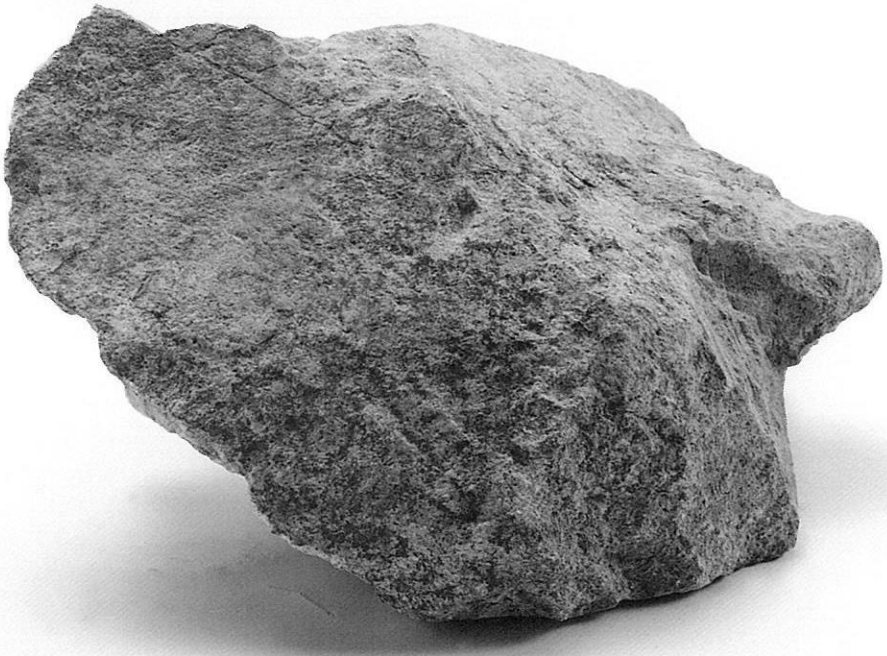
図版30



1　左前庭部前　須恵器甕出土状況（南より）

2　土器廃棄土坑　遺物出土状況（南より）

1　家形石棺　棺蓋（1）



2　家形石棺　棺蓋（2）

図版32

1　復元された原分古墳全景（南東より）

2　復元された横穴式石室（開口部より）

石室内主要土器

図版34

石室内出土土器（1）

8

9

11

10

12

18

16

15

石室内出土土器（2）

図版36

19

20

21

23

24

25

石室内出土土器（3）

26

27

28

29

30

31

石室内出土土器（4）

33

32

34

石室内出土土器（5）

35

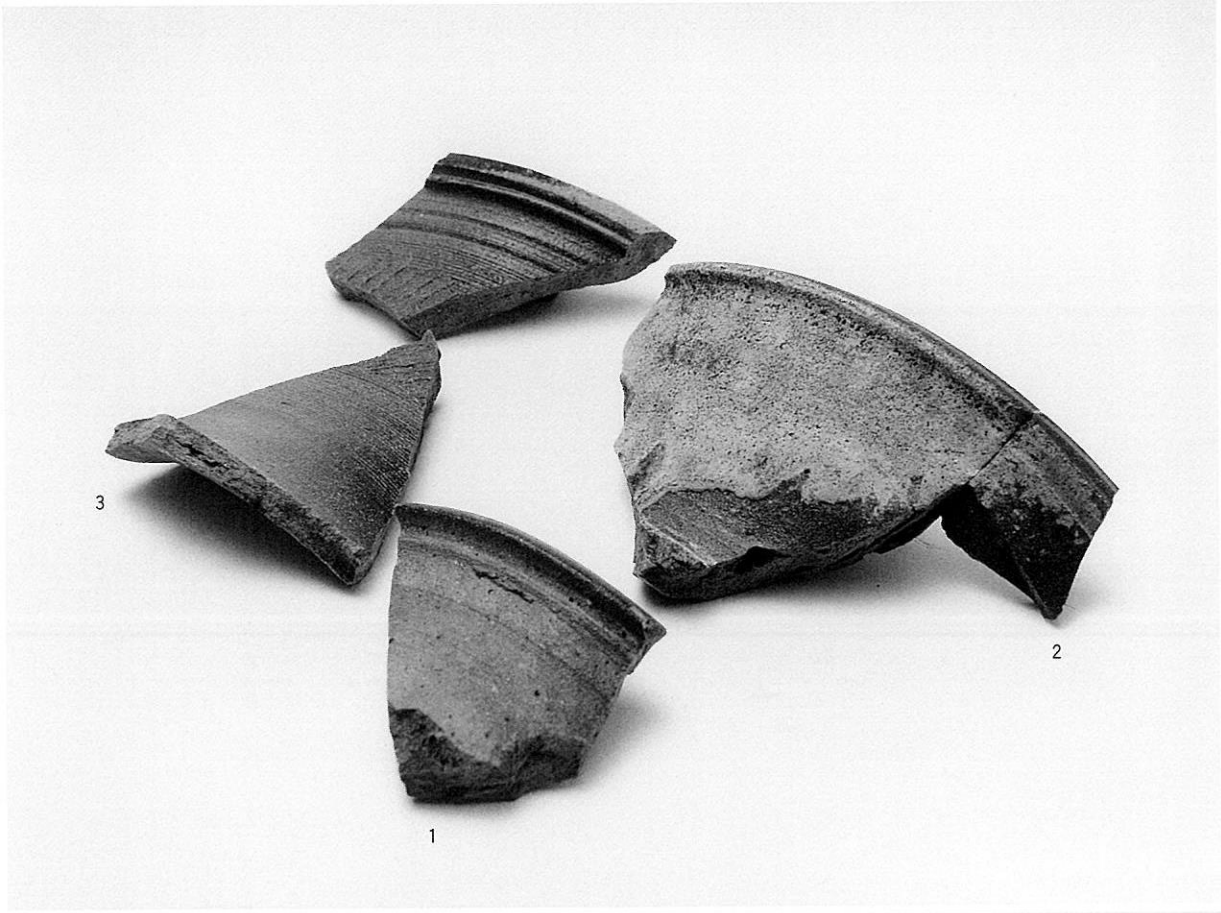
36

石室内出土土器（6）

37

39

石室内出土土器（7）



周溝内出土土器（1）

5

6

周溝内出土土器（2）

7

1　開口部列石出土土器

8

2　周溝内出土土器（3）

図版44

土器廃棄土坑主要土器

土器廃棄土坑出土土器

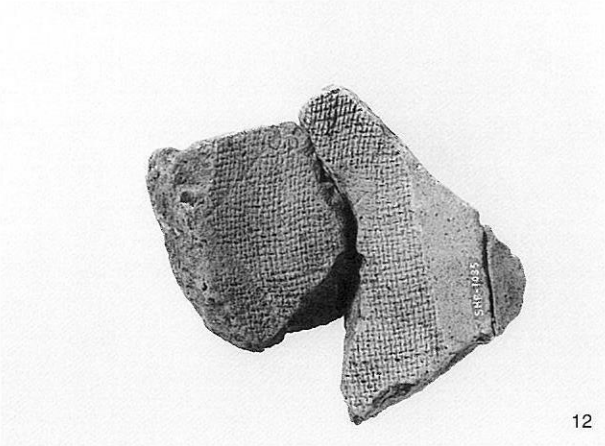
図版46

1　周溝外出土土器

22

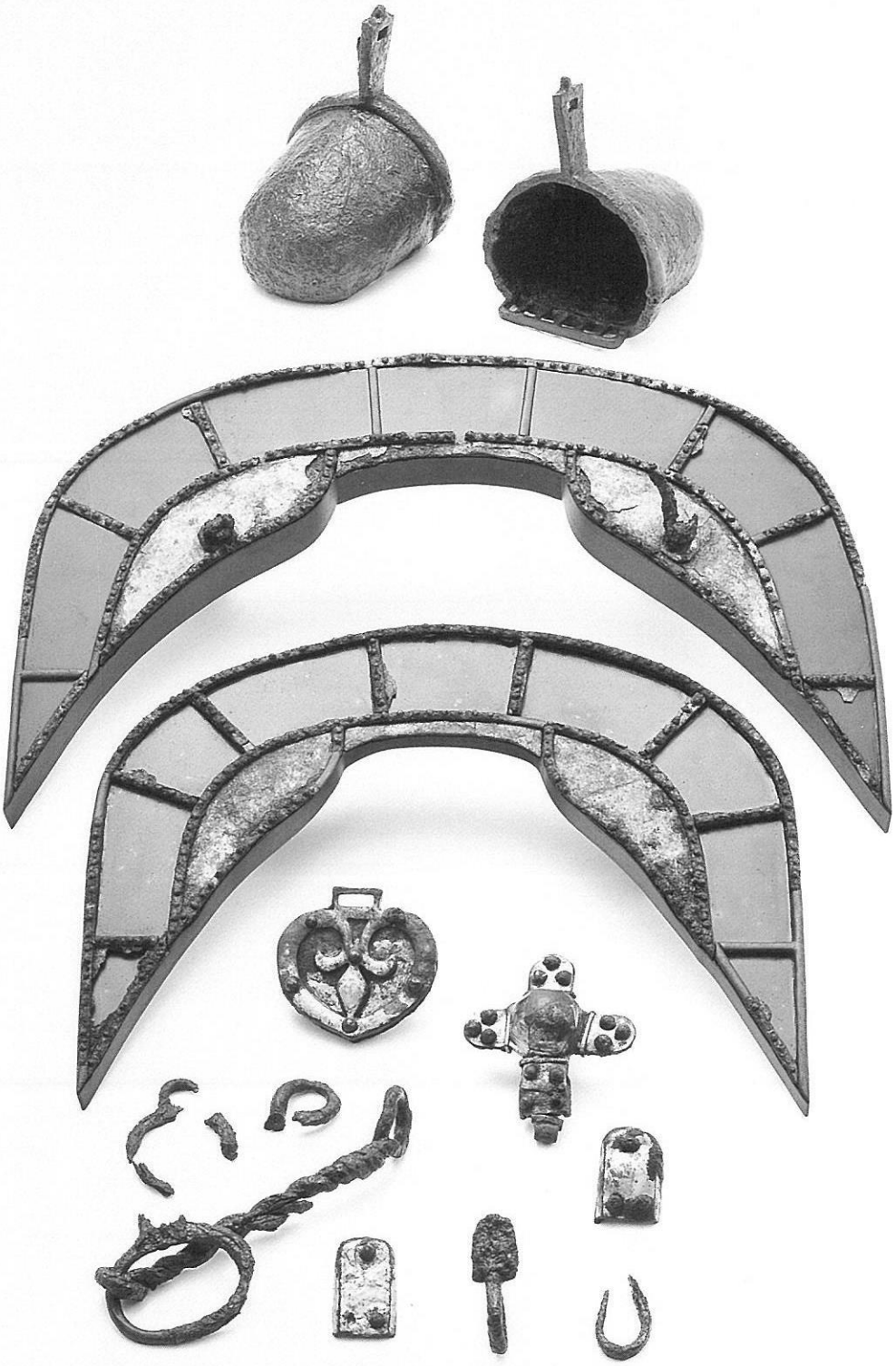
14

13



12

2　古代以降の出土遺物

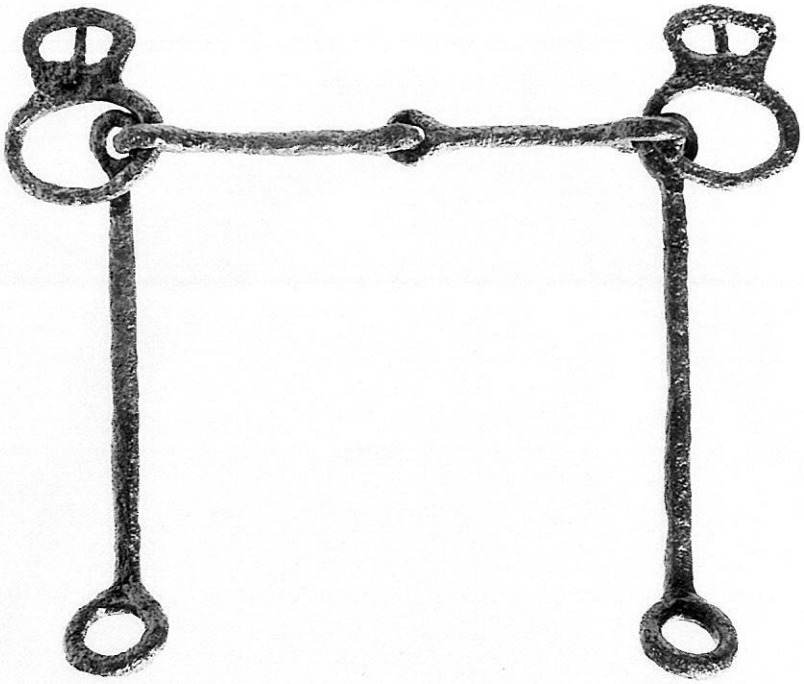


1号馬具

図版48

2号馬具

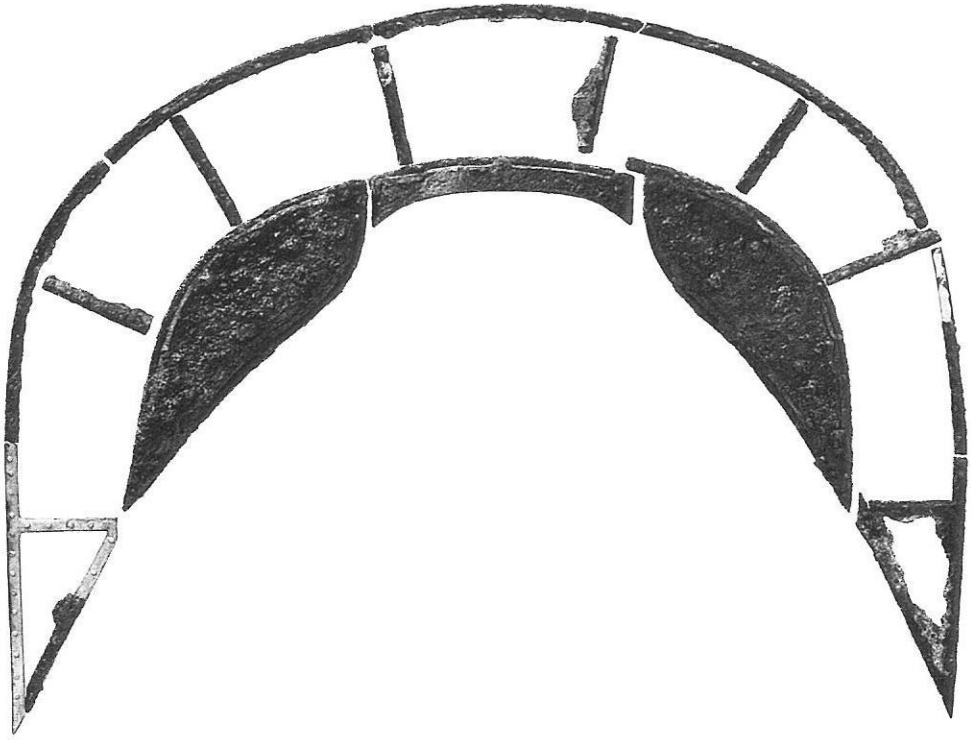
1　1号轡



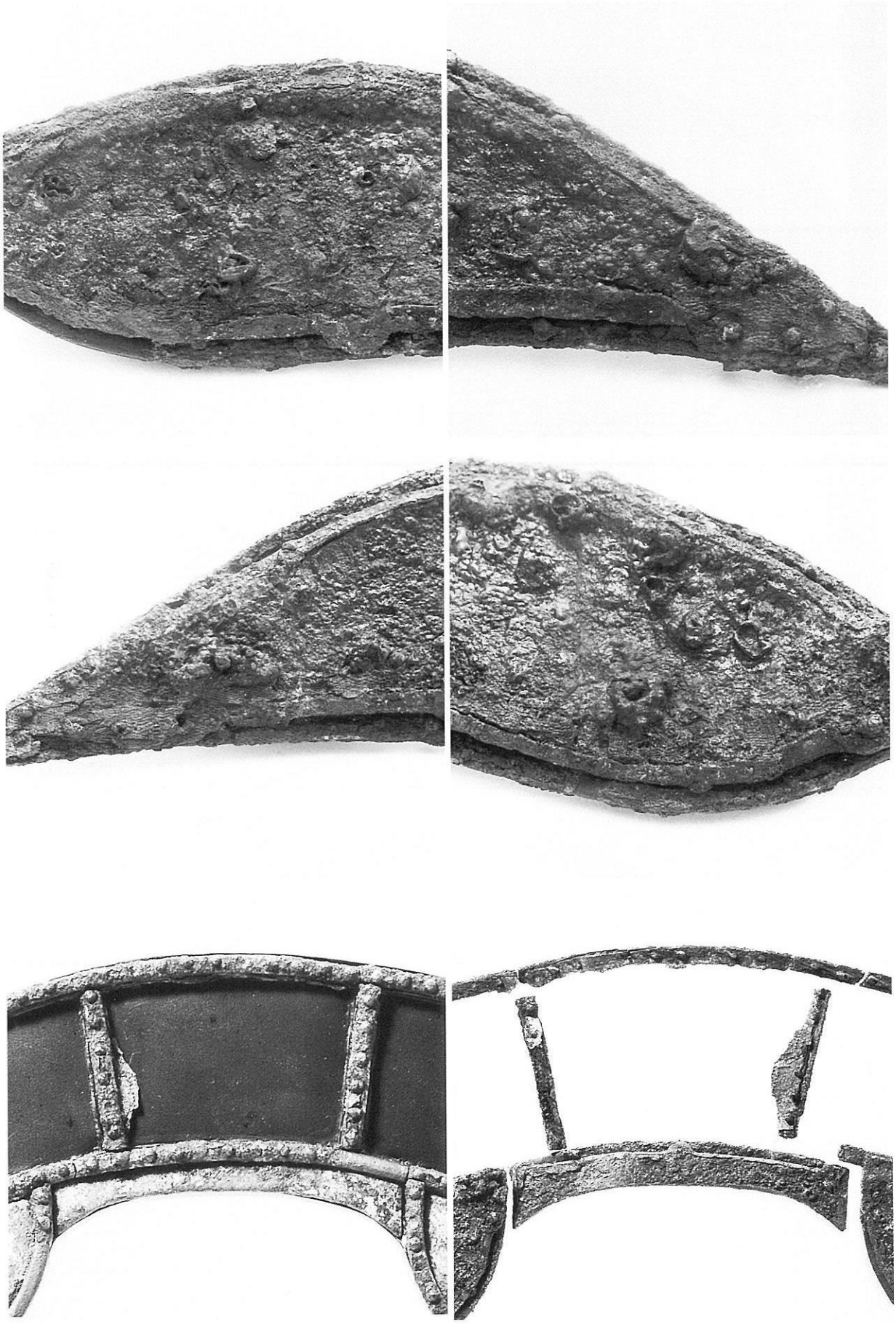
7

2　2号轡

1　1号鞍金具前輪　外面

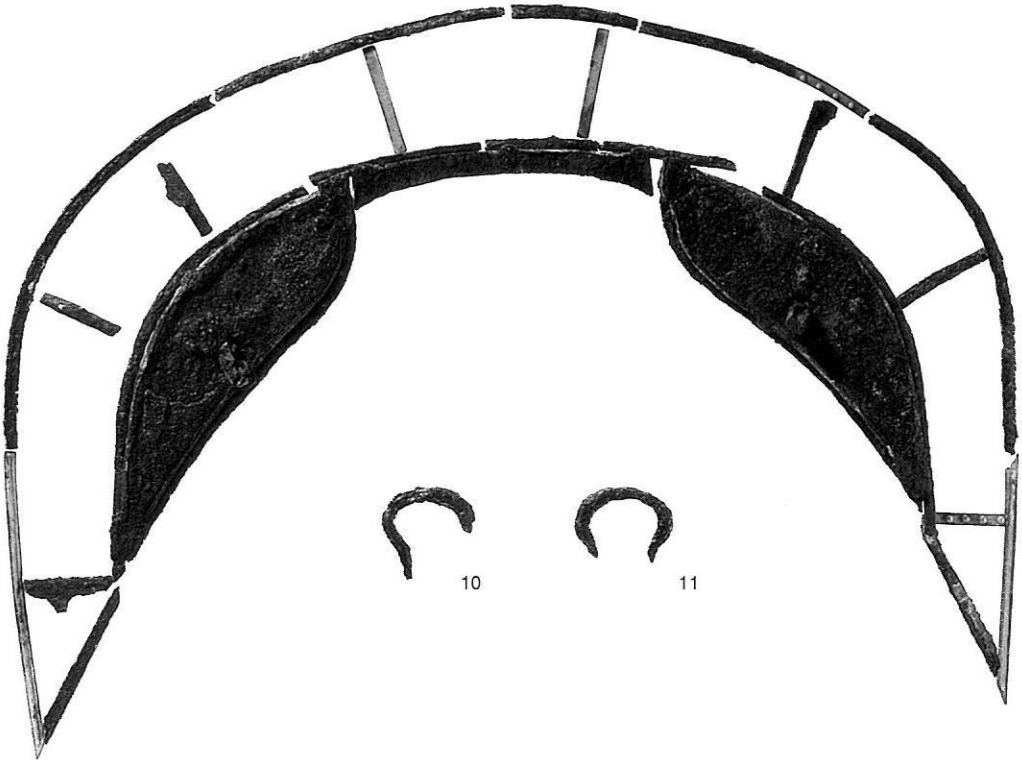


2　1号鞍金具前輪　内面

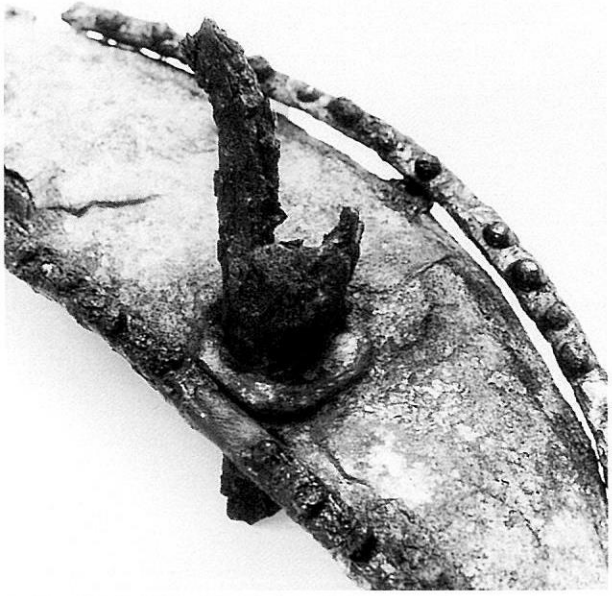


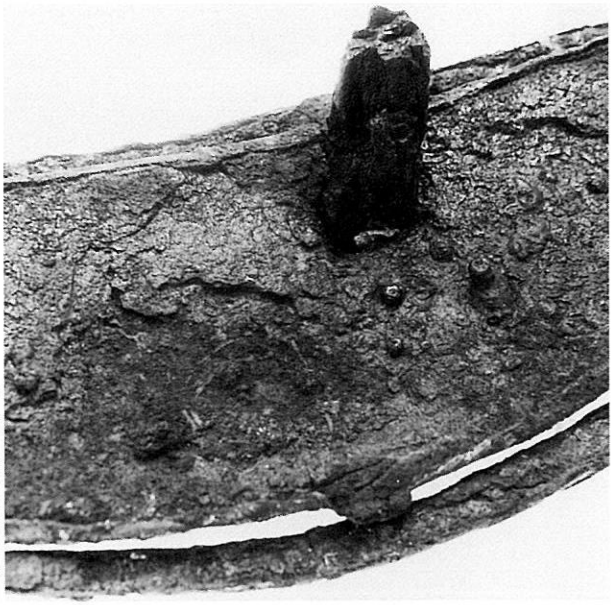
1号鞍金具前輪　詳細

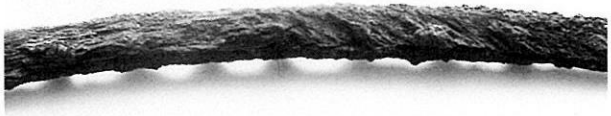
1　1号鞍金具後輪　外面



2　1号鞍金具後輪　内面





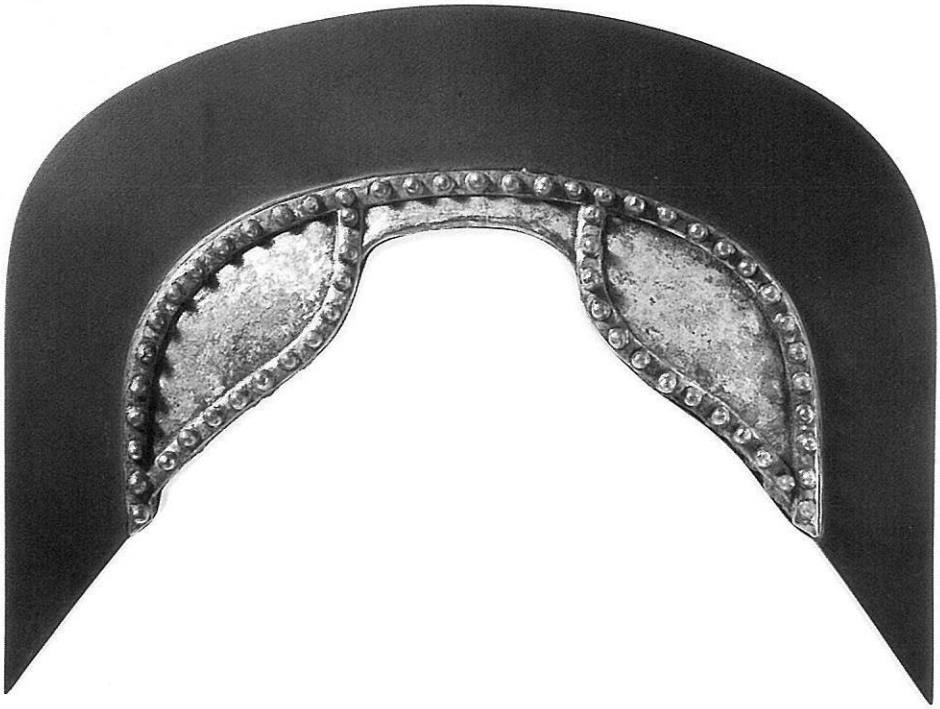


12

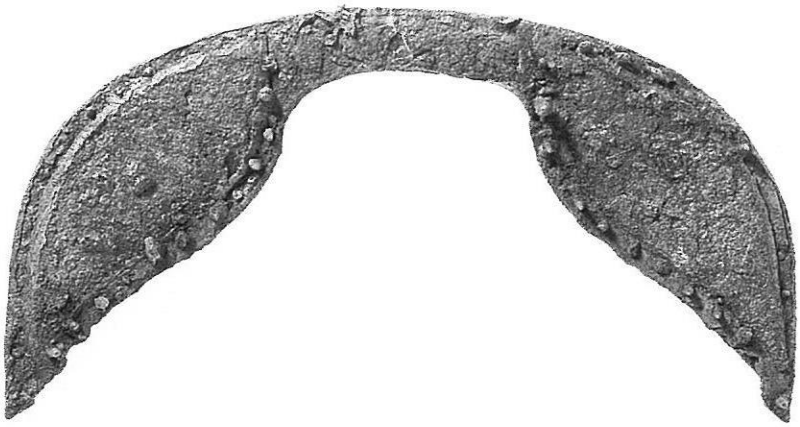
13

14

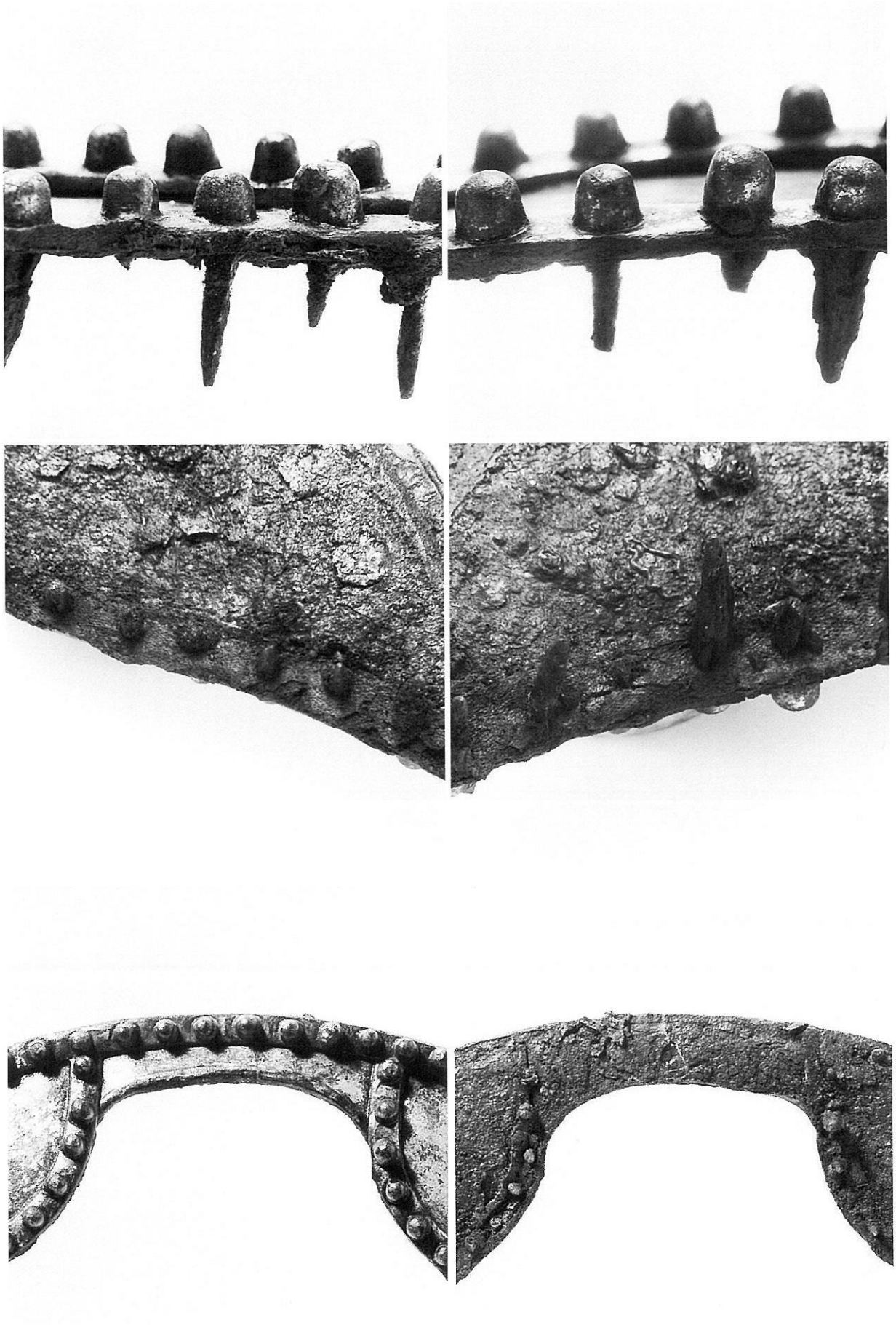
1号鞍金具後輪　詳細・海金具（12～14）



1　2号鞍金具前輪　外面

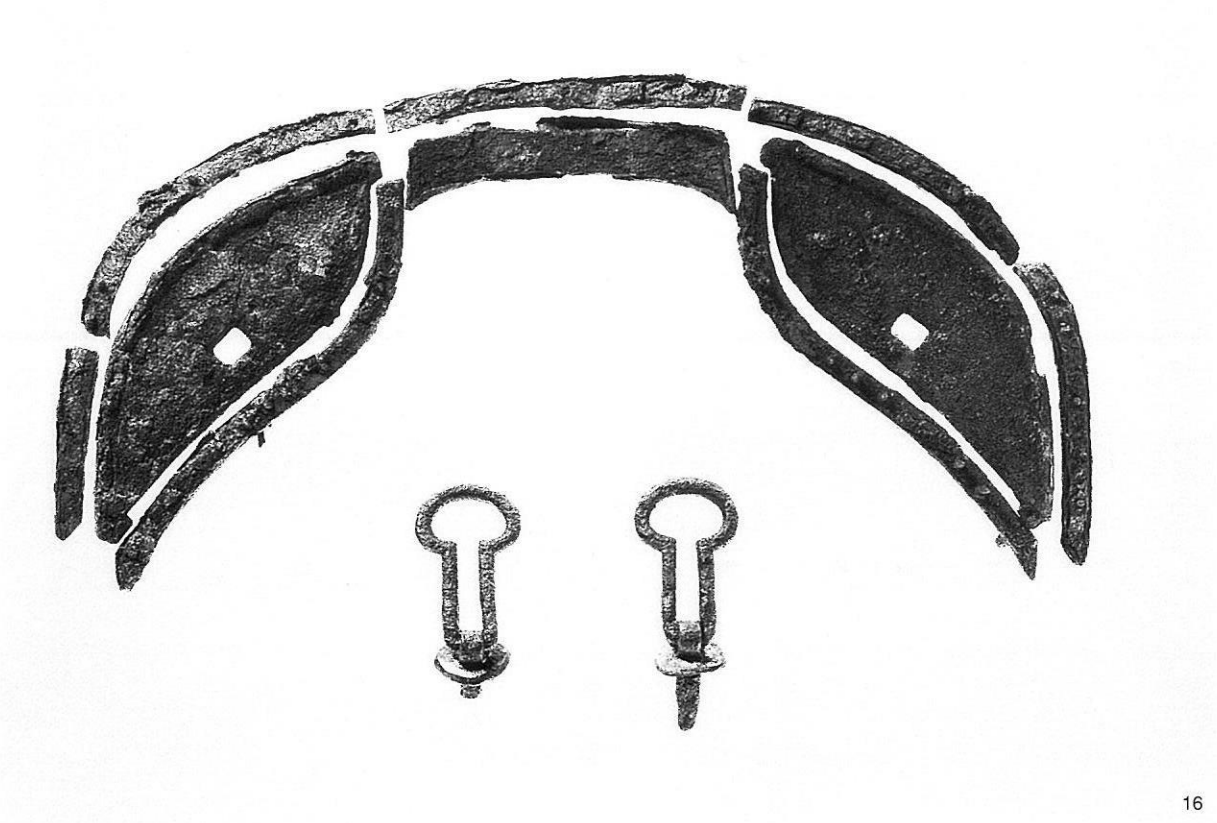


2　2号鞍金具前輪　内面

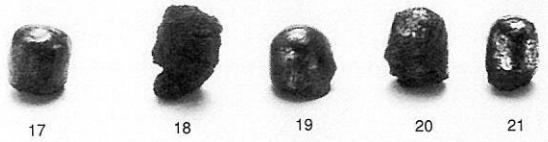


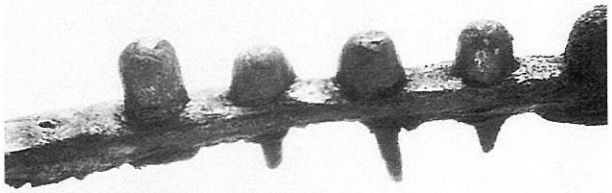
2号鞍金具前輪　詳細

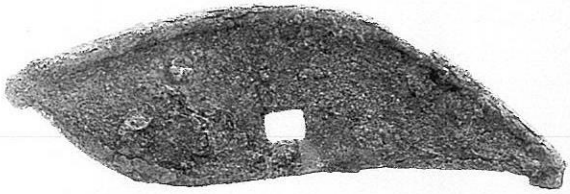
1　2号鞍金具後輪　外面



2　2号鞍金具後輪　内面



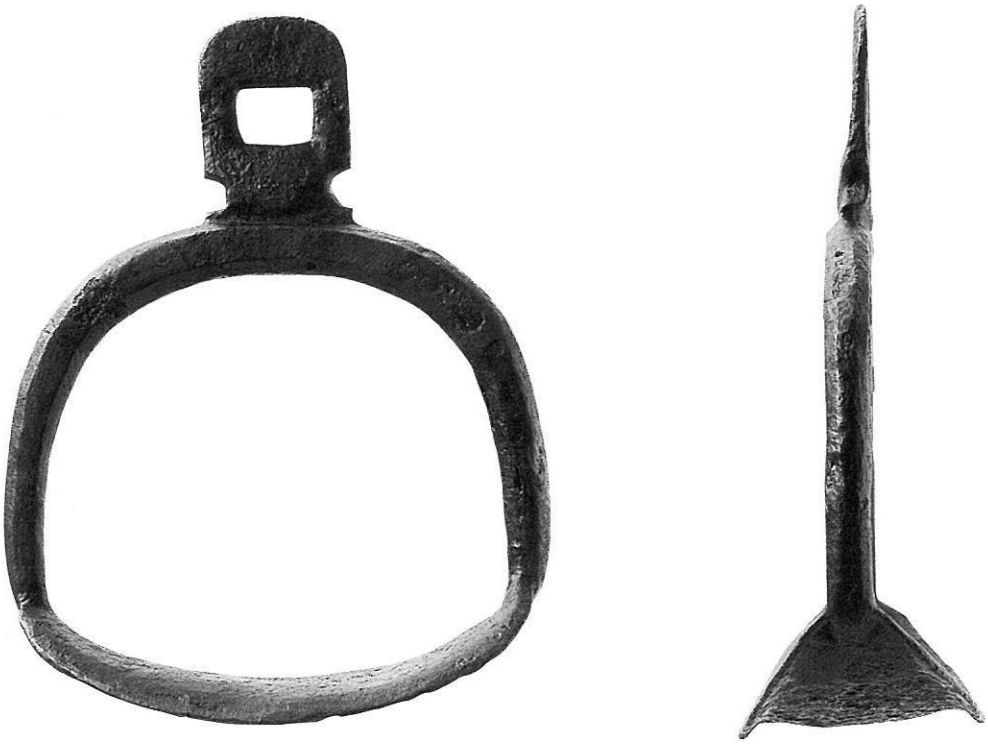




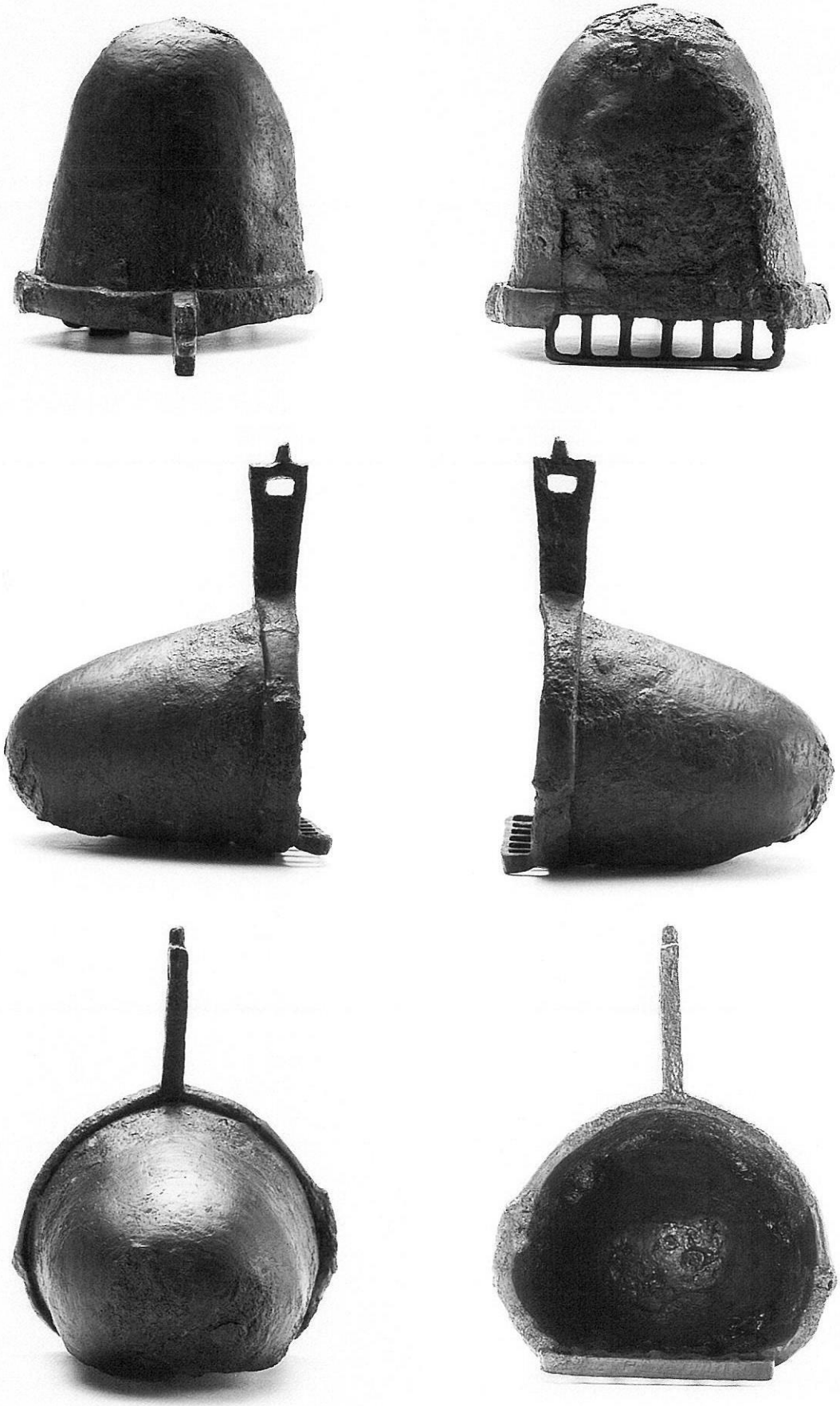
2号鞍金具後輪　詳細

図版58

1　1号鐙・2号鐙



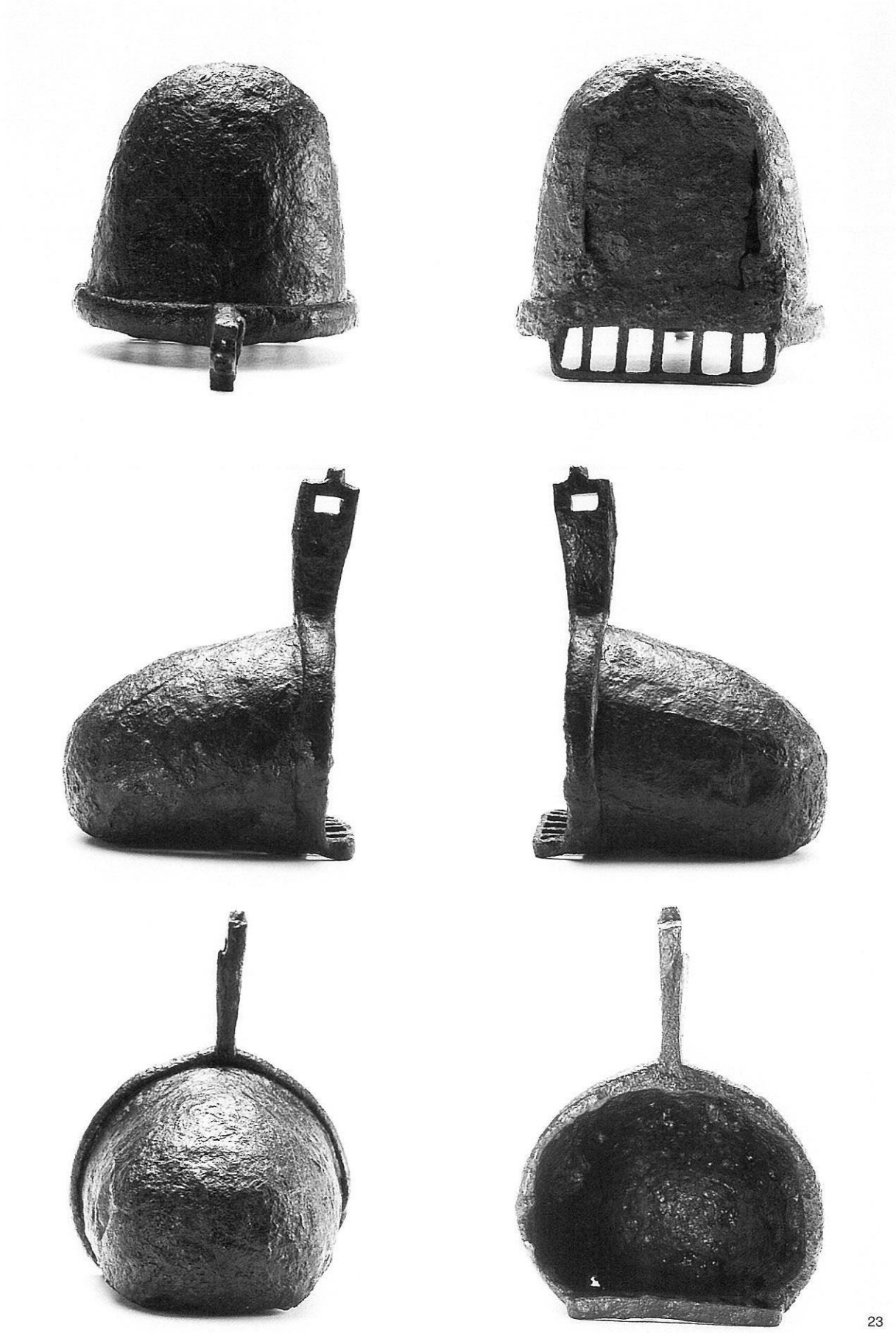
2　2号鐙



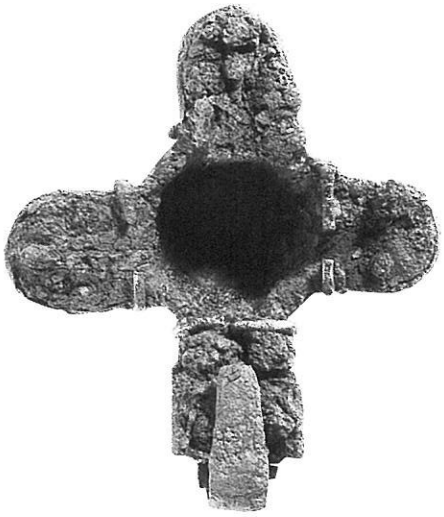
22

1号鐙（左）

図版60



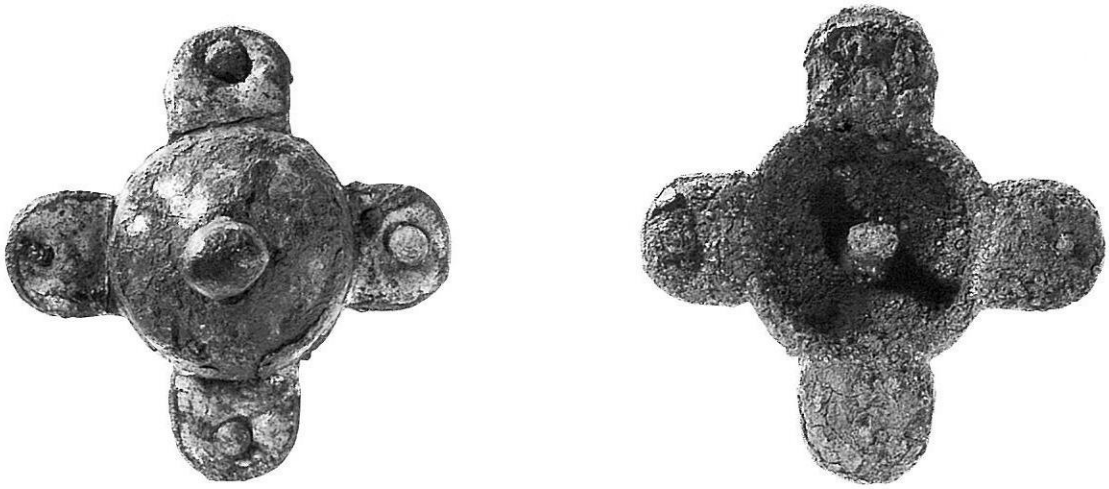
1号鐙（右）



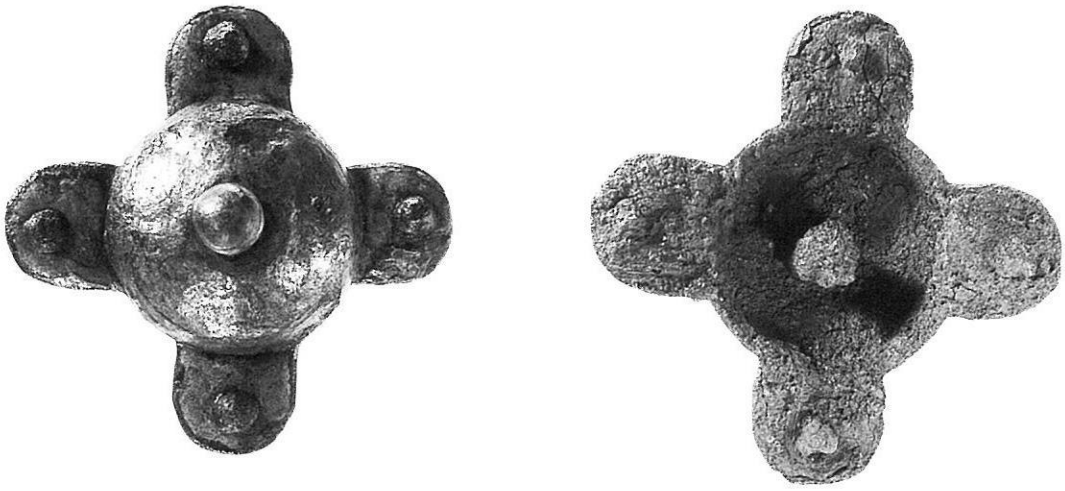
25

30

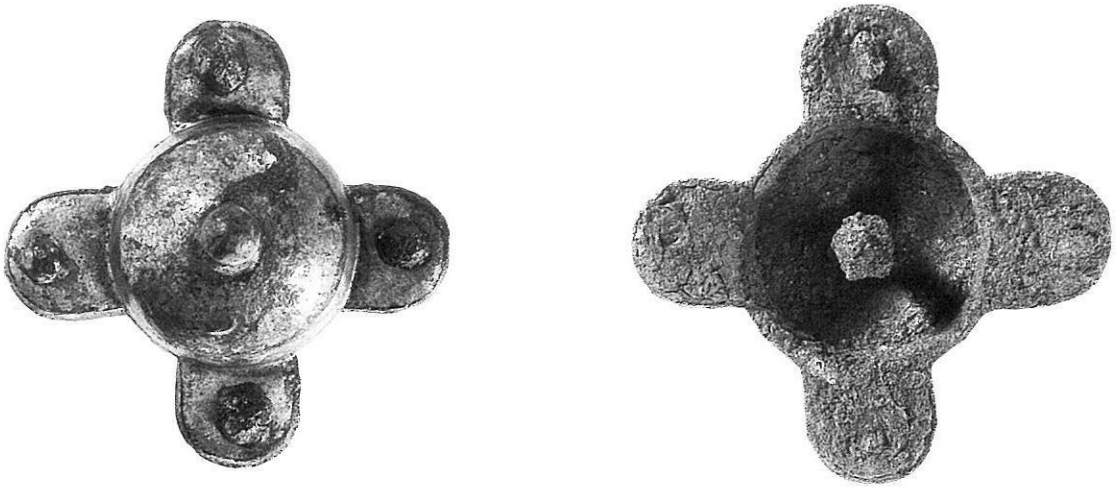
杏葉・辻金具１類



26

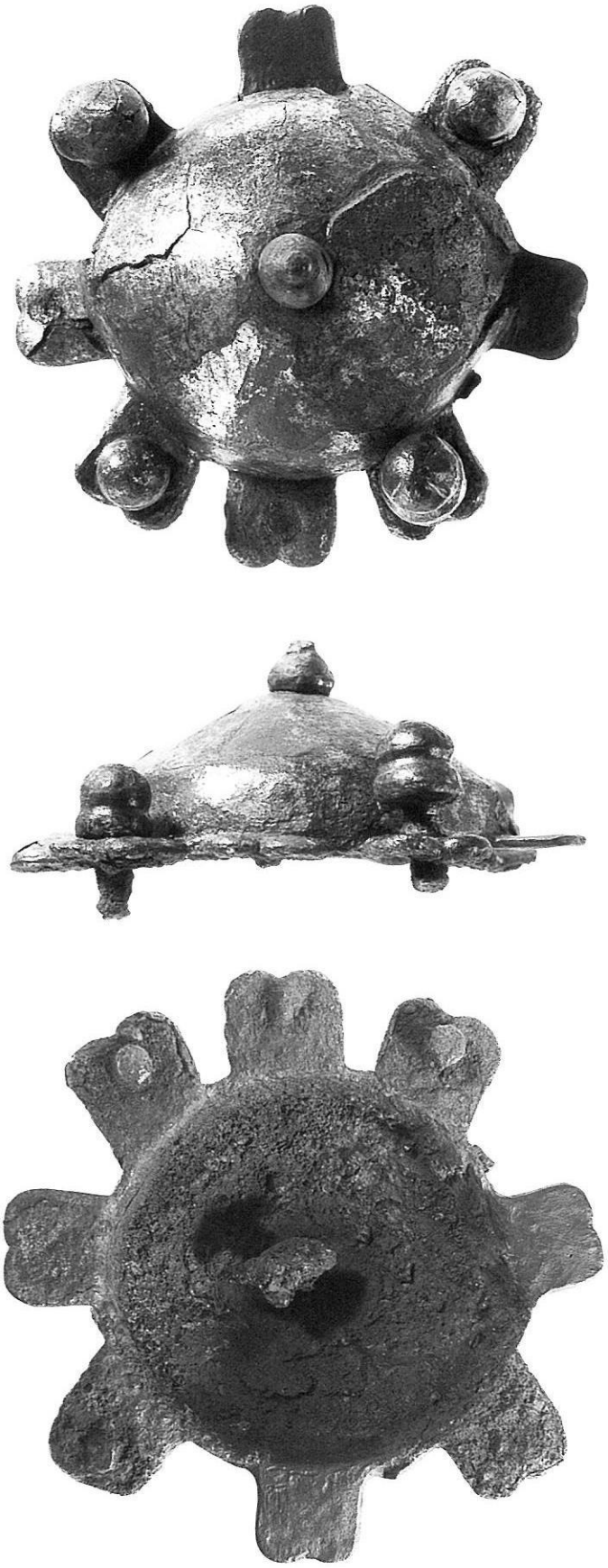


27



28

辻金具２類



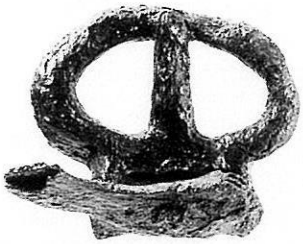
29

雲　珠

図版64

31

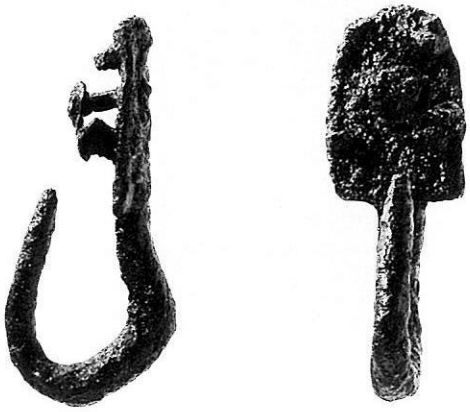
32



33

34

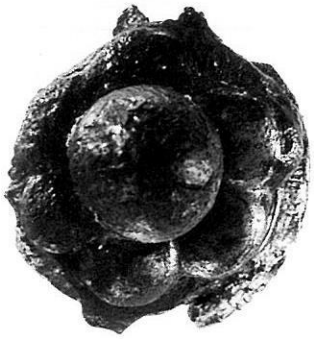
鉸具付飾金具



35

36

1　鉤金具



38

37

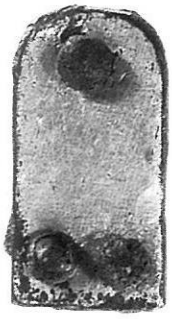
2　貝座飾金具

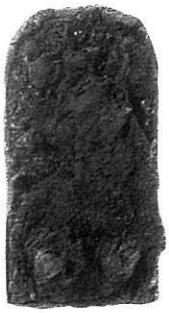
図版66

39

40

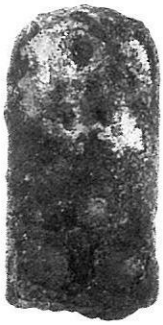
41





42

43

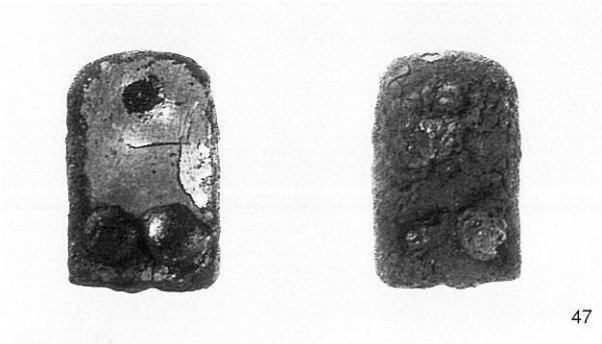


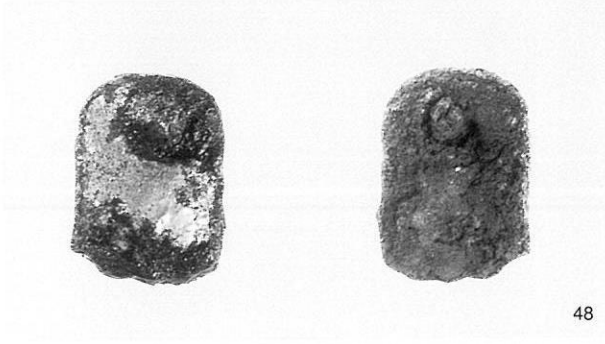
44

帯飾金具（1）

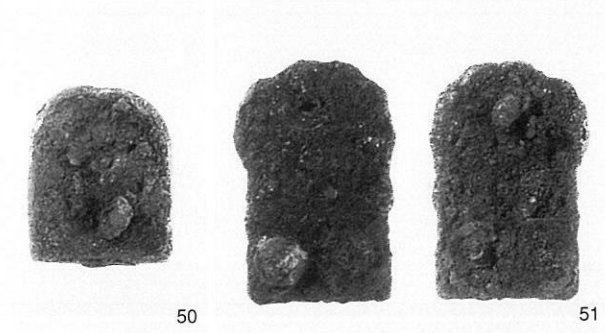
45

46


47

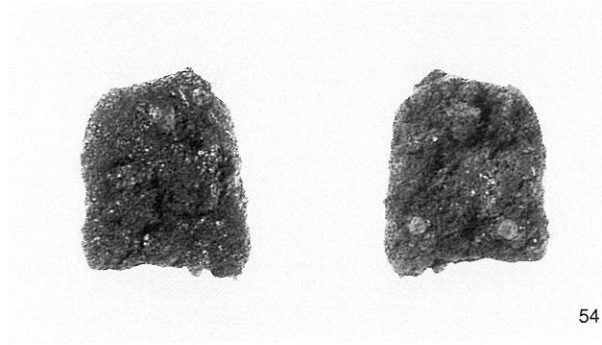

48

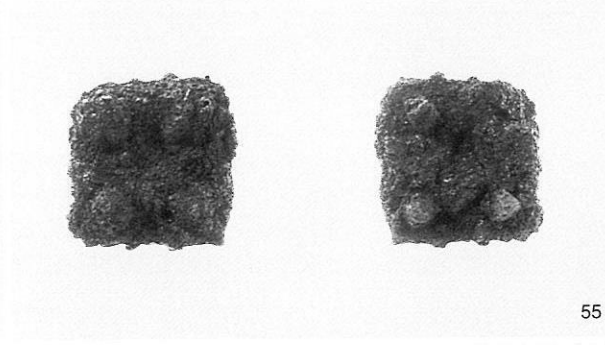
49


50 51

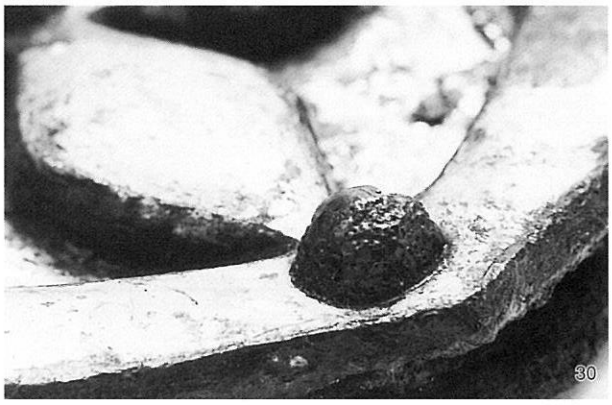
52

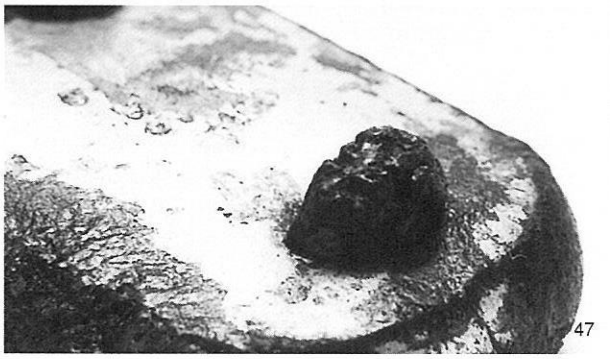
53


54

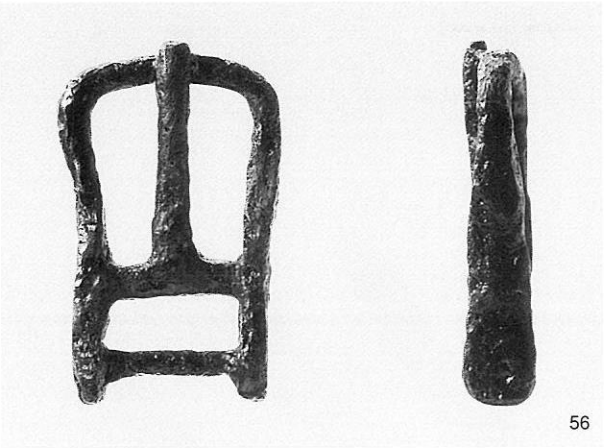

55

帯飾金具（2）





馬具　鋲　詳細


56

57

58

59

60

61

62

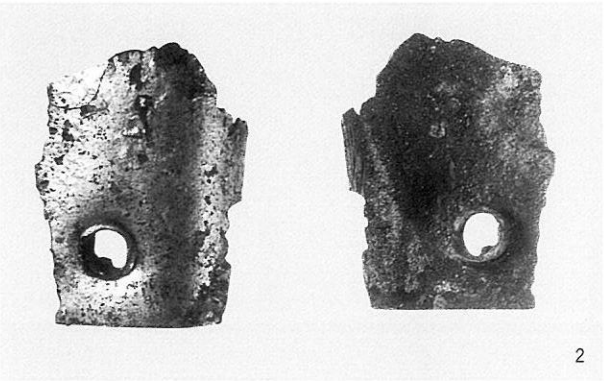
63 64

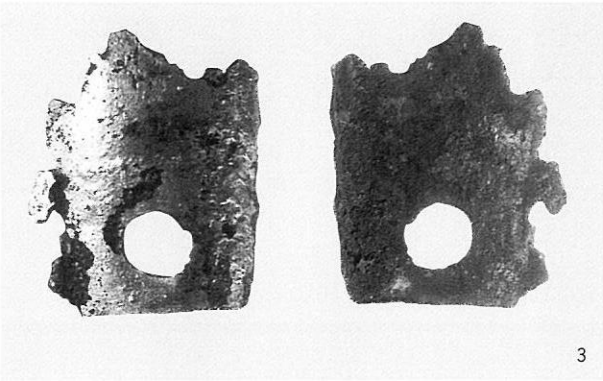
図版70

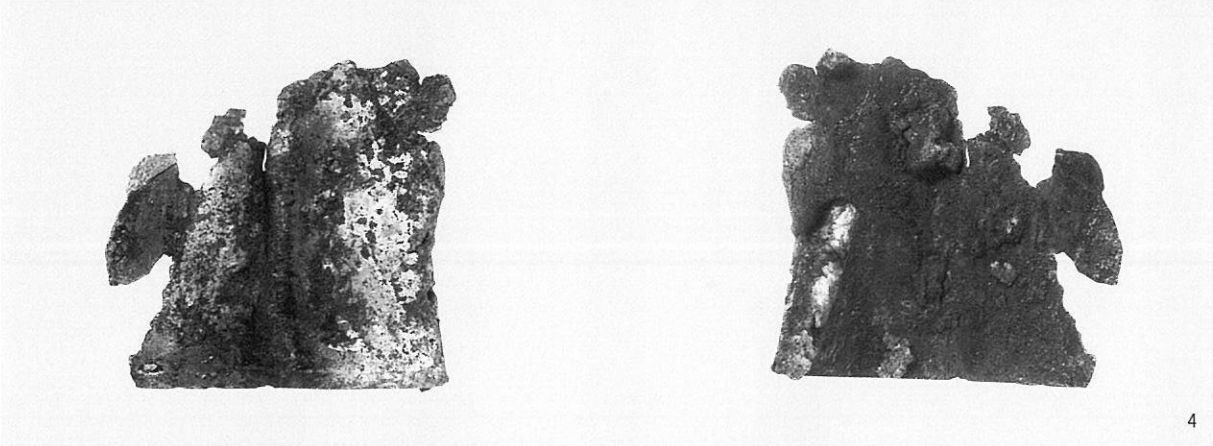
刀剣類

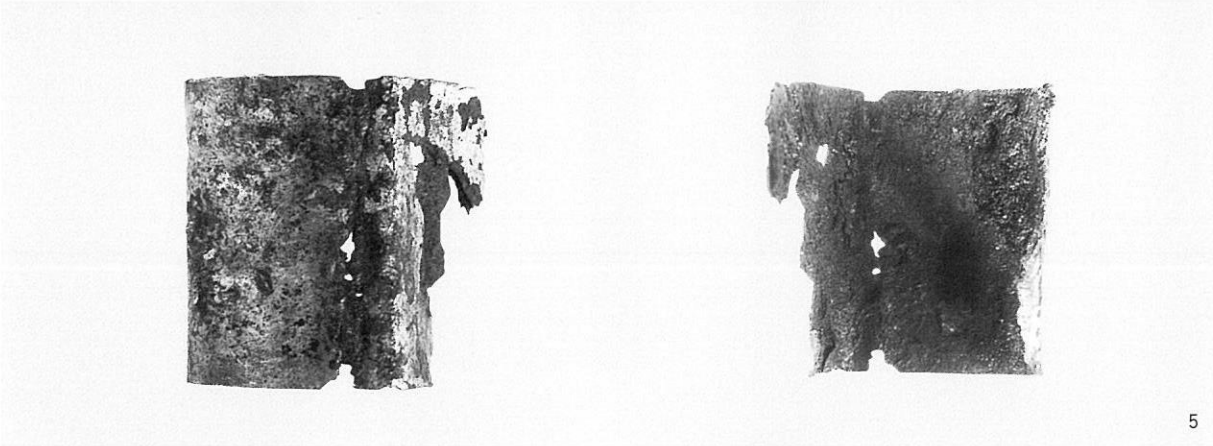
大刀・鉾・刀子

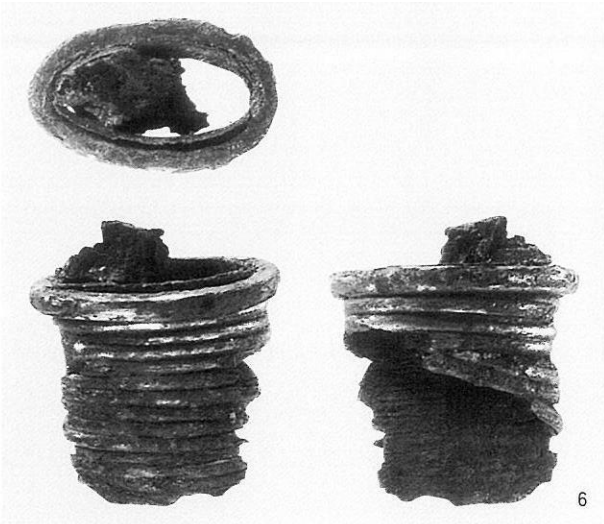
図版72



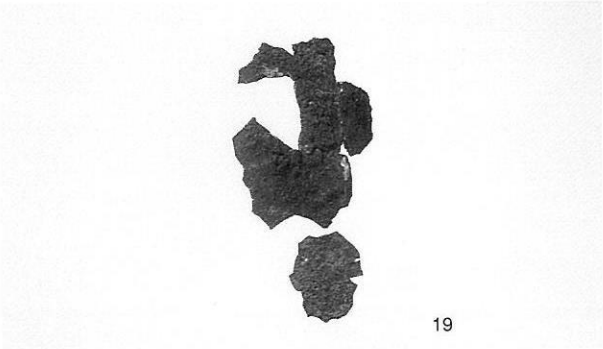


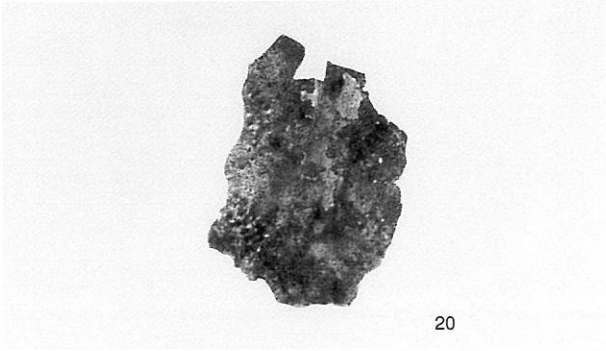


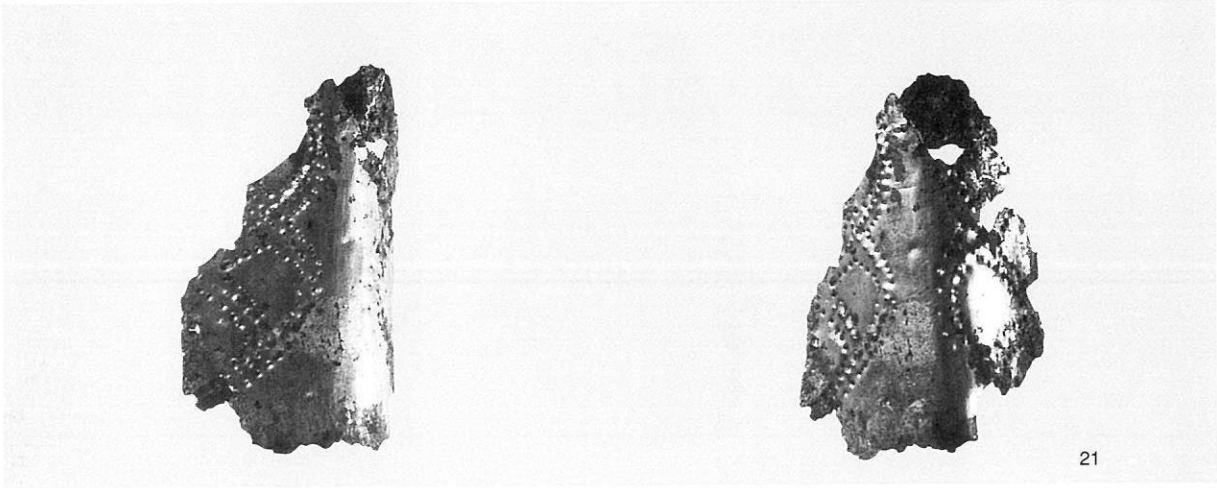




金銅装圭頭大刀装具


19


20

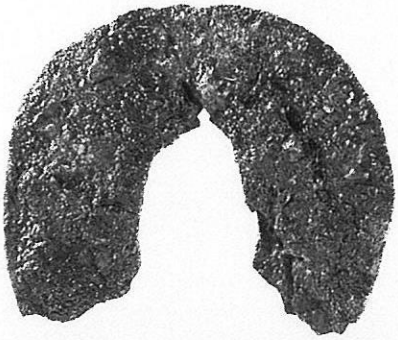

21

1　推定大刀装具

24

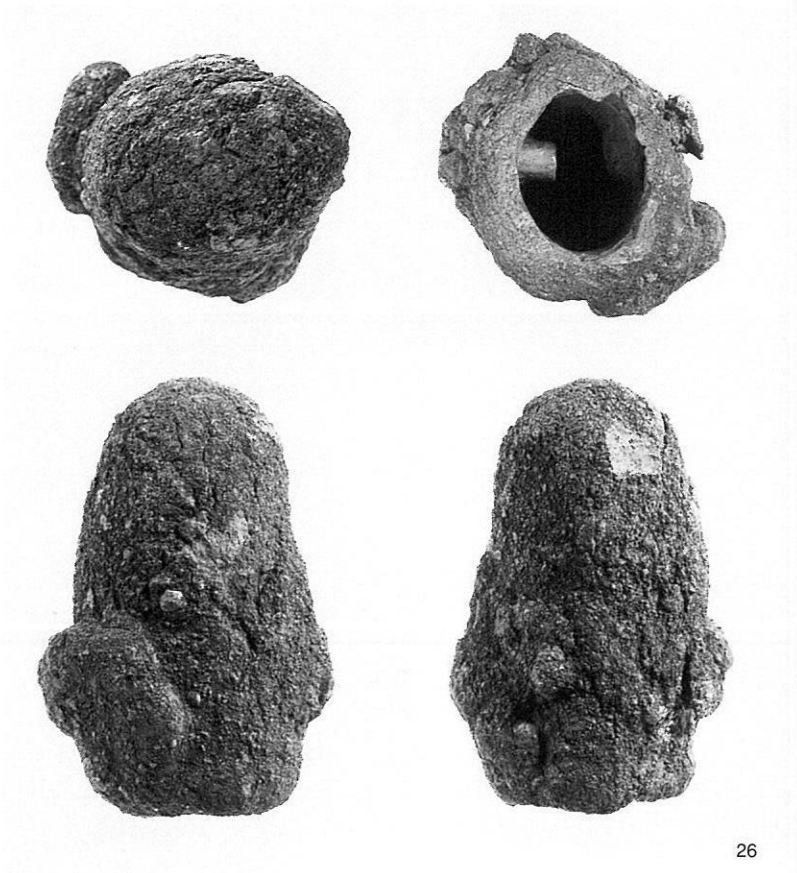
25

22

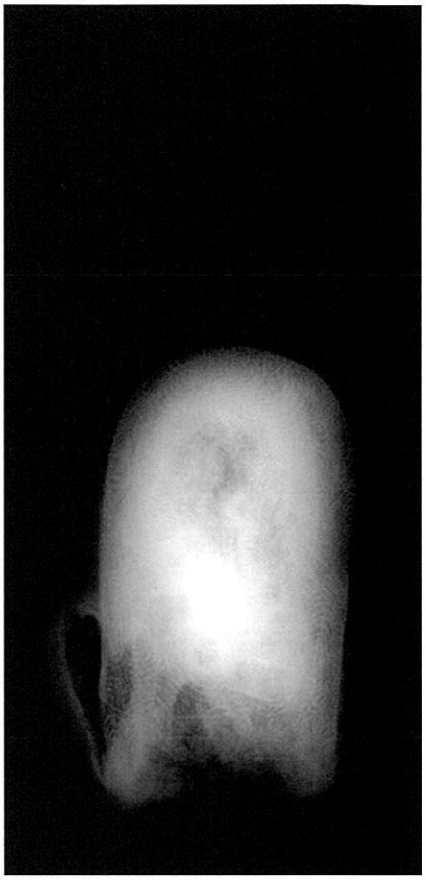

23

2　大刀装具

図版74



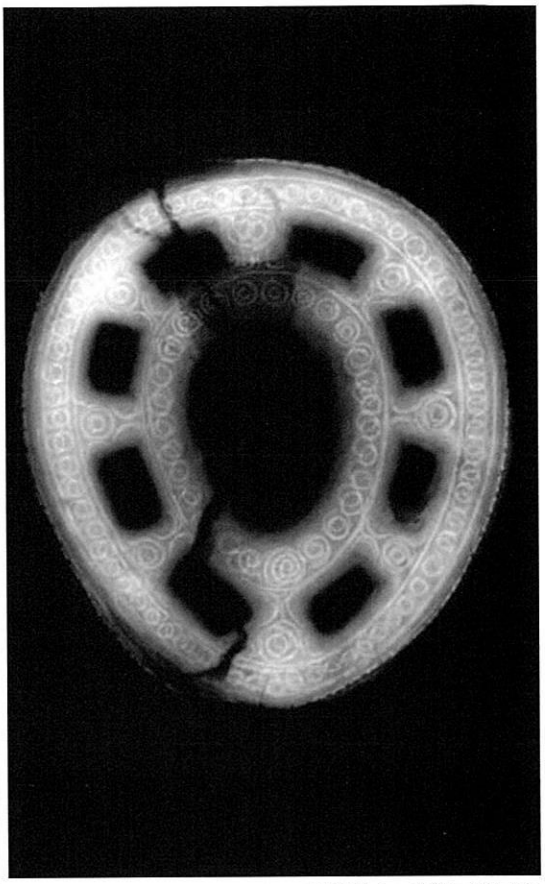
1　円頭大刀柄頭



2　円頭大刀柄頭Ｘ線写真

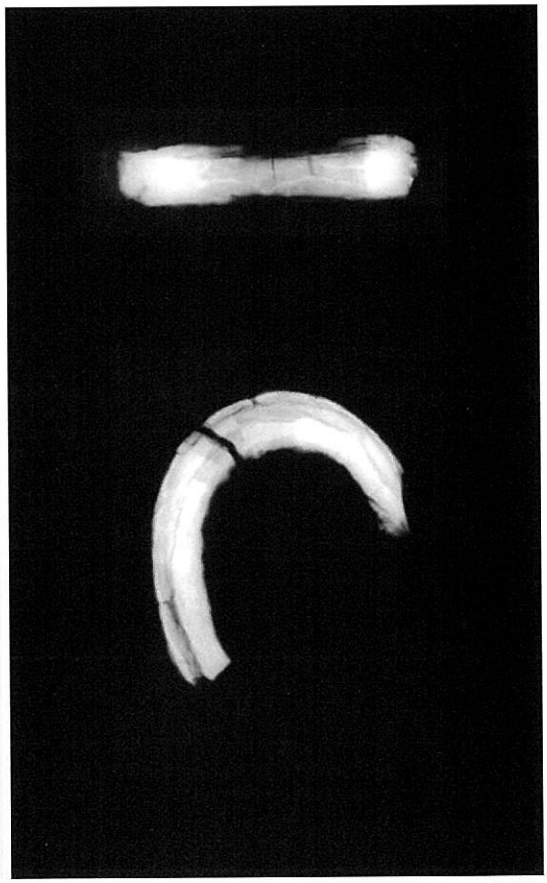
3　円頭大刀柄頭Ｘ線ＣＴ画像

1　円頭大刀八窓鍔



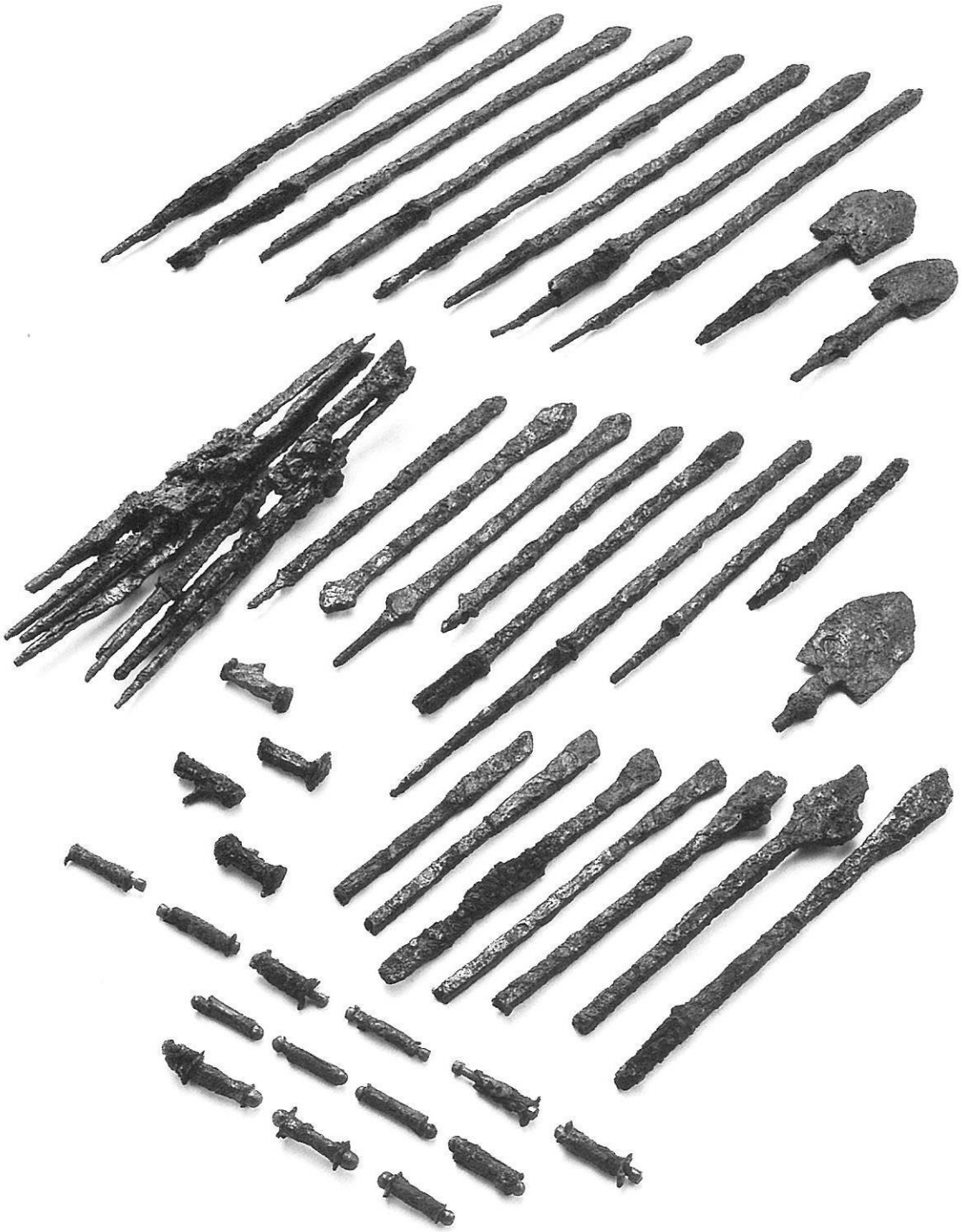
2　円頭大刀八窓鍔X線写真

3　円頭大刀柄縁金具



4　円頭大刀柄縁金具X線写真

図版76

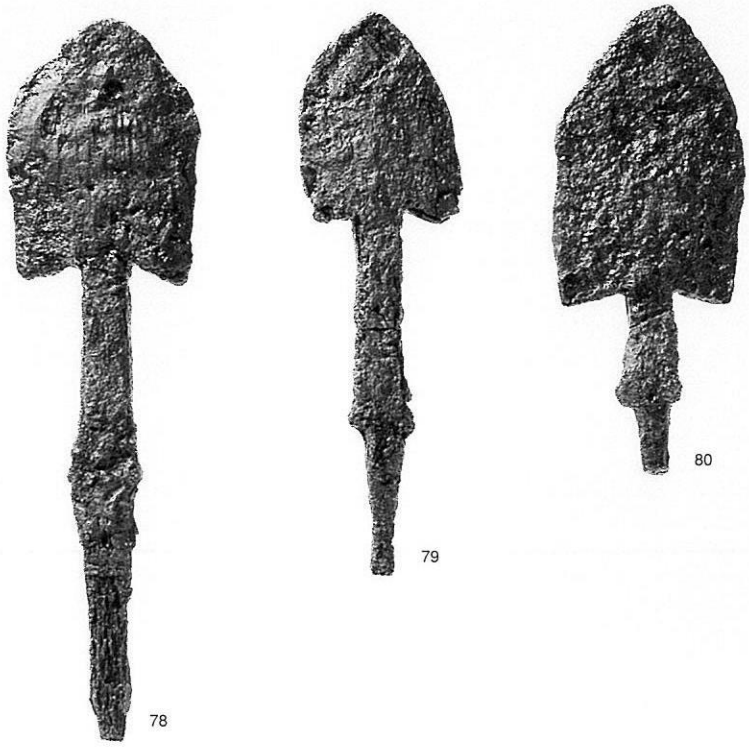


鉄鏃・弓金具

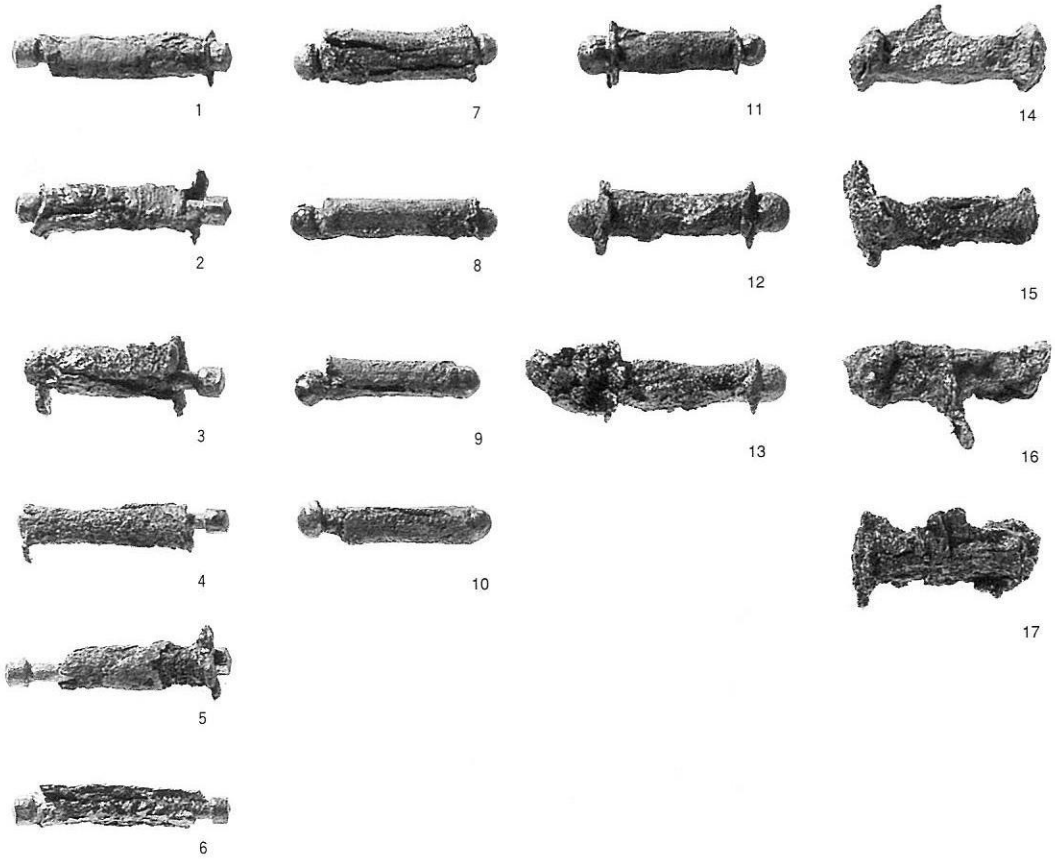
尖根式鑿箭鏃

図版78

尖根式片刃箭鏃・鏃身形態不明鉄鏃

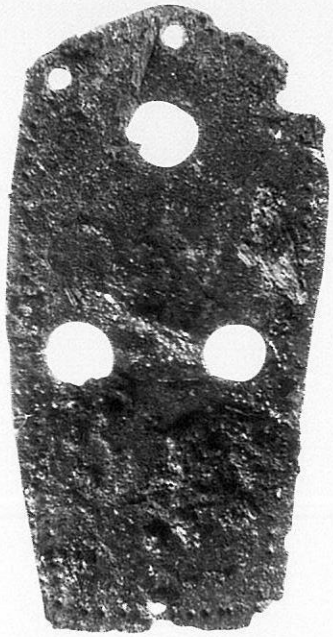


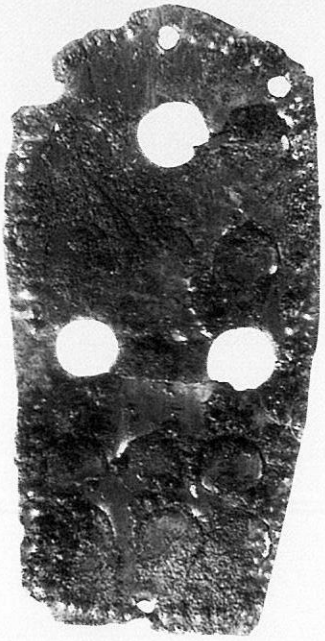
1　平根式鏃



2　弓金具

図版80





3

1

2

4

6

金銅製装身具類

1　ガラス玉

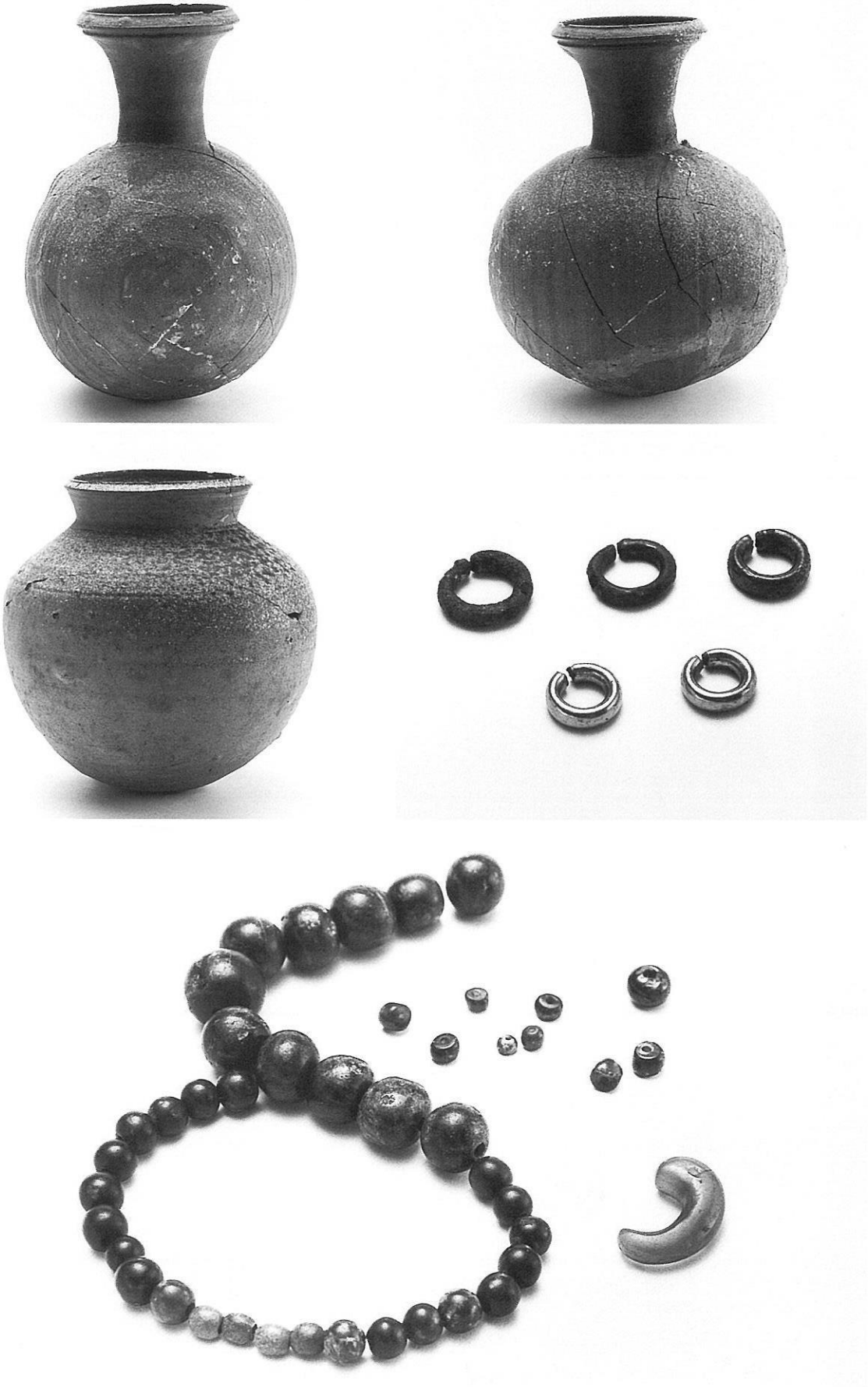
2　鉄　釘

図版82

下土狩西１号墳出土主要土器

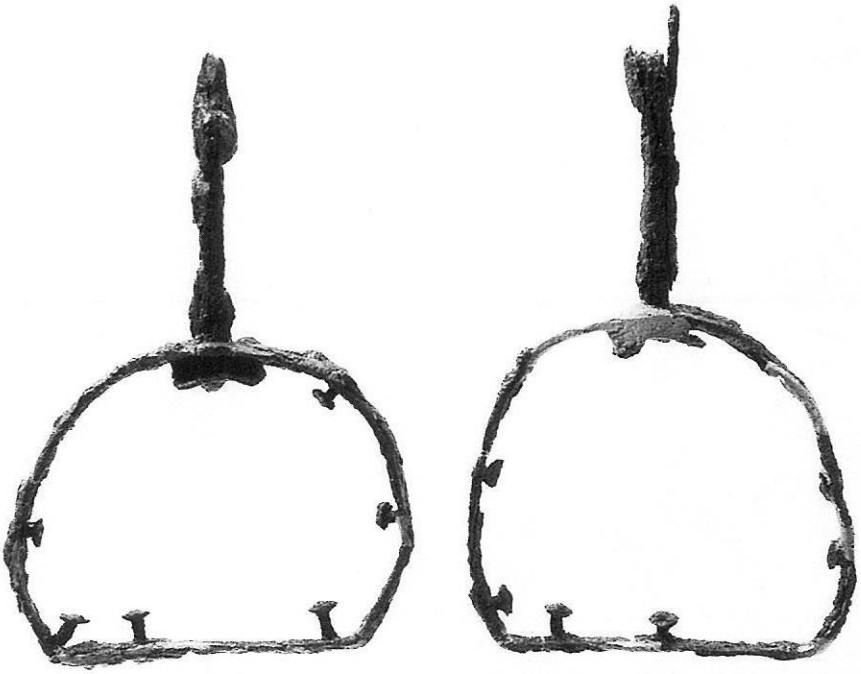
下土狩西１号墳出土土器

図版84

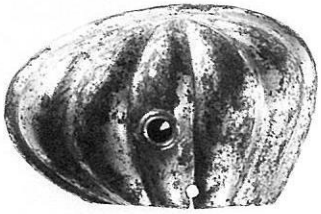


下土狩西１号墳出土土器・装身具

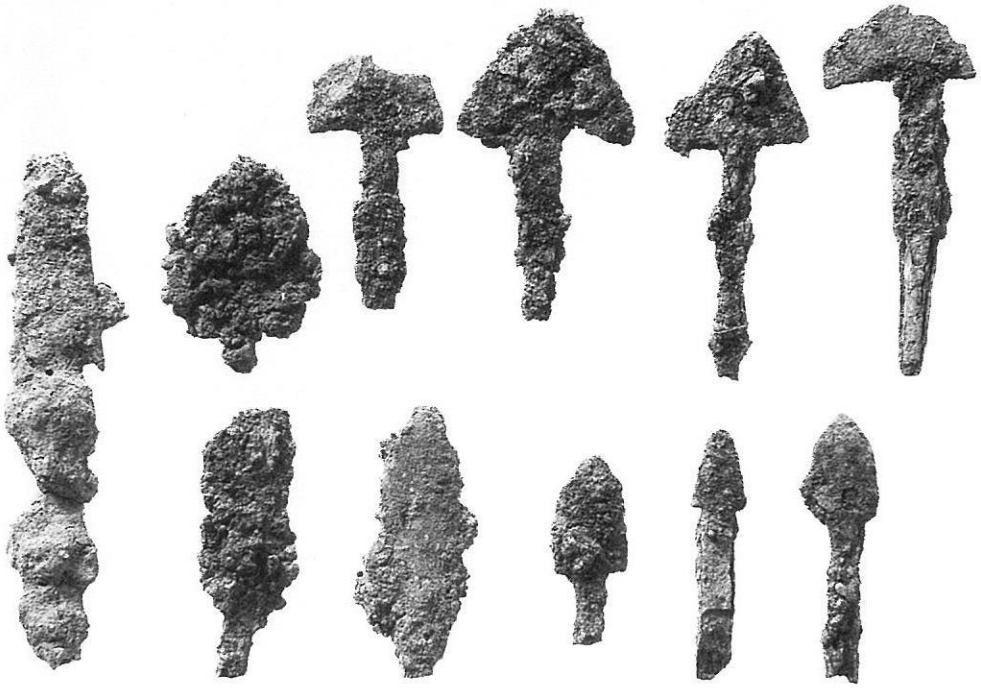
下土狩西１号墳出土武器・馬具

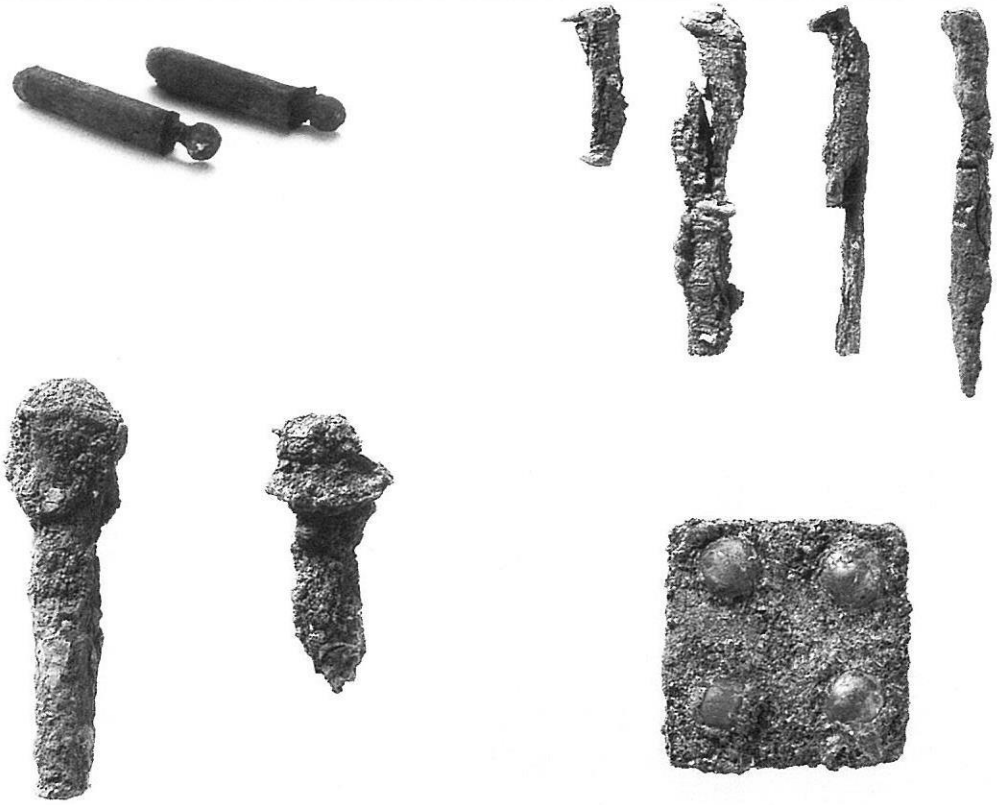


下土狩西１号墳出土馬具



下土狩西１号墳出土大刀





下土狩西１号墳出土金属製品

報告書抄録

ふりがな	はら ぶん こ ふん
書名	原分古墳　調査報告編
副書名	平成19年度　（都）沼津三島線重点街路整備事業（地方特定）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ名	静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告
シリーズ番号	第184集
編著者名	井鍋誉之（編集）　大谷宏治　菊池吉修　鈴木一有　田村隆太郎
編集機関	財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所
所在地	〒422-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20　TEL054-262-4261（代表）FAX054-262-4266
発行年月日	西暦 2008年 3月 20日

所収遺跡（ふりがな）	所在地（ふりがな）	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
原分古墳（はらぶん こ ふん）	静岡県（しずおかけん） 駿東郡長泉町（すんとうぐんながいずみちょう） 下土狩（しもとがり）	22342	78	世界測地系 35° 7′ 27″ 日本測地系 35° 07′ 15″	138° 53′ 40″ 138° 53′ 51″	原分古墳 200310～200408	原分古墳 （300㎡）	（都）沼津三島線重点街路整備事業（地方特定）工事に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
原分古墳	古墳	古墳時代 終末期	横穴式石室墳１基 土器廃棄土坑１基	須恵器37・土師器４・馬具（轡２ 鞍金具２組・壺鐙１組・輪鐙１ 辻金具４・三葉文心葉形杏葉１ 雲珠1・帯飾金具17・貝座飾金具２ 鉸具付飾金具４・鉤金具２ 鉸具９）大刀（圭頭大刀１・銀象嵌 円頭大刀１・大刀２以上）鉄鉾１ 鉄鏃43以上・弓金具17・刀子２ ガラス玉14・金銅板９片・鉄釘６ 人骨４体	７世紀中葉に築造された円墳 開口部に段をもつ無袖式石室 石室内に家形石棺と釘付木棺が納められていた 金銅装馬具や銀象嵌円頭大刀など豊富な副葬品が出土

要約

原分古墳は7世紀中葉に築造された直径17mの円墳。開口部に框石状の段をもつ無袖式石室で、長さ7.5m、幅1.9m、高さ２mである。石室内には家形石棺、釘付木棺をもつ。人骨は４体分を確認。

副葬品はフラスコ瓶、高坏を主体として須恵器37点、土師器坏４点が出土。馬具は金銅装鞍金具２組、轡２点、鐙２組、杏葉、雲珠、辻金具、鉸具付飾金具、帯飾金具が出土し、２組の馬装を復元。刀剣類は金銅装圭頭大刀１点、銀象嵌円頭大刀１点、二円孔鍔、無窓鍔等が出土し、４点以上の大刀を想定。鏃束２点を含む多数の鉄鏃が出土。弓金具は17点出土し、４点の飾弓を想定。歩揺金具や冠と想定される金銅製品が出土。

原分古墳の被葬者像は墳丘規模、石室形態より駿河東部の小首長層である。武器・馬具の様相から被葬者は２世代にわたり、男性の可能性が高い。金銅装馬具、装飾大刀などから王権、畿内有力氏族との直接的な関係をもちつつ、鉄製馬具、二円孔鍔付大刀、金銅製飾弓のように東日本とも関わりがある人物を想定。

静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告　第184集

原　分　古　墳

平成19年度（都）沼津三島線重点街路事業（地方特定）工事
に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
調査報告編

平成20年3月20日

編集発行　財団法人　静岡県埋蔵文化財調査研究所

〒420-8002　静岡県静岡市駿河区谷田23-20

TEL　054-262-4261（代）

印刷所　中部印刷株式会社

〒422-8037　静岡市駿河区下島426-1

TEL　054-237-9133